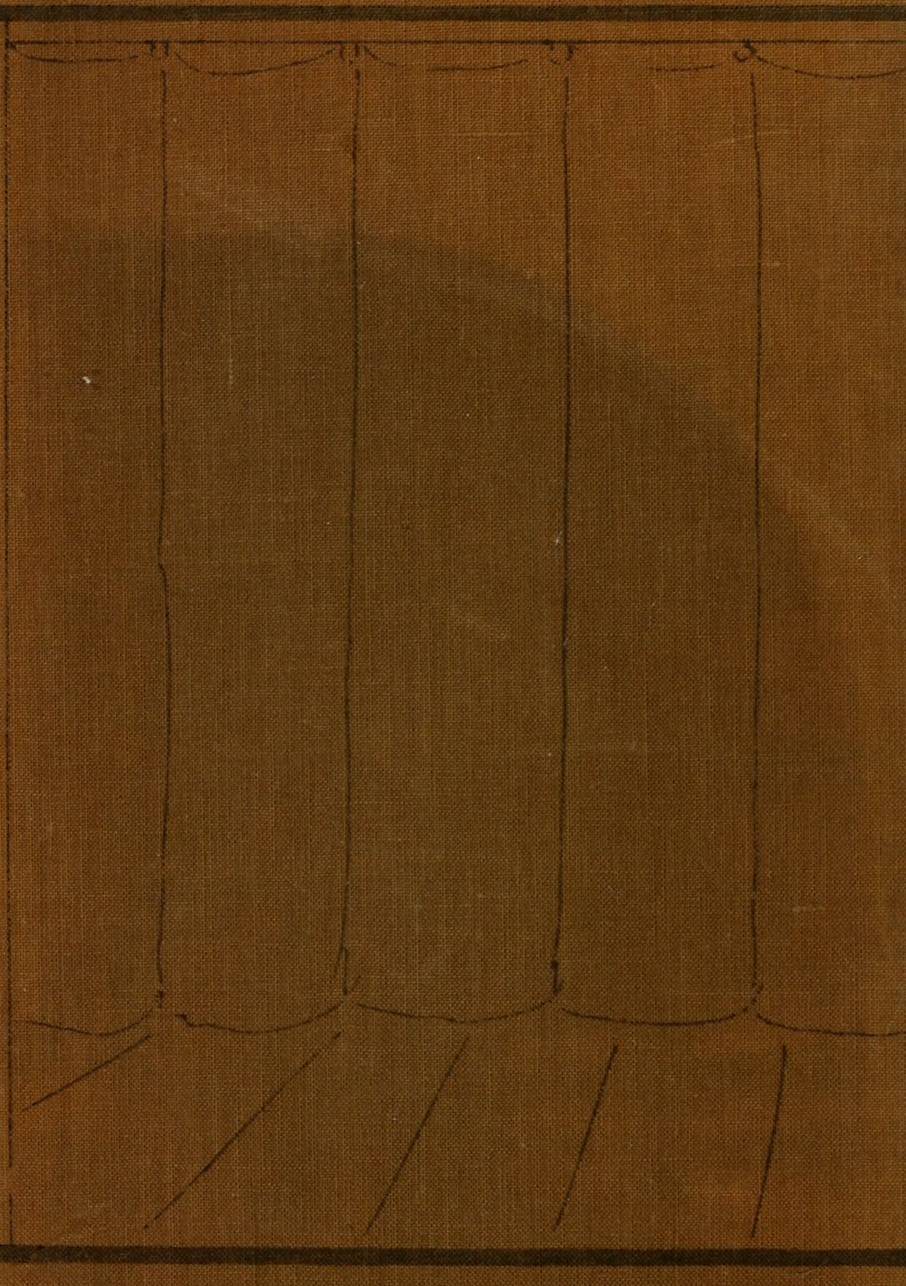


日本戯曲全集
第二十六卷

續義太夫時代物集

東京
春陽堂版



澤村源之助の保名（蘆屋道満大内鑑）

日本戯曲全集　第廿六巻　目次

續義太夫狂言時代物篇

蘆(あし)屋(や)道(だう)滿(まん)大(おほ)內(うち)鑑(かゞみ)

解説

享保十九年十月十五日初日、大阪竹本座初演。作者は竹田出雲である。例に依つて五段物。本卷に採錄したのは、その中での眼目、四幕である。本文でゆくと、大序に大内の場があつて、その筋は、朱雀帝の御宇、白虹が日を貫くといふ不思議があるので、左大將元方と參議小野好古が評議の末、故天文博士加茂保憲の養女榊の前を召して占はせると、東宮に關係ある大事件だから、傳來の祕書たる金烏玉兎集を、亡父の高弟蘆屋道滿、安倍保名のうちへ傳へて、充分占はせたらよからうと進言する。そこで日を定めて決する事になる。次が本集の序幕になる順序である。大詰は原作の四段目で、第五段目は一條戻り橋で惡右衛門に殺された保名が、童子の後身晴明の祈りで蘇生し、惡人が亡びるといふ結末である。

この淨瑠璃には系統がある。延寶六年二月に出來た土佐淨瑠璃の「信田妻」に端を發する。葛の葉の筋は、殆んどこの本のまゝである。また正德三年には紀海音の「信田森女占」が出てゐる。「信田妻」を改作して、お家騷動の氣分を濃厚にしたやうな作である。この外、歌舞伎に「信田妻後日」「しのだ妻嫁くらべ」等があり、同じ題材は相應數多く脚色されたものなのである。默阿彌でさへ一部を增補して「左近太郎雪辻館」を作つてゐる位である。

本卷に入れた臺本は、文政五年五月、江戸市村座に上演した時の臺本で、その時の役割は、道滿、野勘平（市川男女藏）與勘平（坂東彥三郎）惡右衛門（市川雷藏）庄司（大谷馬十）榻（市川おの江）葛の葉姫、狐葛の葉（市川門之助）、保名（七世市川團十郎）であつた。

蘆屋道滿大內鑑

序幕

加茂保憲館の場

役名——左近太郎照綱。岩倉治部大輔國行。保憲後室、岩手。同娘、榊の前。乾平馬。腰元、松ヶ枝。同、竹路。同、梅野。奴、與勘平。安倍保名。

本舞臺、三間の中足、向ふ金襖、上に三尺の扉つけ、神前明け立てあり、これに注連繩張り、後に入用の事。上手、障子屋體、下、柴垣、いつもの所に枝折り門、すべて加茂の保憲館の模樣よろしく、幕の內より腰元、松ヶ枝、竹路、梅野、三人銘々三方に神酒洗米など持ち、飾り物供へ居る見得。琴唄にて幕明く。

〽水上淸き片淵や、加茂の氏人保憲が館、私しならぬ勅諚の、家督定めの儀式とて、腰元どもが神前へ、とりどり飾る供へ物、てんでに直し打ちこぞり。

トこの淨瑠璃のうち、腰元三人、神前へ飾り、平舞臺へ下り立ち

竹路　イヤナウ、松ヶ枝どの、今日のお飾り物、別して念入るやうにと、榊さまのお申しつけ。なんぞ御信願のあつての事かいの。

松ヶ　さればいなう、兼ねてより榊さまが、云ひ交してござる保名さまと、道滿さまとに勅諚とやらで、今日神前で御鬮取り、當つた方へ一卷とやらを、お讓りなされ、保名さまに當つたら、直ぐに榊さまと夫婦の固め。

梅野　シタガ、又、折角女夫にお成りなされたとて、あの又後室樣の意地惡どのがござるうちは、しつぽりと朝寐も出來ぬ。氣の詰まつた事であらうわいなア。

松ヶ　なんぼ好いた緣づきでも、小糠三合と譬への通りおやわいなア、

竹路　ほんに、さうぢやわいなア、

三人　ホヽヽヽ。

ト內にて

〽笑ひ催ふすその折から。

岩手　腰元ども〳〵。

〽呼び立て〳〵立ち出づる、この家の後室、内外の人の敬ひに誇る悪事ぞうたてけり、中の間に立ち出でゝ。

トこの浄瑠璃にて、岩手、裲襠、好みの形にて出て來り

なんぢや。ちつとの間でもわしが目を拔き、打寄つて何をげら〳〵。供へ物が済んだらば、座敷の掃除はしをらいで、エヽ、何奴を見ても居眠りたさうな面つき。この榊めは上様へ上がつたを功に着て、大きな顔で晝寐であろ。皆てんでに棒でも持つて、さすり起せ、撫で起せ。エヽ、キリ〳〵と叩き起せ。

三人 ハアイ〳〵。

〽喚き立てられ腰元ども、皆々奥へ入りにける。

トこの浄瑠璃にて、腰元三人、連れ立ち入る。岩手、殘り思ひ入れ。

岩手 エヽ、世話の燒ける奴等ではある。

〽眞綿に針を包む折柄、當家の執權、人の皮着た乾平馬、慌しく出で來り。

ト向うより、平馬、裃、着附け大小にて、出て來り

平馬 ハツ、後室、これにお渡り遊ばされまするか。御舍兄治部の大輔さま、何か密々の御用とて、只今これへ御來駕でござります。

岩手 ナニ、兄治部どのがお出でとな。それ待ち兼ねし。お出迎ひ申せ。

平馬 ハツ。

ト向うへ出て、兩人出向ふ。

〽待つ間程なく、岩倉治部の大輔國行。

ト序の舞になり、向うより、國行、裃、大小、好みの形にて出て來り、花道にて、

國行 これは後室、お主に内々密談あつて、罷り越した。上座、許されい。

ト上へ通る。兩人、入れ替り、座につく。

岩手 兄上には、ようぞや御入來。して、内々の御用とは。

國行 イヤ、別儀でもない。後室、今朝の御前の首尾、姫が話し、聞き召さつたであらう。それにつけ、密々話したき事あつて、左近太郎と云ひ合せの刻限を待たず、先がけ致した。何は格別、この文、平馬諸とも披見いたされよ。

〽懷中より一通取り出し、差出だせば、後室取上げ押披き。

ト合ひ方。國行、文を出し、岩手に渡す。合ひ方。

岩手　ムウ。これは正しく保名が筆勢、榊が方へ參つた文。これがどうして、あなたのお手に入りました。

國行　されば〳〵、某もなんとなく、フト眺める松ヶ枝に、何やらびらつく。さては町の小供らめが、紙鳶を落し置きしかと、よく〳〵見ればこの文……ナニ〳〵、今日櫻木の君さま、如何仰せ出され候ふや、心元なく、後程密かに參り候うて、お目もじの上、承りたく存じ參らせ候ふ……文に仔細はなけれども、元來御鬮と云ふものが、ふりものゝあぶなもの。萬一保名に鬮が上がつては、此方は童の手を切つたるも同然。どうぞ左近太郎と立合はぬうち、玉兎集の一卷を、手に入れる思案はあるまいか。妹、平馬も、智惠を出せ〳〵。

〽氣を苛立ての忙しなし、後室騷ぐ色もなく。

岩手　兼ね〳〵御存じの通り、家の密書、金烏玉兎集事、夫保憲どの存生のうち、日を選み、安部の保名に讓り、娘に娶合せ、名跡を繼がせんと、吉日を待つうちに煩らひつき、お果てなされた。まそつとの所を、運の惡い安部の保名。こなたやわしは、蘆屋兵衞に讓り受けさせたいと思うたやうに、大事のところを遁がれた、上々の強い運。富でも鬮でも當るに氣遣ひはなけれども、廻らうよりは近道と、平馬と內談し合せ、明けにくいあの寶殿の、扉や箱を明けて、疾よりわしが手に。イザ、受取りなされませ。

〽ほき內傳の玉兎集、治部に渡せば恟りし。

トこの淨瑠璃のうち、岩手、懷中より一卷出して、國行へ渡す。

國行　これはどうして取出した。尤も扉の鍵は、其方が預かりなれども、箱の鍵は娘が預かり。兼ねて聞き及ぶ、大切に致し、肌身離さぬ箱の鍵。

岩手　サア、その離さぬを、わしが智惠で、盜人の隙はあれど、守り手の隙とやら、寢入り端を窺うて、枕元へ忍び、守り袋の箱の鍵、方寸寫し拵らへたこの合鍵。

ト合鍵出して見せる。

國行　ハ、ア、したり〳〵、流石は治部が妹ほどある。オ、、出かした〳〵、忝ない。この一卷を道滿に遣れば、何れも出世。此方とても矢張り出世。出世だらけ、よいだらけ。ア、、忝ない。

岩手　又この狀は、保名めを盜人にする、大事の代物。巧い〳〵。

平馬　そのうまいを肴に御酒一獻とは、如何でござります。
國行　それは一入。イザ、後室。
岩手　國行さま。平馬も一緒に。
平馬　サヽ、入らせられませう。
〽うまの合うたる平馬が案内、人喰ひ馬に間の戸を、引つ立てゝこそ入りにける。
ト三人連れ立ち、奥へ入る。
〽榊は我が使ふ腰元を誘ひ、さア好い隙と部屋を立ち出で。
トこの淨瑠璃にて、榊、亂菊の裲襠、好みの形にて、上の障子より出る。この後より以前の腰元三人、附き出て來る。
榊　コレ〳〵、腰元ども、もう刻限は何時ぞ。自らが云はずとも、小鳥どもを爰へ、なぜに出して置きやらぬぞ。
梅野　イヤ、申し、お姫様、お前様のお心は、小鳥どころでござりますまい。
竹路　今朝お前様のお詞、千に一つ御籤が、道滿さまへ上がつたら、どうせうと思し召します。

梅野　そこを存じてわたしども、及ばずながら願掛けして、どうぞ保名さまが、首尾ようお取りなさるゝやう
三人　お願ひ申して居りまするわいなア。
榊　オヽ、自らが心を汲み、優しうも、ようぞや〳〵。それゆゑ早うお出でなされと、文をやつたれば、もう見えるに間もあるまい。お鷹の爲の小鳥籠、サア〳〵、早う直しやいなう。
三人　畏まりました。
〽手々に運ぶ小鳥籠、飼つて心の慰みと、人に見するは鶯鳥よ、二人が仲の語らひは、末長かれと尾長鳥、朝夕爰に置きまして、見つ見せたさのかほよ鳥。
ト此うち、腰元、手々に鳥籠を五つ程持ち運ぶ。榊、思ひ入れあつて
榊　コレ〳〵、松ケ枝、そのひたきは、伯父御治部さまより秘藏せよと賜はりしが、もしも保名さまの氣が外れたら、胸のひたきと氣がついて、見るも嫌ぢやわいなう。と云うて捨てもならず、遠退けて、そちらへ片附けて置きや。
松枝　お姫様としたことが、何時も御秘藏のこの鳥を、俄かにお嫌ひになると云ふは、てもお氣の早い。

三人　お姫様。
榊　自らとしたことが、わつけもない。ホヽヽヽ。
〽笑ふ口々囀る鳥、聲高塀の外面には、忍び來る安倍の保名、參議好古に宮仕へ、餘勢ある身にあらねども、先祖は遣唐使に選ばれ、唐土にて日の本の名を揚げし、昔思ふも身の恥と、編笠深く顔隱し、忍びて爰に立ち寄れば、御供の與勘平、鈴付けし小鷹を手に据ゑ走りつき。
ト淨瑠璃のうち、保名、羽織袴、大小、好みの形、深編笠にて出て來り、花道よき所まで來る。少々遲れて、與勘平、好みの奴の形にて、足早に出て來て
與勘　お旦那、アレ〱、お聞きなされ。小鳥めが囀りまする。さては榊さまが、お前のお出でをお待ち兼ねと聞えた。此方もお鷹を使ひに、お知らせ申さん……鷹どの大儀ながら、ソリヤ。
ト表向うにて鷹を放す。
〽拳を離せば飛び上がり、もどり羽もぢり羽毛を振ひ、鳥の音に眼をつけ、籠をむんづと掴んだり。
ト差し金附きの吹替への鷹、籠へとまる。
松枝　そりやこそ、主様がお出での知らせ。
竹路　お鷹の合圖、さぞお嬉しうござりませう。

三人　ちやつとお迎ひ遊ばしませ。
榊　エヽ、嬉しや。腰元ども、鷹を與勘平に渡し、小鳥籠を片附けて置きや。
ト下へ下り立ち、腰元、手々に籠を片附ける。
〽庭に駈け下り裏門口、明けて招けば。
ト枝折り門を明けて
榊　保名さま。
保名　榊どの。
榊　先づ〱。
ト手を取り、内へ入る。
〽頷いて、入ると締め合ふ手の內に、色と思ひを含ませり、與勘平、鷹を据ゑ。
トこの淨瑠璃のうち、保名、榊、兩人よろしくこなし。腰元、捨ぜりふにて、與勘平に鷹を渡す。手に据ゑて
與勘　コレ、腰元衆、拙者は人目あり、歸れよと旦那の仰せ。罷り歸る。
ト手に据ゑたる鷹を見て、花道際へ出て
コリヤ、鷹よ、今日も又すぐちむなばらで歸るな。世間の譬へとは違つて、何時來ても〱、鷹骨折りで旦那の餌食。堪へ性の好い鷹めではあるわい。

ヘ小躍りしてぞ歸りける。

ト與勘平、こなしあつて、向うへ入る。兩人こなし。

合ひ方。

榊　申し、保名さま、お前樣の御前のお首尾は、最前自らが文で申した通り。御鬮と云ふものは、天道次第運次第、心に任せぬ神の掟、云ひ出せば又愚痴と、叱らしやんすれど、せめて父樣がまー年、生きてござつて下さらば、夫婦にもなり、家の秘書も、お讓りなさるゝところを、間もなうお死に遊ばした、運の弱いお前なれば、今日の御鬮もわたしが心に、上がるまでも氣遣ひで、どう斯うかと縦の種。頼むは大元尊神、吒枳尼天樣、早うお前を呼び寄せまして、祈り祈念もさせませたく、また心得ぬは伯父君樣、左近太郎さまはまだ見えぬに、疾から來て奥で酒盛り。一倍心が急き立つて、早うお顏が見たうござりました。サア、ちつとも早う一心に祈誓をかけ、お前に御鬮の上がるやうに、自らもともぐに、御祈念申しまする。必らず怠り遊ばしまするなえ。

保名　オヽ、馴染みなればこそ忝ない。我れもそもじの文を見るより、御鬮の善惡、我が身の絶命、直ぐに生死と定めしが、云やるを聞けば、さうでもない。信あれば徳ありと、神は正直の頭に宿る。其方も隨分、力を添へてたべ。一心不亂に神慮を仰がん。とは云ふものゝ、烏帽子千早も掛けずして、この平服では恐れあり。エヽ、どう致したものであらうぞ。

榊　それは氣遣ひ遊ばすな。幸ひと父上樣の、素袍烏帽子、自らが部屋にある。ソレ、腰元ども、取つておぢや。

松枝　畏まりました。

ト上の障子より、素袍烏帽子を出し、保名が前へ置く。保名、押戴き

保名　オヽ、誠にく、目馴れし師匠の素袍烏帽子。今日着すると云ふは、吉左右々々々。チエヽ、忝ない。

ヘ冥加あれ保憲公と、押戴きく、着せんとする折から、奏者の侍ひ、慌しく走り出て。

ト𧘕𧘔の侍ひ一人、走り出て來て

侍ひ　ハツ、申し上げます。今日のお役目とて、左近太郎さま、只今これへお入りでござりまする。

保名　ナニ、太郎どのが入來とや。

ト云ひ捨て引返す。皆々驚ろき

榊　御朋輩と申しながら、見つけられては事宜まし。幸

ひ松ヶ枝、其方の部屋へ、お伴ひ申しや。

松枝　斯うお出でなされませ。

〽いざこなたへと打連れて、裝束取り持ち入りにける。

ト これにて、松ヶ枝先に、保名、榊、兩人の腰元、烏帽子、素袍を持ち、皆々入る。向う揚げ幕にて

呼び　照綱さまのお入り。

ト 向うより、照綱、好みの形にて出て來り、直ぐに座につく。

〽程もあらせず好古が執權、左近太郎照綱……優美の骨柄古實を正し、靜々座席につきにける、治部の大輔、後室、榊、乾平馬はうや〳〵しく、八脚の机に御鬮を載せ、兩人の中に据ゑ置いて、遙かに退つて畏まる、治部の大輔は取りあへず。

ト 治部先に、岩手、榊、平馬、八つ足に御鬮箱を載せ、持ち出て、兩人が前に直す。

國行　これは〳〵、照綱どの、お役目の段、御苦勞千萬。身も御同道と存じたれども、老足の捗行かず、却つて御面倒と存じたゆゑ、そろ〳〵とお先へ參つた。宮の仰せとは申しながら、遠所の御歩行、御大儀々々々。何は格別、これなるは拙者が妹、その次は當家の姫、榊でござる。お見知り下されい。

岩手　妾は過ぎ去りし保憲が妻岩手。

榊　娘榊と申しまする。お見知りなされて下さりませ。

照綱　これは〳〵、御挨拶でござる。イカサマ、御母子とも、お名は承り及びたれど、お目にかゝるは初めて。申さば今日は保憲どの、遺跡の定まり、さぞお喜びなされう。ナニ治部どの、御鬮の次第を日のうちに、宮へ申し上げる爲なれば、お支度よくば、イザ、御鬮をお取りなさるまいか。

國行　イヤ、先づお待ちなされ。仰せの如く今日は、名跡の相續、未來の保憲も、さぞ大悅。とてもの事に彼の金烏玉兎集を、取出しては如何ござらう。

照綱　それは兎も角も御勝手次第。

國行　アレ後室、左近太郎どのも御同心。扉を開くは其方の役。ソレ〳〵、早う〳〵。

岩手　ハッ、畏まりました。

〽早う〳〵とありければ、母は淸めのから手水、注連繩ほどき立ち寄つて、海老錠ぴんと扉を開き。

ト 岩手、鍵取り出し、から手水を使ひ、正面の寶殿の

　錠を明けて、元の所へ來て
コレ、榊、扉は開いた。中の箱は其方の預かり。錠明けて御書を取り出し、御神前へお供へ申しや。
榊　アイ。
　トこなしあつて、立ち上がる。
〽あいといふへてしと／＼と、歩むとすれど氣は空に、口は輕やら重ひやら、只一時に一生の、年を寄せたる浦島が、明けて口惜しき箱とも知らず、恐れみ愼しみ取り出だし、二人が中に据ゑ置き、鍵にて開く箱の内、見るよりはつと驚ろけり、後室素知らぬ風情にて。
　ト此うち榊、身を清め、いろ／＼こなしあつて、敬ひ、箱を恭々取り出し、一卷の箱の錠を守り袋より鍵を出し、開けて見て、ハツと思ひ入れ。此うち治部、岩手、平馬、いろ／＼目顏にて思ひ入れ。
岩手　コレ、何をうぢ／＼して居やる。御南所のお待ち兼ね。早う爰へ持つておぢや。
榊　ハ、ハイ。
　ト箱を袂にて隱し、つかへ居る。
岩手　アレ、まだいなう。わしにばつかり物云はせ、うぢうぢと埒の明かぬ。キリ／＼と持つておぢや。

　ト合ひ方。矢張りうぢ／＼して居る。圖行、顏にて平馬に合圖する。平馬、ツイと奥へ入る。岩手、榊が持つて居る箱を、無理に引ッたくり
默つて居るが、合點が行かぬ。
　ト箱の内を見て
ヤア、こりや大切な家の秘書は、この中にはござらぬわいなう。なんぢや。怪しい文。コレ、御覽遊ばしませ。
　ト照綱が前へ置く。
〽開いて驚ろく左近太郎。
照綱　ナニ、玉兎集が紛失とな。ホ、ホイ。
　ト文を見て、當惑の思ひ入れ。
〽ほつと溜息吐くばかり、治部の大輔聲荒らげ。
圖行　ヤア後室、無いと云うて事が濟まうか。兩人は鍵預かり、外に知らう者はない。詮議して身の垢抜け。左近どのもこれにお居やれば、兄妹とて容赦はならぬ。一卷の在所云はねば、骨を挫いでも云はす。なんと／＼。
　トきつと云ふ。
〽仕組みの調べ、後室、榊が襟引き寄せ。
岩手　コレ、今のを聞きやつたか。現在わしが兄妹でも、容赦のならぬお上沙汰。其方とてもその通り、娘とて遠

慮はなりませぬ。サア、誰れに盜んで遣りやつたぞ。キリ〳〵と白狀せい。

榊　これは又、母樣のお詞とも覺えませぬ。わたしが盜んで、誰れに遣りませう。

岩手　イヤ、遣りたがるその相手は、あの狀の筆勢。この母が睨んで置いた。猛々しう云やつても、盜んだは慥か慥か。否とは云はさぬ。肝心の箱の鍵は其方の役。けれう、外に下ろした錠の合鍵、何時でもしやすい大膽な、合鍵して、ようも、この賢明な、慈悲深いこの母の目を拔いて、盜み置いたなア。サア、有りやうに云はぬと、骨をぼき〳〵折つても云はす。サア、吐かせ。サア、出さう。エ、、情の強い女郎め。

ト榊の膝を抓る。

國行　ヤア後室、手ぬるい〳〵。引ツ縛つて鴨居へ吊り上げ、白狀さすが治部が得もの。そこ退かれよ。

ト立ちかゝる。

〽ひしめく所へ榊が部屋より、平馬が高聲。

平馬　その同類めは、乾平馬が捕へました。うせう〳〵。

〽保名が胸倉引つ立つる、これは難題狼藉なり、放せ放せも放さばこそ、烏帽子素袍も引きしやなぐり、座敷へどうと打ち据ゆれば、榊ははつと胸ふさがり、左近太郎も一座の手前、顏色替り、きつと詰め寄り。

ト この淨瑠璃のうち、バタ〳〵にて、平馬、保名を引つ立て出て來り、平舞臺へ引き据ゑる。榊、悄りして泣き入る。國行、岩手、顏見合せ笑ひを含む。照綱、急いたる思ひ入れにて、キツとなつて

照綱　コリヤ保名、替つた所で對面いたす。今日を何日と心得て、爰へはどうして來た。忝なくも櫻木の君、保憲が跡目相續のお指圖。蘆屋兵衞、安倍の保名、大元尊神の鬮に任せ、秘書相傳は時の運、弟子と〳〵の立合ひは、後日の心よからじと、御賢慮をめぐらされ、治部どのと某二人が名代。左近太郎の鬮取りが氣遣ひで、和殿は來召されたか。宮の御下知を背くと云ひ、主人小野の好古公、汚名を取らす不屆き者。サア、速かに云ひ譯いたせ。云ひ譯立たねばこの照綱が、武士道が相立たぬ。性根を極めて返答いたせ。ナ、なんと。

トきつと云ふ。保名、思ひ入れ。

〽理の當然にさしつけて、云ひ譯ならぬ身の誤まり、戀に心を苦しめり、治部大輔せゝら笑ひ。

國行　保名の泥坊めと道滿と、同じやうに申すも勿體ない。

流石治部が程はどあつて、潔白に身を守り、こんな場所へ出しやばらねば、盗人と云はるゝ恥も受けぬ。自然と後極まる師匠の後胤。鬮取りも糸瓜も要るまい。コレ、後室、誰れに遠慮をして居やる。ドレ、彼れらめを詮議なし、家の秘書を手渡し致されよ。

ト思ひ入れ。

〽おのれが盗み取りながら、人をせたげる慾づら兄妹、後室保名が襟首つかみ、引き伏せれば。

ト岩手、保名を取つて引き伏せる。

榊　ア、申し、マア〳〵、待つて下さりませ。

ト取り支へかゝるを

岩手　エヽ、面倒な女郎め。邪魔ひろぐと、おのれも斯う。

〽唯片手に両人を、捻ちつけ捫りつけ。

ト両人の襟首取つて振り廻す。両人こなし。此うち照綱、身を背け、煙草盆捽へ居る。この時岩手、袂より件の合鍵を落す。照綱手早く拾ひ取り懐中する。岩手、

キッとなつて

ヤア、爰な恩知らずの罪人めら。師匠と云ひ親と云ひ、目顔を盗み、腐り合ひし、天罰を思ひ知つたか。なんと報いは早いものか。おれが産んだら斯うもあるまい。おのれが元を云へば、和泉の国信田の庄司に貰うた餓鬼。生さぬ仲と分け隔て、繦子根生。日頃から可愛がるこの母を、ようも〳〵皮にひろいだな〳〵。おのれは又、過ぎ行かれし師匠の名乗りの一字を貰ひ、大恩あるお主同然のこの家に、仇をなす大盗人め。ホヽ、結構なお弟子どのぢや。あの又、死なれた夫を謗るぢやないが、娘に甘い阿房ゆゑ、おのれのやうな泥坊を、聟にせうの、ヤレ、伜にせうのと、あんだらくさい業曝し。サア、一巻は何処へやつた。キリ〳〵出し居らぬか。……サア、これでも出さぬか……これでもか。エヽ、憎い奴ばら。わいらのやうな奴は、腹癒せに。

〽なじり情もあら拳、目鼻も分かずぶち伏せしは、地獄の呵責目のあたり、閻魔王に親あらば、阿母などゝ云つつべし、榊は涙せきあへず。

トこの浄瑠璃のうち、両人を、いろ〳〵に打ち据ゑる。

榊、思ひ入れあつて

榊　母様の恥かしきお疑ひ。小さい時よりお世話になり、誠の親より百倍の、御恩を仇に思はねど、詐らぬ今の憂き難儀。保名さまに科はない。盗まぬ、知らぬ、云ひ譯

には、この身一つ。切るなりと突くなりと、御存分に遊ばして、お心晴らして下さりませ。

〽泣き詫びるこそ切なけれ。

ト大泣き。保名、こなしあつて

保名　アヽコレ、お身の云ひ譯には及び申さぬ。來るまじき所へ參りたるこの身の不運。覺えなき身の打擲も、師匠の後室、手向ひならず。保名が家名は穢るゝとも、御主人好古公への面晴れ、祿を食んだるこの腹の、五臓六腑は穢れぬ腸。引き出して申し譯。介錯頼む、照綱どの。何れも、さらば。

〽差添ずばと拔き放す、その手に縋つて榊の前、刃物もぎ取り。

ト差添にて、保名、切腹せうとする。榊、もぎ取り

榊　南無阿彌陀佛。

ト保名が刀にて、咽喉へ突き立てる。

〽咽喉にがばと突き立てる。

ト皆々思ひ入れ。保名驚ろき

保名　こは早まつた生害。氣を慥かに、榊の前。

照綱　死なずに手段もあるべきに、ハテ、是非もない。

ト思ひ入れ。

〽保名が仰天、照綱も、呆れ果てたるばかりなり、手負ひは苦しき氣を取り直し。

榊　早まりしとは愚かな仰せ。由なき戀に繋がれて、云ひ譯立たぬ保名さま。お前の切腹遊ばすを、そもや遲れてあられうか。母樣も伯父樣も、御不肖ながら聞いてたべ。過ぎ去り給ふ父樣が、兼ね〴〵わたしに仰しやるには、弟子の中にも保名こそ、氏と云ひ器量と云ひ、其方と娶合せ末々はと、宣ひし事もあつたゆゑ、父上のお詞に甘へてお二人の、目顏を盜みし母の罰。天罰と云ふものにや、御前を歸りの道すがら、お前から賜ひし文、俄か風に取られしも、今別れんとの知らせかや。玉兎集の云ひ譯、その行くへ、大方それと推量はしつれども、云ふに云はれぬわたしが胸。淸き心は天道樣、神佛を證據にして、死んで行く身を推量してたべ。保名さま、お名殘り惜しや。アヽ離れともない。無實の難をこの身に受け、死ぬる心を哀れとも、お頼み申すは照綱さま。どうぞ寶を詮議して、保名さまの身の明り、立てさせて下さりませ。何れも、おさらば。

ト苦しき思ひ入れ。

〽聲も涙もせりつめし、この世の苦患四苦八苦、刃の氷

名殘りの霜、消えて果敢なくなりにけり、保名は死骸に縋りつき、前後不覺に歎きしが、元來正直、つき詰めたる、胸は思ひの氣も散亂、むつくと起きて。

ト榊、落入る。保名、いろ／＼こなしあつて、むくむくと起き上がつて、あたりを見廻し、狂人の思ひ入れにて、榊の死骸を見て

保名　ホヽホヽヽヽ。ハヽヽヽヽ。こりやめでたい。どうも云へぬ。ハヽヽヽ、アヽ、面白い／＼。

ト無性に笑ふ。

〽正氣失ふ高笑ひ、左近興覺め。

ト照綱、下り立つて保名を制し

照綱　コレ保名、照綱ぢやが、覺えがあるか。心を鎭め、氣を取り直せ。保名々々。

〽制すれば猶きよろ／＼聲明〽よしや世の中死んだがましかいの、生きて思ひを、こりやよい／＼。

トよろしくこなしあり。

保名　コリヤ、よい／＼。ハヽヽヽ。

ト笑ふ。

〽げら／＼笑ひに一座もうろ／＼、治部の大輔底氣味惡く、立しほなければ佛頂面。

ト國行、そろ／＼立ち上がり、思ひ入れあつて

國行　エヽ、一人はくたばる、一人は狂人。氣狂ひの守りは左近太郎。詮議して歸られよ。

ト行きにかゝる。照綱、思ひ入れ。

照綱　ヤア國行どの、お待ちなされ。この場の始終、宮樣へ、言上いたすも役目の不肖。この座にあるは係り合ひ。とくと詮議の相濟むまで、其許も詮議が殘つた。先づ先づ待たれよ。

國行　イヤ、其許はお若役、手前は斯く老衰いたし居れば、萬事は御容赦。ハレヤレ、今日は恟りのし續け。それゆゑか、腹もげつそり。年寄りと紙袋は、入れにや立てられぬ。内へ去んで入れませう。ヤレ／＼、うたてや／＼。

〽盜み取つたる卷き物を、腹にかこつけ立ち歸る。

ト花道よき程まで來て、懷中の一卷をちよつと見て、照綱の方を見て恟り、思ひ入れ。向うへツイと入る。照綱、これに目を附け居る。保名始終、キヨロ／＼しながら、榊の死骸に掛けある裲襠に餘念なく戯れ居る。國行が歸るを見送り、ツイと立つて

保名　ハヽア、去ぬるワ／＼。おれも去なう……なんぢや、一人は去なさぬ。なんのいとしい其方を置いて、一人は

行かぬ。サア、おぢや。立たしよ。
ト件の裲襠を肩に打ちかけ、行かうとする。
〽榊が裲襠花摺衣、菊のしげ縫ひ亂菊の、亂れ心や亂れ髪、肩に打ちかけくる〳〵、狂ひ出づるを。
ト岩手、平馬、よろしくかゝる。

平馬　コリヤ、やらぬワ。
〽留むる平馬を踏み飛ばし、縋る後室取つて投げ、毆り退けぶち退け、戀に苦しむ戀の仇、戀しき人は殺されても、戀々妻の戀仲は、なんの離れうぞ、しや、ほんに、えゝ、天はひくそう、ひそう、比翼の鳥の口々、地は又奈落の底も離れぬ連理の榊、榊々とさかのぼる、狂ひ狂へば不狂人、左近太郎が止むる袖、振り切り〳〵狂ひ行く、戀路の闇こそ果敢なされ。
ト此うちよろしく、岩手、平馬、相手に立廻りあつて、いろ〳〵振りよろしくあつて、行きにかゝる。また岩手支へる。突き退け、平馬かゝるを千鳥に退け、照綱留めるを同じく退けて、裲襠を肩に掛けて向うへ狂ひ入る。皆々後見送り、思ひ入れ。

岩手　ても、馬鹿々々しい。盜人の折檻で、思はぬ骨折り。草臥れ休みに奥で一獻酌まう。爰構はず、平馬おぢや。

平馬　成る程〳〵、後室にはさぞお草臥れ。イヤナニ、照綱さま、佛もない堂に、何時までもべん〳〵だら〳〵。お前様もお歸りなされ、お支度でもなされたがようござる。イザ、後室様、參りませう。
ト兩人奥へ行かうとする。

照綱　兩人、お待ちやれ。
トきつと云ふ。

兩人　なんぞ外に、用でもござるか。

照綱　盜人の在所、相知れ申した。

兩人　ナニ、盜人の在所知れたとは。

照綱　後室には、この品、覺えがござるか。
ト最前拾ひし鍵を見せる。

岩手　ムウ。それは榊が預かつた箱の鍵。
ト手を取り、兩人思ひ入れ。照綱、刀を拔いて兩人の足をかき、双方を背打ちに打ち据ゑる。兩人、ぶたれながら、
ヤイ、待て〳〵。あられもない、自らを、なんで打擲するのぢや。

平馬　忠義一圖のこの平馬、ぶたるゝ覺えは曾てない。何ゆゑに身を手籠め。

照綱　ヤア、覺えないとは、茲な大盗人め。榊が鍵はもう一つ、爰にあるワ。盗人婆ァが立ちまふうち、落し置いたこの合鍵。ようも榊を殺したな。主從ともに猿繋ぎ。御前へ引いて、キッと糺明。腕廻せ。
　トきつと云ふ。兩人、起き上がり
岩手　それ知られたら平馬、合點か。
平馬　心得ました。
　ト双方、拔き身にて切つてかゝる。照綱、よろしく立廻りあつて、キッととまる。
〽兩人相手に手練の照綱、挑み戰ふその所へ、息を切つて驅け來る與勘平。
　トばた／＼になり、向うより與勘平、以前の形、大肌脱ぎにて走り出て來る。照綱見て
照綱　ヤア／＼奴、來たか／＼。
與勘　ナイ／＼、內證臺所で、女中に聞いた憎い婆ァめ。保名さまの御名代、彼奴は拙者に下さりませ。
照綱　オヽ、兎も角も勝手次第。
　ト突き放す。
〽突き放せば、平馬も遁がれぬ死物狂ひ、二打ち三打ち叶はじと、奧を指して逃げて行く。

　ト平馬は照綱に切つてかゝる。立廻りのうち與勘平は、岩手と少々立廻り。平馬は叶はず奧へ逃げて入る。照綱、これを追つて入る。
〽婆が首筋、奴が片手、きやんと云はずと、にやんと啼け。
　ト與勘平、岩手の刀を叩き落し、首筋取つて引き据ゑ
猫股婆ァが成敗は、これよ／＼。
〽この注連繩、明けた扉の上にかた／＼引きほどき、首に纏へば跳ね廻る、野良猫古猫する／＼罠、繩先左手にからまき、ちよきと引けば七轉八倒、ぐつと引けば目玉もぐつと、拔いて取つたる一卷の、報いは目の前跪き死、心地よかりし有樣なり。
　ト神前の注連繩にて、岩手の首へかけ、いろ／＼あつて、トゞ岩手を縊り殺しにする。
〽左近太郎は平馬を追ひ詰め、丁と打つたる太刀影に、首は飛んで軀は乾、猫と並んで死んでにけり。
　ト奧バタ／＼にて照綱、平馬、切り結び出て來り、少少立廻りて、二重よりポンと切り、首は前に飛ぶ事。
照綱　ヤア／＼奴、保名に早く追ひついて、仔細を語らば正氣にならん。

與勘　御賑張とて照綱さま、段々の御芳志。
照綱　禮には及ばぬ。暫時も早く。
與勘　然らば此まゝ。
ト行きにかゝるを、この前より下部、窺ひ居て、この時
下部　うぬをやつちやア。
トかゝるを、突き廻し、抜打ちにポンと切る。
照綱　天晴れ出かした。急げ〳〵。
與勘　ネイ。
ト手早く刀を納め、おづ〳〵と照綱に目をつけながら、花道よき所まで行き、キッと尻を端折り
してこいな。
〽後を慕うて出でゝ行く。
ト後を見送り、思ひ入れあつて
照綱　ハテ、小氣味のよい、奴めぢやなア。
トこの時、後ろ口より、兩人の侍ひ
兩人　照綱覺悟。
ト切つてかゝるを交して、双方を切り倒し、靜々と刀を納めろ。
〽心靜かに刀を納め、出て行く武士に仁儀あり。

照綱　奴に過ぎたる忠義あり。
ト岩手の死骸の方へ目を附け、思ひ入れ。
〽歸りし伯父に詮議あり。死したる娘に不義あれど。
ト桐の亡骸に目をつけ、思ひ入れ。
〽戀には許し有明の、月の都の照綱が、武勇の程こそ。
トこの淨瑠璃のうち、桐の死骸の側へ、ぢり〳〵立ち戻り、愁ひのこなしあつて、ゴンと時の鐘。これにてキッと涙を拂ふ。この途端、チョンと木の頭。
〽世に高き。
トよろしく、キザミ、

幕

二幕目　信田の森花見の場

役名――信田庄司。同女房、柵。同娘、葛の葉姫。腰元、桔梗。同、苅萱。同、野分。同、秋野。同、藤江。同、朝顏。同、村崎。同、尾花。石川惡右衞門。奴、與勘平。狐葛の葉。安倍保名。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて朱の鳥居。下の方、扉つきの祠。尤も出入りあり、向う一面野ませの段幕。左右に柳の立ち木。爰に勢子五人、割り竹を持ち扣へ居る。宮神樂にて幕明く。

勢一　なんと皆の者、お旦那の云ひつけで、此やうに所々を獵り歩いても、白狐とやらは少ないものぢやないか。

勢二　さうとも／＼。此やうに有りもせぬ物を探し出して、あの惡右衛門さまは、何にさつしやるのか。

勢三　慥かあの左大將さまとやら、餓鬼大將とやらが云ひつけで

勢四　その白狐が入用だげな。

勢五　その白狐とは、糸鬢の事ぢやアないか。

勢一　そりやア奴よ。

勢二　おきやアがれ。あの毛色の白いを白狐と云ふげな。大方その狐を探し、あのお旦那は煮てでも喰ふ氣か。

勢三　その狐も爰らに居るなら、おいらがこんなに骨を折るから、大概にして出たがよいてや。

皆々　そりや、なぜ／＼。

勢三　ハテ、白狐も目を明けだ。

勢四　何を云ふ。サア／＼、これからあの森の中を、狩り出すべい。

勢五　それがいゝ／＼。

皆々　サア／＼、來やれ／＼。

ト勢子太鼓にて、皆々下座へ入る。と賑やかなる出の唄になり、花道より、葛の葉、廣振り袖、裲襠にて、金銀の扇を持ち出て來る。後より桔梗、苅萱、秋野、野分、朝顏、藤江、何れも腰元の形。帽子をかむり、扇を持ち、村崎、尾花は定家文庫、煙草盆を持ち出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。

桔梗　お姬樣へ申し上げまする。外珍らしき今日の神詣で、おひろひ遊ばすも一入の好い

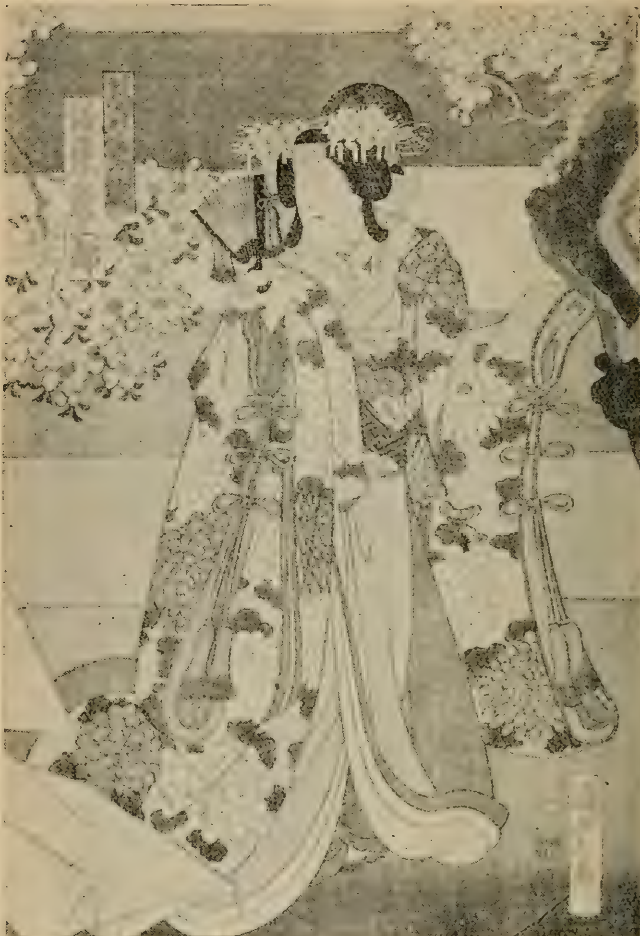
皆々　お慰みでござりまするな。

葛の　見渡せば、柳櫻と詠まれたる、それにはあらでこの神垣。風に變る宮柱も、風雅に見れば自ら、好い眺めぢやないかいなう。

苅萱　左樣でござりまする。俄のお供で、わたしらまでも好い氣晴らし。

野分　それ／＼、わたしらは又、好い男を見ようと、それが樂しみぢやわいなア。

秋野　それはさうと、お姬樣、今日の稻荷詣では、なんの



坂東彦三郎の葛の葉姫

お爲で

皆々　ござりまする。

葛の　ォヽ、語らねば其方衆は知りやるまいが、自らはこの程、毎夜々々血筋に離るゝと云ふ、心がゝりな夢見るゆゑ、都にまします姉上、櫨さまのお身の上に、悪い事はあるまいかと、それゆゑの神詣り。皆もとも／＼、願籠めしてたもいなう。

朝顔　お様子を承れば、お優しいお志し。

藤江　その御姉妹思ひのお心根、神も納受遊ばさいで、なんと致しませう。

村崎　それ／＼、それもてつきり、逆夢とやらでがなござりませう。

尾花　ソレイナア。逆夢でござんすとも。あの庄司さまの甥の殿、石川悪右衛門さまと云ふ、憎らしい前髪さん。

ト思ひ入れ。

苅萱　さうでござんす。内のお姫様に強い惚れやう。

野分　お嫌ひなさるゝ程、しこりかゝつて女房呼はり。此方のお館へお出でなされても、無性にわたしらを叱り散らして、意地の悪い事ばかり仰しやつて

秋野　ほんに思へば、お顔も心も、悪右衛門さまぢやわいなア。

野分　男戀しいわたしらでさへ、嫌ぢやと思うて居るあの若衆づら。

朝顔　あの悪右衛門さまに離るゝと云ふ、お夢の告げでござりますに、お祝ひ遊ばしませい。

葛の　ようこそ祝ひ直してたもつた。あの人に思ひ切らるるは、この上もない喜び。追つけ父上母様も、お出での筈。お待ち申して御一緒に、御参詣申さうわいなう。

桔梗　それがよろしうござりませう。左様ならそれまで、あの森の内にて、散り残る花を御覧遊ばして。

葛の　そんなら、其方の指圖に任せ。

桔梗　あれなる森の内へ、姫君様。

葛の　皆も一緒に、

皆々　先づ、お出で遊ばしませい。

ト唄になり、葛の葉先に、皆々、森の内へ入ると、カケリになり、向うより、保名、素袍の下ばかりの形、狂亂の姿にて出て來る。花道にて、肩にかけたる裲襠を見て思ひ入れ。

〽戀よ戀、我れ中空になすな戀、戀風が來ては袂にかい縺れ、思ふ仲をば吹き分くる〽あら心なの嵐につれて、

うら吹き返す、筐の小袖、見るに思ひの增すゆゑにこそ〽狂はすれ、狂ふは誰ぞや我れはそも、安倍の保名が安からぬ、胸にせまりし數々より、何處を指して和泉路に、寄る邊の水も泡沫の、漂ふ姿亂れ髮、素袍の袴踏みしだき。

コレ〳〵、物問はう。このあたりへ、十八九の娘の裲襠で、しやなり〳〵と行かぬか。ヤア、知らん。オオ、その尋ぬる人こそ。

〽芝蘭芙蓉の花のかんばせ、姿は物か及びなき、吉野初瀬の薄櫻、更科越路の眺めは遥か、下照衣通、神の緣の榊とは、我が戀人の仇し名が、仇な契りに云ひ交したる言の葉を、思ひやるさへ悲しけれ、更け行く鐘、別れの鳥も、獨り寐る夜はさはらぬものを、榊の糸の亂れ心、いつ忘れうぞ、いつの春か思ひ染めけり、

去年の何月、何時かやら……オヽ、それよ。

〽花の宴や、花の緣、寺々の鐘撞く奴めは憎やな、戀ひ戀ひて稀れに逢ふ夜は日の出るまでも、寐やうとすれどまだ夜深きに、ごん〳〵ごん〳〵〳〵と撞くにまだ寐られず、寐ぬ夜恨みの旅の空、夜さの泊りは何處が泊りぞ、草を敷寐の肘枕々々、一人明かすぞ悲しけれ〳〵、葉越しの〳〵幕の內、昔戀しき俤や、移り香や、その俤に露程も。

保名　似た人あらば敎へてたべ。おちこち人に物問はん。オ、イ〳〵。

ト揚げ幕にて

與勘　オ、イ〳〵。

〽招けば招く與勘平、やう〳〵に走りつき。

トこの文句のうち、向うより與勘平、奴の形にて、保名が大小を持ち出て來り、保名を見て

モシ〳〵、お旦那樣、保名さま、奴めでござります。正氣になつて下さりませ。お心を附けられませい……エヽ、是非もない。正體なきこの有樣。モシ、人の見る目も恥ぢ給ひ、サア〳〵、お館へお歸りなされませい。保名さま。

〽サアお歸りと、諫めすかして引く手を拂ひ、かしこの茂る榊の枝に、筐の小袖打ちかけて、アレ〳〵、枝にゆかしき人は見えたり、嬉しやとてよぢ登れば、榊の枝は身を通し、愛着は胸を焦す、こはそも如何に淺ましやと、せん方淚に伏し沈む。

ト此うち、保名、榊の枝に小袖を掛け、泣き伏す。與

勘平、いろ／＼心遣ひの介抱して

與勘　こは情なき御有様。心なき草木を、焦れ給ふも迷ひの容目。

保名　ナニ、容目とは事おかしや。心あればこそ、時を違へず、ソレ、そこに。

與勘　ドレ、何處に。

ト思ひ入れ。

〽眞實君に逢ひたくば、信田なる、社に歩みを運びて、七日なん／＼七夜さ籠れば、御利生ます／＼あらたに、戀しき人に逢ひも見もせめ、中に殊さら榊の枝に、君が小袖を打ち着せて。

保名　紛ふ方なき榊の前。非情とは、與勘平。

與勘　ナイ／＼。

〽汝こそ草よ木よと、筐の小袖身に添へて、泣いつ笑ひつ様々に、狂ひ亂るゝばかりなり、始終を幕の物見より、覗き見惚れて葛の葉は、賤しからざる都人、何ゆゑかゝる亂心と、幕絞らして立ち出づれば。

トこの時、幕の内より、葛の葉先に、腰元殘りなく出て來る。葛の葉を保名見て

保名　ヤア、其方は榊の前。懷かしや／＼。

〽なら懷かしの榊の前と、抱きつかんと立ち寄るを、附き／＼の腰元押し隔て。

トこの時、保名、葛の葉に抱きつかうとするを、腰元ども驚ろき、葛の葉を圍ひ

皆々　コレ／＼、粗相せまいぞ／＼。

桔梗　あなたに覺えもない名を云うて、滅相な、氣狂ひどの。

苅萱　それ／＼、奴どの。

秋野　ちつとも早う。

皆々　留めさつしやれ。

ト與勘平、保名を留めて居て

與勘　ヘイ／＼、留めて居ります。お氣遣ひなされますな。

野分　コレ／＼、可愛らしい殿御が、其やうに心も亂れし樣子。

皆々　どうした事ぢやぞいなう。

與勘　ハッ、語るも主人の恥なれども、一通り聞いて下さりませ。手前が旦那が、思ひ人に後れ給ひ、それより正氣を取り亂し、御覽の如く物狂ひ。サア、その戀人に、それは、見れば見る程、あなたがとんと生寫し。直な目にさへ見違へるに、尤もと御料簡下されませ。モシ、重

重、甘へしお願ひなれども、焦るゝ人に似た姫君様。お優しきお詞かけ給はゞ、染まり易きは人心。自然と狂氣も鎮まらんと存じます。さすればこの上もなき御慈悲心。モシ、お願ひでござります。お情でござります。お側のお女中方、お執成し、一重に願ひ上げまする。

〽余儀なく頼めば葛の葉は、まだうら若き心より、應へなければ腰元とも。

桔梗　お姫様のお詞で、あの氣狂ひが直るなら、きつい善根ぢやないかいなう。

野分　ソレイナア。見れば見る程好い殿御。器量も中位のこの野分では、直るまいかいなう。

村崎　ホヽヽヽ、こりやおかしい。こなさんのやうな者とお姫様と、一つになるものかいなア。

野分　なんぢや。こなさんのやうな者。措いておくれえ。これでも御家中では、わしが事を

皆々　なんと云ふぞいなア。

野分　御用提灯ぢやと云ふわいなう。

皆々　ホヽヽヽ。

桔梗　それはさうと、あの殿御、戀ゆゑと聞きや、いとしいわいなア。

藤江　申し、お姫様。あの奴どのが、顔に似合はぬ、涙をこぼしてござんす。どうぞ、モシ、彼處へお出で遊ばし優しいお詞を、おかけなされておやりなされませ。

尾花　それ〳〵、わたしどもまでお願ひ申しまする。奴どのも、お願ひ申さんせ。

與勘　ネイ〳〵。偏へに御慈悲御善根。

皆々　お願ひ申しまするわいなア。

葛の　ぢやと云うて、あられもない、田舎育ちの自らが、なんと云うたらよからうやら。

皆々　ハテ、マア、お出で遊ばしませ。

〽附き〳〵の、無理に勧めにおづ〳〵と、恥かしながら立ち寄つて。

葛の　戀しう思し召すお方様に、お別れなされ、狂氣なさるゝとは、さりとはお優しいお心でござります。さりながら、世には忘れ草もある慣ひ。お心を取り直し、早うお屋敷へお歸り遊ばしませ。見れば見る程、可愛らしい、おいとしい事でござんす。

〽云へば保名も心を靜め、よく〳〵見れば紛ならず、似たりと思ふ執着に、つれて心も正氣になり、面目なげに差俯向き、暫し答へもなかりけり。やう〳〵に顔を上げ。

ト保名、あたりを見て、正氣になりし思ひ入れ。

保名　與勘平、爰は何處ぢや。

與勘　爰でござりまするか。爰は信田の島居先でござります。

保名　おれはどうして爰へ來た。して、どうぞしたか。

與勘　どうぞしたか。どうぞした段かどころぢやござりませぬ。あなたが榊さまの御最期より亂心なされ、方々と駈け歩きなされまするゆゑ、今日は爰へお出でなされ、この奴めも泣くにも泣かれず、どうせうと存じたところに、アレあのお姫様が、榊さまに生寫し。それゆゑ私しがお願ひ申し、あなたのお優しいお詞で、ヤレ、榊の前か嬉しやと、思し召すお心で、その願ひ。して、お心持ちは、どうでござりまする。

保名　そんなら榊が最期より、本心亂せしとか。面目ない面目ない。

與勘　なんぢや、面目ない。アノ其やうに仰しやるからは。

保名　與勘平、おれは正氣になつたわやい。

與勘　エヽ、そんなら御本心におなりなされましたか。有り難い／＼。これと申すもお腰元衆のお執成しで、お姫様のお詞ゆゑ、なんとお禮を申しませうぞ。コレ、お旦那、ちやつとお禮を仰しやれ。

ト肌を入れさせ、いろ／＼あつて

サア、ちやつと其處へお出でなされて、有り難うござりますると、お禮を仰しやれませ。

保名　これは／＼、武士のあるまい女に迷ひ、狂氣いたしたるところに、こなた樣の御介抱で、拙者正氣となると申すも、偏へにこなた樣のお詞ゆゑ。千萬忝ない。面目次第もござりませぬ。

與勘　面目どころぢやない。アヽ、有り難いと仰しやれ仰しやれ。

保名　千萬有り難う存ずる。

與勘　それではまだ足りませぬ。手を突いて、ア、有り難いと。

トいろ／＼あつて、引つくり返つて、保名と顔見合せ

兩人　有り難うござりまする。

〽主從手を下げ喜ぶにぞ、葛の葉も面はゆげに。

葛の　田舍育ちの自らが、ちよつとお詞かけたとて、お心の納まるとは、却つてわたしが、有り難うござります。早速ながら、ちとお尋ねたいは、そのお小袖の模樣。此方にも見覺えのある模樣。今また仰しやつた榊の前さま

　とは、もしや加茂の保憲さまの。
保名　成る程、その娘の、榊の前でござりまする。
葛の　ヤア、そりやわたしが姉様でござんすわいな。
保名　榊の前を姉と仰しやるからは、聞き及ぶ、信田の庄司どのゝ御息女。
葛の　葛の葉でござりまする。姉さんと云ひ號けとあるからは、そんならあなたは。
保名　榊の前と深う云ひ交した、安倍の保名でござりまする。
葛の　思ひも寄らず、姉さんの戀人さま。
保名　妹御の葛の葉どの。
葛の　替つた所で。
保名　恥かしき姿で、お目にかゝりました。
葛の　今のお話しでは、そんなら姉さんは。
保名　自害いたしました。
葛の　姉さんは、お果てなされましたか。道理こそこの頃、悪しき夢の告げ。あなたのお身にも、もしもの事はないかと案じまして、氏神様へ願ひに詣りし甲斐もなく、悲しい事を聞きました。そんなら正夢でござりましたわいなう。

　　ト泣く。腰元皆々介抱して
桔梗　お道理でござりまする〱。どうして榊さまは、自害をなされましたぞ。
秋野　委しいことをお姫様に
皆々　お話しなされて下さりませ。
保名　話すも果敢なき榊が身の上。加茂の後室の悪心にて、家の秘書紛失の云ひ譯立ち難く、自害を致す。それより某も心亂れ、思ひがけなく葛の葉どのにお目にかゝり、正氣になりしも、榊が未來より、こなたに逢へとの事ならん。ハテサテ、縁と云ふものは
　　トこなしある。互ひに思ひ入れあつて
葛の　成る程、縁と云ふものは、替つたもの。姉さんの戀人様を、わたしがお目にかゝつて、御本心におなりなさるとは、有り難い事でござんすわいなア。
保名　それ〱、さう仰しやるお物腰なら恰好なら、牡丹に芍薬、杜若、菖蒲。
與勘　朝顔に夕顔に南瓜に唐茄子。
保名　コリヤ、何を云ふ。默らぬか。
與勘　ネイ。
　　トちつと扣へる。

保名　白粉に葛の葉どの、似たとこそ云へ〳〵。どうぞ親達のお許しあらば。

ト葛の葉が手を取つてこなし。

葛の　姉さんにお別れなされ、お心まで亂るゝとは、眞實のあるお方。そのあなたを後へ殘し、お果てなされし姉さんは、きつう不仕合せなお方ぢやわいなア。

保名　榊は不仕合せ。拙者はまた仕合せ者。どうぞ、ならう事なら。

葛の　サア、ならう事なら、姉さんと云ひ交しなされしお話し。イヤ、御最期の事が、聞きたうござりまする。

保名　お話し申さいでなんと致しませう。さりながら、爰は往來。幸ひのあの幕の內。

ト思ひ入れある。與勘平、これを聞き

與勘　コレ、お旦那。

ト思ひ入れ。保名を與勘平、睨むこなしあつて

保名　サア、幕の內にてお話し申したけれど、こなたなり私しなり、ひよつと人の思惑も。

桔梗　そりやお氣遣ひなされまするな。榊さまのお妹御の葛の葉さまなりや、あなたとも御兄妹とも同じ事。必らずお心遣ひなら、お話しなされませ。

保名　左樣お許しのあらば、あの幕の內にて。

葛の　詳しいお話しなされて下さりませ。皆の者、保名さまを御同道申しても、誰れもなんとも云ふまいか。

桔梗　誰れがなんと申しませう。姉聟君の事なり

與勘　これがほんの猫に鰹節。

保名　默らぬか。

與勘　ネイ。

葛の　そんなら彼處へ。保名さま。

保名　葛の葉どの。

皆々　サア、お出でなされませ。

〽岩木ならねば葛の葉も、ほころびやすき幕の內、伴ひてこそ入りにけり。

ト葛の葉、恥かしがるを、保名、手を取り、幕の內へ入る。後に與勘平、腰元殘り、三味線入り神樂。

桔梗　コレ、奴どの、けれう、姉聟君なりやこそ、彼處へ上げた。必らずともに、そこらを氣を附けさんせえ。

朝顏　それにつけても、手前は奴どの。こなたの機轉で、旦那の正氣になると云ふは、ほんに文殊も及ばぬ智惠。

野分　それ〳〵、殊に與勘平とは、さりとは可愛らしい名ぢやなう。

ト與勘平へ寄り添ふ。與勘平、突き飛ばし

與勘　アヽ、コレ〳〵、寄るまい〳〵。旦那のおきちも、その可愛らしいから起つた事。びやくらい、女に懲り果てた。寄らつしやるな〳〵。

野分　でもマア、愛想のない戀知らずぢやなう。

ト思ひ入れ。

尾花　コレ、奴どの、こなさんの名は與勘平とは、珍らしい名ぢやなう。小さい時からの名か。どう云ふ事で與勘平と云ふ。その事を聞きたいわいなう。

藤江　これは旦那の物好きか。但し、こなさんの物好きか。譯がありさうな事。それが爰で

皆々　聞きたいわいなう。

與勘　これは一大事の事をお聞きなさるゝ。拙者が名前は謂れ因縁、古事來歷のある事。申されぬ事ながら、最前お世話になつた女中方のお尋ね。お話し申さずばなるまい。元來拙者の名は勘平。旦那のお側近く參る者、幾人とある中に、天道三寶、冥加に叶つてこの通り、武骨の身共、兎角旦那のお氣に入り、身に仰しやる事はお詞が格別、どうしてくれよ勘平、斯うしてくれよ勘平、腰をひねれよ勘平、よかん〳〵と、我が名をいつとなく與勘平與勘平と人も云ひ、われも又惡勘平よりましと申す。忝なくも拙者が與の字は、主君より拜領の勘平に、與の字をつけし謂れ因縁。あら〳〵斯くの通りでございます。

皆々　それで謂れが知れたわいなう。

秋野　與勘平の講釋、きついものでござんした。

野分　モシ〳〵、與勘平とは、豆腐の事ぢやござんせぬか。

皆々　そりや、おかべぢやわいなア。

野分　それ〳〵、おかべであつた。おかべ八目、幕の内のお姬樣と、保名さまと。

ト野分、幕の內を覗く。皆々、野分を留めて

桔梗　アヽ、滅相な。野分どの、不行儀な……最前より余程の間、お姬樣にも、定めしなんぞ御用もあらう。サア、皆さん、ござんせ。

ト桔梗、腰元皆々、幕の內へ入る。野分、思ひ入れあつて

野分　エヽ、お前方、其やうに云はしやんしても、あれを見たら、堪らぬ〳〵。

トいろ〳〵こなしあつて、與勘平に寄り添ふ。與勘平、

野分を突きこかし

與勘　エ、、こりや、何をするのぢや。

野分　何をするとは奴どの、どこもかしこもぶり〳〵と。こりや堪らぬ。

ト抱きつく。

與勘　エ、、嫌だ。忌々しいわい。

ト野分を蹴飛ばす。野分、起き上がり

野分　エ、、情ない、情知らず。此やうに膳を据ゑるに、箸とらぬとは胴慾者。

ト思ひ入れあつて

こりや堪らぬ〳〵。ドレ、手水にでも行かうか。

トびんしやんして幕の內へ入る。

與勘　あのべら坊め、いろ〳〵な事をしやアがつて、おれまで氣狂ひにしようとした。イヤ、氣狂ひと云へば、且那のお側へ、ドリヤ、行くべいか。

〽幕の小蔭に入りにける。

ト與勘平、幕の內へよろしく入る。直ぐに三味入りの神樂になり、向うより庄司、柵、女房の形にて出て來り

柵　庄司どの、さぞ娘が待ち兼ねて居りませうぞえ。

庄司　サア、私領內は心安く、供をも連れずに參つたが、あの幕の內で花でも眺めて、葛の葉が待つて居らう。婆、サア、一緒に。

柵　社へ詣りませうかえ。

ト本舞臺へ來り

腰元ども〳〵。

ト幕の內より、腰元殘らず出て

皆々　只今お出でなされましたか。

柵　して、葛の葉は。

桔梗　あの幕の內に。ちよつとお知らせ申しませう。

村崎　親旦那お二方の

皆々　御參詣でござりまする。

〽幕しぼらせて葛の葉姫、姉の小袖を手に持つて、思ひありげに立ち出づる。

庄司　姫、さぞ待ち兼ねたであらうな。

柵　見れば著つた物着て居やるが、その小袖は。

葛の　母樣、この小袖、見覺えてお出でなされまするか。

ト葛の葉、脫いで出す。柵、見て

柵　ほんに珍らしい。これを知らいでよいものか。この母が若盛りに、物好きにて縫はせた小袖。筐に見よと姉に

の榊に送りしに、其方はどうして着て居やつた。庄司どの、御覧じませ。

庄司　ほんに、こりや榊が小袖。その小袖を葛の葉が着て居るは、どう云ふ譯でござるの。

葛の　サア、その小袖について、悲しい話しを聞きました。

榊　コレ〳〵、悲しい事とは氣遣はしい。泣かずと話して聞かしやいなう。

庄司　娘、何ゆゑ歎く。二人が前で樣子を話しや。どうぢや〳〵。

保名　イヤ、そのお話しは、拙者が致しませう。

ト簾の內より、保名出る。

庄司　其許は。

保名　拙者は加茂の保憲が末弟、安部の保名。御息女榊と夫婦の契約。後室の惡心にて、家の秘書を余人に奪はれ、その云ひ譯に自害いたし、加茂の家斷絶と云ひ、夫婦の義理ゆゑ某も、無念骨髄に徹し、それゆゑ物狂はしくなり、思はず當所に於て正氣になり、御兩親にお目にかかり、お話し申すも詮なき事。榊が最期でございまする。

榊　そんなら娘は死にましたか。コレ、庄司どの、榊が死んだといなう〳〵。

ト小袖を抱きしめ

可愛や〳〵。この頃葛の葉が夢話し、きつう案じて居ましたが、これ程に夢が合ふものか。これも夢なら、覺めてくれ〳〵。

〽身を投げ伏して泣き沈む、父は流石に得泣きもせず、せき込む涙を呑み込み〳〵。

庄司　婆、泣くな。泣けば榊が爰へ來るか。日頃から未練な〳〵と申すは爰の事。保名どのゝ思惑もある。ハヽア、さてはこなたが聞き及ぶ、保名どのか。姉めがこの世に存らへて居るならば、いかめしく聟舅の、名乘り合ひ致すべきに、悲しき今日の對面。老いて子に離るゝ程、悲しいものはございますまい。推量して下され〳〵。

保名　そのお悔みは御尤もなれども、葛の葉どのがましませば、亡き榊と思し召し、お慰みなされませう。只今申すは異なものなれども、早速ながら保名がお頼み。榊に後れ、便りなき某。何卒葛の葉どのを賜はらば、姉と思ひて某が、力にも致したい。さしつけがましき事ながら、この事お頼み申しまする。

葛の 母さん、聞かしやんしたか。姉さんにお別れなされ、便りがないと仰しやるから、わたしは妹の事なり、姉さんが恨みなさんす事もあるまい。と云うてわたしが構ふ事でもなし。

柳 さうでござるわいなう。姉に別れ、狂氣までにならしやつた、貞實な心。妹の其方が姉に代つて、添ひたいと云やるも無理でもなし。姉が追善にもならう。恨みもせまい。庄司どの、葛の葉を嫁どの、願ひの通り。と云うてわしが構ふ事もなし。

庄司 成る程、婆の云やる通り、世間にない事でもなし。また葛の葉も、嫁でもなささうな。思ひ合うた事ぢやに依つて、柳が代りにあの葛の葉を、保名どのに添はせて。と云うておれが構ふ事でもなし……併し、爰に一つの難儀と云ふは、身が甥に石川惡右衛門と云ふ者。兼ねて葛の葉を女房にくれいと望めども、娘が嫌ふ。殊に禮儀も知らぬ惡黨者ゆゑ、返答もせず、それなりにして置けば、この事彼れが聞けば、猶さら惡事增長なさん。先づ彼れに斷わり申し、その上にて夫婦と致さん。それまでは爰で、あつと返事も申されませぬ。

〽老の返事も說げに、膠もしやしやりも嵐につれ、貝鉦の音勢子鼓、まし垣森の方よりも、年經る白狐が駈け來り、葛の葉保名が眞中へ、助けてくれと云はぬばかりに隱れ居る。

ト勢子太鼓烈しく、花道より縫ひぐるみの白狐走り出て、葛の葉と保名が中へかゞむ。

保名 ヤア、讀めた。今聞えし貝鉦は狐狩り。窮鳥懷へ入る時は、狩人もこれを取らず。殊に白狐は阿紫と名け、我が朝にては專女御前、宇賀の御靈の神使にて、恩を知り仇を報ふ畜類。幸ひのあの祠へ、助けてやらん。

〽助けてやらんと傍へなる、祠の扉押し開き、抱き入るれば嬉しげに、四足をひそめて屈み居る、時に向うの堤より、眞黑になつて駈け來るは、紛ひもなき惡右衛門、逢うては邪魔と彼處なる幕へ、保名が忍び入る。

ト此うち皆々保名に隱れろと云ふ思ひ入れ。保名、幕の内へ入る。

〽程なく石川惡右衛門、人夫引き連れ件の白狐を見失ひ、キヨロ／＼眼に走せつけて。

ト花道より惡右衛門、若衆羽織、衣裳にて出て來る。後より三階の人數、人形捕り手、割り竹を持ち出て來



市村家橘の與勘平

り

惡右　これは〱伯父者人。一家さらへて花見遊山か。羨やましい〱。拙者は左大將の仰せを受け、近國の狐狩り。同じ御領を預かつても、こなたは仕合せ。妻子を連れて味やらるゝな。さりながら、葛の葉を嫁に貰へば、聟なり舅なり、二人前の働らき。氣遣ひ召さるな。それはさうと、見つけた狐を取逃がし、ぎえん惡う思ひしに、願ふところの女房狩り。今日一日は休みにして、連れ歸つて腰膝揉らせ、この間の草臥れ休み。葛の葉、サア、來やれ。

ト惡右衛門、葛の葉の手を引ッ張る。庄司、支へて

庄司　これは無躰な惡右衛門。下々の婚禮でも、吉日を選むが身祝ひ。如何に一家なればとて、娘も得心せぬ事を、踏みつけた仕方。彼れにもとくと合點させ、その上の事。今日は娘は連れ歸り申す。

惡右　ア、措かつしやれ〱。今度に限らず、嫁入りの催促は度々なれど、ぬらくら〱と、磯邊も沖へも着かぬ返事。今日も又ぬつくりと騙さうとしても。モウ〱さう〱は騙されぬ。逢うた時には笠脫げと、ソレ、家來ども、娘を引ッ立てゝ連れ參れ。

家來　畏まりました。サア、葛の葉どの。

皆々　ござらしやい。

〽家來ばら〱立ちかゝる、無躰はさせぬと支へる庄司夫婦をば、首筋つかんで尻居に捻ち据ゑ、濫法矢鱈に暴れ出す。保名主從堪り兼ね、幕の內より飛んで出て、葛の葉親子を後に圍へば。

ト此うち惡右衛門。庄司と柵を手籠めにする。幕の內より與勘平、保名出て、與勘平は皆々を投げ退ける。保名は葛の葉皆々を圍ふ。

皆々　奴どの、出かした〱。

惡右　ヤア、うぬア安倍の保名。姉の榊がくたばつたゆゑ、妹をなめにうせたか。自躰うぬには詮議がある。好い所で出ッくわせた。サア、加茂の後室を殺したも、慥かにおのれ。それを引き込む叔父は同罪。信田の家を斷絕させ、この惡右衛門が押領する。サア、青二才め、尋常に葛の葉を

皆々　渡せエ、。

〽渡せ〱と呼ばはつたり。

保名　ハ、、身に覺えない事を、さま〲とほざいたり。奴、爰は保名が受け取つた。汝は各々方をお供せよ。ぬ

かるな、急げ。
與勘　畏まりました。サア各々、怪我過ちのないうちに。
葛の　とは云へ、保名さまに今別れて。
與勘　ハテ、後から奴がお供する。サア〳〵、早く〳〵。
〽親子を伴ひ立ち出づる。
ト與勘平庄司、柵、葛の葉、桔梗その外腰元、皆々先
〽立ち、向うへ入る。
惡右　葛の葉をやつちやア。
ト行かうとする。保名、留めて
保名　どつこい。さうはならぬ。伯父に刃向ふ無法人。惡右衞門とはよくつけた。サア、通らるゝなら通つて見よ。
惡五　ヤア、面倒なうづ蟲め。先づ此奴からぶちのめせ。
皆々　合點だ。
〽一度にどつと奴ばら、取つては投げ〳〵、向ふ奴をおとがひ蹴上げ、左右へかゝるを飛び違へ、刀の鍔に素頭砕き、手を盡して働らけども、ついに大勢折り重なり、手取り足取り四方へ引つ張り、上げつ下ろしつ子供遊びの亥の子餅、二三度四五度もんどり打つ。
ト此うち、いろ〳〵立廻り。保名を皆々寄つて打擲する。保名、倒れる。
皆々　お旦那、此奴はごねました。
惡右　先づ邪魔は拂つた。この上は葛の葉を奪ひ取らん。續け。
〽後を慕うて追ひ駈くる。
トこれにて惡右衞門、捕り手、皆々向うへ入る。
〽保名は五躰も砕くるばかり、手足も拉がれ目くるめき、苦しき息をほつと吐き。
保名　エヽ、おのれ惡右衞門、生けては歸さじ。卑怯者、返せ〳〵。
〽立ち上がつてはどうとまろび、よろぼひ立つては、かつぱと伏し、無念々々と齒嚙みをなし、男泣きに泣きけるが、必定葛の葉も奪はれつらん、最早生きても詮なき保名、それよと、差添逆手に拔き放し、既に最期と見えける折から、なんとして遁がれ來りけん、葛の葉見るより走りつき。
ト此うち、保名、いろ〳〵思ひ入れあつて、一腰を拔き放し切腹せんとする。この時、祠の蔭より葛の葉出て、保名に縋り
葛の　待つた〳〵、保名さま。なんで腹を切らしやんす。

マア／＼、待つて下さんせ。
保名 ヤア、其方は葛の葉、どうして來たぞ。して、御兩親に怪我はなかりしか。
葛の サア、親達はどうならうとも、お前に心引かされて。
＼しのぎの中を來たものを。
見捨てゝ置いて死なうとは。聞えぬ／＼／＼わいなア。
ト泣くを拂ひ
保名 その恨みは尤も／＼。慥かに惡右衞門に、其方を奪はれしと思ひしゆゑ、この生害。其方の無事を見る上は。
葛の 思ひとまつて下さんすか。
保名 とまらいでは。死なうと云ふも其方ゆゑ。
葛の 嬉しうござんす。必らずともに。
保名 未來かけて。
葛の 女夫になつて下さんせ。
保名 オイナウ。
葛の 嬉しうござんす。
＼互ひに抱き縋り合ひ、關なき妹脊となりにけり、かゝる所へ與勘平、息を切つて走せ歸り。
トばた／＼にて、向うより與勘平、走り出て來り

與勘 ハア、各々をお供して、府中の邊まで送り屆け、主人の身の上心元なく、取つて歸す道にて、惡右衞門に出ツくわし、暫らく戰ふその間
ト葛の葉を見て思ひ入れ。
ようも遁うて葛の葉さま、御心底も屆きまして、さぞお喜びでござりませう。
葛の 吻りしたわいなう。
保名 ヤレ／＼、大儀であつた／＼。
＼喜ぶ間も向うより、又むら／＼と惡右衞門、大勢引き連れ取つて歸し。
ト花道より、惡右衞門先に、捕り手皆々、附き添ひ出て來り
惡右 ヤア、葛の葉、其處に居たか。さてこそ／＼、推量の通り、うぬが不所存。ヤレ、家來ども、保名主從討つて取れ。姫は此方へ奪ひ取れ。
捕手 畏まつてござる。サア、奴め、姫を早く
皆々 渡せエ、。
與勘 吐かしたり、ほざいたり。最前手並は見せ置きしに、性懲りもなきうざい餓鬼。この奴が引導にて、爰で信田の土となれ。

惡右　者ども、物な云はせず、討つて取れ。
皆々　覺悟。
〽わつとおめいて切りかゝれば、只一人に切り立てられ、後をも見ずして逃げて行く。
ト惡右衞門、皆々、逃げて向うへ入る。
與勘　何處までも。
ト行かうとする。
保名　ヤレ待て。天晴れ手柄の奴どの、長追ひ無用々々……彼奴等が逃げるも與勘平。
與勘　拙者が追はぬも與勘平。御夫婦仲も……與勘平。
〽これも偏へに信田の神の御惠み。旦那を祝し、御出世を松の葉の。
保名　オヽ、住吉に隣りたる、津の國安倍野は我が本國。暫らく彼處に引籠り、時節を待たん。
〽時節を待たんと勇めども、立つ足さへもよろ〳〵〳〵と、風に揉まるゝ柳の枝を、杖よ柱と葛の葉が、夫の手を引きいたはりて、畦道。
與勘　どつこい。
〽細道。どつこい〳〵。
〽まがひ道、石津川を打ち渡り。これより先は道もよし。
保名　西へ〳〵と、入り日につれて行くもよし。
葛の　人目忍ぶは夕暮れよし。
〽かれよし、これよし。
與勘　與勘平。
〽夫婦を誘ひ津の國や、安倍野をさして、急ぎ行く。
トこの文句、よろしく、

幕

三幕目　安倍野機屋の場

役名――信田庄司。同女房、柵。同娘、葛の葉姫。花柄團八。安倍の童子。狐葛の葉。安倍保名。

本舞臺、三間の間藁家、庇つきの屋體。上の方、一間の折り廻しの賤が家、三尺の窓、これに障子を立てある。向う暖簾の口、下の方赤壁、門口据ゑ物、西の柱に松の立ち木、この側に一間の物置き、出入りあり。爰に童子、付け紐の形にて、竹笠を持ち、

あちこちと蝶を追ひ廻し居る見得。よろしく在郷唄、機の音にて幕明く。

〽隣り柿の木を十六七かと思うて、覗きやしほらしや、色ついて十六七かと思うて、覗きやしほらしや……母は機家を立ち出でゝ。

ト葛の葉、やつし前垂れ、襷がけ、肩に手拭をかけ、出て來り

葛の　オヽ、コレ、坊や、また悪戯してかいの。昨日も父様の仰しやるには、此奴は悪い癖がある。たゞ蟲けらの命を取る。今から殺生を好んで、ろくな者にはなるまい。必らずやんま釣るな、ねきや蝗を殺すなと、お叱りなされたを忘れてか。たつた一人の與勘平は京へ行き、父様のお留守の間に、ひよつと怪我でもしをつたら、この母はマア、なんと云ひ譯しやうと思やるぞ。必らずともに庭より外で、悪あがきしてたもんなや。サア／＼、爰へおぢや／＼。先刻にから餘程の間、乳呑んで、ねんねこしや。

ト童子を膝に抱き上げる。

童子　そんなら母様、晩には松蟲塚へ、蟲を取りに行くぞや。

葛の　オヽ、安い事。それも父様が連れてござらう。駄太を云はずとねんねこせい。いとしい者を誰れがいよ。ねんねこ／＼、ねんねが守りは何處へ行た。山を越えて里へ行た。里の土産に何もろた。

〽でん／＼太鼓に振り鼓、樂も囃子もいらばこそ、手間隙とらずすや／＼と、母に添ひ寢の幼な子は、如何なる好き夢見るやらん。

トてんつゝになり、團八、股引き草鞋、大風呂敷を背負ひ、菅笠をかむり、木綿買ひにて、すた／＼出て來り、門口を明け、内を覗き

團八　かみさん、内にか。ホヽ、添乳してか。この頃の雨續きで、めつきり木綿の値がよいが、織り溜りがあらば、一匹でも半匹でも賣らつしやりませぬか。イヤ、お邪魔ながら、爰で火を借りて、さらば一服いたさうか。

ト内へ入り、荷を下ろさうとする。

葛の　イヤ、致してもらふまいわいの。子供の寢入り端。かさ高に物云うて下さんすな。今日は怪しからぬ。ついに見馴れぬ木綿買ひ達が、無いと云ふに入れ替り立ち替り、こなさんで丁度三人。そして家の内や人の顔を、キヨロ／＼と、合點の行かぬ木綿買ひ達ではあるわいの。



三世中村歌右衛門の保名

團八　ハテ、さう云はつしやりまするな。合點が行かいでからが、高が天下の町の借家に住む町人の木綿買ひ。氣遣ひな事はござりませぬ。斯うウロ〳〵見廻すは、ア、どうやら機に器用さうなおかみさんの顔ぢや。定めて織り溜りがあらうと思ひます。なんと、賣つては下さりませぬか。

葛の　サア、次第々々に賣らはなる。夫の表、この子のにも、さつぱり着せたけれど、繼るも紡ぐにも、織るにも染めるも手一つで、内の者の肌さへ寒ぎ兼ねて居るゆゑ、賣る木綿は、いかな〳〵。褻れ一尺もござらぬ程に、無い所に長居せずと、とつとゝ去んで下さんせいなア。

團八　ハテ、さう澄義道に云はずとも、仕事は心につれるもの。氣丈を長う心の幅廣に、詞の艶もあるやうに、其うち織つて下さりませ。また御無心に參りませう。

〽我が挨拶を機にして、すご〳〵出でて歸りけり。

ト團八、思ひ入れあつて、向うへ入る。

葛の　ア、、ようロをきく木綿買ひぢや。今日に限つて入れ替り立ち替り、合點の行かぬ。由ない事に大きに隙を費した。さう斯うするうち、もう八ツでもあらうか。こちの人の戻らしやんすに間もあるまい……オ、、この子とした事が、すや〳〵と他愛もなく寐た事わいの。そしてマア、この寐顔の、こちの人に生寫し。大事のこちのかゝり息子どの。こりや、誰れが子ぢや〳〵。ホ、、ホ。其方は爰へねんねして、父さんの歸りを待ちや。

ト括り枕を出して下へ寐させ、二枚屏風を立て

ドリヤ、織りかけた機にかゝらうか。

ト機家へ入る。

〽また機前にさしかゝる。

〽隣り柿の木を十六七かと思うて、覗きや、しほらしや、げしうはあらぬ袂はづれ、老人夫婦の旅姿、二十歳あまりにおとなびて、娘めく人介抱し、旅とてもまだ辿り經ぬ、足もかろげにそんじよそこと、人の教への門の口。

トこの淨瑠璃のうち、向うより庄司、大小着流し、旅の體にて、杖を突き、菅笠を持ち出て來る。後より柵、同じく婆の拵らへ。後より葛の葉、娘の拵らへ、着流し抱へ帶、菅笠を持ち出て來る。直ぐに舞臺へ來て

葛の　父さん、もそつと早うお歩きなされませ。

庄司　娘、靜かに行け。早い足ではあるぞ。

柵　急いで怪我しやんなや。

葛の　母さんとしたことが、何を仰しやるやら。知らぬう

ちは只、逢ひたい〳〵と思うて居たばかり。保名さまのお在所が彼處と聞いたれば、なんとマア、落ちついて居られませう。サア、ちやつと連れて行て下さんせいなア。

柵　その筈〳〵。今あの後の家で聞いたが、向うに見える家が、保名どのゝ所ぢやといなう。

葛の　エヽ、そんなら保名さまの所は、爰でござりますかえ。サア〳〵、ちやつと逢はして下さんせいなア。

柵　親仁どの、娘が急くも尤もぢやわいの。わしも逢うて、何かの事を話したい。ちやつと案内さつしやれいなう。

庄司　成る程、保名の在所聞くと等しく、これまでは同道したれども、よく〳〵思へば、別れて早六年、長の年月、生死の問ひ音づれもせず、此方こそは變らねど、保名の心底計り難し。某一人對面し、その上で娘も母も呼び出さう。それまでは、幸ひあの物置。ちつとの間忍んで居やれ。

柵　これは尤もぢやわいの。此方ばかり思うて居ても、聟どのに、なんぞ替つた事でもあつては氣の毒。娘や、わしもマア、彼處へ。

葛の　そんなら申し、父様、ちつとの間隠れて居る程に、早う逢はして下さんせえ。

庄司　オヽ、それがよい〳〵。

ト兩人、物置へ入る。葛の葉また出て

葛の　父様、保名さんに、わたしが煩らうて居た事を、よう云うて下さんせ。

庄司　そりや、おれが合點ぢや程に、早う〳〵。

ト葛の葉、こなしあつて、また物置へ入る。柵、出て

柵　娘があれ程に思うて居る事ぢや程に、保名どのに、とつくりと譯を云うてやらつしやれ。

庄司　おれに如才があるかいやい。其方も娘が側へ行て居たがよいわいの。

ト柵をまた物置へ入れ、戸を引き立て

さて〳〵、忙しない者どもではある。ドレ〳〵、案内を乞うて……頼みませう〳〵。

ト内を見廻し

これはしたり、お留守ぢやさうな。

ト窓の側へ來て

頼みませう。

ト葛の葉、窓の障子を明け

葛の　ハイ、どなたでござりまする。
　ト庄司、葛の葉を見て
庄司　ヤア、其方は何時の間に。
　トぎよつとする。
葛の　あのお方わいなう。
　ト障子を閉てる。庄司、表へ駈け出す。
庄司　娘々、婆、早う來い〳〵。
柵　親仁どの、仰山な。なんぢやぞいの。
　ト葛の葉、柵出る。
庄司　なんぢやどころか、奇妙々々。娘葛の葉が、彼處に機織つて居るわいなう。
柵　ア、つがもかい。何云はつしやる。たつた今まで、あの物置に、わしと一緒に居た娘。コレ、この葛の葉が、なんの彼處に機織つて居るものぢやぞいなう。廣い世界に、似た人でがなあらうわいの。
庄司　イヤ〳〵、大概物の似たと云ふは、烏と烏、雪と雪。（一）その位ではない、正眞正銘。娘葛の葉が居る程に、疑はしくば、彼處の窓を覗いて見やれ。
葛の　申し、母さん、あのやうに仰しやる事。よもや嘘でもあるまい。お前も彼處へ行つて御覽じませいなア。

柵　成る程、親仁どのゝあゝ云はつしやる事、よもや違ひもあるまい。そんならソッと覗いて見て來よう。娘、其方も靜かにおぢや。
葛の　イア。
　〽差し足拔き足、忍ぶ間近き窓障子、破れに二人が息を詰め、覗けば見交す顔ばかり
葛の　誰れぢや。どなたぢや。
　〽と云ふ聲まで、似はせぬ矢ッ張りほん〴〵の、葛の葉も肝潰れ、母の手を引き逃げ出づる。
柵　娘ぢやわいなう〳〵。
葛の　父さん、わたしぢやわいなう〳〵。
庄司　なんと違ひはあるまいがな。
柵　ヤア、モウ〳〵、物が云はれぬ。あちらが誠の葛の葉か。これがほんの葛の葉か。現在親の目にさへ、今となつては、子にどまぐれて氣が迷ふわいなう。
葛の　こりやマア、どうせうぞいなア〳〵。
柵　どうせうと云うて、この母が目には、矢ッ張り彼處にも娘、爰にも娘。親仁どの、どう云ふ事でござるぞいなう。
葛の　母さん、お道理でござります〳〵。わたしが心。わ

しがあの人やら、あの人がわたしやら、ほんに呆れて物が云はれぬわいなア。

ト懐中より鏡を出して見て

モシ〳〵、父さん、母さん、わたしは矢ッ張りわたしぢやぞえ。こりやマア、どうせうぞいなア。

庄司　どうせうと云うて、不思議と云はうか。

柵　奇妙と云はうか、庄司どの。

葛の　父さん、母さん。

ト三人顔見合せ

三人　ホイ。

〽三人顔を眺め合ひ、溜息吐いて居る折柄、立ち歸る安倍の保名。

ト向うより保名、着流し、一本差し、菅笠を持ち、遊び人形を持ち出て來り

〽それと見るより。

保名　それにお出でなさるは、庄司どの御夫婦ではござりませぬか。

庄司　保名どのか。

保名　これは〳〵、久々にて。

庄司　こなたの隱れ家、お尋ね申した。

保名　ようこそお出でなされました。先づは御無事で、お二人樣。

庄司　變らぬ對面いたしたなう。

保名　先づ、段々此方より、御不沙汰のお詫び。先年信田の森にて、惡右衛門主從が狼藉。既に事難儀に及び、生害仕らうと存ずる所へ、早速葛の葉どのが駈けつけ、樣々との介抱にて、只今この安倍野に佗住居。お尋ねにあづかり、なんと御無沙汰の申し譯仕らうか。アイヤ、爰は端近。先づ〳〵あれへ。

庄司　イヤ〳〵、その挨拶は互ひの事。先づそれは取り措き、其許より、預かりの葛の葉、お渡し申さう。サア娘、聟どのに早う逢や。

柵　コレ〳〵、日頃の願ひが叶うて、恥かしい事はない。ちやつと、そこへ出やいなう。

〽引き合されて葛の葉は、流石二人の親の前、云はで心を知れかしの、顏に會釋ぞこぼれける、保名大きに痛み入り。

保名　これは又、改まつたお詞。ア丶、聞えた。拙者が戻らぬうち、早葛の葉にお逢ひなされ、衣服着替へ、保名に今來たやうにお見せなされ、困らせてお笑ひなさる丶

爲か。女房ども、其方も其方ぢや。今始めて來たやうに、所體をつくらずと、ちやつと御兩親へ申し譯をしてたもいなう……イヤ、段々此方に取紛れ、お便りも仕らぬは、重々の不調法。さりながら、爰に夫婦暮らすも早五年、安倍の童子と申す五歲になる男子を儲け、おとなしう生ひ立つにつけ、これを力にお詫び申さば、孫に免じて我が不孝、御免もあらうか。今日は參らうか、明日はお詫びに參らうと、口では申せども、心に任せぬ事だらけ。延引の段は不調法。コレ、女房ども、早う童子を連れて來て、お目にかきやいなう。

葛の　何云はしやんすやら。たつた今來たわたしに、嬰兒があつてよいものかいなア。

保名　また其方までが、其やうに人を困らせるやうな。イヤ、お二人樣、今さらなんと申しやうもござらぬ。母樣、よろしうお詫び、お執成しなされて下さりませ。

〽身をもだへ詫びければ。

庄司　イヤサ、云ひ譯どころでない。來て見れば不思議だらけ。マア、あの機織る人を、ソッと覗いて見てお來やれ。

保名　ムウ。女房どもは爰に居る。誰れが機織つて居るやらん。ハテナア。

〽呟きながら、そつと覗いて恟りし、色を違へて立ち歸り。

彼處にも葛の葉。爰にも葛の葉。こりや、どうぢや。

〽こは〳〵如何にと轉倒し、奧を見ては呆れ顏、こなたを見ては興覺め顏、物をも云はず立ちつ居つ、思ひがけなき驚ろきに、たゞ茫然たるばかりなり。

葛の　申し、父さん、母さん、どうせうぞいなア〳〵。保名さまにお別れ申してから、お目にかゝりたい〳〵と、明暮れ焦れて、やう〳〵と、ヤレ嬉しやと思うて來て見れば、保名さまには奧樣があるといなア。わしやなんとせう、どうせう〳〵。これを思へば、矢ッ張りあなたの在所も知らず、焦れ死に死んだら、今の思ひはあるまいに、アタ腹立ちな。本腹してこれまで來たが、口惜しいわいなア。

柵　その歎きは尤もながら、其方と思うて添うてござつたと云はしやるからは、まんざら其方を捨てゝござつたでもなし、これにはなんぞ樣子があらう。母も居る。親仁どのもござるわいの。悪いやうにはせぬわいなア。

葛の　イエ〳〵、お前が其やうに云はしやんしても、保名

さまには奥樣があり、五つにおなりなさるゝ嬰兒さんがあるといなア。わしやいつそ、死にたい／＼わいなア。

柵　コリヤ、そりやどうした事。親々も居る。泣く事はない。其方も立つやうにしてやるわいの。

庄司　それ／＼、婆と一緒に、最前の所で待つて居やれ。

柵　そんなら、わしも娘を連れて行く程に、保名、別を糺して、よう貰うて下されい。サア、物置へおぢや。

葛の　イエ／＼、わしや矢ッ張り爰に居て、泣き死に死んでしまひますわいなア／＼。

庄司　ヤイ／＼、そりや何事。おのれも武士の娘ぢやないか。未練な奴。聞分けないと所存があるぞ。

柵　あのやうに、父樣の仰しやる事。マア、わしと一緒に、おぢやいなう。

〽親の詞に葛の葉は、心殘して入りにけり。

ト思ひ入れあつて、柵、葛の葉を引つ立て、物置へ入る。庄司、見送り

庄司　しつかりと側を離れまいぞ。さて／＼苦々しい奴ではある。ハヽヽヽ、ナニ、保名どの、ちよと御意得たい。

ト合ひ方。庄司、思ひ入れあつて

これは保名どの、成る程當惑の體、至極せり。我れも信田で別れし後、惡右衞門が讒言にて、重代の所領沒收せられ、吉見の里の片里に世を忍び住ひ。其うち貴殿の事を戀ひ慕ひ、煩らふ葛の葉、五年の年月、いろ／＼と看病。肝を焦すところに、ふと貴殿の在所聞くと等しく、忽ち病氣平癒し、夫婦が連れて來て見れば、思ひがけない二人の葛の葉。興も明日も覺め果てしが、退いて分別するに、離魂病と云ふ病あり。俗に云ふ影の病。それも一つの氣を離れず、時々形を顯はすと云へど、それでもなし。察するところ、これは正しく變化の所爲か、又は天狗の業なるべし。我が娘を引き合せ、誠を以て理をなさば、忽ち姿を顯はすべし。性根を忘ずる所でなし。保名どの、聟どの、心をつけられて、とくと糺して御覽なされい。

〽庄司心をつけらるれば。

保名　仰せまでも候はず。我れも加茂の保憲の敎へに隨ひ、易道の道に暗からず。何これしきの邪正を糺す事、一句一指の手段にあり、キッと印を見せ申さん。庄司どのには見苦しくも、矢張りあの物置に、密かにお忍び下されい。

庄司　成る程、菜これにあつては何かの邪魔。とくと油斷あらざるやう……構へて仕損じ召さるゝな。

〽危ぶむ心に物置の、戸を押し明けて忍ばるゝ。

ト庄司、こなしあつて物置へ入る。保名、思ひ入れあつて、九字を切り、いろ〳〵あるべし。トゞ咳拂ひして

〽保名事なき風情にて内に入り。

保名　今戻つたぞや〳〵。これはしたり、坊主めがあがき草臥れて、このふんぞり寐た形わいなう。風邪引かうぞや葛の葉。女房ども〳〵。童子が母は在さぬか。

〽前垂れ襷取りあへず、何時より今日のお歸りに遲かりし、お肌寒うはなかりしか。

ト機屋より、葛の葉、出て來り

葛の　今お歸りなさんしたか。

保名　これは奇妙ぢや。氣味の惡い。

葛の　何がいなア。

保名　サア、氣味の惡いと云うたは、それ〳〵、おれが留守の間に、なんぞ氣味の惡い事はなかつたかと云ふ事ぢや。

葛の　イエ〳〵、何も氣味の惡い事はなかつたが、何時も見馴れぬ木綿買ひが、たんと來てな、内をウロ〳〵見廻し、わしが顏見て、きよろついて去に居つたが、それが氣味の惡かつたばつかりぢやわいな。

保名　それは胡散な奴の。

葛の　左樣でござりまする。

保名　榊々、其方は榊とは云はぬか。

葛の　エヽ。

保名　其方は榊とは云はぬか。

葛の　わたしは葛の葉ぢやわいなア。そしてマア、今日は風立つのに、寒うはなかつたかえ。

保名　イヤ〳〵、寒うはなかつた。寒も暖か。住吉へ參詣して、歸りは例の天王寺石の舞臺で見晴らしたと云ふものはな、堪つたものではないわいの。

葛の　何云はしやんすやら。何時も變らぬ所を、其やうに云はしやんすのは、定めて面白い、余所々々の天王寺へ、お詣りなさんしたのでござんせう。

保名　又そんな事云やる。さらば一服いたさうか。

ト合ひ方になり、

ホヽ、火がないわい。

ト葛の葉、火を入れに行かうとするを、ヂッと捉へ

イヤ、どう見ても。
ト思ひ入れあつて
美しいわいの。

葛の　珍らしさうに、何をじやら〳〵。
ト立たうとするを、

保名　マア〳〵、えいわいの。
ト引きとめる。

葛の　エヽ。

保名　火がないなら。

葛の　取つて來うか。

保名　コレ、ちつと亭主の側へ寄つても、罰も中るまい。
トじやら〳〵など云ふ心にて

葛の　サア〳〵。

保名　忙しさうにまだ日が高い。爰が樂しみぢや……眺めて居ても減るものぢやなし。成る程、こんな女房、何やかやと世話燒かするは……思うて見れば、よう罰も中らぬもの。横から見ても縱から見ても、どうも美しい。
ト此うち、葛の葉を捕へ、いろ〳〵見る事あつて、後を擦り、尾はないと云ふ思ひ入れ。

葛の　何をするのぢやぞいなア。

保名　何をするとは、オヽ、火はなぜ消えた。コレ〳〵。
トいろ〳〵試す事あつて

葛の　コレイナア。
ト突き放し
ほんに面白さうに。
ト火入れを持つて暖簾口へ入る。保名、後を見送り、いろ〳〵あつて

保名　生へもなし。
ト葛の葉出て

葛の　サア、よういけて來たぞえ。

保名　それは御深切。
ト抱きつき、よろしくあつて

葛の　なんぢやいなア。

保名　今日は女房振りが、大ぶん上がつたに依つて。

葛の　何をじやら〳〵と。

保名　じやら〳〵どころか、ちよつと爰で。
トまた抱きつく。

葛の　エヽ、阿房らしい。嗜なまんせ。まだ日暮れぬに。

保名　晝中には、女房に抱きつかぬものか。

葛の　何を珍らしさうに。

保名　此方、霊は珍らしいぢや。

葛の　何云はしやんすやら。ア、、聞えた。お前、何處ぞで酒上がつたな。何處で呑まんした。さうか〳〵。

保名　イヤ、酒は呑まぬが、珍らしい人に逢うたわいの。

葛の　誰れにえ。

保名　其方に。

葛の　エ、。

保名　サア、其方によう似た女房振り、後ろ姿のほつそり、すうわり。なんでも好い器量ぢやと思うて、前へ廻つて見たところが。

ト顏をチツと見て思ひ入れ。

葛の　好い器量であつたかえ。

保名　鼻がなかつた。どうして其方のやうに好い女房が、この世界にあるものか。それを女房に持つたおれは、餘ッぽど仕合せ者ぢやわいの。

葛の　ハイ、お忝なうござります。其やうに人を嬉しがらすやうな事を云うて、そんな事は、内では面白うないものぢやに依つて、其やうな事は、外々へお出でなされて云うておやりなさんしたがようございますわいなア。

ト保名を抓る。

保名　アイタ、、、。

葛の　何を其やうに仰山さうに、痛い事があつて。

保名　氣味が惡い。

葛の　何が氣味が惡いぞいなア。

保名　それは、なんぢや。今日きつう風立つて、砂埃が頭へかゝつて、コレ、此やうになつたに依つて、それで氣味が惡いと云ふのぢやわいの。

葛の　そんなら、わたしが梳いて上げようかえ。

保名　イヤ〳〵、結ふには及ばぬ。ちよつと櫛の齒を入れてたも。

葛の　アイ〳〵。

保名　とてもの事に、その鏡を持つておぢや。

ト合ひ方になる。

葛の　アイ〳〵。

ト鏡立てを直す。いろ〳〵髮を梳く體を映し、いろいろ思ひ入れあつて

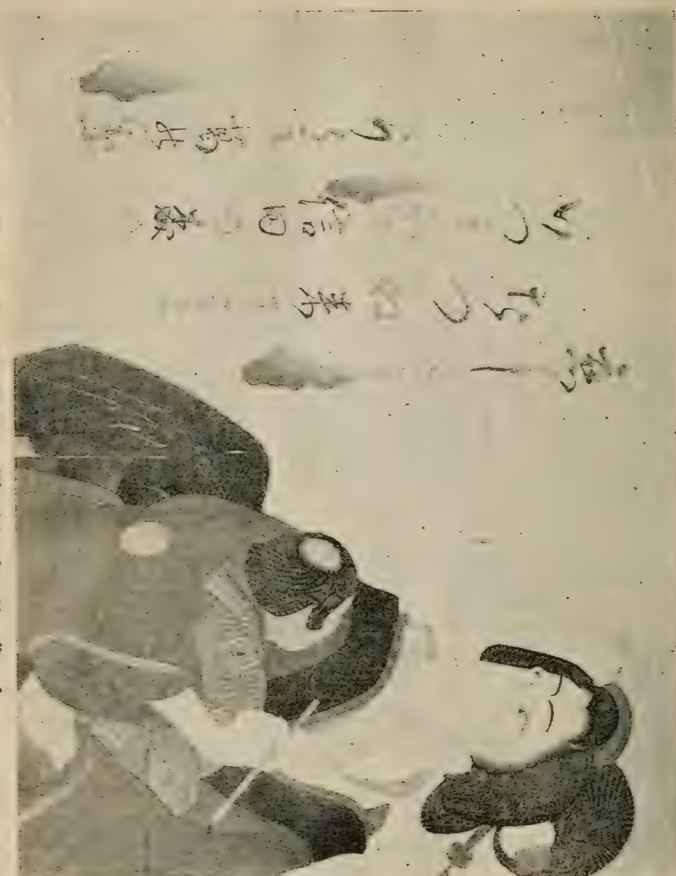
ほんに、マア、きつい砂埃ではあるぞ。どうで梳かねば、さつぱりとは落ちぬものぢや。ちよつとわたしに、結はせなされればよいけれど。

ト此うち、いろ〳〵鏡を見て、思はず鏡立てを倒す。

保名　これは奇妙ぢや。
葛の　オヽ、仰山な。愕りしたわいなア。
保名　イヤ、その愕りより、其方に話す事がある。必らず愕りしやんなや。
葛の　聞かぬ先から、愕りすなとは、なんぞ氣遣ひな事ぢやないかえ。
保名　イヤ、氣遣ひな事でもないが、聞いたら定めて愕りしやらう。云ひますまい〳〵。
葛の　なんぢやぞいなア。氣味の惡い。聞かせて下さんせ聞かせて下さんせ。
保名　そんなら云はうが、外の事でもない。今日天王寺から戻りがけ、思ひも知らず六時堂の前で、其方の親御、庄司どの御夫婦に逢うたわいの。
葛の　エヽ。
　トぎよつと思ひ入れ。
保名　なんと、肝が潰れたか。
葛の　そりや、ほんにかえ。
保名　これでも肝が潰れぬか。ハテ、面妖な。
葛の　何が面妖な事があるぞいなア。お二人さんに逢はしやんしたとは、申し、嬉しや〳〵。さうして、お二人さんは、どうなされましたえ。
保名　イヤ、お二人ともお變りなう、此方よりは日頃の不屆き、胸に詰まつて挨拶も仕兼ねたれば、彼方は一向恨みの氣もなく、在所を尋ね、娘に逢ふ爲、尋ねて來たれども、見る通り連れもあれば、この人々を外へ渡らせ、日暮れにはそれへ參らう。
葛の　そんなら眞實かえ。嬉しや〳〵。
保名　そんなら其方は嬉しいか。ハテ、面妖な。
葛の　何も面妖な事はござんせぬ。父さん、母さんに逢ふのが、嬉しうなうてどうせうぞいなア。日暮れと云うても間もない事。せめてお久し振りの事なれば、ちよつとおなまでもせうわいな。
保名　イヤ、喰べ物の用意は無用。洗足の湯を頼むと、なか〳〵心解けたる御挨拶。一つ二つ話しするうちも、かい摘んでも五年の話し。先づ何がなしに童子を出して、お目にかけるが馳走の第一番。其方も又、其やうな、しほたれた形をお目にかけずと、小袖でも着替へ、お目にかゝるが馳走の第二番。おれも今宵は久し振り、ゆつくりとお話し申さうてや。
葛の　それがようござんせう。わたしも、ざつと髮でも結

うわいなア。それはさうと、お前、ひもじうはないかえ。
保名　イヤ、ひもじい事はない。お二人がお出でなされて一緒に食べやうわいの。
葛の　そんなら、後に御一緒に。
保名　オヽ、それがよい。シタガ、おれもこの疲れでは、晩には眠からう。お二人のお出でまで、爰で一寐入りしようわいの。
葛の　オヽ、さうさんせ。シタガ、爰では風が當る。奥へ行て、とつくりと、日の暮れるまで寐やしやんせ。その間にわたしは、髮など結うて、おなまでも拵らへませう。モシ〳〵、コレイナア。もう寐やしやんしたか。コレ、風邪でも引くと悪いぞえ。奥へ行て、裾に物でも置いて寐やしやんせ。これはしたり、もう鼾ぢや。餘ッぽどな草臥れと見えるわいなア。申し。ドレ、奥へ行かうか。
ト誂らへの合ひ方になり、思ひ入れあつて、二三度立ち歸り、保名が側へ寄り添ひ、揺り起す事、枕をさせる事、いろ〳〵こなしあつて、奥へ入る。保名、後を見やつて、ゾッとする事あつて、思案のこなしにて
保名　兎や斯うするうち日も暮れた。
ト行燈へ火を灯す事あつて、暖簾の間より奥を見て

アレ〳〵、今何やらするは。オヽ、ヽ、ヽ、アレ、小袖を出したワ。ホヽ、髮を結ひかゝつたワ。……これは不思議。とりなり素振り、どつこに一つ云ひ分ない。そんならあれは眞の葛の葉で、もしや娘を連れて來た、庄司どの御夫婦が。
〽なんぞではあるまいかと、迷ふ心の奥の間に、忍びて。
ト送りのうち、保名、いろ〳〵あつて奥へ入る。
〽事を窺ひける、妻は衣服を改めて、しほ〳〵と奥より出で、臥したる童子を抱き上げ。
ト葛の葉出て、童子を抱き上げ、乳房を含め、見詰めて、チッと思ひ入れ。この時、行燈の灯を吹き消す。
〽乳房を含め抱き締めて、云はんとすれどせぐり來る、涙は聲に先立つて、暫し咽び入りけるが。
葛の　ア、恥かしや、淺ましや。年月包みし甲斐もなう、おのれと本性顯はして、妻子の縁もこれ限りに、別れねばならぬ品となる。父御に斯くと云ひたけれども、互ひに顔を見合せては、身の上語るも面伏せ。御身、寐耳に聞き覺へ、父御に斯くと傳へてたべ。我れは元人間ならず、六年以前信田にて、悪右衛門に狩り出され、死ぬる命を、保名どのに助けられ、再び花咲き亂菊の、千年近



九代目市川團十郎の葛の葉

き。

ト思ひ入れ。來序になり

ヘ狐ぞや。

剩さへ我れゆゑに、數ヶ所の疵を受け給ひ、生害せんとしたまひし、命の恩を報ぜんと、葛の葉姫の姿と變じ、疵を介抱、自害を止め、いたはり附き添ふ其うちに、結ぶ妹脊の愛着心。夫婦の語らひなせしより、夫の大事さ大切さ。愚痴なる畜生三界は、人間よりは百倍ぞや。殊におことを儲けしより。

ヘ右と左に夫と子と、抱いて寐る夜の睦言も、昨夜の床を限りぞと、知らで野干の通力も、いとし可愛に失ひける。

今別るゝとて、父御前の藥でもなく、元より名を假り姿をば、假りし葛の葉どの、恩はあれども恨みはなし。庄司どの御夫婦を、眞の祖父様祖母様と、葛の葉さまを眞實の、母と思うて親しまば、さのみ憎うも思ひますまい。惡あがきをフッツと止め、手習ひ學問精出して、流石は父の子程ある、器用な者と褒められよ。何をさせても埒明かぬ。

ヘ道理よ狐の子ぢやものと、人に笑はれ誹られて、母が名までも呼び出すな。

常々父御のお詞に、蟲けらの命を取る、ろくな者にはなるまいと、只假初めのお叱りにも、母が狐の本性を、受け繼いだか淺ましやと、胸に針釘刺さるゝ如く、成人の後までも、小鳥一つ蟲一つ、無益の殺生しやんなや。必らず必らず別るゝとも、母は其方の影身に添ひ、行く末長う守りますぞや／＼。

ト思ひ入れ。

さはさりながら、せめて保名さまへ名殘りの一筆。オヽ、さうぢや。

トこれより獨吟になり、葛の葉、愁ひの思ひ入れ。硯箱を出す。

めりやすヘ浮世なれ、今はなまなか夢とも消えて、結びし緣の解けかぬる、胸のしがらみせき來る思ひ、情は仇か添寐のきぬを、そつと其まゝ肌寒き。

ト淨瑠璃になり

ヘ目覺めし童子を抱き上げ。

トこれにて、葛の葉、童子を抱き上げ、口筆になる。

めりやすヘ袖の屏風にいとふ風も、後に心や引かされて、うつら／＼につい時移る、果てしないぞや女氣のヘ繰り

返し見る葛の葉衣。
ト獨吟のうち、上の障子へ、いろ／＼口筆あつて、トド童子が顔を見て
とは云ふものゝ、これが振り捨て、なんと古巣へ歸られう。最早別れか。悲しやなア。
〽離れ難なや此方寄れと、抱き上げ抱きつき、抱き締めて、思はずはつと泣く聲に、保名一間より走り出で。
ト保名、奥よりツカ／＼と出て來り
保名　仔細は聞いた。何ゆゑ童子を捨てやるべきぞ。
〽呼び入る聲に庄司夫婦、葛の葉もまろび出て、放ちはやらじと取りつけば、抱きし童子をはたと捨て、形は消えて失せにけり。
トこの文句のうち、葛の葉を保名、留める。立廻りにて葛の葉、消えると、物置より庄司、柵、葛の葉、三人ともに走り出る。途端の間よろしく
〽庄司目を瞬き。
庄司　ニヽ、さては夢ばかり斯くと知るならば、うか／＼と尋ね來ずとも、また外に仕やうもやうもあるべきに、無慘の次第を見る事や。
〽夫婦お悔めば葛の葉も、手持ち不沙汰に見えにける。

葛の　アヽ、さうぢや。何は兎もあれ角もあれ、自らが妻となり、生んでもらひしこの坊は、取りも直さずわたしが子。父様、母様、お前方の爲にも眞實の、孫ぢやと思うて下さんせ。コレ坊、今からこの母が、身に替へていとしがる程に、今までの母様のやうに、しなつこしう纏むぞや。
〽おゝ好い子やと抱き上げれば、乳を探して。
童子　イヤ／＼、この母様には乳がない。母様いなう。母様いなう。
〽膝を這ひ下り見廻して。
母様いなう／＼。
〽呼び叫べば、保名堪へ兼ね大聲上げ。
保名　例へ野干の身たりとも、物の哀れは知ればこそ、五年六年附き添うて、命の恩を報ずるおやないか。況んや子まで儲けし仲。狐を妻に持つたりとて、笑ふ人は笑ひもせよ。我れはちつとも恥かしからず、別るゝとも相對にて、互ひに合點のその上にて、失せもせよ消えもせよ。此まゝでは何時までも、放ちはやらじ、葛の葉、童子が母やい。
葛の　葛の葉さまいなう。

童子　母樣いなう。
庄司　葛の葉どの。
〽呼はり〳〵。
ト向うの障子、機屋の内を引き明け、奥の障子に一首の歌書いてあり。皆々、見て思ひ入れ。
保名　戀しくば、尋ね來て見よ和泉なる
庄司　信田の森の恨み葛の葉。
保名　さては一首の筐を殘し、つれなうも歸りしか。我れに名殘りは殘らずとも、童子は不便にないかいやい。
〽奥に馳け入り表に出で、狂氣の如く馳けめぐる、童子も父の後に附き、母樣何處へ行かしやつた。
童子　母樣いなう。
〽とかつぱと伏し、聲をばかりに足摺りし、身を悶え歎くにぞ、庄司夫婦葛の葉も、ともに哀れに取り亂し、前後不覺に歎かるゝ。
ト此うち又皆々、立つたり居たり尋ねるこなし。
〽庄司歎きを止めんと。
庄司　ヤア、不覺なり保名どの。狐ばかりが葛の葉で、我が娘は葛の葉ならぬや。殊に殘せし一首の歌。戀しくば尋ね來て見よと詠みたれば、信田へさへ行かば、出合ふ事疑ひなし。エヽ、未練な事を。
〽卑怯至極と諫むる所へ、今朝より立ちまふ木綿買ひ、一つになつてつつと入り。
ト向うより荏柄團八、凛々しき形にて、捕り手四人引き連れ出て來り
團八　ヤア、安倍の保名、葛の葉、信田の庄司、見附けた見附けた。斯く云ふは、石川惡右衞門が家來、荏柄の團八。主人の心をかけらるゝ、葛の葉を隱し置く、保名めは間男同然。打ち殺して姫を連れ來れと、この頃爰を徘徊なし、出ッくわしたは百年目。女房があつても首がなければ濟むまい。畏まつたと葛の葉を、渡せ〳〵、
〽渡せ〳〵と呼はつたり。
保名　ヤア、方々、驚ろくまい。葛の葉は童子を連れて、御夫婦を介抱し、裏口を出て、影を隱した〳〵、
ト庄司、柵、葛の葉、童子を連れ奥へ入る。
ヤア〳〵、惡右衞門が狼藉、荏柄の團八、愚者に向つて返答なし。葛の葉欲しくばこの保名を、首にして連れて行け。
團八　物は云はせず、合點か。
ト これより、皆々、内へ踏ん込み、立廻りよろしく

捕手　どつこい。
〽筐こそ今は仇なれ幸ひと、織りかけし布機の、まねきかけ板巻き竹よ、ちぎり稜筬よ、枠なんど、はずみを打つて投げかけ〳〵、ためらふところをまつかせと、親機えいとこぢ放し、科ある者は成敗の、磔刑と云ふ機物の、鹽梅見よと振り廻し、日頃に似合はぬ强勢も、狐の力添へぬらん。

ト此うち、立廻りにて、皆々向うへ入る。この立廻り機道具、いろ〳〵タテに使ふ事よろしく、奥より、庄司、柵、葛の葉、童子を抱いて出て來り

庄司　オヽ、保名どの。
柵　手柄〳〵。
葛の　何を云うても、わたしに乳がなうては、何時までもこの子が馴染まうやうはない。彼方にあつても要らぬ乳。ならう事ならあの乳を、どうぞわたしが、貰ひたいものでござんすわいなア。
〽貰うて欲しいと泣きければ。
庄司　オヽ、その歎きは道理〳〵。それまでも一度は、尋ね逢はねばならぬ義理。
柵　夜道を行くもたど〳〵し。
保名　明けなば夫婦。
葛の　童子を連れて。

ト保名、葛の葉、旅の用意して、保名、童子を脊負ひ、葛の葉、杖、笠を持ち、花道へかゝる。庄司、柵、見送る。

保名　童子が母やい。
童子　母様いなう。
葛の　葛の葉さまいなう。
〽和泉なる、信田の森へと。

トこの淨瑠璃にて、三人、代ろ〳〵名を呼びながら、向うへ入る。よろしく

幕

大切　信田の森の場

淨瑠璃「花三升楓盛」常磐津連中

役名――蘆屋道滿。奴、與勘平。同、野勘平。石川惡右衛門。安倍の童子。葛の葉姫。狐葛の葉。安倍保名。

本舞臺、三間の間、後へ淺黄幕、所々に稻村、此うち上下眺らへあり、舞臺花道へ掛けて薄尾花の土手板。上の草土手、淨瑠璃臺、爰に常磐津小文字太夫連中居並び、この見得よろしく、時の鐘、蟲の音にて幕明く。

ト道行名題口上觸れありて、頭取入ると、前彈きになり

〽爰に哀れを止めしは、安倍の童子が母上の、一人は後に止まれど、尋ねる主の片々の、一人は父の胤ならぬ、その憂き事を身に耻ぢて、戀しくば尋ね來いとの言の葉に、背き捨てたるを筐とは、それを知るべに葛の葉は、保名諸とも諸袖に、ほだしの胤の愛し子を、賺し誘ひ和泉なる、信田の森へと志し。

ト蟲の音、好き時分花道より保名、童子の手を引き出で來る。後より葛の葉、眺らへの形よろしく付き添ひ出で來り

〽振り返り見る弓手も馬手も關遠く、遠里小野や淺香潟、安倍野も後に難波津の、水の浦風烈しきに、風ばし引くな引かさじと、背に負ふてふ蟋蟀、きりはつたりてふ、賤が家の籬の昔、堺の町も出放れて、心細道分け迷ひ、後は幽かに夕づく日、人顏さへもちら／＼と、暮れぬ先より灯す火は、神の御燈か、いや白菊の、花に露散る秋の野か、あれこそ佐野よ灯す火の、入江々々に網引きの聲、風に誘はれ行く道の、梢まばらにうらがれて、只何となく淋しきに、尾花優しく招くにぞ、それを顧みの力草、茂る百草道草を、引く手に縋り愛らしく、指差す方に又ちら／＼と、物が知らすぞ哀れなり、思ひにや焦れて燃ゆる野邊の狐火小夜更けて、それかあらぬか篠木の、紛ふ方なく子ゆゑの闇に、母も憬れ灯す火を、走りつくづく見渡せば、影も姿も泣き焦れ行く大鳥の、羽翅重ねて雛鳥を、抱きかゝへて玉鉾の、よる方分ぬ旅なれど、急く心に道はかも、行く手の森を目當にて、しばし疲れを晴らしける。

ト此うち三人よろしくあつて舞臺へ來る。

〽誰れに思ひ誰れに問はまし岩葛の、千枝に分れて物思ふ、我れも思ひの木がくれて、保名夫婦は稚児を、樣々いたはり介抱し、あゝしんどやと葛の葉が、薄折りしく足休め。

保名　オヽ、習はぬ旅路、草臥れも尤も。向うがおことの生れ古郷。こちらに見ゆるがその昔、夫婦の契りを結び

し信田の社。フト馴れ染めしゆゑにこそ、互ひにかゝる憂目に遭ふも覺悟の前。兎角只世の中に、歎きのなきに喜びを、求むればこそ歎きとはなると詠みしも、今の身の上。

葛の　さうでござんすとも。味な縁から苦勞遊ばし、お前に添ひたい添ひたいと、わたしが輪廻の深きゆゑ、惡右衛門に支へられ、兩親までも思はぬ流浪。昔の花の住家へ、立寄るも人目恥かしく、どうか斯うかと案ぜしに、丁度夕暮れ、好い時分。何卒尋ね彼の母御に廻り逢ひ、この子の思ひも晴らしてやりたし、一つには又わたしも、云ひたい事は山々。

保名　成る程、片時も早く急がん。

〽親子夫婦手を引き合ひ、彼の隱れ家はいづくとも、知らず知らぬ亂れ咲、菊のうね〳〵そこよ爰よと押し分け掻き分け。童子が母やい。

葛の　童子が母御いなう。

〽呼べど叫へど答へさへ、事問ふ物は秋の風、野邊に悄るゝ葛の葉の、恨みの種や殘すらん。

保名　さてはフッと思ひ切り、最早逢ひも見もせぬか。エゝ、胴慾な。しばしなりとも形を顯はし、この世の思ひを晴らさせよ。

〽泣き口說けば、葛の葉も聲を上げ。

葛の　神通とやら得た身にて、これ程慕ふが聞えぬか。たつた一言、童子に詞を交して下され。この子は可愛うない事かいなう。

〽草場にどうと伏しまろべば、辨まへ知らぬ稚子も、共に泣くこそ哀れなり。

保名　アゝ、イヤ〳〵、假令へ如何程愛着の絆に引かれ焦るるとも、現在其方が居やつては、逢ひ見る事もと思ふらめ。コレ。

ト葛の葉に囁く。葛の葉呑み込み

葛の　アイ〳〵、心得ました。そんならわたしは、暫しが間、あの物蔭へ。さうぢや。

ト葛の葉よき所の稻村の蔭へ忍ぶ。保名、思ひ入れあつて

保名　斯くまで慕ふ心を察し、童子不便と思うてなら、如何なる姿もいとふまじ。しばしなりとも形を顯はし、見えてくれよ。童子が母。

童子　母樣いなう。

〽そよと吹く風身に浸みて、いと心細き折こそあれ、我

が子の絆に絡まれて、現はれ出でし童子が母、顔も姿も葛の葉に、又葛の葉の双面、二面の鏡に一人の顔、寫し見たるが如くなり。

ト此うち薄ドロ〳〵になり、上の稲村の影より葛の葉狐の二役にて出て來る。

〽保名見るより走り寄り。

保名　ヤレ懐かしや童子が母。いとし可愛の子を振り捨て、いづくの浦、いづくの里に住まれうぞ。如何なる怪しき形なりともいとふまじ。せめてこの子が智慧付くまで、育てゝくれよ。今日も今日とて生の母はなきとも知らず、戻り來りし葛の葉を、實の親と思うて、心よう遊べども、乳を探いて母さま〳〵と泣くが悲しさ。なんと身も世もあられうぞ。コレ、推量してくれいやい。

〽わつとばかりに伏し沈む、母はむせび絶え入りしが、やう〳〵に涙を押へ。

葛の　誠の形を顯して、お目にかゝるも恥かしく、以前の如く葛の葉さまの、姿にて申し譯。お二人ともに、聞いてたべ。

ト床の合ひ方になり

この母が野干の身で、さら〳〵夫の色香に迷はず、御恩を送る爲ばかり。年月を重ねしに去り難きは、因果の胤を身に宿し、古巣へも戻られず、我が子に連れて暮らすうち、思はずこの身の懺悔をば、云はねばならぬ義理となる。人に知られて一日も、人界の交り叶はず、さてこそ古郷へ歸りたり。猶この上ともにも保名さま、恨みを晴らしてこの子の行く末、葛の葉さま、偏へにお頼み申しますわいなう。

〽童子を膝に抱きかゝへ、乳房を含め脊を撫で、實にや誠にこの子程、果報拙なき者はなし。

ト谺の合ひ方。

あるが中にも畜生の、腹を借りしも前世の業。おとなしうなり末々は、宮仕へするとても、野干の子とてあなづられ、心苦しう思ふらめ。それも誰れゆゑ、この母が、人ならぬ身の悲しさゆゑ。

〽或ひは歎き恨み侘び、身悶えしてぞ伏し沈む、保名せき來る泪を止め。

ト谺の合ひ方。

保名　汝が詞尤もなれども、淫婦と變じ數多の人を誑らかさば、吒呢尼天の咎めもあるべし。これは正しく佛體に等しく、人間を助くるに、天の咎めもなどかあるらん。

サア〳〵、安倍野へ同道せん。

葛の　イヤ〳〵、それは思ひも依らぬ。色に溺れ我が子に迷ひ、この身を知られたその上に、一度人間に交はる時は、五萬五千の眷屬に疎まれ、剩さへ盡未來際、畜生界を出でやらぬ、その苦しみには替へがたし。名殘は盡きじ。さらばや。

〽いとほしのこの子やと、顏に當て身に添へて、泣き沈み〳〵。今は泣いても悔みても、返らぬ事と立ち上がるを。

保名　こは情なし。今しばし。

ト立ち上がる。

〽取りつくを振り拂ひ、縋りつくをもぎ放し

葛の　この姿ゆゑ止め給ふか。イデ〳〵愛着の、絆を切らん。

〽誠の形御覽ぜと、云ふかと思へば忽ちに、年經る白狐と身を變じ、我が子の身の上守らんと、見返り〳〵なつかしげに、草の茂みへ隱れける。

ト薄ドロにて葛の葉狐の哇へ面の形になり、保名止めるを振り拂ひ、上の方へ消える。

保名　ハア、。

ト思ひ入れ。この時、下の方より葛の葉の二役走り出て來り

葛の　心強き母御の別れ。その形をいとひはせじ。どうぞせめて今しばし。

〽しばし〳〵と云ふ甲斐も、嵐につるゝ鐘の響き草、茫々たる信田の原の、面影ばかりや殘るらん。折から爰に旅乘り物、石津の方より來りしが、若黨立ち寄り、小腰を屈め。

トこの文句のうち、陸尺二人、旅乘り物を擔ぎ、旅形の若黨、仲間附き添ひ出て來り、本舞臺へ來り、中間、保名を見て

若黨　保名さまでござりまするか。あなたのお行くへ尋ねん爲、主人蘆屋道滿、はる〴〵罷り下りましてござりまする。

〽聞くより夫婦目を見合せ。

保名　願ふところのお尋ね。それへ參つて對面せん。

〽女房に、差添渡せば、凛々しげに脇挾み、乘り物間近くずつと寄り。

葛の　姉樣の敵、覺えがあらう。サア、蘆屋どの、尋常に

保葛　勝負々々。

〽勝負々々と詰めかけたり。

侍ひ　ヤア、心得ぬ。こりや、何ゆゑの

皆々　狼藉なるぞ。

　トこの時、乘り物の内にて

道滿　ヤア〳〵、騷がしい。皆鎭まれ。

〽豐かに出づる蘆屋の道滿、切り髮に僧衣の姿、保名、見るより。

　トこの文句のうち、蘆屋道滿、法眼袴、朝見の形にて乘り物より出て、床几にかゝる。保名、見て

保名　ムウ、身に覺えある敵持ち、ゆつくりと夜が寐られず、樣を替へて助かる氣か。衣は着ても敵は敵。これなるは身が女房葛の葉。姉榊が相果てしは、加茂の家に傳はる秘書、汝が奪ひしゆゑならずや。陰陽與儀の望みを失ひ、保名が鬱憤晴れやらず、丸腰を相手は死人も同然。サア、元の武士に立ち歸り、尋常の太刀打ちせよ。

〽詰めかくれば、ちつとも騷がず。

道滿　ハヽヽヽ、お身達が恐ろしいとて、樣を替ゆる道滿ならず。據ろなき主命、父將監の忠死につき、斯くの如く薙髮せり。まつた榊の前が生害は、後室並びに岩倉がなすところ。彼の家の一卷、某が手に入りしとの、疑ひはさる事ながら、奪ひ取りしなんどとは、保名とも覺えぬ一言。某が心さにあらず、互ひに他事なき弟子兄弟不慮の難儀に世を狹め、この和泉路に漂泊と聞きつるばかり、仕官の身の心に任せず、年月を過せしが、この度櫻木の君の御賢慮に叶ひ奉り、大内小博士に任ぜられ、生國津の國の蘆屋の庄を賜はりて、彼の地へ赴く折に幸ひ、尋ね來りしその仔細は、先師加茂の保憲、一字を讓りし秘藏の弟子、保名の繼ぐべき家の重寶、我が方に置くは道ならず、返し與へん心底にて、これまで持參いたせし一卷。

〽乘り物の内より、恭々しく取り出し。

この書を考み、道を開き、再び歸洛いたされよ。この上にも我が心底、疑はしくば、兎も角も計らはれよ。

〽詞清しきその有樣、保名ははつと平伏し、暫し詞もなかりしが。

保名　浪人の心の僻み、情ある蘆屋どのに粗忽の雜言、今さら悔む甲斐もなき、色に迷ひし身の落度。大内の闕えと云ひ、主人小野の好古卿の御憤り、憚りあれば保名が出世の望みはなし。何卒倅を守り立て家名を繼がせ申したし。御芳志の賜物は、童子へ讓り下されい。

〽先非を悔ゆる夫婦が願ひ。
道満　ハテ、親子の間は、いづれとも、其方が心任せ。童子爰へ。
〽と招かれて、葛の葉嬉しく抱き寄せ。
葛の　アレ、余所の伯父様が、結構な巻き物を其方に遣らうと仰しやる程に、行儀にそこへ畏まりや。……オヽ、さうぢや／＼。お辭儀申しやいの。
道満　これは／＼、おとなしい。成人して學問に精出し、親の名を上げられよ。イザ、
ト一巻差出す。童子、差寄り、これを受取り押し戴き
〽渡せばいたいけ、兩手に受け。
童子　父様、めんだし仕りまする。
〽戴き／＼、巻の表紙を打ち守り。
コレ、余所の小父様、この書付けは金烏玉兎、金烏と云ふはお日様の中にある、三足の金の烏。玉兎とはお月様の中で、餅を搗く玉の兎。月日を記せしこの巻き物。天地の間にあらゆる事、これを見れば知れるかや。
〽舌も廻らぬ五つ子の、ぎよつとした事云ひ出すにぞ、夫婦も驚ろき道満も、餘りの事に怖毛立ち、顔を眺めて居たりしが。

道満　驚ろき入つたる童子の發明。尤も世上の子供にも、四つ五つで大字を書き、繪馬などに上げるもあり、これは格別、月日の異名の理を辨まへ、天地の事を記せし書とは、流石に保名の敎へ方。生ひ先が思はれて、夫婦にもさぞ御滿悦。
保名　イヤ、御中言にござれども、父敎へざれば子愚なりと、本文は存じながら、日蔭者の艱苦の渡世。何を敎ゆる事もならず、やりばなしに育てし倅。只今の一言、親ながら不思議晴れず。彼を生みし母親は、當所に年經る白狐なるが、先年助けし恩を思ひ、葛の葉が姿と化し、我れを育くむこの年月。狐と知らず相馴れて、出生したるこの童子、白狐の才を受けつるやらん。恥かしき身の懺悔。蘆屋どの、御推量下されい。
〽聞くより道満手を打つて。
道満　さてこそ尋常ならぬ人相、斯様の例しは唐土にも、美仙娘と云ふ狐、南京城外の民、黄琢が孝心を感じ、妻と化して一子を生む。その名は黄繼。聰明叡智隠れなく、胡に仕へて高官たり。この童子も先づその如く、一を聞いて十を知る秀才。いかで黄繼には劣るまじ。白狐通を備へし才智、試しに物問はん……コレ童子、この日

の本の始まりは覺えずや。
童子　ハテ、知れた事問はしやる。天神七代地神五代。
道滿　人皇の始まりは。
童子　神武天皇。
道滿　オヽ、詳に聞えたり。さて佛法は。
童子　大聖世尊釋迦牟尼佛、あまねく日本に弘まりしは、
　忝なくも聖徳太子。
道滿　ムウ。儒道は如何に。
童子　大聖人孔子なり。
道滿　三十一字の言の葉は。
童子　八雲たつ出雲の御社、素盞嗚の御神、八重垣つくる
詠歌の始め。
〽詩はから歌とこれを讀み、樂の章を元として、舜のつくり始め給ふと、平仄合せし受け答へ、管絃樂器もそれぞはに、分けて尋ねる琴の緒の、數を調べて伏犧の作、琴とは三尺六寸、和琴の始めは
弓六張。
〽引くや巫女の神樂唄、笛は龍の吟ずる調子。
こちらが持ち遊び。
〽ぴい〳〵鳴る一文笛や雀の笛、鳳凰の鳥の形、鵜殿の蘆は篳篥の、舌鼓打つ波の聲、琵琶の形は近江の湖、一夜のうちに駿河の富士の山、孝靈五年に始まるとは、今辻辻で女夫の讀賣り、年代記に書いてある、ちんぷん漢字の始めは蒼頡、いろはにほへとは弘法大師、墨は韓穀、筆は蒙恬、作りしいはれ有馬筆、人形がひよつこり、口から出次第問ひ次第、雛の祭りは嫁入りの手習ひ、兜は武藝稽古の始めなり。
ト此うち始終、後ろ口の稻村の蔭より、葛の葉狐の吹替へ顯はれ出て、影身に附き添ひ思ひ入れ。
道滿　天か地かの穴一は。
童子　天下法度の賭博の始まり。
〽紙鳶は蒼生の始め終りにけしとみなく、神道王法一々に、問ふに隨ひ云ひ分ける、童子が口を假初めに、腹をかしたる母狐、側にありとは白菊の、花のまに〳〵見えつ隱れつ、消えて形はなかりけり。
ト葛の葉狐の吹替へ消える。道滿、思ひ入れあつて
道滿　ハヽア、實にも疑ひなき、狐の守護する稀代の童子。ほき内傳の書を明らめ、保名の虚名を晴らされよ。その儀を祝して道滿が、身不肖ながら烏帽子親。晴れ明らむるの字を以て、晴明と名乘られよ。

〽扇を開き、煽ぎ立てられ、夫婦が喜び、元より先祖は安倍の仲麿、名字を繼いで安倍野の出生、童子を安倍の晴明とは、この時より名づけたり、道滿重ねて。

いづれもに對面し、日頃の願ひ達する上は、早歸國と存ずれば、次手ながら信田の社へ參詣なさん。これより道は如何程ござる。

保名　イヤ、僅か半道あまり。保名案内仕らん。

道滿　月の夜すがら道すがら、話しも且は慰みがてら。乘り物止めて、イザ同道。

保名　葛の葉は親達の、尋ね見えんも計られず。爰にて暫らく待つてゐやれ。左樣ならば道滿どの。

道滿　保名どの。

保名　イザ、御同道。

〽爰にて待てとゆふ月夜、急がぬ蘆屋打連れて、信田の。

ト淨瑠璃の送りになり、道滿、保名、下座へ入る。葛の葉、童子殘る。

〽森へと別れ行く、時もこそあれ惡右衛門、葛の葉を奪ひ取らんと、手の者引き具し追ひかけ來り。

ト此うち葛の葉、思ひ入れあつて、童子を連れ、乘り物の内へ入り、戸を閉す。向うより惡右衛門先に、家來大勢附き添ひ出て來り、直ぐに本舞臺へ來り

惡右　コリヤ〳〵者ども。足弱を同道すれば、遠くは行かじ。保名めは逃ぐるとも、鼻がお敵の葛の葉を手に入れよ。必らずぬかるな。

皆々　心得ました。

〽きよろつく眼に乘り物見つけ。

惡右　ヤア、物臭いはこの乘り物。ソレ。

〽物臭しと立ちかゝり、戸を明ければ葛の葉親子、はつと驚ろき逃げ出づる、どつこいさせぬと捻ぢ込み押し入れ。

さてこそ〳〵。おのれを逃がしてなるものか。

ト葛の葉、童子、乘り物より出ようとするを、戸を引つ立て

保名を生捕る好き人質。者ども、急げ。

皆々　ハツ。

〽急げ〳〵と乘り物舁かせ、引返す向うより。

ト皆々、乘り物を舁き上げ、惡右衛門、附いて向うへかゝる。

野勘　待てえゝ。

ト跳らへの鳴り物になり、野勘平、出て來り、花道にて

コリヤ待て〳〵、やらぬ。奴がやらない、乘り物待て。與勘平。

コリヤ〳〵、よい〳〵〳〵、よい所へ、丁度參つて與勘平。

ト本舞臺へ駕籠先を持ち、押し戻し、しやんととまり見得。

野勘　野平が手並を忘れたか。性根もなき惡右衞門。サア乘り物置いて突ッ走れ。命助けてこますのが、其方の爲めにも與勘平。但し首に替へる氣で

〽ごわりますかと睨めつける。

惡右　ヤア、推參なり蕃椒め。うぬが命は天非守り。奴豆腐に切り碎け。

〽主從投き連れ打つてかゝるを、かい潜り〳〵、切るより早い手摑み料理、取つては投げ〳〵、さつてもあんばい野勘平、逃げるをやらじと追うて行く。

ト野勘平、皆々を相手に立廻りあつて、トゞ皆々を東の揚げ幕へ追ひ込む。

〽道引き違へ又爰に、京より歸る與勘平、刀の鞘に狀箱結びつけ、ひよこ〳〵來るを葛の葉喜び。

ト花道より與勘平、刀の柄に旅狀箱を附け出て來り、舞臺へ來る。葛の葉見て

葛の　オヽ、手柄しやつた、出かしやつた。惡右衞門は逃げ居つたか。大勢と只一人。其方に怪我はなかつたかや。

與勘　ヤア、こりや何仰しやる。奴めは旦那の御用。一昨日の朝京都へ上り、左近太郎さまにお目にかゝり、お返事はこの狀箱。安倍野まで戻つて見れば、思ひがけない庄司さま御夫婦、お前のお噂。彼の樣子承り、直さま參つたはたつた今。手柄の手の字、ぴやくらい覺えごわりませぬ。

葛の　又あの人の卑下を云やる。惡右衞門が大勢、追ひ拂ひやつた氣味のよさ。この葛の葉が、よう見て居たわいの。

與勘　イヤ、なんぼう見てござらうが、覺えない與勘平。實にも晴れにも俺一人、葛の葉さまなら二人もある筈。但しお前が彼れではないか。滅多に側へ寄らしやりますな。

ト眉へ唾を附ける思ひ入れ。

葛の　エヽ、何云やるぞいの。其方こそ、どき〳〵と、紛

らはしい與勘平。
與勘　イヤ、紛らはしいはお前の事。
葛の　イヤ、わが身が。
〽爭ふ後へむら／＼と、取つて返す惡右衞門、あれ逃がすなと下知をなす。
ト東の口より惡右衞門、捕り手皆々、取つて返し舞臺へ來り
惡右　ソリヤ。
皆々　やらぬワ。
〽與勘平打ち笑ひ。
トばら／＼と取つて返し、取卷く。與勘平、葛の葉、童子を圍ひ、
與勘　ヤア、ようこそ／＼、石川どの。手柄の覺えなかつたに、さしに來た心中者め。とてもさして下んすなら、前髮がよからうもの。すりこぼつた生男振り。ア、、よいワ、儘よ。高野の六十、那智八十とつてくれん。
〽拔き放し、切つてかゝればさしもの大勢、持つ足もなく逃げて行く。
ト此うち惡右衞門、ソツと下座へ逃げて入る。與勘平、捕り手、皆々を追ひかけ、花道へ入る。

〽葛の葉は童子を抱き。
ト葛の葉後を見送り
葛の　コレ／＼危ない。長追ひしやんな。コレ、戻つてたもいなう。
〽戻りや／＼と身をあせる、右手の藪より惡右衞門。
ト下座より惡右衞門、窺ひ出て
惡兵　どつこい。葛の葉、この間に身共が。
ト葛の葉、逃げるを、惡右衞門、引ッ捉へる。立廻り。
〽さアしてやつたとひん抱へ、宙に引つ提げ駈り行く、尾花萱原亂菊の、茂味にあり／＼與勘平。
ト野勘平、以前の形にて、ツカ／＼と出て來り、これを支へ立廻り。
〽こりやさせぬと投げ退ければ、ひるまず拔いて打ちかかるを、まつかせと早速の早業、切り立て／＼追ひまくる。
ト野勘平、惡右衞門を追ひかけ、東の揚げ幕へ入る。葛の葉思ひ入れあつて、童子を連れ又、乘り物へ入り、戸を閉す。
〽親子は前後敵の中、遁がれん方なく乘り物の、戸を引

き立てゝ入る所へ、二人の奴は敵を拂ひ、東西より立ち歸り、爰は危ふし〳〵と、乘り物片手に差上げしは、肩も揃ひの六尺ゆたか、手柄も對の大肌脱ぎ、一息吐きしは阿吽の仁王、元服したる如くなり、童子は物見に顏差し出し。

ト此うち花道より、與勘平、東の口より野勘平一散に戻り來り、直ぐに舞臺へ來り、左右より乘り物へ手をかけ、一度に差上げ、キッとなる。この時、乘り物の窓より童子、顏を出し

童子　母様、あれを見さつしやれ。おれが兵衛が二人になつた〳〵。

〽奴が變じて與勘平と、手を打ち叩けば。

ト野勘平、與勘平顏見合せ

與勘　實に〳〵、さうだ〳〵。和子の詞で奴の詮議。コリヤ、そこな奴。それ〳〵、乘り物下ろして、そこへ出居らう。

野勘　なにサ〳〵、詮議とは與勘平。

ト乘り物を下ろし

與勘　先づうぬが五體も、サア、持ち出せ。

與勘　オヽ、サ、出るワ〳〵。サア、出たワ。

野勘　おれも出るワ〳〵。サア、出たワ。

〽奴と奴が顏見合せ。

與勘　をれが、われか。

野勘　われが、おれか。

両人　鼻の穴の不掃除まで、微塵も變らぬ體なしだいもん、でつかり据ゑた三里の灸、摺りむけたまで、違はぬ〳〵。

〽つく年奴の同作ぢやと、互ひに呆れしばかりなり、葛の葉立ち出で。

ト此うち葛の葉、乘り物より出て、與勘平に向ひ

葛の　この詮議は仕様がある。コレ、こちらの與勘平。其方は幾つで奉公して、何處の生れぢや。それ聞きませう。

與勘　この鬚めは丹波の生れ。父打栗が折檻強く、十一でお家へ參り、足手がいさまに精出しても、高が下郎の精いつぱい。二合半のもつそう頭、すりこぼつたは十四の春。一兩二歩の切り米に、違ひないないお前様も、お聞きなされてごわりませうがな。

葛の　成る程、其方が云やる通り、違ひはないわいなう。

與勘　サア、この奴が身分は濟んだ。其奴は又、何處から出た。

野勘　何處から出たとは、天から降らず、地からも湧かず、木の股からは猶出られず、お定まりの穴から出た。

與勘　なんぢや、穴から出た。ハレ、よう出たなア……して、切り米はなんぼ取りやる。

野勘　身が切り米は十二文、ひんねぢ紙の燈明代、本社拜殿玄關前、賽錢箱の皮覆ひ、金紋大總隱れあらない受領神に、ぶッ仕へる鳥居の馬場先。かゝみをしつかと踏んづけた。

〽二合半の小豆飯、色こそ變れ、品こそ變れ、そのお子生んだ白狐女郎は、おらが仲間の寄り親どのだ、頼むに引かれず、ぬつと出た。

與勘　ハレ、よく出たなア。

野勘　奴が出生穴かしこ。

〽人に語るな女郎花、桔梗苅萱割木香。身は亂菊に遊べども、話しの尾花はいつかな出さぬ。惡右衞門主從は、この野勘平に打ち任せ、親子の衆をお供して、連れて退いたが與勘平。

〽心得たるかと云ひければ。

與勘　さてもさつぱり申したり。仲間の中の尻持ちとは、頼もしい野勘平の、指圖に任せお供せうが、惡右衞門の若鼠と、あなづつて罠にかゝるな。

野勘　合點。合點。

〽童子を脊に生ひ茂る、葛の葉隱れ草隱れ、忍びて。

ト送りにて、葛の葉先に與勘平、童子を背負ひ、下座へ入る。野勘平殘る。

〽事を窺ひ居る、石川が手足と頼む藤次藤内、市八、源太、腕に覺えの早繩十手、狐と知らぬ捕り手の不覺、驅し寄つてはつしと打ち、ひらりと飛んで乘り物の、上にかる〳〵ちよこ〳〵足、仕損じたりと押つ取り卷き、四人が四隅に手をかけて、ぐつと上ぐれば、につこと笑ひ。

ト此うち向うより、皆々手甲半纏、股引胸當、鉢卷、捕り手の形にて、バラ〳〵と出て來り、野勘平に打つてかゝる。野勘平、立廻り、ひらりと乘り物の上へ飛び上がる。皆々寄つてこの乘り物を、野勘平の乘つたまゝ、差し上げ、キッとなる。

野勘　祭り過ぎてのお御輿、輦輿。てうさや、ようさ。アレ〳〵、信田の森の神いさめ。爰に聞えて面白や。

ト是より誂らへの鳴り物になり、野勘平、皆々を相手に立廻りよろしく

〽身は稲妻の通力自在、はた〳〵はつしと蹴倒す拍子太鼓の拍子面白や、小唄節にて歸りやれ、我が古塚へ戻れりやれ、我が古塚へ歸りやれ、返せ〳〵と茅花の穂先、亂るゝ芒、秋の野の、花を散らして爭ひけり、狐の所爲に魂ひ奪はれ、五體崩抜けてよろぼふ奴原、引き寄せ引き寄せ捻ぢつけ踏みつけ、命がはりの早剃刀、新刀のおこぞり剃けと、耳鼻かけてごそ〳〵〳〵、ずんぼろ坊主にすりこぼち、弱腰ぽん〳〵續け踏み、四人は命からがらに、頭抱へて逃げ走れば、こん〳〵くわいけい喜びの、泣く音も野路の夜嵐に、立ち紛れてぞ失せにける。

ト此うち皆々化かされのおかし味、いろ〳〵よろしくあつて、トヾ皆々蹴り倒され、向うへ逃げて入る。野勘平皆々を追ひ散らし見得になる。與勘平走り出て來り

與勘　オヽ、手柄々々。委細の樣子を保名さまへ申し上げたれば、きつい喜び。併し、身共が居れば氣遣ひない。この場を早く。

野勘　オヽサ今の奴原追ひ散らせば、何も用なきこの奴。

與勘　又の出會。

野勘　その時〳〵。

兩人　さらば。

ト此の見得よろしく、誂らへの鳴り物になる。

野勘　これより二番目始まり。左やう。

ト打込み。よろしく

幕

蘆屋道滿大内鑑　（終り）

苅萱桑門筑紫轢
（かるかやだうしんつくしのいへづと）

解説

享保二年八月、大坂豐竹座初演、作者は並木宗輔。加藤左衛門重氏と石童丸の傳説を扱つたもので、高野山の場が有名になり、義太夫から他の謠曲にまで移つた位であるが實は原作でもこれは五段目で、曲として重大な場面ではない。矢張り宮守酒の場が三の切だけに中心でもあり、また異色があつて頗る面白い。父の頑固から處女を守り通して來た娘が罠にかけられて操を破り、それが重大な結果を招致したので自害する、しかも色魔のやうな相手の男を憎まないといふ作意が、千遍一律な院本物の中にあつては殊に目立つてゐる。一徹な新洞左衛門も、その娘夕秀も利己主義な監物太郎夫妻も、皆よく書けて居り、就中桑原女之助の、女好きな意志の弱い性格なぞは、ちよつと近代的で珍らしい。この作では、宮守酒の一幕に止めをさす。一時は上演もむづかしかつたが、近頃は僅かに改訂を施して許可され、折々脚光を浴びてゐる。それから見れば、高野山の場は親子別れの平凡さで、しかもこれは「伊呂波物語」だの「戀塚物語」だの「念佛往生記」だのといふ古瑠璃から趣向を取つたものであるし、同じ題材が說經節あたりにも見えてゐるのである。

今の宗十郎の祖父に當る五代目澤村宗十郎が、まだ源之助時代にこの狂言を初めて、江戸へ持つて來て非常に當てたので、以來澤村家の藝とされてゐる。本脚本はその時のもので、天保元年三月、木挽町の河原崎座上演である。河原崎座は荒廢した小屋であつたのを、この當りで修繕費が浮んだので「木挽町まづ苅萱で屋根を葺き」と云はれたのは有名な話である。その時の役割は左の通り。

加藤左衛門繁氏後に苅萱道心。多々羅新洞左衛門。玉屋與次(澤村源之助)大内之介義弘、大江刑部左衛門。宗悅坊(成田屋宗兵衛)桑原女之助　市川市十郎)駒形一角(澤村雄次郎)黑塚藏人。義縁坊(桐島儀右衛門)監物太郎。安心坊(嵐七五郎)義弘奥方榎木(岩井七之助)監物妻橘立(坂東佳朝)御臺牧の方(中村琴糸)千鳥の前(嵐龜之丞)新洞娘夕秀、與次女房おむら(岩井紫若)石童丸(市川團子)

苅萱桑門筑紫轢

序幕

高雄山洞窟の場
狐川渡し場の場

役名――大内之介義弘。黒塚藏人。腰元、小柳。同、桔梗。同、紅梅。同、早蕨。大佛新藏。刑部左衞門。外山左内。横口戸平。駒形一角。玉屋與次。監物太郎信俊。千鳥の前。加藤左衞門重氏。

本舞臺、三間の間、向う山幕、正面櫻の立ち木、日覆より吊り枝。上の方に藤の搦みし松の大樹、すべて高尾山の體、山颪しにて幕明ける。

ト鳴り物入り花やかなる出の唄になり、花道より絹羽織の侍ひ、油單つきの挾み箱、打ち物を擔ぎ出る。後より鋲打ちの乘り物を對の陸尺かつぎ出る。後より桔梗、紅梅、早蕨、小柳、いづれも腰元にて、中間、侍ひ附き添ひ出で來り、直ぐに舞臺へ來て

小柳　なんと皆さん、見やしやんせ、今を盛りの御山の櫻、わたしらばかり眺めうより、御乘り物を暫らく立てて

桔梗　ほんに、それ／＼。櫻の馬場のこの花見。

紅梅　祇園も及ばぬ風景、櫻の下でのお氣晴らし。

早蕨　ちと御覽遊ばしませ。

ト床の淨瑠璃になり

〽今日ぞ雲井の眉とけて、立ち出で給ふ千鳥の前、花を限どる御姿、いま吹き返す戀風も、憂きとや人は羨やまじ。

ト乘り物の戸を開ける。中より千鳥の前、裲襠衣裳にて眞中へ出る。

小柳　あれ見やしやんせ皆さん、小面の憎いあの松に、取りついてゐる藤わいなア。

桔梗　ソレイナウ、千鳥さまも此やうに、重氏さまの手を取つて、お居でなさるであらうわいなう。

紅梅　又あんな器量の好い御殿を、お持ちなさるといふは、御果報にあやかりものぢやないかいなう。

早蕨　それはさうと、思ひ思うて嫁入り遊ばす千鳥さま、今までは御所住居、やもめ烏の飛びたつやうに思しめし、

少しも早うお屋敷へござる筈。それにけうとい廻りして
觀音參りは心得ぬわいなう。

小柳　ソレイナウ、こりや大方、思はせぶりのおもたせであらうわいなう。

千鳥　〽尋ぬれば打笑み給ひ、

様子知らねば、さう思ふも理わり。云ひ出すも恥かしい事ながら、重氏さまに惚れたのは、今更の事ならず、疾から惚れてゐるわいの。お國には石童君とて、若君まである御臺様、歴としてござるとは知りながら、思ひ染めては忘られず、焚きつけてゐる衛士の篝火、姿やくろむ濡衣、ツイ門院さまに見つけられ、ハツと心に思ひの外、お氣の通つた粋な御詫。これといふも自らが、年月念ずる心の誠、偏へに觀音様の御利生と思ふから、道寄りしての御禮參りぢやわいなう。

〽おゝ恥かしとばかりにて、御乘り物に召し給ふ。

小柳　それなれば御尤も、いとゞ大悲のお力で、いずむずのないやうに、晩からは寐びえの段々よい戀枕、うんうん雲雷くうせいでん、雷に臍取られぬうち、行かうぢやあるまいか。

皆々　それがよからうわいな。

〽行きかゝりたる向うより、惡者づくりの深編笠、供先押し割り、のつさ／＼、のさばりながら立寄つて。

ト山おろしになり、下座より黒塚藏人、深編笠浪人にて出て來り

藏人　ア、イヤ、暫らく、御乘り物へ少と御訴訟のござる者。先づお待ち下さりませ。

侍ひ　ヤア、願ひ訴訟があるならば、記錄所へ行かぬか。うろたへた素浪人、下がり居らう。

藏人　うぬらの知つた事ぢやないワ。

ト云ひながら笠を取る。千鳥の前見て立たうとするをとめて、

コリヤ妹、見ぬ顔するは手が惡い。兄黒塚の鬼藏人、見忘れはせまいがな。最前から様子を聞けば、其方は今日重氏どのへ嫁入りをするとの事、それならば無心がある。某を屋敷へ連れ行き、私しが兄でござる、お取立てを願ひますと、たつた一言口添へたらば、義理にも重氏どの世話せにやならぬ。さすれば兄が身の上にありつくといふもの。又それも出來ぬなら、思案があるわえ。

〽妹に向ひ居合腰、刀ひねくり嚇せしは、大人氣なくも面憎し、當惑ながら千鳥の前。

千鳥　珍らしや藏人どの、まだ息災でこの世にござるか。エ、、お前はなア。云ふに及ばぬ事ながら、父上黑塚群領さまは、代々續く禁裏の博士、君の覺えもめでたき家柄、男の子供はお前一人、跡目を相續する身を以て、十年以前、淸涼殿のお能の時、酒興の上人を殺め、直ぐにそれよりお前は駈落ち。そのお咎めにて父上は、浪人したまひ貧しき世渡り。倅ゆゑに家を潰し、先祖へ對し云ひ譯なし、必らず何處で逢ふとても、兄と思はゞ共に勘當と御遺言。貧家の死をばなされしぞや。それに今さら妹よ千鳥よとは、どの顏下げて對面ぞや。

〽恥ぢしめられてさしもの惡者、差俯向いて詞無く、砂にのの字を書きゐたり、千鳥の前は淚を押へ。

ア、、恨むまい返らぬ事。皆の衆の手前も思はず、よしなき昔の長話し、日もたけて、さぞや重氏さまもお待ちかね。サア、腰元ども。

ト行きかゝるを又とめて

藏人　イヤ妹、さうは拔けさせぬ、いづくまでも。

〽立ちかゝるを家來ども。

侍ひ　ヤア、樣子を聞けば大泥坊、兄めでも大事ない。この場をキリ／＼退き居らう。

藏人　さうはやらぬ。

ト駕籠の側へ行かうとする。侍ひ皆々突きのける。此うち千鳥の前は駕籠へ入る。藏人、側へ行きかゝる。駕籠の戶にて脇腹を當て、ウンとなる。千鳥の前見て思ひ入れ。

千鳥　乘り物やりや。

皆々　ハ、ア。

ト山おろし、行列三重になり、この一件殘らず下座へ入る。藏人、心づき起き上がり

藏人　罰當りの妹め、この分で濟まさうか。歸りを待つて、ソレ。

〽駈け出す後の方。

義弘　暫し／＼。

〽暫し／＼と止むる形相、香の衣を身にまとひ、亂髮逆に生ひしげり、一丈餘りの桂の杖、高足駄踏みならし、悠々として立ち出づる、さしもの藏人肝を消し、暫し詞もなかりけり。

ト此うち谺、山おろしになり、下座より大内之介義弘、香染めの衣、露をとり、荒繩にて腹を卷き、珠數を持ち、異形の杖を突き出て來る。藏人見てこなし。義弘

思ひ入れあつて

義弘　ホヽ、目馴れぬ姿不締は尤も。我れこの程より大願の仔細あつて、當山に分け入り身を凝らせど、胎金兩部の峰も窺はず、赤木の珠數を押しもんでは、四海を胸にたゝむ妙術。汝、妹が緣を頼みに、重氏に仕へんとは廻り遠き分別。某が幕下に附けば、高祿を得せしめ、先途を見屆け取らすべし。返答如何に。

〽さも横柄なる詞つき、何がなかきつく猿智慧の、押直つて頭を下げ。

藏人　何がさて、落ちつく島もなき某、如何やうともお目がねに、あづかりたう存じまする。

義弘　ホヽ、ホ、頼もしゝ〳〵。いで〳〵汝が高祿出世の判じ物、これを見よ。

〽歩み寄り、松に搦みし藤かづら、若葉は爰ぞと杖取りのべ、てう〳〵〳〵と二枝三枝、なぎ落して。

ト此うち義弘、上手の松に搦みし藤を杖にて打ち落し

これ見よや。加藤は元來藤原氏、その藤原をまツこの如く切り放す、この心をば早く察せよ。

藏人　ムウ。近年の謎、したり〳〵。その藤原の藤の枝を切り給ふは、この藏人に重氏が首。

義弘　コリヤ、聲高し、密かに〳〵。すりや、判じたる心底は。

藏人　成る程、討つ氣ではござれども、未だ君の御名をも明かさねば、ハッと得こそは申すまじ。先づ御姓名をお聞かせ下さるべし。

義弘　オヽ、斯く胸中を見せし上は、何をか包まん。わと
某は當山に住む者ならず、九州に隱れなき、大内之介義弘といふ者。そも〳〵この山に艱苦する事、我れ多年にして天下を望む。日夜朝暮大玄祥神の祝詞を唱へ、又は諸國の安否を窺ひ、國家を握る企てなせども、合點のゆかぬは重氏一人。助け置いては大望の妨げ、それゆゑにこそ人知れず。

藏人　首討ち取らばその時は。

義弘　汝を取り立て國取り大名。

藏人　立身出世は近きにあり。

義弘　大望成就は瞬くうち。

兩人　アラ〳〵嬉しや、喜ばしやなア。

ト この時揚げ幕にて轡の音する。兩人キッとなる。

義弘　ヤア、心得ぬ人馬の音、見咎められては一大事、我れは岩窟に身を隱さん。汝も忍べ。

藏人　ハッ。
〽云ひ含めて引き別れ、茂りの内へ入りにける。
ト兩人思ひ入れあつて、山おろしになり、下座へ入る
〽夕月に背きて向ふ高尾山、勇みの鈴も花やかに、馬上勇々しく乘つたるは、監物太郎信俊、身は腹巻に小手臑當、暫時に駈ける沛艾馬、鞍に引添ふ譜代の郎黨、大佛新藏、家來引具し駈け來り。
ト此うち一セイになり、監物太郎、着込み凛々しく馬に乘り出る。後より大佛新藏、同じく凛々しき形にて手勢付き添ひ出て、直ぐに舞臺へ來る。よき時分揚げ幕にて
刑部　オ、イ〳〵。
〽と聲をかけ、はるか下がつて刑部左衞門、頭に星霜ふり積れど、身體は忠義の韋駄天走り、徒歩立ちになりて駈け來り。
ト山おろしになり、刑部左衞門、走り出て來り
ヤア、曲もなや監物太郎、朝廷にても爭ひし今日の討手。是非某が成り代る。其方は密かに歸つてくれ。コレ、賴む賴む。
監物　ヤア、心得ぬ御邊の胸中。さまでの討手にもあらざるに、息筋張つての所望。但し、その曲者に由緣あるや。心底明かさば品に依り、料簡もあるべきが、無體に望むは訝かし〳〵。
刑部　成る程それも尤も。何を隱さう閑居して、異相に見ゆる行人は、我が主君、大内之介義弘どの。
監物　ヤ、なんと。
刑部　サ、驚きは尤も。斯く打明ける上からは、爰が互ひの料簡づく。この所を聞き分けて、この討手を某に。
監物　さう聞いては猶の事、禁裏表は所勞と僞り、この山に隱れ住むは何の爲。それを明かさば兎も角も。サア、その仔細は。
刑部　サア、その儀は。
ト　つかへる。
監物　サア、仔細はどうぢや。
〽さし詰まつたる返答に、暫し詞もなかりけり。
ヤア、うろたへたる一言、家來の身として主の心、推察せずに仕へ召さるゝか。善なら善、惡ならば、なぜ諫言を加へぬぞ。不覺な事を。
〽云ひ捨てゝ引き直す、轡面を取つて引きとめ。
刑部　オ、尤もなり、汝が主の重氏どのとは事變り、主

君大内は古今の猛將。思ひ込んだる初一念、なか〳〵家來の諫めも聞かず、存じつきたる大願ありと、仔細を云はず山籠り、禁庭へは所勞の云ひ立て。萬一この事顯はれては、上をかすむる大罪人、大内の家の滅亡。さるに依つて某が、無體に追手の役目を願ふ。主持つた身は相身互ひ、一生覺えぬこの親仁が手を下げる、聞き分けてくれ。コレ、頼むと云ふは爰の事。

監物　イヽヤ、洞穴に壇を築き、不及の望みなす者多し。假初めならぬ勅命を受け、善とも惡とも仔細を聞かず、私しに料簡する事罷りならぬ。コリヤ〳〵大佛、時刻が移る。者ども引き具し山の手を押取り卷き、大内之介を取逃がすな。早く〳〵。

大佛　心得ました。者ども續け。

捕手　ハヽア。

〽一度に勇み入りにけり。

ト山おろしになり、大佛先に捕り手大勢、皆々入る。

刑部　ヤア、奇怪なる監物太郎、六十に餘る某に、樣々の口たゝかせ、その上主君の名を明かさせ、無得心なる畜生侍ひ。いッかなこの場は動かさぬ。動かれるなら動いて見ろ。

〽乘つたる馬の尾筒押取り、引き戻せば乘り出し、互ひの忠義に情も弱り、勞れを見込み監物太郎、奥山さして駈り行く。

ト早笛になり、逸散に下手へ入る。

刑部　エヽ、しなしたり、彼奴をやつては一大事。ソレ。

〽追ひ駈けて行く一筋道、通りかゝりし鋲打ち乘り物、向ふ見ずの刑部左衞門、供先押し分け駈け行くを、つきつきの侍ひ立ちふさがり。

トこの時、下手より以前の乘り物、侍ひ付き添ひ出る。刑部左衞門、押し分けて行く。侍ひ立ちかゝつて

侍ひ　ヤア、無作法なる老ぼれめ、この乘り物に召したるは、忝なくも禁中より、重氏卿へ賜はりし、千鳥の前さま、そこ下がり居らう。

〽片寄れ下がれと罵つたり、刑部左衞門心づき、これこそは監物に、ほで合させる質物と、乘り物の棒しつかと捕へ。

刑部　ハテ、好い所へ千鳥の前、乘り物を踏み破り、駈け通るは易けれども、此方に少し入用な。元の所へ舁き戻せ。惣領はこの親仁。

〽力に任せ押し戻す。

侍ひ　ヤア、慮外な耄碌。ソレ。
ト山おろしになり、皆々刑部左衞門にかゝるを、殿りのけ殿りのけ乘り物に手をかけ差し上げる。皆々双方より取卷く。トこの見得・カケリにて
〽深山路さしておし登す。
トこの道具ぶん廻す。
本舞臺、三間の間、一面の岩組み。眞中よき所に誂らへの岩窟、出入りあり、松の吊り枝、すべて高尾山絕頂の體。山おろし、靜かなる譯のツトメにて道具納まる。
ト矢張り右の鳴り物にて、花道より以前の大佛新藏、捕り手に乘り物を擔がせ出て來り、皆々に囁き思ひ入れあつて岩窟の前へ來り
大佛　如何に我が君義弘公、今日禁庭の風聞、當山に於て隱れ住みの輩、急ぎ誅せよとの勅諚にて、卽ち討手向ふの評定。この儀密かに達せよと、主人新洞左衞門が注進に依つて、卽はち家來岩淵平馬、お迎ひに參上仕つてござります。
〽と呼ばはれば、洞の戶を押し閉き、義弘は寬々と、さあらぬ體にて歩み出で。
ト術の合ひ方になり、大内之介義弘出で來り
義弘　ナニ、新洞左衞門が家來、迎ひに參りしとな。大事を起す某、小事の害を待たんより、一先づこの場を立ち退かん。
大佛　ソレ、お乘り物。
〽乘り物引き寄せ飛び移れば、しすましたりと鎗の緖・双方より打ち着すれば。
ト義弘、何心なく駕籠の内へ入る。大佛こなしあつて乘り物へ網をかける。
ハツ、仰せの通り、計らひましてござりまする。
〽監物太郎馳け來り。
ト下手より監物太郎出で來り
監物　出かした大佛。ヤア〳〵大内、武士の出籠り、不審を晴らせとの勅諚にて、加藤左衞門重氏の家來、監物太郎向うたり。云ひ譯あらば、天奏にて申し開かれよ。
〽云ふを聞くより大内之介、五體をゆする唸り聲。
義弘　さては新洞が迎ひと僞り、謀られたか。エ、殘念、口惜しやなア。黑塚は居ぬか、藏人々々。
〽齒嚙みをなせしその折から、刑部左衞門、追ひたて來

る鋲打ち乗り物。

ト この間山おろしになり、下手より刑部左衛門、以前の形、乗り物を擔がせ出で

刑部 ヤレ待て監物、その乗り物こそ慥かに主君大内どの。さこそと知つて此方もぬからぬ。この乗り物は、汝の主人重氏へ、禁中より下されし千鳥の前、奪ひ取つたは汝へ面當。主人大内を戻せばよし、さなくば恨みの刃、この乗り物へ突き通すが、返答如何に。

〽如何に〳〵と聲かけたり、兩無三方と監物太郎。

監物 ヤア、勅命下りし千鳥の前、殺さば汝は朝敵同然。

刑部 ヤア、主を虜にするからは、破れかぶれ。サア、その乗り物此方へ寄越すか。

監物 サア、それは。

兩人 サア〳〵〳〵。

刑部 返答せよ、監物太郎。

監物 さほど忠義を立てる性根を、無下にするも本意ならず、殊に主人の寵愛、殺されるも殘念、理を非に曲げて乗り物ぐるめ、打替へて得させん。さりながら、勅命受けて生捕りたる曲者、私しに助けては禁庭への聞え。この儀に當惑。

〽云はせも果てず。

刑部 ヤア、それは一途の料簡。高尾の行人追ひ拂へとは、最初の勅諚。生捕れとは、異議に及ぶ時の事。

監物 成る程、乗り物表だち渡してやらう。ヤア〳〵刑部、慥かに聞け、洛中洛外追放の行人、網を着せて渡すぞ。急ぎ生捕られよ。

〽双方一度に取返し。

ト 兩方とも乗り物を取り交して、監物太郎は鋲打ち乗り物に付き添ひ、東の假花道へかゝる。刑部左衛門は網乗り物に付き添ひ、花道へかゝり双方思ひ入れ。

刑部 また幾千代を友白髮。

監物 祝ふ嫁御の色直し。

刑部 雲井のかをり。

兩人 兩艷の乗り物。

〽伴ひ歸る忠臣義士、例し少なき君が代に、揚ぐる譽れは高尾山、勇み勇むる夕まぐれ。

兩人 さらば。

〽別れ別れになりにける。

ト 兩方とも思ひ入れあつて東西へ入る、これにて舞臺へ淺黄幕を振り落す。矢張り山おろしになり、東西の

口より、思ひ〳〵の仕出し出て入る。知らせにつき、淺黄幕切つて落す。

本舞臺、三間の間、正面小高き土手、後ろ八幡山崎の遠見、上の方、渡し場の體、狐川と記せし傍示杭建てあり、渡し場に小船一艘、船頭一人附いてゐる。麥搗き唄にて道具とまる。

ト右の唄にて東西の花道より、いろ〳〵の仕出し出て、渡しを渡る事あつて、よき時分、時の太鼓になり、花道より外山左内、上下股立ちにて、後より中間足輕、箱提灯を持ち出る。東の假花道より横口戸平、裃つけ袴、股立ちにて出て、同じく足輕、箱提灯を持ち、双方舞臺にて行き合ひ

左内　これは〳〵横口戸平どの、いづれへお出でござるな。

戸平　左樣仰せられるは外山左内どの。して貴殿には。

左内　拙者儀は殿のお迎ひ、最早黄昏にも及びますれば、提灯の用意いたして、只今參つてござる。

戸平　それは御苦勞千萬。併し貴殿が忠義顔に、提灯のお迎ひのと、お髭の塵を取り召されても、當時お羽張りのよい拙者、どうして〳〵及ばぬ事。

左内　ヤア、おのれが心に引比べ、お髭の塵とは何のたわ言。銘々主人へ奉公なれば、例へ命を召さるとも、忠義の道に二つはござらぬ。

戸平　ハヽヽヽヽ、ナニ忠義。なんぼ忠義の奉公のと吐かしても、日の暮れるまでお迎ひにも參らず、今まで何をうぢ〳〵。コレ、この通りこの戸平が、疾に用意いたしてござるわえ。

左内　すりや、アノ貴殿が。

戸平　オヽ、御奉公といふは、ザッとこの位なもの。なんとして及ぶ事ぢやねえ。

左内　イヽヤ、拙者が疾よりも。

戸平　イヤ身共が。

兩人　なにを。

〽双方いがみ爭ふ折から。

トこの時揚げ幕にて、

大勢　ハイホウ。

ト兩人キッと向うを見て

左内　慥かにあれは。

戸平　殿の乘り物。

ト兩人思ひ入れ。行列三重、誂らへの鳴り物になり、花道より加藤左衞門重氏、袴羽織大小にて、後より侍ひ足輕大勢附き、ズッと後より乘り物を吊らせ出て來り

左内　殿樣には、只今お越し

戸平　遊ばしましたか。

重氏　兩人大儀。イヤ、家來ども、都は洛中洛外も、いづれをいづれと云はれぬ風景、分けて男山の昔を尋ねるに、豐前の國宇佐の郡より、勸請ありし正八幡宮、御鎭座も改まり、紀州きやら山とも云つつべき御山、入日に輝く風景、イヤハヤどうも。斯やうに方々の眺めに心浮かれ、思はずも日が長け、はや暮れに及ぶ。見れば渡し舟も向うへ漕ぎ行き、戻るを待つも退屈。堤づたひに參るべし。案内せよ。

戸平　ハッ、この道は登り舟の引き場、道のでくぼく、なかく〳〵歩まるゝ所ならず、殿には御乘り物にも召されうが、家來は何となるものぞ。渡しをお待ちなさるゝが、よろしうござりませう。

重氏　イカサマ、三里廻つて本海道と云へば、惡所を行くは不興。所の名さへ狐川、化かされぬ用心せよ。

左内　先づ〳〵殿には、これへ

兩人　お越しなされませう。

ト右の鳴り物にて、本舞臺へ來り、二重の上へ住ひ、兩人左右へよろしく住ふ。

戸平　ソレ、お提灯。

トこれにて中間、バラ〳〵と提灯を並べる。

〽日暮れを急ぐ旅人の、五人七人一連れに、乘り遲れじと立ち集まる、漕ぎ來る舟も人のすし、渡し場狹しと賑はへり。

トまた麥搗き唄になり、仕出し來て渡しを渡る事あつて、花道より駒形一角、浪人の形。竹笠、脚袢、草鞋、大小にて出る。舟の内より玉屋與次、矢張り旅なりの浪人、大小にて出て來る。

〽揉み合ふ中を浪人と、覺しき武士が上がりかけ、また此方より乘る人も、同じ風なる侍ひが、せり合ふ中を摺り合うて、何とかしけん嗜なみの、大小もちり合ひ急ぎ、行きける拍子に一方の、脇差ぽつきと折れにける。

ト兩人の侍ひ行き合ふはずみに、一角の脇差折れる。與次、思ひ入れあつて行きかゝる。

〽はつとばかりに折られし侍ひ、面目なさに笠傾け、佇

むらちに相手の浪人、行きかゝるを堪えかね。
一角　イヤお侍ひ、暫らくお待ち下されませう。
與次　待てと仰せらるゝは、拙者が事でござるかな。
一角　如何にも。
〽急ぐ身なれど是非なくも、立ちとゞまりし互ひの血相、すは事こそと見えにける、重氏卿も乘り遅れ、さながら逃げても退かれねば、詮方煙草くゆらして、打眺めてぞ在します、件の侍ひ折れたる脇差拾ひ持ち、相手に向つて詞を荒らげ。
ト與次、舞臺へ取つて返す。重氏思ひ入れ。一角、右の脇差を取り、與次の側へ來て
一角　誠に、恥を申さねば理が聞えず、拙者めは遠州者、長々の浪人ゆゑ尾羽打枯らし詮方なく、餓死せんよりはと存じ、武士にあるまじき一腰を賣り代なし、奉公稼ぎに西國へ、罷り下る時の過ち、とは申しながら、こなたと摺合ひに、この如く差添を折られ、あれにお歴々も見てござれば、面目の雪ぎやうなく、難儀に及ぶ。何卒料簡のつけべき儀ならば、料簡つけてお通り下され。それとも御思案に及ばずば、お相手になり、討ち果して下されうや、御返事次第。

〽御返事次第と相述ぶる、相手の侍ひちつとも臆せず。
與次　成る程御尤も。手前粗相者ゆゑ思はずも不調法。併しお詫びは申さぬ。差添が竹光ゆゑ面目ないとは、御胸中が小さい。
一角　アイヤ、差添でも武士の魂ひ。竹光でも苦しうないとはナ。
與次　一筋なお心ゆゑ、これしきを恥辱と思し召すも御尤も。イデ、某が、大恥かいてお目にかけん。
〽刀拔き出し兩手に握り、遠慮會釋も鞘越しに、ばつきと折つて目先へ突きつけ。
ト刀を拔き思ひ入れあつて折る事あつて見せ
これ御覽なされ、手前もこの通り。拙者めは播州浪人、都方へ奉公稼ぎの路銀に詰まり、其許は差添、拙者は刀、恥辱は倍增し。武士の魂ひ折つて見せたは、外聞を共に現はす御腹癒せ。それとも討ち果す義に違背は致さぬ。お相手にならうかと、申して好みも致さず、また逃げも仕らぬ。如何やうともお勝手次第。サ、御返答　承りたい。
〽膝立て直せば。
一角　ハテ、それは此方も粗相、夜中ゆゑお顏も見えず、

御縁もあらば又重ねて。
與次　左様いたさう。然らば此まゝ。
兩人　お別れ申さう。
〽互ひの禮儀砂打ち拂ひ、立別るゝを横口戸平、大口明いて高笑ひ。
ト一角は東の假花道へ、與次は花道へかゝる。横口戸平こなしあつて
戸平　如何に浪人すればとて、折れる物を腰に挾み、奉公稼ぎとは、死太い和郎達、武士の風上にも置かれぬ奴等。面つきが眺めらるゝわえ。
〽重氏はつたと睨めつけ給へば、主の威光にうづくまる、行き過ぎたる二人の侍ひ、ツカ〱と戻り、重氏の側へ來て、
ト兩人、これにてツカ〱と立ち戻り。額を眺めこなし。本釣り鐘誂らへの合ひ方になり
一角　誠に、其許には刀を折り、我が心をなだめ下されたれども、今お聞きの通り、あれなる御家來、何かと悪口せられ、何ともこの場を濟ましがたし。御思案極め下されい。
與次　イカサマ、あの通りに沙汰あつては、お互ひの身上ありつきの妨げ。一旦濟んだる事なるに、よしなき匹夫の口先ゆゑ、打ち果す事近頃殘念。と申して、あれしきを相手にも大人氣なし。又その主人に兎や角云はゞ、浪人の糧に盡き、物取りなどゝ譏せられんも口惜しく、この上は潔よく刺し違へて、最期を共に致さうではござらぬか。
一角　成る程、拙者もその覺悟。ハテ、命冥加な下郎めが。
〽双方覺悟の身拵らへ、重氏外の家來を招き、何か囁き給ふにぞ、相心得て乘り物より、御差替への大小を、やがて取り出し差し上ぐる、その間に兩人座をしめて。
ト重氏、外山左内に囁く。左内心得、乘り物より誂らへの大小を出す。此うち兩人キッとなつて
與次　御用意よくば、イザ。
一角　イザ。
兩人　イザ〱〱。
〽既に斯うよと見えければ。
ト兩人、刺し違へんとする、重氏、眞中へ入り
重氏　御兩所、先づ暫らく。
ト兩人こなしあつて
一角　兩人がこの場の仕儀。

與次　お止めなされしは
一角　仔細ばし
兩人　ござつてかな。
重氏　如何にも。最前より御兩所の心底、尤もさこそあるべき儀。併し、大功は細瑾を顧ずと申す。僅かな恥に命を捨て、何處の誰れとも知らざれば、犬死も同然。また腰の空いたるは、錆びたれども某が差替へにて塞ぎたし。異議なく受け給はゞ、大慶に存ずる。
〽はつとばかりに平伏し。
　ト双方へ大小を差し出す。兩人こなしあつて
一角　こは有り難きお計ひ、違背申すは憚りながら。
與次　いづく如何なるお方とも存ぜず、まして御恩受ける筋もなし。
兩人　その儀は御免下さるべし。
重氏　ホヽ、一理あり至極せり。某ことは筑前の住人、加藤左衛門重氏と申す者。即ち當所は禁庭より、馬の飼領に下し置かれし拙者が領分。その場に於て御兩所が、横死あつては後の難儀。その難儀を遁がれん爲のこの兩腰。心よく受け給はゞ、悦喜ならん。
〽退引きならぬ仁者の詞、はつとばかりに押し戴き。

　ト一腰づゝ取つて
一角　こは冥加に餘る御情。
與次　いつの世にかは報じ申さん。
兩人　我れ〱は。
重氏　アイヤ、お名を承つては、恩にかけると申すもの、志しが無足いたす。顏も知らず名も知らず、重ねてお目にかゝつても、お近付きではござらぬぞ。急ぎの道、サヽ、お越しなされい。
〽慈悲に慈悲ます御詞、兩人餘りの有り難さに、返す詞もなきうちに、猶も手を突き。
一角　斯くまで深き御情、申すは恐れ多けれども
與次　とてもの事に御家來衆へも、御沙汰なきやう
兩人　願はしう存じまする。
〽願へば重氏卿。
重氏　コリヤ、横口戸平、其方に用事あり、これへ參れ。
戸平　アノ、拙者めに。
重氏　參れと申すに。
戸平　ヘイ。
　ト合ひ方になり、重氏の側へ來て
して、拙者めに御用の筋はな。

重氏　其方に用事は別儀でない。只今見る通り、御兩所には刺し違へんとなされしが、武士は斯くありたきもの。その御心底の現はれしは、皆其方より事起ると申すもの。なりや、其方は主へ對して、なか〳〵の手柄者、その手柄に其方へ褒美を遣はす。

戸平　なんと仰しやります。アノ今拙者めが申せし一言より、御兩所の御心底の現はれしは、拙者が忠義手柄とあつて、御褒美を下し置かれんとな。

重氏　如何にも。

戸平　ヤレ〳〵、先づは大慶。して、その御褒美は。

重氏　其方へくれるその褒美は。

戸平　その御褒美は。

重氏　刃金をくれる。

戸平　エ、。

ト傍りして立つところを突き廻し、ポンと首を討つ。見事に横にかへる。重氏、刀を拭ひ鞘へ納める。

重氏　重氏が武道は斯くの通り。

與次　何から何まで御尤も。

ト重氏、外山左内が持ちし目録の金包みを取り、双方へ投げ出す。

重氏　南無三、取落した。

左内　ソレ、お提灯。

ト中間、兩方より提灯を出す。重氏、これを拂ひ落し

重氏　ハテ、粗相な奴。

ト此うち一角、與次、右の金包みを拾ひ上げ

兩人　お金はこれに。

ト出す。

重氏　落したものは拾ひ徳。

兩人　それ程までに。

ト思ひ入れ

重氏　恩に着ずとも、お出でなされい。

ト金を戴く。重氏、袴の膝を打つ。これを木の頭。

行きやれ。

トきざみ、よろしく、　幕

二　幕　目　　加藤重氏旅館の場

役名――鑑物太郎信俊。黒塚藏人。御臺所、牧の方。愛妾、千鳥の前。腰元、小柳。同、桔梗。同、

紅梅。同、早蕨。加藤左衞門重氏。

本舞臺、三間の間、常足の二重、正面金襖、上の方、山の袖にて社の後ろ見せ、櫻の立ち木、いつもの所に枝折り戸、すべて重氏茶亭の體。爰に酒瓶の腰元四人、水手桶など持つて掃除してゐる。琴唄にて幕明く。

ト掃除する事よろしくあつて

桔梗　なんと皆さん、この廣庭へ出臍のやうなあの社は、なんといふ神様でござんすぞいなア。

小柳　アタ邪魔らしい、掃除が出來ぬわいなア。箒次手に掃き出さうぢやあるまいか。

早蕨　これはしたり、この人とした事が、あれはお國から勸請なされた、殿様の氏神様ぢやわいなう。

紅梅　ソレイナウ、粗末になぞしやつたら、さぞ罰が中らうぞや。

小柳　ムウ、お國から取寄せるをば勸請と云ふかや。そんなら今度お國から、勸請なされた御臺様、千鳥さまと殿様の、しつぽりを御覽じたら、フンスンで堪るまいと、思うたは當ての面、千鳥さまと奥様と、仲の好いのはどうした事、あんまりで拍子がない。次手に悋氣も國許から、勸請したらよからうわいなう。

桔梗　それはさうと、小間の賑いは、いつも來る百物賣りの商人、今日來たら嬲つて遊ばうぢやござんせぬか。

紅梅　ほんに、それがよいわいなう。

小柳　アレ〳〵、噂をすれば影とやら、向うへ見えるわいなう。早う呼ばうぢやござんせぬか。

早蕨　それがようござんす。

四人　オウイ〳〵〳〵。

トてんつゝになり、花道より黒塚藏人、淺黄頭巾、脚絆の形、商人の拵らへにて、荷箱を脊負ひ出て來り

藏人　これは〳〵お女中様方、相變らず御用仰せ下さりませ。粉類なら何なりとも、蕃椒でも胡椒でも。

小柳　そんなものは要りませぬ、いつものやうに賣立てを

桔梗　早う爰で

皆々　聞かしやいなう。

紅梅　それが否なら、早う

皆々　歸りや〳〵。

藏人　なんの否と申しませう。左やうなら、この場にて云立てを。

皆々　早う聞かしやいなう。

〽せがみ立てられまつかせと、頰杖突いて聲張り上げ。

藏人　のこ／＼や豆の粉や、まめな手くせに尻こぶた、ふッつりひり〻と山椒の粉、奴さんには蕃椒、坊主の好きな胡椒の粉、若い嫁御の鼻はじく、姑御には辛子の粉、おてきに杯さしもぐさ、身柱九十一、すべて心もちやき。

〽召しませいとぞ賣りにける、腰元どもは目引き袖引吉野葛、召しませ／＼。

小柳　マア、當分何にも要らぬ。大儀にようしやべりやつたの。

皆々　のこ／＼、早う去にやいなう。

〽一度に奥へ走り入る。

ト腰元皆々奥へ入る。

藏人　エ、、今日も又とりくさらぬ。ても、なめすぎた女郎め。

〽呟き／＼、荷箱の内より大小取り出し、身拵らへしてのつさ／＼、忍び入らんとする所へ。

ト思ひ入れあつて、荷の内より大小を出して差し、頭巾を取り、身拵らへして行かうとする。監物太郎出て留める。

藏人　ソレ。

ト行かうとする。

監物　曲者待て。心得ぬ商人め、荷箱の中より大小取り出し、奥を目がける面相、仔細ぞあらん、眞直ぐに白狀せよ。

藏人　曲者とは舌長し、うぬらが敬ひ傅く千鳥の前が兄、黒塚藏人、重氏の爲には小舅、主同然の某を、土足にかける罰あたり。

監物　して、その兄が何ゆゑに切り込んで、誰れに敵對、目ざす相手の姓名は。

藏人　オ、、その目當といふは、加藤左衛門重氏が、首討ち取つて知行にするのだ。そこ退け。

監物　さう聞いては猶の事。引ッ縛つて御主人へ。

藏人　何を小癪な。

ト早業になり、兩人立廻りあつて、藏人を蹴倒し、直ぐに刀の下げ緒にて括し上げ

監物　暫しの間、この曲者を。

ト上の社を見て

幸ひの社の內、獄屋の代りに神は見通し、許させ給へ。

〽社の内へ無體に押し籠め、海老錠しつかと卸ろし置き。

ドリヤ、御歸館を相待たうか。

〽さあらぬ體にて入りにけり。

ト奧へ入る。

〽妹脊の仲に固まりし、石童丸の御母君、牧の方とは申せども、子持ちと見えぬ御形、花見座敷へ出で給へば、後に續いて千鳥の前、大内山の木隱れより、移し植ゑたる花なれど、流石妾と本妻の、禮儀は戀に品定め。

ト此うち奧より御臺牧の方、裲襠衣裳、千鳥の前、同じく裲襠の形、後より腰元四人付いて來り、牧の方思ひ入れあつて

牧の　ナウ千鳥さま、連合ひ左衞門重氏さま、七年餘り禁裏の勤番、首尾よう勤めておしまひなされば、これからお國で御休息、長々の在京に、夜の御殿の伽もなく、お淋しからんと存ぜしに、自らになり代り、殿の心を慰むる、そもじ樣のあるとの噂、國元で聞くその嬉しさ、とんと心が落ちついて、ゆるゆる上りし今度のお迎ひ。今日は歸國のお願ひに、禁裏樣へお上りなれば、お暇が出るや否、こなさんを國へ伴ひ、たんとお禮を申さにやならぬわいなう。

〽奧底もなき御挨拶。

千鳥　これはマア、有り難いそのお詞。今さら申せば何とやら、云ひ譯がましく思はるれど、數ならぬ身の殿樣に添臥し、御臺樣のお目にかゝらば、お叱りもあらんかと、思ひの外のお憐み。さう結構に仰しやつては、お返事もなり憎し、千鳥よどうせい斯うせいと、腰元衆同然に、御意なされて下さりませ。

牧の　ハテ、わつけもない。大事な殿御を半分づゝ、いとしほがつてもらふもの、如才にしてよいものか。その代り、この後外に殿樣の、惡性があるなら、二人して云はうぞえ。

千鳥　そりやお氣遣ひ遊ばすな。あなたにお世話はかけませぬ。御名代に二人前、わたしが務を致します。

〽仲よき魚と水入らず。

桔梗　お二方には、未だ殿樣御歸館に間もござりませう。それまでのお慰み、お氣欝晴しにこの所にて。

早蕨　双六なりと、つひまつでも遊ばして、お歸りをお待ちなされませ。

紅梅　幸ひと私しどもが持ち運び、奧の亭に置きました、

小柳　イエ〳〵、双六より歌加留多より、矢ッ張りお庭の櫻を見て、御酒宴がよろしうござりませう。
牧の　追ッつけ殿様お歸りあらん。お目にかけるも二人が御馳走。あの櫻を題にして、腰折れなりと一首づゝ、短册を附けようではないかいの。
千鳥　こりや、ようお氣がつきました。及ばずながら私しも。
牧の　そんなら千鳥どの。
千鳥　御意様。
皆々　先づ、入らせられませう。
ト唄になり、牧の方、千鳥の前先に、腰元皆々付き添ひ奥へ入る。揚げ幕にて
呼び　殿の御歸館。
〽程なく左衛門重氏卿、歸館を告ぐる先使ひ、静々と入り給へば、監物太郎出で迎へ。
ト調べになり、重氏、烏帽子装束、後より侍ひ三人付き添ひ出る。奥より監物太郎出て來り
監物　殿様には、只今御歸館遊ばされましたか。
重氏　監物太郎、出迎ひ大儀。

監物　先づ〳〵、お入り遊ばされませう。
ト矢張り調べにて舞臺へ來りて、二重の上へ住ふ。
先づは御機嫌麗はしく、恐悦至極に存じ奉りまする。
重氏　奉書表の首尾もよし。喜べ〳〵。
監物　奥庭の櫻御遊覧あつて、御酒一献召し上られ、御休息遊ばされませう。
重氏　如何にも。よきに計らへ。
監物　ソレ腰元衆、お召替へ。
ト奥にて、
腰元　畏まりました。
〽はつと腰元立寄つて、てんでに召さすお召替へ、色をゆかりの綾錦、見かはすばかりの御出立、實に筑前の御大將。
ト此うち奥より腰元四五人出て、壺折に着せ替へ、烏帽子装束を臺に載せ腰元持つ。重氏、壺折に着替へ庭下駄を穿き、監物太郎、腰元付き添ひ行きかゝる。此まゝ知らせにつき誂らへの唄にて、この道具を靜かに廻す。矢張り皆々歩む。
本舞臺、三間の間、眞中二間の亭屋體、綾張りの障

子、この内に牧の方、千鳥の前、双六盤によりかゝり寝て居る體。上の方、以前の社、前面の扉に錠を下ろし、側に櫻の立ち木、これにいろ〳〵の短册を付け、矢張り枝折り門、よき所に誂らへの臺を据ゑ、これに毛氈をかけ、右の唄にて道具納まる。

ト右の唄にて皆々歩み來る。重氏、上の櫻の短册を見る事あつて、右の臺の上へ住ふ。監物太郎、思ひ入れあつて

監物　これはしたり、殿樣の御歸館ありしを、奥方には御存じないか。拙者が参り、お目を覺まさせん。

重氏　さなせそ〳〵。餘念なく寢入りし體、互ひに妬む色もなく、睦まじきこそ滿足なり。其まゝに差措け〳〵。

監物　成る程、御意の如く、嫉妬のあるは婦人の道、その氣遣ひなきお二方、斯くまで御仲よろしき事、我れ〳〵まで大慶に存じまする。

重氏　我れもこれにて花の相伴、二人が風情を肴にし、花の下にて一獻酌まん。酌いたせ。

桔梗　畏まりました。

ト長柄の銚子杯を持ち來り、重氏、杯を取り上げる。桔梗、酌をしようとする。小柳、これをとめて

小柳　マア待たしやんせ。殿樣のお酌は、わたしが常からしたうて〳〵ならぬところ。そのお銚子はマア、此方へ寄越しなさんせ。

桔梗　イヽエ、わたしがするわいなア。

小柳　イエわたしが。

ト兩人爭ふ。

監物　コレ、控へぬか。

重氏　ハテ、誰れ彼れと申すに及ばぬ。早う酌いたせ。

小柳　畏まりました。

ト小柳、思ひ入れあつて酌する。重氏、杯を受ける。

〽つぎかけたりし不老不死、藥の水のしたゝりと、一つ受けさせ給ふ折柄に、雲心なく吹く風の、盛りを散らす一嵐、受け持ち給ふ杯へ、莟一房落ちにける、重氏つくづく打眺め。

ト此うちかすめたる風の音になり、日覆より櫻の花、ひら〳〵と散り落ちて、重氏の持ちし杯の中へ落ちるに、思ひ入れあつて

重氏　散ればこそ、いとゞ櫻はめでたけれと、眺めたれども、雨にしぼみ風に揉まれ、盛りの散るは科ならず。未だ時にも會はぬこの蕾、杯の中へ散つたる事、これこ

そ人界の果敢なき敎へ。老少不定、老いたるが先立ち、若きが後に殘るとも、定めがたきは人の命、忘るまじきは後生の道。

〽文武に猛き重氏の、無常を觀ずる悟道の一言、打悄れたる御有樣、監物太郎尤もと、共に悟りは開けども、わざと詞に勵みをつけ。

監物　こは云ひ甲斐なき御迷ひ、釋迦といふ賣僧頭、樣々の僞りを書きちらし、一文不知の嬶嚊を、たらさん爲に一切經、例へて申さば盜賊を捕へ、殺生なりとて助け歸さば、國家の憂ひとなる道理。あな忌はしき後生の道、この後ふッつりお止まり下さりませう。

〽佛法そしるも諫めの忠言、心を感じて打頷き。

重氏　誠に汝が云ふ如く、弓馬の家に生れながら、假にも無常に引かされては、武の道は立ちがたし。この後ふッつと思ふまじ。さりながら、よしなき事に心も滅入り、何とやら物淋し。次の間にて琴を彈かせよ。御臺千鳥に目を覺まさせん。我れはこれにて慰さまん。皆の者は、次へ立て〳〵。

小柳　サア、皆さん奧へ行かんせ。わたしばかりは後に殘り、日頃の思ひを云はにやならぬわいな。

トをかしみのこなし。

監物　コリヤ〳〵、控へて居らぬか。

重氏　サア、殘らずともに、次へ立て〳〵。

皆々　畏まりました。

〽皆々立つて入りにける。

ト監物太郎、腰元入る。また誂らへの鳴り物になり、重氏思ひ入れあつて

重氏　ホヽ、いつになき我が佛法歸依、武邊にたるみつかんかと、案ずるは尤も〳〵。イデ、わつさりと酒宴を催ふし、むすぼれし氣を晴らさん。

トまた唄になり、重氏こなし、屋體へ上がり、二人の眞中へ來て、二人へしなだれる。唄一杯に切れる。

〽不思議や俄かに物騷がしく、あたりに響き、庭の木草もざは〳〵と、風も身に泌むばかりなり、二人の黑髮俄逆さまに、蛇の如く鎌首おつ立て、食ひ合ふ有樣、さしもの重氏怖毛立ち、呆れて詞もなかりしが。

ト此うち薄ドロ〳〵になり、牧の方千鳥の前、兩人寢てゐる下げ髮、おのれと逆立ち、蛇のやうになり、鎌首を上げ食ひ合ふ體。重氏フッと見て、恟りしてキッとなり

ハア、恐るべし〳〵、外面如菩薩内心如夜叉と說かれたる、佛の戒め目のあたり、顏に白粉丹花の脣、粧ひ飾りて菩薩の如く、互ひに妬む顏もせず、打ち見には仲よき體。心の底は邪鬼執念、絕えせぬ證據をおのれと現はし、斯く淺ましき體たらく。忌はしや、穢らはしや。

〽穢らはしやと飛び退き給ひ。

妻子は地獄の家土產と、說き示されしに疑ひなし。花の蕾の散つたるに、思ひ比べて觀ずれば、これぞ好き菩提の種、國家榮華も望みなし。迷ふがゆゑに三界の、火宅に心を苦しむる。悟れば十方空ならずや。今まで心の滅入りし上、いや增りたる發起心。

〽差添拔いで髻を、ふッつと切つたる輪廻の絆。

ト差添にて髮を切り思ひ入れ。

せめて一筆書き殘さん。さうぢや。

ト琴入り誂らへの唄になり、上の臺の上へ來て、料紙硯を取つて書置を書く事あつて、烏帽子裝束を一緒に置きてこなし。唄一杯に切れる。

薄き契りも過去の因緣、必らず心殘すなよ。

〽細々筆に書き込みし、御髻に烏帽子裝束、書置添へて彼處に置き、裏門よりすご〳〵と、立出では出でながら、流石恩愛捨て難く、振り返つて淚にくれ。

ト思ひ入れあつて枝折り戶の外へ出て

二人が夢覺め、斯くと知らば、さぞや歎かん、不便やなア。

〽不便やと、見やり給へば蛇形の黑髮、猶も盛んに挑み合ふ、執着心に愛想も盡き、身震ひたつて足早に、行くへも知れずなり給ふ。

ト此うち愁ひのこなしあつて立戾る。矢張り兩人の髮、食ひ合うてゐる。これを見て思ひ入れあつて花道へ入る。

〽斯くとも知らず監物太郞、何心なく立出づれば一間の騷動、見れば件の怪しき姿、驚きながら走りより、容赦もなく食ひ合ふ黑髮、差添拔いて切り離せば、二人も悄り起き上がり、顏見合せて一時に、吐息をほつとつき給ふ、監物太郞あたりを見廻し。

ト奧より監物太郞出て來り。兩人の體を見て、刀を拔き切り拂ふ。これにてドロ〳〵打ち上げ、兩人目を覺まし、互ひに見て悄り心付き思ひ入れ。監物太郞、平舞臺へ來て右の烏帽子書置を見て

監物　我が君はましまさず、御烏帽子狩衣の脫ぎ捨てある

こそ心得ぬ。御壻に一通添へ殘されしは、早御遁世遊
ばされしか。ヤ、、、。
ト思ひ入れ。兩人これを聞き
千鳥 ナニ、殿樣は御遁世とや。
牧の 何ゆゑの御出家ぞいなう。
〽余りの事に興覺めて、泣くも泣かれずうろ／＼と、共
にうろたへおはします、監物太郎心を鎭め。
監物 オヽ、驚ろき給ふは理り。先程禁裏より御歸館の節、
いつに勝れし御機嫌、あれなる櫻の下にて御酒宴の折柄、
御杯へ花の蕾散つたるとて、無常の悟りを開き給ひ、
さも心細く御意なされしを、打消しては置きたれども、
御兩人の髪逆立ち、蛇の如くになつて食ひ合ひしを、御
覽あつての、御發心でござりませう。
〽歎きに御臺千鳥の前、亂れし髪に心づき、互ひの悟り
一時に、捨と轉びて泣き沈み、前後不覺に見えにける。
牧の 恥かしや人の心、この度都見物かてら、お迎ひに上
りしが、千鳥と殿樣の睦まじさを、見るよりも妬ましく、
胸もかき裂く腹立ちを、ヂッと堪へて表面には、美しう
附き合ふとも、寢た間に本心現はして、淺ましき有樣を、
お目にかけしか、悲しやなア。せめては國に殘したる、

石童丸がおとなしく、生ひ立つまでも思ひとゞまつて給
はれかしと、呼び止めてはくれぬかいの。
〽歎き給へば千鳥も涙。
千鳥 けはひ化粧紅鐵漿より、髪形ぞと艶つけて、かた笄
よふきあげよと、結ひ揃へしは殿樣に、見限られまい爲
ばかり。その髪が蛇とならば、體は鬼ともなりかねま
い。見捨て給ふも理りぞや。御出家も皆わたしが業。
牧の イヤ、御遁世をさせませし、科人は自ら。
千鳥 イヽエわたしが。
牧の イヤわしが。
〽涙みなぎる繰り言に、思案なかばの監物も、袴の襠に
淵をなす、御臺所は涙を押へ。
イヤ／＼、泣いて居ては濟まぬ事。まだ遠くはござるま
い。御後をば追ひかけて。
〽千鳥もろとも立ち上がるを、押止め。
監物 ヤレ待ち給へ、某も左やうに存ずれども、如何程お
止め申すとも、最早止まり給ふまじ。先づは殘し置かれ
たる、御書置、御覽遊ばされませう。
〽一通を差出せば、是非なく／＼も取り上ぐる、涙に聲
も慄はれて、しどろもどろの讀癖を、千鳥もともにさし

覗けば。
ト此うち兩人、右の書置を開き、讀みかゝる。
牧の　涙ながら書き殘す一通、一つ、我れ弓矢の家に生れ、世もなに暗からぬ身なれども、家國を捨て妻子を捨て、世も捨て人の沙門となるは、前世の佛縁ならん。
千鳥　思ひ計らず降つて湧いたる遁世を、胸狹き女心に、淺ましき姿を見せけるゆゑと、さぞかし歎きのあまり、共に姿を變へたく思ふらん。
牧の　さにあらず、妻子珍寶不隨者とあれば、死出の旅路は別れ〳〵、伴へる人もなく、從ふ者もなく候ふ、とは云ひながら、たゞ忘れ難きは石童丸、やう〳〵二歳の時國に殘し、それより又七歳あまり、顏も見ず候へば、さぞ成人し、おとなしくもなりつらんと、思へばいとゞなつかしく、忘るゝ事はこれなく候ふ、石童丸を守りたて、加藤の跡目をつがせてたべ、父がこの身になり候へば、もしや流浪も致さんかと、これのみいかう案じ候ふ、必らず必らず歎きにくれ、倅が事を忘れぬやう、返す〲も賴み入り候ふ。
千鳥　千鳥へも一通を殘さんと思ひしかど、心急かれて候ふまゝ、この文を一緒にながめ、牧の方に力をつけてくれよかし。
牧の　云ひたき事は山々なれども、涙に筆も廻りかね申し候ふ、かしこ。
〽讀みも終らず三人は、わつとばかりに泣き沈む、監物太郎は涙を押へ。
監物　殿樣の事は歎きても詮なき事、一大事はお家の跡目。我が君の御身の上、殊さら隣國には大内之介義弘といふ佞人あれば、君御遁世なされし事を押し包み、幸ひ歸國を許されし砌り。いつもの如く世上へ見せかけ、御臺樣へ我が君の裝束を召させ、一刻も早く國許へ御供して下るべし。跡目の願ひはお國から。急いで御用意遊ばされませう。
牧の　兎角、其方がよいやうに。
〽烏帽子狩衣取り上げて、立ち給へば千鳥の前、袖を控へ。
千鳥　私しもお國まで、お供は致す身なれども、お前は石童丸さまといふ若君あれば、これに越したる筐はなし。せめて朝夕御身に添ひし、この烏帽子狩衣を、妾に下し給はれかし。
〽とりつくを監物太郎。

監物　御尤もには存ずれども、たつた今お聞きの通り、御跡目相續の、力を致す烏帽子狩衣、こなた樣には進ぜ難し。ハテ何をがな。オヽソレ、究竟の筐あり。

〽社の鍵を取り出し。

ト懐中より鍵を出して、

これはあれなる祠の鍵、社の内には其許の、大切になさるゝ筐あり、扉を開いて取り給へ。併し、爰をよく得心あれ。その筐の成行きにて、お國へお供は叶ひませぬぞ。

〽鍵投げ出し謎をかけ、御臺所を伴ひて、奥深くこそ入りにける、千鳥は一句の判じ物。

ト此うち監物太郎、鍵を渡し、牧の方に付き添ひ奥へ入る。

千鳥　お筐の成行きにて、お國へ行く事はならぬとは、どうやら物のある云ひ方。仔細ぞあらん、開いて見ん。

〽社の側へ立ち寄つて、錠前明くれば待ちかねしと、飛んで出でたる鬼藏人、やれ怖やと逃げ退きしが、顔を眺めて。

ト此うち右の鍵にて、社の戸を明ける。内より以前の藏人出る。千鳥の前、悄り飛び退き、思ひ入れあつて

ヤア、お前は兄さん。

藏人　わりや妹。

千鳥　どういふ譯で、この縄目は何の科で。

〽驚きながら親は泣寄り、縛めの縄ほどけば身構へし、物をも云はず駈け出すを。

ト藏人の縄を解く。こなしあつて行きかゝるを止めて

コレ待つた藏人どの、監物太郎が一言に、思ひ合はして思案をすれば、どうでも樣子があるわいなう。

藏人　オヽ、云うて聞かさう。某は大内之介義弘どのに頼まれ、加藤左衛門重氏が首を取り、出世の種にするワ。爰放せ。

千鳥　それで何も樣子が知れた。そんなら矢張り縛つて置かうもの。云はうやうなき大惡人。

藏人　オヽ、首尾よく仕負ふせなば、一廉の大名になり出世の小口。兄が爲になる事。サア、手引きして討たせてくれ。

千鳥　さう聞いては猶の事、例へ兄でも敵の末、いつかなこの場は放しはせぬ。

藏人　そんならわれはこの兄に、手向ひする氣か。コレ、勘當されても、眞實血を分けた兄だぞよ。

千鳥　サア、兄様ゆゑに此やうに、手向ひせぬ程に、どうぞ止まつて下さりませ。
藏人　イヽヤ、兄が出世の種になる事。但し、われが手引きするか。
千鳥　サアそれは。
藏人　この兄に手向ひする氣か。
千鳥　どうしてマア。
藏人　手引きをするか。
千鳥　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
藏人　妹、返事は、ド、、どうだ。
　トきつとなる、千鳥の前思ひ入れ。藏人こなしあつて
返事のないは不得心。この上は奥へ踏ん込み。
　ト行かうとするを止めて
千鳥　マア待つて下さんせ。それ程に云はしやんす事、如何にも手引きして討たせませう。
藏人　そんならしかと得心して、手引きしてくれるか。
千鳥　アイナア。
藏人　出かした妹、それでこそ兄妹のよしみ。得心したらこの刀をわれに預ける。サア、案内しろ。

　ト刀を渡し、奥へ行きかける。千鳥の前思ひ入れあつて、右の刀にて後より藏人を切る。これより三味線入りの鳴り物になり、兩人立廻り、いろ〳〵あつて、双方手負ひになり、トヾ藏人を切り伏せ、乘りかゝつて止めを刺さうとして、其まゝ苦しみ居る事。
〽難なく押伏せ乘つかゝる、監物太郎走り出で。
監物　オヽ、お出かしなされた千鳥さま、お心の操は晴れたれども、この深手では、お國へは叶ひますまい。
〽いたはれば、苦しげに起き上がり。
千鳥　自らとても殿樣の、お情受けし者なるに、樣子に依つてお國へは、叶はぬとありし時、酷い仕方と恨みしが、この體裁では疑ひのかゝるは道理、わしが因果と諦めて居ますれど、兄妹の惡心ゆゑ、おのづと殿樣の御縁が切れる。こればつかりが黄泉の障り。
〽血汐に染みし五體を投げ、泣く聲奥へ聞えてや、一間の襖押し開き、御臺は烏帽子狩衣召され、悠々と立出で給ひ。
　ト正面襖より牧の方、重氏の狩衣を引つかけ、烏帽子を持ち出て來り
牧の　我れこそ假の加藤左衞門、千鳥の前が誠を感じ、二

世も三世も變らぬ契り。
〽のたまへば手を合せ。
千鳥　勿體ないそのお詞は、我が君樣のお詞より、忝なさ
は百倍ぞや。惡心の兄を手にかけ、相果てるが身の本望。
牧の　妾はこれより本國へ。
監物　拙者は後にて萬事をしんがり。
千鳥　御臺樣。
牧の　千鳥。
千鳥　おさらば。
皆々　さらば。
藏人　妹、觀念。
ト藏人立ち上がり切つてかゝる。千鳥の前、刀を持ち、
よろぼひながら立廻り、双方刺し違へ、ひよろ〳〵と
なる。この時牧の方は花道の方へ行きかゝる。時の鐘。
〽悟り悟りて出でたる人も、悟れば果敢なき花の宴、散
りにし姿を殘し置き、本國へこそ立歸る。
ト千鳥藏人、落入る。牧の方、監物太郎、兩人を見て
愁ひの思ひ入れ。よろしく。

幕

三幕目　大內館の場

役名——大內之介義弘。監物太郎信俊。關口隼人。
野口玄蕃。義弘奥方、櫻木。新洞娘、夕秀。多々
羅新洞左衞門。

本舞臺、三間の間、正面瓦燈口、高足の二重、左右
網代塀、上の方、誂らへの松の立ち木。正面の欄干
に弓矢をかけ、二重眞中に大內之介義弘、壺折衣裳
にて、平舞臺の方に、關口隼人、上下衣裳大小、下
の方に野口玄蕃、同じ形、兩人とも銚子大杯を持ち
控へ居る。管絃にて幕明く。
〽富んで奢らず、貧しうして貪らぬは未だ可なり、富貴
にて禮を知り、貧しうして樂しめとは、弟子に示せし孔
子の詞、大內之介義弘、威勢九州にはびこり、自ら武運
を朝日にたくらべ、横雲將軍と尊號し、人もゆるさぬ高
胡座、浮かめる雲の上見ぬ鷲、明日は我が身も不知火の、
筑紫の御殿と時めきける、伺候の諸武士も自ら、のし上
つたる大名氣質、中にも近習の關口隼人、御前に進み。

ト此うち始終大内之介義弘、杯を取り上げる。兩人酌してゐる。

隼人 ハツ、かねて仰せ渡されし通り、近國の大名より、家々に傳はりし重寶、今日持參いたす筈。卽ち寶檢分の役は、多々羅新洞左衞門承はる。

玄蕃 それにつき彼れが娘、お國に稀れなる美人なれども、如何なる事かついに男の肌觸れず、生れの儘なる生娘と、諸家中の風聞ゆゑ、お手廻りの召仕ひにと存じ、上意と申してお次まで、呼び寄せ置き候ひしが、御慰みに御覽遊ばされませう。

〽何がな御意に入らざる追從、お鬚の塵を取りかける、義弘寬々と打頷き。

義弘 勅諚と僞はり、諸國の寶を集むるは、某が謀叛一味の印。連判狀も古めかくし、氣を替へて人質の、代りにする家々の寶。まだ受取るには時刻も早し。その間に彼の娘の面、見てくれん。

ト これにて野口玄蕃立つて來り

玄蕃 お次に控へし、新洞左衞門が娘夕秀どの、急いで御前へ。

〽世にすねて、男選みに年長けし、新洞左衞門が娘夕秀は、ついに殿御の肌知らぬ、おぼこと見えぬしやれ姿、髮の結目に差したるは、梅花にあらぬ白羽の鏑矢、笄ならで簪が、何の御用でお召しぞと、案じるうちも面はゆく、御書院近く座しにける、

ト此うち花道より新洞左衞門娘夕秀、振り袖衣裳、頭に誂らへの矢を差し花道へ平伏する。

義弘 夕秀とはおことよな。ハテ見事、好い器量。汝が親の新洞左衞門、忠と義とに固まりし心より、固くるしう育てられ、麻につるゝ蓬とて、其方までが身持ちも固く、一度も男に肌觸れぬと聞き及ぶ。器量といひ風俗といひ、あつたら惜しき日蔭の花。殊さら男選みとあれば、疑ひもなき手いらずの水上げは、この義弘が今宵から、抱いて寢るワ。

〽ほやりと笑ふしほの目に、仁王の戀する如くなり、はつと思へど夕秀は、わざと額を疊につけ。

夕秀 私し風情の賤しき女、お臺樣の思し召し、一家中へ聞えても、有り難い事なれども、御寢間のお伽を致せよとは、と、女ひでりはあるまいし、家來の娘をわつけもないれて下さりませ。ほんに誓文殿樣を、我が君樣を笑はせまするも如何。この儀は御免なさ微塵も嫌ひは致し

ませぬ。慮外もいとはずつべこべと、お詞背くも君のお爲。

〽辭儀する詞の控へ綱、切れもやせんと案じゐる。

義弘　ホヽ、この義弘が云ひ出す事、二言と詞を返す者、恐らくは覺えず、女に稀れなる大膽者、出かした出かした。さりながら、天下の主となるこの義弘、十二人までは女房持つても苦しからず。否でも應でも妾にするぞ。

〽深く魅入れし鰐の口、遁れるだけはと手をつかへ。

夕秀　冥加にあまる御意なれど、わたしはちつと譯あつて、一生男に肌觸れて、身を穢す事ならぬといふ、申し譯は、頭に差したる白羽の鏑矢。詳しい樣子は父上に、お尋ねあれば知れまする。

〽云ふに差出る關口隼人。

隼人　これサ夕秀どの、惡い合點。殿樣に惚れられるは、こなたの爲に福德の三年目。忝ないとお受け申すが、上分別でござらう。

玄蕃　左やうでござる。親御も浮み上がる事、第一その頭に差してゐる白羽の矢が邪魔にならう。ドレ、某が拔いて進ぜう。

〽立ち寄ればむつとせき上げ。

ト野口玄蕃、立ちかゝるを夕秀突きのけて

夕秀　コリヤ、何となさるゝ。親新洞左衛門が御前に居ぬと高なしの我まゝ。男を持たぬはどういふ譯か、仔細も知らず、親達が浮み上がる、イヤ果報ぢやの福德のと、慾に穢れたその詞、そんな女子ぢやと思うたら、免さぬぞや。

〽睨みつけられ理窟づめ、云ひ込められて兩人は、手持ち無沙汰に尻込みす。

玄蕃　コレサ〳〵夕秀どの、斯うでござらう。内證で隱し男を拵らへ置き、その男への心中立て。外の矢先は通さぬといふ心で、起請代りのこの鏑矢、差してゐるに違ひあるまい。

隼人　サア、不義者の名を云はつしやい。

夕秀　サア、その儀は。

兩人　サア〳〵〳〵。

隼人　何とでござる、夕秀どの。

〽責め問はれても夕秀は、元より覺えなみだ聲。

ト敵役兩人、左右より立ちかゝる。

夕秀　こは無體なお尋ね。わたしも木竹の身ではなし、惚れてくれる殿御があれば、欲しうならうてなんとせう。持

つに持たれぬ譯あつて、脊丈の延びたこの年まで、人の數にも入らぬ身を、不愍と思うて下さりませ。さら〳〵不義の男はなし。疑ひ晴らして下さりませ。

〽身を悔みたる恨み泣き、涙片手に詫びけれど。

義弘　ヤア、まだ男めを庇ひ居る。よし〳〵、云はせやうがある。ソレ兩人。

隼人　サア、夕秀どの、不義の相手を白狀めされ。

玄蕃　何とでござる、夕秀どの。

ト左右よりキツと云ふ。この時揚げ幕にて

新洞　いづれも待つた。

兩人　あの聲は。

新洞　その申し譯、それへ參つて致すでござらう。

〽やれ待ち給へと聲かけて、立ち出づる新洞左衞門。

ト序の舞になり、新洞左衞門、白髮鬘、立烏帽子、大紋素袍にて出て來り、直ぐに舞臺へ來て、兩人を突きのける。

隼人　貴殿は新洞左衞門どの。

玄蕃　只今出仕召されたか。

新洞　コリヤ兩人、娘夕秀を何と召さるゝ。

隼人　オヽ、不義の相手を

兩人　詮議するのだ。

新洞　その不義の相手が聞きたくば、某が云つて聞かさう。娘の隱し男と云ふは、忝なくも我が朝の神の司。

兩人　ヤア。

ト悄りする。

新洞　なんと肝が潰れたか。シタガ、斯うばかりぢや合點がゆくまい。コレ、殿も耳の穴をさらへて、よう聞かしやれ。この大内の御先祖、伊勢兩宮を當國へ觀請なされ、その社より一人づゝ、御座子を儲けとり給ふ。印には家の棟へ、不思議に白羽の鏑矢立つ、その役を勤めた我が娘、一旦神に仕へし女、一生男を持たすまいと、誓ひの爲に神明の、鏑矢を頭に差させて不淨を拂はす。それを無體に拔き取つて、妾にするの足かけのと、罰を受けるが合點か。その上これまで願の、たるい程諫めても、聞入れのねえ謀叛の企て。今となつて意見もせぬは、所詮毒食はゞ皿と諦めてする奉公。まだろく〳〵望みも達せず、榮耀らしい妾狂ひ。まだ早い。取措き召され。

〽病犬の咬みつく如く、只一口わんとばかり、膠もしやしやりもなかりける。性急なる大内之介、堪えかねてす

つくと立ち。
義弘　さてはいよ〳〵推量の通り、親も共に呑み込んで、内證に男があるな。我が心に從はぬ腹癒せ。眞ッ二つに討ち放し、その男めに鼻明かせてくれん。覺悟ひろげ。
〽大太刀すらりと拔き放せば、惡びれもせず押直り。
夕秀　父上まで深きお疑ひ、曇りなき身は天道が正直。お手にかゝるが申し譯。
〽合掌したる健氣さを、見やりもせぬ片意地親仁。
ト夕秀思ひ入れあつて、二重の上へ來て合掌する。
サア、御前樣、御存分に遊ばされませ。
義弘　オヽ、好い覺悟だ。うぬ。
ト刀拔き放し、目先へ突きつけ、二三度切りかゝろこなし。新洞左衛門、夕秀の方を見向きもせず居る。義弘見て思ひ入れ、
死太い女郎。もうこの上は、是非に及ばぬ。
〽既に危ふき太刀の下、大内の御臺走り出で。
ト御臺櫻木、走り出て
櫻木　先づお待ち遊ばしませ。重々のお腹立ち、御尤もとは云ひながら、戀ばつかりは片押しに、云ふ程埒の明かぬもの。自らにお任せあらば、何卒進めて今日のうち、お心に從はせませう。
〽透しなだめる物腰に、貞女のしるし現はせり、戀は曲者鬼にも涙。
義弘　今討ち放す奴なれども、其方が詞なれば、御身に預ける。返事が遲いと許さぬぞ。
〽詞のたるみに御臺は心得。
櫻木　お氣遣ひ遊ばすな。たつた今御返事を。夕秀どの、用事もあり。其方は此方へ。
〽夕秀を引立てゝ、尾を踏む心地虎の間へ、伴ひ入らせ給ひけり。
ト御臺櫻木、夕秀の手を引き、思ひ入れあつて奧へ入る。
〽後には主從物をも云はず、あなたは七面、こなたは苦面、睨み合うて居る所へ。
ト皆々思ひ入れ。バタ〳〵になり、侍ひ一人出て來り
侍ひ　ハッ、申し上げます。國々の諸侯より、寶を持參仕つてござりまする。
ト云ひ捨てゝ入る。義弘、思ひ入れあつて二疊臺へ住ふ。
〽僅かに繕ろふ大將の、衣紋美々しく座を占めて、待つ

間程なく入り來る、青貝の机うや〳〵しく、目八分に差上げて。
ト序の舞になり、大名三人、銘々獻上の品を三方に載せ持ち出る。後より上下形の大勢、同じく品を持ち、舞臺へ來り、下の方へ並ぶ。
大一　二つ並べし珊瑚の枕、菊地の陶全姿が、寢た間も離さぬ重寶なれども、勅諚とあるゆゑ、持參仕つてござりまする。
〽廣縁に押し直す、次に豐後の友方大學。
大二　水晶のこの簾は、その昔、晉の國より渡りし寶、庭に掛くれば風を生じ。
〽自然と雨を降らしつゝ、暑き時分はひいやりと、西瓜もどき夕立もどきと差上ぐる。
大三　拙者の持參は肥前の國、海月式部が重寶にて、白龍石といふ硯、日本一の器物なり。
〽おのれと水を涌き出し、無精者には第一の、寶なりとぞ云ひ上ぐる、その外松浦五島の一族、筑紫表の國主城主、名物寶を臺に据ゑ、廣縁狹しと並べたり。
ト銘々持參の品をそこへ直し
大一　即ち家に傳はる寶。

皆々　持參仕つてござります。
〽檢分の役人新洞左衞門、腹は立てどもその日の役目、不精無精に見改め。
ト新洞左衞門、こなしあつて一々見て
新左　いづれも寶に相違ない。誰れかある、この品々、藏の内へ納めさつしやい。
隼玄　ハツ。
ト品々を片づける。
大一　先づは首尾よく獻上の品、御受納下され
皆々　有り難う存じます。
〽諸國の武士も安堵の胸、皆々旅宿へ立ち歸る。
ト管絃になり、大名皆々下座へ入る。
〽遙かに下がつて筑前の城主、重氏が執權、物に騷がぬ監物太郎、悠々とこそ入り來る。
ト此うち序の舞になり、監物太郎、上下大小にて出て來り、直ぐに舞臺へ來て
監物　ハツ、筑前の城主、加藤左衞門重氏が家來、監物太郎、只今出仕いたしてござる。
〽義弘つく〴〵打見やり。
義弘　九州の大名、殘らず寶を差上げしに、加藤の家より

何として、寶は送らぬぞ。宣旨を背くか。但しは氣儘か。
ヘきめつくれば、ちつとも動ぜず。
監物　御尤もの御不審。勅諚とある上は、如何で違背の候ふべき。併し筑前は小國ゆゑ、差上ぐる寶とては候はず。
義弘　イ、ヤ、さうは云はさぬ。大名の家に寶なくて、家督の繼目は、何を以て規模とする。
監物　イヤ、我が國は仁義禮智、五常を寶として國家を治むる。但し、この國には器財を以て寶とし、君子の教へを寶とはなされぬか。
ヘ理窟を詰めて云ひ込むれば、元より不才の大内之介、返す詞もなかりけり、物に堪へぬ新洞左衛門。
新洞　默れ、監物太郎がその一言、知るまいと思ふか。この新洞左衛門ばかりは、その手ぢや行かぬ、出直せ〳〵。
監物　イヤ新洞、拙者が申す事に、批判があらば承はらう。
新洞　オ、、望みなら云つて聞かさう。
監物　承はらう。
新洞　云ふぞよ。
監物　聞くぞよ。
新洞　云つて聞かさう。
ヘと摺り寄つて。
いま汝が云ひし仁義禮智信の、五常を以て寶となすとは、唐土臨潼の會に善を以て寶とすると、伍子胥が云ひし古手引き事、その手ぢやゆかぬ。加藤の家には齊國より渡りし、夜明珠といふ名玉、いま玉女神と神に仰ぎ、尊敬する事紛れなし。是非玉を渡さずば、大軍を以て押し寄せ、家國ともにぶッ潰さうか。
監物　サアそれは。
新洞　玉を渡すか。
監物　サアそれは。
兩人　サア〳〵〳〵。
新洞　コレ、われより年は上だワ。エ、へ、、、、。
ヘ退引きさせぬ手詰めの難題、この場を遁がれて分別と、無事を繕らふ當座の受合ひ。
監物　成る程、玉女神を夜明珠と、御存じの上は力なし。如何にも寶珠をお渡し申さん。さりながら、年を數へて廿歳と限り、ついに男の肌觸れず、男女の道を知らぬ女があれば、玉を迎へに越さるべし。もし年に過不足あるか、一度でも男に肌觸れ、身の穢れたる女の手に携へ持

たば、忽ち玉の光を失なひ、石瓦も同じ如くとなる。その割符の合ひたる女があらば、何時にても玉を渡すに相違はなし。先づ某はお暇仕らん。
〽先づお暇と立ち上がる。
ト この時奥にて、
夕秀　待つた。その女これにあり、暫らくお待ち下さりませ。
〽走り出でたる夕秀が、御前に向ひ頭を下げ。
ト 管絃になり、下座より夕秀、出て來り
不義の男があるゆゑ、お心に從はぬとのお疑ひ。そのお怒りを晴らす爲、ついに妹脊の道知らず、身を穢さぬといふ申し譯、この使ひ私しに、仰せつけられ下さりませうならば、有り難う存じまする。
〽思ひ入つてぞ願ひける、監物太郎もぎよつとせしが。
監物　コリヤ女、身の穢れぬが定ならば、如何にも寶は渡さうが、見事寶の檢分するかよ。
〽何がな云うて困らす思案。
新洞　オヽ、氣遣ひするな。檢分はこの新洞左衞門、娘に連れだち行くからは、似せ物は食はぬぞよ。
監物　加藤の家の名玉に、似せと誠が二つあらうか。馬鹿な事を。
新洞　見事その詞に相違ないか。
監物　念には及ばぬ。
新洞　御玉の出迎ひ、キッと詞を番うたぞよ。
監物　席を改め、相待ち居るぞ。
〽詞すゞしく云ひはなし、館をさして立歸る。
ト 監物太郎、思ひ入れあつて花道へ入る。
隼人　サア、夕秀どの。
玄蕃　急いで御用意。
夕秀　サア〳〵父さん、早う〳〵。
新洞　コリヤ娘、待て。其方には惚れた男がある。此方の體は清淨でも、外から穢れを添ふるといふもの。ソレ、その男が思ひ切らぬと云はぬうちは、滅多には行かれまい。
〽戀慕の絆を切らせん爲、大内が耳に打て響けを、聞き流しで不興顏、返答もなき折からに、御臺所は立ち出で給ひ。
ト 此うち櫻木出て、義弘の側へ來り
櫻木　申し、我が君樣、女一人に繋がれて、大切なる夜光の玉、この度受取り給はずば、禁裏表の首尾も如何。夕

秀が事さつぱりと、思ひ切つたる證據を見せ、使ひを仰せつけられませう。

ト義弘キッと思案の思ひ入れあつて

義弘　思ひ切つた。

櫻木　エ、。

義弘　思ひ切つたといふ證據を見せん。

〽後にかけたる弓に矢つがひ。

見よや兩人。命に替へて思ひ込んだる戀なれども、大望成就の妨げなれば、この戀ふッつと思ひ切つた。證據の鏑矢、受取れよ。

〽切つて放せば松の木に、はッしと立つたる有樣を。

ト矢をつがひ上手の松の木へ射る。

〽夕秀喜び走りより、矢を拔き取つて押し戴き。

ト夕秀、思ひ入れあつて松の側へ來り、矢へ手をかける。拔けぬゆゑ思ひ入れあつて

夕秀　コレナウ父上、このお使ひを仕負ふせなば、枕一つで廿歳まで、ねゝした事を君への云ひ譯、君の心も晴れ晴れと、曇らぬ女の、ナウ父さん。

新洞　鏡にせよ。

〽帶引きしめる親子の喜び。

トまた矢を拔かうとする。新洞左衞門、夕秀を脇へやり、矢を拔き取つて夕秀にやる。

新洞　出かした娘、これより直ぐに。

夕秀　御玉のお迎ひ。

義弘　兩人、早行け。

ト此うち新洞左衞門、夕秀思ひ入れあつて、花道のよき所まで行きかける。

早行け。

新洞　ハッ。

トこなし、

夕秀　父さん。

新洞　娘。

ト顏見合せ、新洞左衞門、中啓にて膝を叩く。これを木の頭。

義弘　行け〳〵。

トきざみ、よろしく、早舞ひにて、

ひやうし幕

四幕目

加藤館宮守酒の場

役名――監物太郎信俊。桑原女之助。石童丸。監物妻、橋立。重氏御臺、牧の方。腰元、桔梗。同、紅梅。娘、夕秀。多々羅新洞左衛門。

本舞臺、三間の間、正面金襖、上の方九尺の障子屋體、すべて重氏館の體。爰に腰元、三方に誂らへの神酒徳利、供へ物を持ち居る。調べにて幕明く。

〽三國名譽の夜光の玉、玉女神と勸請し、秋の最中の祭り日に、館賑はふばかりなり。

桔梗　コレ、紅梅どの、今日はお屋敷は、玉女神樣とやらのお祭りぢやとて、此やうに今朝からのお取込み。

紅梅　それは毎年、秋の最中は吉例の事なれど、今年は殿樣がお出でなされぬゆゑ、いつもと違うて、何やら張合ひがないわいなう。

桔梗　それにつけても此方の殿樣は、あのやうな美しい奥樣を殘し、御出家におなりなさるとは、どうした事であらうぞいの。

紅梅　それも何やら、お好きなされた千鳥さまと、御臺樣の髮の毛が、蛇になつたとやら云ふ事で、それから御出家遊ばしたといなう。

〽噂半へ監物が、妻の橋立立ち出で〻。

ト襖を明け橋立、裲襠衣裳にて出て

橋立　これはしたり腰元ども、又してもお上の噂。少と嗜なんだがよからうぞや。

〽襖押し明け御臺所、石童君を伴ひて、廣書院に立ち出で給ふ。

ト奥より牧の方、裲襠衣裳、石童丸も壺折、指貫、稚兒髷にて出て來り、橋立思ひ入れあつて

橋立　これは御臺樣、今日は玉女神のお祭り、おめでたう存じまする。夫監物太郎も、大内義弘の招きに依つて參られ、御神事に外れし段、眞平御免なされませう。

〽斷り申せば御臺所。

牧の　心よからぬ大内の呼び寄せ、我が夫の行くへも知れず、石童は幼少なり、何云ひ越さんも計られず、たゞ懷かしきは重氏さま。

〽かこち給へば石童君。

石童　母樣、お氣遣ひ遊ばすな。追ッつけ父樣の在所を尋

ねて、わたしが迎ひに參りませう。

〽おとなしやかな諫めにも、涙もとめる折からに、國一番の濡れ男、その名も自然と女之助、兒監物が勘當うけ、詫びを頼みの廣書院、うぢ／＼として入り來る、御臺は何のお心なく。

ト此うち矢張り調べにて、花道より女之助、着流し大小にて出て、直ぐに舞臺へ來り平伏する。牧の方見て

牧の　珍らしや女之助、この稚若も尋ねしが、何ゆゑ登城召されぬぞ。

〽仰せにはつと頭を下げ。

女之　私し儀不行跡ゆゑ、兒監物太郎に勘當受け、それなる橋立どのを頼み、様々詫ぶれど聞入れなく、是非に及ばず今日は、若君様や御臺所の、御詞をかる所存。恐れながら然るべう、頼み上げ奉ります。

〽願ひを聞いて驚ろき給ひ。

牧の　てもさても、固い其方のなに越度。軍法秘密の論議でも、しやつた上のいさかひかや。

〽尋ね給ふを側に聞く、橋立は吹き出し。

橋立　御臺様のあの人を、固いとはお目違ひ。その和らか自墮落さ。軍法論議はさて措いて、女中論議で家中は大揉め。お上にも御存じの、前の內儀おらちどのは、夫監物太郎、都より貰ひ歸り、夫婦に致され、退引きならぬ女房を、子持ちになると乳臭いとて離別して、お物師のお縫どのとちんちん、それも續かず弓頭の、娘おつるを娶り持つと、去なしてお腰元のお夏どの、それから仲居お茶の間の、白髮交りも色めいて、そこでは悋氣妬では喧嘩、何か起れば女之助、わたしが夫ぢや殿御ぢやと、云ひ募つての大騷動、固い夫の面汚しと、勘當せしも無理ならず。

〽語れば御臺も興覺め顔、若君なんの差別なく。

石童　女之助はいかい苦勞。それから、喧嘩の終ひは、どうなつた。

〽根問ひにほつと息づまり。

女之　サア、その後の儀は、面目もなき仕合せ。

〽あやまり入りし風情なり、御臺もをかしく。

牧の　若氣の至りも、あんまり興がる。以後を嗜なむ心なら、共に詫びして得さすべし。幸ひ今日はお鎭の祭り、玉女神の御前にて。

女之　きつと金打いたしませう。

橋立　當座遁がれはならぬぞえ。

女之　神に對して何偽り。
牧の　その詞に相違なくば、サア、妾と一緒に。
橋立　先づ、入らせられませう。
ト思ひ入れあつて唄になり、牧の方、石童丸の手を引き、女之助付いて入る。
〽程なく歸る監物太郎、大内が難題胸に釘、打つて替りし思案もなく、廣間へ通れば、妻の橋立出で迎ひ。
ト序の舞になり、監物太郎、思案の思ひ入れにて出る。橋立思ひ入れあつて、
橋立　我が夫信俊どの、たゞ今お歸りなされしか。して、義弘よりの呼び出しは、如何なる樣子でござりまする。
監物　されば、大内義弘は都の勅と偽り、近國他國の寶を集むる、これ正しく謀叛の下拵らへと見拔きしゆゑ、我が國には寶はなし、仁義禮智信の五常を以て寶とすと、伍子胥が辯をかつて、まんまと云ひ伏せしに、多々羅新洞左衞門といふ奴、夜光の珠の來由を知つて、汝が家に玉女神と崇むるは、齊國より渡りし夜明珠、寶なしとは云はせじと明白の一言。爭ふにも爭はれず、成る程その寶あり、併し、世の常のたづさはる事叶はず、廿歳と限つて妹脊の道知らざる女あらば、受取りに越されよ、男女の分ち知りつる者が手に觸るれば、玉の光失ふと、云ひ傳へを難題に、當惑させんと思ひの外、彼の新洞が娘、當年廿歳、まだこれまで不犯にて、この役目を乞ひ受け、親子連れにて受取りに來る筈。代々加藤の家の重寶、渡さば家滅亡、否と云はゞ大軍を以て攻め來らん。さすれば御臺若君のお命も危ふし。兎やせん角やせんと胸はどうづき。女房、思案があらば、云うて見やれ。
〽語るを聞いて女房は、ほつと溜息つきながら。
橋立　只この上は寶物を、急に拵らへ渡すより、外の事はござりますまい。
〽と云ふを打ち消し。
監物　イヤ〳〵、その儀は思ひつけども、うつかり受取る新洞左衞門に非ず。ハテ、どうがな。
〽はてどうがなと大ずゐの骨も碎くる一思案、及ばずながらと橋立も、智慧の袋の棚さがし、暗闇搜す如くにて、しばし途方に暮れけるが。
ト兩人思案の思ひ入れ。橋立こなしあつて
橋立　イヤ申し、斯やうの時には膝とも談合と申します。幸ひ弟御の女之助さま、勘當の詫びにお出で。機嫌直され共々に、御相談なされませいなア。

〽云ふに暫らく工風を廻らし。
監物　ムウ、ナニ、放埒者の弟が參つて居るとな。コレ。
　ト橋立に囁く。思ひ入れあつて
橋立　ムウ。すりや、色に事寄せ使ひの女を。
監物　お家の爲には人をも身をも。
橋立　恨みは恨み忠義の道。
監物　道は二筋、戀の罠。
橋立　信俊どの。
監物　女房來やれ。
〽女房來やれと立ち上がる、心知らねど橋立も、夫の詞を力草、伴ひ一間へ入りにける。
　ト兩人思ひ入れあつて奧へ入る。この時揚げ幕にて
呼び　お使者のお入り。
　ト誂らへ三味線入り太鼓謡になり、花道より夕秀、振り袖、襠裲衣裳にて出て、花道へとまり
夕秀　誰ぞお取次頼みまする。
　ト奧より女之助、上下衣裳に着替へ出て來り
女之　これは〳〵、お使者には御苦勞千萬。イザ先づお通り下さりませう。
　トこれにて夕秀、女之助に見惚れる事よろしくあつて、鳴り物替つて管絃になり、夕秀、思ひ入れあつて
〽思ひ通はす目遣ひに、可愛らしさが身にこたへ、互ひに顏を見交して、上座へこそは通りける、橋立やがて出で迎ひ。
　ト奧より橋立、出て來り
橋立　これは〳〵お女中の、御苦勞にようこそお出で。私しは監物太郎が女房、橋立と申す者。又これなるは主人の弟、女之助と申して、武道は勿論、歌の道戀の道、並ぶ方なき優男。即ち今日の御馳走役。御用があればあの人に、仰せつけ下さりませ。
〽猫に鰹の引き合せ、如何な釋迦でも精進を、落ちても見たき心なり、女同志とて此方もにこやか。
夕秀　これはいかいお心遣ひ。私しは夕秀と申して、まだ人數にも入らぬ女。斯やうな役に參る筈はなけれど、人好みする寶物、親新洞左衛門はお次に控へ、マア其方が受取つて來いと、不相應の役目を受け、案じながら參りしなり。事ならお渡し下さりませ。
橋立　何がさて、お渡し申さいで何と致しませう。夫も只今罷り歸り、お藏の掃除、暫らくお隙が入りませう。幸ひ今日はお寶の祭、神前へ備へし御酒、頂戴遊ばし不淨

を清め、お受取りなされませ。ソレ、腰元ども、お神酒をこれへ。

腰元　畏まりました。

ト管絃になり、奥より、腰元二人、三方に神酒と土器とを載せ、持ち出て來り、眞中へ置いて入る。

〽對の德利を三方に、腰元携へ差出だす、女之助近く差寄り。

ト女之助、思ひ入れあつて

女之　敵を招いて毒酒を盛り、約を變ぜし例もあり、毒味いたして進ぜう。

〽神酒を兩方つぎ合せ、土器になみ〳〵うけ、つッと干して夕秀に。

ト德利の神酒を兩方土器へつぎ、呑む事あつて、夕秀にさして

頂戴あれ。

〽頂戴あれとさしければ。

夕秀　これは御念の入りし事、緣に繫がる神の酒、何お疑ひ申しませう。

〽一つ受けて呑む酒の、忽ち五臟に浸み渡り、亂れかゝりし顏色の、行儀も崩れ橋立が。

ト これにて夕秀、土器を取り上げる。女之助酌する。夕秀呑むを橋立見て思ひ入れ。

〽さアしてやつたりと橋立が、わざと話も打ち解けて。

橋立　近頃卒爾ながら、頭に差されし白羽の矢は、如何なるゆゑでござりまする。

夕秀　サア、これこそは私しが殿御を持たぬ申し譯。幼ない時この白羽の矢、家の棟へ立ちしより、神のお伽の御座子となりしは幸ひ、好い男好いた殿御のあるまでは、人目の關のこの白羽、片時も早う貰ふ氣の、お人があらば、この矢をば。

〽お人があらばやりたしと、女之助が側近く、にじり寄りたる亂れ咲き、花あらば折れ折る人は、主樣ならでと縋り寄る、爰ぞと共に摺り寄るを他に見て居る兄嫁の、手前を恥ぢて薄紅葉、たかをしめたる橋立が、側からあせつてそれそこをと、ぢつと引寄せ。

ト此うち夕秀、酒の廻りし體にて女之助に寄り添ふ。女之助もこなしあつて寄らうとする。橋立を見て思ひ入れ、いろ〳〵こなしあつて

橋立　二世の固めが、これまでの、不義徒らの歸り花、仇花ならば、御無用になされませいなア。

〽そやしかくれば夕秀は。

夕秀　でも粹な兒嬢御、惡性男をわしが手で、こなして見せうが、下さんすか。

橋立　仰せに及ばず、互ひの緣づく。シタガ、口先ばかりにて、どうの斯うのは皆浮氣。誠を云はばあの一間、その氣なくば、措かしやんせ。

〽はりかけられて。

夕秀　イヤ申し、戀は親にもお主にも、見替へてするが女の意地。後へは寄らぬ。コレ、ござんせ。

〽女之助を引立てる、これぞ企みの勝落ちと、思へどどうやら恥かしく、尻込みをする橋立が、鬼も頼めば人食はめ、いらざるお辭儀を無理やりに、手早く後より押しやつて、一間へこそは。

ト夕秀、女之助を連れて一間へ入る。

〽橋立あたり見廻して。

橋立　女之助の放埓も禍ひ三年、時の用、仕負ふせたり。

〽仕負ふせたりと思ふ所へ、多々羅新洞左衛門、生れついたる氣短かに、待ち久しくて次の間より、歩み出で。

ト序の舞になり、多々羅新洞左衛門、立烏帽子、素袍にて出て來り、花道にとまり

新洞　コレ女中、コレサ女中。

トきつと云ふ。橋立、悧りして、

橋立　ハイ。

新洞　娘は寶珠を受取つたか。まだか、どうぢや。聞いておくりやれ。

橋立　これは〳〵御苦勞千萬、先づこれへお入り下されませう。

ト矢張り鳴り物にて舞臺へ來る。

〽先づ〳〵これへと招じける。

ト始終奥の方へ思ひ入れ。

新洞　して、娘は、玉を受取つたか。

橋立　ハイ、只今お渡し申しまする。少しの間お待ち下さりませ。その間定めて御退屈。ソレ、誰ぞ煙草盆、お茶持て來いよ。

トいろ〳〵こなし、

新洞　イヤ、生れついて煙草は嫌ひだ。

橋立　左やうならばお茶なりと。

新洞　イ、ヤ、茶も飲まぬ。

橋立　そんなら、お菓子でも取寄せませう。

新洞　菓子も嫌ひ。

トいろ〳〵思ひ入れあつて

橋立　お茶もお菓子もお嫌ひなら、お床几を差上げませう。

ト有り合ふ床几を出す。

新洞　床几は役目だ。恩には着ぬ。

〽腰打ちかける其うちに、橋立は一間の首尾、如何と思ひ立ちつ居つ、うろたへ廻るを。

コレお女中。コレサ女中、何をキヨロ〳〵しめさるのだ。待ちかねて烏帽子首が、強ばり申すワ。但し、玉を渡さずば、奥へ踏ん込まうか。

ト立ちかゝるを止めて

橋立　ア、申し、只今がお祭の最中でござります。

新洞　ナニ、祭とは。

橋立　サア、その祭とは、オ、、それ〳〵、夜光の玉のお祭。先づ最初が鼻高、その鼻の高さが。

〽三間半。

男にしたらば廢り者、次が御輿に提灯で、その提灯が餅搗いて、てうさやようさ。

ト思はず新洞左衞門の側へ行く。

新洞　エヽ、何を馬鹿な。コレ、神事の話し聞きには來ぬ。

〽御玉ばかりを受取るに、手間どるは合點がゆかぬ。

〽睨み廻せば。

橋立　オ、けうと。輕はずみになんぞいたア。玉と云ふに思はなく。

〽唐土にては卞和が璧。

我が朝にては龍の玉。

〽伊勢の國にはお杉とお玉。

飛んだは人魂、怖いはあなたの

新洞　なんと。

橋立　お目の玉。

〽下女の玉でも輕々しう、受取らるゝものだいなア。

マア、あなたはお幾つでござりますえ。

新洞　年は六十になり申すワ。

橋立　さつてもお若い。さうしてお名わえ。

新洞　新洞左衞門と云ふワ。

橋立　お耳は聞えますかえ。

新洞　隨分聞え申す。蟻の囁くも聞える。

橋立　さうしてお目はえ。

新洞　一丁あなたの高札も、苦なしに讀める。

橋立　お齒はえ。

新洞　石臼も嚙み割る。

橋立　サア、そのよいうちからは人は養生。折々疝氣は出やうがな。

新洞　疝氣の虫は、疾に轉宅いたしたワ。

橋立　でも折々は出やうがな。

新洞　ア、出ようとまゝよ。

橋立　イエ〳〵、さう氣をいらつがお毒。それ〳〵、頭に余ッぽど白髮、わたしが抜いて上げませう。

〽立ち寄れば突き飛ばし。

新洞　エ、七面倒な女め。

〽七面倒なと立ち上がり。

ヤア〳〵娘、夜光の玉を受取つたか。何して居るぞ。

〽呼ばはる聲の響きてや、心靜かに寶塔を、携へ出づる夕秀が、後に續いて女之助、出づるや否や餘敬し。

ト此うちツッと奥より夕秀、誂らへの寶塔を持ち、目八分に捧げ出る。後より女之助、出て來り

女之　忝なくも寶塔に、籠めたるは御玉にて、暗を照すこと、日輪よりも明かなるゆゑ、夜光の玉とは。

〽名けたり。

かほど餘き御寶を、輕々しく受取らしやつた、夕秀どのは仕合せ者。

〽挨拶すれば。

夕秀　これも皆、あなたのお世話ゆゑ。

〽表向きなる互ひの挨拶、新洞左衛門笑壺に入り。

新洞　出かした娘、玉を異議なく受取つたは、出かした出かした。併し、それから検分の役はこの新洞、改めて拜禮せん。いづれも共に拜まれよ。

〽詞に從ひ女之助、橋立ともに頭を下げて、はつとばかりに敬ひ居る、夕秀心に信を取り。

ト皆々思ひ入れ。夕秀、眞中へ寶塔を直し

夕秀　どなたも御玉の御感德、拜み給へや。

〽拜み給へと寶塔を、開き見すればこは如何に、眞黑々と黑玉の、墨をつかれし如くにて、これはとばかり夕秀親子、女之助も橋立も、共に呆れし顏つきにて、暫し詞もなかりしが、新洞怒つて。

ト此うち夕秀、寶塔を開く。内に寶珠、眞黑の玉にて飾りある。皆々恟り。新洞左衛門キッとなつて

新洞　大盜人の監物太郞、檢めずんば似せ物を、持たせて歸す企みよな。イデ、寶藏へ踏ん込んで、誠の玉を摑んでくれん。



片岡市蔵の新洞左衛門

〽駈け行く向うをさつと明け、内より出づる監物太郎。

ト新洞左衛門、ツカ〳〵と奥へ行かうとする。監物太郎出て來り、立ち塞がり

監物　コリヤ〳〵新洞、先達て云ふ如く、不淨の女が受取らば、玉の光を失ふと云ひしは爰の事。サア、その女に詮議がかゝつた。其處一寸も動くまいぞ。

〽打つて變りし詮議の裏釘、いがみかゝつて橋立が。

橋立　コレ、夕秀どの、身に覺えがあるならば、有樣に白狀あれ。一間の內で不義かましい、みだらな事はなかりしか。

〽まざ〳〵しげに問ひかけられ、何といひ譯夕秀が、すべきやうなく髮に差す、白羽の矢をば拔くと早、矢の根を咽喉に突き立つる、これはと驚く人よりも、半狂亂の新洞左衛門、抱きかゝへて。

ト此うち夕秀、思ひ入れあつて、頭の矢を取り咽喉へ突き立てる。皆々愕り。新洞左衛門、驚ろき介抱して

新洞　コリヤ娘、何ゆゑに自害するのだ。云ひ譯なくばないやうに、仕樣もやうあらうのに、コレ情ない、大事の娘を、殺すわやい〳〵。

〽さしもに猛き武士も、子ゆゑの闇に目も眩み、擣と座して泣き居たり、今を限りの夕秀が、淚片手に。

夕秀　ナウ恥かしや、自らは、このお館へ來るよりも、さる人をば思ひ染め、情の道に迷へども、大事の役目と心の駒。

〽繫ぎとめしも情なや。御內室のもてなし、あれなる神酒を飲むよりも。

〽不思議や五臟に浸み渡り、大事を忘れなんのその。まゝよの上にはり持たされ、ついに下紐解きそめて。

〽是非なく身をば穢せしぞや。云ひ譯ならぬ徒らを、詮議に合うて恥かいて、斯くなりゆくは神の罰。

〽神明怒りの鏑矢に、射殺さるゝを覺悟して。死ぬる心の悲しさを。

〽推量してと泣く淚、袖にあまれば血に染みて、見る目もいとゞ哀れなり、樣子を聞いて新洞左衛門、すつくと立つて走り寄り、娘が云ひし神酒德利に、きつと目をつけ。

ト新洞左衛門思ひ入れ。有り合ふ神酒德利に目をつけ

新洞　ヤア心得ぬ。若氣とは云ひながら、さほどに亂るゝ娘に非ず。仔細はこの內、顯はし見ん。

〽刀の柄にて打ち割り〳〵、打ち割る中より宮守の番ひ、現はれ出づれば、しつかと捕へ。

ト刀の柄にて徳利を割る、中より宮守出る。兩手にて掴み、キツとなつて

さてこそ〳〵、唐土張華が博物志に、交合の宮守を引裂き、酒に浸してその氣を飲ませば、忽ち女の精根亂すと、書き現はす。その理を知つて娘に飲ませ、性根を亂して徒らさせ、身が穢れたゆゑ光失せしと、科を此方へ塗りつけて、似せ物を渡す下拵らへ。企んだな、拵らへたな。憎さも憎し、不義の相手これへ出せ。ずた〳〵に切り苛なんで、腹癒せくれん。

〽三寸俎板見抜きし兩眼、睨みつけてぞ詰め寄する、ちつとも臆せず女之助。

女之　その不義の相手は某、サア、御存分になされませ。

トそこへ直る、新洞左衞門キツと見て

新洞　われか。いい覺悟だ。觀念ひろげ。

〽振り上ぐる刃の下、これなら待つてと夕秀が、苦しむ體に氣も弱り、心も折れて詮方も、なくより外の事ぞなき、苦しき中にも親の顏、ぢろ〳〵と見て。

ト此うち新洞左衞門、女之助を切らうとする。夕秀、袖にとりつき枷になるゆゑ切りかねて、いろ〳〵愁ひの思ひ入れ。夕秀、苦しみながら思ひ入れあつて

夕秀　おいとしや父樣、親一人子一人の、わたしに別るゝお前の心が悲しい。お腹も立たうが、さりながら。

〽例へ宮守の業ならずとも、ちよつと見るから思ひ染め、心が先へ穢れたもの。

帶紐とかずと御寶の、光失せいで何とせう。

〽假の契りも二世の縁、枕交せば我が殿御。

聟は子と云ふ世の習はし、わたしが死んだ後にても、形見と思ひ愍ろに、おいとしがつて下さりませ。また女之助さまも父上を、親と思うて折ふしの、訪ひ音信を頼みます。親に先立つわたしの心、推量して、可愛と思うてたゞ一言、未來までも夫婦ぞと、云うて聞かして下さりませ。

〽しやくり上げたる哀れさを、見るに身に浸む橋立が、せめての事と介抱し、萬事を胸で諦らめて、詞に出ねど心には。

橋立　さぞやわたしが憎からう。云ひ譯するにもしられぬ仕儀。これ皆前世の約束と、思ひ諦らめ給はれや。

〽歎けばともに女之助。

女之 これまで盡せし悪性の、とゞめとなつた今の悲しさ、未來はさて措き後々萬劫、契り變らじ、夫婦ぞや。

〽云ふ聲耳に經陀羅尼、物も得云はず嬉しげに、兩手上ぐるが暇乞ひ、敢へなく息は絶えにける、わつと泣き出す新洞左衞門、地團太踏んで。

ト夕秀思ひ入れあつて落入る。新洞左衞門こなし、

新洞 エヽ、死なしたり情なや。我れ片意地な心より、一生男は持たさぬと、云うたを誠と思ひつめ、あへねえ最期をしてくれたな。未來で夫婦と喜べども、悲しむ親がこの世から、それが見えるか、たわけ者。思ひ出す事ばつかりを、云うて死なずと、便りなき、この身を早う迎へてくれ。

〽六十越して子に離れ、何樂しみの娑婆世界。情なの我が身や。不便の娘が最期やなア。

〽しやくり上げたる一徹涙、堤も切れて大川に、泥の淵なす如くなり、共に哀れと人々の、歎きのうちに監物太郎、彼の寶塔を目通りに、女之助を引き直し。

ト監物太郎、思ひ入れあつて女之助を直し

監物 汝この如く光を失ひし不義の相手、討つて渡すぞ覺悟せよ。サア新洞、受取られよ。

〽云ふ聲に、涙拂うてすつくと立ち。

新洞 ヤア、その手は食はぬ。切り立てせば助けうと思ふか。いつかな〳〵。眼前娘の敵、人手は頼まぬ。我が手にかけて眞二つ。恨みを晴らす、監物そこ退け。

〽飛びかゝつて拔き討ちに、はつしと切つたは件の名玉、これはとばかり人々は、呆れて詞もなかりしが、女之助聲をかけ。

ト新洞左衞門玉を切り、思ひ入れあつて

女之 手が廻りしか新洞左衞門、急かずとも、サア首を。

〽さしつくれば目にかけず、切り割りし玉ひツ摑み。

ト右の玉を兩手に摑み、思ひ入れあつて

新洞 ヤイ玉め、おのれ陰陽和合を嫌ひ、よう光を失うて、娘に自害させたなア。我が子の敵、思ひ知つたか。加藤の家の名玉は、目利の目からは悉皆贋玉、持つて歸つて主君に見せ、恥あらはして腹癒てくれん。必らず後でその玉は、似せ物などゝ爭ふな。誠の似せがあるならば、石童や御臺に持たせ、早くこの家を捨てさせよ。

〽云ひ教へたる詞の裏、表は怒り心には、せめて娘が手向けとも、なれよとかける情をば、袖に隠して立ち上がる、折よしと御臺若君、一間の内より現はれ給ひ。

ト此うち奥より、石童丸の手を引き、牧の方出て來り
牧の　家の爲とは云ひながら、科なき者に自害させ、新洞左衞門が歎さも理り。哀れを見るも佛の敎へ。不便の者の有樣ぢやなア。
〽悔み給へば女之助。
女之　御兩所のお身の上も氣遣ひ、幸ひ我が君高野に御座あるとの風聞、それを力にお供せん。
〽いざゝせ給へと勸め立ち、伴ひ出づれば監物太郎。
監物　ヤレ待て弟、汝生れついての好色者、未だお若き御臺所、預けやる事覺束なし。
女之　實に尤も。
〽云ふよりやがて宮守を引裂き、滴る血潮を腕に塗りつけ。
ト以前の德利より出したる宮守を引裂き、腕に摺り込み、キッとなつて
女之　これ見給へ兄者人、宮守は不義を勸むれども、その血汐は却つて不義を現はす。
〽唐土秦の始皇帝、三千人の宮女を愛し、不義あらんかと疑ひ深く。
殘らず腕にこれを塗る、不義ある者は忽ちに。

〽落ちて後なく。
なる例し。さるに依つて、ゐもりといふ字を、宮女を守るといふ心にて、宮守と書き給ふ。
〽我が朝にては萬葉集、脫ぐ沓の重なる事のかさならば、宮守のしるしかひやなからん。
沓かさなつてさへ、印は落つると讀みし歌。
〽まして三代相恩の、お主に對して不忠不義、天命いかでと云はぜも果てず。
監物　出かした、その事忘るゝな。行け。
女之　ハッ、はやお暇。
〽はやお暇と勇み立つを。
新洞　出かされた聟どの、ではない、赤の他人の女之助。必らずともに娘が事。どうなと勝手にしたがよい。
〽諫めかねたるとも涙、心はげみの女之助。
女之　我が君樣の御行くへ、尋ね求めて立ち歸らん。
監物　後に殘るはこの監物。
〽兄が情のはなむけや、御臺若君たち別れ。
ト監物太郎、懷中より袱紗包みの金を投げやる。女之助拾いて懷中し
女之　高野の山の峰にある。

牧の　我が夫ありとも歸りこん。
新洞　それはまつとし。
監物　まつまでは、
橋立　お名殘り惜しや。
新洞　いづれも、さらば。
〽互ひにさらばおさらばの聲を力に忘れ草、伴ひ館を出で給ふ、國に思ひや殘るらん。
ト此うち新洞左衛門、素袍の袖を入れ愁ひの思ひ入れ。花道へかゝる。牧の方、石童丸に女之助付き添ひ、東の假花道へかゝる。文句一杯に双方舞臺の死骸を見て、ハアと泣き落す。よろしく段切れにて、
幕の外、誂らへの愁ひ三重、時の太鼓になり、双方とも思ひ入れあつて東西へ入る。　幕

五幕目

慈尊院夢の場
玉屋與次住家の場

役目――玉屋與次。桑原女之助。石童丸。大内五郎義眞。庄屋、太郎作。御臺、牧の方、與次女房、おらち。與次娘、門田。駒形一角春秀。

口上觸れ濟むと、知らせにつき、大ドロ〳〵になり、心といふ字を日覆より引いて取る。木につき幕あく。本舞臺、三間の間、正面、茶壁の暖簾口、常足の二重、上の方障子屋體、眞中に屏風を立て廻し、いつものに所門口、すべて禿の宿、旅籠屋の模様、馬士唄にて幕明く。
ト爰に亭主、呼び立てゝゐる。花道より旅人の仕出し、捨ぜりふにて皆々泊る事あつて、殘らず奥へ入る。
〽同じ浮世に人忍ぶ、身は習はしか旅の空、筑前の三人も、宵より爰に假りの宿、笠も草鞋もとく〳〵と、寐られぬまゝに御臺所、石童丸の御手を引き、障子開いて次の間へ、立ち出で給へば女之助、後に引添ひ歩み出で。
ト此うち上の屋體より牧の方、石童丸に女之助付き添ひ、出て來り
女之　誠や人の盛衰は、定めがたしと申せとも、重氏公御在國ましませば、錦の褥に御身を添へ、透間の風も防がんに、斯く淺ましき旅泊の轉寢。御いたはしう存じまする。

牧の 〽共に悄るゝ涙を隠し。我れ〳〵親子が苦勞より、若い其方が心遣ひ。長の旅路を主なればこそ、忝ないぞや。死んでも忘れはしませぬぞや。

〽のたまふ顔の艶やかさ、旅勞れさへあの御器量、さて美しやと思ふより、ふつと目につく煩惱心、例の持病の好色が、穗に現はれて。

女之 これはしたり、改まつた仰しやりやう。忠義といふはつけたり、長々の道中を、お前樣の御供して、なんの苦勞に存じませう。我が君のござると風聞ゝる、高野山へはもう四五里。明日は慥かにお逢ひなさるゝ。さぞ明晩はしつぽりと、久々の溜り水、人目堤の切れ口を、御用心遊ばしませ。

〽仕掛けて見たる問ひ藥、おのが病に配劑の、加減は常の如くなり。

牧の マア、あの人のつがもない。例へ夫に逢ふたりとも、御出家の身なれば、その樂しみは切れてある。只歎かはしいは國の騷動、大内を滅ばし、この若を世に立てる相談。一先づ國へ御供して、立歸りたい心の願ひ。もしその上の御得心で、還俗でも遊ばしたら、ハテ、その時は。

〽とばかりにて、袂こぼるゝ靨には、いとゞ思ひや増るらん、なまめく詞を附け込むしれ者、じり〳〵と側に寄り。

女之 成る程、仰しやればそんなもの。併し、一旦浮世を捨て、御出家なされた御主人、何程仰しやるとも、よもや御還俗はなさるまい。また殿樣も無分別、これ程綺麗な美しい、旨い盛りの御臺所、捨て置いて、坊主になるとはどうした御思案、第一きつい不心中。この間から道中で、つく〴〵と存ずるに、ほんにわたしがお前のやうな女房持つたなら、拜んでばかり居りまする。なんと御相談なされぬか。

〽云ひしなツッと立ち寄つて、後より抱きしめ、なんとなんとと頰ずりは、姿でするこそうたてける、御臺は呆れて詞なく、振り放し飛び退いて。

卜此うち女之助、牧の方の後より抱きつくを、振り切つて

牧の コリヤ女之助、其方は氣ばし狂うたか。あんまりで物が云はれぬ。石童丸も聞いてゐるぞや。國許を出づる時、監物太郎が念に誓ひを立て、宮守の血を腕にまで、

娶つたぢやないか。まだ廿日にもなるやならず、それ程の大事を忘れ、人でなしの畜生め。

〽やりこめ給へば思案して、こりや色どりではゆくまいと、血相變へてげら〳〵笑ひ。

女之　如何にも國を出づる時は、さう思うて出でたれども、一月たらず夜も晝も、ても好い器量、又あるまいと、見る度に思ひの種、まさりこそすれ忘られず、もう云はうか〳〵と、堪へ〳〵て云ひ出す今宵。命がけで惚れた戀、否とあればお二人を、手にかけて拙者も自害。應とあればその通り。サア、手短かに御返事を。

〽差添を抜きはなし、大惡無道の一心が、据りきつたる眼つき、天魔の魅入りと知られけり、石童丸は稚氣に、なんの頑是も涙聲。

ト女之助、刀を抜き放し、兩人を押へ、キッと見得、

石童　死ないで叶はぬ事ならば、父様に廻り合ひ、その後死なう。それまでは、母様もおはす事、女之助、もう堪忍してたもいなう。

〽あどなき詫びも武士氣質、御臺は泣くにも泣かれぬ仕儀、燃え立つ胸を押し鎮め。

牧の　命にかけて自らを、それ程までに思ふが誠なら、兎も角も、せめて殿様に廻り合ふまで、料簡して待つてたもいなう。

女之　イヽヤならぬ。これまで騙すが皆その手。そんな甘茶にや撓らぬ我れら。ハテ、否ならば息子どのから、先へ殺して。

ト石童丸に刀をさしつける、牧の方とめて

牧の　ア、コレ、滅多な事をしやんなや。

女之　サア、子が可愛くば、夜の更けぬうち色よい返事。

牧の　サアそれは。

女之　そんなら、この子を突き殺さうか。

牧の　サアそれは。

女之　抱かれて寢るか。

牧の　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト附け廻し裾を捕へて

女之　返答は、どうぢやいなう。

牧の　コレ、さうしやんな、危ないわいなう〳〵。

〽あなたこなたとつけ廻し、御臺は足の踏みどもなく、若君をかき抱き、一間の内へ駈け入りしが、ごんと一聲釣り鐘の、音すさまじく鳴り響き、驚ろかされて見し夢

は、覺めし跡なく。

ト女之助、牧の方石童丸を追ひ廻す。兩人、上の障子の内へ逃げ込む。後追ひかけ女之助も續いて入る。大ドロ〳〵になり、日覆より心といふ字を引いて取る。木につき、道具バラ〳〵と變る。

本舞臺、正面の襖、田樂にて打ち返し、慈尊院の堂になる。前面の欄干引き上げる。門口を引いて取り、蹴込み打ち返す。すべて堂の前側の模樣。屏風、仕掛けにて賽錢箱になり、この側に以前の牧の方、石童丸、女之助、旅形にて笠を持ち、轉寢して居る。

此まゝ道具納まる。

ト知らせにつき、ドロ〳〵打ち上げる。

〽旅姿、慈尊院の緣端へ、主從三人笠傾け、前後も知らず臥し給ふ、猶も續いて寺々の、鐘のなる音に女之助、むつくと起きて月影に、あたり見廻し。

ト本釣り鐘合ひ方になり、女之助、目を覺まし、思ひ入れあつて

女之　さては今のは、夢であつたか。ア、有り難や嬉しや。我れながら情なや。明暮れ御臺を見る度に、惜しいお姿、お主ならずば口說き落し、我が妻にせんものと、思ひたるも日に幾度。我が身で我が身に意見を加へ、勿體ない恐ろしいと、叉思ひ替へて心を改め、忠義を盡すと思へども、生れついての好色、淫犯の病を現はし、夢の內とは云ひながら、主君に對して不義を云ひかけ、剩さへ討たうとまでしたりしは、よく〳〵武運に盡き果てしか。

〽暫し淚にくれけるが、飛びしさつて頭を下げ。

女之　御臺樣、若君樣、夢の間の不義不屆き。眞平御免下さりませ。

〽恐れ入つて三拜九拜、親子の人は正體なく、寢入りし暇に汗たら〳〵、魘はれ給ふに走り寄り、申し〳〵と搖り起せば、二人ながら起き上がり、顏を眺めて、

ト女之助、二人を搖り起す。牧の方心づき、女之助の顏を見て

牧の　ヤア、其方は、まだ寢やらぬかいの。

〽齒の根も合はず面色變り、若君を押圍ひ、立ち退き給へば南無三方、夢と云へと通ぜしかと、胸に盤石押し込む如く、切なき心を押し鎭め。

女之　お疲れも出でしにや、魘はれ給ふに驚いて、お目を覺まし候ひしか。

〽云ひくろめても氣は濟まず、案じ煩らひゐる所へ。

ト此の時下手にて大勢の人聲する。

〽群り來たる人音に、何事やらんと女之助、眼を配り。

〽例へ道行く旅人たりとも、見咎められてはお爲惡しゝ。御兩所は笠深く、田舍行者の風したる體。拙者も暫し身を忍ばん。

〽忍びて樣子窺ひゐる。

ト三人とも笠を傾け、忍びゐる。

〽程なく來る大勢は、禿の宿の百姓ども、中にも庄屋が智慧あり顏。

ト此うち靜かなる禪のツトメになり、庄屋太郎作、小提灯を下げ、先に立ち、百姓大勢、ズッと後より玉屋與次、一本差し、着流しにて、提灯を持ち出て來り

太郎　コレ皆の衆、この所の殿樣、大内之介義弘さまが、はる〲の海山を越え、直に上つて、繪圖をみんなに一枚づゝ渡して、この圖に合つた者を縛つて來いとの、云付けでござるぞよ。三十ばかりの好い女性と、十ばかりの美しいちつぺいと、三十ばかりの好い男と、どうやら人の女房を、息子とともに盗んで、駈落ちなどゝ見えるぞや。どうでもむづかしい尋ね者、見つけたら金になります。共吟味に精出さしやれ。シタガ、縛つても庄屋だけ、褒美はおれと半分分け。斷わつて置きましたぞ。

〽云ふを聞きかねしやばり出る、所でちつと理窟者、男を磨く玉屋の與次、朱鞘の大だら落し差し、立ちはだかつて。

與次　こりや庄屋どの、拔作でも郷内が慾ぢやの。近年は代官に、好い人がわせたゆゑ、所も騷がず、物靜かでよかつたに、何やら又云ひ出して、代官所へ呼びつけ廻り、ちつとばかりの褒美であらうか、澤山さうに二人まで、縛つて來いどはうまい殿樣。騙されて、このおぬくとのが、縛つたら褒美を取る。ハ、、、何處へ褒美。和御寮のやうならうまい和郎に、縛られる人間があるものかい。

太郎　コウヤ待て玉屋、われが今の云ひ分を、この智慧者が勘辨するに、褒美が少なけりや、見附けても取り逃がす氣ぢやなア。先刻の云付けを何と聞いたぞ。庇ひ立てはならぬぞよ。お尋ね者を逃がしたら、助けた者の首がコロリ、これも斷わつて置いたぞよ。サア〲いづれも、行きがけに慈眼院の境内を、捜して行かうおやあるまいか。わしも屈んで居つたなら、余ッぽどの拾ひ物ぢや。

サア〳〵、ござれ〳〵。

〽大勢引きつれうそ〳〵と、二人の窶姿見付け出し。

ト太郎作先に立ち、堂の三人を見て

ヤア〳〵〳〵、皆の衆、待たつしやれ。何やら笠を傾むけ、胡散らしい奴がゐますぞ。

ト提灯にてよく〳〵見て、

ヤア、これがお尋ね者に相違ない〳〵。縛れ〳〵。

ト禪のツトメになり、百姓ども、女之助にかゝる。左右へ投げのけ、牧の方石童丸を圍ひ

女之　コリヤ、うぬら、盜賊だな。近寄つたら手は見せぬぞ。

太郎　構ふ事はねえ。早く縛れ〳〵。

トまた禪のツトメになり、皆々縫ぐるみにて打つてかゝる。女之助、刀を抜き切り拂ふ。皆々後の方へ逃げて來て、太郎作、慄へながら

コレ、斯ういふ時は玉屋の與次、早く出てくれ〳〵。

〽聲かけられて玉屋の與次、つら〳〵眺めて。

トこれにて與次、前へ出て、提灯にて女之助を見て

與次　さては、わいらはお尋ね者。斯う大勢が取卷くからは、所詮遁がれぬ程に、早くこの場を逃げるか。イヤ、逃げようと思ふとも、滅多に逃がさぬ。

女之　さては、うぬは盜賊の帳本ぢやな。惡く寄つたら撫切だぞ。

與次　何を小癪な。

ト禪のツトメになり、與次と女之助立廻り。此うち與次の持ちし提灯を打ち落す。これより暗がりの心にて、與次思ひ入れあつて刀を抜き、切り散らしながら花道へ入る。女之助、皆々を切り散らす。皆々逃げて花道へ入る。

女之　斯く行く先を盜賊に、圍まれては叶ひがたし。この間に御供して、何處へなりとも立ち忍び、夜明けてお山へお供せん。サア、ござりませ。

ト石童丸を脊負ひ、牧の方の手を引き行かうとする。この時、以前の百姓一人窺ひ寄つて

百姓　うぬ、お尋ね者。

トかゝるを見事に切つて捨てる。

〽後をも見ずして馳り行く。

ト禪のツトメになり、三人とも花道へ入る。直ぐにこの道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、平舞臺、正面押入れ納戸口、上の方障子屋體、眞中に据ゑ風呂、いつもの所門口、屏風を立て勝手道具取散らし、よき所に娘門田、煙草盆にもたれ居睡りしてゐる。この見得、在郷唄にて道具納まる。

〽禿の宿の玉屋與次、娘門田は門口を、さすと寢てゐる寄懸ひ、おらちは一間立ち出でゝ。

ト奧より與次女房おらち、世話女房の拵らへにて出て、門田を見て

らち　コレ、そこなお船頭、もう船を漕ぎ出すか。ほんにやれ、嗜なみや、連合ひ與次は、ついにお代官の顏も見ぬ人。それに今日呼びに來て今に戻られず、おれよりもマア、其方が案じる筈。なぜと云や。あの與次どのとは生さぬ親子、今にも戻られ、睡たさうな顏見せて、心の義理が立つものか。寢所でも敷いて置きや。

〽叱るも親身、聞くもおろ〱。

門田　母樣、免して下さりませ。昨夜大師講の持越しで、ツイとろ〱と致しました。寢所でも敷いて置きませう。

らち　それ〱、もう初夜過ぎ。追ッつけ戻らつしやるであらう。早う寢所敷いて置きや。わしが枕は直すぞや。

門田　アイ〱。

〽二つ並びを云ひかねて、娘賴まぬ心意氣、いらぬ遠慮と見えにける。

トこれにて門田、奧へ入る。

〽この家を力に女之助、御臺若君後に圍ひ、息をばかりに駈け來り、門の戸忙しく打ち叩き。

トばた〱になり、花道より以前の女之助、石童丸を脊負ひ、牧の方の手を引き、走り出て門口へ來り

女之　ちと賴みます〱。

らち　どなた樣でござります。

女之　イヤ、我れ〱は旅の者、足弱二人召連れ盜賊に出會ひ、やう〱切り拔け、これまで參りし者。三人の命助けると思し召し、お匿まひ下さらば、有り難う存じまする。

〽餘儀なく云ふに否とも云はれず。

らち　主人の夫は留守なれども、さほどの御難儀、見捨つるもお笑止。少しの間なりとも、此方へお入りなされませ。

女之　それは千萬忝なう存じまする。

〽門口明くれば三人とも、命の御恩と追從し、内へ入れば女房が、心をつけて表を締め。

トこれにて皆々、内へ入る。おらち、茶など出しながら

らち　マア〳〵、此方へお入りなされませ。定めて御難儀でござりませう。

トこんな事云ひながら牧の方と顔見合せ

牧の　ヤア、其方はおらちぢやないか。

らち　さう仰しやるは御臺牧の方さま。

女之　ナニ、以前の女房とや。

牧の　變つた所で。

らち　ようマア、お出でなされましたなア。

ト合ひ方になり、

何からお話し申さうやら、何はさて措きこのお姿、何ゆゑ、はる〳〵お越しなされました。

牧の　さればいなう、連合ひ重氏卿、御遁世遊ばし、國は大内に惱まされ、命危ふく逃げのび、我が夫高野にましますと、人の噂を力にて、この所まで來ましたわいなう。

らち　それはマア、いかい御苦勞遊ばしまする。若君樣御成長、何か思へば一昔、變る浮世の有樣でござりまする。

〽憂きを涙に語り合ふ、女之助はあたりを見て。

女之　其方と離別せし折柄、門田といへる水子を添へしが、見事育てあげたるか。無事で居るか。どうぢや。

らち　これは云はれぬ昔をお尋ね。誤まりなき身に暇の狀、是非なく故鄕へ歸り、年老つた母樣乳呑子を抱へ、どうして暮らす當もなく、途方に暮れし折柄、この家の主も以前は武士、尾羽打枯らした互ひの落目、共過ぎにするならば、母樣ぐるめ養うてやらうとある。二度の夫と思へども、親の爲子の爲に、この家へ嫁入つた、その年に母樣も見送り、娘も成人したけれど、なんのお前に逢はさうぞ。云ひ出しても下さんすな。

〽けんと云はれて女之助、むつとはすれど宿を借る、無心に詞もなかりけり、若君はおとなしく。

石童　只何事も堪忍して、今宵は爰に泊めてたも。

〽涙ぐんだる御仰せ。

らち　こは勿體ないお詞、お泊め申さいで何と致しませう。見苦しけれど一間もあり。マア、あれへお出で遊ばし、御休息なされませ。

牧の　そんならおらち、主が戻り給うたら、よいやうに頼むぞや。

らち　マア、あれへお越しなされませ。

〽石童君の御手をとり、しほ〳〵立つて入り給ふ、女之助は接穂なく、共に奥へと立ち上がるを、おらちはやがて押し止め。

ト此うち牧の方、石童丸、上の屋體へ入る。女之助も行かうとする。おらち、屏風にて押し圍ひ

らち　コレ、待たしやんせ。お子方はお主筋、好んでもお宿申すが、お前はどうも泊められぬ。何處へなりとも、外へお出でなされませ。

〽さし止められて重なる剛腹。

女之　ヤア、なめ過ぎた女め、大切なる二方を預け、某何處へ行くべきぞ。お主ばかりのよしみを思ひ、夫のよしみは思はぬか。

らち　サア、そのよしみぢやに依つて、猶なりませぬ。

女之　そりや又なぜに。

らち　さればいなう、今わたしには玉屋の與次といふ夫のある身。その留守の間に以前の連合ひ、泊めてくれいとあつたゆゑ、泊めましたとは、どの口で云はれう。まだお前には、昔の道樂直らぬな。お二方はこのおらちが、命にかけて預かつた。氣遣ひせずと宿なくば、軒の下でも一宿あれ。アタ自墮落な。

〽あた自墮落なと引立つて、有無を云はさず門の戸を、明けて表へ突き出す。理窟で締める掛金は、押すに押されぬ心の錠、稚な馴染の合鍵も、工合違うて海老の腰、屈めながらに軒の下、暫しは宿るばかりなり。

ト此うちおらち、女之助を無理に門口の外へ突き出し、戸を締める。女之助、こなしあつて柴垣の側へ屈む。おらち思ひ入れあつて、圍爐裏の側へ來て火を焚いてゐる。

〽程なく歸る玉屋與次、道のどまくれ夜を更し。

ト與次、向うより出て

與次　女房ども、今歸つた、明けてくれ。

らち　アイ〳〵。

ト明ける。與次、内へ入つて圍爐裏にあたる、

今まで、マア、何處に何してござんしたぞいなア。

與次　また悋氣か、措いてくれ。今夜はお上の御用で、夜が更けたのだワ。サア、早く火でも焚きつけろ焚きつけろ。

　ト兩人捨ぜりふにて閻爐裏の火を焚く。この時外にて
女之　一旦の理に迫り、軒に一宿いたせども、寒風烈しく身も冷え渡る。御亭主もお歸りと見受けたり。一宿を御無心申したう存じまする。
〽一夜の宿と乞ひにける、與次は聞き耳。
與次　表に何やら人聲がする。ありやなんぢや。
らち　イヱ、ありや最前旅人が、盜賊に出合ひ、難儀すると云うたゆゑ、引くに引かれず足弱二人は泊めたれども、お前が留守ゆゑ男は遠慮して、外に寢さして置いたわいなア。
與次　そんなら何と云やる。旅人が三人來て、足弱二人は泊めたが、男は亭主の留守で遠慮して泊めぬと云ふのか。そりや大事ないワ。泊めてやるがいゝ。コレ旅人、遠慮はいらぬ程に、マア、内へ入らつしやれ〱。どうしてこの寒いのに、外に寢られるものか。サア、爰へ來さつしやれ〱。
女之　それは千萬忝なう存じまする。
　ト云ひながら閻爐裏の脇へ來る。おらちこなし。
與次　サア〱、側へ寄つて、火にあたらつしやりませ。さうしてお前方は、どれからどれへござらつしやる。
女之　ハイ、私しどもは心願ござりまして、高野山へ參詣いたします。
與次　それは御奇特千萬な。
　トこんな事云ひながら、火にあたり、兩人、顏見て悄り。
ヤアわれは。
女之　其方は。
與次　慈鎭院の境内にて。
女之　出ッくわしたる盜賊め。
　ト切りかゝる。
與次　なにを。
　ト誂らへの合ひ方になり、兩人立廻り。おらちこなしあつて、有り合ふ屏風にて閻爐裏の火を消す。暗がりになり、兩人立廻りのうち、おらち中へ入り邪魔になる事よろしくあつて、また火燃え上がる。また烈しき立廻り。おらち、手早く手桶の水をかけ火消える。立廻り。この時上の障子の内より牧の方、行燈を下げ出る。この明りにて又立廻り。おらち詮方なく、有り合ふ屏風にて眞中より白刃を押へ、三人キッと見得。
らち　マア〱待つて下さりませ。

與次　邪魔だてひろぐな。

女之　退いた〳〵。

らち　イヽヤ退かれぬお二人さん。殊に我が夫與次どのは、こなたの事は所でも、人も恐るゝ男一匹、盜賊よ追剝よと、名を立てられて切尖勝負。もしもの事があつた時、妻子までの顏よごし。なぜさもしい名は取らしやんした。サア、樣子聞かぬその先は、滅多に爰は放さぬわいなア。

與次　尤もぢや、全く盜みはせぬ。その侍ひが同道の、足弱と云ふのはお尋ねの者。即ちこの國の領主、大内義弘どの到着あつて、この繪圖と合し、搦め捕つて渡せとの云付け。證據は爰に。

〽出して見せたは紛ひもなき、御臺所と若君の、お姿描きし寫し繪に、人々はつと胸つかへ、肝を冷やすばかりなり、おらちは常から夫の心、頼もしき氣をよく見拔き。

トおらち心遣ひの思ひ入れあつて

らち　その繪のお二人を、何處如何なる御方と、知つてこなたは捕へさんしたえ。

與次　イヽヤ知らぬ、人違ひでも大事ない、捕へて出せとの云付け。身にかゝらねば念押して、問ふ間もなく歸りがけ、蓮臺院の境内で、見遁がし置いたに、恩を仇なる犬侍ひ。そこ退け女房。

トまた切りかゝるを、おらち後より抱きとめ

らち　イヽヤ退かれぬ。斯うなつたら何を隱さう、これなる侍ひは、わたしが以前の連合ひ。お供しられたお二方は、その繪に違はず筑紫の大名、加藤左衛門重氏さまの、御臺若君樣ぢやわいな。

與次　ヤ、なんと。

ト思ひ入れ。

らち　わたしが以前のお主ぢやわいの。

與次　何と云ふ。すりや奧にござるお二人は、重氏公の御臺若君と申すか。

らち　アイナア。

與次　左やうとは存ぜず、最前より無禮の段は、眞平御免。

〽眞平御免と木折りの平伏、あやまり入つてぞ見えにける、心ゆるさぬ女之助。

ト與次、刀を投げ出し、下手へ來り、平伏する。

女之　ヤア、僞かの言葉、食はぬ〳〵。我れも昔は家來筋

と、古手を以て油斷させ、大内方へ内通する下心。卑怯な奴。サア、立ち上がつて勝負せよ。

與次　ヤレ、早まり給ふな。その云ひ譯に見する品あり。暫らくお待ち下さりませう。

〽先づ暫らくと押しなだめ、簞笥の内より刀一腰取り出だし、目通りに据ゑ、とつかと座し。

ト思ひ入れあつて、押入れより狐川の刀を出し來り、前へ置き

いづれも、お見知りのある刀、立ち寄つて御覽下され。

女之　目貫は金の菊流し。

牧の　牡丹に獅子の高彫り鐔、紛ひもなき夫の差し料。

女之　これを所持なすその仔細は。

與次　ハ、ハツ。

ト平伏する。誂らへの合ひ方になり、

御不審は御尤も。もと某は播州の浪人、尾羽打枯らし、都方へ奉公稼ぎに上りし折柄、八幡山崎の間、狐川の渡しにて、さる浪人と口論し出し、刺し違へんと致せしところ、その場へ重氏公通り合され、其方の一分立てよと、御差替へ一腰づゝ下し置かれ、命助かるのみならず、外聞の腰をふさぎ、それより武士奉公のありつきなく、この國の土民となつては候へども、御恩は忘れぬ昔氣質、命の親の重氏公、その御臺若君と聞き、なんと手向ひ申すべき。お疑ひを晴らされ、御譜代同然に、思し召し下さるべし。

牧の　實にその事はお物語りありし事。さてはその時、刀を貰うたは其方よの。遣つたる人は御遁世、御跡慕ふ我れ〳〵が、力となつて今一度、重氏公に逢はせてたも。頼み少ない世の中ぢやわいの。

〽かこち給へば。

與次　お氣遣ひなされまするな。天地の間に御座あるなら、尋ね逢はせ參らせませう。

〽奥底もなき心底に、見込んで猶も女之助。

女之　ホヽ、ウ、頼もしき御一言、とてもの事に、御誓言が承りたい。

與次　諸天善神は愚か、佛意にかけて二言はござらぬ。

ト刀を拔いて金打する。女之助見て

〽聞いて安堵の胸を据ゑ、何思ひけんどつかと座し、差添拔いて我れと我が、腹にぐつと突き立つる、人々これは狂氣かと、驚ろき騷げば。

ト思ひ入れあつて刀を拔き腹へ突き立てる。皆々恟り

牧の　介抱して　コリヤ、氣ばし狂うたか女之助。
與次　何ゆゑ切腹なされしぞ。
女之　騒ぎ給ふな方々。思ひがけなき最期ゆゑ、御驚ろきは御尤も。一通りお聞き下されませう。
ト竹笛入りの合ひ方になり
何を隱さん某は、生れついての好色深く、兄監物太郎の疑ひを晴らさん爲、宮守の血を腕に塗り、誓ひを立てて閨を出で、心を心で嗜なめども、情なや宵の夢。わりなくも御臺へ戀慕、閨入れなきを手にかけて、殺さうとまでしたりしが、慈恩院の時知らず、鐘の響きに夢覺めて、いつになく御臺には、我が姿を見て恐れ給ふ、南無三方。
ヘ夢とはいへど通ぜしか、はや切腹と思へども、我れなくなりては御兩所を、守り奉る人なしと。
さあらぬ體にてこれまで來り、いま與次どのの心底見込み、賴み置きて相果てる。申し若君樣、これなる與次どのを力となされ、父樣の御行くへ尋ね、めでたく御對面遊ばせや。
ヘなんの因果で此やうな、不所存者には生れしぞと、我れと我が身を悔み泣き、見る目も共に哀れなり、與次はわざと涙を隱し。
與次　夢は五臟の煩ひ、なぜ本心を改め、御先途を見屆けぬ。切腹とは腑甲斐なし。
女之　イヤ、本心を改めても、夢となくるになくられぬ、仔細は腕に塗つたる印。心の迷ひで宮守の血汐が、これこの如く消えたるは。
ヘ罰か報いか天命か、兄監物へ云ひ譯の、種を失ひ是非もなく、斯く計らひ申せしぞや。
よし印が落ちぬとて、最早御臺の思し召し、片時も心安かるまじ。せめての冥加に御主人の、御心休めにする切腹。これまで盡せし忠節を、無にして死ぬる拙者が心底。御推量なされて下さりませ。
ヘ云ふ聲も、弱り果てたる息遣ひ、與次は哀れの袂を絞り。
與次　せめて最後の思ひ出に、娘門田にたゞ一目。コレ、門田よ〳〵。
ヘ立つを引きとめ女房が、涙ながらに。
らち　申し、定めて樣子を聞いても居ませう。駈け出る筈を駈け出さぬは、前の親を厭ふかと、思はれまいと思ふ

から。その氣な娘を呼び出して、泣くも泣かれぬ苦しみをさゝうより、矢ッ張り小蔭で存分に、泣かしてやつて下さんせ。

〽子に准へたる我が涙、保ちかねて思はずも、わつとばかりに泣き叫ぶ、御臺も共に御涙。

牧の　惚れる身よりも惚れられる、身の辛さ切なさを、推量してたもいなう。

〽しやくり歎かせ給ふにぞ。

女之　そのお詞が冥土の筐。南無阿彌陀佛。

〽差添を拔くがこの世の暇乞ひ、消えて果敢なくなりにける、はつとばかりに人々の、縋り泣き入る折こそあれ、遙かに聞ゆる人馬の聲、すわ事こそと與次は突ッ立ち。

ト女之助、落入る。皆々思ひ入れ。この時、チヤンチヤンと音する。與次、愕りこなしあつて、門口へ出て、キッと向うを見て

與次　コリヤ〳〵女房、泣いてゐる所でない。察するところ討手の輩と覺えたり。思ふ存分働いて、透間を見てお供せん。御臺若君を、早く〳〵。

トこれにて牧の方若君を介抱して、おちち奥へ入る。與次キッと思ひ入れあつて身拵らへする。

〽尻七の圖までひッからげ、身拵らへして待つ所へ、大内五郎義貞、手の者引具し駈け來り。

トじやん〳〵になり、大内五郎義貞、四天丸括け、凛凛しき形にて、捕り手四人、十手を持ち、軍兵大勢、高張り提灯にて出て來り、門口の外にて、

義貞　ヤア〳〵者ども、承はれ、加藤重氏が御臺石童、この家の内に匿まひある事、注進あつて慥かに聞く。急ぎ踏んごみ搦め捕れ。必らずぬかるな。

四人　心得ました。

義貞　ソレ、踏ん込め。

ト四人、門口を明けて入る。與次、これを相手に立廻り。ドン〳〵、三味線入りの鳴り物にて、花々しくよろしく立廻りあつて、四人逃げて入る。門口の外にて大内五郎、こなしあつて

ヤア〳〵、所の代官駒形一角、あれ召捕つて、手柄にせよ。

トこの時揚げ幕にて

一角　ハ、ア。

〽駈け來る侍ひ、早繩たぐつて大聲あげ。

トばた〳〵にて駒形一角、野袴ぶッ裂きの形にて、種

　ヶ島の鐵砲を持ち出て來り
一角　ヤア〳〵與次、汝如何程働らくとも、斯く十重二重に取巻く上は、最早叶はぬ。異議に及ぶと飛道具。如何に〳〵。
〽如何に〳〵と罵つたり、流石の與次も飛道具に、心後れし折柄に、一間の内より。
　ト與次、當惑の思ひ入れ。この時、障子の内より、
らち　コレナウ御亭主、とても遁がれぬ我れ〳〵親子、繩かけ渡されよ。
〽出づるを見れば妻のおらち、娘門田を石童に、仕立てゝ出づる主思ひ、それと悟れど恩愛に、心後れて手をつかへ。
　トこれにて障子の内よりおらち門田、御臺石童の形になり立ち出る。與次思ひ入れ。
與次　其お覺悟はさる事ながら、一旦匿まひし某が、むざ〳〵渡す無念さを、御推量下さりませ。
〽夫婦別れの涙をば、目に浮かむれば、おらちも悄れ。
らち　自らは覺悟の前、只いとしいはこの石童、不便にござるわいの。
〽不便にござると、とも泣きに、悄れしが與次はつッ立ち。
與次　サアお役人、お尋ね者の兩人、繩かけて受取りなされませ。
〽云ふ聲に、駒形一角内に入り、透間あらせず氣配り目配り、是非なく繩をかけにける、表に控へし大内が大聲。
　ト此うち一角、内へ入る。腰より捕り繩出して投げてやる。與次取つて兩人に繩かける。この時門口の外より大内五郎、こなしあつて
大内　ヤア〳〵一角、かねて渡し置いたる繪姿あるべし。よく引合はせて受取れよ。
〽遁がれがたき鶴の一聲、鶯を鳥と爭うても、爭ひにくき繪姿を、明かりへ出してひき擴げ、見るも一生懸命、遁がれぬ所と與次は身構へ。
一角　ソレ提灯。
　ト軍兵、左右より提灯を出す。與次ハッと思ひ入れあつて刀へ手をかけ、こなし。一角も思ひ入れ。
面を上げい。
　トおらち思ひ入れあつて顔を上げる。
〽つく〴〵眺めて駒形一角。

ト見る事あつて思ひ入れ。
重氏が御臺悴、繪圖の通りに相違ない。相違ござらぬ。
〽表へ答へる慥かの訴へ、與次は夢かと念に念。
與次　その詞に相違ないか。後で違變召さるゝな。
一角　ヤア、いらざる馬鹿念、駒形一角春秀が、受取つたに相違があらうか。よく繩かけて渡した。出かしたく。町人には珍らしき其方。當座の褒美に一腰くれう。
〽差添抜いて提灯の、明りへ出したは重氏の、狐川にて情の一腰。
ト一角思ひ入れ、差添を抜いて出す。與次、取つて來る。この時、上の障子の内より、牧の方出て、この刀を見て
牧の　ヤ、こりや我が夫の御差替へ。
與次　拙者が刀と。
ト比べて見て思ひ入れ。一角、思ひ入れあつて
一角　すりや、いつぞや狐川にて。
與次　御恩を受けしその時の。
一角　そんならその時、アノ出合ひし
與次　オヽ、侍ひか。
一角　コリヤ。

ト押へる。與次こなし。
ソレ、繩つきを
トおらちを引き廻して下へ置く。木の頭。
引ツ立てい。
ト双方ともこなし、よろしく、　ひやうし幕

六　詰　高野山の場

役名——苅萱道心 實ハ加藤左衞門重氏。同宿、安心坊。同、喜悦坊。同、崇悦坊。同、義終坊。石童丸。獅々戸郷助。阿闍梨。牧の方。與次女房、おらち。娘門田。玉屋與次。

本舞臺、一面の山幕、よき所に傍示杭、幕の内より高野參りの仕出し大勢、立ちかゝり居る。靜かなる禪のツトメにて幕明く。
仕一　これはいわ組の御先達、御登山なされましたか。
先達　新規役の衆が三四人、高野山へ參りたいとあるゆゑ、御案内申しました。

仕二　それはお奇特千萬。併しお山もこの節は、田舎の參りで賑やかでござる。

先達　サイナウ、こなた樣も御參詣か。

仕三　イヤ、わしは、ちよつと御坊達に、用事があつて來ました。

先達　ハヽア、れこの口でお上りか。

ト握り拳を出して見せる。

仕三　マア〳〵、その口もあり、また吉野邊まで掛合ひがあつて。

先達　大阪で儲け足らいで、吉野から高野とは、しりしまいのよい人ぢや。

仕三　また先達の惡口か。

先達　とんと、こなさんは、江戸ッ子つぶぢや。

三人　ハヽヽヽヽ。

四人　とんとお別れ申しませう。

仕一　先達、お家へ用事があらば、お言傳を申しませうかえ。

先達　イヤ、わたしもこの山から直ぐに歸ります。

兩人　左樣なら御機嫌よう。

三人　ドリヤ、參りませう。

ト矢張り右の鳴り物にて、皆々下手へ入る。山幕切つて落す。

本舞臺、正面に岩組み、上の方眞中まで岩組み、段々に拵らへ、絶頂に折れろ仕掛けの松の立ち木、よき所に蛇柳、眞中に拵らへの女人堂、左右峰山の體。上の方の道具、峰山にて、半分見せてある體よろしく、山おろしにて道具納まる。

〽陰徳あれば陽報あり、賢き教へ目のあたり、御臺所石童丸、玉屋の與次が介抱にて、重氏卿の御在所、尋ね求むる高野山、小石交りの細道を、爪づき〳〵たど〳〵ど、たどり給ふぞ痛はしや。

ト此うちかすめたる山おろしになり、花道より牧の方、笠と杖とを持ち、後より玉屋の與次、一本差し、旅形、石童丸を脊負ひ出て來り、花道にて

牧の　イヤナウ與次、誠や人の習ひにて、榮え衰へ浮き沈み、ありとはかねて知りながら、余所の事よと思ひしが、今身の上に思ひ知る。これにつけてもいとしいは、内室のおらちどの、娘の門田、我れ〳〵が身に替り、敵の中に憂き苦勞。定めて憂目に遭ふやらん。

〽案じ過しの御涙、共に悄る丶詞を押へ。

與次　ハテ、わつけもない御歎き。彼れらが御身に替りしは、お主大事と一途の忠義。さりながら、駒形一角は情を知つたる侍ひ、命には氣遣ひなし。斯やうな小事に御心を痛め給ふは、御病氣の御障り。必らず御案じなされまするな。アレ〱、向ふが女人堂。そろ〱とおひろひなされませ。

〽與次が介抱牧の方、爪先上がり突く杖も、重い主人を輕々と、背負うて女人堂、やう〱とこそ着きにけり。

トこれにて皆々、本舞臺へ來り、與次、石童丸を下ろし、思ひ入れあつて

與次　定めし石高な道ゆゑ、お御足が痛みましたでござりませう。

牧の　ついに習はぬ山道、殊に長の旅勞れ。石童丸、さぞわがみも勞れたであらうの。

石童　イエ〱、なんぼう勞れても、今日は父上に廻り合ふ日ぢやと思へば、さして切なうもござりませぬ。

牧の　親なればこそ子なればこそ、それ程までに父御を慕ふ志し。大師樣が不便に思し召し、廻り逢はぬといふ事はあるまいわいなう。

與次　斯やうにお二人のお供は致したれども、御臺樣は、この女人堂より先へは叶はぬ。私しはいつぞや狹川にて、御恩を受けました砌り、お目にかゝつたゆゑ、ほのかにお見知り申して居りまする。石童さまには父御のお顏、定めし御存じでござりませう。

石童　イヤ、父上の御顏は、知らぬわいなう。

牧の　そりやその筈の事、この子が二つの年より、父御は都在番、丸九年經てど御歸國なく、自らは都まで、お迎へに參りしが、御出家の御望みあるゆゑ、その場より御出國。お國へとては御歸りなされず、それゆゑ石童には御對面なされず、お顏は見知らぬわいなう。

與次　すりや、父御のお顏は御存じござりませぬか。ハテ、それは當惑。ツイ高野とは申せども、大分の御出家。私し一人が見知つたと申して、なか〱ツイ廻り逢ひにくい。ちつとも早くお山へ參り、片端から尋ねませう。

牧の　そんなら石童もろとも、ちつとも早う。

〽與次が詞を力草、夫を慕ふ山水の、流れは同じ女房おらち、娘の門田もろともに、息を限りに馳け來り。

ト山おろしになり、おらち、門田、以前の形にて、走り出て、與次を見て

らち　ヤ、お前はこちの人、御臺樣か。
與次　そちや女房おらちか。
門田　父樣か。
牧の　オヽ、門田か。
〽御臺も共に御驚き、浮木の龜の對面と、喜び合ふぞ道理なり。
與次　コリヤ女房、どうして爰へ參りしぞ。樣子はどうぢや。
らち　不思議に命助かりしが御運の末、折角親子が心を推せし、御身替りも似せ物と、新洞左衛門に云ひ裂かれ、いとしや駒形一角どのは、直ぐその場で御切腹。我れ我れも危ふき所を、やう〳〵切り拔け逃げたれども、追手の來るは知れた事。少しも早くこの所を。
〽云ふに驚ろく與次が顏色。
與次　出かす〳〵。併し、この如く御大病なれば、容易くは逃げがたし。其方は御臺樣を伴ひ、娘もろとも、あの女人堂へ身を忍ばせ、我れはこれにて討手を引請け切り散らさん。ちつとも氣遣ひなされまするな。
〽制する詞に御臺は嬉しく。
牧の　コレ石童、與次が爰に居やれば心措きなう、一時も早う父御を尋ねお供しや。殿樣のお顏を見るならば、耆婆扁鵲が藥より、百倍ましたる藥となり、本復するに疑ひなし。お顏は知らずとも御名を名乘り、加藤左衛門重氏の、今道心は何所におはすと、尋ねて見や。
〽湯水を取つての介抱より、これにましたる孝行なしと、息もたよわき御仰せ、幼な心に聞き分けて。
石童　父上のお顏を見て、御本腹さへある事なら、成る程私しは先へ參りませう。與次よ、後から來てくれよ。
〽しほ〳〵濡るゝ笠と杖、取り上げて立ち給ふ。
牧の　そんなら、もう行きやるか、西も東も知らぬ身を、手放してやる氣遣ひさ。後の難儀は如何ならん。
〽又さめ〴〵と泣き給ふ。
與次　ハテ、益體もなき御歎き。追ッつけ親子お三人、めでたう御對面。
らち　その時こそは、わたしら親子も共に喜び。
石童　そんなら母樣、後程お目にかゝりませう。
〽立ち出で給ふを呼びとめて。
ト石童丸行きにかゝる。
牧の　コレ石童、山道を余所見して、怪我ばしゝてたもんなや。



五世澤村宗十郎の苅萱

〽と氣を附けて、見かはし〳〵別れたる、これがこの世の名殘りとは、後にぞ思ひ知られたり。

ト此うち石童丸は花道へ入る。牧の方思ひ入れ。

〽かゝる所へ麓より、大勢の足音、與次はそれと心付き。

トこの時チヤン〳〵になり、與次キツとこなし

與次　あの物音は慥かに討手の奴ばら。見つけられては一大事。コリヤ〳〵女房、御臺を暫らく女人堂へ。早く早く。

〽早う〳〵におらちは心得、御臺と我が子を伴なうて、女人堂へと忍びけり。

トおらち、門田、牧の方を介抱して女人堂へ入る。

〽程もあらせず大內の郞黨、獅々戸鄕助、大勢引き連れ馳け來り。

トどん〳〵になり、獅々戸鄕助、四天、凛々しき形にて、捕り手大勢附き添ひ出て來り

鄕助　ヤア、見付けた〳〵、汝逃ぐるとて逃がさうか。誠の御臺石童丸は、何處へやつた。有やうに白狀せよ。異議に及ばゞ汝ぐるめに縄かけうか。サア返答は、なんとなんと。

〽なんと〳〵と呼ばはつたり。

與次　ヤア、猪口才なるうづ蟲めら。ならば手柄に搦めて見よ。

鄕助　面倒な。者ども、ソレ。

トどん〳〵になり、捕り手大勢、與次に打つてかゝる。立廻り。後より獅々戸鄕助、切つてかゝる。與次、拔討ちに切りつける。大ドロ〳〵、雷の音になり、捕り手大勢、下手へ逃げて入る。與次追ひ馳けて入る。これにてこの道具ぶん廻す。

本舞臺、正面女人堂、仕掛けにて岩組みになり、下の方へ引いて取る。後ろ丸木橋、上の方に岩を押し出す。この上に三世佛の供養塔を出し、花道眞中不動坂、すべて高野山の體。所々に蔦かづら、松の大樹、ズツと上の方へ竹本連中の出語り臺を押し出し、この道具納まる。

ト知らせにつき淨瑠璃。

〽行く客の、雲間に近き八葉の、峯に紫雲のたなびきし、高野山と聞えしは、三面に山連なり、源一水にして萬水東に流れ、大師二犬に道を習ひ、開き始めし靈地とかや、

麓につらなる寺々の、同宿どもはそれ〴〵に、寺々の使ひ番、頭の丸い奇特には、油氣のない付合ひは、さつばりとして殊勝なり。

ト此うち靜かなる禪のツトメになり、安心坊、喜悅坊、腰衣同宿の形、苞の自然薯、豆腐箱を持ち、山の上より出て來り、橋を渡り、本舞臺へ來る。

安心　なんと喜悅坊、今のぐわら〳〵は、なんであらうぞ。

喜悅　さればいなう、强いお山の荒れやうであつたが、心の不淨の者が、登山したと云ふやうな事かいの。

安心　この高野も結構な所ぢやが、折々のぐわら〳〵には困り果てるてや。

喜悅　斯うちよこ〳〵ぐわらつくと、臍の掛替へでも拵らへて置かにやならぬ。

安心　何を云はれるやら。臍の掛替へが、何處の國にあるものか。

喜悅　あるぞや。

安心　そりや何處に。

喜悅　麓の荒物屋に。

安心　なんの阿房らしい。そりや臍土器ぢや。

兩人　ハヽヽヽヽ。

ト互ひに笑ひの折柄に、慈尊院の同宿ども、生れし頭の返り咲きに、二人は山をこし衣、歩み覺えし山を、苦のない暮らし輕々と、來かゝる宗悅義緣坊、それと見るより。

ト此うち、靜かなる禪のツトメになり、花道より宗悅坊、義緣坊、兩人大張り同宿の形にて出て來り、花道中程坂の切り穴へ下り、舞臺下の方へ出て來り

宗悅　其處にゐるは安心坊。

義緣　喜悅坊ではないか。

安心　義緣坊か。

喜悅　宗悅坊、この兩三日は御意得ぬな。

宗悅　お互ひに變る事もなうて

四人　重疊々々。

安心　時に先程は、怪しからぬ荒れでござつたなう。

喜悅　さればいなう、今の今とてその噂。

義緣　なんとマア、ピカ〳〵ぐわら〳〵には、困るではござらぬか。

宗悅　何を云はるゝやら、心の惡い者が山へ登ると、あのやうにお山が荒れる。爭はれぬものぢや。

義絲　その話しで思ひ出した。もしや貴僧達下山の砌りに、隠し妻などいふやうな者を、引き上げはせぬか。
安心　これは異がる事を申すお僧ではあるぞ。當山開かせ給うてより、女人結界は云はずとも知れし事。ナウお僧達。
喜悦　オヽ、それ〳〵、女人は云ふに及ばず、不淨なる者も登山ならぬこの山。
義絲　全體そのお山が迷ひの種。
宗悦　ソレ、さういふ心ゆゑ、お經一つよう覺えぬ。いつまでも味噌摺り坊主ぢや。
義絲　サア、その、連木がちよこ〳〵摺りたがる。
安心　又てんがう口。
喜悦　御出家仲間のすたり者め。
宗悦　こんな坊主は、下山さしてしまふがよい。
義絲　そりや有り難い。下山して鰹玉子の暴れ食ひ。鬢つけなしの二つ折り。
ト立ちかゝる。皆々留めて
喜悦　その頬桁を。
安心　ハテそ、ようござる。氣輕な義絲坊、心に思はぬ仇口を、嗜なむがようござる。

義絲　ハイ〳〵、キッと嗜なみまする。
喜悦　時にいづれも、爰で休息してから行きませう。
安心　それがようござらう。
皆々　左樣いたさう。
ト皆々控へる。
諸　〽百年の榮耀も風の前の燈火、悟れば我れも佛なり。
〽加藤左衛門重氏入道、苅萱道心と名を改め、佛法修業の山坂を、たどるも後世の便りなり。
ト此うち音樂になり、花道より、苅萱道心、黒衣、誂らへの頭巾袈裟を掛け、花手桶を下げ、珠數を爪繰り出て來る。
皆々　オヽ、其處へござるは、苅萱御坊ではござらぬか。
苅萱　これは〳〵お僧達、一兩日は、物遠にござるの。
皆々　マア〳〵これへ。
苅萱　然らば御免。
〽先づこなたへと招じける。
ト此うち花道の坂へ下り、本舞臺へ來り
宗悦　苅萱御坊には、見れば經木と花桶を持ち、何處へ行かつしやりますな。
苅萱　イヽヤ、これは百日が間書寫なすところの經木。又

この花は、所々の堂へ捧げる花でござる。
喜悦　ハテ殊勝な。
義綠　ア、、おれは一日に一遍のお勤めさへ、砂嚙むやうに思ふのに、よう其やうに御坊には、精を出さるる事ぢやなう。
苅萱　いつでもをかしい御坊ではある。さうしていづれもは、どちらへお越しなさるゝぞ。
喜悅　愚僧どもは、師の御坊の云ひ付けで、奧の院まで參りまする。
宗悅　今の風雨で、暫らく休らうて居りました。
苅萱　ナニサマ、凄まじい震動であつた。何事であつたぞいなう。
宗悅　今も今とてその噂。もしや道心の内の妻子などが、後を慕らて登つたといふやうな事ではないか。
苅萱　わつけもない。何程夫を慕ふ女ぢやとて、なんの此お山へ登りませうぞ。
皆々　イカサマ、さうでもあらうかいなう。
義綠　ほんに、この大師樣もきつい女嫌ひだ。あんまり惡うないものぢや。シタガ、なんぼう山が荒れても、國元から女房や子が、逢ひに來たら、逢ひたうなりさうなものぢや。
苅萱　コレ〳〵御坊、假にも其やうな事云はぬものぢや。いづれの道心にもせよ、國元を出づる時、妻子の顏は今生で見まいと、棄恩入無爲の誓ひを立て、佛に約したる事、變ぜられうか。この身は早、娑婆を離れたと覺悟せねば、この山へ登山はならぬわいなう。
〽立派に云へど恩愛の目に持つ淚おし隱し。
ト愁ひの思ひ入れにて山の上へ上がり、三世佛へ花を供へ拜み、皆々も思ひ入れあつて禮拜してゐる。
〽痛はしや石童丸は、かゝる難所をたど〳〵と、心も空に浮草の、根ざしの父の顏知らず、名のみしるべにたどり行く、袖の淚ぞ哀れなり、思ひ高野の谷川や、見上げて通る不動坂、踏みも通はぬ丸木橋、名殘り情も横しぶき、嵐に木の葉散り果てゝ、心細道突く杖の、下りつ上りつ行く先を、問へど岩根の松の蔭、石童親子の機緣にや、思はず側に立ち寄つて。
トこの淨瑠璃のうち花道より、石童丸、以前の形、笠と杖とを持ち出て、花道にていろ〳〵こなしあつて、坂へ下り本舞臺へ出て、皆々の居る眞中へ來て
石童　申し〳〵御出家樣、少と物が尋ねたうござります。

ト これにて皆々正面を向き、石童丸を見て

喜悦　オヽ、見ればしほらしい物腰恰好。由ありげな人の子と見えるわいなう。

安心　そして、尋ねたいといふは、何の用で

皆々　ござるぞいなう。

石童　このお山に、今道心のましまさば、教へてたべ。

〽教へてたべとありければ。

喜悦　これは興がるお尋ね事。見れば年端もゆかず、今道心では解りにくい。お前一人ではあるまい、連れは親御か兄弟衆か。

石童　イエ〳〵、連れはござりませぬ、どうぞ今道心の御出家に、お逢はせなされて下さりませ。

ト 此うち苅萱も平舞臺へ下りて

苅萱　如何に年少なればとて、頑是のない。九百九十の寺寺に、毎日入り來る初發心、昨日剃つたも今道心。

〽一昨日剃つたも今道心、左やうに尋ね給ひては知れがたし。

その道心のお顔でも。

石童　さればとよ。尋ぬるは我が父上、二つの年に別れしゆゑ、お顔も見知らず。

喜悦　アノ、顔も見知らず。

宗悦　さうして國所は。

石童　アイ、國は九州筑紫の松浦。

安心　アノ、こなたの國は筑紫の松浦か。

石童　アイ。

喜悦　マア、お聞きなされ苅萱御坊、九州の端から、はるばるの所を、

義縁　父を尋ねて高野へ登る。ヤアトコセイ、よい子ぢやの。

ト 唄のやうに云ふ。

苅萱　ハテ、わつけもない。住めば都の譬への通り、生れ故郷がなうて何とせう。コレそなお子、連れはないとの事。連れの衆か、母御にでも、はぐれたといふやうな事か。

石童　アイ、母様も父上の御後慕ひ、後の宿までお越しなされど、持病の癪にて歩みもならず。

安心　それゆゑ一人か。

苅萱　父上を尋ねに上りました。

〽聞いてどうやら氣にかゝる、苅萱心取り直し。

その父御に逢ひたさに、この高野へ、はる〴〵と、登山

せられしは、どういふ譯ぢや。それ語られよ。

〽語り給へとありければ。

石童　アイ、二つの年よりお國にとては、お出でなされず、母様のお手にて人となり。

喜悅　なんぢや。こなさんを二つの時に、父御がお前を捨てゝ。

石童　どつちへやらお出でなされたわいなう。

義絲　可哀さうに、愛らしい子を捨てゝ出て行くとは、むごい親ぢやなア。

宗悅　二つの年から今まで、手鹽にかけた母御は、いかい世話であらう。

石童　それゆゑ父上に逢ひたさゆゑ、お山へ登りましてござりまする。

喜悅　二つの年に別れた父御なら、顔見覺えもせまい。ほんに雲摑むやうな尋ね物。

安心　一體マア、お前の親達の名は何と云ふぞ。

苅萱　今道心では知れがたし。俗の時の名を云うて。

〽尋ねられよと身の上の、事とも知らず仰せける。

石童　さればとよ、尋ぬる我が父上には、二つの年別れしゆゑ、お顔も知らず、元は筑紫の松浦、加藤左衛門重氏さま。

〽云ふよりさては我が子かと、見れば見る程稚な顔、疑ひもなき我が子ぞと、云はんとせしが待てしばし、佛前にて誓ひを立てたる恩愛妹脊、愛ぞと思ひよそ〴〵しく。

苅萱　ムウ。年端もゆかぬにはる〴〵と、慕ひ來たる志し。誠の父が聞かれなば、さぞ嬉しくも懷かしく、飛びつく程に思はれん。さりながら、この山の掟にて、例へ廻り逢うたりとも、名乘り合ふ事叶はず。早く國へ歸られよ。

〽云へどせきくる胸の內、目に持つ涙保ちかね、墨の袂を絞らるゝ。

喜悅　時に御坊達、この子にかゝつて餘程の隙取つた。なんと、そろ〳〵行かうではござらぬか。

安心　併し、この子も尋ぬるお人に逢はいで氣の毒。暮れぬうちに下山めされや。

宗悅　苅萱御坊も御同伴。

苅萱　イヤ拙僧は、後より參上仕らん。

喜悅　左樣なら、愚僧どもはお先へ。

義絲　そなお子、緣あらば又逢ひませう。

皆々　そんなら苅萱御坊。
苅萱　また明日逢ひませう。
〽挨拶互ひにそれ〴〵に、宿坊々々へ立ち歸る、苅萱後を見送つて。
ト此うち、かすめたる山おろしになり、同宿四人、思ひ入れあつて下手へ入る。直ぐに誂らへの地藏經になり、苅萱、思ひ入れあつて、あたりを見廻し
苅萱　コレ〳〵そなお子、これへ〳〵。
石童　アイ〳〵。
苅萱　最前からの樣子を聞いて、共に淚を含みました。その親の、サア、儘ならぬ世の憂き節。コレ、よう聞かしやれや。身にも命にも替へぬ大事の子を、振り捨てゝ國を出る親の氣は、よく〳〵であらうと思うて、必らず必らず恨まぬがよいぞや。
石童　イエ〳〵、勿體ない、なんの恨みに思ひませう。大事の父上、怪我にも恨む氣はござりませぬが、ひよつと父上に逢はれぬ時は、母上には焦れ死になされうと思へば、わしやそれが悲しい、悲しうござります。
〽泣いじやくりするいぢらしさ。
苅萱　オヽ、道理ぢや、尤もぢや。親となり子と生るゝ程、深い緣があらうか。顏も所も知れぬに尋ぬるは詮ない事。尋ねずとも母御もろとも、早く國へ歸らるゝがよいぞや。
〽云ひ敎ゆれば泣く目を拂ひ。
石童　イヤナウ、我が國は大內といふ者、攻め惱まし。
〽母樣もろとも、この山の麓まで參りしが、悲しき事は母樣が、道の勞れに煩うて、命のうちに只一目。父上に逢はせてくれよとのお歎き。情と思うて御出家樣。
〽御存じならば敎へてと、目に持つ淚はら〳〵〳〵、押へかねたる有樣に、我れこそと名乘つて聞かさうか、いや勿體ない大師の御坊の戒めと、云うてはる〴〵來た者を、知らず顏見ぬ顏が、どうなるものぞ不便やと、百千萬の憂き淚、二つの目には保ちかね、前後正體泣き居たる、石童丸は目賢く。
さほどに歎き給ふのは、もしや父上ではあらざるか。早く名乘つて下さりませ。
〽縋り歎かせ給ふにぞ、亂れ心の折り節に、後の方の岩窟より、師の阿闍梨の聲として。
ト山おろしになり、山の頂上より阿闍梨、緋の衣頭

　巾にて出て、キッと下を見下ろし

阿闍　ヤア〳〵苅萱、棄恩入無爲の誓ひを、忘れ給ふな。

〽制せられて苅萱は、起き上がつて振り返り。

　ト此うち阿闍梨、入る。苅萱ハッと心づき

苅萱　ハヽア、さうぢや。迷うたり誤まつたり。今この三界皆これ我が子。いづれを我が子と思ふべき。師の手前面目なし。爰、放されよ。

〽爰放されよとありければ、石童丸は縋り寄り。

石童　申し御出家様、どうぞお側に置いて下さりませ。

〽拜みますると取りつけば。

苅萱　今おことが尋ぬる重氏入道、この山におはせしかど、諸國修行に出で給ひ、今は行くへも知れがたし。急ぎ下山し、母御の病氣の介抱めされ。

石童　ナニ、父上は行くへも知れず、この山にもおはさぬとや。

〽なら情なや淺ましや、我れはともあれ母様が、焦れ死をなされうかと、それぱつかりが悲しうて、後へ戻るも戻られず、似た人にてもあるならば、逢はせてたべとかき口說く、心ぞ思ひやられたり、見るに不便と苅萱は、いつそ名乘つて聞かさうかと、行きつ戻りつとつおいつ、弱る心を取り直し。

苅萱　オヽ、尤もぢや、道理ぢやが、母御の病氣とあるからは、一時も早く下山めされ。又これは、師の御坊、一萬座の護摩を焚き、調合ありし妙藥。急ぎ下山し、母御の病氣の介抱めされ。

　ト懷中より藥の包みを取り出し、そこへ置く。

〽差出せば、突き返し。

石童　イエ〳〵、御出家様の手より物を貰ふと、五百生まで手のない者に生るゝとの事。其やうに御深切に云うて下さりまする程、爰がどうも去にともない。申し御出家様、いつまでもお側に置いて下さりませ、拜みます〳〵。

〽手を合はしては縋り寄り、衣の袖に取りついて、歎き悲しむ有様は、賽の河原も斯くやらん、斯くては果てじと苅萱は。

苅萱　サヽ、早う行きや、左へ行けば、花坂とて、平地も同然。日の暮れぬうち、早う行きや。

石童　アイ。

苅萱　早う行かぬか。

石童　アイ。

　ト苅萱、わざと手荒く突き飛ばし

苅萱　行けと云ふに。

ト愁ひの思ひ入れ。

石童　ア、イ。

〽あいとばかりに、若君は、薬とあるを力にて、押し戴き懐中へ、是非も涙の憂き別れ、迷ひの道をばそこゝと、教へながらも苅萱は、心元なさ思はずも、引かるゝ縁の友綱や、見えつ隠れつ。

ト此うち苅萱、介抱して、杖と笠とを持たせ、石童丸泣く／＼花道へかゝる。正面の道具、段々と下手へ引く。苅萱、よろ／＼として岩根へ寄り、正面の山幕切つて落す。一面の大師堂になる。此うち苅萱、向うを見送り／＼、山の上へ登り、松へ手をかける。これにて堂の扉開く。一面の萬塔になり、苅萱、松の杖ほつきと折れて撞と落ちる。正面の萬塔、左右へ開き、弘法大師の像を押し出す。苅萱これにて大師を拝む。床の三重にて引張りよろしく、石童丸、向うへ入る。

幕

苅萱桑門筑紫𨏍（終り）

平家女護島

解說

享保四年八月、大阪竹本座初演の五段物で、作者は近松門左衛門である。本卷收錄の鬼界ヶ島の場だけが歌舞伎へ入つて、今に殘つてゐる。

大序は六條の河原へ南都の衆徒の首を曝すと、大佛の鼻の穴から文覺が出て義朝の髑髏を奪ひ取る。續いて俊寛の妻東屋が清盛に迫られて自害する筋から、俊寛の郞黨有王丸と、童の菊王丸の立廻りになる。第二段は、石清水へ代參に赴いた能登守教經が、瀨尾太郞に逢つて、鬼界ヶ島への赦免狀が二人だけと聞き、關所の切手へ情の一人を加へるといふ所。次がこの鬼界ヶ島の場で、三段目の切が今日まで殘つたのは、平家物語から謠曲まで、賣り込んだ傳說そのものが、戯曲的であり、それに千鳥を捕ませた趣向が面白い爲であらう。

三段目は重盛が病氣の慰めに早乙女を呼んで田植唄を唄はせると、常磐御前が無暗に男を引入れる亂行の次第がわかるので、彌平兵衞宗清が諫議に赴くところ。次が常磐御前の住ふ朱雀の御所で、常磐は亂行と見せ男を引込み、源氏再興を心がけてゐる。腰元笛竹と姿をやつしてゐるのが牛若丸である。宗清が諫議に來て、我が娘離笛の刃に死ぬるといふ褒が眼目。明治初年に中村座で「時惠花平家世盛」の名題で、常磐を八世岩井半四郞、宗清を三世中村仲藏で見せた事もあつた。また「並木正三集」に編入した「近江源氏容講釋」のうち、宇治の方別業の場は、この場の改作なので、淺君へ持込んだ趣向が面白い。「平家女護島」の名題はこの場から來たのである。

四段目は「ふなぢの道行」で、成經康賴千鳥が船の道行。船が備後のしきなの浦へ着き、有王丸が俊寛の迎ひに來て失望する件。千鳥が法皇を助け參らせたといふので、清盛が千鳥を殺す件、次が東屋千鳥の死靈の爲、清盛が火の病で死ぬ所である。五段目は文覺が八島の合戰の夢を見、勇んで賴朝の許へ赴く所で終つてゐる。終りが普通の淨瑠璃とは變つて頗る奇拔である。

平家女護島

鬼界ケ島の場

役名――丹左衛門尉基康。瀬尾太郎兼康。丹波少將成經。平判官康頼。海女、千鳥。俊寛僧都。

本舞臺、一面の浪幕。一セイ、浪の音にて幕明く。

謠〽元よりもこの嶋を、鬼界ケ嶋と聞くなれば、鬼ある所にて、今生よりの冥途なり、例へ如何なる鬼なりと、この哀れなどか知らざらん、この嶋の鳥けだものもなくば、我れをとふやらん。

ト謠納まる。知らせにつき、上手淨瑠璃臺へ竹本連中居並び、直ぐにかゝる。

〽昔語るも忍ぶるも、都に似たる物とては、空に月の影ばかり。

トこの文句あつて知らせにつき、浪幕切つて落す。

本舞臺、三間の間、浪の打寄せ、この向う一面、段段に海原の見渡し、銀張りにしてズッと向う遠山の書割り。舞臺の上下、岩組みの張り物。これに枯蘆の茂味、日覆よりは蔦かつらの絡みし松の吊り枝、舞臺よき所に丸物の誂らへの岩組み、これに振り好き磯馴れ松のあしらひ。この岩、後に眞中へ押し出す誂らへあり、東西正面の棧敷、蛙股の水引き打ち返すと、一面の浪幕、橋がゝりの通りへ浪手摺り、誂らへの通り飾りつけ、浪の音、次第にて道具納まる。

ト爰に俊寛、好みの形、肩腰へ木の葉荒布などを綴りし拵らへ、木の枝を杖にして、岩組みに腰をかけし見得にてセリ出す。差し金の千鳥飛ぶ事。

〽花の草木も稀れなれば、耕し植えん五つの穀物もなく。

俊寛　せめて命を繋けとや、峯より硫黄の燃え出づるを、

〽釣り人の魚に替へ、浪の荒布や干潟貝。

〽見る目に語る露の身は、憔悴枯槁の九十九髮・肩に木の葉のつゞれさせてふ蟲の音も、枯木の杖によろ〳〵よ

ろ〳〵と、今は胡狄の一族とかこちしも、俊寛が身に白雪の。積るを冬、消ゆるを夏、風の景色を暦にて、春ぞ秋ぞと指を折れば、凡そ日數は三年の、事問ふものは沖津浪。磯山嵐、濱千鳥。

〽涙を添へて故郷へ、何時廻り行く小車の、轍の鮒の水を乞ふ、憂き目もなか〳〵に、比べ苦しき身の果の、命待つ間ぞ哀れなる〽同じ思ひに朽ち果てし、鶉衣に苔深き、岩の崖道を傳ひ降り、蹌ふ有様。我れも彼の姿かや。

〽知らず諸阿修羅道故在大海邊、そも三惡四趣は深山海つらにありと御經にも說かれしが、我れも早、餓鬼道にや落入りしか、えゝ、情なや。

〽よく〳〵見れば平判官康頼、

ト思ひ入れあつて

アヽ、我れも人も、斯く衰ろへ果てしよな。

〽心もさわ〳〵濱邊の蘆、搔き分け〳〵來る人は、丹波の少將成經。

ト揚げ幕より丹波の少將、東の通りより判官康頼、何れも流人の形、肩腰、木の葉、荒布を綴りし着付け、木の枝を杖になし、出て來り

少將　イヤ、康頼どの。

ト花道にて

康頼　少將どのか。

俊寛　オヽ、それへ見えしは康頼少將。

少將　こは俊寛どのにて

兩人　ありけるか。

俊寛　爰へ〳〵。

〽招き合ひ、三人小蔭に寄り集ひ。

ト兩人、舞臺へ來る。

さて〳〵、この間は逢ひませぬが、無事でござりますの。

康頼　替る事もござらぬか。

少將　此やうに伴ふ人も

俊寛　明けても康頼、暮れても少將。

兩人　俊寛どの。

俊寛　三人の外ならではござらぬに、何とてこの間は、訪れては下されぬ。

〽手を取り交し泣き給ふ。

康頼　喞つは道理、さりながら、康頼はこの嶋へ、熊野三社を勸請し、日參に暇なし。三人の伴ひも、この頃四

人になつたるを、僧都は未だ御存じないか。

ト俊寛、思ひ入れあつて

俊寛　ナニ、四人になりたりとは、さては又、流人ばしあつての事か。

康頼　イヤ、左樣にては候はず。少將どのこそ、優しき海士の戀に結ぼれ、妻を儲けられしぞや。

俊寛　なんと。少將どのには、妻を儲けられたとは、そりや誰れでござる。

康頼　わしもしつかりとは存ぜぬが、かつぎの蜑ぢやとやら。コレ、少將どの、有やうに、云うたり〳〵。

〽云ふより僧都にこ〳〵と。

俊寛　ムウ、珍らし〳〵。配所三年その間、人の上にも我が上にも、戀と云ふ字の聞き初め。笑ひ顔もこれ初め。殊さら海士の戀とは、行平も磯にみるめの汐なれ衣、濡れ初めは、なんと〳〵。この俊寛も故郷には、東屋と云ふ女房。明暮れに思ひ慕へば、夫婦の仲の積る戀、語るも戀、聞くも戀、聞きたし〳〵。サヽ、語り給へ。どうぢや〳〵。

〽どうぢや〳〵と責められて、顔を赤むる丹波の少將。

少將　三人互ひの身の上を、包むにはあらねども、數ならぬ海士の小船を押し出して、戀と申すも

〽恥かしながら。

かゝる邊國波濤まで、誰が踏み分けし戀の道。あの露島の漁父が娘、千鳥と云ふ女。世の營みの汐衣。汲むも燒くも、それは又濱邊の業。

〽そりや時ぞと夕浪に、可愛や女の海士姿、腰に浮舟手には鎌、千尋の底の波間を分けて、みるめ苅る、黄楊の小櫛も取る間なく、榮螺の貝のくる〳〵わげも、緣ある日からは玉かづら。

かゝる嶋へも何時の間に、結ぶの神の影向か。馴初めなじみ、今は埴生の夫婦住ひ。夫を思ふ貞實の情深く、木の葉を集め縫ひ綴る針手利き。小夜の寐覺めは鹽しむ肌に引寄せて、聲こそは薩摩訛り。世に睦ましい睦言は。

〽身に泌み渡ると語らるゝ、僧都聞き入り感に堪へ。

俊寛　さて〳〵面白うて哀れで、伊達で殊勝で可愛い戀路。先づ何よりは、その君に見參が致したい。サア〳〵、庵へ案内を召され。ナウ、康頼どの。

康頼　ムウ、それ〳〵、少將どの、こなたの庵へ行きますゆゑ、祝言振舞ひの心で、火でも焚いてゐたらつしやれ

少將　イヤ〳〵、庵へ參るまでもなく、即ちあれへ同道い

たして來ました。これへ呼びませうか。

俊寛　何がさて、苦しうござらぬ。これへ呼ばつしやれ呼ばつしやれ。

少將　サヽ、千鳥、爰へおぢや。

兩人　オヽイ／＼。

千鳥　アイ／＼。

〽呼ばれてアイと蘆掻き分けて、背のあふこにめざし籠、かたげた振りも小じほらしげな、見目が好ければ身に着たる、襤褸も綺羅錦繡を、恥ぢぬ形はあたらもの、なぜに海士とは產れけん。

ト右の文句のうち、半振り袖、袂からげ、海士千鳥、鬢かき熊手かたげ、手の付きし目籠に蛤を入れ、竹の筒を吊し、これを持ち出て來る。

少將　ハイ、これが千鳥でござりまする。

俊寛　ドレ／＼、お近付きになりませう。

〽僧都も會釋の挨拶あり。

オヽ、千鳥とはお身が事よな。優しい聲を承つて、感心いたした。哀れ歸洛の御沙汰もあらば、四人連れで都入り、丹波の少將成經の北の方と仰がれ、緋の袴を着るを待つばかり。エヽ、口惜しや。岩を穿ち、大地を掘つても、一滴の酒はなし。杯と云ふもあらばこそ。めでたいと云ふ詞が卽ち三々九度。めでたい／＼。

少將　千鳥、俊寛どのへ、御挨拶申しやいの。

〽と突き出され、恥かしさうに會釋して。

千鳥　これは／＼、イヤモウ、この賤しき蜑の身で、緋の袴とは罰かぶる事。都人に緣を結ぶが身の大慶。殊には御身樣の姉ん女に似たとあれば、實の姉御ぢやと思うて、今日からいよ／＼親よ子よ、父樣よ娘よと、むぞうが着と、りんによがつてくれ召せや。

〽云へば皆々打笑ひ。

俊寛　何がさて、この四人は、互ひに親子兄弟と、思はねばならぬ。エヽ、口惜しい。酒がな。

千鳥　イヤ、少將さま、コレ、がいな事もあらうずと思うて、酒や肴を取り調べて來申した。皆樣、サア、參つて下さりませ。

康賴　ヤア、なんぢや、酒ぢや。エヽ、これは／＼、久し振りでお酒女郎に對面申す。ドレ、わしがきいて見よう。

ト手へ受けて一口呑んで見て

こりやなんぢや。水ぢやないか。

千鳥　七百年生きる仙人の酒とは菊の水。それを象り、こ

の筒に籠めたはこの嶋の山水。ハテ、酒ぞと思ふ心が酒よ。サ、この鮑貝のお杯。今日からは、りんによがつてくれ召せや。

俊寛 聞かつしやれたか。今の詞の端。なか／＼都恥かしい。滅多に物の云はれぬ事ぢや。

康頼 か丶るめでたい折柄に、なんぞ祝うて、生臭い物がちりさうなものぢや。

少將 コレ／＼、爰に海老がある。この海老も、妹脊のすさみに、階老同穴と云ふ物ぢやござらぬか。追ッつけ我れ我れめでたら都へ歸らうと云ふ心。好い吉左右でござるぞや。

康頼 オ丶、めでたい／＼。然らば手前が仲人役を仕りませう……イヤナニ、俊寛どの、こなた樣は嶋臺替りやら、待女郎やら。ほんにこなたは舅君。少將どの、先づ／＼上座にお直り下され。少將どのは、聟君の座に直らつしやれ。サアサア、千鳥どのは嫁君の座に直らつしやれ……サア、この杯は嫁御が呑んで、聟君へさ丶つしやれ……サア聟君。お上がりなされ。

ト康頼、よろしく取持ちする事あつて

少將 して、この杯は。

康頼 この杯は俊寛どのへ。

俊寛 オ丶、頂きませう。めでたい／＼。

諷〽さいつさ丶れつ呑み唄ふ。

〽硫黄が嶋も寶來の、嶋に譬へて。

俊寛も肴しませう……汲めども盡きぬ。

〽泉の酒とぞ樂しみける、俊寛、沖を打眺め。

ト此うち、千鳥が持ちし竹筒、鮑貝にて、よろしく酒盛りの事あつて、浪の音になり、かすめて竹法螺の音する。向う正面の浪幕の所、ふせん蝶の紋つきし幕張りの帆かけ船、旗指し物飾りつけ、次第に花道の浪幕の方へ來る。皆々目を付け、こなし。

ハ、ア、漁船とも覺えぬ大船、漕ぎ來るは心得ぬ事……アレ／＼、この嶋を目がけ走り來る。

康頼 又もや流人の者の來るのか。

俊寛 イヤ／＼、眞帆に走つて來る樣子では、西國渡海の船とも見えず。

少將 次第に近付くあの船は、印は正しくふせん蝶。

俊寛 ドレ／＼……誠に旗指し物のひらめく有樣。世の常の船ではよもあるまじ。吉左右の船なるや。

康頼 どうぞ都の船として、吉左右の船なるやう、我れ我

れが歸路の迎ひ船にしたいものぢや。南無熊野大權現。

少康　歸路の船かいなう〳〵。

千鳥　アレ〳〵、船が着いた〳〵。

〽あれよ〳〵と云ふうちに、程なく着岸、京家の武士の印を立て、汐の干潟に船繋がせ。

ト此うち、浪の音、下手よりふせん蝶の紋付きし幕張りしたる船一艘押し出す。これに、丹左衛門基康、侍ひ烏帽子、龍神卷き、大小の形。瀨尾の太郞兼康、同じく素袍の拵らへ、大少にて、中通り侍ひ二人、半纏股引、大小の形にて、床几持ち出る。水主二人、艪を押し出て來る。幕張りの内にて

兼康　ヤイ者ども。足場好き所へ船を繋げ。

皆々　ハア、。

〽陸に上がるは平家の侍ひ、瀨尾の太郞兼康、悠々と入り來る。

兼康　ヤア〳〵、それなる嶋人。先達て流罪なしたる丹波の少將、平判官康賴はおはするか。ズッと出ませい。

〽高らかに呼はる聲、夢とも分かぬ丹波の少將。

少將　成經はこれにて候ふ。

俊寬　我れは俊寬。髮髭が延びたるこの姿。

康賴　康賴は某でござりまする。

〽我れ先にとふためき走り、兩使の前にハッ〳〵と手を突き、頭を下げてうづくまる。

基康　流人ども、謹んで拜聽あれ。

〽懷中より赦し文、恭々しく取出だし。

ト基康、赦免狀開き、こなしあつて

中宮御產の祈りに依つて、非常の大赦を行はるゝにつき、鬼界ヶ嶋の流人、丹波の少將成經、平判官康賴、二人赦免あるところ、急ぎ歸洛せしむべきの條、件の如し。

〽讀みも終らず、二人はハッと平伏せば、僧都は不審の顏色にて。

俊寬　イヤ〳〵、憚りながら只今の御書承りしところ、成經康賴赦免とは讀まれしが、俊寬は何とて讀み落し給ふぞ。但しは礒打つ浪の音に、さへられての事なるか。なんとして我ればかりは。

基康　これサ〳〵、そりや何をお云やる。役目を蒙むり波濤を越え、態々越したる丹左衛門基康。役儀と申すは流人歸洛のお使ひ。上より賜はる赦し文、讀み落せしなんぞとは、流人の身を持ち慮外至極。二人の外に名があるか。疑はしくば、これを見よ。

ト件の赦免状を廣げ見せる。
〽と差出せば、康頼少將諸共に。
俊寛　正に書面に俊寛ばかりは……少將どの、讀んで聞かして下され。
ト少將、讀んで見て
少將　ヤ、こりや、二人の外には
俊寛　ドレ、見せて下され。
基康　丹左衛門の誤まりか。
俊寛　サア、それは。
基康　サア。
兩人　サア〱〱。
基康　宛名があるか。タ、たわけた事を。
トきつと云ふ。
俊寛　ムウ。
〽これは不思議と讀み返し、繰り返し、もしやと禮紙を尋ねても、俊寛とも僧都とも、書いたる文字のあらばこそ。
赦免の表を見ますれば、少將成經、判官康頼とばかりござつて、俊寛とも僧都ともござらぬが、これは御一門の思ひ忘れか。但しは筆の誤まりか。心元なう存ずる。外に仔細でもござりますか。仰しやつて下さりませ。
兼康　この瀬尾に御意なされしは、少將康頼二人ばかり、連れて歸れとの御意だワ。
俊寛　それは又、どうした仔細でござりまする。
兼康　俊寛事は清盛が情を持ち、法性寺の僧都にまで取立てたる者。早くもその恩を忘れ、新大納言成親と語らひ、おのれが自宅、鹿ケ谷の山莊に於て、謀叛の會合いたせし段、その科重ければ、一人殘し置き、鬼界ケ島の島守にせよとの仰せつけられ。
俊寛　ナニ、鬼界ケ島の島守にせよとな。
兼康　オヽ、清盛公の仰せつけだワ。
俊寛　すりやアノ、いよ〱。
兼康　くどい。
俊寛　ハアア。
ト呆れしこなし。下手へ來り
コレ、少將どの、康頼どの、ア、羨やましい。お羨やましい事でござる……今まで三人一緒に居てさへ、物憂き島でござるのに、二人は赦され、俊寛一人殘り、遂にはこの島の藻屑となるか。
〽今日は如何なる惡日にて、此のやうな悲しい事を聞く

事ぞ。
同じ罪、同じ配所、非常も同じ大赦なるに。
〽二人は赦され我れ一人、誓ひの網に洩れ果てし、菩薩の大慈大悲にも、分け隔てのありけるか。
疾にも捨身し死したれば、この悲しみはあるまいもの。
〽もしや／＼と存らへて、浅ましの命やと、聲も惜しまず泣き給ふ、丹左衛門氣の毒なりとは思へども、詞を正し。

基康　最早島に用もなし。仕合せと風もよし。イザ、御乘船……イヤナニ、家來ども、赦免の方々。

〽聲をかけ、丹左衛門、禮儀の衣服きらやかに、行々と床几に直り。

ア丶、誠に流罪となつて三年が間、同じ波濤に明暮れの伴ひ、語るも只三人、この悲しみは尤も至極。

ト懐中より錦の袋を取出し、中より立て文を出し

疾より申し聞けんとは存ぜしかど、小松どのゝ仁心、骨髓に知らせん爲、暫らくは控へたり。それにてとくと承はれよ。

ト俊寛、嬉しきこなし。これより、丹左衛門、立て文を讀む。

俊寛　ハア、。

〽懐中より一通取出し、恭々しく。

基康　鬼界ヶ島の流人俊寛僧都事、小松の内府重盛公の憐愍に依つて、備前の國まで歸參すべきの條、能登守教經、承つて件の如し。

〽聞きも終らず。

俊寛　エ丶、すりや三人ともに御赦免とな。

基康　なか／＼。

三人　ハア、有り難や／＼。

〽ハ、ハッと俊寛は、眞砂に額を摺り入れ／＼、三拜なして嬉し泣き、少將夫婦平判官、夢ではないか誠かと、喜び踊るぞ道理なる、猛火に解けし餓鬼道の、佛の甘露に潤ひて、如清涼地と謳ひしも、斯くやと思ひやられたり。

〽丹左衛門は形を正し。

基康　御兩君の御用、調ひし上からは、片時も早く出船の御用意。追風好きうち御乘船。

衆基　イカサマ、仕合せと風もよし。サ、丹左衛門どの、お召しなされ。

基康　先づ／＼、某許より……イヤナニ家來ども、赦免の

方々、船へ伴ひ警護いたせ。

侍ひ　畏まつてござりまする。

兼康　水手の者ども、出船の用意。

ト下手にて大勢の聲にて

皆々　ハア、。

侍ひ　イザ、お立ちなされい。

〽詞に喜ぶ皆々が、船端近く差寄れば。

ト康賴、少將、俊寛、千鳥、急ぎ船に乘らんとする。

ヤア女、われも乘るのか……瀨尾さま、これなる女も。

兼康　ヤア、ならぬ〳〵。見苦しい女め。見送りの奴なら
ば、船へは叶はぬ。キリ〳〵其所を立去り居らう。

少將　アイヤ、御尤もの仰せなれども、その女苦しからず。
この少將が配所のうち、厚恩の情を受け、夫婦となり、
歸洛せば同道と、堅く申し交せし女。御兩所の御料簡を
以て、着船の津まで便船いたさせ下さらば、子々孫々ま
でこの恩は忘れまじ。偏へにこの義、賴み存る。

〽手を下げ賴み詫び給へば。

兼康　ヤア、默り召されい、成經どの。思ひも依らぬその
賴み。咽喉元過ぎれば熱さを忘るゝと云ふ譬への通り、
流人の外、島人を同道、殊さら女は、叶はぬ〳〵……ヤ
ア〳〵役人中、引退けさつしやい。

侍ひ　心得ました……立ちませい〳〵。

〽目に角立てゝひしめいたり。

少將　マア〳〵、待たつしやれ〳〵。御料簡なければ是非
に及ばぬ。この上は少將も、この島に止まつて、都へと
ては歸るまじ……サア、俊寛、我れに代つて康賴諸とも、
船に乘られよ。

俊寛　イヤ〳〵、一人殘して本意にござらぬ。流人は一體。

康賴　それ〳〵、俊寛どのゝ仰せの通り、我れ〳〵

兩人　都へは歸るまじ。

〽三人渚邊に撓と座を組み、思ひ定めしその顏色、丹左
衛門は瀨尾に向ひ。

基康　イヤナニ、瀨尾どの、御覽なされ、流人の申さるゝ
も尤もの一言。斯樣にては君の御大願の妨げ。女を船に
は乘せずとも、一日二日も逗留し、とつくりと申し和め、
得心いたさせ、歸洛の方々の心よくてこそ、御祈禱なら
め。心々に申されては、却つて御願の妨げとも相成らん。
只管この儀は評議の上。

兼康　そりや、役人の我まゝ。船路關所の通り切手、二人
とある二の字の上に、教經公が一を加へ、三人とせられ

しさへ私し事。四人とはどなたの許し。所詮六波羅の館へ渡すまでは、我れ〳〵が預かり。乘らぬとて乘せまいか。また俊寛が妻東屋は、清盛公の御意を背く、その憎しみゆゑ、首ぶち落したわやい。

俊寛　すりや妻の東屋は。ヤ……ヤ。ムウ。

兼康　また汝の無量も、自害してくたばつたわやい。

俊寛　ハア、。

兼康　御憎しみの重なりたるあの俊寛、四人同然。都に於て笠の臺の飛ぶその坊主……ソレ、者ども、三人ともに船底へ押籠め動かすな。ソレ、引立てい。

侍ひ　心得ました。

〽承ると船子ども、千鳥を引退け三人の小腕、引立て引立て狩人の、餌ふごに小鳥を詰むるが如く、捻ぢつけ捻ぢつけ、嚴しく守る瀬尾が下知。

ト侍ひ兩人、役人四人も立ち出て、三人を引立て船へ乘せる。

兼康　サ、船出せ〳〵。

基康　不便には思へども、今聞く通り關所の印鑑。何かの事むづかしく、先づ只今は料簡せよ。我れ〳〵都へ上りたれば、御前へ申し上げ、少將どのより迎ひの船を遣はすであらう。今暫らく辛抱いたしやれ。

兼康　これサ、丹左衛門どの、我れ〳〵が役目は流人一卷き。外に何も用事はござらぬ。例へ何奴が憂き目辛い目見やうとも、知つて見ぬ顏知らぬ顏。大事の役目に御自分の、得手勝手をなされたら、後でお咎め蒙むつても、瀬尾は存ぜぬ。その時恨みと思はるゝな……サ、これサ、丹左衛門どの。早く船へお乘りなされい。

〽理屈ばれば力なく、同じく船に乘り移る。

ト是非なく丹左衛門、船へ乘る事。

〽不便や濱邊に打伏して、友なし千鳥泣き喚き。

ト千鳥、ワッと泣き、こなし。

千鳥　武士は物の哀れを知るとやら。

〽云ふは僞はり空言よ、鬼界ケ島に鬼はなく、鬼は都にありけるぞや、馴初めしその日より。御免の便り聞かせてたべと、月日を拜み、龍神に願立て祈りしは、連れて都で榮耀榮華の望みでなし。

〽簑蟲のやうな姿を、元の花の姿にして、せめて一夜の添寝して、女子に生れた名聞と、これが一つの樂しみと。

エ、、惨い鬼よ、鬼神よ。

〽女子一人乘せたとて。
輕い船が重らうか。人の歎きを見る目はないか。
〽聞く耳持たぬか。
コレ、乘せてたべ。
〽乘せてたべ乘せおれと、聲を上げ打招き、足摺りしては伏し轉び、人目も恥ぢず歎きしが、海士の身なれば一里や二里の海、怖いとは思はねど、八百里九百里の、泳ぎも水練も叶はねば。
コレ、この岩に頭を打ちつけ打ち碎き、今
〽死ぬる、少將さま。
お名殘り惜しい。さらばでござる。
〽泣く／＼岩根に立寄つて。
コレ、念佛申してむそうがもの、りんによがつてくれ召せや。
〽既に斯うよと見えければ、やれ待て／＼と俊寛は、よろぼひ／＼船端を、やう／＼轉び走り寄り。
ト船より俊寛、這ひ出て、千鳥を留めて
俊寛　コレ千鳥、今のを聞いたか。我が妻は入道どのゝ氣に違うて、切られしとや。三世の契りの女房死なせ、今にこの俊寛も、都の月花望みなければ、歎きもなし。世に便りなき俊寛。我れを佛になすと思ひ、御兩使賴み存ずる。この女、乘せてたべ。
〽よろぼひ寄れば瀨尾の太郎、大ひに怒り飛んで下り。
ト瀨尾出て
兼康　ヤイ、づく入め、何時の間に這ひ出た。なんぢや。女をば乘せてくれい。其やうに自由になれば、赦免狀もお使ひも要らぬ。馬鹿盡すな。
〽立蹴に撞と踏み飛ばし。
俊寛　すりや、如何やうに申しても。
兼康　ならぬ事だワ。
俊寛　そこをどうぞ。
兼康　ハテ、ならぬと云ふに。
俊寛　そこを何卒。申し、お慈悲／＼。
〽騙し寄つて瀨尾が差いたる腰刀、拔いて取つたる稻妻や、弓手の肩先八寸ばかり切り込んだり、うんと反れども流石の瀨尾、差添拔いて立ち直り、打ちかゝるもひよろひよろ／＼、僧都は枯木のいざり松、兩方氣力渚の砂原、踏ん込み踏みぬき息切れ聲を力にて、爰を先途と挑み合ふ。
ト此うち、俊寛、瀨尾の側へ這ひ寄り、一腰を引拔き

出し、隙を窺ひ瀬尾の肩先へ切り込む。瀬尾ヲッと云ひつゝ、たぢ／＼となり、キッとこなしあつて、差添を抜き、俊寛とちよつと立廻り。この中へ千鳥、うろうろこなしあつて、有り合ふ爨擢熊手にて、瀬尾の足を搔き、俊寛を打たせじと隔てる立廻り。瀬尾いらつて千鳥を蹴飛し、俊寛の方へ向ふ。手負ひの立廻り。此うち、千鳥、立ち上がり、いろ／＼氣遣ひのこなし。俊寛、危ふく受け身になる。瀬尾附け入る所を千鳥、有り合ふ目籠にて瀬尾の首へ引ッかけ引き戻す。瀬尾いらつて件の籠をかなぐり捨てる。千鳥、瀬尾を目がけ、砂を打ちつける。瀬尾、目に砂の入りしてなし。此うち、俊寛、息切れしこなし。よろめき／＼立ちかかる。三人、面白き立廻り。浪の音、大小のあしらひ、好き見得にて、下手の船の内にて

基康　ヤア、御赦免の流人と上使の刃傷。落着の首尾を見屆けて言上する。下人なりとも助太刀無用。

〽脇より少しも構ふなと、眼も振らず檢分す。

〽打つてかゝるもひよろ／＼柳、腰を力に挑み合ふ、千鳥堪へ兼ね竹枝振つて打ちかゝる、僧都は躍かけ。

トこの間、唄の合ひ方。

俊寛　コリヤ／＼、必らず寄るな／＼。枝でも當れば相手のうち。科は遁がれぬ。差出たらば恨みぞよ。

〽云はれて千鳥詮方なく、心ばかりに身を揉んだり、血まぶれの手負ひと、飢に疲れし痩せ法師、發矢と打てばたぢ／＼／＼、力に吊られ手はぶら／＼、組みは組めども締めねば、左右へひよろ／＼放れ、砂にむせんで肩息の、兩方危ふく見えけるが。

トよろしく立廻り。トゞ瀬尾、深手に弱り、摚と倒るる。俊寛、いざり寄つて、キッとこなし。

恨みの刃、瀬尾受取れ。

〽止め刺さんと立寄る俊寛。

基康　ヤレ待たれよ、その止め、決して無用。勝負はキッと見屆けたり。止めを致さば僧都の誤まり。止め刺す事無用々々。

俊寛　オヽ、科重なつたる俊寛。島に此まゝ捨て置かれよ。

基康　イヤ／＼、御邊を島に殘しては、小松どの能登どのの御情も無足し、御意を背く使ひの越度。殊に三人の數不足しては、關所の異論叶ひがたし。

俊寛　されば／＼、康頼少將に、この女を乘すれば、人數

にも不足なく、關所の異論なきところ。小松どの能登どのゝ情にて、昔の科は免され、歸洛に及ぶ俊寛が、上使を切つたる科に依つて、改めて今。
〽鬼界ヶ島の流人となれば。
上のお慈悲の筋も立ち、御上使の越度、聊か無し。
〽始終を我れと一心に、思ひ定めし止めの刀。
瀨尾受取れ、恨みの刀。
〽三刀四刀しゝぎる引き切る、首押し切つて立ち上がれば。
トよろしくあつて、止めを刺す。
〽船中ハツと感涙に、少將も康賴も、手を合せたるばかりにて、物も得云はず泣き居たる、見るにつけ聞くにつけ、千鳥一人がやる方なく。
千鳥　夫婦は來世もあるものを、わしが未練に思ひ切りのないゆゑ、島の憂き目を人にかけ、のめ〳〵船に乘られうか。皆樣、さらば。
〽と立ちかゝるを、縋りとゞめて。
俊寛　コリヤ〳〵待て。我れこの島に止まれば、五穀に放れし餓鬼道に、今現在のコレ修羅道、硫黃の燃ゆるは地獄道、三惡道をこの世で果たし、後生を助けてくれぬかいやい。俊寛が乘るは弘誓の船。浮世の船には望みなし。サヽ、乘つてくれ。早う乘つてくれいやい。
〽袖を引立て手を引立てゝ、やう〳〵に抱き乘せければ、詮方浪に船人は、纜解いて漕ぎ出す、少將夫婦康賴も。
康賴　名殘り惜しや。
少將　俊寛どの。
基康　隨分健固に。
俊寛　何れも、さらば。
皆々　さらば。
三人　互ひに未來で。
俊寛　未來で逢はう。
ト浪の音になり、船は橋がゝりへ引いて入る。
〽呼はる聲も出船に、追風の風の心なく、見送る影も島隱れ、見えつ隱れつ汐ぐもり、思ひ切つても凡夫心、岸の高見に駈け上がり、爪立つて打招き、濱の眞砂に伏し轉び、焦れても叫びても、哀れとむらふ人とても、啼く音は鷗天津雁、誘ふはおのが友千鳥、一人を捨てゝ沖津浪。
ト右のうち、浪の音よろしく、向う正面へ遠見の船、帆を上げ走る體にて引き出す。舞臺好き所へ誂らへの

岩臺を押し出し、これにて、俊寛、攀ぢ登り、向うを見やり、名殘惜しきこなし。向うの船は段々に東へ引く。浪の音にて、かすめて本釣り鐘。俊寛、松の小枝を力に伸び上り、向うを見やり思ひ入れ。我れを忘れてどつかり岩の上よりこけ落ちる。

〽幾重の袖や濡らすらん。

ト浪の音、トヒヨにて、蘆原より銀張りの鴎を大分引き上げる。これを淨瑠璃の三重にて、よろしく

幕

平家女護島（終り）

姫(ひめ)小(こ)松(まつ)子(ねの)日(ひ)廼(の)遊(あそび)

解說

寶暦七年二月、大坂竹本座初演の五段物。作者は吉田冠子である。元來が「平家女護島」を翻案したのだが、三段目だけが、ちよつと趣向が變つてゐるので、最近まで殘つた。爰へ收録したのが三段目である。名題は大序に、高倉天皇の中宮が、北野に子の日の小松曳の御遊の場面があるので、それに因んでつけたのである。俊寛が鬼界ヶ島へ一人殘つたと見せて、實は歸京して洞ヶ嶽に隱れ、小督の局を預かつてゐるといふのは、隨分院本式の企んだ筋だが、お安の描出が巧みなので、舞臺的には成功し、隨分歌舞伎でも數多く上演された。この外には、清盛が常磐御前へ執心の事、維盛と熊野御前との情話なぞを加へてある。角書にも「常磐御前、熊野御前」としてあるが、兩方とも詰まらない。別に「立春姫小松」といふ淨瑠璃もあるが、これは二段目四段目を改作したものに過ぎない。

江戸では「俊寛双面影」と名題をつけ、「平家女護島」の鬼界ヶ島へ、この三段目を連續させて上演する事が一時流行つた。筋から云へば別に連絡のない事もないが、それでは鬼界ヶ島の悲劇が一向に利かない事になつてしまつて甚だ詰まらないから、それも文化度だけでやめになつたやうである。江戸でこの洞ヶ嶽の俊寛を、最も得意にして數多く演じた人は、三世坂東三津五郎であつた。そして、相手のお安は、これも五世半四郎が得意にして演じたものであつた。四世三津五郎も父の藝を繼いでこの役は度々出し、殊に中風になつてからは、大して動かずにも濟む役なので猶さら數多く演じたものである。明治になつてからは、どうした譯かパッタリ出なくなり、明治十九年に中村座で市川荒五郎が演じたきり、大劇場では暫く出ない。

本卷に收録したのは、文化十四年十二月に、江戸中村座で上演した時の臺本で、その役割は左の通りであつた。

有王丸(五世松本幸四郎)小督の局(五世瀬川菊之丞)次郎九郎(淺尾友藏)岩穴([illegible]甚六)なめらの兵(二世關三十郎)深山の木藏(中村傳九郎、龜王丸(七世市川團十郎)お安(五世岩井半四郎)俊寛(三世坂東三津五郎)

姫小松子日廼遊

上の巻

龜王隱れ家の場

役名——薪屋萬作實ハ龜王丸。薪屋次郎九郎。娘、小辨。僧、雲穴。盜賊、だくぼくの江吉。同、みこしの胴六。漆の勘六。同、鋸の五郎。同、かつたり音。龜王女房、お安。生えぬきの岩實ハ有王丸。

本舞臺、三間の間、常足、二重見附け、鼠壁、納戸口、押入り、反古貼り障子屋體、軒口、茅葺き屋根、いつもの所、門口、外に薪大分積み重ねあり、すべて薪屋の體。鳴り物てんつゝ、時の鐘にて幕明く。

萬作お安、薪を束ねてゐる。

〽追分村の束ね木に、夫は掛け矢、妻は瓜木の束ねやう、習ひ覺えてかいしよげに。

やす　コレ萬作どの、其やうにあかまかせずと、マア、ちよつと休んだがよいわいなア。

〽云ひつゝ差出す酌置きの、茶のかぶ〳〵と何所やらに、花香殘りて可愛らし。

ト藥罐の茶注いで萬作に遣る。萬作取つてお安に一口呑ませ、後を頂いてグッと呑む。お安、思ひ入れ。

アレマア、阿房らしい。門口で、人が見て居るわいなア。

萬作　なんの、見たら大事か。お主は女房、おらァ御亭主。親仁どのは留守なりや、何をしようとも差合ひなし。

やす　アレ、まだあんな、

兩人　ハヽヽヽ。

萬作　イヤナニ、お安、お主は元康賴さまに腰元奉公。仲人入らずの乳繰り合ひ、ついコレ、物にたつたゆゑ

ト腹の大きいこなし。

ア、ひよんな事したと思ふ矢先、お三人の御流罪。屋敷は召し上げられ、お主もこの親里へ戻つたが、勿怪の幸ひ。この龜王が身の置き所。コレ、隨分とも、あの小辨さまを、大事にかけて、賴むぞや。

やす　そりやモウ、云はしやんすまでもない。お前の爲に御主人なりや、わたしが大事にせいで居らうかいなア。

萬作　忝ない〳〵。イヤモウ、その代り、眞實の子の龜王は、なんとも思はぬ。併し、大分この頃は、疱瘡も流行る程に、必らずともに、風邪引かしやるな。
やす　サア、わたしもさう思うてな、いろ〳〵のお呪ひや、お守も頂いて置いたわいなア。
萬作　そりや、よかつた。
やす　モシ、そりやさうと、曇つた加減か、日足は見えねど、もう日暮れ前。なんと、片付けようぢやあるまいかいなア。
萬作　オヽ、さうせう〳〵。手傳ひ次手に
やす　合點ぢやわいなア。
〽夫婦がてんでにお手々の束ね木、仲よい仲の鼻唄小唄。
　　ト此うち薪を片付け
萬作　ソリヤ、抛るぞ。
　　ト薪を投げる。お安受取る。
〽一夜なれ〳〵帶買うてとらしよ、帶ぢや仲人してたもれ、しよんがえ、しやんと片付け、竹の荒い焚附け選り分けて、
　　ト薪を積んで、萬作、薪の屑など選り分ける事。

これは勝手の遣ひ料と……ア、、先刻から、大分寒くなつて來たぢやアないか。
やす　サア、しん〳〵と冷えるわいなア。
萬作　今夜は大方雪であらう。親仁どのは、早う戻らつしやればよいに。坊主めが寒がつて、さぞ顫ひ居るであらう。イヤ、顫ふと云へば、その篩を。
　　トお安、竹の篩を取つて出す。
〽砂くち木屑掻き入れて、竹の簀の子の荒い目に、細かな始末しほらしゝ。
　　トてんつゝになり、花道より次郎九郎、世話親仁にて、抱子を懐に入れ、小辨、娘にて手を引いて出て來る。後より雲穴、坊主の拵らへにて
雲穴　オヽイ〳〵、次郎九郎どの〳〵、
　　ト呼びながら後より出て來る。
てもさても、達者な早い足ぢやなう。
次郎　オヽ、こりや雲穴さま。早いと云ふは、こなさんは、わしがお寺を出る折は、看經仕つてではあつたが、もうござつたかいの。
雲穴　アイナウ。こなたが戻ると、好い加減にさばよんで、直さま後から。

次郎　サア〳〵、そんなら一緒に。

雲穴　サア、ござれいなう。

ト矢張りてんつゝにて、舞臺へ來る。お安、見付けて

やす　オヽ、父さん、戻らしやんしたか。小辨、さぞ寒かつたであらうなう。マア、早う炬燵へ行きや。坊主も乳を呑みたがる時分。ドレマア此方……ほんに、わたしとした事が、此方の云ふ事ばつかり。お寺さん、御苦勞さん、ようお出でなされました。サア〳〵此方へ、

雲穴　イヤ〳〵、もうお構ひなされますな。

ト上手へ通る。

萬作　お主より、おれがうつかり。サアマア、お煙草をお上がりなされませ。

ト煙草盆を出し

寒いに、ようお出でなされましたな。

雲穴　アヽ、コレ〳〵……ナニ、親仁どの、こりや聟どのでござるか。元服をさつしやれたので、とんと見忘れました。ハテ、好い男にならしやつたの。イヤモウ、誰れしも覺えのある事。前髪は早う下ろしたいものでござるて。愚僧も小姓を勤めた時分は、それは〳〵美しい、綺麗な若衆でござつたゆゑ、惚れ手が多くて困り果て、それゆゑ斯やうに得道いたしした。シタガ、今でもその小姓の時の癖がやまいで、何か尻がもたついて、逆さまになつて寐るゆゑに、名を雲穴と附けられましたぢや。

次郎　エヽ、コレ坊さん、こなさん、其やうな阿房口ばかりきかずとも、マア、佛壇へ向つて、念佛を申さぬかいの。娘も爰に聞いて居るに、ほんに差合ひを知らぬお坊ではあるわいの。

雲穴　アヽ、コレ〳〵、親仁どの、さりとは悪い合點。今日こなたが、此方の寺へ非時かはり、お布施も持つて參つたぢやないかいの。すりや、それでもう回向は濟んであると云ふもの。愚僧も朝晩佛壇へ向つても、お經は覺えず、看經にも念佛、弔ひにも念佛、夜晝なしの常念佛に、ほつとりと飽き果て、爰へ來しなも寺の門を、ヌッと出ると、それは〳〵、とんと極樂へ出たやうな。アヽ、どうぞ願はくば、三日念佛申さずに、死にたいが願ひでござるて、

次郎　ムウ。そんなら、こなたは、逮夜をかこつけに、外へ出かけるぢやの。エヽ、いかい生臭坊主。コレ、衣の手前、ちと嗜なんだがよい。

雲穴　イヤコレ、次郎九郎どの、マア、こなたは談議を聞

かずちやの……エヘン〳〵、それ既に以て釋迦でも耶須陀尼女と契りを籠め給ふ。元よりこの身はお好みの道、必らず沙汰なしに頼みます。弾どの、娘御、もうお暇仕らう。

〽佛壇へは見向きもせず、雪駄を足に横町へと、こそこそ宿へ走り行く。

ト雲穴、向うへ走り入る。

次郎　なんとマア、弾どの聞いてか。つがもない自墮落坊主。シタガ、隱さぬ所が坊主氣質かいの。

萬作　そんなものでござりませう。

やす　てもマア、あんまりひよこすかと、おかしい坊さんでござんすなア。

次郎　時にお安、佛壇へお御燈上げてくれ。おりやツイ其うち奥で夕飯。ドリヤ、腹へ實を入れて來うか。

〽納戸へ入るや入相の、鐘の數添ふ六つの花。

ト　これにて次郎九郎、奥へ入ると、お安、火打箱を出し、佛壇へ燈明を上げ、行燈をつける。此うち淨瑠璃、雪、頻りに降つて來る。

〽頻りに降りて積る夜の、花ぞ散りけん東屋か、母の命日同じ日と、親齋藤次が位牌も共に、主と親とに香花を、弔ふ積りの手向けの水、觀王はしほ〳〵と、小辨の手を引き佛間に向ひ。

ト　此うち萬作、佛壇へ線香を立て、鉦撞木を取り出し、小辨を佛壇の前へ連れ行くこなしあつて。

萬作　モシ、小辨さま、明日はお前の婆樣や、お母樣の御命日、今夜はお逮夜。あの戒名を覺えてござるか。

小辨　アイ、母樣の戒名は、智覺院貞心大師。婆樣は妙法院無量大禪尼。

萬作　オヽ、左樣〳〵。

やす　心ばかりの御手向け。

萬作　南無幽靈出離生死頓生菩提。

やす　南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト　鉦を叩き、回向する。

〽南無阿彌陀佛の際願ひ、撞と座して泣きゐたる。

萬作　ア、未練な。泣くまいと思うて又つい泪が。

ト　思ひ入れ、合ひ方。

やす　ほんに、返らぬ事とは云ひながら、味氣ないお二人樣の御最期の御樣子。自體康頼さまとはお間柄ゆゑ、折折私しも館へ上がつた時、東屋さまより下されしこのお小袖。それと人目に立たぬやう、下へ着たのも今宵の逮

夜に、せめてあなたのお側にて、お給仕をする心にて。

ト下着の小袖を見せる。

萬作　イカサマ、お主がそのお小袖、今お形見と思ふにつけ、御最期のその折柄に、東屋さまの、あの子の事を、くれ〲お頼み。お氣遣ひなされまするな、この龜王が預かつて、指でもさゝせは致しませぬと、請合うて別れた後で、直ぐ御自害。いつそその時御同道申したらばと思うたばかり後の祭り。我が親の敵、飛彈の左衛門を討たうにも、あのお子が絆となつて打たれしが、うかうかとしては猶居られず、知つての通りに、この二ヶ月以前より、外を内と駈け廻るは、何卒源氏の余類を尋ね、旗上げなして主人の仇、親の敵も討つて、本望を達せんと、思ふ念力の天道にや通じけん、源氏の余類、爰彼所に約諾し、今宵も吉野邊まで立越えて、坂東八ヶ國の武士の方々、忍び〲の出合ひの相談。

やす　ムウ。そんなら今宵も行かしやんすかえ。

萬作　オヽサ、後よう氣を附けやれ。

ト此うち奥より次郎九郎、出て來る。

次郎　ムウ。そりやモウ、後にちつとも氣遣ひな事はない。必らず案じさつしやんないの。

萬作　こりや、親仁樣、聞いてござりましたか。そんなら今云ふ通りの譯。後をお頼み申しまする……お安どの、一腰を。

やす　アイ〲。

トお安、脇差を持つて來る。

次郎　アヽ、内に居てさへ寒いのに、これからマア、吉野三界。

ト云ひながら、門口を明けて見て

アヽ、こりや眞白。いつの間にか大雪ぢや。なんと、今夜は止しにさつしやれい。ナウ娘。

やす　サア、お前、なんなら明日でも早う。

萬作　エヽ、馬鹿な事を。今夜會合する約束。是非とも行かねば。

次郎　さうして、何時戻らつしやるぞ。

萬作　サア、事に依つたら今夜直ぐに、戻る事もござりませうが、それは定めず。もし戻らずは、四五日隙が要りませうぞ。

ト云ひながら簑笠を出し、草鞋を穿く。

やす　モシ、さう云ふ事なら、寒いに冷えでも引込まぬやう、熱燗にして、一つ呑んで行かしやんせ。

ト云ひ／＼燗鍋を火鉢へかける。

次郎　ムウ、さうぢや／＼。精進なれど、マア、旅立ち。
祝うてなんぞ生臭を。

やす　それぢやとて急な事……鰹節なと持つて來やんせう。

〽行く先祝ふ吉野盆、心も丸き女夫合ひ。

ト丸盆に鰹節を載せ、杯と燗鍋を持つて來る。

萬作　イカサマ、敵に鰹節とは、こりや緣起がよい。そんなら一つ。

次郎　イヤモウ、こなから酒で國傾くと云ふ事もあれば、これもめでたい。おれも寐酒に相伴しませう。

やす　それがようござんせう、

ト此うち、萬作、酒を呑んで

萬作　左樣なら、憚りながら、

ト次郎九郎へ猪口をさす。

次郎　ドレ／＼

ト一つ呑んで

サア、萬作どの、も一ツ呑んで、お安へめでたう。

やす　アイ／＼、わたしが。

ト萬作、又一つ呑んでお安へさして

萬作　そんなら親仁樣、行て參りませう。

ト簑を着る。お安、手傳ふ。

〽親の敵と主の仇、雪の中なる竹の子に、劣らぬ孝行道は斯う。

ト笠を持ち、門口へ出て、

女房ども、氣を付けやれ。

〽足を早めて急ぎ行く。

ト萬作、向うへ入る。

〽後は門の戸引締めて。

ト後を見送り、戸締りをして

次郎　エヽ、氣散じな男ではある。この寒いのに、マア、ツイ、隣り歩きをするやうに。

やす　ほんにマア、さぞ冷たい事で……その冷たいと云や、モシ父さん、据風呂を沸かしてある。よう溫まつて、この酒を、お前、寐酒に上がつて直ぐに。

次郎　そりや忝ない。年寄りには、それが藥ぢや。シタガ新湯は毒ぢや。マア、わが身先へ入りや。

やす　父さんとした事が、なんぼ毒ぢやとて、お前より先へ。

次郎　ハテ、義理の堅い奴。そんなら小辨どの連れて、先

へ入らう。後で坊主めを入れてやりや。
やす　さう致しまうせわいな。
次郎　サア、小辨どの。
ト手を取る。お安、思ひ入れして
やす　龜王どのは、もう何所らへ。
ト表の方へ思ひ入れ。
次郎　ヤ。
やす　サア、ござんせいな。
〽打連れ納戸へ入りにける。
ト三人共に奥へ入る。
〽早更け渡る冬の空、雪も悩みて山寺の、鐘の音冴えて物淋し、雪踏み分けて足音も、せぬが付け目のほくそ頭巾、目ばかり出せし大男、大髻したる二人連れ、あたりうそ〳〵、小聲になり。
ト此うち、雪おろしにて、向うより、有王、胴六、勘六、江吉、盗人の拵らへにて出て
胴六　コリヤ、勘六よ。われが先刻に話した、好い代物とは、この家か。とつくり見定めもせず、無駄骨をさすなよ。
勘六　ハテ、云はれぬ馬鹿念。お頭が指圖で、この崖の勘六、たくぼくの江吉、目どは眼張り役。よう見て置いた。氣遣ひすな。われ先へ構はずと、しくぢるなよ。
有王　そりや合點。か〻る場になつても、貧乏搖ぎもさせぬ。この生えぬきの岩。手筈は、コリヤ。
ト囁く。
勘江　呑み込んだ。首尾よう是非、合圖を待つぞ。
ト兩人、引返して入ると、有王丸、胴六、藪疊蔭より内へ入り、内の樣子見廻し、戸棚へ忍ぶ。
〽元來し道へ別れ行く、後に殘つて生えぬきが、裏からそつと竹垣踏まへ、忍ぶ裏壁切り落し、下家へ入る大男、板こぢ放し襖を押し明け、見廻して、しすましたりと一人笑み、又引立て〻忍び入る、それとも知らず親子連れ、銘々子供を抱きか〻へ。
ト此うち、奥より、次郎九郎、小辨を連れ、お安、赤子抱へ出で
次郎　ヤレ〳〵、結構な湯であつた。萬作は今時分は、さぞ寒からう。此方は極樂。ドリヤ、寐酒とやらかさうか……お安、一つ呑まんか、
やす　マア、緩りとそれで上がりませ。臺所に精進の、煮しめがござんすぞえ。

次郎　オツと、ぬかりは仕らん。
〽茶碗でぐつといつこく呑み。
ト此うち抱子、お安が膝へシイをしかけし思ひ入れ。
やす　オヽ、これはしたり、
次郎　どうした。拔き居つたか。ホイ、ソレ、大切の着物へ染みを拵らへては悪い。ちよつと上を、脱ぎや〱。
ト　お安、上着を脱ぐ。下着小袖になる。
ソレ、また湯ざめに風引いては悪いぞ。ちやつと炬燵へ。
ト炬燵をまくり、火を見る事あつて
オヽ、晝の炭團がまだある。サア〱、炬燵へ連れて行け連れて行け。
やす　アイ〱。
次郎　小辨どのも炬燵へ行かつしやれば、其うち呑んでしまつて、寐所はおれが出してやる。
ト　お安、小辨、炬燵へ來る。
やす　イエ〱、勿體ない、わたしが出す程に、構はずと上がつたら、先へお寐りませ。
次郎　ハテ、なんの勿體ない。マア、そんな事云はずと、坊主めが裾ひんまくつて、温めてやるがよい。さうして、

もう寐居つたか。この祖父に似ても、父に似ても、達者な奴ぢや。自體われを産んだ母が達者な奴。おれが留主の間に取上げ婆もいらばこそ、あまり心安う産んだゆゑ、われが名を直ぐにお安。そのわれが初産。この姉は腹一倍痛めずに儲けた、その後へその坊主めは、おれも蔦作のあの達者では、なんぼうも産むやら知れぬ。イヤ、これを又肴に、もう一杯。さてもよいワ。お安、一つ呑むがよい。
ト此うち、お安、抱子を抱いた儘、炬燵に凭れ寢入る。
ハヽア、寐たか。晝の草臥れ、道理〱。ドリヤ、醉の覺めぬうちに、寐ませう〱。
ト云ひながら、戸棚より蒲團を出し、我が蒲團を出し、お安が蒲團も出し
サヽ、お安、ほんに寐ぬかえ。お安〱。折角好い心持ちに寐て居るを、今起すのも可哀さう。一寐入りして起してやらう。寐所は出して爰へ置くぞよ。
ト　お安が蒲團を側へ置く。
先づ、此奴を斯うして、彼奴を斯う引かぶつて、ヤアこれわいさ。
ト　雪おろしになり、向うより、鋸の五郎、かつたり

音、盗人の傍らへにて、出て来る。

〽来るより先に高鼾、酒の酒気ぞ気散じなる、この里外れの一つ家を、心当なる夜働らき、二人連れにてこぞりける。

五郎　今度はどうした加減やら、行く〳〵先〳〵が、きついもの。行がけの駄賃。爰をつて見ようかい。

音　オヽ、素手の孫三では去なれぬ。なんであらうと、ありたけこゞだけ浚へてこまさうかえ。

ト囁く事。

〽鑿鐫入れて戸尻をめつきり、引戸の下敷をこぢ放し、前差し込んでかきがね外し。

五郎　サア、してやつた〳〵。

〽戸を明くれば、親子は正体寐入り端、内に忍びし以前の曲者、横箪笥にさし覗き、南無三明舎ござんなれと、身をひそめてぞ隠れ居る、表の方にはしすまし顔。

音　コリヤ、われは納戸のがらくたから片付けろ。爰はおれだ。コリヤ、手早くやらかせ。

五郎　呑み込んだ。

ト五郎、戸棚へかゝるうち、関六、手を取り出て

〽納戸をさして忍び入る、後に残つて眼を配り、戸棚は楽しみ、先づ押入れから浚へてこまそと、撰ぐわらりの手先をぐつと締め上げられ。

ア、イタヽヽ。コリヤ何奴。

〽云はせも立てず、腰骨ぽんと蹴上げられ、親仁が上にとんぼう返り、倒りむつくり次郎九郎。

次郎　ヤレ、盗人おやく〳〵。お安、子供を大切にせい〳〵。

〽孫を抱かへお安も小弁、後に隠ひうろ〳〵うろつくばかりなる、納戸の内より二人のかみども、抜きつれて切りかけるを、蹴口才すたとかい潜り、右へころり左へころり、起き上がるを踏みつけ〳〵踏み付けされ、二人はうろ〳〵顔見合せ。

五郎　われは何奴、押入れに囲むからは、仲間外れの小盗らしき。おいら達とは一つかま。その働らきを見る上は、今からおいらが手下になれ。

音　この家の内の道具、目に入つた物があるなら、一つ二つはうぬに遣る。持つてうせう。

関六　ムウ。うぬらが心に引比べ、どう盗人めら。五分切れ一尺おかたし、念かける男ぢやない。どう盗人めら、道具も元の所へ片付け、門の戸も元の所へ打ちつけ置き、この家へは指でもさすまいと、手形を書いて置いて行け、

大盗人め。
五郎　ヤア、此奴は盗人を捉まへて、盗人と云や、腹が立つ。
晋　もう免さぬ、
ト　かゝるを胴六、散々に打ち散らし、兩人、向うへ逃げて入る、
〽武者振り付くをづでんどう、起き上がれば投げ据ゑられ、二人ながら手玉につかれ、ひよろ〳〵〳〵、行燈はこけて真暗がり、親子はハア〳〵次郎九郎は、うろたへ聲。
次郎　コレ〳〵、初手に入つた盗人どの、怪我さつしやんな。
〽慌てふためく折も折、立歸る聟龜王、我が家の戸口。
ト　萬作出て
萬作　こりや何事ぢや。親仁どの、お安〳〵。
次郎　オヽ、好い所へ聟どのが。此方の内は盗人の稽古場。怪我せまいぞや、
〽表をさして逃げ出るを、眉間眞向脛骨腰骨、當るを幸ひ、逃げるをやらじと追ひかける、
ト　萬作、胴六、立廻り。トヾ、ほう〳〵にて胴六、向うへ逃げる。萬作も後を追うて入る、次郎九郎、透かし見て
コレ〳〵聟どの、長追ひ無用。怪我しよまいぞ。
〽表をさして隨ひ行く、サアしてやつたと以前の曲者、お安を小脇に引ッ抱へ、門口に飛んで出で、合圖の呼子吹き鳴らせば、兼ねて合圖のたくぼく江吉、長持舁いて走り付け。
ト　この時、後より、有王丸、お安、小辨を抱へ出る。江吉、手下長持を舁き出る。
江吉　生えぬき首尾は。
有王　上首尾〳〵。蓋明けい。
兩人　合點だ。
ト　手下四人、長持の蓋を明け、お安を捉へる。
やす　こりや何事、どうせう。こちの人、萬作どの、父様イなう父様イなう。
〽喚けども、びつしやりはつたり籠の鳥。
小辨　こりや母様を、何をするのぢやぞいなう。
ト　獅嚙みつく。
〽小辨が走つて獅嚙み付く。
有王　エヽ、面倒な。

〽振り放せば、足に喰ひつく我武者もの、殺されもせず。
ア、儘よ。重荷に小付け。
ト此うち、長持押し明け、お安、小辨を入れ、錠を卸す。
〽一つに押し込み、錠前ぴんと棒さし込み。
有王　夜明けぬうちに急げ。お頭へ手渡しせい。
胴江　合點だ。
ト長持を手下擔ぎ、行きかゝる。向うより、とぼ〱して、次郎九郎、出て來る。
〽長持肩に引つかたげ、何所ともなく急ぎ行く。
ト長持は向うへ入る。
〽遠目に見付け次郎九郎、こけつ轉びつ獅噛みつき。
次郎　コレ〱。娘を何所へ。こりやどうする。小辨と云ふは譯ある子。それを盗まれては、どうも聟へ云ひ譯がない。おれこそは町人なれ、聟どのは侍ひ。その侍ひから預かつた大切の人。連れて行くなら、おれを殺して連れて行け。殊に懐中に乳呑兒もあるわいやい。この坊主は餓死。盗人なら盗人らしう、ありふれた道具は取りもせいで、これはマア情ない。萬作は何してぞ。萬作やアい萬作やアい。

〽萬作やいと喚き聲、其奴が戻れば事やかましと、親仁を引立て門の内、押やりへし入れ、外からぴつしやり門の戸の、かき金しめて懐中より、用意の金子五六兩。
有王　コレ、親仁どの、その子めがかつへぬやう、乳母取らつしやれ。
ト包み金をやり、向うへ一散に有王入る。
〽門口の窓から投げ込む小判の翼、飛ぶが如くに曲者は、行くへ知れずとなりにけり、翁王は斯くとも知らず、門の口しやくつて。
ト萬作戻つて
萬作　こりやどうぢや。親仁どの、お安〱。
ト云へども返事なきゆゑ門口壊し内へ入る。
次郎　萬作どの、遲かつた〱。先刻の盗人めがお安と小辨を長持へ打込み、おれを此やうに立て籠めて、どつちへやら行き居つた。
萬作　ヤ、南無三寳。エ、死なしたり。女房は兎もあれ、天にも地にもたつた一人の小辨どの。それ盗まれては、生きても死んでも。弓矢神にも見捨てられしか。口惜しい……コレ親仁どの、北か南か、行くへは。
次郎　それ見付けたらよけれども、立て籠められて、なん

にも知らぬ。

萬作　エヽ、云ひ甲斐ない……ムウ。

ト花道際にて雪を固め、脇差を立て、見る事あつて

〽立つて見居て見足跡に、心付くれど詮方なく、はつと吐胸に卽座の辻占、主人が譲りのこの魂ひと、雪掻き集め四辻の、うらまさしけれ辻占の、神と唱へる呪文ばつたり、東へこける柄頭。

手に入る吉左右。

〽瑞相と、押頂き〳〵、忠義の切刃抜け目なく。坊主めを頼みますぞや……ムウ。さうだ。

〽後を慕うて。

ト雪おろし、床の三重にて、萬作、キッとなつて、一散に向うへ入る。

幕

下の巻

洞ヶ嶽岩窟の場

役名――新屋萬作實ハ龜王丸。盜賊、生えぬきの岩實ハ有王丸。同、深山の木藏實ハ越中次郎盛次。同、なめらの兵實ハ主馬判官盛久。同、根こぶの富士藏。同、たくぼくの江吉。同、みこしの胴六。同、漆の勘六。娘、小辨。小督の局、龜王女房、お安。巖窟の來現實ハ俊寛僧都。

本舞臺、一面岩組み、荒木造りの屋體。丸太の緣側付き、葭簀を下ろし、上の方、九尺の障子屋體、引抜き。下の方に白梅の立ち木、すべて、山城の國洞ヶ嶽の模樣、鳴り物一セイ雪おろしにて、幕明く。

ト爰に、深山の木藏、山賊の拵らへ、圍爐裏にて、焚火して居る。

〽尋ね行く、隱れ家は、人里放れ高々と、男山の南に當つて、洞ヶ嶽とて高山あり、枯木の枝に雪凍つて、劍を植えたる谷底は、鹿兎鬼の道を絕え、山の國とはこれやらん、爰にも住む住人は、荒木を伐つて柱とし、屋根は木の葉の幾重八重、障子襖も物侘びて、地爐の邊りのほとぼりに、今年ぞ春を白梅や、吹雪につれて庭の面、白浪とこそ見えにけれ、この家の主の手下に付く、筋くれ立ちし深山の木藏、圍爐裏に焚火大胡座。

木藏　アヽ、ヤレ〳〵、腹の底からぬくもつたら、眠氣が來た。ヤイ兵よ、なめらよ。何所に居るぞい。好い火が

出來たが、あたらぬかい。
トこの時、上手の内にて
兵　オ、イ〳〵。
〽おつと返事にこれも又、雲突くやうな大男、圍爐裏に馬乘り、尻ひんまくり。
ト此うち、上手より、山賊の拵らへにて、なめらの兵、出て火にあたる。
さつてもよいわい。オ、、極樂だ〳〵。
木藏　あんまり好い火ぢやに依つて、われを呼んだが、先刻からマア、わいらは何をして居たぞい。
兵　サテ、お頭が藥を煎じてくれろと云はれたゆゑ、今まで七輪の側に付いて居たが、われが呼ぶゆゑ、二人を置いて。
木藏　さうして、頭は何をして居らるゝぞ。
兵　イヤ、頭は炬燵にあたつて、本を見て居らるゝわい。
木藏　エ、なんの。本を見たとて、腹の足しにはなるまいし。それよりは、この雪降りに、河豚汁と云ふところなれど、山鯨の吸ひ物で、とつと一杯やつたがよいに。
兵　それよなア。そしてマア、見る〳〵から意地の惡い、氣味の惡いさうな顏つきで。
木藏　ハテ、そりや、われが猿の尻笑ひと云ふものぢや。あの頭ぢやて、おいらぢやて、女房氣のない氣散じ。湯がゝりはせず、髭は剃らず、悉皆獸物の交はり。
〽頼みある仲の股火に。
兵　ヤア、ハア、。
ト尻を叩いて
兩人　ハ、、、、。
ト笑ふ。
木藏　また大きな聲して叱られう。
兵　ほんに、叱られぬ先、飯拵らへして置かうかい。
木藏　イカサマ、この温まつた勢ひに、それがよからう。
兵　そんなら深山。
木藏　サア、來やれ。
〽打連れ立つて入りにける。
ト兩人、上手へ入る。雪おろし。
〽露山の雨に引替へて、雪に山家もいとゞ猶、人跡埋む隱れ住み、巖窟に來現は。
ト伊豫簾の内にて
俊寛　萬里の江天、萬里の花、夕友なき行の雪、ハテ降る

ワ降るワ。
ト大小入りの合ひ方になり、簾上がる。内に俊寛、見臺に向ひ、莨盆を扣へ、讀書のこなし。
昨日まで、木々の紅葉の紅いも、今日は一時に白妙と、替れば替る高根の雪。これぞ心に抱きし大願。天より味方の降り來る吉瑞。知らせならんと來現が、一人の喜び、あら面白の、眺めぢやなア。
〽彼の會稽の古事を、爰に移すも奥床し。
ト向うを見上げて思ひ入れ。この時、上手より以前の木藏先に、なめらの兵、富士藏、釼の捨、何れも山賊の拵らへにて、出て來る。
四人　お頭、爰に居やんしたか、
俊寛　ヤレかしましい。一間の方も今すや〳〵。隨分とも靜かに致せ。さうして、昨夜仕事にやつた、三人の者は、まだ歸らぬか。定めし首尾したであらうな。
兵　イヤコレ、頭、あの岩や胴六は、後から來た今參り。新參ぢやと思うて。ナア木藏。
木藏　ムウ。それ〳〵、なめらが云ふ通り、あいら三人ばかり働らきにやらずとも、こちとらも見立つて、なんぞ仕事を云ひつけて。ナウ、二人よ。
富士　さうだ〳〵。おいらも飯ばかり喰つて居るが、能でもごんせぬ。
捨　それ相應の用があらば、指圖してもらひたい。
四人　云ひつけて下んせや。
〽云ふに來現、にこ〳〵笑ひ。
俊寛　サ、其やうに云うてくれるが、頼もしい〳〵。生えぬきに云ひつけし彼の女。今にも連れて來たならば、お身達とも〴〵、云ひ渡した通り……ナ、合點か。
木藏　それはぬからぬ。ナア兵よ。
兵　ムウサ、もしその女が、嫌と云つたら。
四人　こちとらが寄つて血塗れ仕事。
俊寛　ヤレ……奥へ聞える。その後のしまひは其方達に賴むワ。嫌と云うたら……コリヤ。
〽鼻突き合す三人が、曉中に嶮岨の山道、だくぼく合點か、跆げぢや磯道、二人が連れ立ち、長持庭に昇き入るれば。
ト此うち、雪おろしにて、向うより、前幕の胴六と江吉、長持を擔ぎ早足にて、出て來る。
木藏　オ、胴六江吉、戻つたが。
四人　仕事は、どうだ〳〵。

江吉　お頭、氣遣ひさつしやりますな。
胴六　まぶでごんす〳〵。
俊寛　して、生えぬきは、何とした。
兩人　イヤモウ、其所へ來るでごんせう。
ト皆々向うを見て
皆々　オ、イ〳〵。
〽追ツつけ爰へと詞のうち、木の根岩角飛ぶが如く、皆皆それと出迎うて。
ト雪おろしにて、向うより、前幕の有王丸走り出て來る。皆々立ちかゝり
皆々　オ、、今戻つたか〳〵。
木藏　まぶな樣子は二人に聞いた。
兵　お頭がきつい待ち兼ね。
四人　御大儀々々〳〵々々。
俊寛　サヽ、生えぬき。爰へ〳〵……マア、樣子もとつくり聞きたい。先づ長持の、その人に。
有王　イヤ、お待ちなされませ。あの方の首尾、お話し申さう。彼の女を引ッ捕へ、連れ歸らんとせしところに、七つばかりの娘の子、某に取りついて足手纏ひ。面倒ゆゑにこれもこの、長持へ一つに入れる。折も折とて六十餘りの老人、懷に乳呑子を抱きかゝへ、孫は由ある侍ひ。その人に云ひ譯なく、我れを殺して連れ行けとの一言。イヤ〳〵、殺しては後の煩らひと、金子を與へ、振り切つて立歸る。
俊寛　ムウ。すりや、侍ひの女房とな……よし〳〵……して、どうぢや。
有王　それよりも道を急ぎ、この山へかゝる麓にて、何とやら胸騷ぎ。合點行かずと振り返れば、又六町も後より、屈竟の若者、追ひかける樣子に思へども、道もないこの嶮岨、よもやと思ひやり過ぐれど、小事は大事の基と申せば。
ト思ひ入れ。
俊寛　成る程、千丈の堤も、蟻の穴よりとの譬へ……大儀ながら、しまつて來い。
有王　ハツ。
〽まつかせ合點と駈け出せば。
木藏　ア、、待て〳〵。生えぬき、われ一人の草臥れ足ぢやア心元ない。
兵　木藏。サア、一緒に行くべい。
皆々　おいらも行くべい〳〵。

ト皆々身拵らへする。俊寛、こなし。

俊寛　ハテ、ざわ〳〵と仰山な。内にも大事を抱へながら、殊に、どうした用事……例へ五十と百伏勢ありとも、なか〳〵以て仕兼ねぬ生えぬき。早急げ。

有王　ソレ。

〽畏まつたと駈け出す、

トまた雪おろしにて、有王丸、一散に走り入る。皆々見送つて、思ひ入れ。

木蔵　エ、、せめておればかりなと、連れて行けばよいのに。

俊寛　ア、、それもさうぢやが、たくぼくよ、その役人を、早く出さぬかえ。

皆々　オ、、さうぢや〳〵。

〽さうぢや〳〵と立ちかゝり、寄つてかゝつて長持の、棒外すやら錠突き明け。

木蔵　サア、女中さん。

皆々　出やんせ〳〵。

〽サア出やんせと呼はる聲々、お安は小辨小脇に抱かへ、飛んで出るより後に圍ひ見廻せば、日の目拜まぬ荒男、色惡白くつくも髪、髭の延びたる牛の如く、一目見るより、氣も魂ひも消え入りしが。

ト此うち、お安、小辨を連れ、長持より出る。

小辨　アレ、怖いわいなア。

やす　コレ小辨、怖い事はない。わしにしつかり取りついて居や。

〽氣は張り弓でも膝がた〳〵、生きた心地はなかりける、來現じろ〳〵打眺め。

俊寛　なんにも知らず、遙々の所を、ようこそ〳〵。さうして、小さいのを連れ、マア〳〵爰へ。コリヤ、其方達、出て挨拶せい。

〽云ふにおづ〳〵這ひ出でゝ。

木蔵　オ、、お内儀さん、ようごんしたなう。

兵　コレ坊、小父ぢやぞや、

胴六　ほんに色白で目も二つあり。

富士　そして悧巧さうな、

木蔵　ドレ〳〵。ムウ。好い子ではあるわい。胴六よ。

胴六　オ、、おらア昨夜からの馴染。コレ、お内儀さん、爰の内には大切な御病人があるワ。その御病人に付いて、こなさんの體がちつと。嫌と云はんしても、應と云はんしても、どうで血まぶれ仕事。ナア江吉。



四世瀬川路考のおやす

三世坂東三津五郎の俊寛

江吉　それ〳〵、ほんにわりない御無心。嫌と云つて歸りたくつても、爰は籠の鳥同然。アレ、あの閻魔大王どのが、連れて行けと指圖が出にやア、行かれはせぬぞえ。

木藏　サア、大儀ながら女中さん。

皆々　奧へごんせ。

　ト皆々側へ寄る。

やす　マア〳〵、マア、待つて下さりませ。左樣なら私しどもは、歸る事はなりませぬか。

皆々　知れた事。血まぶれ仕事。

やす　さうしてマア、血まぶれ仕事と仰しやるは、どうでも殺されますのでござりますか〳〵。

　ト泣き落す。また氣を替へ

成る程、私しが命を上げませうが、この子の命は、お助けなされて下されませ。この子は大事の……ちつと譯のある子でござります。どうぞ、この子の命は、お助けなされて下されませ。お願ひ申します。私しが命は微塵・さら〳〵惜しみませぬ。どうぞこの子をお助けなされて下されませ。

　ト一人づゝへ賴む事よろしくあつて、トゞ俊寛に向ひ

ア、閻魔樣とやら、今も申しまする通り、よく〳〵な事ぢやと思うて、この子の命をお助けなされませ。その代りには私しの命は、差上げますが、ならう事なら、助けなされて下さりませ。內には年寄つた父樣、夫婦が仲にたつた一人の……まだ外に乳吞子もござります。

　ト此うち、皆々を賴む事あつて

〽拜む〳〵と兩の手に、流るゝ泪瀧山木の、雫解け染むる如くなり、來現は最前より、默然として居たりしが。

俊寛　ハヽア、誠に鹿を追ふ獵師山を見ずと、云ふ諺はつたりと忘れたり。此方の云ふ事ばかり。後先の譯云はぬゆゑ、女心に殺さん爲、連れ來りしとの推量、尤も尤も。コリヤ、皆の者、この來現を始め、其方達が形恰好。誠を云ふとも、誠なりと思ふ者、一人もあるまい。某が賴み入る一大事。合點の行くやうに、とつくりと云ひ聞かさん。お身達は先づ、奧へ〳〵。

皆々　ア、イ〳〵。

木藏　そんなら、お內儀。

皆々　後にえ。

兵　晩にはおらが抱いて來るぞよ。

〽伴ひ奧へ入りにけり。

ト　わや／＼皆々云つて上手へ入る。俊寛、あたり見廻し、こなし。

俊寛　サア／＼女中、怖い事も、なんにもない。サア、爰へ爰へ。

〽物和らかな程氣味惡く、たゞ。

やす　アイ……アイ。

〽と後じさり。

俊寛　ムウ。これも此方が惡い。

ト　一腰を出し

覺えの業物。こなたも武士の妻とあるからは、腰に帶してしつかりと、頼み入りたき一大事。サ、、爰へ／＼。

〽招かれて、少しは心お安の思ひ、小辨を後に押圍ひ、心を配る目遣ひに。

ト　一腰を差し二重へ上がり

やす　なんの御用、

〽と立ち寄れば。

俊寛　頼み入りたきその仔細は、口でまだ／＼云はんより……ソレ。

〽奥の障子の立て明けも、心靜かに押明ければ。

ト　上の方、屋體を明ける。障子の内に、小督の局、病體にて、褥の上に脇息に凭れ居る。

〽さもやごとなき上﨟の、殿上人と思しくて、芙蓉の顔氣高くも、こぼれかゝりし品かたち、面映げなる顔を上げ、重なる褥に打凭れ。

小督　最前よりのあらましは、殘らずこれにて聞きしぞや。ナウ女中。自らはゆゑある身。仔細あつて爰に隱れ忍び、あの衆達の介抱に、心に足らはぬ事はなけれど、殊に妾は只ならぬ身の、何時安産か知らねども、乳人の一人もあらばこそ。男の子ばかりのその中で、思へば心恥かしく、何國の誰れかいつしかに、見えし事はなけれども、女同士の情ぞや。生きる瀬か死ぬる瀬か。常々の上はいとはねど、お腹の嬰兒は、忝なくも。

俊寛　ア、イヤ、その後は來現が。

小督　サア、兎に角にも、あの女中を。

〽よろしう頼むとばかりにて、打伏し給ふぞ理りなる。

俊寛　大切のお身に、風が當らば何かの障り。お心惡しくは何時なりとも、お手鳴らされい。

〽障子引立て一間を出て。

ト　障子を締める事。

イヤナニ女中、先づこなたの名は、なんと。

やす　ハイ、安と申しまする。
俊寛　ナニ安。ハテ、産所には安。ハ、、、、、吉左右吉左右。いま聞いていの通り、あなたのお頼み。我れ／＼が此やうに、心を砕くも右の譯。もう斯うお頼み申すからは、あなたのお名も打明けて、お頼み申す筈なれど、そこがサア、世を忍ぶゆゑ斯くの仕儀。最前より見らるる通り男ばかり。産みかけてから後の仕様、どうしてよいやら勝手を存ぜぬ。コレ、偏へに頼み入り申す……コリヤ／＼、皆出て、ソレ、お頼み申せ。
皆々　アイ／＼、
〽皆々おづ／＼這ひ出でゝ。
　ト上手より、以前の手下出て
木蔵　なんにも知らぬ不調法者。
皆々　よろしうお頼み申しまする。
〽手を合すこそ殊勝なれ、引くに引かれぬこの場の譯。
やす　イエモウ、私しぢやと云うてから、産にかけて習ひはござりませねど、女子の大役、殊に初産、覚束ないものなれど、それ程に仰しやる事。マ、、心一杯、お力になりますでござりませう。
俊寛　ナニ、お世話なされて下されうとな。エ、忝ない。コリヤ／＼、皆も喜べ。
皆々　エ、、有り難うござりまする、
〽一度に頭畳につけ、打つて替へたる笑ひ顔、初めの怖さに引替へて、お安親子が安堵の思ひ、世際の悪い杢公に、二番湯かけし心地せり。
皆々　エ、、有り難うござりまする。
　ト皆々、おかしみよろしく
やす　ホ、、、……、イエ申し、來現さま。さうして、あなたがこの月が、御臨月でござりますかいなア。
俊寛　されば、大方そんな事でもござらうか。
やす　サア、それなれば、今をも知れぬこぼれ物。襁褓の湯上げの胞衣桶のと……その御用意はあるまいの。
俊寛　ヤア。そりやマアなんの事ぢや。コリヤ、わいら、知らぬか。
木蔵　ハテサテお頭、それを知つてよいものかいの。
兵　なんだか覚えにくい事ばかりだ。
富士　お頭。モシ、しつかりと聞いて
皆々　置かつしやりませ。
俊寛　イヤモウ、おれぢやと云うて、たべつけぬ事。違うては行かぬ。ドレ、その硯。

兵　オイ〳〵。
ト硯箱、紙を添へて出す。
俊寛　サア〳〵、お安どの、御苦勞ながら今一度、初手から云うて下されい。
ト筆を取り上げる。
やす　ハイ〳〵、先づ荒孤二枚……湯上がりのむつき。
俊寛　この、むつきとは、なんの事ぢや。
やす　サア、なんぢやとて、その脇へ綿と書いてお置きなされませ。
俊寛　へヽエ、綿の事か。
トいろ〳〵認めて
やす　それから盥、手桶、湯つぎ……マア、あらましそんな物のやうでござります。
俊寛　よし〳〵、コレ、何處ぞ其所らの、見える所へ貼つて置け。
捨　オイ〳〵。
ト捨ぜりふ云ひながら鴨居へ貼る。
〽噂半へ一間の内。
ト障子の内にて手を打つ。
俊寛　アレ、お手が鳴る。お安女郎、ちやつと行つて下されい。
やす　ハイ〳〵……そんなら、サア、小辨。
ト皆々急き立てる、
〽早う〳〵に心得ましたと、小辨が手を引き走り行く。
トお安、小辨を連れ、障子の内へ入る。皆々思ひ入れ。
〽後には互ひにうろ〳〵眼。
俊寛　ア、もうであらうぞよ……どうやら心細いものだ。
〽奥を見やつて立つて見居て見。
ト皆々、とも〳〵にウロ〳〵する、
〽小辨は鏡臺重たげに。
ト障子の内より、小辨、鏡臺を持ち出る。
小辨　申し〳〵、もう追ッつけでござんす。奥が狹い。この鏡臺も、其方へ直して、湯も沸かして置かしやんせ。それより先へむつきが要る。今取つて來いとでござんす。
俊寛　なんぢや。むつきが先へ要る。
江吉　それ〳〵、今の綿ぢや〳〵。
皆々　その綿は急には無いワ。
俊寛　無いと云うては濟まぬわい。どうぞして才覺せい。

木藏　でも、これが罪耳に綿ちや。
兵　どうも仕方が。
五人　オヽ、ある〳〵、
〽云ひつゝ皆々立ち寄つて、深山なめらが帯引解けば。
木兵　コリヤ、どうする。
〽どうするどころか早脱げと、無暗に引剝ぎ丸裸、奥へ
持ち行く當座の働らき。
ト捨ぜりふにて、二人が布子を脱がせ、小辨に渡す。
小辨、持つて奥へ入る。
〽後に二人が顔見合せ。
木藏　イヤ、酷い目に遭はせるな。
兵　股火の報いが爰へ來たわえ。
木藏　よい〳〵。裸次手に、湯を沸かさうかえ。
兵　それがよからう。サア、行きやれ。
〽二人連れにて走り入る。
俊寛　コリヤ〳〵、湯が沸いたなら、荒猿も何もかも、裏
の縁から静かに廻せ。
〽云ひつける、折もお安がとつかわと。
ト以前のお安、襷がけにて急ぎ出て
やす　申し〳〵、早目の用意はあるまいな。

俊寛　ナニ、早目とは。
やす　ほんに、こんな事知つたなら、わたしが内から持つ
て來るもの。アヽ、どうせうな。
〽見廻すうちに心の機轉、これ幸ひとたくぼくが、背中
踏まへて庭の白梅、一枝手折り。
モシ〳〵、お白湯〳〵。
富士　オツと合點。
〽閼爐裏にちやん〳〵茶碗に移し。
ト湯汲み渡す。
俊寛　それが早目か、
やす　ナイノイナ、藥のないので思ひ付き。眞先かくる心
の早梅。早目の替り。
〽白湯かき立てゝ走り行く頓智發明、物馴れてこそ見得
にけれ。
ト障子の内へ入る。
〽來現一人が心わくせき。
俊寛　アヽ、又この生えぬきは何とした。これも氣がゝり。
奥も氣遣ひ。
四人　オヽ、わしらが云つて見て來ませう。
ト駈け出さうとする。

俊寛　アヽ、コリヤ〳〵待て。後が大事ぢや。おればかりでは力がないわえ……コレ、奥はどうぢやな……生えぬきは……ても氣がゝりな事ではある。

〽辛氣なものと腰掘らず、莨のんでも煙管より、咽喉に詰まりし思ひなり、奥の產所は汐滿つ誕生、やす〳〵とお安が働らき、產聲高く聞えけり。

ト障子の内にて、赤子の聲頻りにする。皆々は驚ろきこなし。

四人　ソリヤこそ、出たぞ。

〽そりやこそ出たぞ御誕生、勝手は用意の鰹節かくやら摺鉢持ち出し、人がなうて、ぐわら〳〵〳〵、

ト此うち、寄つて鰹節を掻く事、味噌摺る事なぞ、うろたへ返し、よろしくある。

俊寛　コリヤ〳〵、靜かにせい。エヽ、裏へでも持つて行け……コリヤ〳〵、取上げ內儀に叱られなよ。

四人　アイ〳〵。

ト捨ぜりふ云ひながら奥へ入る。

〽ろく〳〵舌も廻らぬに、奥より小辨がいつきせき。

ト障子の内より、小辨、走り出て來り

小辨　申し〳〵、お喜び遊ばせ。產れたお子は、玉のやうな男の子。お二人ともに、お達者でござりますわいな。

〽云ひ捨てゝこそかけり行く、來現ぞく〳〵小躍りし。

俊寛　ナニ、御誕生。しかも御男子。アノ男のお子とな。アノ男の子……これぞ誠に源氏の運の開く瑞相。チエヽ、有り難い。

〽思はず高聲高笑ひ、天を拜し地を拜し、喜び勇むぞ道理なる、お安は一間取片つけ、勝手へ出れば。

ト障子屋體より、お安、手拭にて手を拭ひながら出る。

これは〳〵お安女郎には、アヽ、きつい御苦勞々々々。イヤモウ、お禮の申しやうがない。サア〳〵、爰へ〳〵。

〽暫らくお休みと、奥底もなき喜び顏。

やす　さればいなア。案じるより產むが易いと、思ひの外心安う御誕生。殊に男の子。さぞお喜びでござりませう。

俊寛　イヤ、喜びの段か。今にこの胸が、どつき〳〵。

やす　サア、そのお喜びの次手に、ちつとお尋ね申したい事があり。

俊寛　何か〳〵。なんなりとも。

やす　イヤ、別の事ではござりませぬ。あなたのお名は、

なんと申しまする。
俊寛　ハテ、知れた事、來現。
やす　イヤ、來現とは假の名。御本名が承りたい。
俊寛　そりや又何ゆゑ。
やす　サ、先程お前のお詞に、源氏の運の開く瑞相ど、仰しやつたは、此方にちつと耳寄り。御本名承つたその上では、我が夫の身の上も、打明けて申すまいものでもない。ナア申し。
〽と問ひかけられて。
俊寛　ハテ、異な事の詞咎め。何か世話になつたお安女郎の事なれば、早速斯うと云ひたけれど、今は云はれぬ。時節があらう。
やす　フム。御尤も。
〽と、ずんと立つて鏡臺の、二面の鏡両手に携へ、鏡は神の御末、
ナア申し、神の御末。即ちコレ女の魂ひ。隠しけれども、わたしも武士の妻。お名を聞くは、もし外へ洩れもやせんとのお疑ひ。無理ならず。曇らぬ心の金打。
〽と振り上げるを。
俊寛　コレ待て。
やす　イヤ、お留めなさるゝな。
俊寛　ハテサテしつこい。マア放せ。
やす　イヤ、放さぬ。
〽二面の鏡に二人の顔、キッと眺めて、
俊寛　ホヽヽ、天晴れ〳〵。鏡を以て金打とは、ひづまぬ心の武士の妻。女の生粋、天下一。サア、その心を見るからは。
〽物語らんと引ツたくり、鏡に映る我が顔を、ためつすがめつ打眺め。
ハア、我れながら窶れたり。
〽衰へたり。
唐土の屈原が、こうだんにさまよひしも斯くやらん。四年振りにて我が顔に、初めて逢ひ、思ひ出せし昔語り。
〽聞いてたべ。
去ぬる頃、平家一門の咎めを受けし三人、鬼界ケ島へ流されし、康頼成經二人は赦免。一人後に捨てられし、俊寛でおぢやるわいの。
やす　エ、アノお前様が……エ、、、、。
〽と驚ろくお安が愕りに、奥より走つて出る小辨。
コレ〳〵、こなたは表へなんの用。奥へ行て、とつくり

と、あなたの御用を、よう聞きや……よう聞いた上では、母が呼ぶと云ひつけて置くに、聞分けのない。

〽聞分けないと目遣ひも、敏き小辨が。

小辨　イヽエ、わたしや今の聲に恟りして、思はず爰へ出ましたわいなア。

〽云ひ紛らして奥へ行く。

ト上手へ入る。

俊寛　サア、その後を聞いてたべ。赦免状は重盛の、自筆を以て書かれし上は力なし。この頃までは三人一緒にありつるに、何とて一人、この嶋にあるべき身とは思はねど。

〽流石命の悲しさに、纜に取りつき縋り。

せめて向うの嶋までも、乘せてたべど引きとむれど。

〽引き止むれど痩せ腕。船に引かれて磯端を、ころ／＼ころ、轉んで引ッ張る悲しさ辛さ、

情を知らぬ舟子ども。纜どうと打ち切つて。

〽汐の深味へ十町餘り、折しも烈しき荒浪に、浮いつ沈んつ。

沈んつ浮いつ。岩の狭間に船の影。

〽見えつ隠れつ沖の方。

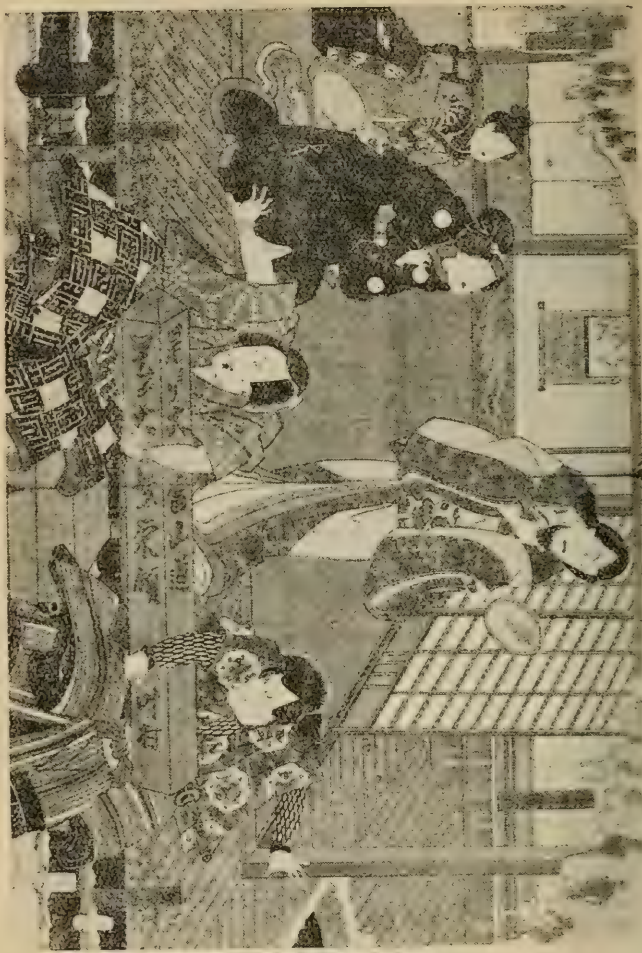
岸の小松も恨めしく、只手を上げて、船よなう。

〽船よと呼べど叫べども、いつかな／＼、彼の松浦小夜姫も、我が身にはよも増さじ、浪に爭ふ我が涙。

都に殘りし東屋が事、たつた一人の徳壽が事、胸に迫り、目先へちら／＼。都にてもさぞ、嘆かん事の不便やと、夢ともなく現ともなく、その夜は其所に嘆き伏し、早明け方の朝嵐、ぞつと身に染み眼を開けば、思ひも寄らず、國に殘りし有王丸、重盛公より密事の使ひ。コレこの密書に重盛の情を以て、一人島に殘されし段々、小督の局の御懐胎、中宮のお妨げと、父清盛の放埒邪慳、御身の上に過ちあれば、天の御罰空恐ろしく、重盛密かに局を奪ひ、この洞ケ嶽に忍ばせ申せし上は、俊寛早く彼の地に赴き、御誕生の若宮守護いたせよ、汝が魂ひを見抜きしゆゑ、即ち其方が家來有王を、忍びの使ひとの御諚。ハヽア、有り難き恩慮、忝なしと、夜を日について俊寛が、再びこの地へ顯はれ來る、心を直ぐに來現と改名し、思ひも依らぬお身達までに、苦勞をかけしは天下の御爲。この巌窟に御住ひ。あなかしこ。人に沙汰ばしし給ふな。

〽始め終りの物語り、小辨は聞くより。

トこの間よろしくあつて、この時、小辨出て來り
小辨　ナウ懐かしや父樣、逢ひたかつたく＼わいなア。
〽逢ひたかつたと抱きつき、聲も惜しまず泣き出す、思ひがけなき來現悔り。
俊寛　茲な子は、なんで泣く……エ、聞えた。奥で轉寐夢見たな。さうして、母樣と云ふを取違へて、父樣とは、アヽ、粗相千萬。母樣は、アレ彼處に。
ト お安へ思ひ入れ。
ヤ、コレ、お安女郎も泣くが。何とぞしやつたか。
〽問はれてお安が泣いじやくり。
やす　これが泣かずに居られうか。その小辨と云ふは、お前のお子でござりまする。
俊寛　コレ、この女中は何を云やるぞ。成る程、流罪の折から、後に殘せしは男子。この子は女。
やす　サア、それにつけても悲しきは、憎しみ受けしお前のお子。男子と聞くならば平家の我まゝ、あの子の咎めもかゝらうかと、東屋さまの、それはく＼。その子一人が。
〽稚の種、女の子と云ひくろめ。
我が夫龜王どのと、わたしが仲の娘にして、今日までお命つなぎしぞや。
俊寛　ヤアく＼、すりや、なんと。これが我が子の徳壽丸か。ドリヤ、顏見せい。
ト 小辨を引寄せ、よろしくあつて
ホヽ、幼な顏覺えあり。ムウ、さうして母は。何とした、ヤイ……、サ、コレ、泣かずと、ちやつとく＼。
〽云うて聞かせと問ひつめられ、徳壽丸は涙ながら、守り袋を取出だし。
小辨　サア、母樣は、この中に。
〽と差出せば。
ト 守り袋を取出す。俊寛、取つて
俊寛　この内に母樣が……ヤア。
〽こは如何にと紐を解くく＼押し開き。
ト 紙位牌を出し、
智覺院貞心大姉。
小辨　アイ、それが母樣でござんす。
〽わつとばかりに泣き沈む。
俊寛　なんぢや、死んだかや……なんとして。ア、常から病持ちであつたが、其方が事、この俊寛が事を苦に病んで、それで死んだか……アヽ、可哀やなア……コレお



洞ヶ獄の舞楽面

安。

やす　アイ。

俊寛　樣子はどうぢや。

やす　アイ。

俊寛　イヤサ、コレ、イヤ、アイでは濟まぬ。なんとしたやい。

やす　なんとしたとは、よう思うても御覧じませ。二人はお赦し、俊寛一人は叶はぬと、アタ憎慾な使ひの口上。殊さら飛彈の左衞門めが、無體の戀慕。身を穢してはお前へ立たずと思ひ詰め、あの子を私しが在所へお預け。その後で御自害。又その上に阿母樣、生き存らへて義理立たずと、これも又御生害。

〽あの子もわたしも聞いて悔り、悲しさ辛さ、思ひやつて下さりませ。

七日々々のとい弔ひも、在所の事ならそこ〱に、四十九日が其うちは、家の棟離れぬ魂魄と、噂に聞けど、なんのマア、お前を戀し〱と、思ひ詰めたるお心が。

〽鬼界が島をうろ〱と、迷うてござるがおいとしと、口說き歎けば俊寛は、我が子を膝に抱き上げ、右に戒名、左に我が子。

俊寛　親子三人、此やうに、顏合はさうと思うたに、この三人も又一人、冥途へ行たか。

〽悲しやと、前後不覺に歎きしが。

ア、さうぢや。死んで生れて又、死んで生るゝ事のあらばこそ、かゝるめでたき御誕生。歎くは愚痴の至りなり……お安は奧の御介抱。我れもその間に一間にて、別れし妻の閼伽の水、一遍の經陀羅尼。德壽、參れ。

〽手を引いて、勝手の方へぞ入りにける。

ト此うち、よろしくあつて、お安は上手へ入る。俊寛、德壽が手を引き、位牌を持ち、愁ひのこなしにて、奧へ入る。後鳴り物一セイ、雪おろしへ大小入りにて、バタ〱にて、向うより、以前の有王丸、前幕の蔦作の龜王、兩人とも兩肌脫ぎ、拔刀にて、打ち合ひながら出て來り、花道にて、ちよつとあつて、直ぐに舞臺へ來り、キツと立廻り、顏見合せ

有王　わりや、龜王ぢやアないか。

龜王　ムウ、さう云ふうぬは。

有王　有王だが、見忘れたか。

龜王　有王なれば猶の事、遁がさぬ。覺悟ひろげ。

トきつとなつて、切つてかゝる。

有王　ヤレ、早まるな。云ひ譯あるぞ。
ト立廻りあつて
龜王　ヤア、どこへ云ひ譯。主人を見限る盜賊めが。
ト飛び違へて切つてかゝる。有王、あしらふ太刀筋。立廻りのうち、上手より、以前の手下、富士藏、江吉、胴六、捨、走り出て、兩人を押しとゞめ
富士　仔細は聞いた。尤もだが
江吉　マア〳〵急かずと、
四人　待ちやれな〳〵。
ト無理に引分ける。お安、この時走り出て
やす　ア、コレイナア。龜王どの、わたしや息災で、爰に居るわいな。
龜王　ヤア、お安か。して〳〵小辨さまは。
やす　サア、小辨さまも俊寛さまも、御無事でこれに。樣子は段々好い事だらけ。有王どのは重盛さまのお使ひで、鬼界が島へ大忠臣。モシ、必らず粗相せまいぞえ。
龜王　ナニ、俊寛さまが爰にござると……とは又如何に、ド、どうして
トこの時、奥にて
俊寛　不審は尤も。龜王丸、俊寛それにて對面せん。
ト鳴り物、大小入り、合ひ方になり、奥より、俊寛、小辨が手を引き、出て來る。
龜王　誠に御主人俊寛さま。これにはどうして。オ、、、オ。
ト思ひ入れ、扣へる。
俊寛　ホウ、合點ゆくまい。仔細は追つて。何か差措き龜王丸、樣子は殘らずお安に聞いた。この年月と其方が世話、その甲斐あつて息災な、我が子の顏は見たれども、殘る二人が殘念なわやい。
龜王　ハ、ア、其お歎き御尤も。云うて返らぬお二人樣のお身の仇、我が親の敵、飛彈の左衞門を始め、平家の奴原、一太刀恨みを報はんと、忍び〳〵に源氏の餘類、催促せし義兵の連判。
ト懷中より卷き物を出し
これ御覽下されい。
有王　オ、、この有王も御主人の、仰せを蒙り源氏の殘黨、かけ集めたる一味の連判。
ト有王丸も懷中より一卷を出す。
龜王　コレ、これをお見やれ。
有王　ドレ。

ト互ひに取替へ、一巻を開き見て
亀王　フム、其方には近江源氏の父子兄弟、坂東八ヶ國の源氏のともがら。
有王　この一巻にも信濃源氏、大和源氏の誰れ〳〵も、讀むに及ばず、兩方合せて
亀王　都合三萬
亀有　六千餘騎。
有王　語らひ置きたる味方の銘々。
ト床のノリになる。
〽すは合戰のその時には、變に應じて機に望み。
亀王　千變萬化の戰ひに、必死と定めし勇士の覺悟。
〽花々しき勝ち軍、むら〳〵ぱつと追ひ散らされ。云ふにや及ぶ。親の敵と一くるめ、討ちひしがんは瞬くうち。
有王　へ、、、、。
亀王　ハ、、、、。心よやなア。
俊寛　ホ、ウ、勇ましゝ頼もしゝ。この俊寛もその如く、一度思ひ立つたるゆゑ、島守りとまでなり果て、再び爰に來現が、命延せしも元はと云へば皆、小松どのゝ御情、重盛存らへあるうちは、例へ勝利を得るとても、武士の道立たず……胴六、江吉、富士藏、捨と、假の名を呼ぶも暫しのうち。
富士　我が本名は宇野の七郎。
江吉　山田の次郎。
胴六　今熊新吾。
捨　松山九郎。
有亀　源氏の御代と
皆々　飜へさん、
トこの時、奥にて
木藏　ヤア〳〵、法性寺の執行、俊寛は何所にある。
兵　小松の内府重盛公よりの使者。
兩人　見參々々。
皆々　ヤ、なんと
トまた大小の合ひ方になり、正面の襖を引拔き、向う深山の遠見。爰に木藏、兵。大紋、立烏帽子の形、木藏、立て文を持ち、兵は三方へ錦の袋入りの砂金を載せ、これを持つて立ち身。皆々見て
皆々　これは。
木藏　ホウ、不審は尤も。某二人は重盛公の、御諚を受けたる忍びの目付け。源氏の餘類と入込みし、この深山の

木藏こそ、越中の次郎盛次。

兵　まつた、なめらが兵と假名して、この家へ入込む某こそ、卽ち主馬の判官盛久。

俊寛　ムウ。してその兩人が

皆々　この體は。

盛次　如何にも。合點の參らぬは實に尤も。それにて詳しく申し開けん。

ト兩人、前へ出て、盛久、三方の砂金を俊寛の前へ置き

盛久　重盛公の御諚、よつく聞かれよ。鬼界ヶ島に殘りし俊寛、有王諸とも、この洞ヶ嶽にて、小督の局を守護いたさんは必定なれども、御安產の安否心元なく。

盛次　汝等兩人彼の地に赴き、男子にもせよ、女子にもせよ、御誕生あらば、早速に告げ知らせよ、さりながら、隱れ家へ忍びの使ひ、父清盛へ漏れ聞えては如何あらんと、肺肝を碎かれしその三千兩。唐土育王山へ納め置けば、平家滅亡の後、弔ひ供養ともならんと、某二人に仰せつけられしは表向き。

盛久　誠は若君の御誕生を壽く爲の貢ぎ物。王を育る文字に依つて、育王山へ納めよとは、一門の人々へ、方便のお情。有り難く思はれよ。

盛次　卽ち御書。

ト俊寛へ立て文を渡す。皆々ハツと思ひ入れ。俊寛、取つて押戴き

俊寛　ハヽア、仁心深き重盛公。なんとお禮も御兩所よりよしなに賴み上げまする……コリヤお安。

ト囁くと、其まゝ障子の内へお安入る。

盛次　斯く御平產恙なき上は

盛久　この家にあつて益なき我れ〳〵

兩人　早お暇仕らん。

ト立ち上がる。

俊寛　ア、イヤ、暫らく〳〵。使者の御兩所、若宮の尊顏拜し、小松どのへ家土產に致されよ。

ト障子の内にて

やす　若宮の渡御。

皆々　ハア、ヽヽ。

ト使者も平伏する。下がり葉になり、お安、若宮を抱いて出る。

盛次　ハヽア、尊顏拜し、使者の面目。

有綱　然らば此まゝ。

俊寛　御両所。
両人　方々。
皆々　さらば。
ト和歌になり、皆々よろしく居並びて、見得にて、
幕

姫小松子日廼遊（終り）

嫗(こもち)山(やま)姥(うば)

解　説

正德二年七月、竹本座初演の人形淨瑠璃。作者は近松門左衞門である。五段物で、賴光四天王の事蹟が中心になつてゐる。

第一段は、白菊が夫と共に物部平太を討つて仇を報い、その夫は賴光の家來となつて碓氷の貞光と改める件。第二段は爰へ收錄の幕で、俗に「八重桐廓噺」とか「しやべり」とか云ふ有名な場面である。第三段は美女御前が仲國の手にかゝつて賴光の身替りになるといふ節。第四段は即ち山姥の件で、金時が初めて家來になる所である。第五は賴光四天王が惡人を討つてめでたく解決。

山姥物として後世幾十の所作事を殘した系統の、戲曲としては元祖といふのが、この曲の誇りである。また人物源七も八重桐も、當時の人氣俳優をモデルにした所に、近松が歌舞伎作者であつた特徵を出してゐるのも興味がある。全體としては餘り傑出した作でもないが、八重桐が一人で縱横無盡に働らけるので、女形の出し物としては非常に儲かる所から今でも折々出される。また舞踊味が勝つてゐるので、立役の俳優でも盛んに出したものである。

原作のまゝでは歌舞伎としては簡單過ぎるので、太田の十郎だの腰元お歌だのといふ役を點出して賑やかにしてある。これらは歌舞伎で生れた人物である。上方は知らないが江戸で出たのは文化九年四月の市村座に、二世澤村田之助の所演が初めであるが、この時はお歌は出てゐるが太田十郎の名は見えぬ。同年九月中村座で、三世中村歌右衞門がお名殘狂言に八重桐をやつてゐる。これには太田十郎もお歌も出てゐる所を見ると、現今のやうになつたのは、この時が初めであらう。本卷收錄の臺本は、文政九年二月河原崎座上演のそれで、役割は左の通り。

八重桐（五世瀨川菊之丞）太田十郎（津打門三郎）澤瀉姬（市川三之助）白菊（片岡松太郎）お歌（桐山紋治）源七（七世市川團十郎）

嫗山姥

兼冬館の場

役名──煙草屋源七 實ハ坂田藏人時行。太田十郎。兼冬娘、澤瀉姫。局、野分。腰元、お歌。同、桔梗。同、楓。同、尾花。同、朝顏。同、女郎花。藏人妹、白菊。荻野屋八重桐。

本舞臺、一面の御簾、本緣附きの高二重、向う金襖、瓦燈口。上手、石の手水鉢、松の臺幹、下手、櫻の立ち木。同じく吊り枝、いつもの所枝折り門、柴垣、尤も御簾一面下ろしある。管絃にて幕明く。

〽松浦潟、ひれふる山の石よりも、積る思ひは猶高き、岩倉大納言兼冬公の御娘、澤瀉姫と申せしは、源の賴光と御緣邊の契約も、互ひに待てば久方の、月日重なり年を經ち・情盛りも徒らに、右大將高藤が讒言ゆゑ、賴光の行き方なく、枯野に弱る秋の蟲、世に便りなさ憂き節に、もし御短慮の事もやと、お寢間の奉行寢ずの番、女中の外には男交ぜずの大役は、女護の島に異ならず。

ト御簾の內にて

澤瀉　君が爲、惜しからざりし命さへ。

腰元　爰にあつたわいなア。

ト琴唄になり、御簾を卷き上げる。內に廣振り袖の澤瀉姫、褥の上に脇息にもたれゐる。局、野分、老けたる拵らへにて側に控へ、藏人妹白菊、腰元にて附き添ひ、この側に腰元六人、歌がるたを蒔きちらし、これを取つてゐる仕組み。あと右の合ひ方。

白菊　忍ぶれど、色に出にけり我が戀は。

桔梗　物や思ふと、人の問ふまで。慥か、そこらに。

尾花　物や思ふとは、そりや、此方のお姬樣の辻占。

朝顏　難波潟、短き葦の節の間も

女郎　逢はで、この世を過してよとや。

野分　コレ腰元衆、お姬樣を差措いて、自身の遊び、殊に又、お氣にかゝる辻占の歌合せ。少と嗜なんだがよいわいなア。

白菊　イヤモシ、お姬樣、あなたはなぜに、浮き〳〵はな

されませぬ。これ程大勢集まつて、浮世話しの高笑ひも、皆あなたを勇めの爲。

楓　もしお煩ひでも出た時は、親御様への御不孝。日頃のお氣には似合はぬ事、お嗜なみ遊ばされませう。

〽勇められても勇まぬ顔、

澤瀉　ア、、また其方達の氣休めは、聞きたうない。日本國の花紅葉を、今この庭へ移しても、なんの心が勇まうぞ。吉日極まり、頼光さまへ嫁入りして、今頃は、お腹に帶をも結ぶ筈を、アノ。

〽右大將づらめに妨げられ、剩さへお行くへ知れず、何處を當途に一筆の。

問はせの文さへ、長枕。

〽この長き夜を誰れと寢ん。

わしや、泣くまいとは思へども、涙がどうも堪忍せぬ。堪へていなう。

〽堪へてたもと、はら〳〵と、玉を貫く御目許。腰元茶の間仲居まで、お道理様やと諸共に、貰ひ涙にくれければ、お局は氣の毒がり。

野分　コレ、なんぞいなう皆の衆。お力は附けもせず、其方衆まで同じやうに、嗜なんだが、よいわいなア。

桔梗　それ〳〵、今に、頼光さまのお行くへ知れたその時は、おめでたい御祝言。

楓　ほんに、此やうな時には、アノ、日頃からお氣に入りのお歌どの、何處へ行かれた事ぢややら。折の悪い事ではある。

ト向うへこなしあつて

アレ〳〵、彼處へ見えるは、慥かにお歌どの。お姫様がお待ち兼ね、早う〳〵。

〽早う〳〵の聲につれ、裝に似合はぬ振り袖の、ぴらしやらとして立歸る。

ト稽古唄になり、花道よりお歌、振り袖の腰元にて傘をさし、風呂敷包みを提げ出て、直に舞臺へ來る。

お歌どの、何をしてゐなさんしたぞいなう。

うた　ア、コレ、忙しない。皆さん、わたしや願ひ事があるゆゑ、長谷のお寺へ願を篭めて、お百度上げに、行たのぢやわいなう。

白菊　そこどころぢやござんせぬ、又お姫様が何やら思ひ出し遊ばして、おふさぎ遊ばしてぢや程に、いつものやうに、御機嫌直して下さんせ。

うた　コレ皆さん、聞きなさんせ。觀音様の御神前に、な

んちやゝら、すさまじい人立ち、覗いたりや、鬮を買うてゐるゆゑ、わしが買つたりや當つてな、コレ、此やうな羊羹と、役者の繪を取つたわいなア。

ト羊羹と錦繪を出す。皆々開き直つて

皆々　そりやマア、誰れの似顏でござんすぞえ。

うた　これは、わたしの贔屓の團十郎。又これは、いつち贔屓な菊之丞でござんす。今度の宿下がりには、十日も二十日も、芝居をたんのうするまで見にやならぬわいなア。

皆々　そんならお前も、濱村屋が贔屓かえ。

うた　濱なら、一二度の飯を、十度喰うても、見たいわいなア。

皆々　そりや、なぜでござんすえ。

うた　ハテ、濱ならたべよと、人毎に云ふでは、ござんせぬかいなア。

皆々　お歌どのゝ、何を云はしやんすぞいなア。ハヽヽハ。

〽笑ひ催ふすその折から、案内もなくてのツさのさ、右大將高藤の家來、太田の十郎、主の權威の張目高、枝折りの外より大音にて。

トこの文句のうち序の舞になり、花道より太田の十郎、大小、上下、衣裳、くり下げにて出て來り、本舞臺へ來り

十郎　兼冬公は在するか。右大將高藤より俄の上使。

うた　ても、折の惡い太田づら。人の邪魔する上使、棕櫚箒など立つて、去なしてくれう。ア、腹が立つ。

ト棕櫚箒を立てかける。楓、野分、留めて

野分　コレ、わッけもない。假染めならぬ御大身よりの上使。必らず粗相いたすまいぞ。

ト楓は枝折へ出迎へて

楓　これは〱、太田さま、お役目御苦勞千萬。先づ先づこれへ。

十郎　千里萬里も主命なれば、さのみ苦勞とも存ぜぬ。それを察して格段の挨拶。マヽ、過分々々。上使の儀なれば罷り通る。許しやれ。

〽遠慮會釋も正座に通り。

ト上手へ通り、

して、兼冬公には、如何いたされた。

白菊　兼冬ことは心願あつて、長谷の觀音へ參詣。館には姫君ばかりのかしづき、即ち女房ばかり。例へ御上使の

趣き傳へたとて、詮なき事。先づ今日は

皆々 お歸りなされませいなア。

十郎 イヤ〳〵、此奴等が默り居らう。すりや、兼多には他行とな。よしや他行にもせよ、男たる者一人もなきこの館、油斷大敵、不意に狼藉込み入り、館をも切り取られなば、後での吠え面。これも入らざる身共が采配。先づ、何は然れ今日の上使、主人高藤より、澤瀉姬へ上使。

白菊 ナニ、姬君への御上使とは。

ト管絃になる。

十郎 先達てより度々、右大將高藤公、澤瀉姬へ心をかけられ、媒介を以て婚姻の儀申し入るれど、今に於てその沙汰なく、その返事受取り立歸れと、主人よりの云ひ付け。サア、姬君、色よいお返事が聞きたうござる。

白菊 イヤモシ、憚りながら私しが、差出ますやうなれども、貞女兩夫に見えずと、姬君には勅勘ありし賴光さまへ、二世の契約遊ばしたれば、なんぼお行くへ知れねばとて、高藤さまへ從うては、小夜衣を重ぬる不義。

十郎 イヤ、賴光は一生埋れ木、勅勘の身にて緣を組まば、後でこの家の兼多に、難儀のかゝるまいものでもない。

澤瀉 いやとよ、妾も一旦賴光さまと、緣を組みたる上からは、例へこの身はどうならうとも、今の思ひに增しはせじ。穢らはしい。去んでこの通り高藤どのへ、云やいなう。

〽思ひ詰めたる一筋に、身をも惜しまぬ貞心貞女、流石の太田も口あんぐり、側からお歌がしやしやり出で。

うた なんと、きついもの。雀の千聲鶴の一聲、お姬樣の御一言で、だんまりおしの劍刄を、二腰差した太田さま。チッと鼻毛が五十町、一里延び過ぎて見えるぞえ。そしてマア、アノきつい顏わいなア。そんなきつい顏してゐると、女が惚れぬぞえ。

皆々 ちつと笑うて、御覽じませ。

十郎 エヽ、忌々しい女ども、身共を馬鹿に致すか。

白菊 これは如何な。女儀を捕へて大人げない。

十郎 それぢやと申して。

白菊 ハテ、あなたも聞分けのない、不粹なお方。

十郎 イカサマ、小事に拘らぬ、大事の役目。此まゝ一間で休息せん。女ども、案内いたせ。

うた エヽ、案内が入るものか。勝手次第に、一人で行たがよいわいなア。

十郎　うぬ、その口を。
　トきつと立ちかゝる。
うた　イヤ、私しが御案内いたしませう。
十郎　然らば、手前が。
うた　あかんべえ。
　ト下手へ逃げる。
十郎　うぬ、どうしてくれう。
　トうろたへて、刀を逆さまに差す。
桔梗　申し、お刀が、逆様でござりまする。
十郎　エヽ、存じて居るわえ。
白菊　イザ、私しが、御案内いたしませう。
十郎　然らば、女中。
白菊　御上使様、イザ、御案内いたしませう。
〽なぶり散らされ太田の十郎、赤面してぞ奥に入る。
　ト三味線入り管絃にて、白菊先に、太田十郎、奥へ入る。後、調べ。
うた　先づ、邪魔を拂うたぞや。それはさうと、アノ煙草屋は、まだおぢやらぬかいなう。
皆々　ほんに煙草屋は、まだ見えぬわいなう。
うた　早う煙草屋が、來ればよいが、アヽ、辛氣。
皆々　そんなら、お歌どのは、煙草屋に。
うた　オヽ、恥かし。
皆々　ホヽヽヽ。
うた　アヽコレ皆さん、そんなに弄つて下さんすな。ほんにこの煙草屋は、なぜ遲い事ぢややら、アヽ、待たるゝ身より、待つ身になるなとは、よう云うたものぢやなア。
〽煙草煙草と待つ宵の、松葉煙草の柔らこき、女中仲間ぞ賑はしき。
〽昔は色に上り詰め、今は浮世に下り坂田の時行と、埋もれし名も父の仇、晴さんと思ふ志し、あかぬ女夫の仲をさへ、三行半の生別れ、袖に涙の革行李を、今は身過ぎと引搔げ、刻み煙草、油引かずと賣り歩く。
　トてんつゝになり、花道より源七、やつし形、三尺帶、煙草賣りの拵らへにて、風呂敷に荷箱を脊負ひ出て來り
源七　刻み煙草、油引かず、煙草の御用はござりませぬか。
　トよろしく本舞臺へ來り、枝折り戸の外にて、こなしあつて

へイ、いつもの煙草屋でござります。御用はござりまぬか。
うた　そりやこそ煙草屋が來たわいの。サア〳〵、こちらへ入りや、入りや。
ト源七の手を取りて內へ入れ、荷を下ろし、よろしくあつて
皆々　源七か。待つて居たわいなう。
うた　お姬樣もお待ち兼ね、また其方には、いつぞは聞かうと思うた、煙草の講釋謂れを、ちやつと聞かしやいなう。
源七　これは〳〵、毎日々々商ひに上がります、得意旦那のあなた方の事、煙草の因緣、さらばお話し申しませうか。
〽しかつめらしく座に直り。
うた　ドレ、承はりませうか。
源七　そも〳〵煙草の始まりは、昔唐土玄宗皇帝、彼の楊貴妃との痴話事に、比翼連理の語らひとて。
〽吸ひつけ煙草なされけり。
さて、我が朝にて始まりしは、古へ、江口神崎なんど、いふ、名高き廓の遊君が、客を待つ間の煙草盆。
〽煙りくらべん淺間山。外らさぬ顏で居たりける。
さてこそこれを、お山煙草と名けたり。
〽廓の諸譯を國府にかけて。
吉野煙草の、花よりも、
〽君を思へば仙臺煙草、我れらが煙草は仙人の、通を失ふ色どり手どり。
煙草の因緣、あらかじめ、この通り。
〽と語りける。
うた　さつても聞き事、煙草の因緣。辯舌といひ器量といひ、何處に一つ云ひ分の無い、元服した業平さん。君と我れとは有馬の煙草、わたしが心を刻み煙草、どうぞ返事を松葉煙草、人は目許で、コレ申し。
〽これ程までに戀ひ慕ふわたしが心、思ひやつてくれもせで、心強やと煙草屋の、膝に打伏しゐたりける。
ト此うちお歌、サワリ模樣よろしくある。姬は笑ふ、腰元見やつて
皆々　そりや、御機嫌が直りました。
うた　ヨウ〳〵、此方の色男さま〳〵。
源七　ナニ、わたしがお前の目から、色男と見えますか。
うた　オヽ、色男とも色男とも、業平ぢやわいなう。

源七　それは有り難うござります。又わたしの目から、アノお前様は、小野の小町か楊貴妃か、美人と見えます。

うた　ヤア、なんと云ふ。そりや、わが身が目からは、わしは美人と見えるかや。

源七　オヽ、美人とも美人とも、日本一の美人と見えます。

うた　そりやマア、煙草屋、ほんまな事かや。

源七　なんの僞りを申しませう。美人どころか、鬼神と見えまする。

うた　ヤア〱、鬼神ぢや。もう料簡が。

　トきつとなつて立ちかゝる。腰元皆々、源七を隔て、お歌を留める。

〽騒ぎさゞめく折からに、奥より出づる以前の使者。

　ト始終調べにて、此うち奥より太田十郎、出て來り

十郎　ヤア、べん〱と待てど暮らせど、兼多も歸らねば、使者へ對して無禮であらう。この上は是非に及ばぬ。姫を引立て連れ歸る。サア姫君、身と一緒に。

　ト姫の手を取り、立ちかゝる。腰元支へて

楓　こりや理不盡な、なんとなされまする。

十郎　主人へ云ひ譯、姫を連れ歸る。

うた　イヤ、主人お歸りのそれまでは、いつかな姫は

皆々　渡されませぬ。

十郎　ヤア、何時歸るか知れぬ兼多、べん〱だらりと待たるゝものか。サア、キリ〱と澤潟姫を、渡し召されれ。

　ト姫の手を取り立ちかゝる。皆々捨ぜりふにて十郎を宥める。この以前よりお歌源七、いろ〱囁き、また囁き返して、この時源七こなしあつて、前へ出て

源七　申し〱お侍ひ樣、今暫らくお待ちなされませ。

十郎　ヤイ〱〱、うぬ、素町人め、うぬらが存じた事ではない。何處ぞそこに、すッ込んで居らう。

源七　ハイ〱、成る程私しは、素町人でござりますが、さりながら、木折りで行かぬは戀の道、どうぞこのお取持ちは、この町人にお任せなされて下さりませ。

十郎　成る程、其方が申す通り、木折りで行かぬは戀の道。して、其方は何者だ。

源七　ハイ、私しはお館へ商ひに上がります、煙草屋でござります。どうぞ煙草を、お求めなされて下さりませ。

十郎　たわけ者めが。煙草が姫の代りになるものか。

源七　イヤ、すんどなります。

十郎　なんと。

源七　サア、私しの煙草は、お取持ちになりまする。どうぞ、お買ひなされませ。

十郎　エヽ、うるさい奴だ。身共は煙草は嫌ひだワ。

源七　ナニ、お嫌ひとあれば是非もない。併し私しの煙草は、唐土の美人草を製しまして、刻みましたゆゑ、この煙草をちよつと吸ふと、どんな戀でも女子の方から、ずる／＼べつたり吸込み煙草、あなたもこの煙草を、一服お上がりなされたら、ひよつとお姫様がずる／＼と、お出でなされる思し召しに、なるまいものでもござりませぬて。ナア申し。

十郎　成る程、こりや尤もぢやが、身共煙草は嫌ひ。併し、その價は、定めて高直であらうな。

源七　イエ／＼、初めてのお方にはお披露目の爲、只振舞ひ申します。

十郎　ヤア／＼、なんと申す。そんなら只のませるか。然らば拙者、元來煙草は大好物ぢやて。

源七　ナニ、煙草はお好みだ。左樣なら何服でも、お上がりなされませ。

十郎　コリヤ、錢は、出さぬぞ。

源七　サア／＼、御遠慮なう、何服なと上がれ／＼。

十郎　さういふ事なら。

ト鐙の合方になり、源七、煙草の荷箱をよき所へ出す。腰元、めい／＼に煙草盆や煙管を出す。源七、煙草をついで煙管を差出す。太田の十郎はこれを取つて吸ふ。

源七　先づ、この煙草を呑めば、色白で意氣で、いつでも女が惚れる。

十郎　オヽ、面白い／＼。

源七　さて二服目には、悋氣なく、につこり笑うて、諸人愛嬌が出來るなり。

十郎　なんだ、愛嬌が出來るか。もつとつげ／＼。

源七　三服目には、三方四方よりサッ／＼と、女の方から持ちかけて參るなり。

十郎　これは堪らぬ、奇妙々々。

源七　さて四服目には、しつこく始終あなたに、抱きついたりひッ付いたり。

十郎　これはどうも堪らぬ。ちつと、靜かにやつてくれ。

源七　サア、所で五服目には、與眼を積み後生大事に、あなた一人を守ります。

十郎　オ、嬉しい、嬉しい。コレ〳〵、靜かに〳〵。
源七　六服目には、六親眷屬和合して、ろく〳〵に見知らぬ女子が懷くなり。所で七服目には、七福神七福則滅。
十郎　エヘン〳〵〳〵、どうも眩暈が來て、目がまふやうだ。許せ〳〵。
源七　八服目には、八方八所へ女に張られ、九服目には藏を建て、十でとつくり納まつた。めでたいな大黒。ソレ彼處へ、女が參りました〳〵。
うた　それ〳〵、こちらへも、大勢女が參りました。
〽腰元どもに突き放され。
ト腰元皆々寄つて、太田十郎をあつちこつち引き廻し、トヾ枝折門の外へ抛り出す。
十郎　ヤイ煙草屋、ひどい目に遭はせたな。こりやモウ堪へられぬ、出直して參らう。コレ〳〵、人が三つに見えるワ〳〵。こりや堪らぬ。屋敷へ歸り味噌汁で、行水せねばならぬ。思へば〳〵、憎い奴の。
源七　申し〳〵、もう一服、差上げませうか。
十郎　それには及ばぬ。煙草屋、覺えてうせう。
〽云へども足は地に付かず。ふな〳〵してぞ立歸る。
ト太田十郎、煙草に醉ひしこなし。甚句唄にて、よろしく花道へ入る。後皆々こなし。
皆々　イヨ煙草屋、きつい者であつたなア。
源七　どんなものでござります。ハヽヽヽ。
澤潟　ハテ、昔床しさうな商人、常々腰元どもの話しを聞けば、廓とやら傾城とやら、大内には珍らしい、戲れの物語り。ナウ、皆の者。
楓　左樣でござります。定めし絲竹の嗜みは、あるであらう。
朝顏　苦しからずば、そのお姫樣のお望みを、サア〳〵煙草屋。
皆々　所望ぢや、所望ぢや。
源七　これは又、わッけもない。尤も以前は、傾城の一つ買ひも仕り、三味線胡弓淨瑠璃文作、野郎一卷の諸藝なら
〽此方へ任しておく座敷、吉野の山の連彈きも。
昨日の昔、今日は又。
〽吉野煙草の刻み賣り。
股引掛けの三味線とは。
〽茶漬にひしこの御望み。
ひらさら御免なされませ。

〽と逃げ出す。
トこなしあつて逃げんとする。お歌留めて
うた　ドツコイ〳〵。コリヤ〳〵煙草屋、早う弾いて、聴かしやいなう。
源七　それぢやと申して。
うた　わが身、お姫様のお詞を背きやるか。
源七　どう致しまして。
うた　そんなら、弾きやるか。
源七　サア。
うた　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
皆々　どうぢやぞいなう。
源七　エヽ、其やうに仰しやる事。よろしうござります。てんぽの皮と、やつてのけませう。
〽是非なく出す三味線の。
ト皆々取卷きこなし。是非なく、源七、箱の中より三味線を出し、これを持ち、衝立の蔭へ入る。皆々こなし。下座の獨吟にかゝる。
うた　ヨウ〳〵、三筋の弾き鹽梅、男振りといひ、ヨウヨウ、巧い〳〵。

獨吟〽絃は昔に變らねど、弾くその主の成れの果、今は秋田の落し水。
トよろしく獨吟ある。
竹本〽紙衣の袖に置く露と、共に離れし妹脊の仲、哀れ昔は全盛の、松の位も冬枯れし、風呂敷包み行く先は、知らぬ旅路にとぼ〳〵と、築地の蔭に休らへば。
ト此うち花道より、荻野屋八重桐、紙衣の着付け、甲斐絹の小風呂敷を斜に背負ひ、菅笠、杖を持ち出て、花道にて、櫻の落花するを見て、こなし。
八重　誰が住居かは知らねども、洒落た浮世の一節は、我が身も共に櫻花、仇に散り行く眺めぢやなア。
トこれにて舞臺へ來る。
〽車寄より立ち開けば。
ハテ、珍らしい事ではある。
獨吟〽親の撥駒紙駒の、三筋世過ぎに、通ひ廓の賑はしさ。
不思議や、あの小唄は、我が身廓にありし時、坂田藏人時行どのに馴れ初めて、作り出せし替唱歌、彼の人ならで誰が傳へたか、懐かしや。どうぞ人込み。
〽見たいものぢやと云ひしほの、出放題に聲張上げ。

サア〳〵、これは難波の遊女町に、誰れ知らぬ者もない傾城の祐筆、濡れ一通りの状文なら、恐らくわたしが一筆で、叶はぬ戀も假名書き筆、ぴらりしやらりとかすり墨、生娘遊女妾者、後家、尼、人の女房まで、段々の書分けは、わたしが家の傳授もの。モシ、そんな御用なら。

〽お頼みあれとぞ云ひ入れたる。奥には女中が、耳聳て。

ト外にて八重桐よろしくこなし。この時、腰元これを聞き、思ひ入れあつて

野分　さつても珍らしい賣り物、呼び入れて痴話文書かせ、お姫様のお慰み。ソレお歌、こちらへ呼び入れや。

うた　ハイ〳〵、畏まりました。

ト枝折り門の外へ出て

コレ〳〵、傾城の文書どの、爰のお姫様が、何やらそもじに、御用があると仰しやる。サア〳〵、此方へ、入りや〳〵。

八重　御用とは、オ、嬉しい。左樣なら、御免なされませ。

〽お目もじさまにと夕顏の、庭の飛石すな〳〵〳〵。ちよこ〳〵〳〵と奥座敷へ、なんの遠慮も並み居たる、内裏上﨟に場うてせぬ、いづれそれ者と見えにけり。

ト此うちお歌案内して、八重桐、内へ入る。皆々に會釋してよき所へ住ふ。腰元皆々、こなしあつて

桔梗　オ、傾城の祐筆どの、ようこそ〳〵。ほんに、何を認めさせうやら。

トこの時、衝立の蔭より、源七出て

源七　その文句は私しが、望みませう。

〽煙草賣りの源七も、何心なく顏と顏。其方は。

八重　お前は。

ト互ひに顏を見合せ、恟りこなし。

〽女はそれと水臭き、男畜生人でなし、赤恥かゝせて退けうかと、飛び立つ胸も人目の關、押し鎭め押し鎭め、心を碎き折々に、尻目に睨むも戀なれや、姫君何の氣もつかず。

トこれにて源七は上手へ逃げて、悄氣たる思ひ入れ。八重桐は下手にて、チッとこなし。姫始め皆々不思議の思ひ入れにて

澤瀉　コレナウ紙衣、其方の物ごし褄外れ、如何さま常の

女子でなし。さうした形になりやつたは、定めし深い譯あらん。
朝顔　一河の流れも他生の緣とやら。
女郎　コレ〳〵、文書どの、お姫樣のお望みおや程に、其方の成行き、包まず語つて
うた　どうぞ話して、聞かしやいなう。
ト腰元皆々、側へ寄り、こなし。
八重　ハイ〳〵、どなたかは存じませぬが、お優しいそのお詞。お尋ねなうとも最前から、云ひたうて云ひたうて、胸の燃ゆる思ひも、サ、さらば、お話し申しませう。
へ襟かき合せ八重桐は、女中の中に押直り。
ト八重桐、前へ進み出で、よろしくこなしあつて
恥かしながらわたしが昔は、浮き川竹の傾城、荻野屋の八重桐として、太夫仲間の立者と、云はれし程の全盛が、末も遂げぬ仇戀に、登り詰めてこの通り。夜な〳〵變る大盡の、中にも坂田の某とて、水揚げの初日より、フト逢ひ初めて丸三年、何が互ひの浮氣盛り、登る程に登る程に、忉利天の中二階、夜晝なしの居入りに、掛鯛樣と異名を受け、水も漏らさぬ仲なりしに、又同じ廓に小田卷といふ太夫、彼の男に行きつきて、毎日百通二百通、書きも書いたり痴話文は、大方馬に七駄半、船に積んだら千石船、車に載せたら
へえいやらさ、木遣でも音頭でも、祈つてもまじなうても、微塵けもない二人が仲、いよ〳〵募うて逢ふ程に。
彼の小田卷、大きに腹を立て、ア、忘れもせぬ八月の。
へ十八日の雨上がり、月は山より朧染めの、補襠ひらりと取つて捨て、白無垢一つに引拔き、脛もあらはに駈け來り、わたしが膝にふんわりとんと居かゝつて。
コレ八重桐。あんまり見られぬ、嫌おやぞや。サア、男をたもるかたもらぬか。否か應か、應か否か。二つに一つの返答が、聞きたいと。
へ胸づくしを引ッ摑む、此方も一期の大事ぞと、弱身を見せず。
コレ、小田卷とやら管卷とやら、ひかりは喰はぬ、出直しや。この廣い日本に、あの人ならでは、男はないか。
よし
へないにせよ、あるにせよ、それ程ゆかしい男なら、なぜに先に惚れなんだ、男盗人生傾城と、云ひさま取つて投げつくれば、明り障子を打ち破り、繼三味線を踏み碎



二世澤村田之助の八重桐

世澤村宗十郎の源七

き、縁より下へころ〱〱と、這柏槇までこけかゝり、木槲南天めつきり〱、切り石の上に眞俯向、鼻は一石六斗三升五合五勺、そりやこそ喧嘩が始まつた、大事の此方の太夫様に、引けをつけては叶ふまい、加勢をやれと云うた程に、遣り手引舟仲居飯炊、出入りの座頭按摩取り、巫女山伏に占屋さん、雪駄片足に下駄片足、草鞋がけで來るもあり、臺所から座敷まで、太夫様の仕返しと、彼處では叩き合ひ、爰ではぶち合ひ踊り合ひ、茶棚竈煙草盆、當る物を幸ひに、打ちめく打ち割る踏み碎く、めり〱ぴつと鳴る音に、そりや地震よ雷よ、世直し桑原々々と、我れ先にと逃げさまに、水擔桶盥にこけかゝり、座敷も庭も水だらけになる程に、南無三海嘯が打つて來るは、なう恐しやと喚くやら、秘藏の仔猫を馬程な、鼠が啣へて驅け出すやら、屋根では鼬が踊るやら、神武以來の悋氣いさかひ、この事世上に隱れなく。

ト此うち八重桐、しやべりの振りよろしくあつて、

サ、彼の男はその場より、親御様の勘當受け、我が身も廓を夜驅けして、根本戀路の浮名取る、鍋の蓋取る杓子取る、馴れぬ世帶のその日過ぎ、男めゆゑでござりまする。ア、、あんまりしやべつて、息が切れた。憚りながらお茶一つ。

〽下さんせとぞ語りける。

ト お歌、湯呑みを持ち出る、八重桐これを呑む。

澤瀉　さても〱心中者、例へ如何なる身になつても、思ふ男と添ふからは、定めし面白い事であらうの。

八重　さればでござりまする。その後を聞かしやんせ。その男の父親が、闇討ちに討たれ、敵討たねばならぬと、わたしとは縁切つて、行くへもなら別れ、親の敵を狙ふとは。

〽跡方もない赤僞はり、我が身に秋風立ちけれど、何を機に退かれもせず。

親御様の死なんしたを、畢竟一のかこつけに、敵討ちとの口上は。

〽釋迦でも一ぱい參る事。

まんまとわたしを騙かり、女房には紙子を着せ。

〽その身はちやんと榮耀らしい、若い女中に立交り。

三味線彈いて居けつかり。

〽くさりくさるを見るやうな、日本國の姫御前の、因果を一つに固めても、我が身には及ぶまい。

初對面の皆樣へ、ありし昔の懺悔話し。お恥かしう存じ

まする。
〽恥かしやとばかりにて、おろ〳〵涙にくれにけり。
うた　オヽ、尤もぢや、尤もぢや。道理ぢやいなう。わが身にかゝはらぬこちとまで、そんなつれない男の話しを聞くと、腹が立つて腹が立つて、目が煙たうて堪へられたものぢやない。尤もぢや。コレ〳〵女中、尤もながら、短氣な心を持ちやんなや。
八重　ハイ〳〵。有り難うござりまする。
澤潟　コレ、そな者、まだ白らが聞きたい事があれば、白らと一緒に、腰元ども、皆奥へ。
皆々　先づ、入らせられませう。
　ト唄になり、一面に御簾下りる。
うた　コレ、腰元どもに煙草屋、おぢや〳〵。紙衣もおぢや、煙草屋もおぢや、紙衣もおぢや。
　トこなしあつて、お歌、上手へ入る。後に源七八重桐殘る。
八重　さらばわたしも、奥へ參りませう。
〽立たんとすれば、
源七　コリヤ待て、女房。
八重　去られた夫に、詞は交さぬ。

源七　去られた夫に詞交さぬとは。マヽ、下にゐや。流石は流れの女ぢやなア。
　ト八重桐を引据ゑ、こなし。合ひ方になる。
親の敵を討つまでは、相對づくの離別ではないか。それに今の當て事は、誰れに云ふ當て事。未だ親の敵も知れず、心を碎く夫の體、哀れとも思はず、おのれが榮耀に引當てゝ、面白さうな今の仇口、エヽ、おのれはなア。
〽無念涙にくれければ、
八重　アノ、まざ〳〵しい顏わいの。親の敵は幾人あるぞえ。この程こなたの妹、白菊どのとやらが、先月二十三日、小夜の中山で討ちし、物部の平太は、敵ではないかいの。
〽時行ハツと驚ろき。
源七　ナニ、妹白菊が、敵平太を討つたるとは、必定誠の事なるか。それと慥かな事ばしあつてか。サヽ、なんと。
　トきつとこなし。
〽急き立つ折から、白菊奥より走り出で。
　トこの時白菊、ツカ〳〵前へ出て
白菊　ヤ、お前は兄上時行さま、お懐かしうござります

る。
源七 ヤ、そちや妹白菊。どういふ譯でこの館へ。して、敵平太を討つたるとは、誠の事か。
白菊 サア、その譯といふは、何卒父さんの敵を討たんと、碓氷の荒藤太さまを語らひ、先月二十三日、小夜の中山にて、敵平太を、安々と討取りしが、どうぞこの事、お知らせ申さうと、思へども知れぬお前のお行くへ。
源七 ヤ、すりや、其方が、敵平太を討つたるか。
白菊 アイなア。
源七 ホ、ホイ。
ヘはツばかりに詞なし、女房摺り寄り。
八重 コレ時行どの、科もない頼光さま、妹御を匿まひし遺恨により、右衛門督平正盛、清原の右大將と心を合せ、頼光さまを讒言して、いま勅勘の身となり給ふ事、日本國に隱れのない。これ程大きな騷動を、今まで知らぬとは、うろたへ者臆病者の浮名をば、世間へ觸れうと云ふ事か。腑甲斐ない氣にならしやつたなア。
ヘおとましやと恨み泣き。
白菊 それゆゑわたしは人知れず、頼光さまの云ひ號け、澤瀉姫さまに傅づかんと、この館へ腰元奉公。最前奥にてお前の事、ちよつと聞きしがモシひよつと、御身の爲に惡しからんと、今まで爰へ出なんだが、聞けば聞く程おとましい、正しい武士でありながら、かゝる騷動も知らぬといひ、親の敵もえゝ打たず、何處にさまよひ居たまひしぞ。お心までが其やうに、なぜさもしくならしやんしたぞいなア。お前はなア。
ヘ取りつきすがれば、時行いらだち。
源七 さては敵ゆゑ、頼光の御難儀となつたるかや。妹に先越され、親の敵は討たずとも、正盛右大將は敵の敵なり。イデ兩人が首取つて、頼光の御恩報じ。女房そこ退け。
ヘ躍り出づるを引きとゞめ。
八重 それ〳〵、それはしつかい狂氣の沙汰。討つに討たれぬ仔細のあればこそ、日蔭の御身となり給ふ。こなたが今駈け出して、心安く首取らうとは、重ねて恥をかきたいか。こなたが今まで徒らで、娘を口說き落すのと、首をころりと落すとは。
ヘ雲泥萬里と恥しむる。時行道理に責められて、行きつ戻りつ齒嚙みをなし、拳を握り立つたりしが、もうこの上は分別なしと、鎧通しを押取つて、腹にぐつと突き立

つれば、女房これは狂氣かと、白菊諸とも取りすがり。
コレこちの人、狂氣ばしなさんしたかいなア。

白菊　モシ兄上樣、こりや何ゆゑの

兩人　御生害でござりますぞいなア。

ト兩人取りすがり介抱する。源七キツと苦痛のこなしあつて

源七　ヤレ、音高し〳〵。おことが今の惡言は、伍子胥が吳王を諫めたる、金言よりも猶重し。恐らくはこの一念、項羽紀信が勇氣にも、劣るまじと思へども、時來らねば力なし。それまで存らへ臆病者、腰拔けと指さゝれんは、無念の上の無念なり。我れ死して三日のうち、御身が胎內に苦しみあらば、我が魂ひ宿りしと心得、十月を待つて誕生せよ。

〽神變稀代の勇力の、男子となつて今一度、人界に生れ出で。

正盛右大將を滅さん。おことが身も今日より、常の女と事かはり、飛行通力あるべきぞや。深山幽谷を住家とし、生るゝ子を養育せよ。汝が五臟に早納めよ。

〽臟腑を摑んで、紅ゐの、血は夕立と爭ひし、最期の念ぞ凄じき。

ト時行、臟腑を摑んで、八重桐を引きつけ、口へ押入れる。薄ドロ〳〵。燒酎火燃ゆる。これにて兩人悶絕する。

〽あら不思議や切り口より、焰の塊、女房が口に入れば、りんとばかり、其まゝ息は絕えてけり。

トこの時、花道の揚げ幕にて

十郎　ヤレ來いやい。

〽かゝる處へ太田の十郎、組子引連れ押取卷き。

ト鳴り物ドン〳〵になり、花道より以前の太田十郎、襷鉢卷にて先に立ち、花四天の捕り手大勢、十手を持ち出て來り

ヤア〳〵兼冬、右大將高藤公より、汝が姬を召さるれども、賴光と緣組みとて、承引なきゆゑ、踏ん込んで、搦め捕つて歸れとある。サア、速かに渡せばよし、渡さぬに於ては踏ん込んで、搦め捕らうや。返答は、なんとなんと。

〽なんと〳〵と呼ばはつたり。聞くより白菊立ち上がり

白菊　ヤア、女ばかりと侮つて、慮外しやると許さぬぞ。

〽用意の懷劍たばさんで、寄らば切らんと身構へたり。

ト白菊、刀へ手をかけ、キツとこなし。

十郎　ヤア、物な云はせず、討つて取れ。
トどん／＼になり、太田十郎、奥へ走り入る。捕り手は白菊にかゝり、ちよつと立廻り。此うち奥より太田十郎、姫を引立て出て來る。
〽伏したる女むつくと起き、姫を圍うて立つたるは、さながら鬼女の如くなり。
ト此うち八重桐心付き、太田十郎を突き廻し姫を圍ひ、白菊にこなし。
八重　サア、白菊どの、この隙に姫君樣を守護なして、この場をお立ち、お立ち。
白菊　ぢやと云うて、この場を見捨てゝ。
八重　ハテ、未練な事を。ござれといふに、サア／＼早う。
白菊　そんなら、此まゝ。
八重　ちつとも早う。
白菊　おさらば。
〽姫を誘ひ白菊は、虎口を遁がれ落ちて行く。
ト捕り手かゝるをちよつと立廻り、投げ退け、白菊は姫を引連れ、花道へ入る。太田十郎は八重桐をキッと見て

十郎　ヤア、怪しい女め。
捕手　すさり居らう。
八重　ナニ、某を女とや。體は流れの太夫の身、一念は坂田の藏人、時行なるワ。
ト此の時、薄ドロ／＼にて、源七、苦痛の體にて
源七　さては、魂ひ宿りしか。
〽おゝさもさうず、さもあらん。我が魂ひは玉の緒の、御命恙なく、行く末待たせましませと、姫君に一禮し、怒れる眼物凄く、島田も解けて逆さまに、忽ち夜叉の鬼瓦。
トこの間誂らへ鳴り物にて、花四天打つてかゝり、めい／＼好みの立廻りよろしくあつて、トゞ皆々花道へ逃げて入る。
八重　これより我れは伊豆の國、足柄山に分け入つて、山より山に住ひせば、山姥とも云へ。そちやないか。
源七　ムウ。
八重　さうぢや／＼、腹な子に、手習ひ學問學ばして、如何にも武骨に育て上げ。
〽千人にも萬人にも、力すぐれし者ならば。
我が夫の名を雪がん事、疑ひなし。

〽胸は張り弓強弓の、雲井に分けて行く末は。
ト八重桐こなしあつて行くを、捕り手兩人ツカ〳〵と出て、やらぬとかゝるを押へ
八重 ア、モシ。
源七 行け。
八重 おさらば。
トこれにて兩人の捕り手振り拂ひ、八重桐に組みつくを引きつけ、首筋を掴むと、くはへ目、飛び出る。
〽怪し恐ろし。
ト三重送り、大ドロ〳〵にて、よろしく、
ひやうし幕

嫗山姥（終り）



信州川中島合戰の番附（安政元年中村座）

信州川中島合戰

しんしうかはなかじまかつせん

解説

享保六年八月、竹本座初演。作者は近松門左衛門。「雲錦隨筆」に「この時、山簾を張抜きの本山に作り始む。從前山の段は、簾に山を畫きたるを用ゐしなり」とある。

五段物で、初段は信玄輝虎が桑名の渡の小事件から、確執を生じて戰を開く事、山本勘助が信濃の山中で猪の爲に一眼一足を傷ける事、輝虎の息女衛門姬と信玄の息勝頼の戀を描いてある。第二段は信玄が勘助の閑居を訪ねて、主從の契約を結ぶ所から、勝頼衛門姬の道行、合戰の爲に二人の戀が破れるといふ筋。第三段は爰へ收錄の「配膳」と「直江館」の二幕で、第四段は勝頼が村上義清を討取るところ、第五段は川中島の合戰で、勘助が信玄の姿をかり、兩家の媒して和睦し、姬と勝頼はめでたく祝言するといふ院本式の解決がついてゐる。流石博識の近松だけに、支那の古事を盛んに取入れて面白く作つてあるが、所詮は三段目だけのもので、傑作と稱するほどの物でもない。

これを江戸の芝居で初めてやつたのは、文政十一年八月の河原崎座で、上方下りの中村歌六が、お勝をつとめて評判だつた。その後、安政元年中村座の夏芝居に、中村鶴藏が輝虎、中山市藏が老母と勘助を替つて見せた。慶應二年の春、中村座で、「川中島勝利山本」といふ名題で、この二幕に、「本朝廿四孝」の十種香を加へて上演したが、これが例になつて、同じ世界のこの二つの狂言を、並べて上演する事も度々あつた。後に明治座で左團次が出した時は、輝虎と勘助の二役を替つた。その爲役がダブつて、直江の館へ輝虎が出られぬので、子の長勝を出して、父の剃髮を報告する事にしてあつた。

本書收錄の臺本は、慶應二年に上演したもので、その役割は左の通りであつた。

輝虎（澤村訥升　直江山城守（市川團藏）同妻、唐衣（市川新車）丹下（中村芝歌藏）白妙（中村仲藏）お勝（澤村田之助）勘助（中村芝翫）

信州川中島合戰

上の巻

長尾館配膳の場

役名――長尾輝虎。勘助母、白妙。同女房、お勝。直江妻、唐衣。直江山城守。

本舞臺、高二重の草土手、柵、逆茂木を並べ、爰へ本櫓、石垣の大遠見。舞臺に構へし岩の道具幕。日覆より松の枝。爰に四人、軍兵の拵らへにて、割竹と提灯持ち、立ちかゝり居る。勢子太鼓にて幕明く。

兵一　時に兵內、今度の軍は、平常組み合はぬ山城さまには、ちつとぬかつたぞよ。

兵二　それゆゑおらが旦那、刑部さまが横鎗を入れて、爰を先途と戰かつたが、あゝ崩れかゝつては仕方がねえ。

兵三　なんでも甲州勢のうち、素晴しい智慧のある奴があると見える。

兵四　おらが主人の直江さまも、越後方での軍師おやと云ふが、上には上のあるものだよ。

兵一　それ／＼、今度はおれが一番、智慧を振つて、甲州勢を皆殺しにしてやるつもりだ。

兵二　おれは大將分の首を拾つて、出世をせにやならねえ。

兵三　イヤ、こいつは危ねえ。よせ／＼。

兵四　危ねえ事があるものか。

兵一　イヤ／＼、うろ／＼するうちに、肝心の首が飛んでしまふワ。

兵二　そんな眞似をするよりは、身分相應の兵粮方へ廻るが、いつち大丈夫だ。

兵四　腹せえ拵らへて置けば、逃げる時始末がいゝよ。

兵一　貴樣の云ふ通り、危なくなつたら逃げるが勝だ。

兵二　何しろ、斯う軍が度々あつては、體が堪らぬ。

兵三　實におらア壽命が縮まるやうだ。

兵四　氣の弱い奴だ。こんな時に一番吞んで、勢ひを付けるがいゝ。やらかせ／＼。

兵一　イヤ、其方ならば鬼に金棒。

兵二　そんなら、いつもの酒屋へ行つて。

四人　サア／＼、行かう／＼。

トわや／＼云つて、下手へ入る。知らせに、つき道具引切つて落す。

本舞臺、二重通し御殿、臺の眞中に寶珠附きの高欄の階、上手、御簾窓の體。向う奥深く瓦燈口。緞張かけ、兩方金襖、すべて輝虎御殿の體。爰に二重眞中に褥を敷き、輝虎、好みの拵らへにて曲彔にかゝり、本舞臺大名四人、いづれも素袍、小さ刀、大小にて、よろしく、中の舞にて道具納まる。

ト床の淨瑠璃になり

〽葉公龍を好んで描けども、眞の天龍を見て魂ひを失ふ、これ龍を好むにあらず、龍に似て龍にあらざる物を好むと云はん、將の勇士を好む、勇に似て勇にあらず、少ないかな才勇の臣、されば長尾輝虎、信玄と初度の合戰に勝利を失ひ、本城に勢を引入れて。

輝虎　如何に方々。今度の軍、味方三萬人の人數を以て、武田が一萬二千にかけ崩され、無念の敗北、骨髓に徹す。日頃危ふき勝ちを好まぬ信玄。朝霧の紛れに大河を渡し、我が旗本の備への後口へ廻し、無二無三にかけ敗りし武略の鋭さ。信玄の胸中より出づべからず。如何なる軍師が敵に組みし、かゝる奇計をなしけるぞ。汝等、樣子を知らざるや。

〽眉を逆立て眼に角立て、以ての外の不機嫌なり、四人の輩、詞を揃へ。

大一　さん候ふ。この度の戰ひに、敵は小勢、味方は大勢、敵を侮る油斷なり、思はぬ敗軍いたせしゆゑ、後度の軍に心をかけ

大二　各々士卒を掛引き、調練いたせしも、以前の恥辱を雪がんと、勇士の面々、勇み居れど、すは御出馬と御陣觸れのある時は

大三　いづれも一世の勇を振ひ、信玄の首を取らん事、手の内に覺えあり。さりながら、敵を知り、おのれを知るぞ、軍中の大事と申し候へば

大四　追ひ／＼間者を入れて窺ひ、聞き候らへば、三州牛窪の住人、山本勘助晴幸と申す浪人を召し抱へ、備へ陣取り士卒の掛引に至るまで

大一　委細勘助の下知に

皆々　ござりまする。

〽と申しも敢へぬに輝虎公。

輝虎　イカサマ、音に聞えたる山本勘助。卽ち山城が女房の兄ならずや。然るにこの席へ、山城の參らざるは、彼れが心も何とも以て合點行かず。汝等これより直江が屋敷へ立越え、評議へ出席を申しつくべし。異議に及ばゞ引立て參るべし。身が直々に問ひ糺さん。

大一　上意の如く、初度の合戰利を失ひしゆゑ、

大二　我れ〳〵面を合すも面目なし。これゆゑの缺席か。

大三　何は然れ君の仰せ。御兩所、直江氏を。

皆々　心得ました。

ト兩人、ツカ〳〵と花道の方へかゝる。此うち向うより、

山城　アイヤ、お出でに及ばず、直江山城守實綱、只今それへ。

ト序の舞になり、山城、上下衣裳にて出て來り、花道よき所にて輝虎を見て、ハッと辭儀する。

輝虎　ヤア〳〵直江山城。この度川中島の合戰に打敗けしゆゑ、後度の軍評議の席へ、何ゆゑあつて出參いたさぬ。所存あつてか。云へ聞かん。

山城　こは凄まじき御景色、御前へ參り、山城が申し開かん。御免〳〵。

ト序の舞になり、本舞臺眞中へ來り、輝虎こなし。四人も默禮する、

只今御評議の趣きは、委細あれにて承る。遲刻の段、各々御前よろしく仰せ下さるべし。

ト思ひ入れ。こなしありて

輝虎　アイヤ山城、委細あれにて聞いたとあれば、申すに及ばず、山本勘助には近き緣者の身を以て、なぜ勘助を予に進めず、何ゆゑ敵へは取られしぞ、さほど功ある者なれば、信玄が一萬石取らせば、我れ又二萬石くれんずもの。汝、予を見侮りしか。また輝虎如きは勘助が主に不足なるか。所存は如何に。それ聞かん。ナ、なんと。

〽顏色急いて見えにける、直江少しも驚ろかず。

山城　ハヽ、恐れながら、君御意なくとも、此方より申し上げんと存する折から。尤も彼れが妹を妻に娶り候へども、勘助には未だ對面いたさず。されど彼れは、在所に引籠り、鋤鍬取つて自ら田耕し、秋の田の面の月に嘯き、薪木を擔ひ、山路の花を友とし、世を陷入れず、祿を貪らず、天命を樂しみ、義を堅く守る侍ひ。越後半國

賜はるとて、手引を力に知行を望む勘助ならず、憚りながら君の短慮、高慢我慢の御心にて、人に詞を下されず、第一へり下る事をお嫌ひと云ひ、世の中八分に見下し給ひ、思ふやう知行さへ遣らば、樊噲張良でも抱へて見せん、その思し召しは大きに相違。この度勘助改めて、武田方になつたるは、必定上手を盡して招き寄せしに疑ひなし。それも餘りの殘念。枕を割りし一手段。短慮を鎮め無念の押ゆる事御合點ならば、密々申し上ぐべし。御前、如何に思し召しまする。

〽座中をきつと見廻せば、輝虎公打頷き。

輝虎 密事とあらば他聞を憚る。其方達は退席。

大一 然らば我れ〱一統に

大二 暫し御前を

四人 退座いたさう。

輝虎 皆々後刻。

〽只一聲の鶴の聞へ、打連れてこそ入りにける。

ト序の舞になり、大名四人、下手へ入る。輝虎、こなしあつて、

〽後打見やり輝虎は、面を和らげ。

如何に山城、汝苦肉の手段を以て、望みかゝりしこの祕書を、皆傳なすべき覺え、あるや如何に。

山城 恐れながら、御主君にも御會得なくば、某が何とて存じ申すべき。葉公の龍を畫けど龍を見ては氣を失ふ。天の時にぞ地の理に如かず。

輝虎 その一言にて輝虎も、今よりして心を改め、如何に山城。

トこれにて音樂になり

智ある軍師を近く招き、親師匠とも傳みつゝ、古への法を守り、勘助我れに奉公せば、弓矢八幡臨持たせても堪忍するが、汝が思案は、なんと〱。

山城 すりや、恐れながら御執心にて。

輝虎 堪え忍ぶ心に一決。疑はしくば、ムウ。それ。

ト側の刀掛けにある刀を取つて、金打せうとするを

山城 アイヤ御前、先づ〱暫らく。その御心底見奉れば、今は何をか包み申さん。勘助は拙者が君へ吹擧仕らん。その手段は彼の勘助、幼少にて父に離れ、今七十に餘る老母に、朝夕の孝心深く、二十四孝の追加ぞと、沙汰にも乘る孝行者。先づその母をなづけん爲、女どもより迎ひを立てさせ、是非々々これへ参る筈。御心安かれ、我が君様。

〽深き直江が計略に、輝虎實にもと打頷く、折から下役罷り出で。

ト向うより侍ひ出て來り、花道にて

侍ひ ハツ、申し上げまする。勘助どのゝ御老母、御内室御到着とあつて、奥様唐衣さま、只今御同道にて、お次へ控へなされます。

山城 それ待ち兼ねし。急いでこれへ。

ト侍ひ、引返して入る。

〽忠義の道は眞直に、敷石傳ひを息急きと、直江が妻の唐衣は、緣先に差窺ひ。

ト向うより唐衣、襠裲衣裳、肩はづしにて出て來り、花道より本舞臺を見て、こなしありて手をつかへ

唐衣 これは御前樣には、それにおわたり。山城どの、只今罷り歸りました。

山城 オ、唐衣、待ちかね居つた。御主君にもお許しなるぞ。近う參れ〳〵。

唐衣 御前樣、お許しなされて下さりませ。

〽襠裲捌きしとやかに、御前へ近く座を進めば、直江は差寄り。

ト唐衣、舞臺へ來り、下手へ住ふ。山城守。思ひ入れあつて

山城 何かは差措き、申しつけたる儀は、どうぢや。早く申せ。

唐衣 萬事はあなた樣のお指圖の通り。母樣は先程お着きなされ、兄勘助どののおかもじ樣も同道にて、直ぐにお城へ乘り物入れさせ、只今お次の臺子の間に、御休息いたさせましてござりまする。

山城 して〳〵、母人の御機嫌はよいか。どうぢや〳〵。

唐衣 ハイ、母樣は、それは〳〵、永々の浪人の辛苦にや、腰は二重、頭は雪、十も老けて見えながら、行儀作法は昔に變らず、勘助どのゝおかもじ、お勝さまとも初めて逢ひましたが、尋常な氣高い兄嫁御。あつたら玉に一つの疵は、口は吃りて物云ふ事を恥かしがり、受け答へは皆筆先。その上、琴の調べが上手。筆にも書かれぬ急な時には、云ふ事に節をつけ、琴に乘つて唱歌を唄へば、如何樣な事でも吃らずに云はるゝと、母樣のお物語り。その手の見事さ。墨付き筆の勢ひ、御家中の祐筆家にも少ない程の器用。いとしい事にはあの吃りが、直して進ぜたうござりまする。

〽女子同士の深切を、語れば大將聞し召し。

輝虎　不便ながら不具とあれば、それは一段。老母諸とも早これへ。對面なさん、連れ參れ。

山城　アイヤ、その儀は先づ暫らく。當お館へは稀れの客人。もてなす役は女房唐衣。随分御機嫌を承り、いつまでも逗留あるやう。さぞ老體の草臥れつらん。これへ招じ、このお座敷にて御馳走申せ。主君と我れは襖の蔭にて樣子を計らひ負ふせ、首尾を見合せ御對面。

輝虎　然らば直江。唐衣大儀。

唐衣　御前樣には、先づ

兩人　入らせられませう。

〽夫婦を伴ひ輝虎は、帳臺深く入りにけり。

ト音樂になり、輝虎、瓦燈口へ入る。山城守、上手へ入る。

〽折しも床の大和琴、硯料紙も座敷へ並べ、唐衣はしとやかに、廊下の欄へ手をかけて。

ト硯箱、料紙、琴など持ち出て、唐衣、こなし、よろしくあつて

唐衣　山本勘助どののおかもじ樣、母樣、これへお通り遊ばされませう。

白妙　ヤレ、音高し〳〵。

〽挨拶の聲聞ゆれば、塒を出でし老の鶴、子に逢ふまでぞ世の人の、問ふとも我れは名なし鳥、嫁のお勝が案内に、恩愛の道白妙の、御書院深くさしかゝる。

トこの文句のうち、白妙、裲襠裝束、お勝、裲襠衣裳にて、丸帯、刀を持ち出て來り、花道にて

ナウ唐衣、この越後は勘助の主君、信玄の敵の國。そもじの夫は敵の御家老、その所へこの母が、來る義理はなけれども、この世の名殘に母の顔、見たいとの文の表。我れも娘戀しさに、迎ひに連れ立ち、舌も廻らぬ嫁を力に、下女も連れぬこの有樣。山本勘助どのの母よ内儀と、聲高に云はぬ事〳〵。何處ぞそこらへ休息せん。

〽座せんとするを。

ト白妙、花道へ座るを、唐衣、止めて

唐衣　そこは端近。マア〳〵これへ。

〽と請ぜられ。

白妙　嫁女、刀。

かつ　ハ、、、、イ。

〽嫁のお勝が携へし、持ち刀引寄せて、おめず臆せず白書院、締ひ物したる襖の上、威も備はつて見えにける。

唐衣近く差寄つて。

ト白妙、お勝の持ちし刀を差して、兩人、本舞臺へ來て、唐衣、會釋する。これにて白妙こなしあつて、二重の褥の上へ座る。お勝、引添ひ居る。唐衣、こなしあつて

唐衣　お禮申すはお勝さま。私し孝行を一人に振りかけ、お年寄りの起臥しから、朝夕の御介抱。この度の道中も雨につけ風につけ、海山のお心使ひ、詞には申されませぬわいなア。

かつ　ア、、、イ。

〽笑顔ばかりが愛想にて、硯引寄せ赤らむ顏のはお紅葉、木の葉の時雨さら〳〵、世尊寺やらの走り書。好い手の癖に讀め易き、唐衣取上げ。

唐衣　ア、成る程、これは〳〵、マア〳〵忝ない。お筆の通り、姉となりとも妹となりとも、兄弟と思し召し、お心隔てず、お頼み申しますぞえ。せめて私しも、この半分書きたいものでござりまする。

〽くる〳〵巻いて袖に納める後より、直江は上下改めて京紋の綾の吳服一重ね。臺に載せ立ち出でゝ、式臺深く謹んで。

ト上手より山城守、誂らへの小袖を廣蓋に載せ持ち出て來り

山城　拙者は直江山城守實綱。お國許へ罷り出で、親子の祝儀申すべき筈のところ、女どもより迎ひを參らせ、遠路の御光駕、祝着これに過ぎず。山本氏の御内室にも、よくこそ〳〵御同道。お心安く御逗留あるやうに、わざと御馳走は申さず。隨つてこの小袖は、將軍義輝公の御召し料、二つ引き龍の御紋付き、主人輝虎公拜領いたされ、一兩度着せられしばかり、當國は寒國なれば、うたた寐の裾になどかけ給はゞ、主人輝虎にも滿足たるべし。

〽差出せば起き直り、につこと笑ひ。

白妙　ヤレ〳〵、數ならぬこの婆が來た事、輝虎公のお耳に入りしよな。さては爰は聟どのゝ館と思へば、御主人の本丸か。して、この小袖を婆に着よとか。ホヽ、御念の入つた事。さて〳〵結構な。京紋の綾と云ふ物か。天晴れ將軍のお召領。さりながら、輝虎公が一兩度も着給ふとあるからは、古着も同然。この母はこの年まで、人の古着貰うて着た事はない。なう〳〵否や。いまはしい。

〽詞に文も艶もなく、吳服も色を失へり、唐衣は堪らず

摺り寄つて。

唐衣　イヤ申し、母御様に召せとは御挨拶。これは男様様、勘助どのゝお土産になされよとのお志し。

白妙　それなれば猶の事。武田信玄と云ふ主持つて、何暗からぬ勘助、土産には越後の名物、鮭の塩引き、歸るさの道には、木曾川の鮎の白干し、信濃梅の梅干、皺の寄つたこの婆の、無事を見せるが何より土産ぢや。オヽ、喧ましい。爺どの、許さつしやれ。

〽足踏み伸ばし肱枕、直江も立つに立端なく、勝手に向ひ。

山城　誰ぞ参れ〳〵。御時分がよし。お料理〳〵。なんとして遅なはる。料理人、キッと申しつけたるぞ。

〽料理をその座のしほにして、母の機嫌の鹽梅加減、窺ひ〳〵立ちにける。

ト山城守、肱蓋を持ち、上手へ入る。

〽程なく御勝手よしとほのめき、本膳の懸盤に種々の魚鳥、珍物の野菜美味取扱へ、配膳の侍ひ、直垂繕ろひ、作法正しき疊さはり。

ト音楽になり、橋がゝりより輝虎、烏帽子素袍にて、太刀を帯び、袱紗かけし膳部を目八分に持ち出て

輝虎　御膳召し上がり下さるべし。

〽烏帽子八分に差上げてこそ控へけれ、唐衣見れば主君の輝虎、ハッと驚ろき。

ト見て、こなしありて

唐衣　ア、申し母様。御前、イヤ、御膳。

〽と云ふ聲に、起き直り座を組めば、管領風の摺り足にて、膳の据ゑ振り、敬ひ深く、通ひの座に手をつかへ。

トこれにて膳を白妙の前へ置き、下手へ來り

輝虎　邊國の事なれば、心ばかりの御馳走。イザ、召上がり下さるべし。

〽とこそ仰せある。老母は會釋し。

白妙　ホ、オ、これは〳〵、隔てがましい饗應。殊に仰山な、神前に御供供へるやうに、烏帽子直垂の配膳は、近習衆か外様衆か。常々女子どもに給仕さするこの婆。歯は抜ける口は渇く。慇懃な給仕では、窮屈で喰へにくい。勝手へ立つて休息召され。唐衣替りや。

〽唐衣替りやとありければ。

輝虎　イヤ、辭儀は却つて迷惑。御子息山本勘助どのは、勇といひ智といひ、古の楠正成が、再來とも云つべき弓取り。惜しいかな武田信玄に奉公とは、寶を泥中に埋

め、麒麟を繋いで犬とするが如し。かゝる英雄の御老母、直江が内談を以て、不思議のお出で。一國に優曇華の咲いたる喜び。今日より我れも母と頼み、子となるしるしの杯。頂戴の望み。斯く申すは長尾彈正少弼輝虎、孝行始めの給仕配膳。イザ、召上がり下されい。

〽烏帽子を疊へ付け給へば、嫁も娘もはつとばかり、覺えず頭を下げにける。老母は膝を立て直し。

白妙　ホヽウ、長生きすれば、珍らしい事を見聞くよな。鎌倉の海にては、鹿の角で鰹を釣り、攝津河の淵には、麥飯で鯉を釣ると聞きしが、越後の國には老いさらばいしこの婆を餌に、山本勘助を釣り寄せんとは、ハヽヽヽヽ事おかしや〳〵。凡そ大將は、天より請けたる命を顧み、正直自然の規矩を外さねば、天の時地の理に叶ひ、諸卒これに和し、遂には眞の勝利を得る。總じて物には相應あり。この婆が給仕には、腰元の女童が丁度相應。鷄を裂くに何ぞ牛の刀を用ひんとは、聖人の金言。人をたらす僞り表裏、今日の振舞ひに顯はれ、本心曲つた釣針に、釣らるゝやうな勘助ではおぢやらぬ。この膳部に手をかけては、敵の恩になり、我が子の鋒先にたるみがつく。義もなく勇もなきこの配膳、何かせん。早々持つて下がり居らう。

〽ずんと立つて、縣盤ぐわらりと蹴返せば、膳部亂れて直垂の、膝に味噌汁淵をなし、魚より驚ろく嫁娘、ハッとばかりに膽を冷し、呆れ果てたるばかりなり。短慮の輝虎ぐつとせき上げ。

ト輝虎、裝束の袖を退け、烏帽子を退け、キッとこなしあつて

輝虎　ヤア、憎くい老ぼれめ。小袖をくるれば古着なぞとさみし、剰さへ天子將軍にも給仕せざる、輝虎が据ゑたる膳を、脛にて蹴返す。アノ茲な罰當りめ。狂人とは思へども堪忍ならず。イテ皺首を、刎ねてくれん。

〽重大の小豆長光、二尺五寸に手を掛け給ふを、直江山城守飛んで出で、お手に縋れば唐衣は、母に取りつき。

ト輝虎キッとなるを、上手より山城守駈け出て、輝虎を引き留める。

唐衣　コレ母樣、お詫び〳〵。

白妙　なんの詫び事。聟の主人に、手向ひもせぬ、詫び事もせぬ。サア、存分に遊ばせ。お手にかゝらん。

〽刀かい込ひ立つたる擬勢。

輝虎　オヽ、その咽喉元を止めてくれん。放せ、直江。

山城　ア、コレ、臨持たせても堪忍すゝとの、御誓言ではございませぬか。

輝虎　ヤ、なんと。

ト入れ替つて好き見得。

山城　禮儀は爰でござりまする。

〽制しても、身を慄はして無念の涙、中にうろ〳〵兄嫁が、心急く程口廻らず、拜んで廻り立ちつ居つ、詮方なくなく琴引き寄せ、琴柱を律に調べ替へ。

ト輝虎、太刀を拔いて白妙を切らんとする。白妙、身を突きつける。山城守、輝虎を留める。お勝唐衣詫びる事。お勝、琴を取つて來り、眞中へ直し、双方引張りよろしくありて

かつ　ゆるし給へや老の身の。

〽力に足らぬ。

ド、吃りの不具者。

〽頼みに預けしは我が夫、預かるは。

シ、姑。

〽甲斐なく爰に捨草の、露より脆き命をや、空しく枯れし靡木を、無常の煙となし果てゝ、一人すご〳〵歸るさは、拾ひし骨の供をして、夫には何と語らん。

カ、替りには我が命。

〽母を助けてたび給へ、お慈悲ぞやお情ぞやと、わつと叫びて彈き捨ての、琴に身を伏し、泣き沈む、鬼を欺く輝虎も、哀れに心のたゆみ果て。

ト此うちお勝、琴を彈きしまひ、輝虎おこつくを、山城守唐衣、留める思ひ入れ。輝虎こなしありて刀を納め

輝虎　憎い老ぼれ。いま討ち果す奴なれども、不具者の歎きと云ひ、かた〴〵以て命は助くる。門前より追ひ拂へ。

山城　ソレ、お赦しなるぞ。母を誘ひ、早く〳〵。

〽ハア、有り難しと一禮に、お勝が嬉しさ物云ひたげに、頭を振るばかり、足も付けず、躍り伏し〳〵、情の花のヤレ御所櫻、枝はゑゝ、ゑつちりな〳〵、えつちり越後の御繁昌と、祝ひ勇みて出でゝ行く。

ト付け廻り、よろしく引張り見得にて

幕

幕前、誂らへの鳴り物になり、白妙先にお勝、後より附いて向うへ入る。後シヤギリ。

下の巻

直江山城館の場

役名――山本勘助晴幸。同、女房お勝。同母、白妙。直江妻、唐衣。岩淵丹下。茶道、珍才。高田の局。腰元、紅葉。同、如月。同、皐月。直江山城守。長尾輝虎。

本舞臺、三間の二重、向う金襖。上手、一間の障子屋體、下手、網代塀、柴垣、すべて、直江屋敷の體。二重に、紅葉、皐月、如月、腰元の形。茶道珍才、皆々歌骨牌をして居る。琴唄にて、幕明く。

紅葉　逢ひ見ての後の心に比ぶれば。

ト上の句を讀む。皐月、取つて

皐月　昔は物を思はざりけり。

如月　有明のつれなく見えし別れより。

珍才　曉ばかり憂きものはなし。

ト骨牌を取りかゝる。

皐月　ドッコイ、わたしぢやわいなア。

紅葉　何しおふ逢坂山のさねかづら。

如月　人に知られて來るよしもがな。

ト皆々よろしく骨牌を取つて居る。此うち、如月、珍才、おかしみ、よろしくあつて

コレ／＼、珍才どの、チッとして居やしやんせ。

珍才　イ、エ、お前が。

如月　イエ／＼、お前ぢや。

ト兩人爭ふ。紅葉、兩人を留めて

紅葉　これはしたり、相も變らず、どうしたものでござんす。

如月　それでも珍才さんが、惡いからぢやわいなア。

珍才　なんの惡い事があるものか。

皐月　そんなら、これはもう止しにして、なんぞ外の事をして遊ばうではござんせぬか。

皆々　それがようござんす。

如月　こりや矢ッ張り珍才さんの、持ち前のお茶坊主がようござんす。

皆々　ほんに、それがようござりまする。

トこれにて、珍才、目隱しを始める。好き程に向うよ

り、侍ひ、膝立ちにて、出て來り

侍ひ　ハツ、お取次を賴み申す。拙者は信濃の國の番所より、早使ひとして罷り越しました。お賴み申す〳〵。

〽訪ふ聲に高田の局、

ト奧より、高田の局、裲襠衣裳にて出て來り

高田　お國元よりのお使ひとな。自らは高田の局と申す者……して、御口上は。

侍ひ　ハア、卽ち今朝夜明けお關所を、右の目がんちに、左の足は跛の侍ひ、罷り通らんと申せしゆゑ、何國より何れへ參るやと尋ねましたれば、甲州の住人山本勘助と云ふ者にて、御家老直江山城どのゝ御內證へと申し、供の人馬をお國境へ殘し通られしゆゑ、脇道より遮つてお訴へ申し上げまする。拙者は關役の事なれば、暫しの隙も心急き。イザ御免下さりませ。

〽申し置いてぞ引返す。局は委細承り。

高田　これはマア、思ひがけないめでたい事。山本勘助さまとは、奧に御座るお客人樣の御惣領。卽ち當家の奧樣のお兄御樣。この事を申し上げたら、さぞお喜び。今の知らせの樣子では、是非々々お越しであらう。コレ、其方衆はお座敷を掃除しや。珍才どのにはお間ひの、お欄の飾りもぬからぬやう。

皆々　畏まりました。

高田　ドレ、お取次いたしませう。

〽云ひつゝ奧へ入りにける。

ト高田の局、奧へ入る。

皆々　サア〳〵、これからお掃除ぢや。

如月　マア〳〵、爰の間から片付けようわいなア。

珍才　私しは茶の間のお掃除を致さうか。

皆々　サア〳〵、お掃除ぢや〳〵。

ト皆々そこらを片付ける。珍才、茶臺を袱紗へ拭きなどして居る。

〽掃除とり〴〵なる折柄、長尾の家來岩淵丹下、案內もなく入り來り。

ト序の舞になり、向うより、岩淵丹下、衣裳、上下、大小にて出て來り、ズッと上手へ通る。

珍才　これは〳〵、岩淵丹下さまには、ようこそお越したされました。

如月　ほんにマア、何時見ても御機嫌のよい。見かけとは事替り、取入つて見ますれば、格別でござんす。ナウ皆さん。

紅葉　それ〳〵、いつち小意地が惡さうで、色氣がなうて、愛想がなうて、どつこに一つ云ひ分のある、お侍ひ樣ではあるわいなア。

〽云はれて丹下は眼に角立て。

丹下　エヽ、默らつしやい。お身達の惡口聞きには參らぬ。山城どのは、どれに居召さる。岩淵が罷り越したと、取次さつしやい。

〽と大音に云へば、薄氣味惡く。

珍才　アノ、御主人樣は、輝虎さまの御前へ、先程御登城でござりまする。

丹下　然らば內室、唐衣どのを呼ばつしやい。

紅葉　奧樣も我が君樣のお召しで、御一緒に御登城でござりまする。

如月　例へお館にお出で遊ばしても、母御樣のお伽のつれづれ、四方山のお話しがたんとあつて、お前さん方に逢ふやうな、そんな隙は

皆々　ござんせぬわいなア。

丹下　ムウ。老母が悴たる山本勘助が器量、御懇望に思し召すは、これ我が君輝虎公は元とり、家內に添つて母親を馳走だつぱい。今日は是非とも、この丹下が理解を說いて、老母から先づ得心させ、勘助を味方に引入れん。この儀について山城どのへ、面談いたさねばならぬ。併し、下城に間もあるまい。ドレ、これに居て相待たう。

〽燻らす煙草に腰元ども、あたり煙たく見えにける。

珍才　私しどもゝ、爰に居ては却つてお邪魔。

如月　我が君樣のお歸りまでは

紅葉　奧へ參つて居りまする程に

皐月　御用があらば何時でも。

珍才　左樣なれば丹下さま、後程お目に

皆々　かゝりまぜう。

〽皆々奧へ立つて行く。

ト腰元皆々奧へ入る。下手より、上下の侍ひ、仕掛物の折を持ち出て來り

侍ひ　ハツ、丹下さま、これにござりまするか。お指圖の通り、一品持參仕りました。

丹下　オヽ、待ち兼ねた。これへ〳〵。

侍ひ　ハア。

ト折を丹下受取つて思ひ入れ。

丹下　其方にも用事もあれば、次へ立つて相待ちやれ。

侍ひ　畏まりました。

ト引返して入る。丹下、思ひ入れあつて

〽仕済ましたりと笑の眉、時分はよしとこなたなる、柴垣破り、ぬつと出でたる忍びのいでたち、あたりを窺ひ。

忍び　丹下さま。

ト忍びの者、黒の衣裳にて出る。

丹下　コリヤ。

ト兩人、あたりへ思ひ入れ。調べになつて

忍び　して、私しへの御用はな。

丹下　其方を呼び寄せしは餘の儀にあらず。兼ねて不和なる甲斐と越後、その虚に乘つて兩家を亡ぼし、村上どのの御手に入るゝは瞬くうち。併し、どちらにつけても邪魔になるあの勘助。討取る手段は、コレ。

ト囁く。

忍び　すりや、弓矢を以て。

丹下　忍び姿を幸ひに。

忍び　あれなる松ヶ枝に。

丹下　合圖を待つて

忍び　一矢に射殺し

丹下　日頃の忠義は

忍び　拙者の手の内。

丹下　必らずぬかるな。

忍び　ハア、。

丹下　併し、勘助が參らば、この丹下が手を盡して馳走の干菓子。コリヤ、その場に至らば組子を以て、申しつけた手段、必らずともに。

忍び　畏まつてござりまする。

丹下　行け。

忍び　ハッ。

〽牒し合せて走り行く、後に岩淵打頷き、何か心を奥の間より、局諸とも腰元ども。

ト忍び、向うへ入る。丹下、思ひ入れ。此うち、高田の局、腰元、奥より出て

高田　これは〳〵、丹下さま、さぞお待ち兼ねでござりませう。勘助さまがお越しあらうとも、母御様やお勝さまは沙汰なしに、爰で御馳走申せと、奥様より仰せでござりまする。

丹下　左様でござるか。身も奧へ參つて、勘助が人品、餘所ながら見聞いたさう。

ト此うち、如月、向うへこなしあつて

如月　アレ〱、もう勘助さまのお出でかして、玄關がときめきますわいなア。

丹下　然らば奥へ罷り越さうか。

〽一間へこそは入りにける。

ト序の舞になり、丹下、思ひ入れあつて、奥へ入る。

〽案内に連れて入り來る、旅裝束の裁付も、膝は捻れてちんがちが、左跛に右がんち、雪折れ松に星一つ、葉越しに見ゆる男振り。

トこれにて、勘助、着付け、袖なし羽織、大小、風呂敷包みを背負ひ、舞臺へ來る。

勘助　誰ぞお頼み申さう。

〽云ひ入るれば高田の局。

高田　これは〱、お客人には、先づ〱これへ

皆々　お通りなされませ。

勘助　然らば御免下されい。

〽細瑾の顧みぬ大丈夫、笑ふも謗るもなんともなく、座敷へこそは打通る。

ト鳴り物になる。皆々顔見合せ笑ふ事。勘助、これに構はず上手へ住ふ。

珍才　サア〱、コレ、女中達、いま丹下さまの仰しやつた、甲州の住人、山本勘助さまとやら、お越しなされたれば、隨分御粗相のないやうに、もてなせとの仰せつけ。必らず必らず氣を付けなされ。

高田　そりやモウ、仰しやるまでもない。音に聞えたる勘助さま。

紅葉　軍師と云ひ、武勇と云ひ

如月　何所に一つ云ひ分のない殿御。

珍才　さうとも〱。わしも知らねど武術の聞え。いま業平と云ふやうな男であらう。

皐月　わしや見ぬ戀に、焦れて居たわいなア。

高田　これはしたり、どうしたものでござんすぞえ。

皐月　オットセウ。

珍才　今度お越しなされたら、わたしにお任せなされませ。

皐如　イエ〱、わたしぢやわいなア〱。

珍才　ア、コレ〱、其やうにわたしも〱と云つては埒が明かぬ。ドレ〱、役割りして置きませう。

トよろしく指圖する事あり。

如月　お茶を召上がられませう。

皐月　お莨、召上がられませう。

〽エヘン／＼と紛らせど、勘助は何氣なく。

勘助　ハテ、其方衆は當家の女中よな。山城どの御家內唐衣に、身が參つたと、取次を賴み存ずる。

高田　我が君諸とも奥樣にも、御前樣のお召しに依つて登城ゆゑ、暫らくの間、爰に休息遊ばしませ。

勘助　ムウ。登城とあれば、歸りの程も知れまじ。併し、山城どの夫婦には用もない。老母の氣色以ての外との文通ゆゑ、取る物も取り敢へず、夜を日に次いで罷り越した。早々母の顏見たし。何卒母の居間へ案內賴む。

〽と立たんとするを。

珍才　ア、申し、勘助さま、母御樣には御機嫌よう

如月　お出で遊ばされます……ナウ紅葉どの。

紅葉　それ／＼、このお館へお出で遊ばしてより、ほんに、くさめ一つ遊ばさず

皐月　その上、家中の人々が、入り代り立ち代りておもてなし。

紅葉　毎日々々、花の鳥のと數々のお慰み。

如月　ほんに、旨い物は食べ次第。わたしや羨やましうてならぬわいなア。

〽母の噂を聞くにつけ。

勘助　然らば、女房勝に逢ひ申さう。

珍才　イヤ、お勝さまは御機嫌よう、阿母樣のお側に、お伽の役目。

勘助　然らば勝が居間へなと、早く知らせて下されい。

高田　成る程、久し振りでお逢ひ遊ばすもの、こりや御尤もでござりますわいなア。

皐月　あのやうにお急きなさるゝも、久し振りの睦言を、一度にお晴らしなさるゝと思へば、わたしや味になつたわいなア。

勘助　エヽ、無駄を申さず、知らせいと申すに。

皆々　ハアイ。

〽皆打連れて入りにける、勘助、後を打見やり。

トこれにて、皆々奥へ入る。勘助、思ひ入れあつて

勘助　割符の合はぬ詞の端々。フムウ。

トこの時、奥より、岩淵丹下、出て來り

丹下　イヤ、これは／＼、其許が噂に聞き及ぶ、山本勘助どのでござるよな。

勘助　如何にも拙者めにござりまする。

丹下　某事は、長尾輝虎の家來、岩淵丹下と申す者。

勘助　イヤモウ、御姓名は承はれど、御意得まするは今

日が始めて。
丹下　以後は別懇に
勘助　申し談ずるで
兩人　ござりませう。
丹下　イヤナニ、勘助どの、拙者事も直江どのに要用あつて、先程より相待ち居る。追ツつけ下城であらう程に、おてまへも先づゆつくりと御休息なされ。イヤモウ、聞き及びし山本勘助どの、民間にあつて英名四海に轟く。見ると聞くとは大きな相違。五體不具なる身を以て、まさかの時戰場に向ひ、名ある敵に向ひ、組討ちの勝負なす時、兩馬が間に引伏せ、首を掻き切る思案はなんと。それ承りたう存ずるて。
勘助　ハ、、、、修羅の巷に刃を振つて、立ち向ふは雜兵葉武者。只一人の手柄。大將たる者は、帷幕の内にあつて、士卒の駈引き、進退自由の下知を傳へる。萬騎をも取挫ぐが、軍師たる者の一の心掛け。
ト この時、下手の松の木へ忍びの者登り、弓矢を以て、勘助を狙ふ。丹下、こなし、思ひ入れあつて
丹下　コリャ〳〵、まだ早い〳〵。
勘助　ナニ、早いとは。
丹下　イヤサ、早いとは……オ、さうだ。山城どの丶お留主のうち、母親内儀に逢はうと仰しやるが、まだ早い……サ、身が指圖するまでは、早まつては惡い。イヤサ、早いと云ふのでござりまする。
勘助　それなれば、なんと致さう。山城どの丶歸るまで、相待ち申さう。
丹下　それがようござる〳〵。
ト 以前の菓子の折を勘助の前に出して
この乾菓子は、御老母へ進上と存じ、拙者が持參。先程よりお待ち兼ね。これなりと召上がられい。
勘助　それは〳〵忝ない。身共は下戸の儀なれば、菓子は好物。
丹下　好物とあらば、ちよつと斯う。
ト 刀を拔きかける。よろしく留めて
勘助　ヤア、不意の朝駈け。忍びの夜討ち。
丹下　その虚を外さず、臨機應變。
ト 又よろしく立廻つて、菓子の折を見て
勘助　ハ、、、、手の見えた馳走の乾菓子。銘は慥かに種ケ島。
丹下　ヤ、なんと。

勘助　爰らが筒先。

ト折を碎く。この途端、下手の松ケ枝より、忍びの者、弓矢にて、勘助を討たんとする。折の内の種ケ島、仕掛けあり、四方へ開く。本鐵砲の音にて、忍びの者を打ち殺す。

ハ、、、、ハテ、好い御馳走。

丹下　ムヽウ。

勘助　こなたにも少と、お振舞ひ申さうか。

丹下　イヤ、御馳走は食べたも同然。勘助どの、後刻御意得ませう。

〽工合違つた岩淵丹下、一間へこそは入りにける。後に勘助只一人。

ト丹下、思ひ入れあつて、入る。勘助、思ひ入れ。床の合ひ方になる。

勘助　ハテ、心得ぬ屋敷の體。母の大病、九死一生と認めしは、紛ふ方なき女の手跡。さてはと驚ろき、取る物も取り敢へず、この國へ駈けつけ見れば、母人には御安泰にてましますと只今の噂。母人の機嫌は益々よしと申しながらも、女房にも逢はせず。……ムウ。さては山城は登城の留主、歸宅するまで、對面は致させじと、妹も出合はず。ムウ。さては山城が思慮を以て、輝虎に我れを勸め、當國へ招かん爲、母を囮りに味方にさせん苦肉の手段。

〽鏡にかけて見る如し。

唐衣は血を分けし妹なれども、夫を持てば夫の爲、主の爲、大事と思ふは女の操、さもあるべき事。大たわけめは女房め。輝虎が智略にて、母を馳走して、一家中の尊敬するに心奪はれ、山城に落し込まれ、息災なる母を、九死との文を認め、、某を釣り寄せ、まんまと敵國の袋へ入れしよな。

〽えゝ奇怪千萬、一應も再應も、念を入れべき母が生顏、ま一度見たし拜みたしと、我れを忘れて來りしは、勘助が一生の粗忽、後代の笑ひ草。

片時も猶豫すべきにあらず。母を奪ひ取り、爰を立退いて、彼奴らの鼻を明かしてくれん。何にもせよ、母人のお在所を。

〽そこか爰かと打見やれば、奥の間數多くして案内も知らず、門を出て、後の塀を乘越すべき。

我が爲の鐵拐ケ峯、鵯越も斯くあらん。

〽心の山坂ちんば馬、行きつ戻りつ思案最中、誰か知ら

せてや女房お勝、走り出て。

ト　勘助、思ひ入れ。この時、上手よりバタ〳〵と、お勝走り出て

かつ　ヤ、オ、お前は、コヽ、こちの人。

〽取りつくを物をも云はず後より、はつたと突きつけ、駈け出るを又引留め。

ナ、、なんで、ウ、、うろたへてござる。ク、、口こそ叶はぬ、コ、、こなたの女房、勝が預かつて來るからは、キ、、氣遣ひさつしやるなや。ヤ、、やんがて母樣を連れて、ヌ、、拔けて〳〵。

〽とばかりにて、涙は聲に先立てり。

勘助　ヤア、舌も廻らぬ顎から、うろたへて來りしかとは、さう云ふおのれが腑拔けの第一。三界にたつた一人の母人、病の床に臥して、今を限りと知らせの文を寄越せしは、何者に賴まれた。サア　誰れが指圖で、この文體は認めた。

ト　懷より狀を出し見せる。

〽云へども更に覺えなければ、恨めし氣に夫の顏指ざして。

かつ　ウ、、、嘘ぢや〳〵。ウ、、、嘘ぢや。

勘助　嘘か誠か、おのれが手跡、自筆の文。それを見よ。

〽投げ出せば、さつと拔き。

ト　狀を取つて、よく〳〵見て

かつ　ソ、、、そでない。ニ、、、似せくさつた。セ、、詮索して、イ、、、生けては置かぬ〳〵。

〽走り出るを押しとゞめ。

勘助　コリヤ待て、うつけ者。詮索とは誰れを詮索。元を云はば、似るものよく似せらるゝ。おのれが誤まり。惣じて敵國に入る時は、立振舞ひにも氣を付け、一言半句の詞にも愼み油斷せぬこそ、男女とも武家に育つ心がけ、唐土蜀のたんふが故事なぞ常々聞いたでないか。それになんぞや浮々と書散らしするゆゑ、よしない筆を似せられて後に至つて、なんの詮索。恨み云ふ程恥の恥、一生敵の計略に乘らぬ山本勘助が、母と云ふ字に心眩み、敵國へ踏み込みしは、こりやおのれが筆先。よくも身共に不覺を取らしたなア。それでも勘助が女房と思ふか。チエエ、不所存者めが。

〽はつたと睨む片目の光、月日と星の三光の、一度にさすやと身にこたへ、わつと叫び入りけるが、あゝ淺ましきは不具の身。

かつ　ク、、、國を離れて今日が日まで、ユ、、、夢にも、コ、、、心安めず、油斷とては、ナ、なけれども。
〽流石オ、女子同士、雨の降る夜のツ、つれ〴〵も。琴も彈かれず、フ、、、筆先の物語り。ホ、、、反古を誰れか、拾ひ集めて。
〽手本とはなしけるぞや。
七年先のカ、、、懷姙、イ、、五ツ月めに流產して、チチ、、血の障りに、舌ちゞまり。
〽產れもつかぬド、吃りとなり。
フ、、筆を舌にて物云ひしを、これが癒るものならば、ク、、、口先を切つてなりと、シ、、、舌の根を引裂いても、せめて死際に。
〽彌陀の六字の名號を。
マ、、滿足に唱へて、死にたい〳〵。
〽とかき口說き〳〵、身を悔み、廻らぬ舌にせきかけせきかけくりかけて、吃らぬ物は淚なり、不具を悔む身につまされ、天魔を欺むく勘助も、不便いや增し淚ぐみ。
勘助　ムウ、成る程、先年の流產より、吃りとなりしもこれ天命。誰れを恨みん。我れも豬の難よりして、五體不具となつたれど、畜生に恨みもなく、我が親は

〽昔に返る山本勘助。
汝も吃りに心屈せず、初めの性根をしつかと据ゑ……コリヤ、當屋敷の勝手は知りつらん。母樣へ密かに知らせ、連れ出して伴ひ申せ……我れは裏手の塀を乘り越え、安安とお供せん。コリヤ、首尾よく致せ。
かつ　ソ、、それでは、こなたの女房か。
勘助　おんでもない事。身が女房。
かつ　ハア。
〽忝ない。
勘助　して、母人の在します所は。
かつ　ハ、、萩の間の、オ、、奥座敷。
勘助　隨分首尾よう。
かつ　ヌ、、盜んで來う。
勘助　出かした。行け。
ト勘助、お勝に差添を渡す。
かつ　カ、、畏まつた。
〽畏まつたと走り入る。先づ心安しこの上は、母人の御供いたさんと、出るこなたより。
ト お勝、奥へ入る。勘助、こなしあつて、此うち、下手より、四天の取卷き八人出て來り

取一　コリヤ勘助、汝如何程の智謀あるとも
取二　斯く我れ〳〵が取圍む上からは
取三　生捕つて村上さまへ差出し
取四　恩賞にあづかるのだ。
皆々　勘助、やらぬ。
〽勘助やらぬと押取卷く、ちつとも臆せず、じろりと見やり。
勘助　ム、ハ、、、。越後料理の鹽辛鹽梅、この勘助が口に合はぬ。折角心を盡した馳走。一ツからげに頂戴仕らう。
〽庭にひらりとおりしも路次の下駄片し短かき足にしつかと穿き、左つぎして兩足揃ひの高低なし。
ト庭下駄を足に穿き、よろしくあつて
ならば手柄に、搦めて見よや。
〽一つの目玉で八方見廻し、立つたる所へ、後を取り切る片鎌鎗、向うよりは十文字、前後一度に突き出せば、まつかせと引く四寸の身、鎗と鎗とがかつしと當つて結んだり、逸ふ間もなく手繰り引き、又突きかゝる上下の穗先、下段に來るを發矢と踏み留め、取られし物を兩手をかけて引つたくり、石突きとりのべばた〳〵と、叩き付けられ、鎗を捨てゝ走り込む、組んで捕らんと無刀の男、大手を廣げて飛びかゝる、脇の下をかい潛り、太股摑んでぞつと打ちつけ、腰骨踏まへて投げ殺し、右左へ踏み飛ばし、引ッかつぎ〳〵、筋斗打たせる手利きの早業、一度にどつと逃げ散つたり。
ト皆々、誂らへの鳴り物にて、よろしく文句の通り立廻りある。向うへ逃げて入る。
〽勘助は心もそゞろ、木履片足で走り行く、斯くと聞くより直江山城、押取り刀に立戻り。
ト勘助、よろしくあつて上手へ入る。好き程に直江山城出て來り、この時、向うより、絹羽織の侍ひ走り出て
侍ひ　ハッ、御主人には、只今御下城遊ばされましたか。勘助を組みとめんとせしところ、手痛き働らき。お裏より立歸つたと相見えまする。
〽申し捨てゝぞ引返す、仔細を聞くより拳を握り。
山城　南無三方、早歸りしか。當國に足を留めてもらひたく、主人の懇望。甲斐の國ばかりに月日の光あるでもなし。片意地も好い加減。是非に歸らば、この山城が首、腰につけて、お歸りあれ。

〽隈々尋ねるその後へ、ずつと出でたる岩淵丹下。

トこの時、丹下、出て來り

丹下　ヤア、勘助に逢ひたくば、身共が斯うして逢はしてくれん。

〽切つてかゝるをかい潜り。

山城　丹下どの、こりや某を、なんと召さるゝ。

丹下　から竹割にぶち放すのだ。

山城　滅多に打つ事はなるまい。

丹下　勘助を刺し留めんと、組子どもに申しつけしは、身共が計らひ。甲斐と越後の仲を裂き、兩國を自滅させ、我が手に入れんと、村上どのと云ひ合せ、義清公へ合體の手始め。先づうぬから打ち放す。觀念して、それへ直れ。

山城　ハヽヽヽ、おのれが罪おのれに責めると、自身の白狀。繩かけて御前へ引く。腕廻せ。

〽又切りかゝるを引ッぱづし、身を躱してぐつと引きつけ。

晴幸どのに無禮をなせしは、此奴が仕業。

丹下　なにを。

ト早舞ひになり、切つてかゝるを、ちよつと立廻りあり。

山城　あの物音は、母をもてなす今樣の囃子。老母この家にあるうちは、立歸る勘助ならず。何にもせよ、勘助に面談なさん。

〽隈々尋ね、出でにけり。

ト思ひ入れ。また切つてかゝる立廻り。キッと見得。早舞ひにて、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、二重、前側障子立て、上下落間、板塀、上手の方、塀後に打ち壞す事。その外庭木の植込み、つくばいの手水鉢なぞよろしく、すべて奥庭の體よろしく、床の淨瑠璃にて、道具納まる。

〽心の奥庭勘助の、妻のお勝が忍び足、姑が樣子は如何にぞと、立寄ることなたに窺ふ組子、捕つたとかゝるを身をひそめ、空を打たして後袈裟、さらはさせじと双方より、討つてかゝれば身を躱し、あなたへ投げつ、こなたへ潜り、女ながらも一生懸命、左手を拂へば打ち入る右手、受け流せば手捕りにせんと、摑みかゝれば身を沈め、束を打たせてたぢ〳〵、ひるむ所を重ねかけ、切られて叶はず蜘蛛の如く、ちり〳〵ぱつと逃げ失せたり。

トこの浄瑠璃のうち、お勝、立廻り、いろ〳〵あつて、皆々は花道まで追ひ行く。奥より、唐衣、ツカ〳〵と出て

唐衣　勘助どのゝおかもじ。長追ひ無用。

〽聲かけられて、ハッとばかりに驚ろく吐胸、唐衣猶も詰め寄つて。

エ、、恨めしいお勝どの、こなさんの手を似せ筆して、兄さんを呼び寄せん爲、書捨ての反古を集め、女子どもに隱れ忍んで手習ひし、心盡しの數々も、夫に手柄をさせたいばつかり。兄さんが我強う仰しやつても、女房の執成しで、縁者一門睦まじうするのが、連れ添ふ者の常の心がけ。それになんぢや、斯く呼び寄せ、母樣まで奪ひ取つて歸らうとは、兄さんばかりか、この唐衣が爲にも、大切の母樣。例へ命は取らるゝとも　母樣はやるまい。サア、お供して行かるゝなら、連れて行て見やしやんせ。

〽柄に手をかけ詰めかくれば。

かつ　カ、、歸られるなら、冥途から。

〽はつと切るを受け流し、打てば外し、開けば切る、互ひに命を芥とも、吃らぬ太刀筋、曇らぬ刃、鍔音響く物見の亭、障子をさつと老母の顏。

ト障子を開ける。白妙、以前の形にて、窺ひ居る。

唐衣　ヤア母樣、お留めなされまするな。

かつ　ト、、留めさつしやるなア。

白妙　オ、、なんの留めやうぞ。二人ともに出かす〳〵、互ひに夫の爲を思ひ、切り結んだその刃、兩方ともに引くまいぞ。

〽なんの引かうぞ付け入るお勝、負けず劣らず唐衣が、亂れぬ太刀先、發矢と打ち合ふ中へ眞逆樣、我が身を二つの刃の上、兩の肋を突き貫き、脊へ二本の切尖は、朱に染みてぞ顯はるゝ、これはとばかり嫁娘、途方に暮れて泣き叫び、家中の騷動、その折柄、傍への塀を打ち壞ち、立歸つたる山本勘助。

トこの立廻りのうち、白妙、お勝唐衣の白刃にて脇腹を突く。母樣々々と兩人恟りこなし。これと一時に上手の板塀を打ち壞ち、勘助、立出る。下手より山城守出る。

勘助　ヤア、母人には御生害。

山城　何にもせよ、介抱々々。

〽云ふもうろ〳〵うろたへ聲、勘助涙にくれながら。

勘助　コレ母者人、武田信玄の家臣、山本勘助と云ふ子を持ちながら、何が不足でこの有様。但しは人に恨みがあつての御生害か。エヽ、云ひ甲斐なき御所存ぢやなア。
〽手負ひに力付けければ、顔振上げ、眼を見開き。
白妙　アヽ、我が子とも覚えぬ事を云ふよなア。人に恨みがあるならば、その人と刺し違へて死ぬるまで。不足があるとて命を果す母ではない。ナウ直江どの、疾に妾は輝虎公の、お手討ちになる身の上。存らへしは命の外。一國の大將の、手より敬ふ御配膳を、足にかけて蹴散らし、その時のお怒りの顔色。思へばよくも堪忍はし給ひし。下人下女の据ゆるにも、膳に向へば禮儀はある。法に背く慮外の妾。
〽車裂き牛裂きにもと、さぞ無念のお腹立ち、いつの世に忘れ給ふべき。
お心に從はず、振り切り歸る勘助。追手をかけて搦められ、母めが憎しみこの時と。
〽逆磔刑にも行はれ、嬲り殺しと聞くならば、この妾が死なぬ悔みは如何ばかり。
坊主が憎さに袈裟まで憎き世の譬へ。唐衣まで如何なる憂き目に遭ふべきと、思へば胸を裂く如く、思ひ歎いて

この死ざま。何に似たぞ。好く見よや。磔刑の罪科人。嫁娘の錆刀は、輝虎公のお仕置の。
〽大身鎗に貫かれ、死ぬるからは、惜しみはこれまで。勘助を恙なく、本國へ歸し給はれ。執成し頼む、コレ、唐衣。
〽如何に不定の世界とて、斯くも定めなきものよ。
コレ、母が生れは尾張の國、駿河の國にて人となり、いま甲斐の國に主取りなし、妾が我が身の置き所、往生所と定めしに、思ひも依らぬ越後の國の土となる。斯く定めなき人界は、彌陀の淨土も覺束ない。
〽清き眼にはら〳〵涙、母の詞の肝に泌み、勘助が嫁娘、五臟を絞るばかりなり、こなたの一間に聲あつて。
輝虎　ヤア〳〵、切なる老母の生害を、輝虎、これにて聞いたるぞ。
〽一間をさつと押し明くれば、威儀厳然と輝虎公、皆々ハッと敬へば、輝虎重ねて。
ト後の襖を明ける。輝虎、好みの拵へにて眞中に住ふ。
一方ならぬ敵國より、大切の稀れ人。殊には老母、我が領國にて斯く落命いたせし事、他國の聞えもあれば、密

かに他聞洩れざるやう。
〽方々よきにと情の詞。勘助、座を占め、泪を拂ひ。
勘助　ハア丶、死なしたり母人。殘念なる御生害。その健氣なる氣性を受け繼ぎ、我れは越後の士にはならぬ、所存の底意は南蠻鐵。いつかな變ぜぬ武道の極意。妹唐衣の縁を囮りに、母女房まで釣り寄せ、恩義をかける給仕配膳。一旦敵の祿を食めども、我れ又敵に恩義ある事も知るまじ。母の臨終に、この一條。
〽物語らんと座を構へ。
我れ十八歳にて父に別れ、母を妹の唐衣に賴み、武術の奥儀を極めんと、故郷を後に身を忍び、諸流に渉る武者修行。或る時、越路へかゝり、獅子ヶ嶽の半腹まで、攀ぢ登らんと爲す所へ。
〽傍への篠原押し分けて、山獵扮裝に弓矢携へ、轉び出でたる武士一人、悶絶なせし有樣に。
武士は互ひの情ぞと、抱きかゝへて介抱し、仔細具に。
〽承はれば、禁斷山へ遊獵せし、祟りを受けて斯くも惱み疲れしぞや。
我れは名に負ふ當國の嫡子、長尾景勝、力を添へてたび給へ。

〽精根盡きしその態を、見やれば威あつて猛き武士。虎口の難を救はれし、そも御身は何人と、尋ねあれども烏滸がましく。
〽山本の氏たる勘助は、取りも直さず武田の家臣、越後と甲斐の戰ひは、修羅の巷、三惡道。
親兄弟は敵味方。
〽鎬を削る貝鉦は、阿鼻叫喚の陣太鼓、魚鱗長蛇の繩張りとも、おさ〳〵劣らぬ軍法くらべ。
例へ味方は大安の、備へを立て向ふとも、遂には破軍の理を失ひ、士卒の駈引き俄滅して、一旦味方負くるとも、見よ〳〵今に花々しく、勝鬨を揚げん事、我れ掌の内にあり。
〽一つの眼に星をさし、跛ながらも一天四海、見下ろす高嶺の山本勘助、三國名譽の英雄なり、臨終の老母は手を上げて。
白妙　ホヽウ、出かしたり勘助。それでこそ天晴れ我が子。鶚の產みし鷹の子は、必らず魚を取ると云ふ。母の氣性を受け繼ぎしは、末頼もしき弓取りぞや。せめて別れに今一目。
〽顏見て死にたい〳〵と、這ひ廻つたる斷末魔、見る目

に哀れ彌まさる、流石我強き大將も、そゞろ涙を絞らる
る。
輝虎　ホヽウ、天晴れ勘助が母なるぞや。惜しや非業の死をさせしも、この輝虎がなせる業。冥途の門出に、ハテ、何をがな。
〽追善と、差添拔いて左の手に、髻つかみ元結際より、ふつつと切り。
家の弓矢は捨てずとも、姿は發心、名も今日より改めて、輝虎入道謙信。切つたる髮は佛にも捧げず、出家の手にも渡さず、勘助に取らする。謙信が首取つたる心にて、母の香奠、臨終の心喜ばせよ。武士の武邊は珍らしからず。汝が孝行、感じ入つての餘りぞや。
〽涙にくれてたびければ。
ト輝虎こなしあつて、切り髮渡す。勘助、こなしあつて受取つて。
勘助　ハア、、有り難き御情。
〽廣緣にひれ伏して、涙肌骨をしぼりしが。
お心に從はざる恨みを捨て、我れ〳〵へ重々の御懇切。申し上げんも詞なし。形と心は信玄に從ひ、鏑矢は射かけ申せども、せめての御恩報じには、頭ばかりは御法體の、お供は拙者が仕らん。
〽差添するりと拔き放し、髻はつしと切り拂ひ。
ト勘助、差添を拔き、髮を切り
サア、今日只今より、山本勘助入道道鬼、道は道と云ふ字にて、母を導く菩提の道。鬼は鬼と讀む字にて、鬼神をも取拉く、道鬼入道。母の冥土のこれ餞別。
〽二つの髻を手に持たせ、血にまみれし膝の上、額をつけて忍び泣き、母は苦しき目を開き。
白妙　生れ落ちてこの年まで、六ケ國を經巡りても、終に住所定まらず。丁度七十二年目に、西方淨土安樂國を、長き未來の住所と定め。
〽この二房の切り髮は。
瓔珞華鬘、幡天蓋。住家を飾る樂しみや。御大將に暇乞ひとは恐れあり。嫁よ、娘よ、聟よ、子よ。さらば〳〵。
〽さらば〳〵と兩の手に、二腰の刀引き拔けば、死出の旅、駕に乘らねど道急ぐ、越路の雪と消えにけり、人々ハツとばかりにて、哀れ彌增す直江を始め、涙の種の勘助夫婦、歸る姿に山城も、いとゞ哀れを催ふして。
山城　ヤレ待て暫し勘助どの、せめて母が追善に、信玄公へ家土産せん。聞けば村上左衛門が、甲斐の一國押留め



文政十一年八月河原崎座所演番附

して、人民士卒を惱ますと傳へ聞く。

輝虎　さもしき手段、卑怯なり。

〽謙信が軍は鉾先、鹽攻めなんどの勝負はせぬ、我が越後には海あれば。甲斐一國の鹽に事缺かせず、牛馬を以て送るべし、精力を堅うして、我れと合戰せられよと、信玄に傳へよ勘助。

〽情ある、詞をしほに身の歎き、泪滿ち來るばかりなり。

勘助　最早此まゝお暇申す。

輝虎　また再會は戰場にて。

山城　討つ討たるゝは時の運。

唐衣　その時こそはお勝さま。

かつ　ソ、、、その時引けを取る、カ、、、勘助ぢやござらぬ。

勘助　期して戰場。

輝虎　晴幸、さらば、

勘助　方々、さらば。

〽おさらばと、胸を二つに押し隔て、心殘して歸りける。

ト皆々よろしく、引張りの見得にて、木の頭。

ひやうし幕

信州川中島合戰（終り）

妹脊山婦女庭訓

解説

明和八年正月、竹本座の初演。作者は近松半二。衰へかけた人形芝居を、この作で挽回した程の名篇である。浄瑠璃中の傑作に違ひはない。歌舞伎に入つて今も絶えず上演されてゐる。

例に依つて五段物で、大序は大内、鎌足が勅勘を受けるところ。次が春日野の小松原で、久我之助と雛鳥の戀、宮越玄蕃が雛鳥へ無禮の戀慕。次が蘇我の蝦夷の館で、蝦夷の大望は露顯して自滅するが、その子の入鹿は入定と僞つて却つて謀叛を策し、大判事親子を味方に附ける件。第二段は猿澤の池で、天智の帝が采女の局の入水した猿澤の池をさまよひ給ふ件。獵師芝六と一子三作が爪黒の鹿を獵る件。次が芝六の住家で、芝六は帝を匿まひ申しあげる。禁獵の鹿を射た科で、三作は石子詰めの刑に處せられやうとするが、その掘つた所から神鏡が現はれるので、三作も赦され、帝の御眼病平癒といふ筋である。芝六實は玄上太郎、鎌足の家臣である。「十三鐘、衣懸柳」といふ角書は、この場で見せる譯なのである。

第三段は爰へ收錄した「花渡し」と「吉野川」で、第四段は「杉酒屋」から「道行戀のをだまき」で、お三輪の道行である。浄瑠璃の代表道行物として盛んに上演されるし、江戸では富本や常磐津に改調し、純江戸歌舞伎の舞踊と化して今日に傳はつてゐる事「忠信」と同じ事である。次が「三笠山」御殿である。歌舞伎では鱶七が捕手と立廻るところで終つてゐるが、浄瑠璃では橘姫が十握の御劍を奪ひ返し、鎌足が家臣と力を合せて入鹿を誅罰するまでである。第五はすべてめでたし／＼の解決。

爰へ收錄した臺本は、文政元年五月江戸中村座に上演した時のものである。その時の役割は左の通り。

定高、鱶七（中村芝翫）雛鳥（五世瀬川菊之丞）入鹿（五世松本幸四郎）大判事、求馬（三世坂東三津五郎）豆腐買お村（惣領甚六、橘姫（山下龜三郎）おたる（淺尾友藏、子太郎（二世關三十郎）お三輪（五世岩井半四郎）久我之助（七世市川團十郎）

妹脊山婦女庭訓

序　幕

太宰館花渡しの場

役名――蘇我入鹿。荒巻彌藤次。宮越玄蕃。鹿島の事觸れ。赤坂奴。春駒の女。義太夫語り。願人坊主。芥太夫。座頭。猿曳。太宰後室、定高。大判事清澄。

本舞臺、三間の中足、二重、半御簾下ろし、正面瓦燈口、純張を掛け、この左右金張り附き極彩色、上下は網代塀。櫻の立ち木、同じく吊り枝。二重に大花溜、これに八重櫻一重櫻活けある、爰に玄蕃、彌藤次、龍神卷き、大小にて控へ居る。この前に八足の上に、大帳を載せ、硯箱筆を取り居る。二重の下、上下に仕丁四人控へ、すべて太宰少貳上館の體。三味線入り管絃にて幕明く。

ト矢張りかすめて管絃。

玄蕃　イヤナニ、彌藤次どの、今日若君入鹿公、太宰の館へお入りありしは、下萬民の者どもに、御仁德を知らしめん爲。今日この所に於て、お下に住む貴賤老若の差別なく、受領下し置かれんとの御催ふし。その旨、相詰めし者どもへ、とくと申し開けられよ。

彌藤　委細承知仕つてござる。……コリヤ〳〵、仕丁ども、今日入鹿公、おめでたのお喜びに、奈良の町人諸職人商人藝能ある者に、受領下されんとの御諚申し開けるその間、相詰めたる者ども、一人づゝ呼び出せ。

ト仕丁、前へ出て

仕丁　畏まつてござります。

ト仕丁、向うへ向ひ、こなしありて

それに扣へし受領の銘々。お召しなるぞ。急いでこれへ。

皆々　ハア〳〵。

〽ハッと答へて立ち出づる、烏帽子に白丁事觸れの、後に引添ふ芥太夫、巫子は鈴振る手鉦振る、赤坂奴の寒晒し、寒の師走も何のその、一夜明くれば春駒の、情盛りや色ゆゑに、身は願人となり下がり、杖を力の目なし鳥、

まさるめでたき猿曳きも、今日の受領を我れ勝ちに、廣庭狭しとかツつくばふ。

トこの文句のうち、向うより鹿島の事觸れ、烏羯燈を持ち、赤坂奴、毛鑓を持ち、巫子、鈴を持ち、春駒、綺麗の拵らへ、その駒を持ち、義太夫語り、合羽、旅形、束木を風呂敷に澤山入れ背負ひ、願人、紺の十徳、丸裸の形、鐵錫杖を持ち、芥太夫、紙の肩衣、目隠して味噌漉胴の三味線を持ち、座頭、袴形、杖を突き、三味線を風呂敷へ入れ背負ひ、猿曳小猿を負ひ、輪鞭を持ち、皆々前後を爭ひ出て來る。仕丁はこれを見て

仕丁　ヤイ〳〵、喧ましい。鎭まれ〳〵。

ト皆々下手へ扣へる。

玄蕃　ヤイ、町人ども、ザワ〳〵申さず、一々姓名を名乘り、一藝ある者はこの所にて、何なりと仕れ。藝能の甲乙に依つて、厚く受領申しつくるぞ。

皆々　ヘイ〳〵、有り難うござりまする。

彌藤　忝なくも、今日入鹿公の御成りにつき、おのれ等に受領宛て行はんとは、有り難い、忝ないワッ三拜して、おのれ〳〵が覺えた遊藝、とくとこれにて仕れ。

皆々　そんなら、わたしどもが覺へた藝を致しましたら、御受領を下さりますかな。

彌藤　如何にも受領遣はさるる間、一々それにて姓名名乘り

玄蕃　わいらが遊藝、餘所ながら入鹿公の御上覽。

彌藤　我れ〳〵は下見の役。粗相があると免さぬぞ。

事觸　ヘイ〳〵、畏まりましてござりまする。コレ〳〵皆の衆、いま聞く通り、入鹿さまの御上覽、粗相して目玉を貰ふまいぞや。

巫子　イヤ、そりや氣遣ひさつしやるな。巫子のわしが舞うたら、ついトロ〳〵目使やるであらうぞいなう。

春駒　ア、、コレイナアお鈴どの、ソカ〳〵と其やうな事、云うたら叱られう。マア、嗜なんで居やしやんせいなア。

事觸　イヤ、斯う見たところが、女子には目のなささうなお役人さま。なんと左樣ぢやござりませぬか。

彌藤　たわけ面め。馬鹿盡さずと、早く藝當仕らぬか。

事觸　ヘイ〳〵……イヤ、わしは何も覺えました事は。

玄蕃　イヤ、ないとは云はさぬ。見るところが烏帽子白丁、其方は神職よな。神職ならば、何ゆゑ吉田へ參つて受領は受けぬ。

事觸　イヤ、拙者は鹿島の事觸れ。當年は未の歳、豐年とござつて、鹿島の御寶殿から、でつかちない光り物が飛び出し、神の扉が八文字に開け、神馬の四足に汗かいて居る。禰宜神主これを歎き、御湯を捧げて七座の物忌み。時に鹿嶋の御託宣に、氏子どもが下用櫃にしやりを切らせて、むらつぎをするであろ。一人の物でも手廻り次第。打ち殺してその日を凌げ。

〽そも〳〵質の置きやうは、先づ番頭の目を眩まし、黄昏時に置けとかや、入替へ上借り養子ッ子、鼠喰ひは雨損と、名乘つて通る時鳥、八月の大浪に、流れを防ぐ利上げの魂膽、これ第一の氣轉なり。米は下値に世並よく。住み安うしてやらうとの御託宣でござる。無上禮法薪兵衞嘉兵衞、拂ひ給へ清め給へ。

〽としやべりける。

玄蕃　さては汝は事觸れよな。向後其方が受領には、口松の差出の頭、佐平次と名乘るべし。

事觸　ヘイ〳〵、有り難うござりまする……サアコレ、お花女郎、出たり〳〵。

〽許せし後へ、ぼつとり者、駒に手綱の春駒が。

春駒　憚りながら君さまを、お祝ひ申し上げまする。

ト これより下座の地へ取り春駒の唄になり、よろしく振り。

〽嬉しめでたや、その駒見事に飾り立て、門出よし〳〵、おゝそれ〳〵ちや、それ〳〵、お葛籠駒ちや、蒲團重ねて綾錦、金襴天鵞絨繻子緋純子、蒲團ばりして小姓衆を乘せて、唄ひし小唄の合の手に。

ト 春駒、座頭を前へ連れて出て

〽とんだ所へ出過ぎ者、おつかない事知らぬも底が、蛇に怖ぢざる座頭の坊、僅か二八の顏鳥と、鼻で詠めて我れらには、丁度似合ひのいろはにほ。

〽十四稽古も聞き習ひ、琴も愚かや三味線の、胡弓はづさぬ暗闇に、つい馴れ染めの仇枕、逃がしはせじと繻子のはし〽繋ぎとめたよ〳〵、樣の馬場に、駒が勇めば指の花が散り〳〵、ちら〳〵〳〵、雨ぢやござらぬ、てんてん天氣の日傘さしかけ、よい〳〵〳〵着せかけ、アリヤ〳〵〳〵〳〵、このお庭へ飛び込み春駒、花笠開いた〳〵、御運めでたしと祝しける。

ト 春駒、座頭、振りよろしくありて納まる。

春駒　ハイ〳〵、おめでたうござりまする。

彌藤　オヽ、兩人ともに、出かす〳〵。褒美には座頭めは

四分の官、鎧の子市と名乘るべし。また女は勇める駒の名にめでて、洛中洛外走せ廻る事は勝手次第。早咲きのお花と受領下さるぞ。

春座　ハイ／＼、有り難うございまする。

ト此うち願人、前へ出て

願人　ハイ／＼、どうぞ私しにも、受領なされて下さりませ。

玄蕃　コリヤ／＼、汝、所化ならば、上人和尙になりたい望みか。

願人　イエ／＼、拙僧は願人坊主、寺號をお許し下さりませ。

玄蕃　ムウ。願人とは、何の宗旨ぢや。

願人　さればでござります。愚僧が宗旨は、八宗九宗丸呑みに、酒無尼如來、鼻の下喰殿の建立。

〽エ、、どうか如來よう、ヤレ／＼／＼／＼ちよぼくれちよんがれ。

そも／＼わつちが、すつぺらぽんの、のつぺらぽんの、坊主になつたる謂れ因緣、聞いてもくんねえ。しかも十四のその春始めて、一軒隣りのその又隣りの、一竹太竹太右衞門どんの、乳母さんとちよぼくり、色のいの字の味を覺えて、裏のかみさん、向うの小母さん、お松さんにお竹さん、椎茸さんに干瓢さんと、さかり次第におててん枕で、やつた揚句が、女郎買ひに出かけて、ヤレヤレ畜生め、さうだとやらかせ、手練手管にからりかゝつて、内にや片時おいどが座らず、船ぢや危ないお駕籠で來なせ、なんのかのとて深切ごかし、いよいよ首たけ嵌つてのめつてだりむくり、それ／＼その時の大洒落に、中山踊はどうぢやいなア。

トこれより下座へ取り、中山踊一くさりありて

斯くの通りでござりまする。

ト錫杖にて、よろしくありて

〽踊りしまへば宮越荒巻、互ひに顏を見合せて。

玄蕃　さて、しやべつたりな、づく入め。向後は其方を、ひよろ高山道樂寺と、寺號山號お許しなさるゝぞ。

ト赤坂奴、鎗を振り込み振りにかゝる。

〽やれ有り難しと身退く、後へひよこすか素奴が、振つて振り出す花の鎗、先退けろ／＼、金紋先箱伊達道具、臺傘立て傘大鳥毛、振り込め／＼、お供を揃へて花の嫁入り、夜は見事な日でり雨、さつさ濡れて色増す色直し、さつさよやまかせ、花の鎗、明日はお里へ二人の花

鎗、さつさいそ〳〵、どつこい、浮き〳〵、どつこい、面白の鳥毛の拍子なり。

ト奴よろしく振りありて納まる。

彌藤　ムム。われは赤坂奴よな。今日よりちよば一播磐守と受領を下さるぞ。

奴　ハイ〳〵、有り難うござります。

玄蕃　その後の者ども、一人々々は面倒だ。一緒にズツと出い。

皆々　ヘイ〳〵。

ト皆々出る。

玄蕃　して、われらは何藝あるか。一々に申し立てい。

巫子　ハイ〳〵、私しは雀の宮の巫子、神樂物より外、覺えた事はござりませぬ。

彌藤　して、次に扣へしは何者ぢや。

芥太　私しは三右衛門と申す素人淨瑠璃。

義太　ハイ、我れらは淨瑠璃の三味線彈き、ハイ、三糸と申しまする。

彌藤　なんと申す。三糸……ムウ。三四十二にしては老けて見える。

玄蕃　して、見苦しい小猿負うた、われはなんだ。

猿曳　ヘイ、私しは京三界を駈け廻します、猿廻し與次郎と申す者の弟にて、彌次郎三海と申しまする。ハイ、猿廻しでござりまする。

玄蕃　お聞きなされ。斯やうでござりまするが……あれに居る三糸とやらに三味線彈かせ、彼れに淨瑠璃語らせ、猿曳に猿を舞はせ、堀川の段は如何でござらうな。

彌藤　イヤ、これは一段な事でござる。

玄蕃　コリヤ、いま汝等が持ち前を藝と致し、猿を早く舞はせい〳〵。

芥太　皆聞かしやつたか。貴樣は三糸、我れらは語る。猿曳どの、お前は大儀ながら、猿を舞はさにやなるまい。

猿曳　そんなら舞はせます。われも精一ぱい舞うてくれよ。

義太　さらば調べを合はさうか。

ト素人淨瑠璃、風呂敷の内より堀川の床本を出す。義太夫は味噌漉の三味線を合す。猿廻しば前へ出で、小猿を前へ出し、綱をゆるめる思ひ入れありて、鞭を手繰る。巫子は思ひ入れありて前へ出る。

巫子　ドレ、わたしが口上を申しまぜう……エ、ヘン、只今お好みにござまして、この所にて相勤めまする淨瑠璃

名題、猿廻門出諷、堀川の段、相勤めまする太夫、酒木呑太夫。三味線、鶴澤三糸。猿廻し人形出遣ひ、市川彌次郎三猿。いよ〳〵この所に堀川の段始まり。その爲口上左様……チョン〳〵〳〵。

トこれより三糸、語る。芥太夫三味線、猿廻し、猿を使ひ、振りにかゝり、猿曳よろしく振りありて納まる。

兩人　ヤンヤ〳〵。

ト中啓にて煽ぎ立てる。皆々これにて後へ扣へる。

玄蕃　との上は巫子の女、われ一人、何なりと仕れ。

彌藤　然し、有り觸れた鈴の段、面白うないぞ。

玄蕃　なんぞ新らしう致せ。どうぢや。

巫子　ハイ〳〵。そんなら、これから御覽に入れませう。

ト臨月十月の間、子がへりを一月々々變り替に認めたるを、段々に變へて見せる事ありて納まる。此うち誂らへの鳴り物。

玄蕃　ハ、、、ハテ、馬鹿々々しき藝ぢやな。併し、一一大儀であつた。太夫になつた男。われは猿の淨瑠璃語つたる縁に依り、猿丸太夫と名乘れ。また三味線彈いた者は、太棹の縁に象り、由側と申す苗字を下さる。有り難くお受け申せ。

彌藤　猿を廻はせし男は、柿の種有と受領申しつくるぞ。

皆々　ヘイ〳〵、有り難うござりまする。

事觸　時に何れも、もうお暇申さうではござらぬか。

玄蕃　オ、サ、勝手次第に、早く立て〳〵。

春駒　左やうなれば、お暇申しまする。

皆々　サア〳〵、ござれ〳〵。

〽何れも庭前立ち出づる。

ト受領の銘々、よろしく橋がゝりへ入る。玄蕃彌藤次は奥へ入る。

〽召しに應じて大判司清澄、袴の襞も角菱あり、不和なる仲の定高が邸、互ひにそれと白書院、目禮もせずつッと通り。

ト中の舞になり、向うより大判司清澄、衣裳上下、大小にて、出て來り

清澄　入鹿公の御座の間へ、誰ぞ案内仕れ。

〽云ひ捨て行かんとす、定高は聲かけ。

ト此うち上手より定高、襠補衣裳、大小差し、ツカツカと出て來り

定高　アヽイヤ、先づ暫らく〳〵……珍らしや大判司どの、

太宰の少弐が跡目を預かる妾が屋敷、挨拶もなくお通りは、女と思ひ侮つてか。但し、武家の禮儀御存じなくば、及ばずながら、御傳授申さうか。

〽詞の非太刀襠裲さばき、騒がぬ清澄空うそふき。

清澄　小弐存生の砌りより、領の遺恨に依り、この屋敷の内へは今日まで、足踏みもせぬ大判司、入鹿公のお召しに依つて、罷り越したは、上の仰せを重んずるゆゑ。女童に用はない。挨拶する口は持たぬわえ。

定高　イヤ、それなれば猶以て。今日入鹿さまお成りなれば、御館も同然。大判司にお疑ひの事ありて、この定高に吟味いたせとの御諚。この詮議済まぬうちは、一寸も御前へは叶ひませぬ。お扣へなされ、清澄どの。

清澄　ムウ。ハテ、珍らしき事を聞く。御詮議の筋あらば、検非違使に仰せつけられ、拷問あらんに何の御遠慮。元よりお疑ひ蒙むるべき覺えなし。生ぬるき女の吟味、受けるやうな清澄でない。何を馬鹿た事を。御身見事、詮議してお見やるか。

定高　オヽ、女でこそあれ太宰の後家。この定高が、キッと詮議して見せう。

清澄　イヤ、猪口才な。其處退いて通せ。

定高　なりませぬ。

〽と根に持つ遺恨、互ひに折れぬ老木の柳。

ト大判司、行くを、定高、支へる。立廻り。兩人キッとなる。この時、奥にて

入鹿　喧ましい。兩人、静まり居らう。

呼び　出御。

〽聲に二人も飛びしさり、恐れ入つたるばかりなり。

トこれにて兩人、立別れ、上に定高、下に大判司、控へる。三味線入り下がり葉、笛の入りし音樂を冠せたる鳴り物になり、正面の御簾、静かに巻き上げる。内に褥の上に入鹿大臣、御忌衣、檜扇持ち、上の方に竹の花活けに櫻の枝を二本入れたるを直し、下の花筒に櫻枝一本入れ直しある。

〽入鹿の大臣は寛然と、上段の褥より遥かに見下ろし。

入鹿　ヤア、大判司、未明より出仕せよと、使者を立つるに甚だの遅參。アレ見よ、今日は丑の上刻、柳星南に出て北にたんだくするは、日頃の大望叶ふ吉星。それ程の事知らぬ大判司でなし。但し、入鹿に仕へる事が不足と思ひ、身を退かん下心か。緩怠至極。

〽緩怠なりときめつければ。

清澄　こは御諚とも覺えず。今一天四海平穩にて、皷腹の世とは云ひながら、未だ殘黨潜み居て、皇都を窺ふ者ある由。我れらが領地紀伊の國は、西國南海の咽喉首にて、大切の絶所。弓を張り矢尻を磨くに暇なければ、思はざる延參。その上忠臣第一の大判司に、何事のお疑ひ。

入鹿　オヽ、その仔細といつぱ、先君の思ひ者、采女の局を、我が室と定めんと、行くへを尋ね求むるところ、猿澤の池へ入水せし由。如何にしても合點ゆかず、察するところ采女が在所は、大判司、其方が隱して居らうがな。

〽思ひがけたきお疑ひに、清澄不審の眉を皺め。

清澄　こは存じ依らざる儀。采女の御事は、猿澤の池に投身ありしとは、誰れ知らぬ者御座なきに、我れらが行くへ存せしとは、何を以ての仰せなるや。君の御諚とも覺えず、聊か以て覺えござりませぬ。

入鹿　ヤア、とぼけな。汝が悴久我之助、采女が附け人ならずや。その親たる其方なれば、よも知らぬとは云はれまじ。サア、眞直に白狀せよ。陳ずるに於ては、計らふべき旨あり。ドゞどうぢや。

定高　お聞きありしか大判司どの。妾に仰せつけられし、詮議とはこの事。サア、覺えがあらば申されよ。

〽と云はせも果てず。

清澄　默り召され。女の差出る所でない。控へてござれ。

定高　イヽヤ、御諚を受けての詮議なれば、返答の有無に依つて、その座はちつとも立たしませぬ。

清澄　見事詮議して見るかよ。

定高　如何にも詮議して見せう。

清澄　見るぞよ。

定高　見せう。

清澄　サア。

定高　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト兩人、ツとなる。

〽膝立て直し詰め寄つて、双方挑み戰うたり、入鹿大臣大口明き。

入鹿　ハヽヽヽ、巧んだり拵らへたり。定高が領分、大和の妹山、清澄が領地、紀伊國に脊山、隣國堺の論に依り、互ひに確執せしとは表の見せかけ。内々には申し合せ、密かに古主へ心を通はす汝等と、我が眼力に違ひはせじ。

されば采女は兩家のうちに、隱し置かんも知れざるゆゑ、太判司が詮議申しつけた定高。コリヤ、其方にも、この疑ひはかゝるぞよ。

定高　これは又、君の御諚とも覺えませぬ。夫小貳よりも、仲惡しき大判司どの、何ゆゑ申し合さうやうもなし。私しにまでお疑ひは、恐れながら我が君の、お眼鏡違ひと存じまする。

入鹿　ヤア、云ふな女め。さほど音信不通の仲なるに、大判司が悴久我之助と、其方が娘雛鳥と、密通いたし居るは如何に。知るまいと思ふか。悴どもが緣に繋がれたる汝等なれば、兩方ともに吟味は遁がれぬ。なんと膽にこたへやうがな。

〽飽くまで邪智の一言に、何思ひけん大判司、席を蹴立てゝ行かんとす、すかさず定高が刀の鐺むんずと取り。

ト大判司、思ひ入れありて、刀を取つて立ちかゝる。

定高　ヤレ待たれよ清澄どの、血相變へて、こりや何處へ。

清澄　何處とは親々が、不和なる仲を存じながら、忍び逢ふ悴が不所存。引ッ捕へて吟味せねば、子供が緣を幸ひに、和睦せしと云はれては、家の恥辱となる。邪魔せずと、其處放されよ。

定高　そりや、此方も同じ事。且は武士の意地、今さら仲が直りたいばつかりに、娘に不義事させしと、世上の人にさみせられては、過ぎ行き給ふ夫へ立たぬ。こなさんより、妾が先へ。

ト大小を取つて同じく立ち上がる。

〽驅け出す二人をはつたと睨め。

入鹿　ヤレ待て。私しの趣意に立ち騒ぐ尾籠な奴、靜まり居らう。

兩人　ハア。

入鹿　汝等が悴の吟味はせぬ。我が尋ぬるは采女の在所、いづれからなりと早く。云へ。なんと〳〵。

清澄　イヽヤ、悴が性根はいざ知らず。采女どのゝ儀は曾て存ぜず。我が詞に僞りあらば、弓矢神の御罰を受けん。しるしは即ち、先ツこの通り。

〽刀すらりと拔き放し、丁々と金打し。

ト大判司、刀を拔き、金打する事。

サ、この上にもお疑ひあらば、如何程の拷問なりとも、お心任せに遊ばされませう。

定高　我れらとても小貳が妻、家に替へても采女どのは隱

まひませぬ、水責火責に逢ふとても、知らぬ事は存じませぬ。
〽詞するどに云ひ放つ。
入鹿　ムウ。さすらば采女が詮議は追つて。先づ汝等が面晴れなれば、匿まはぬと云ふ潔白に、定高は雛鳥を館へ上げよ。
定高　エヽ。
入鹿　また大判司も、覚えなきに相違なくば、久我之助を今日より、我が目通りへ出勤させよ。キッとこの旨、兩人ともに心得よ。
〽何がな探る當座の難題、二人は胸にぎつくりと、いらへも暫しなりしが、やゝあつて詞を揃へ。
定高　斯く有り難き御諚を蒙むり
清澄　互の子供、違背いたさば。
入鹿　オヽ、云ふにや及ぶ。
〽傍へなる、花活け置く櫻の一枝押取り。
得心すれば榮える花、背くに於ては忽ちに、麿が威勢の嵐に當て、先ッこの通り。
〽欄に、はつしと打ち折り、落花微塵、はつとばかりに親々の、心も共に散亂せり。

ト入鹿、思ひ入れありて、下の方に活けたる櫻を檜扇にて打つ。櫻の花、バラ〳〵と散る。大判司定高、ハッと思ひ入れ。
〽猶もゆるまぬ大音聲。
入鹿　ヤア〳〵玄蕃、早參れ。
玄蕃　ハヽア。
ト下手より以前の玄蕃出て、下に平伏する。
入鹿　其方は、これなる百里照の目鏡を持て、香具山の絶頂より、キッと遠見仕れ。
ト早舞ひにて玄蕃、向うへ目鏡持ち一散に入る。
コリヤ〳〵兩人よつく聞け。もし少しでも容赦いたさば、兩家は沒收。從類までも絶やするぞ。性根を定め、早く行け。
ト上の方の筒の櫻二本取つて、兩人へ差出す。
定高　御諚の趣き、雛鳥に申し聞かして、片時も早く御殿へ上げるでござりませう。
清澄　この清澄も久我之助を、君へ家臣に召連れん。
入鹿　急げや兩人。
清定　ハヽア。
〽急き立つ上意に親々の、思ひは千々の胸の内、見せぬ

表の忠と義を、張りつめし氣のたゆみなく、別れてこそは出で丶行く。

ト下がり葉をかむせ、三重、双方見合つて　ひやうし幕

二幕目　吉野川の場

役名——太宰後室、定高。同娘、雛鳥。腰元、小菊。同、桔梗。久我之助淸船。大判事淸澄。

本舞臺、眞中、遠見に吉野川の躰、三段の浪手摺り。舞臺前まで川中の模樣、上の方、一間の屋體、中足、塗り骨障子たて切り、手水鉢、下の方は九尺常足の屋體、障子をたて、櫻の立ち木、上の屋體の前に柏の立ち木、日覆より、一面櫻の吊り枝、すべて、紀伊の國大和妹山脊山、吉野川の飾り附け、かすめたる浪の音、謌、鶯の聲にて、幕明く。

〽古への神代の昔山跡の、國は都の始めにて、妹脊の始め山々の、中を流るゝ吉野川、塵も芥も花の山、實に世に遊ぶ歌人の、言の葉草の捨て所、妹山は太宰の小貳國人の領地にて、川へ見越しの下館。

〽脊山の方は、大判司淸澄の領內、子息淸船いつぞやより、爰に勘氣の山住居、伴ふ者は巢立ち鳥、我と我れと只二つ、經讀み鳥の音も澄みて、心細くも哀れなり。

〽頃は彌生の初めつ方、こなたの亭には雛鳥の、氣を慰めの雛祭り、桃の節句の供へ物、蔽の强飯腰元の、小菊桔梗が配膳の、腰もすうわり春風の、柳の楊枝はし近く。

ト此うち、下の屋臺の障子引拔き、正面にいろ／＼雛を飾りし段、種々の雛の道具飾り、爰に雛鳥、振り袖衣裳。小菊、桔梗、腰元の形にて、雛の膳を供へて、

よろしくあつて

桔梗　ナウ小菊どの、いつものお雛は御殿でお祀りなさるれど、お姬樣のおしつらひで、この山岸の假座敷、谷川を見晴らし、櫻の見飽き。一入お氣が晴れて好からうなう。こちらも追ツつけ好い殿御持つたら、常住あのやうに引付いて居たら、嬉しからうわいの。

小菊　桔梗どのゝ何云やるやら。なんぼ女夫並んで居ても、あのやうに行儀に畏まつてばかり居て、手を握る事さへならぬ、窮屈な契りは嫌。肝心の濡る時は、離れ／＼の

箱の内。思ひの絶える間はあるまいわいの。

〽仇口々も雛鳥の、胸にあたりの人目せく、辛い戀路のその中に、親と親とは昔より、御仲不和の關となり、逢ふ事さへも片糸の、結ぼれ解けぬ我が思ひ、戀し床しい清船さま〽この山の彼方にと、聞いたを便り母樣へ。

雛鳥　お願ひ申してこの假家。お顏が見たさの出養生。妾までは來れども、山と山とが領分の、境の川に隔てられ、物云ひ交す事さへも、ならぬ我が身が儘ならぬ。今はなか〳〵思ひの種。

〽いつそ隔てし戀詫ぶる、逢はれぬ昔がましぞかしと、切なる思ひかき口說き、歎けば共に腰元ども。

桔梗　お道理でござります。ほんに、ひよんな色事で、隣同士の紀伊國大和、御領分の競り合ひで、お二人の親御樣は拗れ〳〵。雛鳥さまと久我さまの、妹背の仲を引分くる妹山背山。船も筏も御法度で、たつたこの川一つ、ツイ渡られさうなもの。小菊どの、瀨踏みして見やらぬか。

小菊　オヽ、滅相な。この谷川の逆落し、紀州浦へ一時に、流れて行たら鱶の餌食。シタガ、申し、雛鳥さま、あなたの御病氣お案じなされ、この假屋へ出養生、さしなさつたは餘所ながら、久我さまにあなたを逢はす、後室樣の粹なお裁き。女夫にして下さりませと、直にお願ひ遊ばしたら、よもや嫌とは岩橋の、渡る事こそならずとも、せめて遠目にお姿を。

〽障子くわらりと椽端に、覗きこぼるゝ腰元ども。

ト小菊、立つて屋體上手の障子を明ける。

〽久我之助は鬱々と、父の行く末身の上を、守らせ給へと心中に、念悲觀音の經机、案じ入つたる顏容。

ト此うち、上の屋體の障子引拔く。內に久我之助、羽織、袴の形。若衆かづら、經机に向ひ居る。

〽手に取るやうに。

桔梗　アレ〳〵、机に凭れて久我さまの、物思はしいお顏持ち。

小菊　ほんに、それ〳〵、お癪がな起りつらん。エヽ、お側へ行きたい。

兩人　コレ、妾に居るわいなア。

〽云へど招けど谷川の、漲る音に紛れてや、聞えぬ辛さ。

小菊　エヽ、辛氣。こちらが思ふやうにもない。コレ、此方を向いて見たがよい。



五世瀬川菊之丞の雛鳥

七世市川團十郎の久我之助

兩人 オヽイ、久我さまいなう。
ト向うへ思ひ入れ。
〽あせるはお側に氣の付き〲。
桔梗 ほんに、それよ。口で云はれぬ、心のたけ。
〽兼ねて認め奥山の、鹿の卷筆封じ文、戀し小石に括り添へ、女の念の通ぜよと、祈願を籠めて打つ礫、からりと川へ落つ瀧津、浪にせかれて流れ行く。
ト此うち、雛鳥、封じ文を出す。腰元、下へ下り、小石を取つてこれに結びつけて、思ひ入れあつて、川の中へ投げ込む。浪の音にて、石流るゝ。
雛鳥 エヽ、どんな。心の念は屆いても、女力の屆かねば、思うたばかり片便り。返事を松浦佐用姫の。
〽石になるともなりたいと、ひれ伏す山の甲斐もなき、
〽久我之助川に目を付け。
久我 何所よりか水中に、打つたる石は重けれど、逆卷く水の勢ひに、沈みもやらず流るゝは、重き君も入鹿と云ふ、逆臣の水の勢ひには、敵對がたき時代の習ひ。それを知つて敵に從ふ、父大判司どのゝ心のうち。
〽善か惡かを三つ柏。
〽水に沈めば願ひ叶はず、浮む時は願ひ成就、吉野を假の御秡川、太神宮へ朝拜せんと、柏の若葉摘み取つて、谷を傳ひに水の面。
ト久我之助、屋體より下りて、柏の葉を取つて、思ひ入れあつて川へ流す。
〽見やる女中が。
小菊 申し〲、今の小石が屆いたか。久我さまが川へ下りなさるゝわいな。
桔梗 あの岩角の折り曲りが、川幅がいつち狹い。幸ひの好い逢瀬でござりまするぞえ。
〽云ふに嬉しさ雛鳥も、飛び立つばかり振り袖の、裾もほら〲坂道を、折から風に散る花の、櫻が中の立ち姿、しどけ難所もいとひなく。
ト此うち、腰元兩人、介抱して、雛鳥、二重より下へ下りて來て
雛鳥 ナウ久我さまか。お懷かしうござりまする。
〽云ふに思はず淸船も。
久我 雛鳥、無事で。
〽顏と顏、見合すばかり遠間の〽心ばかりが抱き合ひ、詮方涙先立てり。
雛鳥 申し、淸船さま、わしやお前に逢ひたさに、病氣と

云ひ立て、爰までは來て居れど、親の許さぬ中垣に、忍んで通ふ事叶はず。
〽女雛男雛も、年に一度は七夕の〽逢瀬はあるに此やうに。
お顔見ながら添ふ事のならぬはなんの報いぞや、妹脊の山の中を隔つ、吉野の川に鵲の。
〽〽橋はないかと口說き事。
〽開く淸船も揖あらば、早渡りたき床しさは、胸に包んで。
久我　道理〱。我れも心は飛び立てど、この川の法度嚴しきは、親々の不和ばかりでない。いま入鹿世を取つて、君臣上下心々。隣國近邊と雖も、親しみあれば徒黨の企てあらんかと、互ひに通路を禁しめて、船を留めたることの川は、領分を分くる關所も同然。命だにあるならば、また逢ふ事もあるべきぞ。いま流したる水の柏、浪に揉まれて浮みしは、心の願ひ叶ふ知らせ。入鹿が掟嚴しければ、我れも世上を憚つて、この山奥の隱れ住み。
〽心の儘に鶯の、聲は聞けとも籠鳥の、雲井を慕ふ身の上を。
思ひやられよ、雛鳥どの。

〽儘ならぬ世を恨み泣き。
雛鳥　ナウ、又逢ふ事もあらうとは、別るゝ時の捨て詞。例へ未來の父樣に、御勘當請くるとも、わたしやお前の女房ぢや。とても叶はぬ浮世なら、法度を破つてこの川の、早瀨の浪もいとふまじ。何國如何なる方へなと、連れて退いて下さんせ。わたしは其所へ參りまする。
〽既に飛び込み川岸に、あはて驚ろき止むる腰元。
ト雛鳥、川の方へ行くを腰元兩人、留める。
雛鳥　イヤ〱、放しやれ〱。
〽泣き入る娘。
久我　ヤレ短慮なり雛鳥。山川のこの早瀨、水練得たる者だに、渡り難きこの難所。忽ち命を失ふのみか、母後室に歎きをかけ、我れにもいよ〱憎しみかゝる。科に科を重ぬる道理。必らず早まり召さるゝな。
〽制する詞一筋に、思ひ詰めたる女氣も、今さら弱る折こそあれ。
ト上下にてよろしく思ひ入れ。この時、東の揚げ幕にて
呼び　大判司淸澄さまお入り。
〽ハッと驚ろく久我之助、歸るを名殘り。

〽押留むるも、我が身を我が身の儘ならず。

雛鳥　コレナウ待つて、下さりませ。

〽これなう待ての聲ばかり。

ト この時又、揚げ幕にて

呼び　後室様の御出で。

〽告ぐる下部に詮方も、なく〳〵庵の　ち惜れ、登る坂さへ別れ路は、力難所を行く心地、空に知れぬ花曇り。

ト 此うち、久我之助は屋體に入り、障子たて切り、雛鳥も腰元兩人に介抱され、同じく屋體へ入り、障子締める。

〽花を歩めど武士の　心の蟻蛆刀して、削るが如き物思ひ、思ひ逢瀬の中を裂く　川邊傳ひに大判司清澄。

ト 東の口より　大判司　上下大小　櫻の枝を襟に差し、思案の體にて出る。

〽こなたの岸より太宰の後室、定高にそれと道分けの、石と意地とを向ひ合ふ、川を隔てゝ。

ト 此うち、揚げ幕より、定高、襠補衣裳、後室の形、大小差し、櫻の枝を持ちて出て來り、花道好き所にて、思ひ入れあつて

定高　大判司さま、お役目御苦勞に存じまする。

〽腰襠裲をかい取りの、夫の魂ひ放さぬ式禮。

ト 大判司、立ちとまり

〽清澄も一揖し。

清澄　早かりし定高どの、御前を下がるも一時。來る所も一つなれども　この背山は身が領分。妹山は其許の御支配。川向ひの喧嘩とやら。睨み合つて日を送るこの年月。心解けるか解けぬかは、今日の役目の落去次第。二つ一つの嚴命。うろたへた裁き召さるゝな。

〽眼尻くしやつく茨道〽脇へかはして。

定高　仰せの通り、大鹿さまの御諚意は、お互ひに子供の身の上。受合つては歸りながら、身腹は分けても心は別別。もしあつと申さぬ時は、マア、お前には、どうせうと思し召しますぞ。

清澄　ハテ、知れた事。御前で承つた通り、首打ち放す分の事サ。不所存な悴は、あつて益なく、なうて事缺かず。身の內の腐りは、削いで捨てるが後の養生。畢竟親の子のと名を付けるは人間の私し。天地から見る時は、同じ世間に湧いた蟲。別に不便とは存じ申さぬ。

定高　ハテ、きつい思し切り。私しは又、いかう料簡が違ひます。女子の未練な心からは、我が子が可愛うてなり



三世坂東三津五郎の大判事

ませぬ。その代りお前の御子息様の事は、眞實何とも存じませぬ。只大切なは此方の娘。忝ない入鹿さまのお聲のかゝつた身の幸ひ。例へどう申さうとも、母が勧めて入内させ、お后様と多くの人に、敬ひかしづかさうと思へば、此やうな嬉しい事はござりませぬ。ホヽヽヽ。

〽と空笑ひ。

清澄　ムウ。して又得心せぬ時は。

定高　ハテ、そりやモウ是非に及ばぬ。枝振り悪い櫻木は、切つて接木を致さねば、太宰の家が立ちませぬ。

清澄　オヽ、さうなくては叶ふまい。此方の悴とても、得心すれば身の出世。榮花を咲かすこの一枝。川へ流すが知らせの返答。盛りながらに流るゝは吉左右。花を散らして枝ばかり流るゝならば、悴が絶命と思はれよ。

定高　如何にも。此方もこの一枝、娘の命生花を、散らさぬやうに致しませう。

清澄　オヽ、サ。今一時が互ひの瀬越し。この國境は生死の界。返答の善悪に依つて、遺恨に遺恨を重ぬるか。

定高　サア、これまでの意趣を流して、仲吉野川と落ち合ふか。

清澄　先づそれまでは双方の領分。

定高　お裁きを待つて居りまする。

清澄　オヽ。

〽詞そばだつ親と親〽山と〽大和路別れても〽替らぬ紀の路恩愛の〽胸は霞に埋れし、庵の内に別れ入る。

ト双方とも本舞臺に來り、清澄は上の屋體の内に入る。

〽立派に云ひは放しても、定かに知らぬ子の心、覺束なくも呼子鳥。

定高　娘、娘。

〽と谷の戸に、訪ふ初音雛鳥も、母の機嫌をさし足に。

ト此うち下の障子引抜き、雛鳥、腰元、出て思ひ入れ。

雛鳥　母様、ようぞ。今日は、おめでたう存じまする。

〽武家の行儀の三つ指に、堅い程猶親子の親しみ。

ト定高、二重へ住ひ、よろしく思ひ入れあつて

定高　オヽ、好う飾りが出來ました。今日は其方の顔持ちも、よささうで猶めでたい。母も祝うて献上のこの花、供へてたも……幾つになつても雛祭りは嬉しいもの。女子ども、何なりと娘が氣に合ふ遊びをして、隨分と勇めてたも。

〽いつに勝れし後室の、機嫌は訴訟の好い出汐。

桔梗　申し雛鳥さま、ソレ、今のをちやつと。

小菊　乘り出して御覽じませ。

〽腰元に、腰押されても兎や角と、云ひそゝくれの縺れ髮。

定高　イヤナウ雛鳥、脊丈伸びた娘を、親の側に引きつけて置くは、結句病の種。それで急に思案を極め、其方に好い殿御を持たす。嫁入りさすが、嬉しいか。

雛鳥　エヽ。

定高　ハテ、氣遣ひしやんな。可愛い娘の一生を任す夫。其方の氣に入らぬ男を、なんの母が持たさうぞ。ナア腰元ども。

小菊　ハイ〳〵、左樣でござりまする。お氣の通つた後室樣。

桔梗　それ〳〵、嫁入りの先は大方、今のナ、焦るゝ

兩人　君でござりませうわいなア。

〽押推當ども得手勝手、誰れにか嫁を組み紐に、胸は眞紅の塞がる箱、取出し。

ト定高、誂らへの箱を取つて來り

定高　妹脊を並ぶる雛の日は、嫁入りの吉日。この箱の主は極まる殿御。雛の御前で夫定め。コレ、其方の夫と云ふは、入鹿大臣さまぢやわいの。

雛鳥　エヽ。そんならわたしを、嫁入りさすと仰しやつたは。

定高　オヽ、太宰の小貳が娘雛鳥、美人の聞えお聞きに達し、入內させよと有り難い御諚。

雛鳥　エヽ。

〽ハッと恟りうろ〳〵と、詞は涙くむばかり。

定高　オヽ、膽が潰れる筈。夫と申すも恐れ多い、入鹿の君を聟に取る家の面目。日本國にこの上のない、嫁入りの隨一。果報な娘。此やうなめでたい事があるものか。ナア、女子ども。

兩人　ハイ〳〵、おめでたいと申しませうか。いつそ亂騷ぎでござりまする。

〽工合ひ違ひの嫁入りに、菊も桔梗も投げ首の、二人は小腹立つて行く。

ト腰元兩人、思ひ入れあつて、奥へ入る。定高、思ひ入れ。

〽母の心もいろ〳〵に、咲き分けの枝差出し。

ト花活けの櫻を取つて來り

定高　親の許さぬ云ひ交し、いたづらは叱つて返らず。一旦思ひ染めた男、何時までも立て通すが女の操、破りやとは云はぬが、貞女の立てやうがありさうなもの。とつくりとよう思案しや。この花は八重一重、互ひに不和なる親々の、心揃はぬ二つの花、一つ枝に取結び、切り放すに放されぬ悪縁の仇花。いま其方の心次第で、當時入鹿大臣の、深山颪に吹き散らされ、久我之助は腹を切らねばならぬぞや。雛鳥と縁を切つて、入鹿さまへ降參すれば、淸舟も命を助ける、知らせは川へ流す櫻。散るか散らぬが身の納まり。時に從ひ風に靡き、君が手活けの花になれば、八重一重も恙なう、九重の内にかしづかるる互ひの幸ひ。戀しと思ふ久我之助、助けうと殺さうと、今の返事のたつた一つ。貞女の立てやう、サア〳〵見たい。

〽戀も情も辨まへて、義理の柵せきとめても、涙せき上げせき上げながら。

雛鳥　母樣、段々聞き分けました。

〽お詞は背きませぬ。

定高　そんなら得心して、入内してたもるか。

雛鳥　アイ……アイ。

定高　オ、嬉しや。出かしやつた〳〵。それでこそ貞女なり。馴れぬ雲井の宮仕へ、武家の娘と笑はれな。今日より内裏上﨟の、髪も改めすべらかし。祝うて母が、結び直してやりませう。

〽いそ〳〵立ちは立ちながら、娘の心思ひやり、別れの櫛の果敢なさを、解きほどかれぬ憂き思ひ。

トよろしく思ひ入れ、障子を立てる。

〽重き脊山の閾の内、父が前に謹んで。

ト此うち、上の障子引抜き、久我之助、水上下、死装束の形。大判司淸澄、三方に九寸五分載せ、持ち出て、兩人思ひ入れ。

久我　久我之助が心底、聞し召し分けられ、切腹御赦免下さるゝ事、身に取つて如何ばかり、大慶至極。

〽と手を突けば、默然たる大判司、稍打うるむ眼を開き。

淸澄　今朝入鹿大臣、この大判司を召し出し、先帝寵愛の采女、身を投げ死したりとは僞り、其方が伜久我之助、人知れぬ方へ落しやりしに極まれば、必定汝が方に匿まひあるべしとの難題。元來知らぬ大判司、よく〳〵思へば、采女の御難を避けん爲、猿澤の池に入水の體にも



市川團之助の定高

てなして、密かに落し參らせしは、なか〳〵久我之助が智惠ではない。鎌足公の指圖を受けての計らひと、知つたは身も今日が初め。親にも隱し包みしは、大事を洩らさぬ心の金打。若輩者には神妙の仕方。ハ、ア、出かしたりと思ふにつけ、邪智深き入鹿、久我之助が降參せば、命を助けん連れ來れと、情の詞は釣り寄せて、拷問にかけん謀り事。

〽責め殺さるゝ苦しみより、切腹さすれば、釆女の詮議の根を絕つ大功。

天下の主の御爲には、ナニ伜の一人など。

〽雀に生ふる草一本、引拔くよりも瑣細な事と、涙一滴こぼさぬは、武士の表〽子の可愛うない者が、凡そ生あるものにあらうか。

餘り健氣な子に恥ぢて、親が介錯してくれる。侍ひの綺羅を飾り、嚴めしく横たへし、大小、伜が首切る刀とは。

〽五十年來知らざりしと、老の悔みに淸船も、親の慈悲心有り難涙

久我　命二つあるならば、君には死して忠義を立て、父には生きて養育の、御恩を送り申さんに、今生の殘念、これ一つ。

〽顏を見上げ見下ろして、わつと平伏す親子の誠。

ト兩人、愁ひの思ひ入れよろしく、此うち、下の屋體障子取る。

〽こなたの亭には母後室。

定高　サア〳〵、めでたい。其方の名の雛鳥を、其まゝの內裏雛。裝束の付けやうも、この女雛と見合せて、サアサア、早う。

ト女雛を取つて出す。

〽恨めし氣に打守り。

雛鳥　女夫一對いつまでも、添ひ遂げるこそ雛の德。思ふお人に引離され、何樂しみの女御后。夾の絹の十二單衣。雛の姿も恨めしい。

〽取つて打ちつけ緣板に、ころりと落ちし女雛の首、驚ろく母の胸板に、ひつしと極まる娘の命、包めどせきくるはら〳〵涙。

ト此うち、雛鳥、女雛を其所へ打ちつける。首落ちる。

定高、思ひ入れあつて

定高　娘、入內さすと云うたは僞り。先づ此やうに、首切つて渡すのぢやわいの。

雛鳥　エヽ、そんならほんに、貞女を立てさして下さりまするか。エヽ、忝ない。
〽有り難いと、伏し拜む手を取つて。
定高　ナウ、入內せずに死ぬるのを、それ程に嬉しがる娘の心、知らいでならうか。あつと受けてゝ自害して、死ぬる覺悟は知りながら、其方の死ぬる事聞いたら、思ひ合うた久我之助どの、共に自害召されうも知れず。せめて一人は助けたさ。一旦得心したにして、母が手づから解いた髮は、下げ髮ぢやない、成敗のかき上げ髮。介錯の支度ぢやわいなう。
〽尊いも卑しいも、姫御前の夫と云ふは、たつた一人、穢らはしい玉の輿、なんの母も嬉しかろ。祝言こそせね心ばかりは、久我之助が宿の妻と、思うて死にや。エヽ、これ程に思ふ仲、一日半時添はしもせず、賽の河原へやる事かいの。
〽引寄せ〳〵雛鳥も、膝に取りつき抱きつき、忝なさと嬉しさと、逢うて別るゝ名殘の淚、一つに落つる三つ瀨川。
ト兩人、取りついて愁ひの思ひ入れ。上の屋臺は淸澄、經机を引寄せ讀誦して居る。久我之助、三方引寄せ思ひ入れ。
〽川を隔てゝ淸船が、最期の觀念惡びれず、燒刃直ぐなる魂ひの、九寸五分取り直し、腹にぐつと突き立つる。
ト此うち、久我之助、九寸五分を取つて腹へ突ッ込む。淸澄、思ひ入れあつて
淸澄　ヤレ暫らく引き廻すな。覺悟の切腹、急く事はない。コリヤ、冥途の血脈、讀みさしの無量品、親が讀誦する間、一生の名殘、女が面、一目見てなぜ死なぬ。
久我　イヽヤ、存じも依らず。この期に及んで、左程うろたへた、未練な性根はござりませぬ。さりながら、今端の際のお願ひ。私し相果てしと聞けば、義理に繋がる雛鳥も、共に生害と申すべし。さある時は太宰の家も斷絶。暫らくの間ながら、切腹の儀はお隱しなされ、降參承知いたせし體に、後室方へお知らせあらば、女も得心仕り、入內いたせば彼れが爲。不義の汚名は受けたれども、これぞ色に迷はぬ潔白。
淸澄　オヽ、出かした、よう氣が付いた。年來立て拔く武士の意地。
〽不和な仲程義理深し、命を捨つるは天下の爲、助けるは又家の爲。氣遣ひせず

と最期を清く、花は三吉野、侍ひの、手本になれ。
〽と潔よく、云へど心の亂れ咲き、あたら櫻の若者を、散らす惜しさと不便さと、小枝に注ぐ血の涙、落ちて波間に流れ行く。

ト清澄、愁ひの思ひ入れにて、以前の櫻の枝を川へ投げ込み、浪の音にて、櫻流るゝ。雛鳥、見て思ひ入れ。

雛鳥　アレ〳〵、花が流るゝは、嬉しや久我さまの、お身に恙のない印、わたしは冥途へ參じます。
〽千年も萬年も、御無事で長生き遊ばして、未來で添うて下さんせと、心で云ふが暇乞ひ。
思ひ置く事云ひ置く事、もうなんにもござんせぬ。片時も早う、サア母樣。
〽切つて〳〵と身を惜しまぬ、我が子の覺悟に勵まされ、胸を定めて取上ぐれど、刀は鞘に錆びつく如く、放れ難なき血筋の絆、今切り殺す雛鳥を、無事と知らすが返事の櫻、同じく川に浮ぶれば。

ト定高、愁ひの思ひ入れ、いろ〳〵あつて、以前の櫻を取つて川へ投げ込む。浪の音にて櫻流るゝ。久我之助、見て

久我　ハア、嬉しや。これぞ雛鳥が入内の知らせ。久我之助が心の安堵。釆女の方の御在所は、最前申し上ぐる通り。この世に心殘りなし。御苦勞ながら御介錯。

雛鳥　サア〳〵、母樣、切つていの。未練にござんす、母樣。
〽泣かぬ顏するいぢらしさ、刀持つ手も大磐石。
〽思ひは同じ大判司、子よりも親の四苦八苦。
〽命もちり〳〵〽日もちり〳〵。

定高　ハア、さうぢや。早西に入る日輪は、娘がお迎ひ、彌陀の來迎。西方淨土へ導き給へ。南無阿彌陀佛。
〽と眼を閉ぢて、思ひ切つたる首諸共、わつと泣き聲答へる谺。

ト定高、刀を拔き、思入れあつて、トゞ思ひ切つて雛鳥の首打ち落し、泣き入る。

〽膽に徹して大判司、刀からりと落ちたる障子。

ト時、上下の屋體、横の障子がらりと落ちる。大判司、見て

清澄　ヤア、雛鳥が首打つたか。

定高　久我どのは、腹切つてか。
〽ハア死なしたりと聲と聲〽悔むも泣くも一時に、暫

し詞もなかりしが。
〽稍あつて定高、聲を上げ。
定高　入鹿大臣へ差上ぐる雛鳥が首、御檢使、お受取り下さりませ。
〽呼ばる聲を吹き送る、風の案内に大判司、歎きの姿改めて、衣紋繕ろひ靜々と。
ト大判司、思ひ入れあつて、平舞臺へ下りて來る。
〽下り立つ川邊の柳腰、娘の首をかき抱き。
ト定高も首を抱へ、泣く／＼本舞臺へ下りて來て
大判司さま、分けてはなんにも申しませぬ。御子息のお命は、どうぞと思うた甲斐もない、敢へない有樣。お前の心も推量いたして居りまする。添ふに添はれぬ惡緣を、思ひ合うたが互ひの因果。此方の娘も、添ひたい／＼と思ひ死。餘り不便に存じます。せめて久我之助さまの息あるうちに、この首を其方へお渡し申すが、娘を嫁入りさす心。
清澄　實に尤も。嫁は大和、聟は紀の國。妹脊の山の中に落つる、吉野の川の水杯。櫻の林の大島臺。めでたう祝言させませう。
定高　そんなら、これまでの心も解けて。
清澄　ハテ、互ひに姻同士。
定高　エヽ、忝ない。
〽と喜ぶも後の祭り。
ほんに、脊たけ延びた者をいつまでも、子供のやうに思うて暮すは親の習ひ。甘やかした雛の道具、一人子を殺して何にせん。後に置く程涙の種。腰元ども／＼。
ト腰元兩人、前より出る。
ソレ、その雛の一式、殘らず川へ流れ灌頂。
〽未來へ送る嫁入り道具、行器長持犬張子、小袖簞笥の幾棹も、命存らへ居るならば、一世一度の送り物、五丁七丁續く程、美々しくせんと樂しみに、思うた事は引替へて、水になつたる水葬禮、大名の子の嫁入りに、乘り物さへもなか／＼に、形見も仇の爪琴に、首取乘する弘誓の船、彼方の岸より。
ト此うち、腰元兩人手傳ひ、雛の道具を川へ流す事。こかすめたる浪の音にて、トヾ定高、指圖して、琴の裏へ首を載せ流す事。清澄、思ひ入れあつて、竹熊手を取つて琴を搔き寄せて、首をよろしく取り上げる。
〽彼の岸に、流るゝ血汐淸船が、今端の顏ばせ見る親の、口に祝言心の稱名。

ト大判司、首と久我之助に思ひ入れあつて

清澄　千秋萬歲の、千箱の玉の緒も切れて、今は敢へなきこの死顏。

〽生きて居るうち此やうに、聟よ嫁よと云ふならば、如何ばかり喜ばん。

〽領分の遺恨より、意地に意地を立て通す、その上重なる入鹿の疑ひ。仲直るにも直られぬ、義理となつたる二人が不運。あれ程思ひ詰めた嫁、なんの入鹿に從はう。とても死なねばならぬ子供、一時に殺したは、未來で早う添はしてやりたさ。

〽云ひ合さねど後室にも、これまで不和なる大判司を、婣と思し召せばこそ、悴に立て一人の娘。

オヽ、よくぞお手にかけられし、過分にござる、定高どの。

定高　アヽ、勿體ない、そのお禮はあちらこちら。不束な娘ゆゑ、大切のお子を御切腹。器量筋目も勝れた殿御。夫に持つた果報者。とは云ひながらあれ程まで、手汐にかけて育てた子を、又手にかけて切る心。

清澄　サヽ、推量いたして居る。武士の覺悟は常ながら、まさかの時は取亂し、介錯し遲れ、面目ない。

定高　イエ〳〵、それでめでたいこの祝言。これがほんの葬禮嫁入り。一代一度の祝言に、聟どの〻無紋の上下。

清澄　首ばかりの嫁御寮に、對面せうとは知らなんだ。

定高　それも子供が遁がれぬ壽命。

清澄　兎にも角にも世の中の、子と云ふ文字に死の聲の

定高　あるも定まる

兩人　宿業ぢやなア。

〽隔つる心親々の、積る思ひの山々は〽解けて流れて、〽吉野川いとゞ〽漲るばかりなり。涙拂うて大判司、首かき上げて聲高く。

ト大判司、首を抱き上げ、思ひ入れあつて

清澄　悴清船、承れ。人間最後の一念に依つて、輪廻の生を引くとかや。忠義に死する汝が魂魄。君父の影身に附き添うて、朝敵退治の勝ち軍を、草葉の蔭より見物せよ。

〽今雛鳥と改めて、親が許して盡未來、五百生まで換らぬ夫婦。

忠臣貞女の操を立て、死したる者と高聲に、閻魔の廳を、名乘つて通れ。

〽南無成佛得脫と、唱ふる聲の聞えてや、物得云はねど

合す手を、合せ兼ねたるこの世の別れ、早日も暮れて人顔も、見えぬ庵の霧隱れ。
ト大判司、思ひ入れあつて、久我之助の首を打ち落し、思ひ入れ。本釣り鐘。
〽埋む娘の亡骸は、こなたの山にとゞまれど。
〽首は脊山に檢使の役目。
〽我が子の介錯涙の雛。
清澄　よしや世の中憂き事は
定高　いつか當麻の大和路や
清澄　跡に妹山。
定高　先立つ脊山。
〽恩愛義理をせき下す〽涙の川瀬〽三吉野の花を〽見捨てゝ〽出て行く、
ト兩人、愁ひの思ひ入れにて、よろしく段切れにて、
幕

三幕目　杉酒屋の場

役名━━杉酒屋娘、お三輪。同母、おたる。同丁稚、子太郎。家主、茂木兵衞。合長家、土右衞門。同、粕兵衞。同、長八。同、藤六。同、又六。同、松藏。同、三助。入鹿妹、橘姫。烏帽子折り求馬實ハ藤原淡海。

本舞臺、三間の間、平舞臺、三方折り廻し、見付け、鼠壁、暖簾口、下手酒樽の書割、いつもの所に門口、この外路地口出入り、これに續き隣家模樣、引き戸の入口、これに烏帽子折りの看板をかけある。尤も門口の内に丸もの酒樽三つ四つ積み置き、呑み口つけたるつぎ場の體。上手に七夕の竹を飾り、短册つけある。この前に机を直し、紅白の絲を卷きたる環を飾り、三方に神酒供へあり、幕の内より相長家の土右衞門、粕兵衞、長八、藤八、又六、松藏、三助、若い者四五人交り、路地口より井戸繩に取りつけ、子太郎、柿の胸前垂れ、丁稚の形、これも交り、井戸替への模樣。てんつつ、角兵衞獅子、賑やかにて幕明く。
松藏　引いたりよ。
皆々　引いたりな〳〵。
トこれにて皆々路地口より井戸繩を引き出す事三四度

あつて、よろしく汲みしまふ事。
松藏　サア／＼、もうよい／＼。
皆々　ア、、めでたい／＼。サア／＼一服吸はうかい。
ト銘々捨ぜりふにて、有り合ふ茶碗を取り、茶を汲み、煙草吸ふ事。此うち奥よりおたる、酒屋の母の拵らへにて、丸盆に鉢肴を載せ、手に白丁徳利を提げ出て來り
たる　オヽ、こりや近所の衆、どなたも御大儀でござんした。嘉例の通り酒盛りして、暮れるまで、ゆつくりと呑んで行つて下されや。土右衛門さん、年かさのお前から、酒始めて下さんせいなう。
ト酒肴を皆々の前へ並べる。
土右　マヽ、なんの、よしにさつしやればよいに。おいらが村長家で手傳ふのも、年中爰の井戸の水を遣ふ恩返し。ナア又六どの、さうぢやないか。
又六　オヽ、それ／＼、氣を張つてもらつては却つて氣の毒。これからは、いつもの通り、賑やかに遊んで下され。サア／＼長八、藤六、騒げ／＼。
長八　よし／＼。そりやモウ騒ぐ事にやア如才はないが、それはさうと、コレ、内儀さん、見れば爰にも寺屋のやうに、七夕様が祀つてござるの。

たる　サア、ナア、見て下さんせや。此方の娘のお三輪が、何やらお星さまへ願ひがあるとて、あのやうに内で祀るとて、いろ／＼の供へ物。女子の癖に、ませた世界ぢやないかいなア。
土右　オヽ、そりやマア奇特な事ぢや。そしてマア、お三輪さんは、留守でござるかいの。
皆々　それ／＼、お三輪さんは、何所へ行かれましたな行かれましたな。
たる　アイ、あの娘は、小さい時行つた寺屋の七夕祭、呼ばれて行きました。サア／＼、一つ呑んで下されや……ヤイ子太郎、酌をしをらぬか。ドリヤ、吸ひ物に豆腐でも煮いて來ませうか。
トこれにて皆々捨ぜりふ、酒盛りになる。おたるは奥へ入る。
〽納戸へ入れば打ち寛ろぎ、廻る杯底なしども、引きうけ／＼一氣呑み、肴の鉢を引き寄せて、箸放さずの滅多呑み、丁稚の子太郎呆れ顔。
子太　アヽ、さて／＼氣味のよいと云ふは挨拶ぢや。余ツほど下作な呑みやうぢや。井戸の鮒が水を呑むやうに、口を開けてがぶ／＼と、エヽ、それでは味が知れ憎から



八世市川團十郎の求馬

うがな。コレ、この酒は內儀さんが張り込んで、內の銘酒の第一番ぢや。男山と云ふ酒ぢや。こなさん達はほんの無茶呑みぢや。この酒の代り、目からもう鬼殺しにしてくれう。

藤六　サア／＼、いゝ加減に酒を呑んだら、いつもの通り賑がうかい。

子太　コレ／＼、お三輪さんの三味線と太鼓も取つて來て置きました。

ト三味線と柄太鼓を出す。

三助　コレ／＼、それはさうだが、この隣へこの間越して來た、あの烏帽子折り、この井戸替へにも出合さず、あんまりなめ過ぎた奴ぢやないか。

長八　それ／＼、生しらけた面つきで、馬鹿慇懃な生れつき。

松藏　平生吐かす挨拶も、仔細らしい切り口上。毛唐人のやうな奴。

又六　大方挨拶は今流行る、早學問と云ふ本を、見てから云ひ溜めでもする氣であらう。

土右　なんでもこの井戸替へに出合はぬからは、きつと物云ひをつけてやるべえ。

皆々　それがいゝ／＼。

ト矢張り皆々捨ぜりふにて、酒盛りしてゐる。

〽借家の內の神さん達、御託宣もとり／＼に、それとも知らずのつし／＼、歸る隣の烏帽子折り、辛き世渡り耳口に、羊羹色の黑小袖、一腰さした取形に、浪人とこそ知られける、門口より腰屈め。

ト此うち向うより、求馬、着流し、一本差し、京草履にて、浪人體の形にて出て來り、門口にてこなしあつて

求馬　ハイ、隣家に居りまする閑原求女でござります。お屋敷方の御用につき、未明より罷り出て、只今歸宅仕る。後室樣には、いよ／＼御機嫌麗はしうござりまするや。後刻緩りと御意得ませう。

〽と我が家へ入るを。

ト門口より隣家へ行きかゝるを

松藏　ア、コレ／＼、待たつしやれ／＼。今日はコレ爰の井戸替へで、長家中が寄つて手傳うて居るに、こなたばかりが來ずに居て、交際が濟むかいなう／＼。

皆々　但し、おいら達を、潰すのか。

〽ねだり臺詞に求馬は恟り、上がり口に兩手を突き。

求馬　これは〳〵、お顔を見受ければ、皆合長家のお方々、此方の井戸替へお手傳ひ、且以て私し存せず。これと申すも不案内から、先格の作法を存せず、段々の失禮、眞平御免下されませう。

藤六　ア、コレ〳〵、また仔細らしい事を云ふのかえ。

長六　ハテ、勝手を知らにやア、せう事がない。料簡しろならそれでいゝわえ。

松藏　オヽ、それ〳〵、此方も一番云つた後は、もう諍ひはないと云ふものぢや。

土右　オヽ、この土右衛門が、呑み込んだ〳〵。

求馬　然らば、あなた樣がお執成して、斯やうにお教へ下された上は、そのいざこざとやらは、御遺恨はござりませぬか。

土右　オヽサ、おれが呑み込んだ。ようごんす〳〵……さて、おいらは余程醉うて來た。これからは嘉例の、騷ぎだ〳〵。

長六　オヽ、面白い〳〵。先刻の三味線ぢや、定めし調子が合はないで、面白くもあるまいか。

又六　何にせえ喜びぢや。この茶碗で、グッと一杯呑んで下されい。

皆々　オヽ、サ〳〵、一杯呑んでもらはう〳〵。

　ト銘々醉ひし體にて、求馬に茶碗を突きつける。

求馬　ハ……これは〳〵、忝なうござりますが、私しは一滴も、たべませぬやうにござります。

土右　オヽ、そんなら勝手次第。サア〳〵、これから騷ぎの趣向。三味線、太鼓は長八、藤六。この土右衛門に烏帽子屋どのを始め、殘りの者は惣踊り。よいか〳〵。求馬さんも合點か。

求馬　すりや、私しにもその踊りを、

土右　オヽサ、こなさんはこの長家で、顏が新らしいぢやに依つて、踊らにやならない。音頭もわしが二役だ。サア〳〵皆の衆、やらかすぞ……ヤア、千代の始めの一踊り、松は松坂越えたえ。

　ト土右衛門、立ち上がり、こなし。皆々も立ち上がり

皆々　松は松坂越えたやつさ。踊りは所望ぢやえ……アリヤ〳〵よいやさ。

　ト合ひ方、踊り地。子太郎は太鼓を打ち、長八は三味線を彈き、求馬の手を兩人持つて無理に踊らせ、皆々きまらぬ惣踊りになる。

〽家主茂木兵衛いつきせき。

ト矢張り右鳴り物にて、向うより家主茂木兵衛、木綿やつし、羽織にて出て來る。舞臺の人數は生醉のこなし、夢中になつて踊つて居る。求馬は隙を見て、この間にソッと拔けて下の方へ逃げて隣家へ入り、戸を閉める。皆々これを知らず踊り居る。茂木兵衛、門口へ來り、中を覗き見て呆れし體。中へ入れど皆々に踊りながら突き出される事二三度あり。

茂木　如何に嘉例の祝ひぢやとて、あんまり騒ぎが嵩高ぢや。コレ〱、鎭まらつしやれ〱。

〽門口から聲高に、喚いて入れど如何な事、耳へも入らず。

ト矢張り構はず踊り居る。奥よりおたろ出て、この中へ入り、浮かれて踊る。

〽茂木兵衛はずとも〲に、叱かる詞も拍子つき。

ヤイ〱〱この家主を袖にして、酒を呑めと云はばこそ。われらばかり呑み喰ひ、近所も構はぬ大騒ぎ。これ程云うても聞き入れにやア、家請けへ告げるが合點か。

ト家主、節をつけて云ふ。

皆々　オヽサテ合點ぢや。

〽これまで來て見よ貸しの人、お家主渡したと、踊る拍子の醉機嫌、夢中になつて立踊る。

ト早めて踊り地にて、皆々夢中になつて踊りながら向うへ入る。後に茂木兵衛、おたろ、子太郎殘り、踊りに疲れへたる。

〽家主跡に、とほんとなり。

ト三人、ホッと息をして

茂木　アヽしんどや〱。益體もない奴等ぢや。たうとうおれまで夢中にし居つた。コレ〱阿母々々、内に居るか。阿母は居ぬか〱。

たろ　オヽこれはマアお家主様か。ようお出で下されました……ヤイ〱子太郎、あなたがお出でなされたなら、なぜわしに知らせぬぞえ。

子太　ナニ、あのお家主様は今まで、皆と一緒に踊つて居りました。

たろ　何を云ひ居るぞい。申し、お家主、なんぞ御用でござりまするか。

茂木　オヽ、用とも〲大事な用ぢや。さるお侍ひから頼まれたが、入鹿さまの云ひつけで、ソレ、鎌足と云ふ人の息子淡海が、方々流浪して居るげな。それを見付け出したら、大金になるわいの。

たろ　エヽ、そんならなんと云はつしやる。その淡海とやらを見付けて出せば、アノ、御褒美に大金を下さりまするか。

茂木　オヽ、サア〳〵、お金を下さるワ。それについて、とつくりと云うて聞かす事もあれば、わしと一緒に同道して行つて下され。

ト家主立ち上がりて急き立てる。

たろ　ハイ〳〵。左やうなら、お前と一緒に參りませうわいの。サア〳〵、忙しうなつて來た〳〵。

ト兩人捨ぜりふにて門口へ出て、

ヤイ〳〵子太郎よ、もう日が暮れたさうな。隨分と火も消して御燈上げい。氣をつけて用心しや。そして娘は、寺屋からまだ戻らぬが、遲い事ぢや。ソレ、酒買ひが來たら叩き出せ。盜人が來たら酒量つてやれ……よいかよいか。解つたか〳〵。エヽ、どきまぎと呑み込みの惡い。解らぬ奴ぢや。

〽氣の急く儘に間違ひだらけ、打連れてこそ出でて行く。

ト家主、先にたる、こなしあつて向うへ入る。後に子太郎こなし。

子太　エヽ、人遣ひの惡い。ようしやべる狸婆め。

〽日とともに、營むさまも入相の、四方の市蔵戸ざし時、子太郎跡を打見やり。

ト子太郎は捨ぜりふにて、あたりを片つけ、火打ち箱とり出し、火を打つて行燈八軒へ灯し、よろしくあつて手桶を持ち、門口へ出て水をあたりへ撒く。

〽灯を上げ表の戸、夜の構へのそこ爰と、こなたの道より歩み寄る、振りの小袖の香やごとなき、面を隱す衣かつぎ、誰れしら衣の優姿。

トごん、合ひ方になり、向うより橘姫、廣振りの形、白絽のかつぎを冠りて出て來る。子太郎、これを見付け、恟りして

ヤア〳〵、幽靈だ〳〵。幽靈が出た〳〵。

トうろたへて中へ入り、戸を閉めて押へ居る。

〽窺ふうちに隣の軒、知らせのしはぶき、主の求馬。

ト橘姫、舞臺へ來り、下手へ立ちとまり、礫打つ。中より以前の求馬、出て來り

求馬　今宵はどうして早かりしぞ。サア〳〵此方へ。

〽サア〳〵此方へとその後は、云はず語らず手を取つて、戸口立て寄せ入る後に。

ト求馬は橘姫の手を引いて下の屋體へ入る。此うち子太郎、門口の間より外の樣子を覗き居る。

〽子太郎は不審顏、隣の門口耳を當て、聞きすまして立ち戻り。

ト子太郎、外へ出て、隣家の戸を覗く事あつて

子太　なんでも隣の烏帽子めは、おれとは違つて余ッぽどきつい色事師ぢやわえ。彼奴が見事な烏帽子で、あの代物を〆め居ると見える。ア丶、あれを內のお三輪さんへ聞かせたら亂騷ぎであらう。エ丶、素早い奴だなア。

〽呟く所へ娘のお三輪、寺子屋戻り足早に、門口入れば。

ト向うよりお三輪、振り袖、世話娘にて、本挾みと酸漿を持ち出て來り、門口へ來る。子太郎見て、

ヤア／＼、お三輪さん、待つて居た／＼。サア／＼、大事ぢや／＼。

ト手を引いて中へ入る。お三輪、恟りして

三輪　エ丶、モ、なんぢやぞいなア。子太郎とした事が、マア、滅相な。わしに恟りさしやつたわいの。

子太　さしやつたわいの……どころではない。コレ、お前に忠義を云うて聞かせるぞえ。

三輪　忠義とは、なんの事ぢやぞいの。

子太　エ丶、忠義とは忠臣の事ぢやわいの。

三輪　サア、その忠臣は知つて居るが、それがどうぞしたかや。

子太　サア、その忠臣は、あの隣の烏帽子めがな。

三輪　隣の烏帽子とはえ……エ丶、求馬さんの事かいなア。

子太　ア丶、求馬々々。その求馬の姿から起つた事ぢや。あの阿母さんは、大家さんが何か用があるとて連れて行つた。その跡へ、なんぢや知らぬが、眞白な衣をかづき、幽靈ぢや……サ、幽靈かと思うたらの、美しい女が、あの隣の門口を、コト／＼／＼と叩いたぢや。サ、さうしたりや求馬さんが、ツッと出て、今宵はどうして早かりしと、手に手を取つて內へ入つた。サ、それからおれがチッとして聞いて居たら、ソレ、わしが毎朝酒樽洗ふやうに、ヤアシイ／＼／＼と云ふ音がした。なんとお三輪さん、こりや默つては居られまいがな。

三輪　ムウ、何と云やる。あの求馬さんの所へ、美しい女中さんが、ござんしたと云やるのか。

子太　わしが見て居やんしたぞえ。

三輪　そりやマア、ほんまの事かいなア。
子太　ほんまとも〳〵、ナニ嘘を云ふものかいなう。
三輪　ほんに〳〵、油斷も隙もならぬわいなう。コレ子太郎や。幸ひ母さんも留守なれば、其方行つて求馬さんを、爰へ呼びましてたも。
子太　オツと、合點ぢや〳〵。呑み込んだ〳〵。
〽走り出て隣の門口、破るゝばかりに打ち叩き。
コレ〳〵、求馬さん〳〵、隣の酒屋から使ひに來た。今のが濟んだら、印判を持つてござりませや。ちやつとちやつと。
〽口から出次第求馬は𢚩り、何事やらんと立ち出づれば、物をも云はずマア〳〵此方へと無理矢理に、手を引き連れて我が家の門、それと見るより娘のお三輪、口に云はねど赤らむ顏。
ト下の隣家より、以前の求馬出る。子太郎は直ぐに手を取つて、引き立て〳〵、内へ連れて入る。
サア〳〵、求馬さんを、呼んで來やんした〳〵。
三輪　求馬さん、お出でなさんしたかいなア。
求馬　これは〳〵お三輪さま、お前は寺屋へお出でなされたさうな。
三輪　ハイ、參じました。
求馬　それは、ようお出でなされました。
三輪　ハイ、ようお出でなされましたなア。
子太　ハイ、ようお出でなされましたな。
三輪　エヽ、なんぢやぞいなア……ようお出でなされましたなア。
〽互ひに味な墨つきを、子太郎が引き取つて。
サア〳〵、わしが役はもうこれまで。そこで何かの達引さんせ、爰らで我れら粹を通し、夜食の扶持にありつかう。兩人とも、飯に逢はう。
〽納戸へ走り入りにける。
トこなしあつて、子太郎、奧へ入る。
〽後に二人は接穗なく、おぼこ育ちの娘氣に、思ひ詰めたる一筋を、云はうとすれば胸迫り。
ト兩人、間の惡きこなし。合ひ方になる。
三輪　申し、求馬さんえ。何もかも子太郎に聞いて、よう知つて居りまする。お前さんはお樂しみでござんすなア……美しい女中さんが、宵からお前へ來てぢやげな。定めて色さんでござんせうなア。これまでお前とわたしが仲、逢ふ事さへもたま〳〵に、千年も萬年も、變らぬ契

りと仰しやつた、その約束は、偽はりでござんすかいなア〳〵。浮世の譯も辨まへぬ、在所育ちのわたしゆゑ、お騙りなさんすかいな。そりやあんまりでござんすわいなア。

〽あんまりむごいと取りついて、涙先立つ恨み事。

求馬　これは思ひも依らぬ疑ひ。成る程、女中は來て居るが、あれはソレ、春日の巫女どのが、その連合ひの禰宜どのの、烏帽子を誂らへに見えたのぢや。美女は愚か、如何な天女が影向あつても、外へ散る心はない。和歌三神を誓ひにかけ、偽はりは云はぬわいなう。

〽時の間に合ひ落ちつかせば、流石おぼこの解けやすく。

三輪　神樣まで誓言に立てる上は、それでわたしも落ちつきました。モシ、必らず變つて下さんすなえ。

〽立ち上がつて七夕に、供へ祀りし二つの苧環、持ち出して前に置き。

ト上手に飾りある紅白の苧環を取つて來り

わたしが寺屋へ行つた時に、お師匠樣に聞いて置いた。殿御の心の變らぬやうに、星さまを祈るには、白い糸赤い糸、苧環に針を附け、結び合せて祈るとやら。

求馬　オヽ、それが卽ち、願ひの糸の乞巧針。

三輪　ムウ。お前もよう知つてぢやな。白い糸は殿御と定め、女子の方は紅い糸。それでわたしもこの願籠め。寺屋で見た本の中に、心をかけし女の歌、アヽ、何とやら……オヽ、それ〳〵、戀わたる思ひは千々に結ばれて、幾夜願ひの糸の苧環。

求馬　オヽ、その男の返しには、逢ひ見ての後も願ひの糸筋を、余所へ亂すな君が苧環。

三輪　アイ、さうでござんした。いつまでも變らぬ印、紅い糸をお前に渡し、白い糸をわたしが持ち、契りも長き願ひの糸。

〽夫婦の約束星合ひに、鵲ならぬ苧環を、千代の仲人取りかはし、肌に突き合ふわりなきえにし。

ト兩人、苧環を持ち、思ひ入れあつて

〽求馬が内より以前の女、歩み出でこなたの門口。

ト下の隣家より橘姫、出て來り、門口へ立寄り

橘姫　隣の烏帽子折り樣は内方にか。許してたも。

〽許してたもと内へ入る、姿に求馬は手持ちなく、お三輪は何の氣も附かず。

ト姫は中へ入り、上へ通る。求馬、間の惡きこなし。

三輪　アヽモシ、あなたが今のお人かえ。

求馬　オヽ、それ、アレ〳〵、巫女さまぢやな。それで薄衣を着てござるな。申し、お前様はアノ、お連合さまの烏帽子を誂らへにお出でなされましたのかえ。ソレ、巫女さまぢやわいの。

〽包む詞の衣を洩る、月の笑顔をひんと拗ね。

橘姫　コレ申し求馬さま、あの女中はお端下か。何人でござりまするえ。

求馬　アヽイヤ、これは爰な酒屋の、娘御ぢやわいの。

橘姫　ムウ。そのマア隣の娘御と、最前から久しい間、なんの用がござりましたえ。

求馬　サアそれは。

〽問はれて求女は答へもなく、うぢつく素振り見て取るお三輪。

三輪　エヽ、なんのこつちやぞいなア。コレ、巫女さまとやら云ふ女中さま、人をマア、お端下かのなんのと、アタなめすぎた物の云ひやう。求馬さまにはアノ、わたしが用がたアんとごさんす。お前のお世話にはなるまいわいなア。

橘姫　これはしたない。其やうに云はしやつても、そもじなどの用を聞く、求馬さまぢやないわいなう。サア、お歸り遊ばしませ。

〽手を取ればお三輪が隔て。

三輪　イエ〳〵、わたしがまだ用がある。去なす事はなりませぬわいなア。

橘姫　イヤ〳〵、爰には置きませぬ。邪魔せずと、其處退きや。

ト　お三輪を引き退けるを又、支へて

三輪　イエ〳〵〳〵、ならぬ〳〵。歸す事はならぬわいなア……申し、求馬さん、そりやあんまり氣の多い。

〽惡性な、そもや二人が馴染めは、始めて三輪の過ぎし夜に、葉越しの月の面影は、お公家さんやら侍ひさんやら、知れぬなり振りすつきりと、水際の立つ好い男、外の女子は禁制と、〆めて固めし二人が仲、主ある人をば大膽な、斷わりなしに惚れるとは、とんな本にもありやせまい、女庭訓躾け方、よう見やしやんせ、嗜なみなされ女中さん〽イヤそもじとてたらちねの、許せし仲でもないからは、戀は仕勝ちよ我が殿御、イヽヤわたしがイヤわしがと、共に縺りつ手を取れば、イヤ離さじとお三輪も又、あなたへ引けばこなたへ引き、譯も汀に戯れる

雁、縺振り袖振り分け姿、戀を爭ふその折柄、息せき戻るこの家の母。

ト此うちお三輪と橘姫の兩人、求馬が手を取り引き合ふ事よろしくあつて、向うより以前の母戻り來り、直ぐに舞臺へ來り、門口より中へ入りながら

たる　ヤア／＼、求馬どの、こなさんには用がある。どつこへもやる事はならぬ。動くまいぞ。

〽動くまいぞと身構へに、何かは知らず白絲の、姫は外へと出で行くを、留める求馬に又絡る、娘を押し分け母親は、求馬やらじと引きとゞめ、繋ぐ手と手を柵の、風に揉まるゝ爭ひに、子太郎立ち出で見廻して、これ幸ひと母親の、襟にしつかり括つたる、苧環の呑み口に、結ひつけ納戸へ逃げて入る、こなたは互ひに縺ひ繋ひ、姿亂るゝ姫百合の、手を振り切れば一時に、亂れて走るを母親が、やらじと追へば繋ぎ綱、力む拍子に呑み口拔け、酒は淋漓滴り敗亡、三人門へ後れじと、同じ思ひを後や先。

トおたるは求馬を捕へようとする。橘姫は求馬を連れて行かうとする。お三輪支へる。奥より子太郎出て、有り合ふ細引にておたるが襟へ括しつけ、この縄の端を酒樽へ結ひつける。求馬、以前の苧環を取つて橘姫が裾へ引きかける。橘姫はこれに構はず花道へ入る。お三輪、同じく白の苧環を取つて、手早く求馬が裾へ糸をかける。おたる、支へるを振り切つて、求馬、花道へかゝる。この立廻りに酒樽の呑み口拔けて、一水こぼれる。おたるは、これを見てあはてるうち、求馬、向うへ入る。これにて白の苧環、くる／＼と花道の附け際へ行く。お三輪、おたるをかき退け、花道へツカ／＼と行く。右の苧環を取り上げる。

〽道を慕うて。

トお三輪、苧環を持つて花道へ入る。おたるは後を追うて行かうとする。子太郎出て、これを支へる。立廻りよろしく

幕

大詰

三笠山御殿の場

役名——蘇我入鹿。宮越玄蕃。荒卷彌藤次。官女、松の局。同、梅の局。同、櫻の局。同、楓の局。入鹿妹、橘姫。烏帽子折り求馬 實ハ藤原淡海。杉

酒屋娘、お三輪。漁師、鱶七　實ハ金輪五郎今國。

本舞臺、一面、高足の御殿、見附け金襖、上下黒塗りの高欄、眞中に登り高欄階、屋體の左右、一間の御簾屋體、上手二重の下に誂らへの秋草、土手板。すべて、三笠山入鹿御殿の飾りつけ。爰に二人の仕丁、水手桶、竹箒を持ち、掃除して居る。管絃にて、幕明く。

〽榮ふる花も時しあれば、すがり嵐のあるぞとは、いざ白雲の御座、新たに造る玉殿は、彼の唐國の阿房殿、爰に移して三笠山、月も入鹿が威光には、覆はれますぞ是非なけれ。

〽腋門の方より宮越玄蕃、荒卷彌藤次、御前よき儘高う吹く、帆かけ烏帽子も十分に、のけぞり返り入り來り。

ト矢張り管絃にて、下座より、玄蕃、彌藤次、侍ひ烏帽子、龍神卷にて出て來り、仕丁兩人の掃除して居るを見て

彌藤　オヽ、仕丁ども、朝清めよな。イヤナニ玄蕃どの、この度新たに築かれたこの山御殿、旭に輝く所は、吉野龍田の花紅葉を、一度に見るとも及びますまい。

玄蕃　イヤモウ、言語に述べ難きお物好き。瑪瑙の梁、珊瑚の柱、水晶の御簾、瑠璃の障子。

彌藤　これ見られよ、飛石は琥珀、砂は金銀、また釣殿に登り見下ろせば、春日の杉も前栽の草びら。若草山葛籠山は撒き石同然。猿澤の池は、お庭の井戸に見えまするて。

〽話しの尾に付き仕丁ども。

仕一　アヽ、結構な御普請でござりまする。さうして何やら、ふん〳〵と、好い匂ひが致しまする。ナウ又次。

仕二　オヽ、その筈ぢや。縁板おばしまに至るまで、皆伽羅と沈。

仕一　したり、抹香や鋸屑とは、違うた物ぢやなア。

仕二　又お學問所は、唐を移して唐木ぢやげなの。

仕一　ハア、その唐木とは何々ぢやぞいの。

仕二　オヽ、先づ華櫚。

仕一　フン。

仕二　紫檀。

仕一　フン。

仕二　黒檀。

仕一　ホイ。

仕二　鐵刀木。
仕一　ホイ。
仕二　占屋さん。
仕一　ホイ。
仕二　當卦本卦手の筋、男女相性墨色の考へ。
仕一　ア、コレサ〳〵〳〵。
仕二　失せ物待人書き判の善惡。
仕一　コレサ〳〵、これはしたり、そりや山御殿ではならて、山伏ぢやぞや。
仕二　サア、玉樣もこの山で暮やしやるに依つて、山伏であらうぞや。
仕一　エヽ、人を嘲弄するがな。
仕二　イヤ、長老とは坊主の事か。
仕一　イヽヤ、女子の事ぢや。
仕二　そりや、上﨟ぢや。
仕一　イヤ、如露とは花に水かける物ぢや。
仕二　エヽ、どう云や斯う云ふと、なんぼ貴樣がくずなの辯でも、おれには叶はぬワ。
仕一　ハヽヽ、そりやふるなの辯ぢやわい。くずなとは魚ぢやわやい。
仕二　イヤ、くずなぢや。
仕一　イヤ〳〵、ふるなぢや〳〵。
仕二　イヤ〳〵、くずなぢや〳〵。
仕一　イヤ〳〵、ふるなぢや〳〵〳〵。
彌藤　ヤイ〳〵、騒がしい。そりや何事ぢや。清めしまうたら、早く下がれ〳〵。
仕丁　ハア、。

ト音樂になり、仕丁二人、下座へ入る。玄蕃、こなしあつて

玄蕃　アレ、お聞きなされ彌藤次どの、我が君この御殿へお移りと見え、物の音近く聞えまする。
彌藤　イカサマ、左樣でござる。然らばこれにて、お出迎ひ仕らう。

〽花に暮らし月に明かし、酒池の遊びに醉ひ疲れ、御殿御殿の通ひ路も、數多の官女が道樂に。

ト三味線入り音樂になり

〽君の機嫌をとり甲、調ぶる笛や笙篳篥、太鼓の音も鳴德に、おのが不德を押しのぼる。

ト此うち、向うより、入鹿大臣、御忠衣、緋の袴の形、檜扇持ち出る。舍人一人、朱の長柄傘をさしかけ出る。

後より、官女梅の局、楓の局、松の局、櫻の局、皆々緋の袴の形にて銘々嶋臺を持ち出て來り、花道にとまり

入鹿　霓裳羽衣の曲に、魚陽の羯鼓は地を動かし、龍の吟ずる調べあり。ハテ、面白き音色ぢやなア。

梅局　思ふ事、ありやなしやも桐壺に、梅が香慕ふ黄式調、

楓局　君が一夜の契り草。音色も高き越天樂。

松局　閨の薫りも床しさの、含りも長き還城樂。

櫻局　思ひ焦るゝ睦言は、深き情の閨の内、姿優しき想夫戀。

梅局　焚いて待つ夜の移り香を、忘れもやらぬ留木の曲。

楓局　幾夜重ねし睦言に、しつぽり濡れの雨露の曲、調べ聞くさへ、ナア皆さん。

皆々　お嬉しう存じまする。

入鹿　方々、參れ。

皆々　先づお入り、遊ばされませう。

〽雲間の淵緣、蜀錦の褥の上、むんずと座ぜし有樣は、實に類ひなき榮花の殿。

ト始終有の鳴り物にて、花道の皆々、本舞臺へ來り、二重へ上がり、入鹿は眞中の二疊臺、官女二人づゝ左右へ別れ、前へ嶋臺を並べ置き、各々よろしく住ふ。

〽玄蕃彌藤次頭を下げ。

玄蕃　ハツ、先達て卿上雲閣の方々より、君の壽を祝し申されし數の嶋臺。

彌藤　君の齡を壽きし蓬萊山、その外數多の飾り物。女中方、叡覽に供へられよ。

皆々　ハア、。

〽ハツと答へて持ち出づる、思ひ〳〵の飾り物、運べど盡きぬ泉の壺。

梅局　天上人の方々より

皆々　御祝儀でござりまする。

〽一入興に入鹿が喜び。

入鹿　オヽ、百司百官より、下萬民に至るまで、我が在位長かれと願ふ事、銘々が身の冥加なれば、猶萬歳を唱へよや。

〽高慢我慢の一言に、ハツと兩人階下に平伏し。

玄蕃　我れ〳〵は申すに及ばず、民百姓も、野に手を打つて舞ひ樂しむ。

彌藤　誠に、鎖さぬ御代とは今この時。只々おめでたう、

兩人　存じ奉りまする。

〽滅多に追從、猩々の、人形に見惚れ官女達。

梅局　コレ〳〵、この猩々が手に持つた、酌盃も取り外し壺には誠の神酒を湛えて、これで御酒宴始めようかいな。

松局　ほんに、それは好いお慰みでござりませう。

楓局　サア〳〵、早うこれで御酒宴

四人　遊ばされませう。

〽盡し盡せぬ歡樂の、興を催ふすその所へ。

　ト向う揚げ幕にて

鱶七　物もう。賴みませう。

〽どつてう聲、髮髯頭の大男、御殿間近くほつか〳〵、着たる木綿の長上下、糊しやきばつて立ちはだかり。

　ト此うち、向うより鱶七、木綿やつし、好みの長上下にて、大小、刀の柄へ一升德利を提げ、のさ〳〵出て來り、本舞臺へ來て

ヱ、、入鹿どのは爰ぢやな。內になら、逢はして下んせ。

〽木で鼻こくるむくつけ詞、宮越荒卷目に角立て。

玄蕃　ヤア、何奴なれば、君の御前とも憚らず

彌藤　推參な馬鹿者めが。匹夫め、この場を

兩人　すさり居らう。

鱶七　イヤ、おりや難波の浦の鱶七と云ふ、網引きでござんすが、いつやらから此方の方へ、宿替へしてごんしたお公家どの、鎌足の大臣から、賴まれて來た使ひでごんす。

〽云ふを遙かに見下ろす入鹿。

入鹿　ハテ心得ぬ。その鎌足めは、首陽山の昔を學び、後を隱せしと聞きしに、さては難波の浦に隱りするよな。普天の下、率土の濱、王地にあらざる所なければ、今日まで飢にものぞまず、健固で居りしは、我が惠みならずや。それを思はゞ、疾にも參り恩を謝すべきのところ、使ひを立てしは緩怠なり。

鱶七　ヱ、、それをおれが知つた事かいの。斯ら見たところが、余ツぽど短氣者ぢやわいの。併し、喧嘩にこなさんのやうに、こつきで行くのがマア得ぢや。鎌どのも一旦は云がゝりで、てつぱつて見ようと思はれたさうなが、叶はぬやら、おれに行つて挨拶してくれと、それは〳〵きつい弱り。大概の事なら、もう料簡してやらんせ。懇ろな仲は、得て心安立てで、間違ひがあるものぢやてな。コレ、仲直りの印ぢやてゝ、さす一升、おこされう。



三世中村歌右衛門の蘇我入鹿

た。

〽刀の提げ緒にぶら〳〵と、結びし徳利にキッと目を付け。

入鹿 未だ日本へ渡らぬ兵器、唐土にありと聞く、飛道具の類なるか。何にもせよ、怪しき物を所持せしぞ。方々、油断いたすな。

両人 ハア、。

〽眉をひそめて身構へたり。

鱶七 エ、、とつけもない。徳利と見やんせ。酒ぢや〳〵。コレ、そこなお手代衆。早うコレ、ソレ、進ぜさんせ進ぜさんせ。

ト徳利を取つて出す。

玄蕃 イヤ、善悪知れざる鎌足より、差上げし酒ならば、毒薬仕込みあらんも知れず。

弥藤 毒味する事

両人 罷りならぬ。

鱶七 エ、、廻すワ〳〵。ドレ、おれが毒味してやらう。茶碗はないかえ。許さんせ。直やりぢや。

〽云ひつゝ徳利の口から口。

ト徳利の口より呑む事あつて

オ、、好い酒ぢやなア。これを呑まぬと云ふ事があるものかいの。併し、まだあるか知らん。

ト徳利を振つて見て

ヤア。

ト悔り思ひ入れ。両人さてこそと云ふこなしにて

両人 ヤア。

鱶七 南無三、皆呑んでしまうた。エ、、ひよんな事してのけた。イヤコレ、ひよつと鎌どのに逆はんしよと儘、おれが呑んだと云はずに、よう届いたと、礼云うて下んせや。

〽我武者なやうでも正直者、真面目になつて気の毒顔。

オ、、まだ何やら言傳つて来たが、落しはせぬか。

〽懐探して。

ト懐中より、立て文を出して

オツとあるワ。サア、これ見やんせ。

〽一通を、渡せば弥藤次押披き。

ト弥藤次、披き見て

弥藤 ナニ〳〵、我れ不肖たるに依つて、暫らく心を惑はすと云へども、今一天四海御手の内に落入る事、正しく天の譲り給ふ御位、入鹿公に背くは、天に背くに同じと、

先非を悔いて爰に降參を乞ふものなり、今より臣下に屬するの印、君の齢を東方朔に譬へ、この桃花酒を以て御壽を祝し奉る、內大臣藤原の鎌足、謹んで申す。

〽と讀み上ぐる。

入鹿　ハヽヽヽなまくら者の鎌足め、臣下にならんなんどゝは、イヤ、しら〳〵しき僞はり奴。

鱶七　なんぢや。鎌どんを嘘つきとは、なんぞ慥かな證據がごんすか。

入鹿　ヤア、小ざかしき證據呼はり。彼れが心腹云うて聞かさん。

鱶七　ドレ、聞きやんせうか。

入鹿　先づこの入鹿を東方朔に譬へたるが、野心の證據。

鱶七　そりや又なじよに。

入鹿　オヽ、昔。漢の武帝の代に、東方朔と云へる奴、三千年に一度實を作る桃を、三度盜んで喰ひしゆゑ、九千年の齢を保つ。桃に百の緣を象り、百司百官を手に入れし入鹿を、盜人なりと云はぬばかりの底企み。憎くき奴め。

〽と威猛高。

鱶七　イヤ〳〵、そりや無理ぢや〳〵。

入鹿　ヤア、うづ蟲めが何を知つて。小穢な奴。

鱶七　イヤ、何も知らぬけれど、代りになつて來たおれぢやに依つて、一番云ふのぢや。

入鹿　オヽ、鎌足が代りならば、これをも代りに試みよ。

〽側なる嶋臺押取つて、眉間へ發止と打ちつける、臺は微塵に飛び散れど、びくとも動かず。

ト側の嶋臺を打ちつける。鱶七、思ひ入れあつて

鱶七　エヽ、好い加減にだゝけさつしやれ。その厄拂ひの代りの、東方朔とやらに譬へたと云うて、業沸かすのか。年にあやからんせとこそ書いておこさつしやつたれど、盜人と書いちやないぞや。それに其方から、いろ〳〵な講釋を付けて、盜人詮索。知つた同士はすゞしいとやらで、盜人の覺えがあるかして、今の投打ち。アヽ、こなさんは正直な人さんぢやと、世間の噂。見ると聞くとは大きな違ひ。マア、そんな盜人と鎌どんを懇ろには、おれがさすまいわいの。仁體にも似合はぬ事さんすの。よもやさうぢやあるまいがの。但し、覺えがごんすか。イヤサ、さうかいなう。

〽文盲だらけも理窟は理窟。

どうでごんすの。

〽どうでごわるとやり込むれば、邪智の入鹿も苦笑ひ。

入鹿　ハテ、口賢く云ひ出げしよな。愛い奴、出かした。その褒美には、鎌足が實否を糺すまで、おのれは人質。最早籠中の鳥同然。歸る事はならぬと思へ。ヤア〳〵玄蕃・彌藤次、イザ、萩殿にて天杯を廻らさん。方々、來れ。

皆々　先づ、入らせられませう。

〽帳臺深く入りにけり。

ト管絃になり、入鹿先に官女付いて、二重の横、上手へ入る。玄蕃、彌藤次は上の方へ入る。鱶七、殘りこなしあつて

鱶七　ア、コレ〳〵、おれを人質に取らしやると、着物や道具と違うて、代物が飯を食ふぞや。併し、あの業腹では、大抵では喰はし居るまい。オヽ、空腹へ今の酒で、余ッほど醉が來たわい。ドリヤ、何所ぞで一寐入りやつてこまさう。

ト云ひ〳〵、二重へ上がり、こなしあつて

ヱヽ、何やら腰が痛いと思うたら、その筈ぢや。差しつけぬこの大小。らつちもない物差さしておこして、アタ面倒な。

〽と縁板へ、ぐわたりと鳴るは合圖かと、突き出す鑓は篠薄。

ト此うち、鱶七、大小を取つて下へ投げ出す。これをキッカケに縁の下より、鱶七の眼先へ鑓を二三本突き出す。鱶七、キッと思ひ入れあつて、いろ〳〵こなし。好き時分鑓は引いて取る。鱶七、思ひ入れ。

ドレ、一寐入り、やッつけようか。

〽構はずころり臂枕、不敵なりける男なり。

ト其まゝ眞中へ仰向けにどつかり寐る。

〽御所より外へ咲き出でぬ、若き子達が入れ替り、男見に來る愛想には、お茶よお菓子よ煙草盆、銚子土器持つて出で。

ト上の方より、官女梅の局、櫻の局、楓の局、松の局、各々三方土器、長柄の銚子を持ち出て來り、鱶七の左右へ座り

梅局　コレ、そた人に何御用にて、お召寄せありしかは知らねども

櫻局　さぞ待ち久しう、氣も盡きやう。

四人　九献一つ。

〽九献一つと差置けば、空寐返り腹違ひに、頰杖つくづ

く打眺め。
ト鱶七、フツと目を覺まし、寢返り腹這ひになり、左右を見て
鱶七　コレ、貴樣達は誰れぢや。
楓局　オヽ、我れ／＼は上樣の、身近く召さるゝ
四人　女子ぢやわいなう。
鱶七　なんぢや。短かい女子ぢや。ドレ、立つて見い／＼。
ト官女、立ち上がつて
四人　斯うかや。
ト鱶七、皆々を見て
鱶七　ドレ／＼、成る程、どれも／＼、よう凹んで居るなア。わいらは爰の内の飯炊きぢやな。でも、稀有な前垂れして居るなア、
松局　エヽ、つがもないざればみ事。わしらを問やる
四人　其方の名は。
鱶七　おれが名は、ふか、
四人　ナニ、ふかとは。
鱶七　ハテ、商賣の夜網に出りやア、沖でも磯でも行き當りに、好う寐るゆゑに、鱶七といふ、漁師々々。
梅局　ナニ、りやうしと云やるは、なんぞ書いてたもるのかや。
楓局　それなれば、繪や歌は嫌ぢやぞや。
松局　それ／＼、今お江戸で持てはやす、歌舞伎芝居のその中で、よう聞き及んだ團十郎や、半四郎の紋ならば
〽書いて欲しいとしどもなき、櫻の局摺り寄つて。
櫻局　さうして、下々は皆、其方のやうな男かや。好い男も、たんとあるであらうに。
梅局　地下の女子は羨やましい。芝居は見次第、好い男は持ち次第。
櫻局　ほんに又、この御所女には何がなる。
〽見るも／＼冠装束、窮屈で、急な逢瀬のその場では、衣紋の紐よ上帶よ、解くかほどくか大抵では、下紐までは手が屆かず。
梅局　ツイそのうちに花に風。
〽月に村雲障りが出來て。
櫻局　本意ない別れをするわいなう。
〽云ふさへ顏に紅葉の局。
楓局　中將や少將あたりと戀すれば、あのおひかけが邪魔になり、尻目遣ひが出來ぬ／＼。
松局　その上悋氣諍ひも、此方からは檜扇で

〽叩けばあつちは笏で留め。
楓局　つツぱり返つていきつたばつかり。
〽いらうても見ぬ逆鉾の、雫情も受けて見ず、辛氣々々で暮らすより、いつその事に玉の緒も、絶えなば絶えたがましであろ。
松局　もしもや誘ふ水しもあらば
四人　行きたいわいの〳〵。
〽皆々ひしと抱きつく、鱶七は業沸し。
ト四人、双方より取りつくゆゑ、鱶七、恟りして突き退け
鱶七　エヽ、怪體な衒妻めら。彼方へキリ〳〵うせあがれ。
〽けんもほろろに云ひ散らされ。
梅局　さつてもつれない戀知らず。
櫻局　玉の杯、底抜け男。
四人　不骨者め。
〽本意なく奥へ入りにけり。
ト官女四人、奥へ入る。
〽あたり見廻し長柄の酒、庭の千草にさら〳〵と、注ぎかくれば忽ちに、葉立も變じて枯れ萎む。

ト鱶七、思ひ入れあつて、官女が置いて行きし長柄の銚子を取つて、手拭を口に啣へ、下の秋草へ酒をかける。薄ドロ〳〵、秋草枯れて倒れる。鱶七、キツと思ひ入れ。管絃になり
鱶七　ハヽ、フヽ、ハヽヽヽ、最前の鎗と云ひ、又ぞろやこの毒酒。ハレヤレ、きつい用心ぢやなア。
〽狙打見やる庭先へ、弓と矢番ひばら〳〵〳〵、押取圍ませ宮越玄蕃。
トばた〳〵になり、仕丁大勢、弓矢を番ひ、玄蕃付いて出て來り、バラ〳〵と、鱶七を取卷き
玄蕃　如何にしても心得ぬ面魂ひ。尋ね問ふべき仔細あれば、引立て來れとの嚴命なるぞ。早く參れ。
鱶七　オヽ、呼びにごんせいでも、此方から行くのぢや。假初めにもびこ〳〵と、一寸でも觸るが否、腰骨踏み折り疝氣の蟲と、生別れさすぞよ。マリヤ、わり様達も、その鳥脅し放すが最期、一々に首引抜き、片ツ端から、ぬたにするぞ。ドリヤ、おれから先へ行きやんせうか。
〽事とも思はぬ大膽者、胸の張り弓矢襖を。
ト此うち、鱶七、二重より下り、以前の徳利を玄蕃にさしつける。恐れる思ひ入れ。

皆々　キリ〳〵歩め、
〽引明けてこそ入りにける。
ト管絃になり、仕丁取卷き、鱶七に玄蕃付いて皆々上の方へ入る。
〽されば戀する身ぞ辛き、出づるも入るも忍ぶ草、露踏み分けて橘姫、すご〳〵歸る對の屋の、障子にばらり打つ礫。
ト此うち、向うより、橘姫、振り袖衣裳、被衣をかぶり出て來り、直ぐに舞臺へ來り、奥へ礫を打つ。內にて
官女　ソリヤ、お歸りぢやわいの。
〽銘々庭に集ひ下り、枝折り開いて入れ參らせ。
ト奥より、官女四人、出て來り、思ひ入れあつて
梅局　おいとしや〳〵。御所のお庭の內さへも、ツイにおひろひなされぬに、戀なればこそ徒步裸足。
櫻局　さぞ朝露でお裾も濡れん。小袿に召替へさせませ。
ト云ひつゝ裾へ思ひ入れ。
ヤア、お振り袖に付いてある、この紅いの糸。
松局　ほんに不思議な。ドレ、手繰つて見ようわいな。
〽手繰り手繰ればくる〳〵と、糸に寄る身は蜘蛛の、雲井の庭へ引かれ來る、主は床しの。
ト官女、橘姫の袖に付いたる糸を手繰り寄せ、思ひ入れ。これにて、向うより、求馬、着流し、一本差し、苧環を繰りながら出て來り、直ぐに舞臺へ來る。橘姫、見て
橘姫　ヤア、あなたは求馬さまか。
〽ハッと驚ろく姫よりも、騷ぎさゞめく局達。
梅局　さつても見事引寄せた、七年物の戀人さま。
四人　ようこそお入り遊ばしました。サア〳〵此方へ。
求馬　イヤ、手前はツイ道通り。この苧環を拾ひ上げるや否、滅多に引かれ參つた者。何も存ぜぬ。お免しなされて下さりませ。
〽出づる向うを立ち塞がり。
松局　エヽ、手の惡いなされやう。わたしらに御遠慮は、內々のお話しなら。
楓局　ほんにそれ〳〵、わたしらは粹を通して
兩人　お次へ參じませうわいなア。
ト官女、奥へ入る。
〽姫はとかうの詞なく、差俯向いて思案の求馬。
求馬　ムウ。この御所の姫とあらば、聞くに及ばず、入鹿

の妹橘姫どの。

〽云はれてハッと胸せまり。

橘姫　入鹿が妹と知り給はゞ、よもお情はあるまいと、隠し包みし甲斐もなう、御存じありしあなたこそ、藤原の淡海さま。

求馬　ア、コレ。

ト押へる。思ひ入れ。合ひ方になり

女ながらも敵方に、我が名を知られては一大事。不便なれども助け難し。覚悟召され。

橘姫　成る程、お道理、御尤も。生きて居る程思ひの種、お手にかゝるがせめての本望。斯う云ふうちもお姿や、お顔を見れば輪廻が残る。サア〳〵、殺して下さりませ。

〽刃を待つたる覚悟の合掌。

求馬　心底見えた。が、誠夫婦となりたくば、一つの功を立てられよ。

橘姫　一つの功を立てよとは。

求馬　オヽ、入鹿が盗み取つたるこそ、神器の一つ十握の御剣、奪ひ返して渡されなば、望みの通り二世の契約。得心なければ叶はぬ縁。

橘姫　サア、是非もなや。悪人にもせよ兄上の、眼を掠めるは恩知らず。とあつてお望み叶へねば、夫婦と思ふ義理立たず。

〽恩にも恋は替へられず、恋にも恩は捨てられぬ、二つの道に絡まれて、この身は如何なる報いぞと、忍び歎いて在せしが。

オヽ、さうぢや。親にもせよ兄にもせよ、我が恋人の為と云ひ、第一は天下の御為。命にかけて仕負ふせませう。

求馬　オヽ、出かされたり。して又知らせの、合図はなんと。

橘姫　今宵御遊の舞に事寄せ、宝剣奪ひお渡し申さん。笛や太鼓の音を知るべ、奥の亭へお忍びあれ。

求馬　然らば我れはこの所に、暮るゝを指し待ち合さん。必らず首尾よう。

橘姫　合点でござんす。さりながら、もし見つけられ殺されたら、これがこの世のお顔の見納め。例へ死んでも夫婦ぢやと、仰しやつて下さりませ。

求馬　オヽ、運命拙なく事顕はれ、その場で空しくなるとても、盡未來際替らぬ夫婦。

橘姫　エヽ、忝ない嬉しいお詞。キツと我が夫。

求馬　コレ、吉左右待つて居りまするぞ。

〽番ひし詞縁の綱、引分れてぞ忍ばるゝ。

ト橘姫は奥へ、求馬は下座へ、兩人思ひ入れあつて別れ入る。

〽迷ひ逸れし片鶉、草の靡くを知るべにて、息せきお三輪は走り入り。

ト此うち、向うより、お三輪、苧環を持ち、走り出て來り

三輪　エヽ、この苧環の糸めが、切れくさつたばつかりで、道からとんと見失うたが。

トあたりへこなし。

ムウ。さてはこの御殿へ入りしよな。エヽ、誰れぞ、來よかし。

〽見咎められては事むづかし、如何はせんと逡らふうち、見やる門先へお端下が、被衣目深にしやな〳〵と、豆腐箱提げ歩み來る。

ト此うち、下座より、お端下お村、腰元の形、駒下駄、被衣を冠り、豆腐箱を提げ出て來り、花道の方へ行きかゝる。お三輪、思ひ入れあつて

申し〳〵。

〽と呼びかくれば、オツと呑み込み早合點。

むら　オヽ、お清所を尋ねるのなら、其所をこちらへ行う廻つて、そつちやの方をあちらへ取り、あちらの方をそちらへ取り、右の方を入つて、左の方を眞直に、脇目も振らず、滅多矢鱈にズツと行きや。

三輪　イエ〳〵、わたしが尋ねるのは、お清どのとやらではござんせぬ。年の頃は二十三四で、色白にくつくりとした、好い男は參りませんだかえ。

むら　オヽ〳〵、來たげな〳〵。それはお姫樣の戀男ぢやげなの。三輪の里から後を追うて來た所を、何かお局達が引ツ捉へ、有無を云はせず、御寝所へ。

〽ぐつと押込め、上から蒲團を被せかけ〳〵。

アヽ〳〵。

〽話のうち、内證の御祝言がある筈と、惡れぬうちから騒いでおじや。

オヽけなり。

〽こちとまで、内太股がぶき〳〵と、卯月あたりのはぢけ豆。

豆腐の御用が急ぐわいの。

〽しやべり廻つて出でて行く。

トお村、よろしくあつて、向うへ走り入る。お三輪、思ひ入れあつて

三輪　サア〳〵、ひよんな事が出來て來た。ほんに〳〵、油斷も隙もなるこつちやない。大それた人の男を盜みくさつて、なんぢや、いしこらしい、內祝言ぢや。あんまりな踏みつけやう。よい〳〵。その代り、何所に居やうと尋ね出し、求馬さまと手を引いて、これ見よがしに去んでのけるが腹癒せ。さうぢや。

〽行かんとせしが。

イヤ〳〵、はしたない者ぢやと、ひよつと愛想を盡かされたら。と云うて此まゝに、見捨てゝこれがどう去なれう。エヽ、どうせうぞ。

〽心も空、昇る階長廊下、行き交ふ女中が見咎めて、一人が留むれば二人立ち。三人四人いつの間に、友呼ぶ千鳥むら〳〵と、爰彼所から寄りたかり。

トお三輪、心ならぬ思ひ入れにて、そろ〳〵階へ昇り、二重へ行く。この時、管絃を打込む。恟りして思ひ入れ。奥より、以前の梅の局、櫻の局、楓の局、松の局出て來る。お三輪、二重より下りる。官女四人、付け廻して、よろしく思ひ入れ。

梅局　ツイに見馴れぬ女子ぢやが、其方はマア

四人　誰れぢや。何者ぢや。

三輪　ハイ〳〵、アノ、私しは內方の。

櫻局　アノ、私しは內方の。

四人　なんぢやぞいなう。

三輪　オヽ、それよ。先刻のお清どのは寺友達。奉公に出られてから、久しう逢はぬ懷かしさ、ちよつと見舞ひに寄りましたら、これはマア〳〵よう來た、上がれ、茶々呑め。さうして莨のめ。アノお上には、アタ滅相な、御祝言があると、聞けば聞く程、淚がこぼれて、アタおめでたい事ぢやげな。ほんに內方のやうな、好い樂の御祝言は、どのやうなものぢや。おのれヤレ拜んでなりと、腹癒よと、ツイうか〳〵爰まで參りました。どうぞお前方のお心で、聟樣をちよつと拜ませてもらうたら、忝なうござりまする。

〽云ふ顏も、恨み色なる紫の、由緣の女と早覺り、嬲つてやろと目引き袖引き。

ト官女皆々、いろ〳〵囁き合ひ、こなしあつて

楓局　マア〳〵、其方は仕合せな。斯う云ふ折に參り合せ、お座敷を拜むと云ふ事は、女の身では手柄者ぢやぞや。



三世中村歌右衛門のお三輪

松局　モシ〳〵、シタガ、わたしどもが呑み込んで、お座敷へ出すものの、なんぞさゝずばなるまいにな。
梅局　なんと皆さん。いつその事、この者に、酌取らさうではあるまいかいな。
三人　そりや、よからうわいな。
三輪　ア、申し。その酌とやらは。
梅局　オヽ、なんの其方達が知つてよいものかいの。
櫻局　いま爰で教へてやるわいの。
　ト有り合ふ嶋臺、長柄の銚子を取つて來り
幸ひ爰に、御酒宴の銚子嶋臺、有り合せの聟君樣には櫻の局。梅の局は嫁君役。
松局　私しどもは介添、待女郎。
櫻局　サア〳〵、これを持ちや〳〵。斯う持つのぢやわいなう。
〽櫻の局が指圖して、嫌がるお三輪に長柄の銚子、持たせ持ち添へ。
　ト皆々よろしく、櫻の局、お三輪の後より持ち添へて、長柄の銚子を持たせ
マア、杯は三つ重ね。嫁君へ二度注いで、左へ一足出るのぢやわいなう。不器用な女子ぢやや。

皆々　コレ、立つのぢやわいなう。
　ト櫻の局、始終持ち添へて杯事よろしく
櫻局　エヽ、なんぢやいの。うか〳〵せずと、よう覺や。
三度目に注いで聟君へ。
皆々　これはしたり、酒が溢れるわいの。
櫻局　不調法な。これから亂酒、唄ひ物。これも嗜みなければならぬ。
皆々　サア、四海波など謠やいなう。
三輪　エヽ。
梅局　エヽとは嫌か。そんなら聟さま拜ます事は。
皆々　ならぬぞや。
三輪　サア。
皆々　それが嫌なら、早う謠やいなう。
〽せつき立られ、これがマア、なんと
三輪　千秋萬歳の千箱の
〽玉の血の涙、膝詰まらせて泣いぢやくり。
松局　オヽ、めでたう褒れに出來ました。色直しになんなりと、梅が枝でも吹組でも
皆々　サア〳〵、所望ぢや〳〵。
三輪　エヽ、あられもない事仰しやりませ。

〽山家育ちの藪鶯、ほう法華經も片言ばかり、上り下りの仇口や、馬士の唄なら聞いても居やう。もう何事も、お免しなされ、どうぞ早う聟樣に。

梅局　サア、聟樣が見たくば、早う唄や。馬士の唄なら面白からうわいの。

櫻局　次手に振りも立つてしや。嫌なら此方もなりませぬ。

皆々　歸りや／＼。

〽歸りや／＼と引出され。

三輪　サア／＼／＼、なんの嫌と申しませう。

皆々　サア、そんなら唄や。

三輪　アイ／＼、唄ひまする。

〽唄ひますると泣く／＼も、涙に絞る振り袖の、緋の上手綱よ立ち上がり。

ト此うち、お三輪、愁ひの思ひ入れにて、よろしくあつて、手拭を持ち

竹にサア、雀はなア。

〽品よくとまるナ、とめてサとまらぬナ〽色の道かいなア、ヨエ、。

トよろしく振りあつて

爰なほてッ腹め。と此やうに。

〽申しますると打伏せば、皆々一度に手を打つて。

梅局　ホ、、、、申し皆さん、ほてッ腹ぢやと申しまするわいの。

櫻局　さつてもきつい嗜なみ事。好い慰みでござりましたわいなア。

楓局　私しども、ほてッ腹まで撚りましたわいの。

皆々　馬士どの、大儀。

〽云ひ捨てゝ、行くを驚ろき。

ト皆々行きかゝるを、お三輪縋りて

三輪　コレ申し、わたしもとも／＼。

〽振り放されてがばとこけ、跳ながら裾にしがみつき、引摺られて聲を上げ。

ト皆々振り切り行かうとするを、お三輪、縋りついて

そりや皆樣、お情ない。どうぞわたしも御一緒に、連れてござつて下さりませ。お慈悲でござります／＼わいなア。

〽お慈悲／＼と手を合せ、拜み廻るを拂ひ退け。

梅局　オ、しつこ。とても及ばぬ戀爭ひ。お姫樣と張合ふとは、叶はぬ事ぢや、措いてたも。

梅局　大膽女のしつけを致しませうわいな。
皆々　それがようござりませう。
〽耳を引くやら脇明より、手を差入れてこそぐるやら、抓つ叩いつ突き倒し。
ト皆々寄つて、お三輪をさん〴〵に弄る事よろしくあつて
梅局　サア、これでお姫様の、悋氣の名代納まつて、いよいよめでたい御祝言。
皆々　めでた〳〵の若松様よ。枝も榮えて葉も茂る。おめでたや。
ト云ひ〳〵、お三輪を、さん〴〵に苛なんで
千秋萬歳萬々歳。サア、參りませう。
〽局々へ入る後は、前後正體泣き倒れ、暫し消入り居たりしが。
ト官女四人、よろしく思ひ入れあつて奥へ入る。お三輪、やう〳〵心付いて
三輪　申し、お情ない。どうぞ一緒にお連れなされて下さりませ。
ト行かうとして、あたりを見て、官女皆々見えぬゆゑ、奥の方を見て、本意なき思ひ入れ。この時、奥にて
皆々　三國一の聟取り濟ました。しやん〳〵〳〵。おめでたう存じまする。
トこの聲を聞き、思ひ入れあつて
三輪　エ、胴慾ぢやわいの〳〵。男は取られその上に、まだ此やうに恥かゝされ、なんと堪えて居られうぞ。思へば〳〵つれない男。憎いはこの家の女めに、見替へられたが口惜しい。
〽袖も袂もくひ裂き〳〵、亂れ心の亂れ髮、口にくひとめ身を慄はせ。
エ、、妬ましや腹立ちや。おのれおめ〳〵、寐させうか。
〽姿心も荒々しく、駈け行く向うに以前の使者。
トお三輪、思ひ入れあつて、行きかゝる。この時鱶七、出て來り、キツと立ち塞がる。
オ、、其方も邪魔しに出やつたのぢやな。もう斯うなつたら、誰れが出ても構はぬ〳〵。其所退きや。
〽袖摺り拔けて駈け入る裾、しつかと踏まへ。
鱶七　コリヤ待て女。
三輪　イ、ヤ待たぬ。爰放しや〳〵。
〽放しや〳〵と身を踠く、髻攫んで氷の刃、脇腹ぐつと

刺し通せば、うんとのつけに倒れ伏す。

ト振り切り行くお三輪を鱶七、刀を拔き、お三輪の脇腹へ突き立てる。これにてお三輪、アツと其まゝ摚となる。

〽刀拔き捨てあたりを窺ひ目を配る、奥は豐かに音樂の、調子も秋の哀れなる。

ト鱶七、あたりへ思ひ入れ。音樂になる。

〽お三輪はむつくと起き返り。

さては姫が云ひつけぢやな。エヽ、むごたらしい。恨みは此方からあるものを、却つて其方から殺さする、心は鬼か蛇かいやい。オヽ、殺さば殺せ一念の、生き替り死替り、付き纏うてこの恨み、晴らさいで置かうか。

〽思ひ知れやと奥の方、睨み詰めたる眦も、叫ぶ聲音もうは枯れて、さも忌はしきその有樣、じろりと見やり。

鱶七　女喜べそれでこそ、天晴れ高家の北の方、命捨てたるゆゑに依り、汝が思ふお方の手柄になり、入鹿を亡ぼす手段の一つ。ホオヽ、出かしたなア。

三輪　なんと。賤しいこの身を、北の方とは。

鱶七　ホヽオ、其方が語らひ申せし方は、忝なくも中臣の長男、淡海公。

三輪　エヽ、して又わたしが死ぬるのが、いとしいお方の手柄となつて、入鹿を亡ぼす手段とはえ。

鱶七　ホヽ、その譯語らん、よつく聞け……彼れが父たる蘇我の蝦夷、齡傾むく頃までも、一子なきを憂ひ、時の博士に占はせ、白き女鹿の生血を取り、母に與へし、その印。

〽健やかなる男子出生、鹿の生血胎內に入るを以て、入鹿と名付く。

さるに依つて、彼奴が心を蕩かすには、爪黑の鹿の血汐と、疑着の相ある女の生血、これを混じてこの笛に、注ぎかけて、調ぶる時は。

ト懷中より笛を出す。

〽實に秋鹿の妻戀ふ如く、自然と鹿の性質顯はれ、色音を感じて正體なし。

その虛を計つて寶劍を、過ちなく奪ひ返さん、鎌足公の御計略。物蔭より窺ひ見るに、疑着の相ある汝なれば、不便ながら手にかけしぞ、……嫉妬に凝つたる乙女が生血、この名笛に注ぎかけて、調ぶる時は陰陽の氣、自ら寶劍に感じて、所在を顯はす不思議の術。

〽件の笛の六穴に、迸しる血汐請け注ぎ〳〵。
　ト右の笛へお三輪の血を注ぐ事よろしくあつて
今こそ揃ふこの幻術。この笛こそは入鹿をひしぐ火串ならん。ハ、ア、有り難や。
〽と押戴き、勇み立つたるその骨柄、實に藤原の身内にて、金輪五郎今國と、鍛へに鍛へし忠臣なり。
三輪　たう冥加なや、勿體なや。如何なる縁で賤の女が、さうしたお方と暫しでも。
〽枕交した身の果報。
あなたのお爲になる事なら、死んでも嬉しい、忝ない。
〽とは云ふものの今一度、どうぞお顏が拜みたい、例へこの世は縁薄くとも、未來は添うて給はれと、這ひ廻る手に苧環の、この主樣には逢はれぬか、どうぞ尋ねて求馬さま。
もう目が見えぬ。
〽懷かし戀しと云ひ死に、思ひの玉の糸切れし、苧環塚と今の世まで、鳴り響いたる横笛堂の、因縁斯くと哀れなり。
　トお三輪、よろしくあつて落入る。鱶七、思ひ入れあつて

鱶七　賤の女が不便の最期。せめて葬り得さすべし。
〽死骸に立寄るその折柄。
　トどん〳〵になり、捕り手四人、バラ〳〵と出て來り
捕手　曲者、動くな。
鱶七　小癪なるうづ蟲めら。この世の引導渡してくれん。
捕手　やらぬワ。
　トどん〳〵、早笛になり、鱶七、皆々を相手にちよつと立廻り、よろしくあつて、鱶七、眞中に、皆々前へ取卷く。この見得、片シヤギリにて、
　幕

妹背山婦女庭訓　（終り）

由良湊千軒長者

解説

寶暦十一年五月、竹本座初演。作者は竹田小出雲を筆頭に、近松半二、三好松洛等。

「五說經」といふ名がある。說經節に最も著つの物語で、苅萱、梅若松若、愛護の若、小栗判官、それとこの三莊太夫である。三莊太夫と安壽對王の傳說は、早くから斯うして脚色され、幾多の淨瑠璃歌舞伎を生んでゐるが、中で本篇が最も聞え、最も數多く舞臺に上つたものである。「山桝太夫戀慕湊」「山椒太夫葭原雀」「三莊太夫五人孃」「由良千軒鶏冤湊」なぞ、いろ／＼あるが、今日に殘つたのは「由良湊千軒長者」だけである。尤もこれとて「三莊太夫五人孃」を改作したものに過ぎない。

原作は、前中後の三段物であるが、歌舞伎に移入したのは前中だけである。後段は單に大江時廉を討伐するだけのもので、中心は由良の湊の場である。殊に「鶏娘」といふ新しい思ひつきが受けたので、これに依つて後まで殘つたと云つてもよい。

これを江戸で初めて上演したのは、天保八年七月の市村座で、「三莊太夫鈍鶏蔵」と題を据ゑ、丸藏の藏之進と三莊太夫、羽左衞門の權六とおさんで大當りを取り、それから度々上演され、おさんと權六は早替りの役と型がきまつたのである。のち嘉永五年四月、河原崎座で「昔談柄三莊太夫」といふ名題で上演したのが、爰へ收錄した臺本で、多少の訂正はあるが、大體は原作と變りはない。この時の役割は左の通りであつた。

三莊太夫、鬼柳一學（七世市川海老藏）岩木判官（尾上新七）安壽姫（市川猿藏）對王丸（河原崎長十郎）大和田藏之進（市川九藏）大江時廉（淺尾奥山）由良三郎（市川廣五郎）女房荷、朧月の方、女房櫻戸（市川團之助）梁川數馬（市川高麗藏）黒石主稅（松本國五郎）娘おさん、山岡權六（嵐璃寬）權六女房おらち（岩井粂三郎）元吉要之介（八世市川團十郎）

由良湊千軒長者

序幕

島原廓の場
三條松原の場

役名――大和田藏之進。梁川數馬。大江郡領時廉。岩木判官政氏。黒石主税。牛淵段八。馬田傳六。非人、山岡權六。仲居おたつ。藝妓菊野。三莊太夫。

本舞臺、一面の平舞臺。向う長暖簾、左右とも折り廻し塗り骨障子屋體。上下とも出入りあり。すべて島原揚屋座敷の體。爰に舞子二人、振り袖にて扇を持ち、舞を舞うて居る。上手に黒石主税、袴着付け、大小の形にてこれを見て居る。牛淵段八、馬田傳六、着流し大小の形にて杯押し合うて居る。藝者菊野、酌をして居る。この側に太鼓持ち、顔へ扇をかざし、唄を唄うて居る。臺の物酒肴を取散らし、仲居三人酌をして居る。おたつ、三味線彈いてゐる。この居並びよろしく、上方唄の切れにて賑やかに幕明く。

太鼓　ヨウ〳〵、こちの人〳〵。
皆々　ヤンヤ〳〵。
ト兩人よろしく振りあつて納まる。これより踊り地になり
舞子　オヽ、しんどやなア。
菊野　ほんにお前方、ちつと見ぬ間に、ゑらい者になつたぞえ。
舞一　オヽ辛氣、菊野さん、何云うてぢやなア。
舞二　たんと云うておくれや。
菊野　イエ〳〵、ほんまぢやわいなア。
段八　コリヤ〳〵菊野、その筈ぢや。皆身共が仕込み手ぢや。なんと、きつい者になり居つたであらうな。
菊野　そんなら、お前さんのお仕込みかいなア。
仲二　ほんにお前方、好いお師匠さんを持ちなさんして
仲三　それ〳〵、仕合せ者ぢやわいなア。
舞一　アレ、まだ云うてかいなア。
舞二　わしや否いなア。

傳六　イヤ〳〵、なんぼう否と云うても、水揚げは牛淵どのが受込みぢや。ナアおしげ。

仲一　ソレイナア、どうで一度は。と云ふうちにも、好いお客取つてぢやなア。よう頼んだがよいわいなア。

たつ　ヨウ〳〵、頼まれて様〳〵。

段八　マヽ、煽てゝくれな〳〵。アヽ、暑や〳〵。

ト段八、無性に扇遣ひする

主税　ヨウ〳〵段八どの、イヤ、貴公は素早い男だ。もう口を掛けたか。身共は又そこらに執心をかけた女子がござるが、一向に相手になり居らぬで、殆んど心配仕るて。

段八　成る程、貴殿程の武士も、アヽ、戀ゆるに。

主税　お察し下され。

トこなし

たつ　アヽ、最前から三味線弾いてしまうても、誰れも大儀とも云うてはくれず、色氣は猶なし、杯は下されず。アヽ、年は取るまいもの。南無阿彌陀佛々々々々々々。

トこなしあつて、下手にある茶碗へ銚子の酒をつぎ、がぶ〳〵飲んで居る。

太鼓　時に大分、お座敷が滅入つて參りました。なんとこれから私しが、鰐口踊りと申すのをお目にかけませう。

女皆　そりや面白からうわいなア。

太鼓　さらばこれにて、鰐口踊りの始まり〳〵。

ト大平の蓋を持ち立ち上がり、踊らうとする。

主税　アヽ、コリヤ〳〵、われが踊りでは何分にも恐れる。下に居やれ〳〵。

太鼓　左様なら皆様を、一呑みに致しませうか。

主税　かしましいと申すに。

段傳　エヽ、控へて居やれ。

太鼓　へエヽ。

ト下に居る。主税こなしあつて

主税　コリヤ〳〵菊野、これへ參れ。身が用事がある。ズツと參れ。

菊野　エ、。アノわたしにかえ。イエ、わたしや矢ツ張り妾が勝手でござります。

主税　イヤサ、身共が用事があると申すに。

菊野　ハアイ。

ト矢張り立たぬゆゑ、段八傳六立つて菊野の側へ來て

段八　アヽ、コレ、さりとては愛想のない。あれは主税どのがおてまへに、何か密々の御用があると御意なさる程に、

早うあれへ參れ〳〵。
傳六　平日から何かと御恩を蒙むる主税どのの事。我れ我れが頼み。サア菊野、あれへ參つてくりやれ。
菊野　成る程、お前樣方のそれ程までに、お頼みぢやけれどなア。
段八　參る事はならぬと申すか。
菊野　アイ。マア、そんなものでござんすわいなア。
段八　うぬ、憎くい女郎め。武士に隨分口叩かせ
傳六　否だと吐かしたればとて、其まゝに置かうと思ふか。
段八　イザ、お手貸されい。此まゝに主税どのの側へ引立てませう。
傳六　それがよろしうござる。
段傳　サア、女郎め、立たう。
　ト兩方より菊野を引立てようとするを
仲一　マア〳〵待つて下さんせ。
　ト双方を引分け、こなしあつて
お前樣方も何の眞似でござんすえ。コレ、なんぼ藝妓さんは、お前樣方のお揚げなされても、座敷の內は仲居の預かり。惡い事お氣に逆らふ事あらば、斯う〳〵ぢやと、わたしになぜ云うては下さりませぬ。ハイ、餘り手籠めにして下さんすな。ハイ、なりませぬわいな。コレ、菊野さん、お前もお前ぢや。お客に逆らふ事があるものかいな。ちと嗜なんだがようござんすぞえ。
菊野　サア、段々とのお前の扱ひ、嬉しうござんすわいなア。
段八　なんの事だ。客の贔屓をしもせずに、藝妓の肩持つ仲居とは。
傳六　神武この方開くが始めてだ。
段八　とても色氣に緣なき我れ〳〵。
傳六　とは云ふものゝ。
　ト菊野の側へ行かうとするを
主税　御兩所、これへござらつせえ。
段八　でも餘りな仕方。
傳六　それぢやに依つて。
主税　ハテサテ、木折りに行かぬが里の花。否ぢやと申さば其まゝに差措かれい。また某の胸にござれば、これよりは又手を變へ品を變へ、口說き落して閨の花。
段八　成る程、こりや一段と好い御思案。
傳六　それも手活けにならぬ時は。

主税　是非に及ばぬ落花狼藉。
菊野　エヽ。
　トこなし
主税　サヽ、また好い思案もござらうわえ。
段傳　御尤も。
主税　サア、わつさりと酒にせう。
兩人　よろしうござらう。ソレ、杯々。
　ト兩人、杯を持つて皆々の前へ置く。
仲居　アイ〳〵。
傳六　銚子持て〳〵。
　トこの時おたつ、好き程に醉うたるこなしにて、よろしく銚子を持つてべつたり座り
たつ　お酌はいつでも相變らず、おしきせ振りに、たぼのわたしが。
　ト此うち段八、杯を取り上げる。おたつ、酌をしながら、につたりと嫌らしきこなし。段八見て
段八　アヽ、コレ〳〵、その舌ゝるい面は取措け〳〵。何處で喰うたやら、熟柿の匂ひがする。パッと其方へ寄つたり〳〵。
　トおたつ、こなしあつて

たつ　アノ、さりとては戀知らず、なんぼ年寄りでも、昔は花を咲かせた仲居でござんす。それが嘘なら、しつぽりと抱きしめて御覽じませ。自慢ぢやないが伽羅の香は、幾夜留めても留め飽かぬ。色になる氣はないかいなア。オヽ辛氣やと袖をふる。
　ト淨瑠璃やうによろしく云ふ。
主税　ハヽヽヽヽ、なんと御兩所、しつかい氣狂ひの沙汰でござる。
たつ　なんぢや氣狂ひぢや。オヽ氣狂ひぢや。氣も狂はいでなんとせう。サア、我が子を返せ。我が子を返さにや噛みつくぞ。喰ひつくぞ。
　トそこら駈け廻り、こなしあつてトヾ撥と横に寢る。
　皆々見て
菊野　オヽをかし。おたつどんのいつもの惡酒。
仲一　ソレイナア、たうとう寢てしまうたわいなア。
仲二　生醉でもござんせう。最前からの花椀酒。
菊野　それはさうと、斯うして居るうち、政大臣樣のお出に間もあるまいぞえ。
仲一　サア、皆打揃うて、お迎ひに行かうではござんせぬか。

太鼓　成る程、それがよろしうござりませう。

菊野　サア皆さん、主税さん、お二人さん、これにゆるりと。

段傳　勝手に仕居れ。

仲一　ても、悪い受けでござんす。

菊野　サア、行かうわいなア。

トこなしあつて上方唄になり、この同勢皆々、花道へ入る。後に主税段八傳六、おたつ殘りこなし。主税、皆々の後見送り

主税　もうよい〳〵。おたつ、起きぬか。密かに頼む仔細がある。

トこれにておたつ起き上がり、あたりを見て

たつ　主税さん、最前あなたがお頼みの、彼のお人と仰しやるのわえ。

主税　只今迎ひに參つた政大盡、彼奴を馬鹿者に仕立てる魂膽、廓に馴れたる其方なれば、何分ともに頼んだぞよ。

たつ　そりや氣遣ひはござんせぬ。客を蕩して放埒者に仕立てるは、憚りながらわたしが胸に。

主税　それ聞いて、身共も安堵いたしした。

たつ　左様ならば、わたしは奥へ參つて仕拵らへ。併しこの事うまうやつたら、御祝儀は澤山下さりませうな。

主税　氣遣ひ致すな、萬事は胸に。

たつ　モシ、正の物がようござんすぞえ。

ト小判の形を見せる

主税　ハテサテ慾氣は。

たつ　エヽ。

主税　イヤサ、早う行きやれと申すに。

たつ　ハテ、參りまするでござりますわいなア。

トこなしあつて唄になり、奥へ入る

主税　ハテサテ、氣さくな奴ではあるわえ。

トあたりへ思ひ入れ。合ひ方になり

ナニ御兩所、郡領公の仰せを受け、貴殿方の助力を頼み、岩木の當主と申しながら、柔弱者の左衞門政氏、彼奴まで片附けるその爲に、保養と拵らへたる大江公のお進めゆゑ、心を措かず日毎の大酒。側に附き添ふ某とても、上邊は忠臣顔に見せ、そゝり立てたる廓の酒。マア大半は馬鹿者に、仕立てたではござらぬか。

段八　左様々々、事成就のその上は、我れ〳〵が立身出世。時廉公の御前よしなに。

傳六　お執成しの儀を、何分願ふは黒石氏、この上ともに。

主税　氣遣ひ召さるな。身に替へても承知いたして罷りある。

トこなし。この時、花道揚げ幕にて

女皆　サア／＼早う、ござんせいなア。

ト主税、向うを見て

主税　ありや殿を迎ひの女が聲。イザ御兩所、お出迎ひ。

役傳　承知いたした、イザ主税どの。

トいづれも出迎ふ事。花道揚げ幕にて

女皆　サア／＼、ござんせいなア。

ト誂らへ鉦入り、出の唄、賑やかなる鳴り物を冠せ、花道より政氏、羽織衣裳の拵らへ、少し醉うたるこなしにて、舞子兩人にて手を引いて出て來る。後より若い者大勢にて、政氏の後より日傘をさしかける。この次、梁川數馬、衣裳上下大小、誂らへの寶塔の箱を抱へて出る。後に菊野仲居、附き添ひ出る。これと同時に東の假花道より、時廉、羽織衣裳大小形、紺看板の中間一人附いて、双方よろしく花道にとまり

政氏　すめらぎの御代榮えんと東なる、陸奥山に黄金花咲くと詠ぜしは、それぞ隔つる金華山。

時廉　處は名に負ふ島原の、花を商ふ君達が、誰が結び手を〆めもみぢ。

政氏　白きを見ては夜な／＼に、つどひ集まる廓の賑ひ。

時廉　花を集むる一里は、實に今の世の喜見城。

政氏　樂しみ極まる廓の花、ハテ、一入の詠めぢやなア。

數馬　ハツ、君の御諚の如く、全盛並ぶ方もなき、いづれ劣らぬ花菖蒲。彼の古語にも申す如く、傾城傾國とは、よく申したものでござりまする。

政氏　ア、さりとは堅い／＼。其やうな事、取措け／＼。

中間　先づ／＼あれへお越しなされて。

時廉　ハテサテ不粹な床急ぎ。

數馬　イザ、我が君樣。

皆々　サア、ござんせいなア。

ト矢張り右の鳴り物にて、兩花道とも舞臺へ來る。主税こなしあつて

主税　これは／＼我が君樣には、早くのお入り。御酒宴の設け、しつらひ置きましたれば、イザ先づこれへ。

三人　お通りあられませう。

政氏　出迎ひ大儀。

ト政氏、上手へ通る。皆々よろしく住ふ。此うち主税、奥へ向ひ

主税　御酒宴の設け、急いでこれへ。

ト奥にて

たつ　アイ〳〵。

ト此うち数馬、寶塔の箱を好き所へ直し

数馬　ハツ、我が君様へ申し上げ奉りまする。遊里とは申しながら、全盛とは、ハテ、よく名附けましたものではござりませぬか。

主税　アイヤ〳〵数馬どの、そりや何を云はるゝ。御遊興の妨げ、控へ召されい。

ト此うち時廉、笠を取り、主税を見てちよつと囁き合ふ。此うちおたつ、杯を運ぶ。

ヤ、あなた様は。

傳段　大江の郡領時廉さま。

時廉　ムウ、主税を始め其方達も、早これへ参つて居つたか。

主税　ハツ、我が君、郡領公お出でにござりまする。

政氏　ナニ、郡領どのが。ヤ、誠に貴殿は。

時廉　岩木氏、貴殿には早々との廓入り。身も今日は鬱散の、鬱陶にあづからんと存じ、只今これへ。

政氏　その四角四面は取措いて、只酒の事〳〵。誰ぞあるか、酌を取れ〳〵。

菊野　アイ〳〵、わたしがお酌をしようわいなア。

トなみ〳〵とつぐ心。政氏、杯を持ち

政氏　オヽ、其方は大分強い酌ぢやなア。ハテ美しい。

ト呑み干して

イザ、郡領公。

菊野　ハイ。

ト菊野、杯を持ち、時廉の側へ持ち行く。時廉、受けて

時廉　これは大杯。コリヤ〳〵、身は其やうには行けぬわい。

政氏　アヽ、さりとては悪い手前。コリヤ〳〵、只今予に酌いたせる通り、ズツとつげ〳〵。もつとつげやい。

菊野　アイ〳〵。

トまた酌をする

時廉　これは迷惑々々。併し、御懇のこの杯、一杯受けぬも何とやら。サヽ、つげ〳〵。

段八　左様々々、折角我が君の思し召しなれば

傳六　こりや、一旦召上がられずばなりますまい。

主税　ヨウ〱、こりや郡領さまには、きついお樂しみでございまする。

三人　ヤア、見事々々、恐れ入つてござりまする。

ト時廉グッと呑み干して

時廉　ヤ、なか〱大盞。イザ、政氏公、この杯は、失禮ながら其許へ返杯。

政氏　イヤ、返杯とは忝ない、ドレ、頂戴いたさうか。

ト杯を取る

數馬　アイヤ我が君、その杯、暫らく。

政氏　なんと。

主税　コリヤ、時廉公のお杯、何ゆゑあつて

皆々　止め召さる。

數馬　サア、お止め申すはこの程より、日夜分たぬ御酒宴に、彼の蜂龍の大杯にて、酒戰と行付けし御戲れ。宿醉日毎に及びなば、例へ百藥の長たりとも、御身の害にならんは必定。そこを存じてお止め申す。憚りながらその大盞。お控へあつて然るべく存じ奉ります。

時廉　ハ、、、、かゝる席にて諫言とは、場所を知らぬあの若者。併し、忠義なものぢやなア。

ト なじろやうに云ふ。

主税　左樣々々、人並々の諫言立は、まだ早い。出過ぎずと、すッ込んでござれサ。

數馬　ヤア、詞が過ぎる主税どの、御前のお側にありながら、諫言でも申す事か、共に踊り狂ひめさるゝとは、底意の知れぬ貴殿の胸中。

主税　云はして置けば、ずばら〱と、時廉公の御前と云ひ、殊に君の御前にて、底意の知れぬ胸中とは、何を以て何を證據に。

數馬　さればサ、それ聞き咎める程ならば、何ゆゑ諫言入れめされぬ。

主税　それを汝に習はうか。君は正しく大國の主、これればかりの御遊興。

數馬　ソレ、それが矢張り不忠の第一、千丈の堤も蟻の穴より。

主税　ヤア若輩者が何を存じて。重ねて申さば手は見せぬぞ。

數馬　見事貴殿が。

主税　おんでもない事。

兩人　なにを。

ト立ちかゝるを

政氏　兩人控へい。

兩人　でも。

政氏　ヤア、立騒いで尾籠千萬、控へ居らう。

兩人　ハ、ツ。

ト控へる

政氏　イヤ、埒もなき事を申し募り、無禮の段々御免下されい。

時康　なにサ／＼、かゝる遊里に何の禮儀、その斟酌には及ばぬ事。それは格別、イヤナニ岩木氏、この度今上皇帝の御願ひに依つて、日本國中の國境六十六軒へ、國分寺を造營せよとの勅諚。兩人に仰せつけられ、西三十三ケ國の奉行は某、東三十三ケ國は貴殿の受取り、普請も大半成就して殊の外お上の喜び、その上御領分の金華山より、出現ありし珊瑚珠の寶塔。類稀れなる寶と忝なくも禁庭よりの御所望。即ちその寶塔、今日某受取つて、禁庭へ持參いたすはず、定めて御用意でござらうな。

ト云へども答なきゆゑ

コレサ岩木氏、イヤサ寶塔御持參召されたか。

政氏　成る程、寶塔の儀承知いたした。即ち館へ歸るも面倒さに、數馬めに持參いたさせ、後程お渡し申すであらう。コリヤ／＼數馬、寶塔を、座敷に直し置け。

數馬　ハツ、畏まつてござりまする。

トこなしあつて

時康公始めいづれも、御免下され。

ト數馬、思ひ入れあつて、唄になり寶塔を持ち奧へ入る。

時康　然らば寶塔は詞に隨ひ、後刻受取り持參いたさう。イザ、この上は所を替へて今一獻。

政氏　イヤ、拙者はこれにて暫時睡眠。お構ひなくとも、サ、お先へ。

時康　然らば身共は奧へ參つて。イヤナニ主税兩人、酒宴の設け。

三人　趣向いたすでござりませう。

女皆　してわたしらは。

時康　共々參つて酌でも取れサ。

女皆　そんなら皆さん。

三人　時康公。

時康　ドリヤ、もてなしにあづからうか。

ト唄になり、皆々、奥へ入る。政氏起き上がり咽喉の乾くこなし

政氏　酔醒めの水の味ひ下戸知らず、コリヤ、誰ぞあるか。水を持て。

トこの時奥にて

蔵之　畏まつてござります。

トこれにて政氏また横になる。合ひ方になり、蔵之進、上下大小にて、三方に袱紗包みの遺言状を載せ、持ち出て来る。政氏見て

政氏　ヤ、其方は大和田蔵之進、何用あつてこれへ参つた。

蔵之　ハツ、御所望の水を差上げんと存じ。

政氏　なんと。

蔵之　君は舟、臣は水、水よく舟を浮ぶといふ、臣が誠のこの水にて、宿酔の眠りをお覚ましあれ。

ト政氏の前へ三方を出す。政氏これを見て

政氏　ヤ、こりや父が遺言状。

蔵之　サア、御父君政春公、我れなき後、政氏が行ひ悪しき事あらば、我れに代りて諫言せよと、拙者に下さる末期の御書。

政氏　この遺言状を持参なせしは。

蔵之　御諫言を入れん為。

政氏　ヤ。

ト思ひ入れ。蔵之進、詰め寄つて

蔵之　チエ、お情ない、あなた様はなア

ト誂らへの合ひ方になり

改め申すに及ばねど、君この度の御上京は、禁庭よりの勅命にて、一ヶ国に一ヶ所の、国分寺を造営なせよと、疎かならぬ御役目。その造営も等閑に、日夜廓へ御遊興、側へ佞人讒者ども、ふるなの辯に憐ますとも、五十四郡の岩木の御家、御大切に思し召さば、御止まりあるべき筈。数百里隔てし陸奥まで、御不行跡の相知るれば、同じ都の大内へ、如何で知れざる事あらん。役目疎略のお咎めあらば、数代続きし岩木のお家、没収あらんも計られず。さある時には御先祖へ、如何ばかりなる御不孝ならずや。かゝる事とは御存じなく、御台を始め安寿姫さま、君の御無事を祈りの為、氏神岩木八幡へ、お庭に於て日毎の御千度。見るに忍びず夜を日につぎ、御諫言を申し上げんと、今日只今都へ参着。何卒拙者が御諫言お用ひあつて、片時も早く御帰国願ひ奉る。但し国家の

爲を思し召さず、佞人讒者の詞を用ひ、拙者が諫言お用ひなくば、三度は愚か、百度千度、お聞入れあるまでは、この場を去らぬ藏之進。イザ、御返答が承りたうござりまする。

トきつと云ふ。政氏、感心の思ひ入れあつて

政氏　ア丶、臣なればこそ面を犯し、よくこそ諫言。

トこの時、上手屋體より時廉窺ふ。政廉、顏見合せ、氣を替へて

イヤ、憎くき諫言、聞く耳持たぬ。コリヤヤイ、酒池肉林の奢りに長じ、日夜廓に遊興なすとも、勅命蒙むる國分寺造營、首尾よく成就せば、身が役目の越度にならんや。五十四郡の領主たる、岩木の判官政氏が、か丶る遊戲は些細な事。入らざる諫言なさずとも、汝が職たる國家の政治、なぜ守つては居らぬのぢや。イヤサ、何ゆゑ打捨て出府なせしぞ。

トきつと云ふ

藏之　サ丶、その守るべき家國も、ついには沒收、改易となつては、益なき下世話の譬へ、轉ばぬ先の杖とやら。

政氏　ヤア、又してもいらぬ繰り言。達て申さば手は見せぬぞ。

藏之　ムウ。お手討ち合點。一命捨て丶も御諫言、申すは即ち臣下の役。

政氏　まだ〱申すか。無禮者めが。

藏之　アイヤ、無禮にあらぬ、御遺言。

政氏　ヤ。

藏之　但し、御遺言をお背きあるか。

政氏　サア、それは。

藏之　お聞入れあるか。

政氏　サア。

藏之　サア。

政氏　サア〱〱。

藏之　御返答が、承りたい。

トきつといふ。政氏、時廉に思ひ入れあつて、わざと氣色を變へ

政氏　父が遺言、いつかな聞かぬ。

ト立ち上がる。藏之進、袖を捕へ

藏之　すりや、お聞入れはござりませぬか。

ト政氏、袖を振り拂ひ

政氏　くどい事を。

ト持つたる扇を振り上げる。時廉、ツカ〱と出て政

氏を留めて

時廉　アイヤ岩木氏、お待ちなされい。最前からの一部始終、一間に於て承つた。イヤ、御立腹尤も至極。ヤイ藏之進、其方は文武に秀し侍ひと承つたが、大きな相違。コリヤ、火は火を以て鎭めるといふ所へ心が附かぬか。麁忽者めが。岩木氏は陸奥にて、五十四郡の主でないか。かほどの遊興なしたとて、それを放埒惰弱などゝは、科なき主を家來の身で、科人に落す道理。なんと岩木氏、左樣なものではござらぬか。

政氏　如何にも貴殿の仰せの如く、遊里で眞面目な意見だて。とんと浮世を知らぬ堅造。折角醉うたを醒ましてのけた。

時廉　イヤ、かゝる不粹にお構ひなく、イザ、設けの席へ。

政氏　御同伴仕らう。

トひよろ／＼として立ち上がる。時廉、藏之進を見て

時廉　コリヤ藏之進、人聞けがしの忠義顏、この郡領は呑み込めぬ。誠忠義を思ひなば、火を以て火を鎭むる工風。さう威張らずと共々に、奥へ參つて座敷を持ちやれ。イヤ、それとても陸奥の、武骨者ではなるまいわい。ハ、ハ、、、。イザ、岩木氏、奥へ參つて。

政氏　色とりどもに酌を取らせ。

時廉　今宵は夜とともに

政氏　呑み明かさん。

トこれにて藏之進、思ひ入れあつて

藏之　すりや、かほど申しても。

政氏　廓の酒には家藏も。

藏之　ヤ。

政氏　見返られぬワ。ハ、、、、。

ト唄になり、政氏、藏之進に思ひ入れあつて、時廉附き奥へ入る。後合ひ方。藏之進殘り、キツと思ひ入れありて、遺言狀を懷中なし

藏之　さては佞人黒石等が、お側にあつておもねりへつらひ、放埒惰弱になしたるか。打捨て置かばお家の大事。仕儀に依つては命を捨てゝも。ムウ。さうぢや。

ト奥へ行かうとする。數馬、奥よりツカ／＼と出て

數馬　藏之進さま、暫らく／＼。

藏之　ヤ、其方は數馬か。ムウ。

ト思ひ入れあつて數馬を引きつけ

コリヤヤイ數馬、若年なれど其方は、忠臣無二の者なる

ゆゑ、一學どのの目鏡にて、この度都の御供なし、朝夕お側にありながら、斯くお身持ち不行跡を、なぜ御諫言申し上げぬぞ。其方も廓の色香に迷ひ、佞人讒者に組みなせしか。見下げ果てたる、うつけ者めが。

ト扇にて打ち据ゑ突き放す。數馬、思ひ入れあつて

數馬　そのお疑ひはさる事ながら、我が君政氏公には、誠御放埒にはござりませぬぞ。

藏之　ヤ、なんと。

ト合ひ方きつぱりとなり、兩人あたりへ思ひ入れあつて

數馬　サ、藏之進さまには御存じなき、お家の系圖、疾より紛失。密かに詮義なしたるところ、郡領どのが仕業ゆゑ、わざと向うの手段に乘り、本心惰弱と見せかけしは、系圖を奪ひ返さんばかり。只今君にも御本心、お明しなされん御所存ならんが、時廉どのを憚りて、わざとつれなき今のお詞。それと察して君の御所存、お明かし申す、藏之進さま、疑ひ晴らして下さりませ。

トこれにて藏之進、思ひ入れあつて

藏之　ムウ。すりや、御本心御放埒にてはあらざるか。チエ、忝ない。これでこそ我が君樣。斯くとは知らず今の無禮。イヤ、數馬どのにも打ち打擲、拙者が麁忽は免して下され。

數馬　イヤ、打つも打たるゝも私しならず、君を思ふ忠義ゆゑ。

藏之　ア、同じ臣下でありながら、君を遊里へ誘ひて

數馬　共に廓の色酒に

藏之　性根を亂す輩もあり

數馬　藏之進さま。

藏之　數馬どの、賴み少なき

兩人　世の中ぢやなア。

ト兩人思ひ入れ。この時、奥にて

菊野　數馬さん〳〵、殿さんが呼んでぢやぞえ。

數馬　ハッ。只今それへ。

菊野　數馬さん〳〵。

數馬　エ、忙しない。イヤナニ、藏之進さま、お家に仇なす時廉どの、して、貴殿の御心腹は。

藏之　身共が心底。コレ。

ト囁く

數馬　フム。すりや、お命を捨てられても。

藏之　手延びにならぬ怨敵時廉。

數馬　天晴れ忠義の其許ながら、國に御座ある櫻戸どの、まして幼き民千代どの、歎きの程も思し召し。

藏之　アイヤ、妻子に引かるゝ性根は持たぬ。心にかゝるはお家の政治。もし某相果てなば、若年なれど貴殿にも、兄一學の指圖を受け、共に國家を賴み存ずる。

數馬　御尤もには候へども、何卒お命全うして。

藏之　ハテくどい。變ぜぬ魂ひ。

數馬　ではござれども、

藏之　エヽ、お家の大事にや替へられぬわえ。

數馬　ハア。左樣なれば藏之進さま。

藏之　萬事穩密。

數馬　ハツ。御免。

ト唄になり、數馬、奥へ入る。あと踊り地、引違へておたつ、密書を持つて出て來り

たつ　主税さまが大事な密書ぢやに依つて、御家來林平さまに、手渡しせいと仰しやつたが、あの林平さまは、オヽ、それ〳〵、最前ちよつと行つて來ると云うてぢやが、まだ戻らしやんせぬかいなア。

ト藏之進は上手に思案して居たりしが、これを聞いて

藏之　女中、その書面ちよつと見せやれ。

たつ　イエ〳〵、これは大事の手紙、人手に渡す物ぢやござんせぬ。

藏之　エヽ、見せやれと云ふに。

たつ　イヽエ、ならぬわいなア。

藏之　エヽ面倒な。

ト藏之進、密書を引ッたくる。おたつ、恟りして

たつ　それをどうするのぢや。

トかゝるを突き廻して、ちよつと上手へ突きやり、手早く密書を讀む事あつて、恟りなし

藏之　さてこそ〳〵。油斷ならざる密書の文言。歸りは正しく三條松原。

たつ　それを此方へ。

ト又かゝるを手を捻ち上げ

藏之　殊に依つたら主從ともに。

たつ　エヽ、放さぬかえ。

ト振りほどき、藏之進、突き廻して當てる。おたつ、たぢ〳〵となる。

藏之　丁度宵闇、今宵を過さす

ト向うを見込み

ソレ。



嘉永五年四月河原崎座所演番附

ト藏之進、花道へ入る。おたつ倒れる。

段八　黑石氏。

傳六　主稅どの〳〵。

主稅　御兩所、それへ同道いたさう。

トかすめし踊り地にて、主稅先に段八傳六、少し醉ひたる體にて出て來り、おたつに爪突き

段八　ヤ、こりや仲居のおたつが。

傳六　如何いたした。

主稅　呼び生けさつしやれ〳〵。

ト段八傳六はおたつを引起し、活を入れる。おたつ、心附き

たつ　大事のそれは、渡さぬ〳〵。

ト主稅へかゝる

主稅　エ、、何を致す。身共ぢやわえ。

トおたつ、心附き

たつ　ヤ、、主稅さまか。遲かつた〳〵。最前の大事の密書を、アノ爰に居た侍ひめが。

主稅　何處に居つた侍ひ。ムウ。さては藏之進めに、あの密書を奪ひ取られしか。

三人　ヤ、、。

段八　察するところ、大半氣取りし藏之進。

傳六　殊に密書を披見いたさば。

主稅　イヤ〳〵、氣遣ひ致すな、身共が思案。コレおたつ、奧へ參つて政氏めに、猶もこの上酒を勸めよ。

たつ　そんなら皆さん

トおたつ、奧へ入る。殘りし三人、こなしあつて

段傳　して、御思案はな。

主稅　最早生けては置かれぬ政氏。今宵を過さず廓より、歸りを待ちうけ人知れず。

段傳　して、討取る御手段は。

主稅　コレ。

ト兩人に囁き

合點が行たか。

段八　すりや、その者にお頼みあつて。

傳六　廓歸りを。

主稅　討取る手筈。

段傳　して、我れ〳〵は。

主稅　駕籠に附き添ひ、支へる體にて共々加勢を。

段傳　心得ました。

主稅　最早歸館に間もあるまい。

段傳 左樣ござらば主税どの。

主税 コリヤ、密かに〳〵。

ト踊り地にて兩人、奥へ入る。後、思ひ入れあつて

今宵政氏を討取れば、五十四郡を時賴公が握るは目前。さうなる上は我れとても、多年の大望成就。ハテ、待てば甘露の

トにつたり思ひ入れあつて

日和ぢやなア。

ト時の鐘、踊り地にて、よろしく、この道具ぶん廻す。

本舞臺、向う一面の黒幕。常足の二重。草土手の蹴込み。二重上手に蒲鉾小屋、出入りあり。左右藪疊、松の立ち木。日覆より同じく吊り枝。半月を下ろし、すべて三條松原邊の道具、時の鐘、禪のツトメにて、この道具納まる。

ト直ぐに花道より非人大勢、菰を身にまとひ、面桶、徳利、竹の皮包みなど持ち出て、直ぐに舞臺へ來り

非一 コリヤ長松よ、この頃のまんの悪さ、京三界駈け廻つても、何一つくれ居らぬ。

非二 そりやその筈かい。時節が悪いわい。

非三 コリヤ遠州、わりや今日ゑらい事したな。

非四 ゑらいとは何がいやい。

非三 エヽ、隠すない。きす一升ひいて來た事、知つて居るぞよ。

非四 南無三、それがもうばれてしまうたかいやい。

非一 いくら隠しても、佛の碗でかなわんぢや。まき出せまき出せ。

非二 肴はおれがはづむぞよ。

皆々 サア〳〵、酒にせう〳〵。

ト捨ぜりふにて着て居た菰を敷き、皆々居並び

非一 ドレ、一杯やらうかい。

非三 おれが酌せうかい。

ト酌をする

非一 ゑらい好い酒なア。われにさすワ。

非四 オツとある事の。早八瀨ヨウのヨイ。

非三 時に、頭は、まだどぶさつてか。

非一 大きな鼾をするなやい。聞きつけたら又ぼく喰ふぞよ。

ト捨ぜりふにて酒盛りよろしく

非三 ちと此方へもさゝぬかい。

非一　サアさすワ。
　トついで見て
非二　ヤア南無三、川舟ぢや。
非三　待て／＼。好い事がある。これから皆が一緒になつて。
非一　どうするのぢや。五條の橋下で稼ぐのかい。
皆々　それがよからうかい。
非一　サア、皆來いやい。
非二　イヤ、これから五條まで、無言で行つては面白ない。
皆々　そんなら皆で囃さうかい。
非一　おれが音頭を取るぞよ。ヤンラ、千代の始めの一踊り、網打踊りが所望ぢやが、合點か。
皆々　オ、さて合點ぢや。
　ト雀踊りの太鼓に合せ、踊りながら上手へ入る。後、木魚入り禪のツトメになり、花道より三莊太夫、深編笠、浪人の拵らへにて、早足に出て來り、花道にて
三莊　最早初更、合圖の時刻も今少し。
　ト向うを見て
オ、幸ひ彼處へ行つて、何かの手管。それ／＼。
　ト矢張り右鳴り物にて舞臺へ來り、上手の小家の側へ來り
コリヤ／＼非人、ちと頼みたき事あつて、わざ／＼これまで。サ、出よ／＼。
　ト呼び立つれども答へなきゆゑ、こなしあつて
さては晝の疲れにて、最早寢たか。
　ト前の菰を上げ
コリヤ非人、用事がある。出よ／＼。
　トきつと云ふを聞きつけ、小屋の内にて非人山岡權六、こなしあつて
權六　なんぢやい／＼。よう寢て居るに、けたゝましい、措かんかい。猿の片側の勝負なら、明日來いやい。
　ト云ひながら、權六、非人、好みの形にて、目をこすり／＼出て來る。
三莊　ア、イヤ／＼、左樣な者ではない。ちと其方に頼み入りたき事があつて、わざ／＼これまで參つたのぢや。面倒ながら、ちよつとこれまで。
權六　ア、、アタどんくさい。おれに頼みとは、なんぢやいなう。ヤア、お侍ひ樣、非人小家へ夜夜中、よう寢てゐる者を、起し廻つて、わしに用とは、なんでごんす



嘉永五年四月河原崎座上演番附

の。
三荘　イヤ、用事といふは外ならず、お身が胴骨を見込んで、折入つて無心がある。なんと、聞入れてはくれまいか。
權六　アノ、乞食のおれに頼みとは。
三荘　イヤ、別の事でもない。其方に貰ひたいものがある。
權六　エヽ。
　ト愕り、こなしあつて
見ますれば御浪人さうなが、非人めに貰ひたいものとは、てつきり、こりやア。
三荘　イヤサ、其方が體に卷いて居る、襤袍が貰ひたい。
權六　アノ、この着る物を。
三荘　如何にも。
權六　ハテ、ツイ一口で濟む事を。
　トこなしあつて
ヤレ〳〵、新身試しの胴でも貸せと云ふのかと、あつたら膽を。ハヽヽヽ。
三荘　ハヽヽヽ、近頃無體の所望なれど。
權六　サア、聞くまいものでもない。シタガ、なんぼ襤褸でも、寒いひだるい大敵を防ぐ、この襤袍、云はゞお侍ひの鎧兜も同じ事。大事のおれが魂ひなれど、分けての頼み、進ぜませうが、その代りには又其方の魂ひ、此方へ預けさんせ。なんと理屈ぢやアないかいなう。
三荘　成る程、この兩腰を代りにとは、尤も至極。無心を頼む其方なれば、應と云うて渡したけれど、お身が襤袍無心云ふも、ちと仔細あるゆゑ今宵中に望みを。それまではこの魂ひ、どうも腰が離されぬ。爰の所を聞分けて。
權六　オツと皆まで云はんすな。よし。呑み込んだ。
三荘　すりや、聞分けておくりやるか。忝ない。浪人が貯への、この一包みは身が魂ひ。目前些少ながら。
　ト三荘太夫、懷中より紙へ包みし金を出し、權六に渡す。
權六　なんぢや。こりや金か。エヽ、措きくされ。こんな物は否ぢや。とサア、目たりかわくは此方が習ひ。そんなぢやない。おれも腹からの非人でもごんせぬ。樣子は知らねど御浪人の人體捨て、段々のお頼み。流石ぢや。天晴れぢや、その魂ひのこの金を、乞食も身祝ひあやかつて、ちよん〳〵なつと借りようかい。ほんに浮世ではあるぞ。こちらが襤褸が金になるとは、これがほんの枯木に

花ぢや。

ト着物を脱ぎ、前へ摘み出して

ソレ、千手觀音が居りますぞえ。

三莊　オヽ、過分々々。直さまこれよりこの身に掛けて。

權六　アノ身に掛けて。

三莊　恩は忘れぬ。

權六　でござりまするか。

三莊　併しこの儀は後日に沙汰なし。

權六　世の交りを捨てた乞食。その氣遣ひは。

三莊　天晴れ魂ひ。この場の返禮。

トちよつと拔きかけるを押へて

權六　イヤ、その御馳走には及びませぬ。

三莊　ムウ。非人、重ねて面會。

權六　旦那樣。

三莊　慥かに歸りは向うの道筋。

權六　エヽ。

三莊　これより直ぐに、さらば。

トこなしあつて三莊太夫、花道へ走り入る。權六、後を見送り

權六　ても稀有な。併しこれぢやア。

ト金包みを出し、數へて見て、につたり思ひ入れ。

小粒にちよんがへ。お剩り下あれ。

トよろしくこなしあつて、本釣鐘の送りにて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、向う黒幕、奥深に松並木、同じく吊り枝、すべて三條松原通り宵闇の體、靜かなる禪のツトメにて、よろしく道具納まる。

ト行列三重になり、花道より中間、箱提灯二張持ち、その後より乘り物一挺、中間かつぎ、數馬主稅段八傳六等付き添ひ、草履取りの若黨、合羽籠の中間、順よく出て來り、この後より三莊太夫、以前の襤褸を着て、手拭を深く冠り、糸立に大小を包み、これを抱へ、窺ひ〳〵出て來り、本舞臺にて乘り物に近附き

三莊　ヘイ、御大身樣、お手の内を下あれまし〳〵。

トこれにて敵役三人、顏見合せ思ひ入れ。

數馬　コリヤ〳〵、お乘り物間近く、手の内なぞとは慮外千萬。下がれ〳〵。

三莊　ヘイ〳〵、下がれなら下がりますが、どうぞ手の內を下あれませ。

ト乘り物へ近寄るを數馬隔てゝ

數馬　ヤア、又してもお乘り物間近く、無禮至極の乞食め。主君忍びの御通行、殊に夜陰に及びしゆゑ、事穩便に計らふに、一癖ありげな強ねだり。推して申さば刀の手前、容赦はならぬ。覺悟ひろげ。

トきつとなる。これを主税、留めて

主税　アイヤ數馬どの、御立腹は御尤もなるが、例へに申すかつたいに棒うち。

段八　相手にならぬ野伏り非人。こりや、手の内を遣はされるがよろしうござる。

ト數馬、思ひ入れあつて

數馬　ムウ、助け置かれぬ奴なれど、いづれもの詞に免じ、料簡いたしくれる。ソレ皆平、手の内を遣はせ。

若黨　ハツ。

ト錢を三莊太夫の前へ出す

三莊　アイヤ、金銀に望みないワ。

數馬　ムウ。金銀に望みないとは。

三莊　おれが望みは。

ト挑打ちに左右の提灯を切り落す。供廻りワツと云うて立騒ぐ

數馬　ヤ、さてこそ曲者。いづれも油斷しめさるな。

三人　心得てござる。

ト主税、段八、傳六、拔きつれて數馬へ切つてかゝる。禪のツトメ、暗がりの模樣にて、ごつちやに立廻り。數馬は段八傳六と立廻りながら上手へ入る。主税は供廻りを追ひ散らしながら下手へ入る。時の鐘、忍び三重になり、乘り物へ近寄る。内より戸を明け政氏、窺ふ。三莊太夫、乘り物の蔭へ隱れる。

政氏　歸館の路次を妨げなすは、何奴なるぞ。

ト刀を持ち出る。三莊太夫、窺ひ寄り、後より一刀に切り下げる。政氏、撲となり

ヤア、騙し討とは卑怯至極。

ト刀を拔き立ち上がり切つてかゝる。時の鐘、誂らへ合ひ方にて、立廻りよろしくあつて、三莊太夫、政氏の刀を打ち落し切り下げる。政氏、三莊太夫の裾を捕へる。これにて襤褸すつぽり脱げ、其まゝ政氏を切り倒し、乘りかゝりて止めを刺す。本釣鐘。これをキツカケにてチョンと片出る。三莊太夫、ホツと思ひ入れ。

三莊　ハテサテ、脆くもくたばつた態わえ。

トにつたりと思ひ入れ。此うち後へ時廉窺ひ出る。後より乘り物供廻り附き添ふ。

時廉　政氏めを仕止めしか。

ト三莊太夫、時廉を見て

三莊　只今止め。

ト刀を拔き、血を拭ひ納める

時廉　オヽ、出かした〱。

三莊　音に聞えし政氏ゆゑ、非人姿に身をやつし、油斷を見澄まし、まんまと首尾よく。

時廉　天晴れ手柄。我が眼力に違はず、健氣の働き。褒美は汝が望み通り、卽ち丹後の國に於て、成合の莊、橋立の莊、由良の莊、合せて三ヶの莊の地頭格。この時廉が許し狀。

ト懷中より宛狀を出し渡す。三莊太夫、押戴き

三莊　多年の望み、有り難く頂戴仕る。

ト懷中する。

時廉　サヽ、人目に立たば何かの妨げ。ちつとも早くこの場をば。

三莊　然らば此まゝ。

時廉　物數云はず、早く行け。

三莊　おさらば。

ト本釣り鐘の送り、三莊太夫、花道を走り入る。

時廉　最早參りしか。彼れに恩賞を與へ、國遠いたさせたれば、後日に詮議の愁ひなし。ハテ、愛い奴ぢやなア。

トばた〱にて花道より若黨、供廻り、大勢走り出て來り

若黨　ハッ、申し上げます。岩木の判官が家老、大和田藏之進、我が君を討たんと、この先なる藪の小蔭に忍び居りますれば、必らず御油斷なされまするな。

時廉　ムウ。すりや何と申す。藏之進めが身共を討たんと、待伏せ居るとか。

若黨　左樣にござりまする。

時廉　ヤア、時廉を討たんとは、及ばぬ事〱。かゝる事もあらんかと、附け置く遠見。早速の知らせ、出かした出かした。アヽ、藏之進を生け置く時には後日の妨げ。屈竟の手段あり。あたりに心を附けい。

若黨　ハッ。

トあたりを見廻し、窺ふこなし。

時廉　ソレ、身共が乘り物へ、その死骸を入れい。

大勢　ハッ。

ト皆々手傳ひ、政氏の吹替へを時廉の乘り物へ入れる事。

時廉　ムウ。それでよし〳〵。汝等は駕籠に附き添ひ、身共が乘つたる體にてもてなし。

トちよつと皆々に囁く

ナ。合點か。

大勢　心得ました。

時廉　早く行け。

大勢　ハツ。

ト時の鐘になり、侍ひ中間皆々乘り物を守護して花道へ入る。時廉、後を見送り

時廉　これで心もさつぱりと。後より歩み、猶ほ樣子を。オヽそれよ。

トこん。合ひ方にて花道へ入る。直にバタ〳〵、禪のツトメになり、上手より數馬、下手より主稅、走り出て行き合ひ、顏見合せ

主稅　ヤ、數馬か。

數馬　ムウ。主稅か。

主稅　覺悟。

ト切つてかゝるを手早く留めて

數馬　さては今宵の狼藉は。

主稅　時廉公の計らひだワ。

數馬　なんと。

主稅　五十四郡を横領なさん、我れ〳〵始め家中は大半。

トこの時後へ傳六段八、出て

段傳　時廉公へ一味合體。

數馬　ムウ。すりや時廉が謀計にて。

主稅　廓歸りを道に待ち受け、味方の者に殺らさす手段。

ト舞臺の血汐を見て

數馬　ヤヽヽこの場に滴るこの血汐。さては御主君には御最期なるか。ヤヽヽヽ。

ト憫り思ひ入れ、キツとなつて

ムウ。主君の敵は大江の時廉。それに荷擔のおのれ等は、主の手を噛む犬侍ひ。首を並べて片ッ端。高吠えさせん。尋常に尻尾を卷いて、覺悟なせ。

主稅　何を小癪な。いづれも、ソレ。

段傳　心得ました。

ト禪のツトメになり、三人を相手に立廻り、主稅を一刀に切る。これより誂らへの鳴り物になり、數馬、段八、傳六と立廻りよろしくあつて兩人を切り倒す。主

稅、窺ひ寄つて數馬を切り下げる。これより鳴り物替つて、兩人、手負ひの立廻り、トヾ主稅を切り倒し、この上へ片足かけ苦痛の思ひ入れ。

數馬　チエ、口惜しや、云ひ甲斐なくも深手を負ひしか。イデこの上は死出三途、政氏公の御供なさん。

ト刀を取り直し、腹へ突き立て引き廻す。この見得、時の鐘の送りにて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、向う一面の高き竹藪、上の方へ寄せて切り破りにて人の出入りあり。日覆より松の吊り枝、行列三重時の鐘、蛙の聲にて、この道具よろしく納まる。

ト矢張り行列三重を冠せ、本釣鐘を打込む。これをキッカケに正面の藪を押し分け、藏之進、袴股立ち、凜凜しき形、手槍を持ち出てキッと見得。ムウとこなしあつて又、上手の藪へ忍ぶ。矢張り右の鳴り物にて花道より以前の駕籠を先立て、侍ひ中間附き添ひ出て來る。はるか後より時廉、窺ひ／＼出て來る。駕籠、舞臺へかゝると、上手の藪より藏之進、進み出て

藏之　お家の怨敵、時廉觀念。

ト乘り物へ突いてかゝる。この聲を聞いて時廉、下手へ忍ぶ。藏之進これを知らず、乘り物へ槍を突ッ込む。手ごたへしたる思ひ入れにて槍を捨て、戸を明け、政氏の死骸を引起し、月影に透かし見て

ヤ、、、、こりやコレ御主君政氏公の御亡骸。殊に怪しきこの襤褸。さては人手に非業の御最期。ヤ、、、、

ト摚となる。この時供廻り大勢取卷き

大勢　主殺しの綱清、動くな。

藏之　なんと。

ト時廉、上手へ出て

時廉　藏之進、遁がれぬ所だ。覺悟なせ。

ト藏之進、襤褸を見て

藏之　ムウ。かゝる證據のある上は。イヤサ、卑怯未練に隱れんや。

時廉　オ、、好き覺悟だ。ソレ。

侍ひ　捕つた。

ト藏之進へかゝるを附け廻して

藏之　イザ繩かけて。

ト侍ひ兩人を投げのけ、下に居るを木の頭。

お引きなされい。

ト後へ手を廻す。時廉、繩捌きをする。時の太鼓にて。

拍子　幕

二幕目　扇の橋の場

役名――元吉要之介。人買ひ、込わらの牛藏。同、ほらの九助。藤軍太。船頭、浪六。同、沖六。對王丸。安壽姫。權六女房、おらち。政氏御臺、睦月の方。山岡權六。

本舞臺、三間、向う打抜き濱手の遠見。上の方、二間、丸物の橋、この下、船の通へる事。正面より下手三間、中足の二重、打寄せの蹴込み、後ろ松並木、石の道祖神の塚、舞臺前、一面浪板、笘を掛けたる丸物の船二艘、外に小船一艘繋ぎあり。よき所に越後の國扇の橋といふ榜示杭。すべて越後の國直非の浦の體。浪の音、濱唄にて幕明く。

ト右鳴り物。橋の上より船頭沖六、柿の筒袖、竹筒を提げ出る。後より船頭浪六、同じ拵らへにて出て來り

浪六　コレ〳〵、其處へ行くは、おいらと一緒に船がゝりして居る、由良の湊の船頭どのではないか。

沖六　オヽ、さう云ふこなたも船がゝりして居る、佐渡が島の船頭どん、何處へ行かしやつた。

浪六　おれよりは、こんたが竹筒を持つて居るは、さては、ゝれこを買ひに行つたのだな。

ト飲む眞似をする

沖六　なんの、そんな事はこの頃は上がつたり。それと云ふのが、客人が思はしい買出しものがないとて、この四五日は佛頂面で、酒のさの字もかゝせぬ。それに引替へ、貴樣はいゝ色だの。

浪六　イヤモ、此方の舟もその通り、客人が儲け口がないゆゑ、酒法度も同然。おれは堪へても、腹の蟲が堪へ居らぬ。そこで一杯氣を付けて來たのよ。

沖六　うまうやらかしたの。それに引替へ、此方は酒と見せて、てらしを買出しよ。

浪六　さうとは知らず又、附込む氣で咽喉を鳴らして、こんたの後を附いて來たが、大きな當違ひぢやな。

沖六　濁りでもよければ振舞はうか。

浪六　イヤモ、油のやうな酒ならば、馳走になつたも同然ぢや。

兩人　ハヽヽヽ。サア、一緒に行から。
ト右鳴り物にて兩人舞臺へ來り、小舩を傳ひ、左右の笘船へ入る。直ぐに床の淨瑠璃になる。
〽越路潟、爰に直井の濱續き、御いたはしや政氏公の北の方、姫若君も諸共に、馴れも習はぬ憂き旅を、元吉要が介抱にて、扇の橋に歩み寄り。
ト浪の音にて、下より御臺睦月の方、安壽姫、對王丸、三人とも杖と笠とを持ち、後より要之介、大小半合羽、旅形、柳行李、桐油を兩掛けにして笠を持ち出て、直ぐに舞臺へ來て
要之　幸ひの人絶え、暫しこれにて、御休息遊ばしませ。
〽主從小蔭に立休らひ、
ト合ひ方になり、三人とも捨石に腰を掛けて、こなし。
睦月　長の旅路を其方の介抱、忝ないとも嬉しいとも、禮は詞に盡されず。我が夫政氏公、都島原にて何者の仕業にや、闇討に遭ひ給ひ、敵の行くゑも情なや、時廉が邪見にて、館へとても入る事叶はず、姫諸ともに追ひ拂はれ、何處を當にさまよふ道。
安壽　思ひがけなく弟對王、要之介に廻り逢ひ、悲しい中の喜びぞや。

對王　コレ要之介、父上樣の敵を尋ね、早う討たせてたもいなう。
要之　ホヽ、よう御意遊ばした。政氏公の御最期を幸ひ、若君まで失ひ奉り、家國を横領なさん、時廉どのヽ謀叛を察し、一學が計らひにて、勿體なくも對王君を、討つたる體にもてなし、この越後路へ落し參らせしと聞き、某追ッ付き奉り、御親子めでたう御對面。お館には忠心厚き、藏之進どの殘り居れば、初姫のお身の上に氣遣ひなし。やがて父君の敵を尋ね出し、お討たせ申しまする程に、必らずお氣遣ひ遊ばしまするな。
睦月　アレ、聞きやつたか姫對王。要之介が頼もしい詞。自らは敵を討つた、心地がしますわいの。
安壽　母上樣のお詞の通り、妾とても喜びまする。コレ對王、其方も嬉しう思やらうの。
對王　姉上樣の仰しやる事、これが嬉しうなうて、なんと致しませう。
睦月　この上ともに要之介、其方をよきに
三人　頼むわいなう。
〽頼む〱とばかりにて、果し涙の折柄に、耳驚かす遠寺の鐘。

ト時の鐘四つ鳴る。要之介思ひ入れ。

要之　これは〳〵、恐れ入つたるそのお詞。只今鳴るは最早亥の刻、幸ひのこの松蔭、今宵はこれに、御一宿遊ばされませう。

〽要が進め片蔭に、桐油を松へ釣り夜着や、芝を蒲團に菅笠を、屏風代りと主従が、是非なく勞れ臥しにけり。

ト時の鐘、要之介、後の松の枝へ桐油を風除けに釣り、三人を介抱して、松の蔭へ野宿の體にて入る。

〽雪國の氷を渡る憂き渡世、越後の國の片ほとりに、山岡といふ狩人あり、人の目に立つ大男、すご〳〵戻る直江の浦、扇の橋にさしかゝれば。

トこの文句へ浪の音、時の鐘を冠せ、下手より山岡權六、五十日鬘、どてら山刀、簑笠を一つにして鐵砲へくゝりつけ、擔ぎ出て來る。

〽西に傾く月影や、欄干の片影に、笠を屏風の旅勞れ、何心なく立寄つて。

ト權六、橋の上にて野宿の三人を見て

權六　コリヤ、非人どもか知らぬが、往還の橋臺に、見れば上びた桐油の紙帳、夜廻りに見附かつたらば、又ひどい目に遭ひ居らう。エヽ、さりとは身の程知らぬ奴等。キリ〳〵、起きて、うせ居らぬかい。

〽菅笠を、まくるも知らぬ寢入り端、すや〳〵顔をさし覗き。

ト權六、桐油の内をよく見て思ひ入れ。

ハテ、尋常な子悴。こちらの娘は十六七の嫁入り盛り、中の女は三十餘り、顔付きのよう似たは、紛れもない二人の母親。ハテ、うまく寢込んだわえ。殘つた一人は青二才と見えるわえ。何處の人か知らねど、こんな所に寢て居たら、惡い者めらの目にかゝらうに、なんにも知らいで寢入り端。こりや餘程な旅疲れ。併し、此らちが極樂であらうかい。

〽暫し見惚れて立ちどまる、山岡ふつと出來心。

トいろ〳〵思ひ入れあつて

ムウ。こりや仕合せの直り口。僅かの鹿猿何十匹、晝夜をかけて骨折つたところが、存代にも通らぬ錢。まだまだした事しようより、こいらを騙して賣り渡せば、濡手で粟の儲け。丁度幸ひこの中から、この湊へ佐渡ヶ島と、由良の湊の人買ひ船がかゝつて居れば、一目見せたら相談に乘るは知れた事。人に先手をかゝれぬうち。ちつとも早く、さうだ〳〵。

〽心にうなづき獨り笑ひ、船を見合す濱傳ひ、向うより來る前垂れ掛け、取上げ髮も嗅じみて、酒屋へ通ふ備前燒。

ト浪の音、濱唄にて下手よりおらち、世話女房の拵らへにて、備前徳利を提げ、駒下駄にて出て、舞臺へ來り、權六を見て

らち　オヽ、そこに居なさんすは、こちの人ぢやござんせぬか。

ト　これにて權六、恟りして

權六　ムウ。わりや山の神、今頃うそ〳〵一人歩き、何處へ行くのだ。

らち　エヽ、措かしやんせ。餘りお前の歸りが遲いゆゑ、迎ひながら寢酒の買出し。よう氣が附いたと褒めはせで、叱りさへすりやよいかと思うて、頭ごなしに山の神呼はり、置いて下さんせ。

權六　ハテ、山岡が女房おやに依つて、山の神と云つたが無理か。こりや貧乏世帶の嗅の替り名よ。われも昔の苦界が放れず、まだ色氣を含むところは、イヤ、頼もしい命取りめが。

ト　背中を叩く。

らち　ほんにモウ、口先で生けつ殺しつ、女房殺しの惡性男。山挊ぎをだしにして、新潟や市ふりで、おやま狂ひが始まつたも知れぬわいな。

權六　馬鹿を云へ。おやま狂ひも女狂ひも、肝心の物が無うて、何が出來るものか。この四五日の間の惡さ。これぢやア末の事が思ひやられて、心細くなるわえ。

らち　なんのマア其やうに、くよ〳〵と思はしやんすな。錢金は廻り持ち、また笑ふやうな事もあらうけれど、返らぬ事を云ふやうぢやが、二人の中へ出來た娘、育てるあだても情なく、藁の上から捨子にして、生死も知れぬ因果な親子。今居やつたら丁度六つ。せめて夫婦が朝夕の、憂さを忘るゝ便りにも。

權六　成る程、女といふものは愚痴なものだ。そこが譬への死んだ子の年。捨てた餓鬼は死んだも同然。例へ生きて居たところが、一旦捨てたら人の物。どうして手出しがなるものか。

らち　そんならあの子は、矢ッ張りこの世に。

權六　この世もこの世、達者で人に拾はれて、生れ替つた身の出世。

らち　エヽ、そりやマア何處に。

権六　イヤサ、大方生れ替つて、この世へ出て居るであらうわえ。

〽我が子の出世餘所事に、聞かすも女房は知らぬが佛。

らち　なんの事ぢやぞいなア。生れ替つて出た事を、なんのお前に尋ねうぞ。そんならどうでもあの子は。ほんに一日しみ〴〵と顔も見ず、アヽ、可哀さうな事をしたわいなア。

〽涙そゆれば。

権六　エヽ、何を吠え面する事がある。商賣が隙な代り、晩から夜山精出して、われが樂しみは拵らへてやるわえ。返らぬ事をくよ〳〵云つて、煩らつてはならぬ。それといふも、死んだ親仁が盗まれた、用金を拵らへて、親の恥辱を雪ぐまでは、兎角夫婦が大事の命。

らち　さうでござんす。舅御様の悪名を、雪いで上げるがせめての孝心。それにつけても、先立つは金、今のお前の世渡りでは。

権六　イヤ〳〵、天道は人を殺さずと、そんなに案じたものぢやアねえ。先刻戻る山際に、四人連れの臥猪の床、親子連れの猪を見附けて置いた。あれを一緒に賣り渡せば、大分の金になる。必らずキナ〳〵案じるな。

ト後へ思ひ入れ。

らち　それはマア〳〵耳寄りな。そんな事のある知らせか、宵に出た丁子頭。喜び心で買うた酒、直ぐに神棚へ上げ、殘りは二人が寝酒の樂しみ。サア、一緒に歸らさんせ。

権六　イヤ、おれは爰に掛つて居る、一艘の船の船頭に、ちよつと話さにやならぬ用がある程に、われは先へ歸れ歸れ。

らち　あの船に用があると云はしやんすが、コレこちの人、世間の沙汰聞かしやんせぬか。この湊へ人買ひ船が入込み、子供大人の分ちなく、滅多無性に連れて行くとて、子を持つた衆の氣遣ひがり。この中も市ふりの宿で、十二三の子をかどわかし、舟へ乘せる所を、親達が見附けて、そりや人買ひよ盗人よと、あたり近所が棒ちぎりで、片息になる程叩かれたといな。ほんにマア小氣味のよい事。併し、かけ構ひのないこちとらまで、五十百出してなと、思ひ入れ叩かしてやりたいわいなア。

〽餘所の噂も山岡が、胸にこたゆる人買ひ沙汰。

権六　エヽ、役にも立たぬ事吐かすか。時に取つた雉子の雌鳥、あの船へ百五十づゝに賣つて置いた。風が直つて今夜にも、船が出ればぼんざらばぢや。その金を取つて

行くうち、先へ行て酒の燗つけて待つて居や。

ちち　さういふ事なら、わたしや先へ行く程に、必らず早う戻らんせ。

〽詞を後にいそ〳〵と、夫に別れ戻る橋、渡りかゝつて。

ト おらち、上手へ行かうとして、フト野宿の四人を見て

見れば、行き暮らした旅人さうなが、他愛もなう寝入り端。夜露がかゝらば體の毒。袖振り合ふも他生の縁。ドレ〳〵、わしが笠なと着せて。

ト 側にある笠を取つて着せる思ひ入れ。

これでよい〳〵。ほんに浮世は様々。こちらがやうな淋しい暮しでも、我が家に寝れば雨露にも。それに引替へいぢらしい。

權六　エ、キリ〳〵行かぬか。

ちち　いま行く所ぢやわいなア。

〽道は眞直ぐ正直な、形は知れた備前焼、徳利を提げて立歸る。

ト 浪の音を冠せ、おらち、橋を渡り、上手へ入る。

權六　オ、イ〳〵。

〽聲掛くれば、笘押し明けてによつと出る、由良の港の繩くらひ、ほらの九助、今一艘は佐渡ヶ島に、名を得たる込わらの牛藏、二人ともに目を摺り〳〵。

ト 笘舟より込わらの牛藏、どてら三尺帶。こちらの船よりほらの九助、同じく人買ひの形にて出て

牛藏　おらが船を呼び起したを、誰れかと思へばどら打の山岡。さては博奕の元拵らへて、先度の意趣を返しに來たのか。

九助　そんな事なら、根こそげ勝まくつてやりたいが、今夜はない。明日來い〳〵。

權六　エ、譯も聞かずに先潜りな奴等ぢや。賽事よりは、わいらが商賣の、好い鳥見附けて相談に來たのぢや。

牛藏　オ、商賣の鳥とは面白い。

九助　この船付けて相談せう。

牛藏　コレ〳〵船頭、早く〳〵。

二人　オツと合點。

〽おつとまかせと二艘の舟、艫を押立てゝ汀に漕ぎつけ。

ト 浪の音。牛藏の船は浪六、九助の船は沖六漕いで、二重際につける。

牛藏　早速聞かうは、コレ山岡、今云つた鳥といふのは

九助　ひね鳥か、但し若鳥か。

權六　オヽサ、親鳥なりと雛鳥なりと望み次第。頭數は三人、大事の談合。立ちながら話もなるまい。何かの事は苫の内で。

半藏　サア〳〵、來やれ。

〽三人打連れ船に入る。

ト浪の音、權六船へ乘り移る。皆々苫の間へ入る。

〽折もこそあれ時廉が郎黨、轟軍太、岩木一家の落人を、討ちとめんと手廻りの、侍ひ引具し、扇の橋にさしかゝれば。

ト浪の音、時の太鼓になり、轟軍太、半纏股引、大小にて、後より捕り手、黑の四天にて附き添ひ出て

捕一　申しお旦那、あなたお一人達者なとて、我れ〳〵どもの足は續かぬ。

捕二　當途もない落人の尋ね者。

四人　これからお歸りなされませ。

軍太　エヽ、役に立たずの家來ども、御主人時廉公の仰せには、一旦館をぼいまくつた岩木の一族、生け置いては後日の仇、追ッついて討取れよと仰せを請け、遠くは行かじと思ひの外、逃げ足の早い奴原。彼奴等を取り得て差出せば、この軍太は千石の御加增。勇みを附けて、探せ〳〵。

〽先に進みし橋の臺、四人が寐姿怪しやと、よく〳〵見れば紛ひなし。

ト軍太、先に捕り手、橋の方へ行かうとして、野宿の四人を見附け

さてこそ落人。搦め捕れ。

捕手　心得ました。捕つた〳〵。

〽捕つた〳〵と立ちかゝり、寐込みを押へる傍若無人、ハッと驚く要之介、人々を後に庇ひ。

ト捕り手四人、桐油の蔭へ踏ん込み、此うちより以前の御臺安壽姫對王丸を引立て出る。要之介はこれを追ひかけて出て、立廻つて三人を後に圍ひキッとなつて

要之　ヤア、何奴なれば夜陰の狼藉、慮外なさば手は見せぬぞ。

軍太　ヤア、小癪な一言。某は大江の郡領時廉公の仰せを受け、討手に向ひし轟軍太。姫に小童、御臺諸ども、首討ち落して身共に渡せ。

要之　すりや、國盜人の獄卒たる、伯父郡領が家來よな。爰へうせたは、おのれが命のねぐされ時、元吉要之介が

守護する御主人、指でもさゝばさして見よ。

軍太　ヤア、ほざいたり青二才め。さう云ふうぬが命の別れ。身共が刀でこの世の引導。

要之　小癪な事を。

〽しや小癪なと兩人が、手早く刃拔き合せ、受けつ流しつ上段下段、要が手練の太刀風に、追ひ立てられて逃げ行くを、遁がさじやらじと追うて行く。

ト禪のツトメになり、軍太、刀を拔き、要之介と立廻り、敵はずして下手へ逃げ込む。此うちに捕り手四人は睦月等を引立てようとする。要之介これを支へ、キッと見得。三味線入り禪のツトメになり、要之介、四人を相手にし立廻りよろしくあつて、ト、捕り手、花道へ逃げて入る。要之介後追ひかけて花道へ入る。

睦月　コレナウ要、長追ひしやんな。

安壽　怪我せぬうちに、早う戻つてたもいなう〳〵。

〽叫び給へど甲斐もなき、轟軍太取つて返し。

ト禪のツトメにて下手より　軍太、走り出て來り

軍太　ヤア　國で死んだと吐かした、對王めも一緒に居るは、藏之進めが計らひよな。何にもせよ、首にして立歸る。覺悟なせ。

〽覺悟せよと組みつけば、一期の瀨戸と三人が、拔けつ隱れつさまよふうち、船より上がる山岡が、見るより恟り南無三方、商ひ物を遁さじと、飛びかゝつてがん握み、投げ退けて仁王立ち。

ト軍太、三人を引立てにかゝる。船の中より權六出て、三人を圍ひ、軍太と立廻つて投げる。軍太、立ち上がり、恟り思ひ入れ。

ヤア、何時の間にか横合から、法外千萬。時廉公の後を追ひ、詮議なす落人、何ゆゑあつて妨げなすのだ。

權六　イヤ　妨げはしないが、餘り不便だと思ふから、ちよつと支へたのよ。

軍太　ヤア、小癪な一言。さう吐かせば、うぬから先へ。觀念なせ。

〽觀念なせと切り込むを、引外してずでんどう、呼吸を一締め締め上げられ、ぐつとも云はず死んでけり。

ト軍太、拔いて切つてかゝる。權六、立廻つて軍太を締め殺す。

權六　コレワイサ。

〽死骸を川へ投げ込めば、母君嬉しく立寄つて。

ト權六、死骸を川へ蹴込む。睦月の方思ひ入れ。

瞪月　何國のお方か知らねども、危い場所をお救ひ下されしゆゑ、一人ならず三人まで、助かる御恩は海山に比べ難し。コレ〳〵、ちやつとお禮を申しやいなう。

〽喜び勇み給ひけり。

權六　イヤモ、其お禮には及びませぬ。賴むとあれば金輪際、引かぬ男なれど、人の賴まぬ喧嘩は買はれぬ。大勢に只一人、今の二才どのはどうしたか。ア、コレ、手がむづ〳〵するわえ。

〽賴めよがしに仕掛くれば、何がな便り北の方。

瞪月　我れ〳〵は旅の者、敵の仕業で憂き目に遭ふ、難儀を惠み給はれかし。世にも出でなばこの御恩。

〽忘れはせじと打ち悄れ、安壽對王諸共に、山岡が前に手を合はせ、佛賴んで地獄とは、後にぞ思ひ知られける。

　ト瞪月の方は二人に思ひ入れ。安壽姫對王丸、手を合せる。權六思ひ入れ。

權六　オヽ、賴むとあれば、それで此方も働きよいといふもの。ドリヤ、今の二才を助けてやらうか。

　ト行かうとして思ひ入れ。

權六　イヤ〳〵、おれが行たその跡へ、また敵が來まいものでもない。後も氣遣ひ、先も危なし。オヽ、幸ひのかゝり船。コレ、何事もわしに任してござれ。コリヤ〳〵牛藏九助、ちやつと〳〵。

牛九　オイ〳〵、なんぞ用か〳〵。

　ト苫の中より兩人出る

權六　コレ、この衆を、ちつとの間、その船へ預かつてもらひたい。樣子は先刻に云つた通り。ナ、合點か。

牛藏　オヽサ、呑み込んで居る。コレ旅人、こちとらが預かれば、大船に乘つたと思はつしやれ。

九助　こりや思つたより好い器量、近年にない掘出しもの。

權六　大事に賴むぞ。

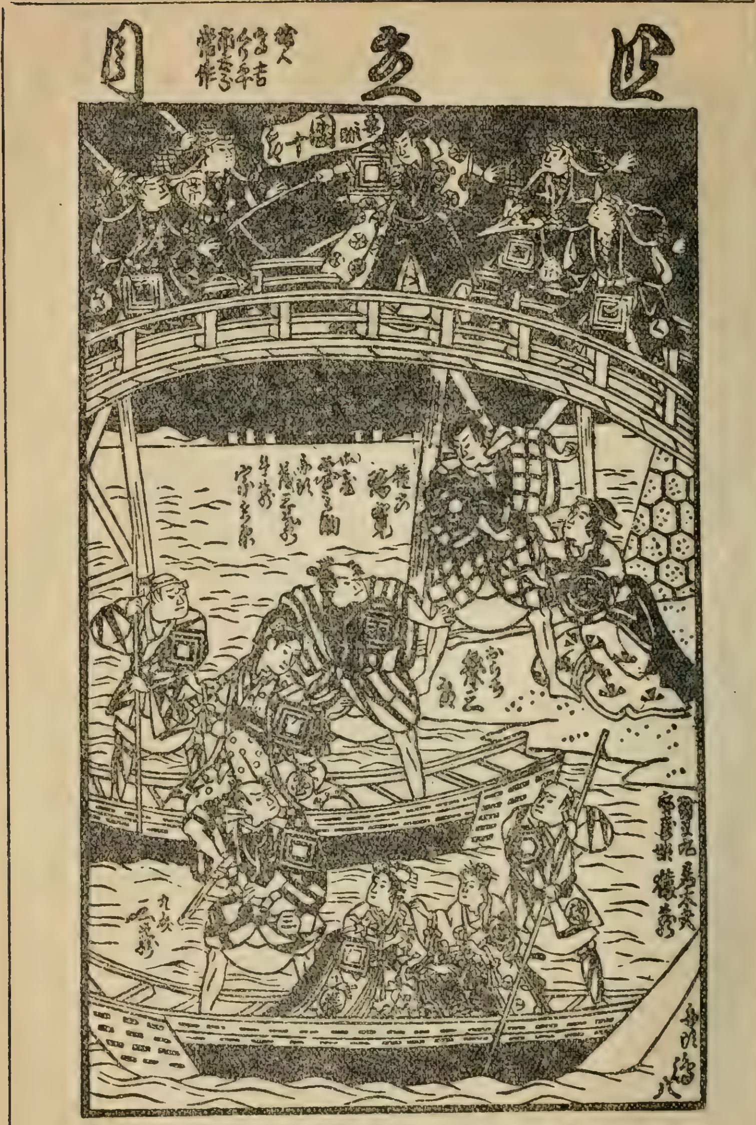
二人　合點だ。

〽九助が船には姉弟、牛藏が船へは北の方、別々に抱き乘すれば、安壽姫は不審顏。

　ト牛藏の船へ瞪月の方、九助が舟へ安壽姫と對王、浪六沖六も出て、これを介抱して船へ乘せる。

安壽　ア、コレ〳〵、母樣と我れ〳〵を、なぜ一つには乘せ給はぬ。

對王　母樣のお側へ行きたいわいなう。



附番演上座崎原河月四年五永嘉

安壽　あの船へなと、この船にても、一つに乘せて給はれや。

睦月　ア、コレ、二人の者、いかいお世話になりながら、榮耀らしい好き好み。要之介が歸るに程もあるまい。ちつとのうちぢや。あの人次第になつて居やいなう。

權六　オ、サ、一つに乘せては今の奴等が、取つて返した時に面倒。何事もわしに任せ、さて斯うして置いて牛藏九助、ちよつと逢ひたい。

㇏山岡買ひ手を小蔭に招き。

ト浪の音。權六先に牛藏九助は船より上がり、三人とも下手へ來り

佐渡が島の牛藏は、年配なが入用と聞いたゆゑ母の方。九助は若いのが捌けがよいと云ふゆゑ、兄弟を渡した。其方の存分望み次第。サア、此方の身の代受取らう。

牛藏　オ、賣り手の仕合せ、買ひ手の幸ひ。

九助　約束通り一貫宛で

兩人　錢渡さう。

㇏錢渡さうと銘々が、粮米櫃を抱へ出て、兩方より差出す貫ざし。

ト牛藏九助、船の中より一貫からげ三抱へ持ち出て

九助　ソレ、兄弟が二貫文。

牛藏　母親が一貫文、〆めて三貫。

兩人　慥かに渡した。

權六　オ、受取つた　極りに一つ打つて置け。

三人　ヨイ〱〱。

ト手を打つ事

權六　この間を外さず　追風のうちに船を早く。

牛藏　呑み込んだ。そんなら山岡。

兩人　其うち逢はう。

㇏顏の知らせを目に受けて、さらば〱も胸の内、手早く友綱解きほどき、舳を分けて押し出せば、夢とも分かず北の方。

ト浪の音。牛藏九助、銘々の船に乘り、浪六沖六、船を左右へ漕ぎ出す。睦月の方、安壽姫驚ろき

睦月　コレ〱船人、待つてたべ。子供の船はそちらへ漕ぎ、なぜこの船も一緒にやらぬぞいの。

安壽　母樣をいづれへ連れて行き居るのぢや。

對王　その船戻せ。

睦月　漕ぎ戻してたもいなう。

㇏磯を限りにあこがるゝ、山岡は橋の欄干、頭の上から

雷聲。
ト此うち權六、右の錢を手拭に括り持ち、橋の上より
見下ろして
權六　コリヤ、恩知らずの馬鹿者めら。爰にうろたへてけつかると、追手の者が殺す。只それが不便さ。人買ひに賣つてやるワ。思へば〳〵仕合せ者。果報な奴等だなア。
〽聞くより母上氣も消え〳〵。
睦月　ナニ、人買ひに賣つたとは胴慾や。コレ、自らは兎も角も、年端も行かぬ兄弟が、何處の浦、何處の島人に買はれ行き、なんと命が續かうぞ。先立ち給ふ父上に、云ひ譯もなき我が身の上。子供よ、さらば。
ト睦月は身を投げようとする。牛藏、留める。
〽南無阿彌陀佛と駈け出し給へば。
牛藏　コリヤ何しをる、すんでの事に錢一貫、棒に振らうとしをつた。我が棒よりこの棒の、鹽梅を見やアがれ。
〽したゝかに打つ櫂の響き、肝にこたへる姉弟。
ト牛藏、櫂にて睦月の方を打ち据ゑる。
安壽　ナウコレ、人買ふ人も人ならば、少しは哀れを知れよかし。情なの母上樣、親子は一世と申さぬか。今お果てなされて、いつの世にかは逢はれませう。
對王　兄弟が命は母樣の命と思ひ、また母樣のお命は、兄弟の命と思ひ
安壽　互ひに存らへあるならば、今生で今一度、お顏を見る事もござりませう。
二人　必らず死んで下さりまするな。
〽お聞入れ無いならば、共に死なんとあせり泣き。
九助　エヽ、幸先の惡い餓鬼。吠えやアがるな。
〽九助が打擲、見る目もくらむ親心。
ト九助、櫂にて安壽姫を打つ
睦月　なう邪見放逸や。荒くれなき打ち打擲。コリヤ姉よ、弟よ。おとなしい事よう云やつた。母もよう合點して、息災で居る程に、隨分仲よう辛抱して、頓らうてばしたもんなや。忘れても〳〵、家の苗字を現はすまいぞ。名殘は盡きじ。子供よ、さらば。
二人　母樣、おさらば。
〽名殘りは今ぞと呼び交し　泣き浸したる袖の海。
牛藏　エヽ、かしましい頤骨。
牛九　その聲を留めてくれう。
〽口に込み藥三寸繩、舟ばりに猿つなぎ、サア押せ〳〵

のさつさ爰、川口より東西へ、押し隔てたる別れ路や、身の行く末ぞ果敢なけれ、山岡後を打見やり。

ト双方伸び上がり見送るを、牛藏は臆月の方、九助は安壽姫對王丸へ、手拭にて猿轡をかけ、友綱にて縛りながら、浪六沖六、船を漕ぎ、上手と橋の下へ別れて船入る。權六、後見送り

權六　僅かな猪猿取るよりも、目ばたきする間に多くの錢、氣骨は折れたが巧い仕事。慾の事ならやらず遁がさず、惡には根強い山岡が、非道の元は死んだ親、岩木の家に奉公の、その折節の御用金、盜まれたので主人の勘當。親の恥辱を雪がん爲、又二つには捨てた餓鬼、今は岩木に拾はれて、養女となつたもよく〳〵因緣。惡い性根も親の恥、雪ぐも餓鬼が不便なゆゑ。子は三界の首枷とは、ハテよく云つたものだなア。

〽獨り言するその所へ　向うに人音折聽しと、松の小蔭へ身を忍ぶ。

ト權六、思ひ入れあつて下手へ入る。

〽向ふ敵を追ひ散らし、立戻る要之介、主人の姿見えぬに恟り。

ト花道バタ〳〵。要之介、拔刀にて出て舞臺へ來て思ひ入れ。

要之　母君樣、若君樣、安壽さまいなう。ヤ、、、、。これ程呼ぶに答へのないは、さては敵の虜となり給ひしか。エヽ、死なしたり殘念や。例へ天地に入るとても、取返さいで置くべきか。

〽駈け出せしが。

イヤ〳〵、よも遠くへはござるまい。西の方か、但しは東か。御臺、お二方樣いなう。

〽呼はり〳〵あたりを見廻し。

ト要之介、道祖神の塚を見て

ムウ。この道祖神は、道を敎への御神なれど、要之介が今の急難。御臺御親子のお行くへ、知らせ給へ〳〵。

〽一心不亂手を合はせ、心に念ずる神の告げ。

ト風の音にて、松に掛けたる以前の菅笠よき所へ落ちるを、要之介見て

ムウ。この笠に記せし文字は、西國三十三所同行二人、御親子も三人西の國。さては西の方こそ主人の行くへ。エヽ、忝ない。

〽主人の行くへ白浪の、濱邊傳ひを尋ね行く。

ト浪の音にて要之介、よろしく下手へ入る

權六 〽小蔭に窺ふ權六が、後打見やり不審顏。

權六 ハテ、合點の行かぬ。今あの二才が、對王安壽と吐かしたが、あの二人は大恩ある、岩木の判官政氏の、公達姬君であつたるか。ヤ、、、、。

〽呆れて立つたる後より、何心なく女房が。

ト驚ろく。この時、橋の上よりおらち出て來り

らち 申し、こちの人、最前から待つて居るに、何をして居なさんす。

權六 これより直ぐにぼッついて取返し、奥州岩木へ御供せん。

らち コレ申しお前、氣ばし狂つてか。何をウロ〳〵。

權六 エ、、女の知つた事ぢやアねえ。そこ退け。

〽心いらだつ甲斐もなく、船は遙かに漕ぎ出す、山岡は齒がみをなし。

トおらち縋るを突き放す。浪の音烈しく、この時向うの浪手摺りへ、笘船二艘放れて漕ぎ行くを、權六見て

權六 アレ〳〵、最早遙かに、沖を隔つる笘船。目當に追ツつき。

ト權六、身拵らへし二重へ下りる。おらち驚ろき

らち コレ、待たしやんせ、血相變へてお前は何處へ。

〽爭ふうちに見附ける捨舟。

ト權六、川の中の船を見て

權六 幸ひのこの捨舟、艪櫂を早めて。

〽身輕に飛び乘る船の中、樣子知らねば女房が、やらじと縋る袖の海、心々の汐境、夫婦の緣の友綱を、忠義に思ひ振り切つて。

ト權六、船へ飛び乘る。おらち、驚ろき、友綱を捉へるゆゑ權六、山刀を拔いて友綱を切る。おらち、撞となる。これにて船は好き所へ出る。權六、刀を啣へろを木の頭。

〽跡白浪と。

ト三重、浪の音烈しく、權六、艪を押し立てる。おらちは呆れし思ひ入れ。この見得、三重にて、よろしく

幕

三幕目　岩木館の場

役名——鬼柳一學。大江郡領時廉。一學倅、左門之助。忍び、運藤。足輕、鎌平。同、鐵平。權六女房、おらち。藏之進妻、櫻戸。乳人、吳竹。腰

元、あざみ。同、若葉。同、おあさ。初姫。藏之進悴、武千代。大和田藏之進。山岡權六。

本舞臺、四間通し、中足の二重、本緣付き。向う銀襖、上手、塗り骨障子、眞中に立て、上下、後へ下げて網代塀、楓の立ち木、日覆より同じく吊り枝。すべて奥州岩木館の體。爰に腰元あざみ、若葉、おあさの三人、長柄くわへの女蝶男蝶を折つて居る。この見得、琴唄にて幕明く。

あざ　コレ若葉どの、わしやどうも合點が行かぬは、此方の御殿のお姫樣、まだお五ツのやんちや盛りを、なぜ後室樣と云ふのぢやぞいの。

若葉　オヽ、あざみどの、そなたは新參ゆゑ知りやるまいが、殿樣御不慮にお果てなされてより、御臺樣を始め、安壽姫さま對王さまお二人とも、要之介どのが御供にて、何處へ御出でなされたやら、お行くへ知れず。

あさ　それゆゑ後は御家老の、一學さまがお預かり。御幼少なれど初姫さまは、對王さまとお云ひ號けゆゑ、それで後室樣と申し上げるのぢやわいの。

あざ　ハア、そんならアノ初姫さまは、御兄弟ではないのかいなア。

若葉　サア、あの初姫さまは、岩手の社で殿樣が、お拾ひなされしお子樣ぢやわいの。

あざ　そんなら初姫さまは、蜜柑籠へ入れてあつたお捨かいの。

あさ　これはしたり其やうな事を。それはさうと、この女蝶男蝶は、何の爲に拵らへたのぢやぞいの。

若葉　これは今日初姫さまへ、伯父君郡領さまのお媒人で、御養子がお出でなさるゝゆゑ、御祝儀の支度をするのぢやわいの。

あざ　なぜ御養子をなさるのぢやぞいの。

あさ　サア、お大名はお五ツでも、一旦お云ひ號けのあつた上は、外の殿御を持つ事はならぬわいなう。

あざ　それはマアおいとしい。一生うまい味を知らずに。わたしなぞでは辛抱が出來ぬ。なんでも大きいのや小さいのや、又長いのや、筋の澤山あるのや、いろ／＼喰べ分けて見ねば、旨い味が知れぬわいなア。

二人　そりやお前、何の事ぢやえ。

あざ　サア、こりやわたしの好きな、さつま芋の話しぢやわいの。

二人　ホヽヽヽ。

ト三人笑ふ。誂へになり、奥より乳人呉竹、出て來り

呉竹　コレ〱腰元衆、最前から後室様が、皆が居ぬとておむづかつてぢや。お傍に行つて下さりませ。

三人　畏まりました。

あざ　わたしがいつものおどけ話しで、御機嫌を取りませう。

呉竹　サア〱、早う行つて下さりませ。

若葉　そんなら御一緒に、

三人　參りませうわいなア。

ト誂へにて三人、奥へ入る。呉竹、殘り

呉竹　ほんに、年の行かぬうちと云ふものは、寄ると觸ると男の話し、又は芝居の噂にて、お上の事も思はずに、殿様御不慮のその上に、御親子様のお行くへ知れず、かてゝ加へて藏之進さま、日頃の忠義に引替へて、お主を討ちしと獄屋へ押籠め、それゆゑ鬼櫻一學さま只一人の御心勞、この上お家の成行きが、案じられる事ぢやわいなア。

ト思ひ入れ。唄になり、花道より藏之進妻櫻戸、屋敷女房の拵らへ、悴武千代、袴、一本差しにて櫻戸に手を引かれて來り、花道にて

武千　申し母様、父様のお出でになる所は、もう直かや。

櫻戸　オヽ、父様のござるのは、アノ向うの獄屋に、イヤ、御殿にお出でなさるゝゆゑ、必らずお上へお願ひ申し、其方に逢はさうわいの。

武千　早う逢はして下されや。

櫻戸　オヽ、逢はさいで、なんとせうぞいなア。

ト唄の切れにて本舞臺へ來り、呉竹を見て

憚りながら、それにお出でなされまするは、調姫さまのお乳の人、呉竹どのではござりませぬか。

呉竹　これはどなたかと思うたれば、藏之進さまの御内室櫻戸さま、武千代さまも御一緒に、ようお出でなされました。いつもながら、おまめな事でござりまするな。

櫻戸　イエ、モウ、どことも申しませぬ替りに、いたづらのみ致して居りまする、ホヽヽヽ、して、お姫様にも、御機嫌よろしうゐらせられまするか。

呉竹　誠に御丈夫に御成長遊ばしまする。

櫻戸　それは何よりおめでたう存じます。

トこれにて呉竹、思ひ入れありて

呉竹　そのおめでたにつきましても、お氣の毒なは櫻戸さま、申さうやうもない藏之進さまのお身の上。深い樣子のある事ではござりませうが、この程よりの獄屋のお住居。お前樣のお心の内、御推量申して居りますわいな。

櫻戸　有り難うござりまする。明暮れお主を大切に、寢ても足さへ向けませぬ夫藏之進どの、如何なる天魔の魅入りしか、お主を討ちし大罪人、所詮助からぬ命ゆゑ、どうぞこの子に逢はせたく、また私しも逢ひたさに、忍んで館に參りましたが、藏之進どのを預かりは、物堅い兄一學、定めてこの事、頼みましたら、叱りまするでござりませう。どうぞあなたも共々に、お願ひ申し上げまする。

呉竹　そりやモウ、お頼みなうても一學さまへ、よしなにお執成し致しませう。

櫻戸　コレ武千代、其方もお願ひ申しやいの。

武千　アイ。小母樣、お願ひ申しまする。

呉竹　アイ〳〵、承知しました。アヽ、何にも知らぬお子でさへ。

　トほろりと思ひ入れ。

櫻戸　御推量なされて下さりませいな。

　トこの時、花道揚げ幕にて

呼び　時廉さまお入り。

呉竹　折惡い伯父君の御入りとあれば。

櫻戸　お目にかゝらばこの身の大事。

呉竹　暫しの間その垣の、小蔭にお忍びなされませ。

櫻戸　左樣なれば呉竹さま。

呉竹　櫻戸さま。

　ト立ちかゝり

　ドレ、お知らせ申しませうか。

　ト床の淨瑠璃になる

〽女同志の頼もしく、乳人は奥へ櫻戸は、垣の小蔭へ忍び行く。

　ト兩人思ひ入れあつて、呉竹は奥へ入る。櫻戸は武千代の手を引き、下手へ入る。

〽折から入り來る大江の郡領、上見ぬ鷲の勢ひに、館の執權鬼柳一學、禮儀正しく出で迎ひ。

　トこれへ中の舞を冠せ、花道より時廉、上下大小にて出る。奥より鬼柳一學、衣裳上下、大小にて出て來り、出迎ひ

一學　これは〳〵、伯父君郡領公には、ようこそ御入來。

時廉　後室初姫の名代、お出迎ひ仕つてござりまする。
一學　オヽ、誰れかと思へば鬼柳一學、出迎ひ大儀。
時廉　ハツ。イザ、設けの席へ、お通り下さりませう。
一學　許しやれ。
〽靜々上座へ打通れば、一學は敬ひ請じ。
　ト時廉、上手へ通り住ふ。一學、こなしあつて
一學　伯父郡領公には、御政務御繁多の中、當家跡目お取持ちの下され、御苦勞の段、有り難き仕合せに存じ奉りまする。
時廉　なにサヽ、これも伯父たる身の役目、さのみ苦勞にも存ぜぬ。何にもせよ、乳呑み子に五十四郡を預け置く事心元なく、それゆゑ某、媒介なせし當家の養子。幸ひ今日吉日ゆゑ、後刻入輿いたすであらう。
一學　委細承知仕つてござりまする。
時廉　イヤ、それは格別、この程より禁獄させし、主殺しの藏之進、最早成敗おしやつたか。
一學　未だ成敗の仕りませぬ。
時廉　何ゆゑ成敗の致さぬのぢや。罪科極りし逆磔刑、なんの造作もない事だ。
一學　仰せ恐れ入り奉る。殿御逝去のその後は、御幼少なれど御後室は、即ち館の主、身不肖なれど拙者補佐なし、萬事の政治。藏之進何ゆゑ主君を害せしと、日夜拷問仕れど、今にそれぞと白状せず。さすれば迂濶に成敗なりがたく、それゆゑ日々延引の段、恐れ入つてござりまする。
時廉　ムウ。さこそあらん、それと察して時廉が、疾より養子を勸むるのぢや。何を云つても幼少なる後室ゆゑ、何事も後室々々と、子供に塗り附け埒が明かぬ。今日養子相濟めば、この郡領が指圖をなし、萬事の政治いたさにやならぬ。例へ白狀いたさうが致すまいが、主を殺せば逆磔刑、竹鋸は當り前。ア、緣に引るゝ者どもが、さぞや歎いて吠えるであらう。笑止な事だ。ムヽハヽヽヽハヽ。
〽飽まで罵る雜言に、無念と思へど一學が、素知らぬ體に張合ひなく。
イヤ、これとてもいらぬ事。ドリヤ、養子入來いたすまで、奥へ參つて休息なさん。
一學　ナニサマ、御養子入輿は正午の刻限、未だ餘程の間もござれば。
時廉　打寛いで相待たん。

一學　左樣なれば郡領公。
時廉　後刻逢はう。
〽あたり睨めつけ一間の内へ入るを遲しと小蔭より、櫻戸が武千代を、連れて出づるを一學が、それと見やりて立たんとするを。
トこの文句の間、時廉、奥へ入る。下手、垣の後より櫻戸、武千代を連れ出て來り、一學、兩人を見て立ち上がるな
櫻戸　ア、モシ、兄上樣、暫らくお待ち下さりませ。
〽云ふに一學尻目にかけ。
一學　ヤイ、そちや妹櫻戸、誰が許して、この館へは來りしぞ。
櫻戸　サア、それは。
一學　イヤサ、夫藏之進は、大それた主殺しの科人、家内殘らず戸締めになし、出入りを嚴しく止め置きしに、御法を破るのみならず、御殿間近く來るなどとは、云はうやうなき不屆き者めが、キリ〳〵立つて歸り居らう。
〽叱りつけられ櫻戸は。
櫻戸　サ、、その御立腹は御尤も。お物堅い兄上樣ゆゑ、お叱り受くるは合點で、御法を破り、お館へ忍んで參りましたのは、これなる武千代が、明暮れ父樣に逢ひたい逢ひたいとせがみますゆゑ、どうぞ一目逢はせたく、子ゆゑに迷うて致せし事。この子に免じて、お免しなされて下さりませ。コレ武千代、父樣に逢ひたくば、よう伯父樣にお願ひ申しや。
〽母が敎へに武千代は、温なしく手をつかへ。
武千　コレ伯父樣、どうぞ父樣に逢はせて下さりませ。拜みますわいなア。
〽兩手を合せて伏拜めば、一學も詞を和らげ。
一學　オヽ、尤もぢや〳〵。さぞ逢ひたからうがな、コレ、伯父が云ふ事をよう聞けよ。其方が父はな、大事の〳〵お主を殺せし科人ゆゑ、獄屋というて、怖い恐ろしい所に居て、可愛い其方に逢はせたうても逢はされぬ。ぢやに依つて早う内に歸れ。ヨ、其方は賢い者ぢやゆゑ、定めて聞分けたであらうな。
武千　そんなら父樣は、お主樣を殺したゆゑ、わしに逢ふ事はなりませぬか。母樣、とうせうぞいなう。
〽と縋りつけば。
櫻戸　道理ぢや〳〵。モシ兄上樣、此やうに、この子が逢ひたがります。たつた一目逢はせてやつて下さりませ。

殊には今も承れば、今日御養子様のお入り次第、直ぐに夫の成敗と、郡領さまの仰せなれば、今日逢はねばもうこの世で、逢ふ事ならぬ藏之進どの。慈悲ぢや情ぢや兄上様、どうぞ逢はせて下さりませ。

〽口說き歎くを道理とは、思へどわざと詞を荒らげ。

一學　ヤア、くど〳〵と返らぬ事を。達て申さば役目の表、御法を破りし重罪人、其まゝには差措かぬぞ。

トあたりへ思ひ入れあつて

サヽ、人目にかゝらぬ其うちに、武千代連れて早く歸れ。エヽ、歸れと云ふに。

櫻戸　イエ〳〵、夫に逢はぬ其うちは、どうあつても歸られませぬ。御法を破りし科とあらば、わたしもこの子もとも〴〵に、獄屋へやつて下さりませ。

武千　わしも一緒に行きたいわいなう。

〽幼な心に父親を、慕ふ心ぞいぢらしゝ。

一學　エヽ、さほどまでに。イヤ、憎き奴等。願ひの通り獄屋へ入れてくれう。ヤア〳〵悴左門、これへ來れ。

左門　ハアヽ。

〽はつと答へてお次より、上下姿しとやかに、左門は父に手をつかへ。

ト下手より左門之助、若衆鬘、上下大小にて出て來り

父上、御用でござりまするか。

一學　オヽ、其奴等二人に繩かけい。

左門　ハツ。

ト櫻戸武千代を見て

ヤ、こりや叔母様、武千代どの、何ゆゑあつてお二人に。

一學　お咎め受けし身を以て、上の御法を破りしゆゑ。

左門　すりや、それゆゑにお二人に。

一學　とく〳〵繩掛けい。

左門　畏まつてはござりまするが、現在叔母や從弟の武千代。

一學　イヤ、例へ緣者たればとて、科ある者を免さうか。

左門　ではござりますが。

一學　ヤア、役目の表を粗略になすか。

左門　ハツ。是非に及ばぬ、叔母樣御免。

〽用意の早繩取出し、是非も涙の叔母從弟、血筋の繩ぞ掛けにける。

ト左門之助、捕り繩を取出し、兩人に繩をかける。櫻戸、思ひ入れあつて

櫻戸　エヽ、胴慾な兄上樣、わたしは兎もあれ頑是ない、この子に繩を掛けるとは、あんまりな情知らず。氣強いばかりが武士かいなア。

〽身を慄はして櫻戸が、恨む詞を耳にも掛けず。

一學　最早御養子輿入れの刻限。見苦しき此奴等二人、廣庭へ引立てい。

左門　畏まりました。

櫻戸　そんなら、どうでも逢ふ事は。

武千　ならぬかいなア。

一學　オヽ、この世のうちでは逢はれぬわい。

櫻戸　ハア、。

ト泣くを引立て

左門　イザ叔母樣、お立ちなされ。

櫻戸　それぢやと云つて。

一學　エヽ、キリ／＼引立てい。

トきつといふ

〽引立てられて親と子が、是非も泣く／＼歩み行く。

ト櫻戸武千代を左門之助、附いて下手へ入る

〽折しも表に聲高く。

呼び　御養子樣のお入り。

ト呼ぶ。一學、思ひ入れあつて

一學　早御養子の御入りとあれば、時廉公へ申し上げん。

ト奥にて

時廉　イヤ、知らせに及ばぬ、聞いた／＼。

〽一間を出づる大江の總領。

ト序の舞にて、奥より時廉、出て來り

待ち兼ねし養子の入來。

ト上手障子屋體へ向ひ

ヤア／＼乳人呉竹、後室をこれへ。

ト上手にて

呉竹　ハイ、畏まりました。サア／＼、後室樣にも

腰元皆　あれへお越し遊ばしませ。

〽乳母腰元が麗々に、敬ひかしづく後室は、まだ五つ子のいたいけながら、さもうづ高く見え給ふ。

トこれへ管絃を冠せ、奥より以前の腰元、褥脇息を好き所へ置く。芥子坊主の姫を呉竹、手を引き出て來り、褥の上に坐はせる。一學ハッと平伏なす。また花道揚げ幕にて

呼び　お入り。

〽待つ間程なく香に包ふ、接木の梅の若枝も、三十餘り

の大男、武骨に似合はぬ長上下。

ト三味線入り中の舞になり、山岡權六、長上下大小にて　誂らへの箱を抱へ出て來り、花道にて

權六　話に增さる岩木の館、屋敷の物好き庭前の風景、片山里の田舍侍ひ、かゝる席へは初々しき、汗を覺悟の敵役、仕馴れぬながらお許し受け、これまで來りし象潟權六、誰ぞお取次頼み存ずる。

時廉　待ち兼ねし象潟權六、養子となれば我が館、何案內に及ぶべき。

一學　何は然れ其處は端近、先づ／＼これへ。

皆々　お通りあらせられませう。

權六　然らばそれへ參るであらう。

ト右鳴り物にて權六、二重よき所へ住ふ。

時廉　なんと一學、郡領が見立てた養子、器量骨柄、よい跡つぎであらうがな。

一學　ハッ、御養子樣へ申し上げます。卽ちこれに御座あるが、當家の後室初姬君、まつた拙者事は、家老鬼柳一學と申す者。

呉竹　私し事は後室樣の乳人呉竹、その外つぎ／＼の腰元ども。

一學　自今お目かけられて

皆々　下さりませう。

權六　何がさて、今日より養子となれば、其方どもとは主家來、萬事よしなに。イヤ又、後室は某が母人、親子となりし印には、この一品を受納下され。

ト箱差出す、その間に運ぶ腰元が、銚子杯熨斗昆布、行く末廣き三つ重ね、これぞ親子の緣結び。

トこの間、權六、件の箱を初姬の前に出す。腰元皆々銚子杯を運ぶ。呉竹、取次ぎ

一學　イザ、後室より御養子へお杯を、

呉竹　畏まりました。

ト謠になり、呉竹、持ち添へて初姬に杯を取らせ、よろしくあつて權六にさす。權六、吞んで謠一杯に納まる。

時廉　これで親子固めの杯。

呉竹　首尾よう相濟み

皆々　おめでたう存じます。

ト一學、初姬に向ひ

一學　イヤナニ後室樣、今日よりして御養子權六さまは、あなたのお子でござりますれば、御挨拶を遊ばしませ。

ト呉竹、初姫に呑み込ませ思ひ入れ。

呉竹　サア、ちやつと仰しやりませいなア。

初姫　オヽ、我が子の權六、隨分母に孝行にして、おやま人形買うてたもや。

權六　ハツ、これは〳〵有り難き母人のお詞。何がさて、孝行に致さいで何と致さう。御機嫌のよいやうに、なんなりとお好きな物を、澤山買うてあげまする。その替り權六も、可愛がつて下されや。

初姫　オヽ、過分々々。

〽ませた詞のいとさまは、つけごの鶯蘇蛙、歌にも詠まれぬ出合ひなり、郡領はしたり顏。

時廉　サア一學、養子の祝儀濟む上は、藏之進を呼び出し、敵の詮議いたさにやならぬ。

一學　イヤ、その詮議はなりませぬ。

時廉　ムウ。ならぬとは、なぜならぬ。

一學　サア、例へ詮議いたしても、肝心の後室樣には、藏之進は殺さぬと仰しやります。ナア、左樣でござりまするな。

ト思ひ入れにて云ふ

初姫　オヽ、殺す事は否ぢやわいの。

一學　アレあの通り、如何程お勸め申しても、殺さぬとばかり御意あるゆゑ、殺せとあるまで永の牢舍、それゆゑ詮議には、及びませぬかと存じます。

〽云へば妾ぞと郡領が、知らす目顏を呑み込んで。

ト時廉、權六、頷き合ひ

權六　アイヤ一學、母人へ權六が申し上げる仔細あり、母人これへ。

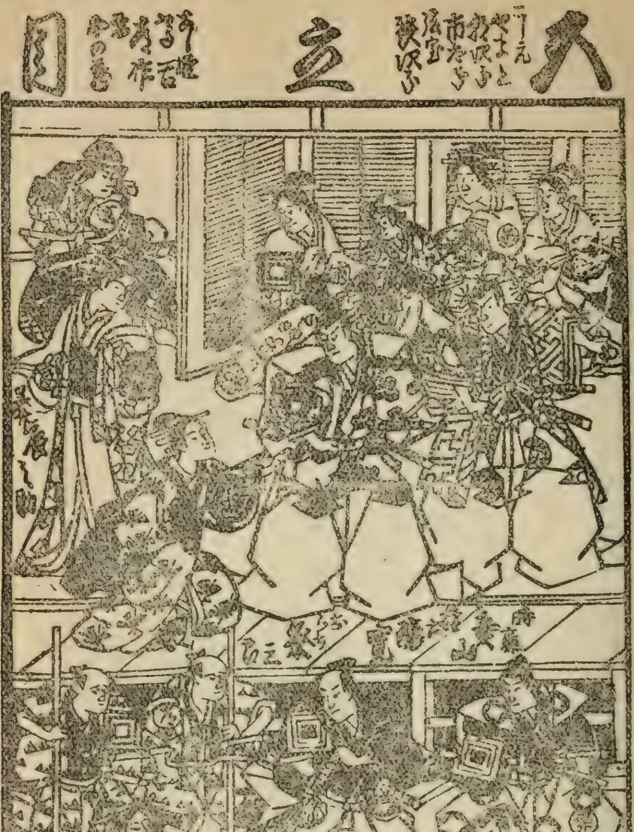
〽ずんど立つて權六は、後室膝に抱き上げ、心の鎌柄押隱し、わざと面を和らげて。

ト一學、是非なき思ひ入れ。呉竹、初姫の手を取り、權六の側へ遣る。權六、抱き上げてヂツと顏を見て、思ひ入れあつて

イヤ母人、只今權六が申し上げる事、ようお聞きなされませや。

ト謠らへの合ひ方になり

大方常々附き添ふ者が、お勸め申し上げませうが、やんちやばかり仰しやつて、殺さぬとあつては第一御不孝。あなたの爲には義理ある養父、政氏公の仇敵、藏之進を殺さねば、岩木の家が立ちませぬぞや。サア、それぢやに依つて、殺さうと仰しやれ。サア、仰しやらぬか。サ



嘉永五年四月河原崎座上演番附

ア仰しやれ。エヽ、これ程云うても仰しやらぬか。ムウ。
こりや此方が惡かつた。
〽獨り頷き袂より、雛の片しを取出し。
ト權六思ひ入れ。袂より紙雛の男雛を出し
サア母人、權六が惡い事は申しませぬ。ツイ殺せと仰し
やつたら、コレ〳〵、この雛を上げまする。サア、これ
が欲しくば、たつた一口。
〽さア仰しやれとすかされて、人形欲しさの幼な氣に。
初姫　オヽ、殺しやいなう。
一學　ヤ。
權六　オヽ殺せとはよく御意なされた。さて〳〵賢い母
者人。
〽たらし込んだる工風の罠、權六居直り詞を荒らげ。
サア一學、後室の御意は背かれまい。藏之進めを引出し、
この權六が一詮議。
ト立ちかゝる
一學　アイヤ、お待ちなされい權六さま。
權六　ムウ。待てとは、なんで。
一學　されば、御親子のお杯は濟ましたれど、跡目の綸
旨も受けぬうち、岩木の家の政道は、まだ〳〵お早い。

お控へなされい。
〽遣り込むれば急き立つ郡領。
時廉　ヤア、推參なり一學、この郡領が媒介にて、岩木の
養子になつたる權六、早いとは何が早い。例へ綸旨は受
けずとも、家の系圖を讓りなば、岩木の主はこの權六。
イザ、改めて受け取られよ。
〽懷中より一卷取り出し、渡せば權六押頂き。
ト時廉、懷中より袱紗包みの一卷を出し、渡す。權六、
取つて
權六　ハヽ、忝なき御賜物。コリヤ一學、家の系圖が手に
入つても、これでも政道はならぬと云ふか。
一學　サア、それは。
權六　よもや違背はあるまいか。
〽退引きならぬ詞詰め、是非なく控ゆる折柄に。
トてんつゝになり、花道より前幕のおらち、高からげ、
風呂敷包みを持ち出て來る。これを足輕鎌平、鐵平、
菖蒲革、股立ちの足輕にて、制しながら出て來り、花
道にて
鐵平　賤しい女め、下がれ〳〵。
らち　イエ〳〵、わたしや怪しい者ぢやござんせぬ。この

屋敷のお殿樣にお願ひ申す事がある程に、どうぞ通して下さんせ。

鐵平　イヤ〳〵、ならぬ〳〵。下がれ〳〵。

ト爭ひながら舞臺へ來る

一學　コリヤ〳〵、かしましい、何事ぢや。

鐵平　ヘイ〳〵、この女が殿樣へ、直のお願ひがあると申して、推して通りまするゆゑ、支へまするのでござります。

〽下部が詞に、權六わざと形を正し。

權六　ナニ、某へ願ひある女。して、何事の願ひぢや。

らち　ハイ〳〵、そのお願ひと申しまするは。

〽云ひつゝふつと顏見合せ。

ヤ、お前ぢや〳〵、こちの人ぢや。オヽ、矢ッ張り、こちの人ぢや〳〵。

鐵平　ヤイ〳〵、御養子樣を捕へて、こちの人とは、不屆き至極。下がれ。

らち　イヱ〳〵下がらぬ。わたしや女房でござんす。コレ、權六どの、こなさんは〳〵、連れ添ふ女房に譯も云はず、ポイと舟に飛び乘つて、何處へ行かしやんしたか行くへ知れず。せう事なしに世帶をしまひ、泣の淚で諸所方々、お前の行くへを尋ねるので、いかい苦勞をしましたわいなア。それにお前は仔細らしい、裾の長い上下着て、差とつけもせぬ脇差を、いらぬ事に二本差し、勿體らしい顏わいなア。アヽ聞えた、こりやお前、わたしに愛想が盡きたゆゑ、この內へ聟入りする氣ぢやな。イヤ、さうはならぬ。アイ、ならぬわいなア。わたしが亭主ぢやに依つて、わたしが連れて戾つて見せう。サア山岡、戾らしやんせいなア。

一學　ナニ山岡。

〽聞き咎むるを打消して。

權六　ヤア、我れを捕へて亭主なぞとは、身の程知らぬ慮外者めが。アヽ、不便や此奴、氣狂ひさうな。ハヽヽ、ハ。こりや中々よい慰み。ヤイ女、一體、わりや何處の者だ。

らち　アレ、まだぬけ〳〵とそんな事。女房も女房、お前とは一通りの仲かいなア。忘れもせぬ五年後、雜魚寢祭に馴れ初めて、仲人なしに女夫となり、子まであるわたしをば、女房でないの氣狂ひのと、わたしよりお前の氣が、のぼつて居るに違ひない。サア〳〵、早う戾らしやんせいなア。

〽立ちかゝるを押し隔て。
鐵平　尾籠な女、控へて居れ。
權六　ヤア、又しても慮外な女郎め。某を誰れとか思ふ。今日より岩木の跡目、五十四郡の主なるぞ。僞はり吐かす野太い女め。首ぶッ放す奴なれども、今日の祝儀に命は助くる。コリヤ、この女を門前へ叩き出せ。
鐵平　ハツ、畏まつてござりまする。女め、立たう。
らち　イエ／＼、わたしやこちの人と、是非共一緒に。
鐵平　エヽ、叶はぬ事を。キリ／＼立たう。
〽引立てんとするを、一學謹かけ。
一學　アイヤ、その女歸しては、政道が立ちますまい。
權六　ムウ。政道が立たぬとは。
一學　ハテ、當の跡目、權六さまに云ひかけ致せし大罪人、此まゝには歸されぬ。幸ひあなたの政道始め、さつぱりと切つてしまへとある、後室樣の卽ち仰せ。ナア申し。
ト初姫へ思ひ入れ。
初姫　オヽ、その女切つてしまへ。
權六　ヤ。
一學　ソレ、切れと仰しやる。母御の御意は背かれますまい。

權六　サアそれは。
一學　但し殺せとある、藏之進が背きませうかな。
權六　サア、それは。
一學　成敗あるか。
權六　サア。
一學　お背きあるか。
權六　サア。
一學　サア。
兩人　サア／＼／＼。
一學　御返答が承はりたい。
〽しつぺい返しの理屈詰め、有無の返事もあらざれば。
權六　ムウ。成敗いたさう。
一學　すりや、御意をお背きなされぬか。
權六　如何にも、後室の御意は背かれぬ、云ひかけ致せし下衆女は、某、直ちに首打ち落す。
らち　エヽ。
權六　ソレ、その女に繩かけて、廣庭へ引据ゑ置け。
鐵平　畏まつてござりまする。
〽早繩たぐつて縛しむれば、女は狂氣の如くにて。
らち　エヽ、現在連れ添ふ女房に、繩かけて殺さうとは、

そりや、あんまりぢや〳〵わいなア。
權六　餘りとは何が餘り、云ひ掛け致せし不屆き奴。くどくど云うても返らぬ事だ。ソレ、引立てい。
鐵平　ハツ。女め、立たう。
らち　イエ〳〵、わたしや爰は立たぬ。立ちませぬわいなア。
權六　エヽ、目障りなその女。キリ〳〵引立てい。
らち　そんなら、どうでも。
權六　知らぬわい。
　トおらち、口惜しき思ひ入れ。
鐵平　キリ〳〵立たう。
〽情容赦もあらけなく、引立て〳〵追うて行く。
　ト足輕兩人、おらちを追ひ立て〳〵、下手へ入る。
時廉　ムウ、云ひかけひろぎし女が成敗、權六が致すからは、一學、其方も藏之進が詮議を、この場で致してよからう。
一學　畏まつてござりまする。
權六　岩木の家風詮議の仕樣、後學の爲、見物いたさう。
〽あたり眼に領き合ひ、煙草輪に吹く憎體顏。
呉竹　アイヤ、後室樣には最前より餘程の間、さぞ御退屈。奧へお入り遊ばして、ちとお遊びなされましたが、よろしうござりますわいな。
初姬　オヽ、皆も來い。遊ばうぞや。
權六　左樣なれば、母人樣。
初姬　權六、後に遊ばうぞや。
權六　ハツ。
　ト辭儀をする
呉竹　イザ、奧殿へ
皆々　入らせられませう。
　ト唄になり、呉竹、初姬を伴ひ、腰元附いて奧へ入る
時廉　イヤ一學、早く藏之進を引摺り出せ。
一學　ハツ。
　ト上手に向ひ
ヤア〳〵者ども、囚人藏之進を、これへ引け。
捕手　ハア、。きり〳〵歩め。
〽早引出す囚人は、大和田藏之進綱清、思はぬその身の罪科に、重き掟の縛り繩、心は解けぬ主人の館、しをれ白洲に押直る。
　トこの文句のうちよき程に
キリ〳〵歩め。

トこれをキッカケに、かすめて時の太鼓になり、上手より大和田藏之進、黑の一つ菁、繩附きにて、黑四天の捕り手四人、繩を取り出て、眞中に引据ゑ

下に居らう。

〽一學側へ立寄りて。

一學　コリヤ、大和田藏之進、この程より詮議なすに、主人を討ちしその仔細、白狀いたさぬゆゑ、永の牢舍申し附けしが、今日た伯父君時廉公、まつた菅家の御養子、權六さまのお指圖なるぞ。サ、包まずと白狀しやれ。

〽云ふにはつと頭を下げ。

藏之　ハッ、この間より申す如く、政氏公を討ち奉りしは、この藏之進に相違ござらぬ。只仔細は申さずとも、主を討つたる大罪人、お家のお仕置願ひ奉る。

一學　イヽヤ、その仔細白狀せざるうちは、いつかな仕置得いたさぬ。主君を討ちしとは分明ならず、譬討つたる者なりとも、包まるゝだけは包み隱すに、自身の白狀合點が行かぬ。サア、その心底を眞直ぐに、白狀いたせ。

藏之　イヤ〳〵、如何程白狀いたせとあつても、主君を討ちしと云ふより外、白狀の筋毛頭ござらぬ。

一學　すりや、どのやうに申しても。

藏之　くどい事を。

一學　ハテ、是非に及ばぬ。

〽物和らかき一學が、詮議に權六高笑ひ。

權六　ヤア、詮議の仕やうが手ぬるい〳〵。其やうな事ぢや白狀せまい。なぜ火水を以て拷問せぬ。詮議の仕樣はさま〴〵あるに、ハテサテ若木の政道は、生ぬるい事だなア。ムヽハヽヽヽヽ。

〽とあざ笑へば圖に乘る郡領。

時廉　イヤ、こりや斯うなけりや叶はぬ。聞けば藏之進が女房は、一學其方が妹さうな。さては兄弟の間柄ゆゑ、それで生ぬるいこの詮議。

一學　こは郡領公の仰せとも覺えず、一國の政治を預かる某、妹の緣に引かるゝやうな一學でござらぬ。

時廉　イヤ、引かれぬとは云はれまい。

權六　それとも、なんぞ引かれぬといふ

兩人　證據があるか。

一學　如何にも。その證據御覽に入れん。ヤア〳〵梓左門、最前の繩附きこれへ。

藏之　ハアヽ。

〽はつと云ふ間も哀れげに、しほるゝ花の櫻戶親子、其

に縄目の憂き姿。
トかすめて時の太鼓、下手より櫻戸武千代に縄かけ、左門之助は縄を取り、附き添ひ出て來り、下手に扣へ居る。
左門　ハッ、仰せに隨ひ、引摺ゑましてござりまする。
〽云ふに思はず藏之進、顔見合せて。
藏之　ヤア、其方達は。
櫻戸　我が夫か。
武千　父樣か。
兩人　逢ひたかつたわいなア。
〽寄らんとするを一學が、荒氣なくも押隔て。
ト櫻戸武千代、上手へ行かうとするを一學、眞中にて押へて
一學　如何に時廉公、妹や甥の縁に引かれぬ、一學が心の底。最前藏之進に逢ひたいと、密かに館へ參りし二人、不便に思はゞ内々にして、逢はせやるが人情なるに、搦め置きしも兄弟ながら、御法を破りし科人ゆゑ。サ、心引かれぬこれぞ證據。イザ、御疑念お晴らし下されい。
〽詞よどまず云ひ放せば、郡領も打頷づき。
時廉　ムウ。流石は一學、感心いたした。その心底を見る上は、藏之進が首打ち落せ。
一學　エ。
時廉　例へ仔細は白狀せずとも、主を討ちしと一言にて、科は極まる逆磔刑。そこを情で死罪に行ふ。有り難い事だと思ひ居らう。
一學　では、ござれども。
權六　否むは矢張り妹の、縁に引かるゝ心か。
一學　全く以て。
時廉　さなくば討つか。
一學　サア。
權六　但しは討たぬか。
一學　サア。
兩人　サア。
三人　サア〱〱。
時廉　心引かれぬ其方なれば。
權六　よもや否とは云はれまい。
〽拔差しならぬかすがい責め、一學も心を定め。
一學　如何にも討ちませう。
櫻戸　エヽ。
一學　見事討つてお目にかけう。

時廉　こりや斯らならては叶はぬ筈。
一學　その代りには權六さまにも、云ひ掛け致せし女が首、お討ちなさるでござりませうな。
權六　云ふにや及ぶ。養子になりし手柄始め、キッと成敗いたして見せう。
時廉　ムウ。權六には女の首、また一學は藏之進が首。
權六　互ひに討つも最早黄昏
一學　今宵暮れ六ッ、鐘を合圖に。
權六　女が首は、一學其方へ。
一學　藏之進が首は權六さまへ。
時廉　身共は奥で、それまで一獻。
一學　左樣ござらば御兩所樣。
時廉　鬼柳一學。
權六　然らば詞を。
ト立ち上がり思ひ入れあつて
つがうたぞよ。
〽言葉つがふ二兩人は、打連れ奥へ入りにける。
ト時廉先に權六附いて奥へ入る。
一學　コリヤ、其方どもは次へ立て。
捕手　ハツ。

ト捕り手足輕は下手へ入る
〽家來を追ひやり、あたりを見廻し。
一學　コレ左門、櫻戸武千代が繩を解きやれ。
〽と縛めを解きほどけば。
ト左門之助、櫻戸武千代の繩を解く
左門は門外警固いたせ。
左門　畏まつてござりまする。
〽心得奥へ立つて行く。
一學　サア、人の見ぬ間にとつくりと、藏之進どのに逢うたがよい。
櫻戸　エ。そんなら大事ござりませぬか。
一學　オヽ、大事ないとも。斯う對面をさせう爲、わざと繩を掛けたる兩人。
櫻戸　すりや、これもお情でござりましたか。さうとは知らず恨みましたは、堪忍して下さりませいなア。コレ武千代、よう伯父樣にお禮を申しや。
武千　アイ伯父樣、嬉しうござります。
一學　オヽ、嬉しからう〳〵。取分け其方は、一世の別れを致したがよい。
櫻戸　すりやどう、あつても。

ト悔りなす

一學　ハテ知れた事、一旦つがひし武士の詞、反古にはならぬ。

櫻戸　そりや聞えませぬ胴慾な。なぜ助けては下さりませぬ。お前は夫の首打つて、武士の意地は立ちませうが、後に殘つた私しや、この子はどうせう〳〵、どうせうぞいなア。

〽どうせうぞいなと平伏せば、譯も涙に武千代が、共に泣くこそいぢらしゝ、藏之進は詞を荒らげ。

藏之　コリヤ櫻戸、何を愚圖々々。一學どのを恨む事があるべきぞ。首討たるゝはこの身の大罪、三代相恩のお主を手にかけ、竹鋸で引かれし上、逆磔刑に遭ふべきを、首討たるゝは、まだしもの事。殊には又他人ならぬ、其方が兄たる一學どのの、手にかゝるはこの身の本望、恨みを云ふその口で、なぜ禮は云はぬのぢや。

櫻戸　なんのこれが禮ところが、お前が死なばわたしもこの子も、所詮生きては居ぬ覺悟、死出三途も、とも〳〵に。

藏之　エヽ、まだ〳〵申すか、うつけ者め。仔細あつて藏之進は、數代續きし大和田の、家名を穢せし主殺し、一命捨つるは元より覺悟。この身ばかりか其方達まで、とも〳〵死ねば恥の恥。サア、死ぬる命を存らへて、倅武千代を守り育て、一學どのを後楯に、恥辱を雪ぐ心にないか。

櫻戸　サア、それぢやと云うて、どうマアこれが。

藏之　ならぬとあれば是非に及ばぬ。夫婦親子の縁を切らうか。

櫻戸　サアそれは。

藏之　聞分けて死を止まるか。

櫻戸　サア。

藏之　ド、どうぢや。

櫻戸　ハアヽヽ、聞分けました。

藏之　ムウ。それでこそ我が女房。イザ、一學どの、片時も早く拙者めを。

一學　云ふにや及ぶ。

ト一學、思ひ入れあつて

〽と突ツ立ちしが。

とは云へ最早この世の別れ、云ひ置く事もあるならば、なんなりと。

藏之　忝なき貴殿の心底。この期に及び、云ひ置く事は

ござらねど、只心にかゝるはお家の成行き。又二つにはこの悴が、行く末。頼み置くはこればかり。コリヤ武千代、爰へ來い。

武千　アイ〳〵。

　ト藏之進に寄る。ヂッと顔を見て

藏之　コリヤ武千代、今この父は死ぬ程に、其方はこれから伯父樣を、父と思うておとなしう、手習ひ學問弓馬の稽古、誰れに劣らず精出して、天晴れ大和田の胤なりと、人に褒められ、この父が、恥辱を雪いでくれいよ。

〽云ひ聞かすれば武千代は、涙拭うておとなしく。

武千　アイ、手習ひ學問弓矢の稽古、おとなしうします程に、どうぞ死なずに居て下さりませ。

櫻戶　オヽ、尤もぢや〳〵、道理ぢやわいの。

藏之　死なずに居らるゝ事ならば、なんの其方を殘して死なう。

〽流石子ゆゑの恩愛に迷ふ心を取り直し。

ア、、益なき事に未練の繰言、一學どの、必らずお笑ひ下さるな。

一學　アイヤ〳〵、貴殿の心中察し申す。さりながら、最早暮れ六ッに間もあるまじ。心靜かに覺悟あれ。

藏之　疾より覺悟いたしてござる。

〽座を構ゆれば一學も、下緒を取りて早襷、刀の寢刃安れにも、妻子は左右に取縋り

　ト藏之進、居直る。一學、下緒を襷に掛け、刀を拔き、鼻紙にて拭ふ。これを見て、櫻戶武千代、藏之進に縋りつき

櫻戶　そんなら、どうでも

武千　父樣には

櫻戶　お果てなさるのかいなア。

藏之　ハテ、知れた事を。

　トきつと云ふ。この時、本釣鐘の六ツを打つ。

一學　ヤ、ありやモウ暮れ六ッ。

藏之　近づく知死期。

櫻戶　すりやモウこれが。

一學　この世の別れ。

櫻戶　ハア、。

　ト泣き伏す

藏之　エヽ、未練者め。

〽と一言が、この世の別れ、武士の、泣かぬ涙ぞ。

　トこの間、藏之進、目を閉ぢ覺悟の思ひ入れ。一學、

刀を振り上げ、引張りの見得にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、高足の二重、本縁附き白洲階子。上の方、一間、朱塗り骨障子屋體、向う銀襖、上の方、登り木の松、柴垣、下の方網代塀、同じく柴垣、上下に楓の立ち木、日覆より青葉の楓の吊り枝、すべて奥殿の模樣。矢張り本釣鐘の暮れ六ツにて道具納まる。

〽哀れなり、無常を告る鐘の音に、小暗き庭の縁先、窺ひ〳〵時廉が、合圖の呼子吹き立つれば、茂味を出づる忍びの曲者。

トこの間、奥より以前の時廉出て來り、あたりを窺ひ、呼子を出し吹く。これにて下手樹木の蔭より、忍び運藤、黒頭巾、一本差しにて出て來り

運藤　時廉公。

時廉　コリヤ。

ト時の鐘、合ひ方になり

運藤　相圖の呼子は、御用でござりまするか。

時廉　オ、、用事あり。

トあたりへ思ひ入れあつて

兼ねて當家を押領なさんと、都に於て政氏を討取らせ、手段を以て邪魔になる、藏之進めに科を負はせ、今宵死刑に行ふ段取り。又この程荷擔せし、象潟權六、一癖あるゑせ者ゆゑ、當家へ養子に入り込ませ、五十四郡を奪はん企み。十が九つ仕負ふせたれど、滿つれば欠くるの憂ひを思ひ、一家といへど敵の館、長居せんはこの身の大事、それゆゑ密かに歸館なせば、汝は跡に忍び居て、今宵の樣子を注進いたせ。

運藤　畏まつてござりまする。して我が君には只お一人。

時廉　イヤ〳〵、門外には數多の家來、忍ばせ置けば氣遣ひなし。

運藤　左樣ござらば時廉公。

時廉　必らず人に見咎められな。

運藤　心得ました。

時廉　幸ひのこの宵闇、暗きに紛れ、さらだ。

〽隱し合せて時廉は、門外さして出でて行く。

ト時の鐘、時廉　花道へ入る。運藤、下手へ忍ぶ。

〽折もあらせず一間の内、腰元どもが口々に。

トばた〳〵になり、奥にて

呉竹　後室様を何者か、手に掛けて立退きしぞ。腰元衆、
詮議あれ。
皆々　心得ました。
〽上を下へと返しける。
トばた／＼になり
〽やゝ程過ぎて權六は、以前の箱を小脇に抱へ、縁先へ
立出でて。
ト奥より權六、以前の箱を抱へ、出て來り
權六　ヤア／＼、一學はいづれに居る。早暮れ六ツは打つ
たるぞ。
〽呼はる聲に一學が、廣庭傳ひに入り來るを、それと見
るより。
ト下手より一學、出て來る。
コリヤ一學、藏之進が首討つたか。
一學　如何にも、御契約の通り首討つてござる。定めてあ
なた様にも。
權六　念に及ばぬ討取つた。して、藏之進が首は。
一學　只今御覽に入れん。
ト奥へ向ひ
ヤア／＼、藏之進が首級をこれへ。

トこの時奥にて
藏之　ハア、。
〽はつと答へて奥の間より、首桶携へ立出づる、藏之進
を見て恟り。
ト奥より藏之進、袴大小にて首桶を持ち出て來り、權
六の前へ首桶を置く。
權六　ヤア、藏之進が首討つたといひ、持參なしたるこの
首桶は。
一學　心を籠めし藏之進が首、御検分下されい。
〽とさしつけられ、合點行かずと首桶の、蓋取退くれば
襤褸の一重。
ト首桶の蓋を取る。内に誂らへの襤褸入れてある。
權六　ヤ、この襤褸は。
一學　見忘れたるか、非人の山岡。
藏之　汝が所持であらうがな。
權六　なんと。
ト誂らへの合ひ方になり
藏之　御主君政氏公、都三條松原にて闇討に逢ひ給ひし、
死骸の側にあつたる襤褸、後日の證據と某が、腹心の
者に詮議させしに、山岡と云ふ野伏りの、襤褸なりと聞

きしゆゑ、その罪科をこの身に受けて、汝が行くへを尋ねしに

一學　計らず最前山岡と、其方が女房が云ひしゆゑ、さては時廉に荷擔と云ひ、主君を討ちし敵なりと、推量なして虜となしたり。

藏之　尋ぬる館へ入り込みしは、天命遁がれぬその身の積惡。

一學　サア尋常に

兩人　覺悟なせ。

〽と詰め寄すれば。

權六　ムウ。如何にもこの襤褸は覺えあれど、人を殺せし覺えない。

一學　この期に及び卑怯至極。

兩人　觀念なせ。

〽觀念なせと打ちかくれば、拔けつ潜りつ以前の白木、刃をあしらふ箱の蓋、くわらりと出たは三貫文。

ト一學藏之進、切つてかゝる。權六、件の箱であしらふ拍子に、蓋落ちて中より三貫文の貫ざし出る。

ヤ、これは。

權六　サア、この三貫の貫ざしは、御親子樣の御行くへ。

兩人　なんと。

權六　云ひかけなせし女が首、御覽に入れて申し上げん。暫らくお待ち下されい。

〽刀投出し平伏せば、樣子あらんとためらふ兩人、權六小蔭を打見やり。

ト下手へ向つて

ヤア〳〵、最前の首持參いたせ。

ちち　ハア、。

〽小蔭を出づる以前の女、抱へし首桶差出せば。

ト下手柴垣の蔭よりおちち、首桶を抱へて出て、一學の前へ直し置く。

一學　ヤ、首を討ちしと思ひし女。

藏之　鸚鵡返しに持參の首は。

權六　卽ちこの身の申し譯。

ちち　御覽なされて

兩人　下さりませ。

〽云ふに不審と首桶の、蔭取退くれば後室の、首に愡り仰天なし。

トこの間、一學、首桶の蓋取る。中に初姫の切り首あるゆゑ兩人愡り。

一學　ヤヽ、こりや後室の御首。
藏之　何ゆゑあつて討つたるぞ。
權六　親子の縁を切らん爲。
兩人　なんと。
權六　仔細は只今申し上げん。
〽件の錢を箱の上へ、その身は遙か飛びしさり。
ト權六、貫ざしを箱の上へ載せ。
ハッ、御臺樣お子樣方、お免されて下さりませ。
〽いますが如き尊敬に。
一學　して〳〵仔細は、
兩人　なんと〳〵。
〽兩人左右へ詰め寄れば、山岡は面を上げ。
權六　今さら語るも面目なき、この身の懺悔。一通り、お聞きなされて下さりませ。
ト胡弓入りの合ひ方になり
元來が親は、政氏公の父君に仕へて、宮城野民部と申す者。故あつて浪人なし、我れ三歳のその時に、兩親ともにこの世を去り、土民の家に養育され、親教へざれば愚かなるの譬へ、成人に隨ひ惡者づき合ひ、これなる女房と轉び合ひ、遂に身ごもり、產れたが女子。活計に迫り藥の上より、若木の社へ捨てたるが、卽ち當家の後室初姬。まつたそれより都へ上り、非人となつて暮らせし折、さる浪人が望みにて、この襁褓を賣つてやりしが、政氏公を討ち奉る、手段とは知らざりし。さてこそその時一癖ある、面魂ひと思ひしが、案に違はず故主の敵。又、某は越路へ歸り、山稼ぎに世を送りしが、扉の樣にて御臺樣、姬君公達お三人を、佐渡と丹後の人買ひへ、三貫文に賣り渡し、後にて故主と聞いて悔り、取返さんにも波濤を隔て、詮方なさに國を立退き、お家の樣子窺ひしに、時應公の惡企み、これ幸ひと荷擔なし、今日この館へ入込みしは、親子の縁を斷ち切つて、お主を賣りしその科に、討たるゝ所存で討つたる娘。この年月の御養育、御恩を仇で返せしは、御免なされて下さりませ。まだしも武運に盡きざるか、死ぬる今際にお家の系圖、我が手に入りしはお詫びの一つ。この事申せば用なき體。イザ、首討つて下されい。
〽初めて明かす權六が、詞と共に取出だす、系圖に讀表はせり。
トこの間、權六よろしく思ひ入れ。系圖は一學へ渡す。
〽二人の家老も感じ入り。

一學　ホ、オ。惡に强きは善にも强く、紛失なせしお家の系圖、手に入つたるは貴殿の働き。
藏之　殊には御親子の御行くへ、主君を討ちし仇敵、手掛り知れしは何より忠義。
一學　その忠義を立てんばかりに、首を討たれし後室は、二人が仲の娘でありしか。
〽問はれて女房は涙を拭ひ。
らち　お話し申すも淚の種。數へて見れば五年先、貧しき暮らしの活計に迫り、藁の上より紙雛の、女雛を添へて氏神の、岩木の社へ捨てたる娘。
一學　オヽ、割符を合すその詞、主君岩木の社にて、神の授けと拾ひし水子、添へてありしは片しの女雛。
ト これにて權六、首桶の男雛を出し
權六　その片割れのこの男雛、子心に欲しがつたも、血筋が胸にこたへたか。最前親子と云ひし時、隨分母へ孝行に。
〽人形買うてと頑是なく、甘へた詞が一生の。
甘へ納めか情ない。親が子になり子が親になり、逆さま事も此やうに、先立つ知らせであつたるか。
〽流石勇氣も恩愛に、亂るゝ詞も二人の手前、開いて女房は猶せき上げ。
らち　アヽ、思ひ廻せば廻す程、果報拙い娘の生れ。邪慳な親の腹を借り、藁の上から捨てられたも。
〽三世の御緣盡きずして、故主のお家へ拾はれて。
お乳よお乳母とかしづかれ、冥加に余る身の上に、果報まけてか情ない。
〽人もあらうに現在の、親に首を切らるゝとは。
如何なる過去の宿業にて、かゝる憂目を見る事か。可愛い事をしましたわいの。
〽女心にいとゞ猶、口說き歎くぞ道理なれ。
權六　ヤア、いつまで云うても返らぬ事。泣くな〳〵。エエ、泣くなと云ふに。
〽叱りつけ。
イザ御兩所樣、お手に掛けて下さりませ。サア〳〵〳〵、お手を下ろして下されずば、いつその事に。
〽云ひさま刀へ手を掛くれば。
ト 權六、刀へ手をかけ、腹切らうとする。藏之進、留めて
藏之　アイヤ、早まられな山岡どの、貴殿の命は大事の命、政氏公を討つたる敵、襤褸を買ひし浪人の、面體知りし

は其許ばかり。死ぬる命を長らへて、その敵を尋ねるが、遥かに増る古主へ忠義。死なねばならぬは藏之進。

〽云ふより早く差添抜き、腹へぐつと突き立つれば、これはと驚ろく人々に、一間に忍びし櫻戸武千代、左門も共に走り出で。

ト藏之進、手早く差添を抜き、腹へ突き立つる。バタバタにて上手より、櫻戸武千代左門之助、出て來り

櫻戸　ヤ、こりや我が夫には血迷うてか。

左門　何ゆゑの御切腹。

一學　思ひ極めし事ながら

權六　ヱ、、早まつた事

一學　致せしよなア。

〽と介抱なせば、手負は苦しき息をつき。

ト竹笛入り誂らへの合ひ方になり

藏之　イヤ、血迷ひもせぬ狂氣もせぬ。權六どのが御親子を、人買ひの手に賣りたりとも、お命には別條なし。知らぬ事とは云ひながら、正しく主君の御亡骸、槍突きかけし大罪人、その場で直ぐに切腹と、刀に手は掛けたれど、證據に殘りしこの襤褸、一學どのに渡せし上と、わざと管領が綱目にかゝり、この陸奥まで引かれしは、討つたる者のなき時は、岩木のお家斷絶ゆゑ、身に覺えなき汚名を着て、死ぬる覺悟で居たりしが、一學どのの情にて、今日まで命長らへし、その甲斐あつて敵の手がかり、又御親子の御行くへ知れし上は、心にかゝる事もなく、死ぬるが望みの藏之進。只この上頼み置くは、權六どのには敵の在所、御親子の御行くへ。一學どのにはお家の跡目、武千代が行く末、この事頼めば片時も早く、政氏公の御前へ參り、申し譯を仕らん。

〽云ふ息さへも四苦八苦。

一學　ホヽウ。忠義一圖な貴殿の心底、假にも主君へ手向ひなせし、申し譯は尤も至極。

權六　とは云へ、あつたら武士を、死なで仕樣もあるべきに。

左門　コレ伯父樣、武千代が可哀相な。どうぞ生きてゐて下さりませ。

武千　父樣、死んで下さるなや。

櫻戸　アレ、あのやうに子供でさへ、思ふにまして女房の身で、どのやうにマア、あらうぞいなア。

〽手負に縋り泣き伏せば、貰ひ涙におらちが介抱。

らち　そのお歎きは身につまされ、お道理とも御尤もとも、

云ふに云はれぬこの場の仕儀。

一學　アヽ、千萬云うても返らぬ繰言。詞が未來の爲にはならぬ。コレ、藏之進どの、賴みの趣き承知せり、後氣遣はずと往生あれ。

藏之　エヽ、忝ない。この上は一學どの、御苦勞ながら介錯賴む。

一學　オヽ、云ふにや及ぶ。

ト本釣鐘。皆々愁ひの思ひ入れ。

權六　アヽ、死すべき我れは助かりて、あつたら勇士を惜しやなア。

一學　アイヤ、藏之進どのの切腹は、時に取つてこれ幸ひ、主殺しの成敗なせしと、時廉どのの心許すは案の定。

權六　實に尤も。我れも娘がこの首にて、岩木の根葉を打切りしと、おもねりへつらひ取入つて、猶も惡事を見出さん。

藏之　すりや、犬死と思ひしに、權六どのの娘御の、首級と共に我が首も、お役に立てば死後の面目。

權六　我が子の最期も門出の血祭り、悔むは愚かこれ爰に假のお主の三貫文、誠のお主に兩替へなし、お足達者に伴ひ歸らん。氣遣ひ召されな、一學どの。

一學　オヽ、賴もしゝゝ。して又これより山岡どの、主君の敵を尋ねるには。

權六　最屈强のこの艦褸、元の非人の姿となり、この三人のお主を尋ね

藏之　廻り逢ふのは三世の緣。

櫻戶　一世の我が子、二世の夫。

らち　日影も待たで朝顔の

藏之　成行き短き人の身は

一學　老少不定定めなき

權六　思へば夢の

五人　浮世ぢやなア。

〽歎く淚は時知らぬ、秋野の露や山々を、染むる時雨も斯くやらん。

ト皆々愁ひの思ひ入れ。この以前より、上手松の立ち木へ以前の運藤、登り窺ひ居る。一學これへ目を附け、手早く手裏劍を打つ。運藤、飛んで下り

運藤　二心の權六、觀念。

〽觀念せよと切り込む刀、身を替して打ち落し、肩先すつぱと切り下げられ、其まゝ息は絕えにけり。

ト運藤、切つてかゝるを、立廻つて切り倒す。一學見

て
一學　ホヽウ、潔し。片時も早く。
藏之　あの世の門出。
權六　この世の旅
〽我が子の別れ魂よばひ、後に見捨てて。
ト本釣鐘。藏之進、引き廻す。一學、刀を持ち、後へかゝる。櫻戸武千代、縋り泣く。權六は初姫の首、襤褸を持ち、行かうとするを、おらち袖に縋る。双方引張りよろしく、一學、權六、顏見合せ
一權　さらば。
〽出でて行く。
ト段切れにて、引張りの見得よろしく
幕

四　幕　目　　丹後の國南山の場

役名——元吉要之介。醫者、紋齋。由良三郎。柴苅り、與五作。同、又六。同、新太。同、三六。對王丸。安壽姫。

本舞臺、三間、向う奥深に山の遠見。上下岩組み。正面、高足の山。上下へ番心に登り坂、下手、蔦の搦みし松の立ち木、同じく吊り枝、上の方、大江郡領時廉領地と記したる傍示杭。平舞臺前、打寄せの浪板。すべて丹後の國、南山の麓、磯續きの體。茲に與五作、又六、新太、三六、やつし山裝附け、柴苅りの形にて、摺火打にて煙草をのみ居る。浪の音、賑やかなる濱唄にて幕明く。

與五　なんと又六、此やうに朝に星を戴き、夜は日天樣の入らつしやるまで精出しても、口汚なく責め使はれるとは、情ない事ではないか。
又六　この國で由良橋立成合の地頭格、三ケの莊を名に取つて三莊太夫、日本國中に又とあるまい人使ひの惡さ惡さ。
新太　憎まれ者世にはゞかると、長生で大金持ち、鬼といふはあの人の事。大方大江山の酒呑童子の、兄弟であらうわい。
三六　イヤ又、鬼のやうな人の娘に、おさんさまのやうな優しい人。その上傾城女郎にも負けぬ器量、あれがほんの、鳶が鷹を生んだとはあの事ぢや。

又六　それに又この頃、此方の内へ抱へられた兄弟の奉公人、姉は信夫、弟は忘れ草、褄はづれなり、好い生れつき。

與五　定めて好い者の子供であらうに、可哀さうな事。昨日も山の戻りがけ、忘れ草が柴が刈れぬと泣いて居たゆゑ、手傳うて柴を刈つてやつたので、昨夜のごろ〳〵よ。

新太　ナニ、ごろ〳〵とは、雷の事か。

三六　それよ。旦那どのゝ雷聲。兄弟の者に汐柴を、手傳うてやつた者は、給金をくれぬとの事。これから必らず手傳ふまいぞ。

新太　シタガ、おさんさまは、兄弟の者をいとしがつて、山へ行たらば目をかけてやつてくれいとの言傳。どちらも主命なれども、銘々の身の上には替へられぬ。

又六　さうとも〳〵。この後は例へ谷へ落ちようが、どんな怪我をしやうが構はぬがよい。

與五　なんにせい、兄弟の者は、可哀相な事ぢやなア。

ト時の太鼓にて、花道より由良の三郎、野袴、ぶツ裂き大小にて、捕り手四人附き出て、舞臺へ來り

三郎　ヤイ〳〵、それに居るは伯父者人、三莊太夫が召使ひの者どもよな。

四人　ハイ〳〵、左樣でござりまする。

三郎　其方どもも承れ。奥州岩木の領主、政氏が娘安壽姫、弟對王丸兩人とも、人買ひの手に渡り、當國へ來りしとの風聞。搦め捕つて差出せば、褒美の金は望み次第。もし兄弟と見るならば、早速に注進せよ。

四人　畏まつてござりまする。

三郎　必らずぬからぬやう。身共はこれより村々へ觸れ渡らん。家來參れ。

ト時の太鼓にて三郎、捕り手を引連れ、上手へ入る。

與五　なんと皆聞いたか。兄弟のお尋ね者。もしや信夫や忘れ草が、その兄弟ではあるまいか。

三六　そんな事に構はずと、こちとらは山へ行て、一仕事やらかさう。

三人　サア〳〵、來やれ〳〵。

ト浪の音、濱唄にて、四人は上手へ入る。矢張り右の鳴り物にて、花道より紋壽、半纏股引一本差し、草鞋菅笠を持ち、出て來り

紋壽　ヤレ〳〵、草臥れた〳〵、もう爰は時廢さまの御領分、旦那樣の内へは僅かな道。ドレ、ちよつと休んで行

かうか。
トあたりの岩へ腰を掛け
イヤ、時廉さまといへば、わしが旦那様の三莊太夫さまは、由良成合橋立と、三莊の地頭格、時廉さまより許されて、とんと今では大名同然。それゆゑわしも按摩から、お氣に入つてお抱へ醫者。それはさうと合點の行かぬは、あのしわい旦那様が、多くのお金を下されて、これを路用に陸奥へ行つて、年の頃は二十四五、斯う〳〵いふ男があらば、探して來いと密事のお使ひ。何が五十四郡の隅々まで、足を摺りへらすばかりに探したが、似寄つた人も無いゆゑに、せう事なしに戻つて來たが、知れぬと云うたら小言であらう。ア丶、早く歸りたいが、叱られるのが腑づかへ。いつそ爰から、國徳寺としようか。イヤ〳〵、それよりは歸るがまし。イヤ、よさうか。歸らうか。こりや、どうしたらよからうなア。
ト立ちとまる。ドン〳〵と波の音の頭を打込む。紋壽は恟り飛びのき
ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。
ト思ひ入れ。浪の音を聞いて
おきやアがれ。浪の音だ。ハ丶丶丶。ドレ、内へ歸らうか。
ト矢張り浪の音にて、紋壽は上手の山間へ入る。直ぐに知らせにつき、この道具居所替りになる。
本舞臺、一面向う打抜きの海原の遠見。上下袖山、上手よき所に、太江郡領廉時領地の傍示杭あり。松の立ち木、同じく吊り枝。すべて由良湊邊の道具、浪の音にて納まる。
ト直ぐ床の淨瑠璃になる。
〽浮世とは、いつの世にかは始まりし、その憂き事の身に積る、對王丸安壽姫、三莊太夫が手に渡り、賤が手業の鎌枋、汐汲桶の重きより、涙の種や別れが辻。
トこの文句浪の音、誂らへの合ひ方にて、花道より安壽姫、賤の女の形、腰簑汐汲桶を擔つぎ、對王丸、やつし形、鎌を持ち來て、舞臺へ來り思ひ入れ。
對王　申し姉様、今日は猶しもお顔のやつれ、お心惡しうはござりませぬか。煩うてばし下さりまするな。
安壽　さう云やる其方の顔。毎夜々々の折檻が、病にならいで何とせう。奥州五十四郡の主、政氏さまの忘れ形見と云はるゝ身が、賤しい業の下素奉公、毎日々々三荷の



嘉永五年四月河原崎座上演番附

汐柴。昨日は賤に助けられ、數を合せし昨夜の仕儀。今日は誰れが助けてくれやう。サア、山へ行きや。わしも一緒に柴刈らう。

〽サア／＼おおやと先に立ち、行く袂に取縋り。

ト安壽姫、泣きながら山の方へ行かうとする。對王留めて

對王　コレ姉様、わしと一緒に山へ行て、お前の汐は誰れが汲みます。人に汲んでもらうてさへ、打ち打擲の棒三昧。ひよつとお前の身の上に、もしもの事があつたらば、わしや何とせう、どうせうぞ。サア／＼、濱へお出で遊ばせ。わたしも共に汐汲まう。

安壽　オヽ、よう云うてたもつた。弟なりやこそ其やうに、姉を大事にかけてたもる。自らは女子の事。其方は大事の殿御の子。姉に構はず山へ行きや。

對王　イエ／＼わたしや。

安壽　イヤ、わしが。

〽爭ふ思ひ血筋の親身。

ト兩人よろしくあつて

いつまで云うても返らぬ繰言、遅うなつては又難儀。其方も山で柴仕事、姉も濱へ行きまする。怪我せぬやうにしてたもや。

對王　そんならお前も、怪我せぬやうに。

〽賴む／＼も泣き別れ、別れが辻を右左、一足行ては立ちどまり。

ト兩人、泣きながら安壽姫は上手、對王丸は二重の山、下手へ行きかける。兩人振り返り思ひ入れ。

安壽　コレ對王、まだ四方山に殘る雪、手足も凍へ堪るまい。必ず木の根に躓いて、谷へ落ちてたもんなや。

〽と云ふも次第に遠ざかり、同じ思ひに引く汐の。

ト兩人、行かうとして振り返り

對王　申し姉様、汐に誘はれ、流れてばし給はるな。

〽影見ゆるまで伸び上がり、呼べど答へも山彦の、姿隔つる春霞、涙ながらにたどり行く。

ト兩人、振り返り／＼、よろしく上下へ別れて入る。

〽爰に元吉要之介は、主人に廻り逢はん爲、たどり丹後の北はづれ、胸に忠義を由良が濱。

ト浪の音、時の鐘になり、花道より元吉要之介、大小半合羽、旅形、菅笠を持ち出て、直ぐに舞臺へ來り思ひ入れ。

要之　爰は丹後の由良の濱邊。いつぞや扇の橋にて、御主

人様方を人買ひの爲めに奪はれ、夜を日について御行くへを尋ぬれど、今にこれぞと手がかりも。いま里人が話しを聞けば、この國の地頭、三莊太夫に使はるゝ、爪はづれよき兄弟ありとの噂。もしこの所に御座あるや。どうぞ好き手がかりを、求めたきものぢやなア。
〽思案にくれて歩みより、見廻す坂に霜解けの、しめりに殘る小さき足跡。
ト要之介、坂口を見て
この山路に小さな足跡、柴刈る童の足跡か、もし若君の、御足跡にてはあらざるか。
〽蟲が知らすか此方の麓に、立つたる榜示をきつと見付け。
ムウ。大江の郡領時應領分。すりや、この所は時應が領分なるか。もしや御主人この所に御座あらば、危ふし危ふし。何は兎もあれこの山道、一先づ尋ねて。それそれ。
〽神ならぬ身に淺ましく、迷ひし道へと尋ね行く。
ト要之介、思ひ入れあつて上手へ入る
〽折から山を戻り來る、以前の山樵四人連れ。
ト浪の音。以前の四人、柴を背負ひ、上手の山より出て來り

又六　サア〳〵、先づ晝仕事はこれでよい。この柴を內へ運び入れて、また東の山へ行かずばなるまい。
與五　併し、最前のやうには云ふものゝ、おさんさまの折角のお頼み、忘れ草が柴刈る事は覺束ない。
新太　どうで、この道へ戾つて來るは知れた事。助けてやると云はずに、爰へ柴を置いて行つてやらうではあるまいか。
三六　それ〳〵、人を助ければ惡うは報ふまい。銘々一抱へづゝ置いて行つてやらう。
〽見やる磯邊へひた〳〵と、流れ寄つたる汐の桶。
ト浪の音烈しく、舞臺の切り穴より、汐桶流れて來る。
新太　アレ〳〵、彼處へ汐桶が、流れて來た〳〵。
與五　ドレ〳〵、流れぬやうに取つてやらう。
ト與五作、切り穴より桶を取上げ見て
ヤ、こりや此方の內の印の桶ぢや。こりやてつきり信夫めが、誤まつて流したものであらう。おいら達の目にかかつて仕合せといふもの。
三六　さうとは知らず、ウロ〳〵して、尋ねて居るであら

う。これも爰へ、汐を汲み込んで置いてやらう。

ト三六、汐を汲み、好き所へ置く。

又六　これでよい／＼。内外の者に見られぬうち、早く行からぢやないか。

三人　サア／＼、ござれ／＼。

〽皆々打連れ立歸る。

ト浪の音にて四人、花道へ入る

〽御いたはしや若君は、まして手馴れぬ柴刈りの、手足を茨に切りさかれ、詮方もなくおはせしが。

ト時の鐘にて、下手の山より對王丸、鎌を持ち、しを／＼と出て舞臺へ下りて

對王　とても運盡きし憂き身の上、生恥を晒さんよりはと思ひ切りながら、この身が死なば姉上の、さぞや悲しう思されん。今一度お顏が見て死にたい。戀しうござりますわいなう。

〽しを／＼歩行む濱邊には、桶も柄杓も浪に取られ、涙に道も見え分かぬ、坂道を下る折しも。

ト浪の音。上手より安壽姫、しを／＼として出て、兩人、顏を見合せ。

安壽　ヤ、對王か。

對王　姉上樣か。

〽云ふより外に詞なく、涙先立つばかりなり、思ひ切つて鎌押取り。

ト兩人、手を取り泣く。對王丸、鎌を取つて

姉樣、おさらば。

ト鎌にて死なうとする。安壽姫驚ろき留めて

〽取り直す手に縋りつき。

安壽　コリヤ、氣が狂うたか對王丸、何ゆゑにこの生害、マア／＼待つてたもいなう。

〽押し留られて顏を上げ。

對王　何ゆゑとは聞えませぬ。お乳や乳人にかしづかれたる兄弟が、賤しい土民に踏まれ叩かれる口惜しさ。名字の穢れコレ姉上、放して死なして下さりませ。

安壽　オヽ、その歎きは尤もぢや、道理ぢやが、わしが云ふ事よう聞きや。

ト床の合ひ方になり

〽扇の橋の憂き難儀、片と睨む要も散り／＼。兄弟のみか母樣まで、人買ひに賣り渡され、世にも稀れなるこの里の、三莊太夫の胴慾心、切ない中にも悲しいは母上樣、さぞ泣き暮らしておはすであらう。親子は一世、死んで

未來で逢はれるなら。つれない命をこの姉も、今まで生きては居ぬわいなう。

〽涙と共にのたまへば。

對王　イエ〳〵、なんぼ逢いたう思うても、何處を尋ねる當もなし。

安壽　まして、かよわい母様の、涙の種が病となり、もしもの事があつたなら、生きて甲斐なき兄弟を、神も佛もこれ程まで、見捨て給ふかコレ弟。

對王　姉様。

安壽　恨めしい

兩人　世の中ぢやなア。

〽互ひにひつしと抱きつき、前後正體泣き沈む、對王は涙を拂ひ。

ト兩人よろしく、對王丸、榜示杭を見て

對王　父上樣を殺したも、家の亂れも大江の時廉、領地と書いたる文字の別れ、せめては切つて本望遂げん。

〽かよはき小腕も一念力、鎌押取りて打かくれば、微塵に碎け飛び散つたり、磯より歸る鹽燒が、終始を見すまし行きかゝる。

ト對王丸、鎌にて榜示杭を打つ。仕掛けにて二つに割れる。浪の音にて、上手より鹽燒きびつちう、鍬を擔ぎ出る。この體を見て思ひ入れあつて、引返して下手へ入る。兩人これを知らず

安壽　コレ對王、恨みと思ひ切つたる榜示、出かしやつた出かしやつた。さりながら、今日の役目の汐薪、一荷も持たず歸つては、憂き目に遭はん、何とせう。

〽うろ〳〵見廻す此方の汐柴。

ト安壽姫、以前の柴と汐を見て

ヤア、誰れ人の情なるか。天の與へ、嬉しや弟。

對王　姉様早う。

〽喜ぶ中にも家の首尾、泣く〳〵案じ立歸る、

ト浪の音にて、對王丸、件の柴を負ひ、安壽姫、汐桶をやう〳〵擔ぎ、思ひ入れあつて兩人、花道へ入る。

〽鹽燒が注進に、由良の三郎立歸り。

ト浪の音。上手より以前の由良の三郎、捕り手四人引連れ出て來り

三郎　家來ども、汐燒が注進にて、榜示を切つたる大罪人、手分けして尋ね出せ。

捕手　心得ました。

〽尋ね出だせと下知の下、此方の山道そこ爰と、見附け

出したる要之介、中に引立て押取卷き。

ト捕り手四人、上手の山へ入り、直ぐに以前の要之介を引立て來り

捕一　何か怪しき素浪人。

四人　動くな。

要之　こりやお役人、何となさるゝ。

三郎　ヤア、何をするとは横道者。ソレ、搦め捕れ。

四人　ハツ。やらぬワ。

〽畏まつたと双方より、捕つたとかかるを事ともせず、其まゝ二人を頭轉倒、又も腕に組みつくを、捻りながらも早速の小手投げ、右と左に倒れ伏す。

ト四人かゝるを要之介、立廻つて投げのける。

三郎　コーヤ、手向ひか。

要之　無體召さるなお役人、此方身に取り、覺えはござらぬ。

三郎　ヤア、覺えないとは云はさぬ〳〵。榜示杭を切りしは若木の餘類、時康公を恨む奴に極まつた。サア、尋常に覺期なせ。

〽詞にぎつくり胸に針。

要之　ヤ、、すりや榜示を切りしお咎めとな。

三郎　遁れぬところ。

四人　腕廻せ。

トこれにて要之介、思ひ入れ。

要之　榜示を切りしなんぞとは、この身に露聊か覺えなけれど、達てとあらば刀の手前、その分には許さぬぞ。

三郎　ヤア、法外なる青二才め。觀念なせ。

〽觀念せよと切り込む刀、拔き合せててう〳〵、打てば開き、開けば附け入る早業早速、いらつて打込む我慢の刃先、火花を散らして戰ひしが、要の手練に三郎は、叶はぬ許せと逃げて行く。

ト三郎、刀を拔き、切つてかゝる。要之介、拔き合せ、立廻りあつて、ト三郎叶はず、捕り手先に三郎、花道へ逃げて入る。要之介後見送り思ひ入れ。

〽相手なければ要之介、刀を鞘へ塵打拂ひ。

ト要之介、刀を納め思ひ入れ。

要之　云ひ甲斐なき木の葉侍ひ、長追ひせんも無益の至り。只心がかりは制札を切りし科人、もし御主人方のお仕業なれば一大事。まさかの時はこの身に引受け。何は兎もあれ御兄弟の御身の上、傳手を求めて、三莊太夫方へ、これより直ぐに。さらばや〳〵。

〽一人ごちつゝ旅はいき、心細道夕日蔭、南にあらぬ西山へ、遠近知らぬ由良の戸を、渡るや天の橋立も、またふみやらぬ丹後島、主人の行くへ末廣き、ゆるがぬ要萬代の、濱邊も後に成合の、里を尋ねて。

ト要之介、身拵らへして行かうとする。以前の捕り手二人、窺ひ出てかゝる。要之介、立廻りあつて兩人を當て、ツカ／＼と花道へ行く。兩人ムウと心附く。床の三要之介、小石を礫に打つ。兩人、見事に返る。これを一ばいに重、寺鐘にて、要之介、花道へ入る。

幕

大詰

三莊太夫屋敷の場

役名――三莊太夫。元吉要之介。由良三郎。醫者紋壽、下男、與五作、同、五介。同新太。同、三六。國分寺同宿、殘生。同宿、頓才。同、珍念。同、歡念。對王丸。三莊太夫妻、なぎさ。安壽姫。娘、おさん。山岡權六。

本舞臺、三間の間、中足の二重。本緣付き。上手、筋違ひ練塀の折り廻し。この前に苅柴を積み上げ、山枋などを立てかけ、同じく前側に汐汲桶大分並べ、いつもの所に中門を見せ、下手は板羽目、爰に簑笠など掛けあり、下に鋤鍬まんぐわなど取散らし、すべて由良の湊、三莊太夫屋敷の體。尤も豪家の模樣よろしく、浪の音、麥搗唄の合ひ方にて、賑やかに幕明く。

〽丹後の國に隱れなき、由良千軒の長者號、成合の莊、橋立の莊、由良の莊、合して三莊の主なれば、三莊太夫と用ひられ、鹽濱野山舟持の、音に聞えし人遣ひ、辛き目見せて責め使へば、山椒とも又異名せり。

トこの間、前幕の醫者紋壽、菅笠を持ち、狀箱を掛け、花道より舞臺へ來る。下男限介出て來り、双方よろしく思ひ入れあつて

紋壽　限介、今戻つたぞよ。

限介　オヽ、お醫者の紋壽さまか。久しく見えさつしやりませなんだが、何處へござらつしやりました。

紋壽　サア、旦那樣の內用で、奥州まで行つて來たが、たうとう今戻つた。

限介　それは大きに御苦勞樣でござりました。道理で旦那

様がこの間から、もう歸りさうなものだと、毎日待つてござらつしやりました。

紋壽　定めてさうであらう。昨日今日のやうであつたが、もう半年餘りになる。時に旦那の小言は、少しはなくなつたかな。

眼介　どうして／＼憎まれ子世にはばかると、日にまし小言は募るばかり。取分けわしらは不器用ゆゑ、あのでつかい目玉で睨みつけられ、叱られてばかり居ります。

紋壽　ア、、それではわしも久し振りで、また小言を聞かずばなるまい。

〽つぶやき／＼入りにける。

ト眼介案内して紋壽、庭通りを上手へ兩人入る。

〽まだ初春の暮れ易き、夕告鳥の聲々より、野山しまうて立歸る、男どもが口々に。

ト浪の音。テンツヽになり、花道より前幕の與五作五介新太三六、出て來り、花道にて。

與五　ヤレ／＼、いかうしんどうかつた。併しマア、今日だけの仕事はしまうたと云ふもの。

五介　ソレイヤイ。斯う働いては、體も骨も堪つたものではないわい。

新太　併し、これから明日までは此方の體。

三六　サア、早く行て煙草でものまうではないか。

與五　サア、來やれ／＼。

ト鳴り物にて本舞臺へ來る。この時下男三人、まんぐわ鋤鍬を持ち、あたりを取片附けながら下手より出て、双方行き合ひ

下男　ヤ、わいら、大分早かつた。

與五　てまへ達も仕事しまうたのか。

下男　イヤ／＼、さうでもないての。

五介　でも、もう煙草休みして居るぢやないか。

三人　オツと、こりやあやまつたわえ。

三六　イヤ、あやまつたと云へば、ヤレ／＼今日は、ゑらい寒い事であつたなア。

與五　ソレイヤイ。併しその筈もあらうかい。今朝降りた霜で、山も畑も、おろし大根の中を歩くやうで、身先からギリ／＼まで凍へた。

五介　此やうに責め使ひながら、喰物といへば、麥八分の飯に干菜の上置きぢや。

新太　奉公人の口はひそめ、おのれは平常榮耀榮華。喰ひ太つた面魂ひぢやないかい。

三六　オヽ、それに搗てゝ加へて、あの娘の慰みぢやとて鷄を飼ひちらす親仁め。
與五　彼奴に罰が當らずば、當る者はあるまい。
五介　ひり〳〵と辛い目見せ居る、山椒太夫とは、よう附けた名ではないか。
皆々　ハヽヽヽヽ。
〽と口々そしる後より。
ト奥にて
三莊　ヤア、かしましいがらくためら、うぬら一々云ひ聞かす仔細がある。其處一寸も動き居るな。
皆々　そりやこそ辛い太夫どの。
〽こそ〳〵うづまる一間より、立ち出づる主の太夫、おのればかりはうま〳〵喰ひ、暖かに着て、人をせこめて追ひ使ふ、大惡不道の堅親仁、見るから猛き熊の毛の、蒲團を敷かせ、どつかと座し。
トこの文句の間、女小姓、熊の皮を敷き、手あぶり、長煙管附きの煙草盆を持ち、眞中よき所へ直し入る。奥より三莊太夫、好みの拵らへにて出て來り、後に鹿の角の刀掛け、これに誂らへの大小掛けあり、三莊太夫よろしく熊の皮の上に住ひ、あたりを見廻し、こなしあつて
三莊　ヤイ、がらくためら、今おのれら何を吐かした。それ吐かせ。
與五　ヘイ〳〵、イヤモ、あなたのお内に居りますは、果報な事ぢやと、ナウ三六。
三六　與五作が申します通り、有り難い事ぢやと皆寄りこぞつて。
三莊　ムウ。それに又、山椒太夫とはよう附けた名とは、どうして吐かいた。
皆々　ア、それまでを。こりや堪らぬ。
ト皆々慄へながら下に居る。
三莊　ヤア、ザワ〳〵と立騒いでやかましい。極道めら、下に居らぬかい。
〽鬼一口に嚙みつけられ。
皆々　ハ、ハイ。
ト皆々慄へながら下に居る。
三莊　ハヽヽヽ、ハテサテ、心の臓の弱い奴等。エイ、マア、それはそれにしてやらうが、野山しまうて戻つたら、明日の仕事のしこしはせず、野良ばかりかわいて、人も頼まぬ雑言吐かす。自體それといふも、仕事が手張

らぬから。明日からはいつもの仕事に一倍まし、野から山から鹽濱まで、微塵でも野良くかわくと、食留めするぞ。雜言吐かしたこりや褒美ぢや。又その代り今日からは、少しばかりの善根とやらぢやと思うて、九ツの鐘の鳴るまで、夜なべをさせるワ。

皆々　エ、。

三莊　ア、コリヤ、何驚く事があるぞ。一番鷄が唄うたら、直ぐに起きて野山へうせう。アノ茲な極道めらが。

〽煙草輪に吹くいがみ面、男どもはわな〳〵聲。

五介　アノコレ、皆聞いたか。さても手ひどい云附けぢやないか。

新太　ソレイヤイ、この上に一倍增しとは、釋迦でも行かぬ地獄責め。

三莊　地獄責めとは慮外千萬。何奴が吐かいた。その頰桁叩きまげてゆがめてくれう。

皆々　ヘエイ。

ト逃げようとする

三莊　うぬら動かば身の上だぞ。

皆々　ハ、イ。

トうづくまる

〽ずいと立つて、有りあふ箒の滅多打ち、斯くと聞くより女房駈け出で、押し隔て。

ト三莊太夫、立ち上がり、有りあふ箒にて皆々を打ち据ゑる。奥よりバタ〳〵にて妻なぎさ、老けたる女房の拵らへにて出て來り、三莊太夫を留め、

なぎ　ア、、これは端下ない太夫どの。コレ、其方衆も、なんの事ぢや。例へ無理があらうとも、主家來ぢやと諦らめて、腹も立たうが料簡して、イヤ、腹立たさすやうな事があるものか。わしが後で詫びをするその間、早う勝手へ行きやいの。

三莊　ア、イヤ〳〵お婆、何留める。こりや、彼奴等の土性骨を矯め直すのぢや。エ、、退きや〳〵。退けと云ふに。

なぎ　サア、その腹立ちは尤もぢや、なれど、今日はわしが詫びまする程に、サア、早う行きやらぬかいなう。

〽詞を機に男ども、皆散り〴〵に逃げて行く。

ト皆々下手へ逃げて入る。

三莊　ア、、なんの留めいでも大事ないに。ア、、人を使へば氣を使ふぢや。

〽つぶやき〳〵蒲團の上。

腰元　ト奥より腰元立ち出て
旦那樣へ申し上げます。何時ぞや陸奥へお出でなされた、お醫者の紋壽さまが、先程歸られましてござりまする。

三莊　ムウ。待ち兼ねた。外に二十一二の男を連れて來たか。

腰元　イエ〳〵、一人で戻られました。

三莊　エヽ、無駄な路金を費した。いま〳〵しい事だわえ。

なぎ　なんの御用か。ちやつと爰へ呼んでおぢや。

三莊　イヤ、もうよい〳〵。

腰元　左樣ならば、よろしうござりまするか。

ト腰元、奥へ入る。

三莊　極道めらにかゝつて、肩も腰もめき〳〵云ふわえ。

なぎ　サイナア。お前ももう寄る年、其やうに世話やかずと、ちと氣を練らしたがよいではないか。ドリヤ、わしが揉うして利かぬか知らぬが、肩打つて上げうわいなう。

〽鬼の女房の佛性、荒氣も肩も打ちやはらぐ、流石に内の寶なり。

トこの間なぎさ、三莊太夫の肩を揉む事よろしく

〽御痛はしや兄弟は、人の情を刈柴に、肩もくび入る手も足も、躓く石に切り裂かれ、流るゝ血汐血の涙、海邊に出でて汲む汐より、太夫の心汲み兼ねて、泣く〳〵連立ち歸らるゝ。

トこの文句にて薄く波の音。花道より安壽姬、汐汲みの形、腰蓑にて、汐汲み桶を擔ぎ、しを〳〵出る。後より對王丸、苅柴の形にて誂らへの柴を背負ひ、よろしく出て直ぐに舞臺へ來り

安壽　お主樣、只今歸りまして

安對　ござりまする。

ト兩人、荷を下ろし下に住ふ。なぎさ見て

なぎ　ナヽ、兄弟か、早かつたなう。大儀々々。マア〳〵、ちやつと休みやいなう。

安壽　ハイ〳〵。申しお家樣、私しも忘れ草も、遲なつたら又叱られうと、急げば急ぐ程荷も重く、やうやう只今。旦那樣の御機嫌の損ねぬやうにお執成し、其方も共共お願ひ申しや。

對王　アイ〳〵。申しお家樣、どうぞ詫びして下さりませ。

なぎ　オヽ、氣遣ひしやんな。旦那樣も御機嫌がよい程にの、必らずそれを案じやんな。それはさうと、信夫もさぞ草臥れたであらう。忘れ草も大分に精が出ましたわいなう。コレ旦那どの、今日は兄弟ながら殊の外精が出た樣子、見て褒めてやつて、早く休息さしたがようござらうわいなう。

〽執成す詞も空吹く風。

三莊　ムウ。兄弟どもに戻りしとな。ドレ〳〵。オヽ、信夫忘れ草、二人とも汐も柴も助けてもらはず、一人して汲んだり刈つたりしたか。ムウ。それはようした。爰に持つて來い。吟味した上、其方達が仕事に違ひなくば、勝手次第に休息しろ。コリヤ、その品これへ持て。

〽取り出す日鏡の光、小氣味惡さに二人はおづ〳〵。

　トこの間、三莊太夫、懷中より日鏡を出し、かける。對王安壽姬、おろ〳〵と慄へて居る。

なぎ　コレ忘れ草、怖い事はない程に、その柴を旦那どのの側へ持ちや。ちやつと持つて行きやいなう。

〽內儀の情刈柴を、怖々ながら差出せば。

　ト對王、おづ〳〵柴を緣の上へ持つて行く。三莊太夫、あちこちと引返し見る事あつて

三莊　ムウ、これはわれが刈つた柴か。

對王　ハイ。

　トうぢ〳〵して居るゆゑ、安壽姬、わしぢやと云へとこなし

ハイ、私しが刈つた柴でござりまする。

　ト云ひ憎さうに云ふ。三莊太夫、苦笑ひして

三莊　オヽ、われが、出かす〳〵。なか〳〵揃ひ口が立派な。この分なら明日から、三荷の柴に七荷増し、十荷づつ苅り居らう。

對王　エヽ。

　ト愕りこなし。なぎさ思ひ入れあつて

なぎ　アヽモシ旦那どの、イヤ太夫どの、如何に云ひたい甲斐ぢやとて、マア可哀相に。よう思うても見やしやんせ。あの非力な兄弟に。こりや矢張り今までの數に合して料簡して。

三莊　やかましい。

なぎ　サア、料簡してやらしやんしたら、惡いやうには報はぬもの。

三莊　默れ。

なぎ　アヽ、子供ぢやもの、まんざらに山家育ちとも、見

えぬ者を其やうに。
三莊　默れ。
なぎ　責め遣うたら、とても命も堪るまい。
三莊　默れ。
なぎ　子を持つてこそ人の子の、可愛さは替らぬものぢやと、云ふではござんせぬか。
三莊　默れ〳〵、默り居らう。
なぎ　ハ、アイ、、、、。
三莊　エ、コレ、われが其やうに、天の邪鬼な事吐かすゆゑ、家來どもが附け上がり、お家樣ぢやお持佛樣のと吐かし居るわい。なんの〳〵、情どころか、よく聞けよ。コリヤヤイ童め、この柴は、われが仕事ぢやあるまいが。
對王　イヽエ、そりや私しが。
三莊　イヤ、吐かすまい〳〵、小童め、うぬが手仕事でない事は、黑い眼で見留めて置いたワ。
なぎ　ア、コレ、忘れ草が刈つたのぢやと、自身に云ふから、よもや違ひは。
三莊　ア、、われ達が知つた事ぢやない。すッ込んで居れ。
なぎ　それぢやといふて、そりや又あんまり。
三莊　あんまりとは何があんまり。村中へも觸れを廻し、この餓鬼めらに柴一本、助けてやるなと云ひつけてやりしに、コリヤ見よ、この柴の揃ひ口。昨日までも今朝までも、鎌の持ちやうさへ知らぬ奴、おのればかりが手業にやゆかぬ。信夫めもその汐、何奴に助けてもらうた。どうでも手傳ひ手がなけりや叶はぬ。それ吐かせ。
安壽　アイ〳〵、
三莊　吐かさぬか。
安壽　アイ〳〵。
三莊　吐かさぬかよ。吐かさにや、うぬら、手ひどい目に。
ト立ち上がらうとするゆゑ
安壽　ア、、申します〳〵わいなア。アノ、誰れにも助けてもらはねど、柴も汲まず柴も苅らず、泣く〳〵戻る道筋に、捨てゝあつたを、ツイ持つて歸りましてござります。
對王　もう御堪忍なされて
兩人　下さりませ。
三莊　堪忍とはどこへ堪忍。野太い女郎め。重ねて懲りるやうに、土性骨へ覺えさせん。
ト立ち上がる。

安對　アレエ。
　ト逃げようとるを
三莊　うぬら、身動きなさば命がないぞ。
〽庭に下り立ち山枋、又と類もあら折檻。
　ト三莊太夫、庭へ下りて打擲しようとするを、なぎさ留めて
なぎ　アヽ、申し旦那どの、柴も汐もわしが計らひ、二人の知つた事ではない。もう堪忍してやつて下されいの。アヽ、ひがひすな二人を、其やうなもので打つて堪るものかいの。サア、早う逃げやいの。ちやつと逃げたがよいわいなう、
〽氣を揉みあせるを耳にもかけず。
三莊　ヤア、お構ふな。ヤイ、爰へうせぬか。
兩人　アイ。
　トこなしあつて
安壽　今度から柴も汐も、一人して致しませう。
對王　どうぞ赦して下さりませ。
〽詫ぶるも聞かぬ荒氣の枋、なぐり情も滅多打ち、わつと泣き出す兄弟を、庇ひながら女房も、持てあましたる折柄に。

　トなぎさ留めるを突き退け、安壽姫對王丸を引きつけ打擲する。
〽主の甥由良三郎、同氣求むるいがみ面、案内もせず入り來り。
　ト花道より由良三郎、摑み立て、野袴、ぶツ裂き、大小形にて出て來り、直ぐに舞臺へ來り
三郎　これは〳〵伯父者人、この寒いのに庭へ下りて、何をいらくら。エヽ、こりや又奉公人めらが、氣隨働らくゆゑか。伯父者人の心よしを見込み、年寄りと見侮りて、我まゝ氣隨な。これおやに依つて、疾から三郎が申さぬ事か。菜を藥になされば、その御苦勞は掛けませぬに、アヽ、蓼喰ふ蟲も好き〳〵と、年たけたお娘を、いつまで一人身で、ナヽ、笑止千萬。イヤナニ、其奴等を、腰の立たぬやうに、ぶちのめしたがようござる。なんなら身共、手傳ひませうか。
　ト寄らうとするを、なぎさ隔てゝ
なぎ　アヽ、コレ、甥の其方、誰れも頼むと云ひもせぬに、差出さつしやらずと、こなたは其方へ控へて居たがようござるわいの。
三郎　成る程、これも尤も。いらぬ事の腹へらし、取措け

なら取措き申さう。イヤ、それは內證。ナニ伯父者人、急にお話し申さにやならぬ大公用。

三莊　ナニ、公用とは。

三郎　イヤサ、時廉公より貴公樣へ、火急な仰せつけがござつて、わざ〱。

〽聞いて太夫も座に直れば。

トこれにて二重へ住ふ。三郎も二重へ上がり、こなし。此うち始終文句を縫つて、砧入り合ひ方。

三莊　コリヤ〱三郎・時廉公より火急な上意とは氣遣はしい。して〱樣子は、ナ、なんとぢや。

三郎　イヤ〱、氣遣ひ召さるゝ儀ではござらぬ。時廉公より繪姿を以て、お尋ねなさるゝ兄弟。姉は安壽で、弟は對王とやらいふ童。見附け次第に討つてなりとも、連れ來れと嚴しい云ひつけ。即ち繪姿これにあり。

ト懷中より畫姿を二枚出して

これ御覽なされい。

〽差出す繪姿、庭に二人は身に冷汗、太夫は目鏡にためつすがめつ。

トよろしく見る事あつて

三莊　ムウ。この對王兄弟は、岩木の判官政氏の子供。故あつて我が爲にも、詮議したき奴ばら。厄病の神で敵とやら、三郎も心を附けて、ナ、合點か。

〽と聞く程怖き兄弟は、身を慄はして居たりける、三郎重ねて。

三郎　イヤナニ伯父者人、お聞きなされい。まだ大それた科人あり。今日南山の境目、大江の郡領と書き記した牓示杭、切り折つたる曲者、搦め捕らんとなしたるところ、手強き奴にて取逃がし、後追ひかけしが行くへ知れず、思はぬ不覺を取つてござる。

三莊　オヽ、其奴も慥かに岩木の餘類。何にもせよ、大事の詮議はこの繪姿。ナ、合點か。

ト安壽姫對王丸へ思ひ入れ。三郎、呑み込み

三郎　成る程、三郎とくと。

三莊　合點がいつたら、奧へ來よ。

三郎　心得ました。

なぎ　ソレ、二人の者も納戸へ行きや。

安對　有り難うござりまする。

三郎　アイヤ、彼奴等は。

三莊　ハテ、何事も身が胸に。

三郎　然らば、伯父者人。

三莊　三郎、來やれ。

〽心々の隔ての襖、引別れてぞ入りにける。

ト三莊太夫先に、由良三郎、奥へ入る。安壽姬對王丸は、なぎさを拜み、下手へ入る。なぎさ、思ひ入れあつて上手屋體へ入る。

〽國々の、風は變れど變らぬは、鄙も都も戀なれや、その戀ゆゑに物思ふ、三莊太夫が秘藏娘、おさんが心とりどりに、腰元端下、一間を立出で。

トこの間、奥より娘おさん、振り袖娘、好みの形、物思ひのこなしにて出て來る。これに腰元四人附き添ひ、出て來り、文句の切れ、合ひ方。

腰一　申し皆さん、あのマア御寮人樣はどうなされた。おしつらひか知らねども

腰二　あのやうにお部屋にばかりお出でなされては、一倍のお氣のむすぼれ。

腰三　この緣先の見晴らしで、あなたのお好きな歌がるた。

腰四　また双六なりと折花なりと、御意に入つたを遊ばして

腰一　サア、お遊び

四人　なされませいなア。

さん　皆の者の何云やる。わしや、とんと氣が浮かぬわいの。

腰一　サア、其やうにお前樣が、明けても暮れてもお部屋にばかり、物思はしいお顏附きで、ふさいでお出でなされますゆゑ

腰二　おしつらひでも出ようかと、阿母樣のきついお案じ。

腰三　其やうにくよ／＼思し召すは、第一あなたのお身の御損。

四人　兎角人は心の持ちやうと申しますれば

腰三　ちと浮々と、なされませいなア。

四人　サア、わが身達が其やうに云やつても、わしが心の浮かぬのは、忘れもせぬ去年の夏、都見物に上つた時、葵祭りに見初めた殿御、何處のお方かお名さへも、知らで焦るゝ戀人を、慕ふこの身の切なさを、推量してたもいなう。

〽推量してとばかりにて、又も思ひに伏し沈む。

腰一　すりや、葵祭りのその時に、お見染めなされたお方があつて

腰二　それゆゑ、あなたは、くよ〳〵と。
さん　サア、これまで思ふに廻りも逢はず、あの三郎さまの情ない。それで一倍悲しいわいなう。
腰一　なんのそれなら其やうに、思し召す事もござりませう。大方斯ういふ事であらうと阿母様も、仰しやつてゞござりまするわいなア。
腰二　なんのお隱しなされずと、斯うした譯ぢやとツイ早う、仰しやつたがようござりまする。
腰三　例へ何處のお方にせよ、これ程思ふあなたのお心、屆かいでなんと致しませう。
腰四　また私しどもも共々に、神々樣へお願ひ申さば
四人　逢はれぬ事はござりますまいわいなア。
〽腰元どもに勵まされ、思ひ紛らす戀の道、忠義の道には迷はねど、要之介はそこ爰と、お主の在所尋ね侘び、この家の軒に佇みて。
ト此うち花道より元吉要之介、半合羽、旅形、大小にて出て來り、直ぐに門口へ來て
要之　アイヤ、この家の內へ、御案內申しまする。
〽と音なふ聲に。
腰一　アイ、どなた樣でござりまする。
〽門の戶明くれば小腰をかゞめ。
ト腰元一、立つて門口を明ける。要之介會釋して
要之　行き暮らせし旅の者、不知案內に難儀至極。何卒今宵一夜の舍り、御無心申したうござりまする。
腰一　申し御寮人樣、お聞きなされましたか。行き暮らせし旅のお人が、一夜の舍りを賴みまするが、どう致しませうぞいなア。
さん　それは何よりお安い御用、こちらへお入れ申しやいの。
〽何心なく見合す顏。
トおさん、門口を見る。要之介も內を覗き、兩人、顏を見合せ
ヤ、お前は。
〽おさんは恟り飛立つ思ひ、顏つれ〴〵と打眺め。
トおさん、思ひ入れあつて
オヽ、さうぢや〳〵、あなたぢや〳〵。ようマアお出でなされましたなア。
〽俄にいそ〳〵喜べば。
腰二　申し御寮人樣、ついぞ見た事もないお方を、あなたぢや〳〵と。

四人　どうなされましたのでござりますぞいなア。

さん　サア、あなたがこの年月、焦れ〳〵たお方ぢやわいなア。

腰一　エヽ、そんならあたれが、お見染めなさたた、お方でござりますかいな。

腰二　ほんにマア、お焦れなされたも御尤も。とんと畫で見た八代目に、生寫しな好い殿御。

腰三　サア〳〵、あなた、直々に、此方へお通し申したが

四人　よろしうござりますわいなア。

〽突きやられて、もぢ〳〵と。

ト腰元四人、おさんを無理に前へ出す。これにてこなしあつて

さん　春まだ寒き雪もよひ、旅の空にはさぞかし御難儀。マア〳〵、こちらへお通りなされませいなア。

要之　これは〳〵早速の御承知、忝なうござりまする。左様ならばお詞に隨ひ、御免なされて下さりませ。

〽御免なされと草鞋の、紐をとく〳〵塵打拂ひ、會釋こぼして打通れば、お茶よ煙草よとり〴〵に、もてなし囃すぞかしましゝ。

トこの間要之介、草鞋を脱ぎ、上の方へ通る。皆々捨ぜりふにて茶煙草盆を出す。

アイヤ〳〵、必らずお構ひ下さるな。イヤ、見受けますれば、殊なう廣きこのお家。卒爾ながら御主人は。

〽問はれて娘は。

さん　アイ、おはもじながら、この里の地頭格、三莊太夫と申しまする。

要之　ヤ。アノ三莊太夫どのとな。して又そもじは。

さん　わたしは娘のさんと申します者。以後はお見知り下さりませいなア。

〽聞くに要は好き便りと、胸に一物心の喜び、それと知らねば娘は嬉しく、いそ〳〵するを見て取つて、腰元どもは騒き合ひ。

トこの間、腰元四人、騒き合ひ思ひ入れあつて

腰一　ドレ、お客樣へ、お茶拵らへて

四人　差上げませう。

〽云ふを詞の機にして、打連れ奥へ、立つて行く。

ト四人、奥へ入る

〽後におさんは面はゆく。

さん　アヽ、コレ〳〵、わしばかり爰に置いて、コレイナウ、マア〳〵待つてたもや。コレお仲、およしなう。



嘉永五年四月河原崎座上演番附

〽流石おぼこのあどなさに、今さら何と云ひ兼ねて、赤らむ顔ぞ憎からぬ、要之介もそれと悟り。

要之　一樹の影、一河の流れ、袖振ふ合ふも他生の縁と、ついに見ぬお方ながら、斯くお優しきお志し。忝なうござりまする。

〽忝なしといふ顔を、恨めし氣に打守り。

　ト文句の切れ、誂らへの合ひ方

さん　ついと見ぬとは聞えませぬ。縁あればこそ今日の今、二歳ぶりで嬉しいお目もじ。よう思ひ出して見て下さりませいなア。

要之　イヤ、思ひ出せと云はれても、此方に覺えの無い事なれば。して、わしに逢うたと云はるゝは、そりやいづれ、何處にて。

さん　モシ、あなたは去年の四月、葵祭りに下加茂へ、お出でなされた事がござりませうが。

要之　如何にも去年は都にあつて、朋友どもとつれ〴〵に、葵祭りを見に行きしが、そんならその時、そもじには。

さん　下女はしたに誘なはれ、初めての京上り、物珍らしい祭りの群集、しかも糺の鳥居先、幕打ち廻した棧敷の内。

要之　一際目立つ女中達、何處の誰れが花なるかと、見やる折しも青葉吹く、風に飛び散る古今帽子。

さん　ひよんな事をと隣から、見ればその時あなたのお手へ。

要之　折よく受けて棧敷越し、其まゝ帽子を戻せしが、さてはその時見えたる、そもじは娘であつたるか。

さん　サア、その時さても情らしい、色も香もある、方樣と。

〽思ひ初めてはおぼこ氣に、なんと云ひ寄るよすがもなく、お名さへ問はず其まゝに、本意ない別れ下加茂の、葵祭りに逢ふといふ、縁を心の占方に。

あなたのお身に觸れられた、古今帽子を抱きしめて。

〽肌身離さず二年越し、どうぞま一度逢ひたいと、ありとあらゆる神樣や、佛樣に無理云うて。

願ひに願うた甲斐あつて、嬉しい逢瀬。ようマア來ておくれなされましたなア。

〽膝にひつしとすがりつく、娘心ぞわりなけれ。

要之　それ程までの志し、忘れは措かぬ、忝なうござるわいの。

〽ぢつと締めたる手の内に、千鳥の戀や籠るらん。

ト兩人よろしく思ひ入れ。

〽かゝる所へ庭口より、安壽對王兩人を、引立て出づる由良三郎。

三郎　餓鬼め、うせう。

〽出合ひ頭に顔見て愕り。

トこの間、上手より三郎、安壽姫對王丸を引立て出て來る。これにて要之介おさん飛び退く。この時三郎、要之介を見て

ヤ、われは榜示を切つたる曲者。

要之　ヤ、なんと。

〽身構へなせば兄弟は。

安對　ヤ、其方は。

要之　オヽ、あなたは。イヤ、知らぬ〱、いつかな知らぬ。

ト安壽姫對王丸に呑み込ませる。

榜示を切つた覺えはないぞ。

三郎　ヤア、知らぬと云うて其まゝに差置かうか。白狀せずば、拷問なして。

對王　ア、イヤ、榜示を切つたは。

〽云ふを打消し。

要之　ア、コレ、滅多な事を。

ト押へ、さては對王が切りしといふ思ひ入れあつて

一旦包み隱せしかと、斯く手詰めになる上は是非に及ばず、榜示を切つたは身共でござる。

三郎　さてこそ白狀。覺悟なせ。

要之　イザ、繩を掛けさつしやれ。

三郎　云ふにや及ぶ。

〽捕り繩たぐつてしめ上ぐれば、おさんは愕り。

ト三郎、要之介へ繩を掛ける

さん　ヤ、こりや何ゆゑにこの繩目。

要之　サア、榜示を切りし科ゆゑに。

らん　なんのお前が。

安對　榜示を切りしは。

要之　ア、コレ〱、申し、何も云ふまい。知らぬ顔、ナ、ナ、娘御樣。見ず知らずの私しに、しをらしいお詞。忝ないが私しは科人、知つた顔なさるゝと、お身に難儀がかゝりますぞ。ナ、娘御樣、御息災なお顔を見れば、もう思ひ置く事微塵もない。お行くへを尋ねさまよひ、榜示を切つたは大方それと、推量してこの繩目。定めて不便と思し召しませうが、私しよりはその姿、さぞ御苦

勞をなさるゝでござりませう。隨分お身を御大切に遊ばして下さりませ。もう何も云うて下さりますな。聞けば猶更この胸が、碎けるやうに思はれて。

〽と後は得云はずはら〳〵、こぼす涙は千萬無量、云はで碎くる兄弟の、心の內こそいぢらしき、娘は我が身と心得て。

さん　ヱ、、恨めしいそのお詞。お身にかゝりし罪あつて、共に憂目に遭ふとても、いとふ心で遁れられうか。同じ罪に落ちぬやう、庇うて下さんす、お詞は嬉しいが、お前に離れて、わしや、なんとせう、どうせうぞいなア。

〽口說き歎けば、三郎がむつと顏。

三郎　ヱ、、苦たるい世迷ひ言。このずりめも生白けた面で、いつの間にやら大事の娘を、よく泣くやうにしをつたな。ほんに宵戶門へ娘も出されぬ。ヱイワ、その代りに手ばしから、殺らしてくれう。

〽胸差拔く手に縋るは娘、庭にも危ふく兄弟が、心を冷す氣を冷す、いつの間にかは太夫が女房、三郎を突き退け〳〵、縲附きを後に聞へば。

ト此うちなぎさ、奧より出て、三郎を留め、要之介を圍ふ。

ヤ、科人を成敗するに、邪魔めされな、伯母者人。

なぎ　イヤ、邪魔はせぬわいの。

三郎　それになんでその留立て。

なぎ　サア、大それた科人なれば、人手にかけず此方で成敗する。云はれぬ事に差出ずと、すッ込んで居行され、甥の殿。餘のお人のお指圖は、憚りながら受けぬわいなう。

〽やり込められて、ちつともひるまず。

三郎　イヤ、すッ込んで居ますまいわい。代官所の仰せにて、詮議なす三郎、今宵一番鷄の鳴くまでに、首打つて差出さねば、役儀が立たぬ。

なぎ　サア、さういふ事なら、今宵一番鷄の鳴くまでに、伯母が首討つて渡しませう。

さん　ヱ、、そんなら、どうでもあなたをば。

なぎ　ア、コレ、わしに任して置きやいの。

三郎　ヱ、、なんの役のと暇潰し。互ひ早いに目かりはない。伯母者人、しつかりと預けましたぞ。サア、女郎、童め、立ちやれ。

ト引立てようとする。

安對　ヤ、、こりやわたしらを。

ト逃げようとする。三郎押へて

三郎　ヤア、身動きするな。詮議がある。兩人を奥へ引立て拷問するのだ。

要之　ムウ。

ト立ちかゝらうとする

三郎　ヤア、ひく／＼と、その面なんだ。夜明までには首にする。併し、伯母御前の手際では、刃金が裏に、ハテ、覺束ない。

なぎ　イヤ、見事討つて見せませう。

三郎　すりや伯母者人が、いよ／＼首を。

なぎ　ハテ、念には及ばぬ。コレ娘、大事の科人。わしが爰に附いて居る。其方は奥へ。

さん　イエ／＼、わたしも爰に居るわいなア。

なぎ　成る程、爰が放れともなかろ、道理ぢやが、其方が居たとて助からぬ大事の科人。何もかも母が胸に。ハテ、其方を生んだ母ぢや。なんで其方の心知らないでならうか。わしに任せて奥へ行きや。

さん　そんなら、どうでも。

なぎ　ハテ、行きやといふに。

三郎　然らば伯母者人。

なぎ　甥の殿。

三郎　キッと詞を番ひましたぞ。サア、おさんも奥へ。兩人、立たう。

〽てうど打つたる釘かすがい、母の詞に力なく、見返る娘兄弟を、引立て一間へ入りにける。

ト三郎、思ひ入れ。安壽姫對王丸おさんを引立て、奥へ入る。

〽娘の姿見送りて、暫し涙にくれけるが、やうやく詞おし鎮め、要が側へ差寄つて、縛めの繩切りほどき。

ト要之介の繩を解き、思ひ入れあつて

なぎ　何處の掟か知らねども、片田舍に育つた娘、戀するも他生の縁、何卒助かる仕樣もがなと、思へど叶はぬこなたの命、今宵中とあるからは、云うて詮ない事なれど、あれ程までに焦るゝ娘、せめて未來は夫婦ぢやと杯なりとさせ度い頼み、それゆゑかゝる因果話、心を留めてとつくりと一通り、マア聞いて下されいなう。

トきつぱりとした合ひ方になり

何を隱さう、あの娘は、曉毎に羽叩きし、鷄の聲を叫ぶ、世間に稀な片輪者。情なや夫太夫は如何なる過去の惡業にや、只殺生を事として、假にも人に情をかけず、

慈悲善根の心なく、人の意見も女房の諫めも聞入れなき放逸邪慳、その罰があの子に報ひ、夜明になれば身を悚はし、鳴く聲ばかりか身振りまで、又とあるまい鶏娘、親の邪慳な胴慾を、天から憎む見せしめと、知つても直らぬ夫の心、中に立つ身の悲しさは、ありとあらゆる加持祈禱、露いさゝかも驗なければ、人の知らぬ恥しさに、娘ばかりか閨の内に、多くの鶏を飼ひ置くも、その鳴き聲を紛らす爲。かゝる片輪な身の上も、これまで云はねば知らぬ娘、朝夕たしなむ紅白粧、髮結うてやる度々に、人に勝れて美しく、見えるは親の因果にて、なぜに片輪に生れたと、思ひ廻せば廻すほど、いぢらしいとも可愛いとも、云ふに云はれず苦しさに、母が泣き聲まぎらす鶏はありもせで、斯く淺ましき身の上を、あからさまにお話し申すも、年月焦れしあの娘、杯なりとさすなれば、それを菩提の種となし、あの子を勸めて出家させ、せめて未來を助けようと、思うて頼む親心、推量して叶へてたべ、どうぞ聞入れて、杯して下されいなう。

〽頼むとばかりせき入りし、子故の闇ぞ哀れなり、要之介も涙を催ふし。

要之　御緣とは申しながら、不緣の話し承る。一身ともに不具なりとも、心を以て形とせば、何恥かしからん。御息女無下に致さんやうはなし、必らず氣遣ひ召さるゝな。

なぎ　ムウ。すりや聞分けて、杯をして下さるか。

要之　一旦應と申せしからは。

なぎ　アノいよ〳〵。

要之　ハテサテ、御念に及ばぬ。

なぎ　エヽ忝ない。娘に語らばさぞ喜び、善は急げと、この由早う。

〽心はいそ〳〵立ち上がる、一間の内より聲高く。

トなぎさ、立ち上がる。この時、奥にて

三莊　ヤア、ならぬ〳〵。科人めに大事の娘、杯なぞとは思ひも寄らず。

〽大だら引さげゆるぎ出で。

ト奥より三莊太夫、出て

ヤイ女房、見れば科人の繩解いてあるが、誰れが許してその繩解いた。

なぎ　サアこれは。オヽ、それ〳〵、わしが預かるこの囚人、殊に叶はぬ事と定め、覺悟極めた上からは、逃げ隱れせうやうもなし。

三荘　オヽ、それはそれにしてやらうが、娘が身の上聞いたる奴、片時も生けては置かぬ。面倒ながら身が手料理、有り難い事と三拜して、それへ直れ。

〽刀拔く手に取縋り。

なぎ　ソレその心ゆゑ、娘が片輪。

三荘　ヤア、馬鹿つくすな。コリヤヤイ、人も頼まぬ問はず語り、邪魔立てして怪我するな。エヽ、其處退け、其處退け。

〽突き退け刎ねのけ、既に危うきその折柄。

ト三荘太夫、刀へ手を掛ける。なぎさ留める。この時向うにて

呼び　御上使のお入り。

トこれにて三荘太夫、向うをキツと見て

三荘　ムウ。御上使とは、察するところ大江の郡領時廉公より、對王兄弟詮議の使ひか。何にもせよ、見苦しいその囚人。成敗は後程。コリヤ〳〵女房、其奴に繩かけ、取逃がさぬやう張番いたせ。

なぎ　成る程、お指圖に任せ、わたしが部屋へ。サ、科人立ちや。

〽情を掛ける縛り繩、是非も涙に母親が、伴ひ部屋へ入りにける。

トなぎさ先に要之介附き添ひ、奧へ入る。三荘太夫、手を叩く。奧より紋壽、醫者にて出る。三荘太夫ちよつと囁く。奧へ入る。また揚げ幕にて

呼び　御上使のお入り。

〽程なく入り來る上使の仁體、袴肩衣引替へて、肩もかからぬ襤褸の一卷、亂れと見えて猩々頭、のつさのさのさ入り來る。

ト舞がゝりの調べになり、花道より、權六、三建目の非人の形にて出て、悠々と本舞臺へ來る。

〽流石の太夫も惘りせしが、樣子あらんと上座に通し。

ト三荘太夫、こなしにてあれへと思ひ入れ。權六、ツカツカと上手へ通りて、腰を掛けようとして、床几無きゆゑ、尻まくりをして大胡座をかき、空うそぶいて居る。

三荘　御上使には見馴れぬお姿。何處如何なる方よりの、お使者でござるな。

權六　エイ、わしでごんすか。イヤ、拙者は奧州から罷り越した。

三荘　ムウ。奧州よりとは、大江の郡領時廉公のお使者な

らん。これは〳〵遠路の所、御苦勞の御發駕。ヤアヤア、申し附けたる御上使への拜膳、用意よくば持參いたせ。

ト奥にて

紋壽　ハアヽ。

〽はつと答へて持ち出づる、使者へもてなす配膳は、花物云はさぬ山吹の、うづ高蒔繪さてこそと、大口開いてあざ笑ひ。

ト奥より紋壽、掛盤の膳椀の中に、みだけ小判小粒の入りしを持ち出て、權六の前へ直す。權六思ひ入れあつて

權六　ムヽ、ハヽ、。使者へ配膳饗應と、このもてなしは問はずとも、花もの云はさぬ山吹色。おのれが心に引くらべ、慾にまどはすこの配膳。我が見る目には瓦石同然。コリヤ、身には襤褸をまとへども、心は淸いお乞食樣だぞ。

三莊　ヤ。

權六　イヤサ、乞食非人の手にふるゝ、むさい汚ないこの配膳、使者のおれにやア。イヤサ、使者の身共の氣に叶はぬ。持つて立て。

紋壽　イヤ〳〵、そりや惡い合點。コレ、この配膳はナ、それナ。

トいろ〳〵思ひ入れあつて

でござりまするに依つて、お取り置きなさるゝ方が、よろしからうと存じまするて。

權六　サア、それだに依つて氣に入らぬ。

紋壽　そりや又なぜでござりまするな。

權六　さればでごんす。靑天井の時分なら、ヘイ旦那樣、お剩り有り難うと云ひもしようが、今となつちやア滅多にこれを。その釣り罠にやア、マアかゝらねえ。

ト三莊太夫の方を見て氣を變へ

イヤサ、賄賂を餌に使者の身共をたらし込み、時廉公の御前をば、取りつくろはん太夫が結構。それとても又詠みと歌、事に依つたら相談に、乘るめえものでもあるめえが、こればかりの目腐れ金ぢやアマア否だ。使者だぞよ。無禮であらう。

トきつと云ふ。三莊太夫、始終權六の素振りを見て思ひ入れ。

紋壽　ハヽヽ、ハヽヽ、これは〳〵どうしたものぢや。これを受けぬと云ふ事があるものかいの。ハヽ、

ハ、、ハ、、、、、さう大束に出かけても、こりやお金でござりますぞえ。わしならマア取る物は取つた上、せりふは後でどうでもなる事と、申したら皆樣がお笑ひなさらうが、世の譬へも申すではござりませぬか。慾に目がなるをかしかろと。ハ、、、。

權六　ヤイ〳〵、づく入め、やかましい、控へ居らぬか。

紋壽　ヘエイ。

トこなし

權六　最前より身共に對し、無禮な奴の。穢らはしい。この配膳目障りだ。とく〳〵持つて行き居らう。

紋壽　此やうにまで品を變へ、詞を盡して申し上げても。

權六　まだ饗應の仕樣が足らぬ。

紋壽　エ。アノこれ程のお心附けでも。

權六　この屋體骨をふるつたとても、おれ樣のお氣にやア叶はねえ。

紋壽　ヘエイ。

ト呆れしこなし。權六又キツと心附きし思ひ入れあつて

權六　金銀の以て面を張り、イヤサ、佞辯を以て人をなづけ、奸計を以て諸人を欺くとも、この使者はその手ちや行かぬ。馬鹿つくな。

〽と踏み碎く、傍若無人も理の當然。

紋壽　ア、これは〳〵とばかり花の吉野山。でなくて、これは先づ〳〵愚老が着服如來。

ト溢れた金を拾はうとするを、三莊太夫、紋壽の首筋を取り、下手へ突きやり、金を拾ふ。紋壽思ひ入れあつて

ア、情なや。折角着服如來と思うた黄金佛は、旦那樣がせしめ如來、我れらは空しく如意輪觀音。これから奥で、ドレ、夜食の菩薩にありつきませうか。

〽つぶやき奧へ走り入る。

トよろしく紋壽、奧へ入る

〽始終とつくと見すます太夫、使者の側へ摺り寄つて。

ト三莊太夫、始終こなし、權六の側へ寄りて

三莊　イヤナニお使者、最前より始終の樣子見聞せしに不肖の配膳、お氣に逆らひ、何ともハヤ迷惑至極。それは私し。時康公より御諚の趣き、逐一仰せ聞けられ下さりませうならば。

權六　ア、コレ〳〵、その長口上取措かれい。其許が聞かうと云はいでも、云はねばならぬ上使の表。そも今日

の嚴命は、一方ならぬ一大事、同席は如何であらう。末座へ下つて聽聞おしやれ。イヤサ聞かつせえ。時廉公の上意には、アノ御自分へ御所望の筋あつて、はる〳〵身共推參いたした。こりや、異變はなるまいがな。

三莊　こは仰せとも存ぜず。誰れあらう時廉公の仰せは勅命同然、何しに違背仕らう。何かは存ぜず、身に叶うた儀でござらば。

權六　こりや斯うありさうなもの。しかと左樣か。

三莊　御念に及ばぬ。

權六　承引あつて先づは安堵。

ト懷中より面桶を取出し

〽懷中より取出だす、奉書にあらぬ片しの面桶。

貴殿の方に所持召さる一品ある筈。この面桶に納められて、差上げよとの火急の嚴命、

三莊　ムウ。この器に納めよとは、してお望みのその品は。

權六　ハテ知れた事、首切つて渡し召され。

三莊　ムウ。首切れとは對王安壽。それなれば何の手間隙。後とも申さず只今直ぐに。

〽お目にかけんと立ち上がれば。

權六　ア、コレ〳〵、その兄弟の首ではない。

三莊　して又それは何者の。

權六　外ではない。其許の白髮首を。

三莊　ヤ、なんと。

權六　所望申しに參つたのサ。

三莊　ヤア、血迷うて何をほざく。最前より詞のはしはし、問はずと知れた使者は似せ者。叶はぬ所だ。化けの皮を現はしてしまやれサ。

權六　ヤア、血迷うたとはお主の事だ。

三莊　年老つたれど三莊太夫、われ達如きが口の端に、かかりやつながる使者應對、陳撥すれば附けあがり、血迷うたとは何のたわ言。

權六　イヤサ、老ぼれ、あらがふまい。覺えがあらう。先年都三條松原にて、岩木の判官政氏どのを、卑怯にも瞞し討つて、立ち退いたる三莊太夫。

三莊　ヤ。

權六　イヤサ、驚ろくな。もう手證が上がつて居るぞよ。叶はぬ所と覺悟して、サア、尋常に素首渡せ。

三莊　ヤア此奴、云はして置けば、ずばら〳〵と、岩木の判官を討つたとは何のたわ言。物欲しさの高ゆすりか。

推參千萬。土邊に下つて三拜ひろげ。身の程知らぬ人非人めが。

權六　ムヽハヽヽヽヽヽ、人非人め。人非人とはよく吐かいた。イヤサ、その頭でほざいたかよ。人非人とはおのれが事だ。身には絹布をまとへども、性根の穢れし人非人めが。サア、老い年よつたがらくた命、惜しまずと首を出せ。イザ、受取らう。

三莊　ヤア、またしても、その雜言。身が政氏とやらをぶッ放した、なんぞ慥かな證據があるか。

權六　老さらばうてもそれほどに、命が惜しいか、死にともないか。この期に及び未練にも、證據呼はり片腹痛い。おのれの罪は淨玻璃の、ぬきさしならぬこの襤褸。なんと覺えがあらうがな。

ト襤褸を見せる。三莊太夫見て、愕りこなし。

コリヤ、あらがふな、見覺えあらう。所は名に負ふ島原の、騷ぎの裏手でしつぽりと、居ながら詠める宵月夜、ツイとろ〱と寢入り端。夢驚ろかしたその時に、ソレこの褞袍、お主に賣つたお乞食様だ。

三莊　ヤ。

權六　いくらジタバタ踠いても、もう手證は上がつて居るわえ。

三莊　例へこの品、身が借り受けたにもせよ、なんでそれが證據になるか。何を馬鹿な。

權六　エヽ、おきやアがれ。措け〱〱措きさらせ。證據にならぬこの襤褸が、政氏公の死骸の手には、どうして殘つた。イヤサ、どうしてあつた。

三莊　サアそれは。

權六　これでも證據にやならねえのか。

三莊　サアそれは。

權六　素首渡すか。

三莊　サアそれは。

權六　サア。

三莊　サア。

兩人　サア〱〱。

權六　慾にとろけし寐腐り首、貰うて入れる面桶の首桶。否應なしに、キリ〱やつて下アりませ。

〽破れかゝつた襤褸の證據、如何な三莊の針先でも、つづくりやうはなかりけり。

トかさにかゝつて云。三莊太夫ヂッと俯向き、こなし。

サア、云ひ譯の筋あるか。よも云ひ譯はあるまいあるまい。云ひ譯なければ遁がれぬ所。尋常に素首渡すか。サア、キリ／＼と返答しろ。

〽退引きさせぬ上使の手詰め、傍若無人の太夫が大聲。

三莊　ヤア、證據が出やうが何が出やうが、身に取つて覺えない。そんなたわ言聞いて居る隙はない。何を馬鹿な。

〽詞荒目のあら疊、踏み散らしてぞ奥へ行く。

ト三莊太夫、面體を踏み毀し、奥へ入る。

權六　ヤア、緩怠なる慮外者。例へ踏ん込んでも、死損ないの白髪首、打ち落して立歸らん。

〽身拵らへして駈け行くを、女房一間を走り出で。

ト權六、奥へ行かうとする。なぎさ、ツカ／＼と出てこれを留め

なぎ　アイヤ、暫らくお待ち下されませ。樣子は殘らず承りました。御上使樣への一つのお願ひ、慥かに證據ある上は、とても遁がれぬ夫の命、本意ならねど女房のわたしが、首討つてお渡し申しませう。

權六　すりや其方が太夫の首を。

なぎ　サア、討つ事は討ちまするが、この世の別れ、暫しの御猶豫。御上使樣のお情にて。

權六　オヽ、首打ち落す功にめで、暫時の猶豫は身共が情。

なぎ　道に違うた事ながら、明六ツまでに夫の首。

權六　必らず討てよ。

なぎ　成る程、討つて差上げませう。

權六　先づそれまでは。

なぎ　御上使樣。

權六　案内しやれ。

〽のさばりかへる上使の勿體、伴なひ一間に入りける。

ト送りにて、なぎさ權六、奥へ入る。直ぐに大ドロになり、心と云ふ字を日覆へ引き上げる。

矢張り薄ドロ／＼。この間知らせあつて、日覆より舞臺一面の大欄間を繰り下ろす。よき所にとまると、本堂入口の書割りの張り物を、バラリと一杯に下ろす。すべて國分寺本堂の道具納まる。とドロ／＼打上げる。雪おろし、花道バタバタになり、安壽姫、對王丸の手を引き、こけつまろびつ走り出て來り、舞臺にて突きこけると、木魚入り靜かなる禪のツトメになる。上手より同宿、殘

生、頓才、珍念、歎念、出て來り

殘生　ヤア〳〵、爰らに見馴れぬ若い小童、參詣の者とも見えぬが、こりや、雪に降り籠められたのか。

頓才　何處からマアこなた衆は、來さつしやつたぞいの。

安壽　ハイ〳〵、私しどもは、非道なお主に責め使はれ、辛さの餘り家を出て、後から追手のかゝる者。

對王　お寺と見受けて駈け込みました。どうぞお助けなされて下さりませいな。

殘生　ハア、、非道の主人とあるからは、さては由良の湊の、三莊太夫に抱へられた人達か。

頓才　ヤレ〳〵、見れば手足も疵だらけ、年端も行かぬ者を可哀さうに。

珍念　お師匠樣はお留守なれど、人を助けるは出家の役ぢや。

歎念　二人ともに助けてやる程に

四人　案じやるな〳〵。

ト この時、花道揚げ幕にて、ワヤ〳〵と人聲する。

安壽　アレ〳〵、あの人聲は追手の者。

對王　早う救うて下さりませ〳〵。

殘生　ムウ。合點ぢや〳〵が、見渡す通りの田舍寺、隱し所というても。

頓才　それ〳〵、戸棚や押入れでは、直ぐに探し居るであらう。

珍念　オヽ、好い所がある、庫裏に吊してある經葛籠、あの中へ隱したら氣が附くまい。

歎念　成る程、こりや好い思ひつきぢや。

珍念　イヤ〳〵、どうしてあの中へ二人一緒に。その上經文の葛籠へ女中を。

安壽　ア、モシ、この身は例へどうなるとも、譯あつてこの子は大事の身の上、どうぞこの子の。

歎念　オヽ、さういふ事ならこの若衆どのを、葛籠へ隱してやりませう。

四人　サア、早く來さつしやれ〳〵。

ト 手を取つて引ッ張る。

安壽　ア、コレ對王、今云ふ通り其方は大事の身の上、母樣より兄弟が恙ないやうにと、お渡しなされた觀音の金佛。肌身離さず持つて居たゆゑ、今までこの身に怪我もない。これを其方に渡す程に、大事に持つて、必らずその身を大切に。

ト 懷より袱紗包み厨子入りの尊像を出し渡す。

對王　姉樣のお志し、しつかりと預かりました。
ト受取る。又人聲バタ〳〵
四人　ヤア〳〵、近附くあの人聲。サア〳〵早う。
對王　姉樣も隱れて下され。
頓才　オヽ、女中は庭の物置。
四人　サア〳〵、早う來さしつやれ。
ト同宿、兩人を連れて上手へ入る。矢張り禪のツトメ、雪おろしのあしらひ、花道バタ〳〵。與五作五介新太三六先に、下男四人、鉢卷尻からげ、銘々松明、六尺棒を持ち、走り出て來り
與五　なんでも雪の中の足跡は、この寺の道續き。
五介　爰へ逃げ込んだに違ひない。ソレ、探せ〳〵。
皆々　合點だ。
トわや〳〵奥へ亂れ入る。直ぐにバタ〳〵になり、四人、同宿と古葛籠を爭ひながら出て
新太　外へ行かれぬ一筋道、爰へ逃げ込んだに違ひないか。
三六　物一つ無きこの古寺、只怪しいはこの葛籠。
四人　紐をほどいて。
ト四人立ちかゝるを同宿止めて

殘生　ア、コレ、今云ふ如く經文に違ひない。開けたらこなた衆
四人　罸が當るぞ。
下男　罸も報いも構ふものか。
同宿　イヤ〳〵、見せる事はならぬぞ。
與五　エヽ、面倒な。叩きのめせ。
ト禪のツトメになり、四人、棒にて同宿を追ひ散らし
五介　この間に早く葛籠の內を。
三人　合點だ。
〽蓋取退けんと立ちかゝれば、不思議や俄に鳴動し、四方に輝く金色の、光と共に葛籠より、現はれ出でし一個の童子。
ト四人、葛籠の蓋を明けにかゝる。ドロ〳〵になり、目くらめき、一時に見事にかへる。これを一時に蓋を刎ね退け、金蓮童子、金の蓮杖を持ち出る。四人起き上がりこれを見て
與五　ヤ、こりや對王と思ひの外
五介　怪しき形の童め。
新太　化性の者か、魔性の者か。
三六　そも先づうぬは

四人　何奴だ。

〽何奴なりと呼はれば、童子は微妙の聲高く。

童子　善哉々々、我れこそは對王安壽が念誦佛、觀音薩埵に仕へまつる、脇士の一人金蓮童子、いま同胞が危念を救へと、薩埵の命に姿を現じ、貪慾非道の太夫がしれ者、金剛夜叉の憤怒を借り、泰河の雪に埋めてくれん。

〽黄金の蓮杖小脇にかひ込み、立つたる姿ぞ勇まし〵。

與五　ヤア、例へ觀音の云附けでも

五介　滅多に負けぬ。わしらがお主は

新太　閻魔と仇名の太夫どの。

三六　此ま〵變らば地獄責め。

四人　佛とて容赦はならぬ。

童子　何を小癪な。

與五　ソレ、叩きのめせ。

三人　合點だ。

〽打つてか〵るを東西南北、四方上下に方便力、躍りかかれば都率天、ころりと前へ須彌檀返し、沈んで組つく兩人が、肩先發矢と有頂天。

トこの間四人、六尺棒にて打つてか〵り、立廻りあつて、文句の切れより音樂の入りし誂らへの鳴り物になり、立廻り。始終ドロ〳〵のやうに雪おろしを冠せ、雪降りの立廻りよろしくあつて

〽蓮花にあらぬ吹雪の花、ちり〳〵ぱつと逃げ出せば、何處までもと追うて行く、童子の働らき觀音の、利益の程こそ。

ト四人、花道へ逃げて入る。童子、向うを見てキツと思ひ入れ。ドロ〳〵にて童子を砧にて消す。知らせにつき、大ドロ〳〵にて、舞臺の道具、居所替りになる。

本舞臺、眞中二間、常足の亭座敷、大和葺き本緣附き、一面に障子たて切り、軒に誂らへ鶏の入りし鳥籠、上の方、鶏の戸屋。上手所々に鶏の伏籠、後一面奥庭の遠見。すべて雪持ち。爰に上手の立ち木に安壽姫對王丸、繩目にか〵り縛りつけあり。矢張りドロ〳〵にて道具納まる。

ト心といふ字を日覆より兩人の後へ引いて取る。兩人これにて「ムウ」と心附きたるこなし。かすめて雪おろし。

對王　姉様。

安壽　弟、そんなら今のは夢であつたか。追手に探され危い所、葛籠の不思議は觀音樣の御利益、姉が渡した金佛の尊像、其方は持つて居やらうの。
對王　アイ、肌身離さず持つて居ります。その奇特やら、どのやうに叩かれても、疵さへつかぬこの身の不思議。
安壽　この末どうなる事かは知らねど、今一度母樣に逢ふまでは、其方は取分け大事の身。その尊像を大事にかけや。
對王　アイ／＼、お前も怪我せぬやうに、達者で居て下されや。
ト　この時雪おろし烈しく、以前の興五作五介新太三六出て來り。
興五　サア／＼二人とも、連れて來いとのお主の云ひつけ。
三六　責苦に遭はすは不便だが、主と病ぢや。
四人　サア／＼一緒に
安壽　そんならまだ、この上に。
安對　姉弟を。
五介　鬼親仁めが地獄の責め。
新太　これも前世の皆因緣。
興五　隙取らばおいらが身の上。

四人　サア／＼、早く來やれ／＼。
ト　矢張り雪おろしにて、四人、安壽對王を引立て上手へ入る。淨瑠璃になり
〽更くる夜に、由良の戸渡る柴舟の、漕ぎ放れたる歎きぞや、不便やおさんは閨の内、涙は雪と降りしきる、積るは同じ物思ひ、思ひは消えぬ埋れ火の、炬燵ばかりが寄邊にて、伏し沈みてぞ居たりける。
ト　この淨瑠璃の切れ、獨吟になる
唄〽春はいつ、笠に降らるゝ雪よりも、つれなき人の冷たさを、六つの歌仙も詠み侘びて、やたけ心に戀すてふ。
ト　これにて正面の障子を引拔く。内におさん、紫の蒲團をかけ置炬燵にもたれ居る。
さん　このマア冷える夜に只お一人、縛られてゐやしやんすりや、さぞ寒からう。おいとしや。側へ枕は交さずとも、わしが殿御と定めたお方。今宵限りのお命にて、最早この世で添ふ事も、ならぬといふは何事ぞ。なんの事ぢやぞいなア。
唄〽かざすや金の簪の、さす手引舟磯へも寄せず。
高いも低いも姫御前は、夫に附くがその身の役。夫は寒いに縄目を受け、冷え上がつて居やしやんせうに、女房

のわしがぬく〳〵と、炬燵に居やう筈はない。
〽云ひつゝ立つて庭の面、思ひは堅き飛石も、埋むばかりの皆白妙。
不思議の縁で見染めたお方、あんな殿御もあるものか。どうぞ逢ひたい逢はせてたべと、頼んだ神様佛様、毘沙門様も聞えませぬ、お千度打つて戴くお神籤。
〽二の上がつたは二世かけてと、喜んで居たものを、今逢うて今別れになるやうな、守りやうがあるものかいな。
また金比羅様も金比羅様ぢや。人の拜む時は默つて拜まして置いて、死別れせうとて、こちや拜みやせんもの。エ、、こんな事なら、いつそ逢はさず、焦れ死をするやうに、守つてくれたがよいわいなア。
〽娘心のくど〳〵と、泣いて見たり悔んで見ても、返らぬ今の身の悲しさ。
今宵限りのお命とて、最早この世で逢はれぬとは、こりやマア何事、なんの事ぢやぞいなう。ア、コレ、冷るについては猶いとしい。せめてお側の介抱も、よるべのならぬ片男波、思ふ殿御を捨小舟。
トこの時分、雪大分に降る。

唄〽沖にゆら〳〵由良の戸の、おつと取梶合點ぢや、ゑいかえゝ、ようそろのんこ、帆を卷立ての舟唄は、便りを松の鳥蔭や、君の追風の戀風は。
エ、、折も折とて今宵のマア、この雪の降りやう。とても叶はぬお命なら、わたしも共に凍へ死、お側で一緒に死にたいわいなア。
唄〽色の司を求めん手管、中を隔つるませの菊、咲きしも惜や夕照りに、顏に紅葉の戀の鬼。
トこれよりチリ〳〵と屋體を上手大臣柱の内へ七分程引き、下手より小高き土橋、誂らへの石燈籠を舞臺眞中へ引出し、グッと下手へ一間の待合を押し出す。これに脇差を掛けし刀掛けあり。
唄〽丹波大江の山よりも、増る思ひや八雲立つ、出雲八重垣妻ごめは、何處と結ばん縁の綱。
トこれまでに道具納まる。
〽我が戀人も春の雪、朝を待たず消える身と、思へば胸も碎け行く、岩戸の神の惠みもあれば、只いつまでも常闇と、空を見やれば降る雪に、いとゞ心も丑滿過ぎ。
最前聞けば、一番鷄が殿御のお命。どうぞ今宵はいつまでも、夜の明けぬやう、仕樣は無い事かいなア。

コレ〳〵鷄よ、今宵一夜は、例へ夜が明けても、必らず時を謡うてたもるなや。一番鷄がいとしい〳〵殿御のお命。鷄も心があるならば、必らず謡うてたもるなや。

〽その云ひ甲斐も情なや、早時々に告げの鷄、羽うち羽叩きばつさばさ、おさんは悔り見上ぐる時。

ト上手屋體にかけし籠の鷄、羽叩きする

ア、悲しや〳〵。アレ、羽叩きするは、時を告げる身繕ろひ。ア、コレ、コレイナウ、必らず啼いてたもんなや。そこへ留めに行きたうても脊は屆かず。

トまた羽叩きする

アレ〳〵、また羽叩きをするわいなう。エヽ、どうぞ仕樣は無い事かいなう。

〽足爪立てて伸び上がり、詮方涙に身を踠けど、庭に羽叩く籠の内、はつと立寄り伏籠より、抱き取り出す一羽の鷄。

ト伏籠の中より誂らへの鷄を出し

オヽ、其方は下に居るに依つて、よい子ぢやなア。コレイナウ、わが身までが同じやうに、啼きやんな啼きやんな。賢い者ぢや。サア〳〵、啼かずと直ぐに。

唄〽ねんねこ〳〵ねんねこせい、ねんねが守りは何處へ行た。

〽抱きしめ〳〵抱きしめて、そつと伏籠の内へ入れ、立戻つて見上ぐるとまり木、又も羽ばたき南無三方、雫を礫と打つけられ、驚ろき庭へ飛び下りる、鷄を其まゝ兩手に抱へ。

コレ、其方は賢い程に、よう聞きや。

ト床と打ち合せの合ひ方

今わが身が啼いてたもると、わしがモウ、大事の〳〵、身にも命にも替へぬ程の、いとしいお方のお命がない程に、健氣者ぢや。必らず啼いてたもんなや。

〽撫でつさすりつするうちに、向うの止り木こなたの伏籠、多くの鷄の羽打ち羽叩き、おさんはうろ〳〵氣も半亂、あなたこなたと追ひ廻す、飛石傳ひのしどろ足、褄も裳もひら〳〵〳〵、ひらりと飛んだる鷄の、羽先掴んで大地へころり、起き上がつては驅けめぐり、只身一つに詮方なく、撫と伏して歎きしが、すつくと立つて泣く目を拂ひ。

ト此うちよろしくあつて

オヽそれよ、天滿神のお歎きにて、河内の國道明寺は、今に鷄啼かぬと聞く。

〽その神力には及ばずとも、戀しと思ふ我が夫に、別れを急ぐ鷄の音を。
女の一念、止めいで置かうか。
〽一心凝りては眼も釣り上げ、見上げ見下ろす鷄籠、止り木、爰に追ひ詰め追ひまくられ、鷄も毛を立てとさかを怒らし、蹴爪を研いで。
トおさん、引拔き誂らへ鷄の衣裳になる。
〽しゝむらを呼ばんとすれどおさんの心、煩惱の犬となり鷹となり、追ひつ追はれつ遁がれがたなのこの場の不思議、八寒地獄畜生界、心は紅蓮大紅蓮、解けて亂れて黑髮も、ばら／＼鷄の羽風と共に。
ト此うち薄ドロ／＼、始終狂ひよろしく
〽多くの鷄を捻りすゑ、蹴殺し締め殺す、報いは目前我が身の上、思はず知らず羽叩きし、一聲さけぶ鷄の聲。
ア、悲しや。いま啼いたのは、何處ぢやぞいなう。
〽何處の鷄ぞと見廻し／＼、思はず見やる池の面、我が身の上かは白雪の、明りに詠めて思はず立退き。
ト橋の上より池へ映る影を見て
ヤア／＼情なや、我が姿生ながら鷄となり、翼生じて今の聲も、我が啼き聲であつたるか。

〽始めて知りし我が啼き聲、一鷄うたへば萬鷄謳ふ、函谷關の關の戸も、明方近き數多の啼き聲。
ト一時に所々にて鷄笛
ア、淺ましや、親の因果の身に報い、この姿となつたれば、所詮この世に生き存らへる心はなし。オ、それよ。この身を殺して夫に代り、殿御の命を、助けいで置かうか。
〽念力凝つては髮逆立ち、とさかを怒らし白雪を、蹴立て踏み立て待合に、掛けたる一腰逆手に取り、鷄の報いを目前に、咽喉笛さけば血は紅、恐ろしなんども。
ト此うち待合の刀掛けに掛けてありし脇差を取り、これにて自害なし、よろしくあつて、三重、ドロ／＼にて、舞臺一杯の雪幕を振り落し、雪おろしにてツナギ。
道具出來次第、雪幕を切つて落す。
本舞臺、元の道具に戻る。二重眞中に熊の皮を敷き、三莊太夫、以前の形。脇息にかゝり、長煙管にて煙草をのみ居る。後に刀掛けあり、上手に誂らへの大飯斗、火鉢に火澤山おこしあり、平舞臺下手に、安壽姫對王、上手に要之介、繩にかゝり、松に縛られ、

デッと俯向き居る。雪おろし、時の鐘、三重にて道具納まる。

〽雪氣の空、無慘なるかな二人は、身を降る雪に埋められ、胸の氷は日に解けても、思ひは解けぬ縛り繩、目も當てられずいぢらしゝ、物の哀れも白髪の親仁、大飯斗に寄りかゝり。

ト淨瑠璃の切れ、衒入り合ひ方。

三荘　ア、降るワ〳〵。二階の雪見燈籠もまさに埋もれて、皆白妙となりけらし。詠めに飽かぬ雪の庭、どうも云へぬこの景色、埒放れし小鳥めら、凍え死に居る心地よさ。コリヤ、ヤイ、わいら泣くか、寒いか、尤も。可哀や〳〵。寒くばキリ〳〵云うてしまへ。岩木の餓鬼めらであらうがな。

安對　イエ〳〵、そんな者ぢやござんせぬわいなア。

三荘　コリヤ、こちらの毛二才め、大江の郡領と書いたる榜示杭切り居つたは、おのれも岩木の餘類に極つた。サア有様に白狀せい。

要之　オヽ、例へ岩木の餘類でなくとも、郡領と書いたる札を切り捌りしは、時廉公に恨みある者、入らざる馬鹿念押さずとも、片時も早く首討つた。

三荘　ムウ、首さし延べし丈夫の魂、女郎も餓鬼もづぶとい面、こりや一應では吐かすまい。この上は肉を劊り骨をひしいでも云はさにや置かぬ、今謳ひしは一番鷄、所詮甘く云つたとて、一通りでは吐かし居るまい。オヽ、吐かすなよ。こりやむごい目を見ずばなるまい。

〽火ばしを炭火にさし込み〳〵。

三荘　ヤイ忘れ草。

對王　ハ、イ。

三荘　信夫よ。

安壽　ハイ。

三荘　兄弟の者よく聞けよ。元來我れは大江郡領さまより、三荘を預かりの代官格、疎かならぬ今度の役。この繪姿に似寄りつらうぬら、打捨てては役目が立たぬワ。サア、うぬらが親は、岩木判官と云はうがな。

對王　イエ〳〵、其やうな者ではござりませぬ。

三荘　そんなら岩木が悴ではないか。

對王　ハイ。

三荘　ヤイ信夫よ、わりや岩木判官が娘安壽姫、忘れ草は對王丸であらうがな。

安壽　イエ〳〵勿體ない、お主様に、なんの嘘を申しませ

う。兄弟とも、左樣な者ではござりませぬ。

三莊　そんなら兄弟とも岩木の餘類ではないか。コリヤ、よく物を合點しろ。もう斯うなつたら云うても云はす。又云はずとも云はさにや置かぬ。サア、どつちからなりと白狀しろ。

安壽　イエ〱、如何やうにお尋ねなされても

對王　この事ばかりは存じませぬ。

三莊　そんなら、どうでもわいらは知らぬな。

兩人　ハイ、お免しなされて下さりませ。

三莊　エヽ、死太い奴等、また靑二才めも、榜示を切つたは我が科などと間に合ひ口、合點が行かぬ。ヤイ二才め、この二人の奴等は岩木の餘類と云ふ事、われが知らぬ筈はない。サア、キリ〱と吐かして仕舞へ。

要之　只今も申す通り、榜示を切りしは、大江に仇ある某が業、岩木の餘類とは思ひも寄らぬ。左樣な事を申さずとも、少しも早く成敗あれ。

三莊　ヤア死太い二才め。よし〱、餘類で無くば今、目の前で二人を拷問。ヤイ、二人ながらこれを見ろ、この火鉢にくべたる燒鐵、死太いうぬらが、どてツ腹へ。

安對　エヽ、。

三莊　憂い目辛い目、年寄つてしたくもないが、これも役目だ。覺悟しろ。

〽邪慳の炎に燃え立つ燒鐵、傍に掛けたる手拭に、しつかと卷きて庭に下り立ち、目先へ突つけ。

ト手拭かけの手拭を取り、火ばしを持ち庭へ下り

ヤイ、どちらからでも白狀しろ。

兩人　サアそれは。

三莊　忘れ草、わりや對王丸であらうがな。

對王　サそれは。

三莊　信夫め、われは安壽姫か。

安壽　サアそれは。

三莊　この二才めは、うぬらが家來であらうがな。

安壽　イエ〱、左樣ではござりませぬ。

對王　申しお主樣、わたしを殺して姉樣を、お助けなされて下さりませ。申し姉樣、扇の橋で母樣のお詞、必らず忘れて下さりまするなえ。

安壽　オヽ、よい云うてたもつた。年端も行かぬ其方の眞實な心から、姉を助けんとの心ざし。申しお主樣、わたしは女の事、どうぞ弟をお助けなされて、わたしを殺して下さりませ。

對王　イエ〱わたしを。
安壽　イエわたしを。
對王　イヤ姉樣を。
安壽　イヤ弟を。
兩人　お助けなされて下さりませ。
〽と爭ふ兄弟、せちがふ太夫。
三莊　イヤ、そりやならぬ。先刻にから樣々と詞を盡し、會釋して聞かせても、聞入れぬ小びつちよめら。吐かさぬからはこの燒鐵、脊骨をかけてたつた一刺し、それでも云はぬか。
兩人　サアそれは。
三人　サア〱〱。
三莊　ド、どうだ。
〽あなたこなたへ突きつける、折しも降り來る大雪に、八寒地獄苛責の責、中に立つたる太夫が獄卒、傍にあふあふ要が身もだへ、天道誠あるならば、この縛めを解きたまへ、日本國の神々にも、見放されたか淺ましやと、三人が淚一時に由良橋立に成合の、潮滿ち來る如くなり、三莊太夫大口開き。
トこの間三莊太夫、兩人を苛なむ。要之介いろ〱思ひ入れ。この時、明六ツの鐘鳴る。
ハヽヽヽ、いつまで云つても返らぬ繰り言、あの鐘はもう明六ツ、二人の奴等が詮議は後、青二才めが首打ち落し、上使めの鼻明かさん。
〽まつかう笠に拜み打ち、拔けつくゞりつ身をかはす、怖々二人が支ゆれば、切尖外れて不思議にも、繩の切れしは天の加護、切り込む刀打ち落され、ひるむ所を討入る要、刀押取り太夫が肩先、ばらりずんと切り下ぐれば、うんとのつけに倒れ伏す。
ト三莊太夫、火箸を捨て、刀にて要之介へ切つて行く。要之介、文句通りの立廻りに繩切れる。刀を取り、三莊太夫を直ぐに切り下げる。三莊太夫、苦しみ倒れる。
要之　爰は危ふし、先づ〱奥へ。强惡人の三莊太夫、觀念ひろげ。
〽二人を追ひやり身づくろひ、仕止めんものと打込む刀、引はずして丁ど受止め、刀の面にきつと目をつけ。
ト安壽姫對王丸、奥へ入る。要之介、懷中せし短刀にて三莊太夫へ切つて行く。兩人立廻つて、キッと思ひ入れ。
三莊　ヤ、見覺えあるこの刀、これを所持する其方は。

要之　何を小癪な。
〽又切りつけるをしつかと受止め。
　トよろしく立廻つて
三荘　さし裏に不動の梵字、月山が自作の刀。すりや、日頃尋ぬる悴であつたか。
要之　ヤア、この期に及び、僞り表裏の卑怯者。お二方の仇敵、サア、尋常に覺悟せよ。
〽と詰め寄れば、手疵に屈せぬ三荘太夫、何思ひけん落ちたる刀、取るより早く我れと我が、腹へぐつと突き立つる、なう悲しやと駈け出す女房。
　ト三荘太夫、刀を取り、腹へ突ッ込む。奥よりなぎさ出て
なぎ　コレ太夫どの、日頃の惡心つもり〳〵、果てはその身の仇なるか。但しは狂氣か、悲しやなア。
〽取りつき歎くを突き退け〳〵、目を見開き。
三荘　悴要之介、よく無事で居てくれたなア。
要之　ヤ、某を眞實の悴とは。
三荘　ホヽ、不審は尤も。其方が實の親ぢやわやい。
要之　エヽ。
三荘　その證據はその刀、さし裏に不動の梵字、月山が自作の刀。
要之　して、この刀を證據にて、悴と仰しやるその仔細は。
三荘　語り聞かすも恥かしや、過ぎ行くこの身の懺悔話し。コリヤ、よく聞けよ。
　ト竹笛入りの合ひ方になり
元來我れも奥州生れ、鈴村兵庫と云ひし者。浪々のうち出來たる汝、その刀を殘し、女房共に國に置き去り、我れはそれより當國へさまよひ來り、緣あつてこの家へ入聟、千軒長者と用ひられしは、我が運の開けしところと、喜んだが因果の始まり。慾惡眼のしとみとなり、國の妻子の事までも、忘れ果てたる放埒無慘。むさぼり集むる金銀にて、面張る我が心の汚なさ、胴慾邪險、人の恨みの報い報うた鷄娘、それにも懲りぬ我が性根、何卒汝を尋ね出し、共に榮耀にあらせんと、子ゆゑの慾に眼もくらみ、時廉に頼まれ、手に掛けじ岩木どのは、可愛と思ふ我が子の御主人。すりやこの親は主殺し。我が首取つて大恩の、主君へせめて忠義にせよ。
〽子ゆゑの闇の思ひ出に、鐵のやうなる魂ひも、今ぞとろけてはら〳〵〳〵、止め兼ねたる親と子が、涙汲み出

す如くなり。
要之　ハヽア、初めて聞いたるお物語り。さては年月こがれたる、親人にて候ふか。斯くまで厚き御恵み、神ならぬ身の情なや、主人の敵と手に掛けしは、取りも直さず親殺し。
三荘　知らぬ事とて悴が主人を
要之　揃ひも揃ひし
三荘　不義不孝。
要之　斯くまで早き報いと因果。
三荘　敵同士が親子となり
要之　かゝる憂き目を見る事か。親人様、
三荘　悴。親子は一世、よう顔見せてくれいやい。
〽引寄せ〳〵抱きしめ、離れ難なき有様に、母は涙の顔を上げ。
　ト両人よろしく
なぎ　コレ親仁どの、何と云はつしやる。娘が慕うた殿御と云ふは、こなたが國に殘した子か。エヽ、神ならぬ身の情なや、知らぬ事ゆゑ戀ひ慕ふ、夫の命が助けたいと、狂ひ〳〵て、可哀や娘は、果敢ない最期を、しましたぞいなう。
三荘　ヤヽヽヽ、すりや娘めも、非業な最期を遂げたるか。
要之　これと云ふも皆我れゆゑ。不便な事を、致せしよなア。
〽悲歎の涙にくれければ。
なぎ　アイヤ〳〵、結句死んだが娘が仕合せ。生きて居たとて添はれぬ縁。コレ。
〽魂ひ中有にあるならば。
母が云ふ事よう聞きやいなう。其方が慕うた男といふは、腹こそ替れ胤は一つの、はしをり鏡の同胞ぢやわいなう。それぢやに依つて、この世は愚か、未來まで添ふ事ならぬと諦らめて、賽の河原へ行てたもや。
〽なんの因果で此やうな、悲しい目には遭ふ事ぞ。
戀しと思ふ心根が、家の棟離れずうろ〳〵と、さぞや迷うて居やるであらう。
〽迷うてなりと今一目、姿形を見せてたも、逢ひたいわいのと伏し轉び、悶え歎くぞ哀れなり。
　トよろしく泣き落す。要之介、こなしあつて
要之　父の切腹、母の歎き、妹の身の上。かた〴〵以て捨てられねど、まだその上に重きは主人。お二人とも何處



嘉永五年四月河原崎座上演番附

にまします。氣遣はしや。

〽見やる一間に由良三郎。

ト上手の障子の内にて

三郎　ヤア、對王安壽に極まつた。觀念ひろげ。

權六　エイ。

〽鋭く響く刀の鍔音、障子蹴放し山岡が、三郎の首携へ、兄弟守護なし控ゆれば。

ト上手障子を引拔く。權六、野袴ぶッ裂き、大小にて、三郎が首を持ち、上の方に安壽姫對王丸扣へ居る。要之介見て

要之　ヤ、、お二方には御安泰なるか。エ、、忝ない。して其許は何人にて。

權六　ホ、ウ、不審な尤も。仔細具さに申し上げん。

〽山岡はるかに飛しさり。

ト權六、舞臺へ下りて

御母公お二方を、政氏公の御一族とも知らず、扇の橋にて賣り渡せし某、御不審に思し召すは道理至極。申せば長き事ながら、この國にまします由を聞きしゆゑ、尋ね參りし甲斐あつて、御機嫌よき御有樣、見奉りし身の大慶、御母公も佐渡が島にましませしを、彼處を救ひ出し奉り、めでたく御親子御對面は、某が方寸の内にあり。必らず氣遣ひ召さるゝな。

〽毒藥變じて忽ちに、現はす素性流石にも、心岩木の忠臣なり。

要之　ハ、、忝なし。御臺所と云ひお二方の先途、見屆け下されんとは、要が安堵この上なし。情なきは某、惡人にもせよ現在の、父を討つたる親殺し。何面目に存らへて、生恥を見んより、潔く切腹なさん。この上ともに御主人方の御身の上、たゞ〴〵頼むは山岡どの。早おさらば。

〽引拔く刀、山岡もぎとり。

權六　オ、、親殺しの科人、成敗の仕樣あり、覺悟なせ。

〽要が片袖すつぱと押切り。

ト權六、要之介の片袖を切りて

晉の豫讓の例しに習ひ、親子羽翼の片袖を、切つてしまへば他人と他人。餘つた骸はこの非人が、貰うて去ぬるはお定まり。いま死ぬる命延はり、主人の先途を見るが忠義。必らずともに早まつて、犬死なさるな、要どの。

〽諫める言葉に要之介、忝なしと一禮に、手負の太夫も喜び涙。

三荘　山岡どのの情にて、忰にあらぬその若者、死ぬる命を助ける仁心、禮は詞に。コリヤ、必ず忠義を忘るゝな。

〽豪氣の太夫、よろぼひ／＼立ち上がつて、縁先にかけたる竹樋引下ろし。

　ト三荘太夫、苦しみながら立つて竹樋を取る。

主殺しの大罪は、掟極まる竹鋸。御兄弟の爲には親御の敵。サア、姫君若君、一引きづゝ引いてたべ。要も引け。引かぬか。引いてたべ。引いて成佛させてたべ。

〽と竹樋に、拔身持ち添ひ首に當て、エイ／＼／＼と引切る有樣、なう情なやと女房要、取りつくを突き退け突き退け首押切り、遂に空しくなり果てる、はつと泣入る妻よりも。

　ト三荘太夫、我が手に首を切つて落入る。皆々思ひ入れ。

〽不便と見やる安壽姫、親子が歎き山岡が、貰ひ涙に對王丸、心さとくも勇みをつけ。

對王　ホヽ、その歎きは理りながら、これも敵郡領ゆゑ。

〽恨みを晴す會稽の、今宵の雪は幸先よし、不倶戴天の仇敵、打ち亡ぼして手向けなん。

忠と孝との陸奥山。

安壽　黄金花咲く故郷へ。

〽再び飾る錦木の、朽ちせぬ家名千代八千代、さゞれいしづゑ岩木の榮。

頼むは元吉。

對王　山岡兩人。

〽云ふに山岡勇みの大音。

權六　仰せにや及ぶべき、當の敵は大江の時廉、榮華に誇りし油斷を見込み。

〽例へ味方は小勢なりとも、心一致に攻め入らば、酒宴亂舞に心をゆだね、武略に疎き大江が鼠輩、爰に押し寄せ彼處にぼつ詰め、揉み立て／＼ぼつくだし、强慾非道の皺頭、討取らんは手裏にあり。

要之　ホヽ、ホヽ、ウ、潔よし面白し。

　トのりになり

これより直樣出發なし、他日の鬱憤晴らすはこの時。

〽都を餘所に丹波路や、山又山を打越えて、彼れが在城へ逆寄せなし、小勢は夜討と孫呉が詞、合にあひあふ合ひ詞。

月よ花よと互ひの掛け聲。

〽やす〳〵怨敵討取つて、めでたく參會。

權六　ムウ。

要之　ムウ。

兩人　ム、ハヽヽヽヽ。

權六　喜べ元吉。

要之　云ふにや及ぶ。

〽勇み立つたる二人の若者、山岡重ねて。

權六　イザ、御立ち。

〽進むる權六、惜るゝ要、四苦八苦の思ひを爰に。

要之　生者必滅定めなく

なぎ　勸むる門は無常門。

權六　此方は敵を討取る門出。

安壽　逢うて別るゝ會者定離。

對王　枯木に花の返り咲き。

權六　世はさま〴〵の

皆々　成行きぢやなア。

〽心を波に打寄する、由良の湊の千軒長者と、その名を今に殘しける。

ト皆々よろしく、引張りの見得にて

幕

由良湊千軒長者（終り）

鎌倉三代記

解説

明和六年十二月の竹本座に「近江源氏先陣館」が出た。大坂多の陣を脚色したものだ。これが好評だつたので、翌明和七年五月の同座で「太平頭鑑飾（たいへいかぶとのかざり）」を脚色上演した。作者は不明だが無論同じ近松半二であらう。ところが、この方は茶臼山の血判取を序幕に、少し徳川氣分が露骨過ぎたので、六月十六日に差留められてしまつた。歌舞伎の方では、これを「赤坂城星月合戰」として上演したが、無事通過したので「鎌倉三代記」と名題を變へて上演、今日まで殘るやうになつたのである。「鎌倉三代記」といふのは享保頃、紀海音の作つた淨瑠璃であるのだが、その名題を借りて「太平頭鑑飾」を上演したのである。

大序が石山の血判取、木村重成を當込んだ三浦之助が、時政の血判を取る所から始まつて、松田左近の戀、摺針太郎の一件（これは薄田隼人を當込んだものであらう）、しまひが時姫の自殺、高綱の出家で終つてゐるが、出家した名が公曉といふのだから隨分無法である。近江源氏と比べると餘り傑作とは云はれない。只、絹川村閑居の件だけが今に殘つてゐるので、本篇にもその前の庄野陣屋と二幕を收めて置いた。

江戸で初めて歌舞伎へかゝつたのは、文政元年二月の中村座で、中村芝翫の佐々木、七代目團十郎の三浦、五代目の時姫であつた。その後度々興行され、今日猶盛んであるが、近頃は前の時姫の豆腐買ひや、眞中の母の自害なぞは全部カットしてしまふのが通例である。これでは時姫がゐる理由も、高綱が來る始末も一向わからない。本書をお讀みになれば明瞭にわかるわけである。

安達藤三郎といふのは、重成を討つた安藤長三郎を持つて來た名である。富田六郎は本田佐渡守を當込んであるのだが、これは少し可哀さうだ。

本興行は、安政四年五月、森田座上演の時のもので、その役割は左の通り。

高綱（市川團藏）三浦之助（市川市藏）時姫（片岡愛之助）時政（中村歌雀）富田六藏（嵐冠五郎）母長門（森田是好）篝火（坂東佳好）おくる（吾妻市之丞）阿波局（松本にしき）讃岐局（片岡愛三郎）おらち（中村翫太郎）

鎌倉三代記

序幕

庄野宿陣所の場

役名――北條時政。土肥彌五郎。古郡新左衞門。
高綱妻、篝火。藤三女房、おくる。百姓、藤三郎。

本舞臺三間の間、高二重通し本緣付、見付大形金襖、軒口に三つ鱗幕を張り、上下落間柵矢來、いつもの所軍門を据ゑ、すべて庄野砦の體、爰に古郡新左衞門、土肥彌五郎、陣立の拵らへにて、二重に扣へ居る。時の太鼓にて幕明く。

〽急ぎけるされば北條時政公、一旦都を賴家とお和睦ありつるは、寛勇の密計にて、再び發る大軍に義時公の後詰をと、勢洲庄野にお着あり、泊りの陣所に相詰めたり。

新左　イヤ、この程より坂本の軍師佐々木高綱、やむ事を得ず我が君へ敵たふ所、御武運目出たき君のお勢ひ。

彌五　去るに依つて片岡造酒頭どのを使者に向けられ、和談あつてこの度の一戰は、暫らく駒を止められ、この砦に控へるも、敵の虚實を計らんため。

新左　それにつけ昨日この陣所のあたりにて、男にやつせし女武者、心得ずと捕らへ見れば、佐々木高綱が妻の篝火、察する所高綱手筈を授けし謀事に疑ひなし。假に獄屋へ入れ置きたれど、未だその意を糺さず、如何計らひ申さんな。

彌五　左樣でござる、女ながらも佐々木が女房、なか〲手ぬるい事では參るまい、水責めで落ちずば火責めに致し、白狀さすに如くはなし。

新左　イカサマ、僅か手勢の士卒にて、京家の軍配なす奴なれば、影武者ぐらいは恐かなこと、如何なる虚實を廻らすやら。

兩人　こりや評議いたさずば相なりますまい。

〽取り〲密談一間の内。

皆々　シイ。

ト奥にて近習小姓、靜謐の聲あつて

〽襖開かせ立ち出づる御大將時政公、お太刀を小姓に取

らせ、肌に小具足表には郡常の長袴、寛然として座し給へば。
ト正面より時政、先に立ち、後より小姓二人太刀と守り刀を持ち、後より近習二人、褥、煙草盆、脇息持ち出で、これを直し、よろしく住ふことあつて
新左 ハツ、我が君へ申し上げます。私し家來富田の六郎坂本の軍師佐々木高綱、その身土民と形を變へ、在郷にあるを召し捕つて參りし由、言上いたさんと存ぜしに、未だ實否も糺さず上聞に達すること。
兩人 差し控へましてござりまする。
〽聞きも敢ず時政公。
時政 すりや樣々と身を變じ、事を計る表裏の高綱、既にこの度の一戰も、造酒頭を持つて和睦に入れ置く卑怯な奴、身が直き〳〵に糺しくれん……ソレ、高綱を引き出せ。
新左 ハツ、委細畏まつてござりまする。
ト向うへこなしあつて
ヤア〳〵者ども、囚人これへ引き出せ。
軍兵 ハア……サ、キリ〳〵歩め。
〽ハツと答へて雜兵數多、押つ取り卷き、御前にこそは引き据ゑる。
ト時の太鼓にて、木綿やつし、繩つきの藤三を中通りの軍兵六人、これを引つ立て、舞臺へ來り
六人 下に居らう。
トこれにて軍兵よろしくある。
兵一 ハツ、先達て富田の六郎どの、召し捕りし坂本の軍師高綱を引き据ゑましてござります。
新左 ムウ、君に對して不敵の高綱、たとへ摩利支天の再來たりとも、運つき弓の絃切れゝば籠中の鳥に等しき端武者。
彌五 如何程智謀廻らして、形を匹夫と樣を替へ、影武者の手段にて、時政公を欺かんとも、なんとして〳〵。
新左 氣遲れせずと御前の目通り。
兩人 進み居らう。
〽と權柄づくに睨めつくれば、藤三はわな〳〵胴顫ひ、時政繩目を屹度見やり。
時政 ヤイ、繩付、面を上げい。
藤三 アイ。
〽アイと藤三はおろ〳〵聲。
ハイ〳〵、殿樣へ申し上げます、私しは北川村で藤三と

申す百姓でござりますが、昨日畑で働いて居りましたら、富田とか捕つ手とか云ふお方が、私しを取り卷いて、滅多矢鱈に捕つた／＼と云はしやるゆゑ、譯は何ぢやと問うたれば、イヤ小豆ぢやの笹豆ぢや高綱ぢやと、人にいろ／＼の異名をつけ、此やうに縛られて、この御陣屋へ參じました、もう堪忍してお返しなされて下さりませ。

〽詞しどろに詫びる顏、大將はためつすがめつ打ち見やり。

時政　ア、、誠に去年以來數度打ち取りし佐々木が影武者その面體に寸分違はず、ハテ、求むれば世に似た者もあるものぢやなア。

彌五　ハツ、それにこそよき手段あり、幸ひ昨日召し捕りし高綱が妻篝火、獄屋より引き出し、試みあつては如何ござらう。

時政　オ、、それぞ幸ひ。予が面前へ引き出せ。

〽仰せに彌五郎進み出で。

ト彌五郎、上手にこなしあつて

彌五　ヤア／＼者ども、召し捕り置きし篝火、これへ引き出せ。

ト上手の内にて

軍兵　ハア……きり／＼立たう。

〽呼はる聲にこれも又、いとゞ物憂き囚人の柳の姿腰細に、哀れ夫にも放れ鴛、丘に迷ひし氣色なり。

ト此うち上手より篝火、屋敷模樣片はづしにて、腰繩にかゝり、これを若い衆の軍兵四人引つ立て出て來り

軍兵　下に居らう。

藤三　ヤレ／＼嬉しや／＼、よい人が出て見えた。わしが顏一目見せたら、人と違へば直ぐに知れるであらう……サア／＼これへ／＼。

ト藤三、こなし、篝火はこれにて顏を見合はす。

〽云ふに篝火面を上げ。

篝火　お前は。

藤三　其方は。

篝火　佐々木高綱さま。

ト云ふをかぶせて

藤三　ア、、コレ／＼／＼、そりやア何云ふのぢや。おれが何で笹豆の小豆のと、わしや知らん／＼／＼、知らんわい。

篝火　サ、、佐々木とも高綱とも云はるゝ武者が、闇々と雜兵の手にかゝり給ひしか。

〽わつとばかりにむせび泣き。

藤三　ア、、モシ〳〵、わしやアそんな者ぢやない。マ、滅相な〳〵。オ、怖いお家さんぢや。お前のやうなお家さんを女房にして居る私しぢやない。サ、、トツトと、そちへ寄つて貰ひませう〳〵。

〽飛び退くれば。

篝火　イヤ〳〵、最早叶はぬこの場の仕儀、愛し可愛の一人子の、小四郎は先に立ち、千變萬化の計略も盡き果てたお身の上、サ、潔よう死を遊ばせ。妾も冥途のお供を。この期になつてあらがふは未練にござんす。高綱どの、エ、、時世に連れて心まで、左程卑怯になるものか。この上にまた如何程の恥かしめを見給ふか。

藤三　ムウ。

ト、この體を見て、詰めるこなし。

篝火　サア〳〵〳〵……時致どの、夫も我れも目の前で心の儘に成敗あれ。我が夫覺悟なされませ、佐々木どの。

〽わざと敵へ白露の佐々木と二世の夫思ひ、心遣ひぞせつたけれ。

ト篝火、勵ますことよろしく、藤三、空嘯き

藤三　エ、忌々しい、よう泣く女中ぢや。そして又冥途の供々、そりやア鎮靈殿の荷物の事でござりまするな。そんな覺えはとんとない。ほんに又この顔が、ひよんなわろに似た事ぢや。エ、面倒くさい。とんとモウ、相手にはならぬ。

ト腹立ちのこなしあつて

〽後へ退つてむつと顏、かゝる所へ表の方、お番の侍ひ罷り出で。

ト向うより中通り軍兵、走り出て

軍兵　ハツ、申し上げます。最前佐々木高綱なりと召し捕りし者の女房、お願ひの筋ありとて、御門前にて泣き入り、追ひ返さんと嚴しく申せども、推して願ひますが、この儀如何計らひ申しませう。

新左　ムウ、それぞ詮議の御捌き手筋。これへ通せ。

軍兵　北川村藤三が女房、これへ出ませい。

ト花道より向うへこなし。これより揚げ幕の内にて

くる　ハイ〳〵、只今それへ參ります。

〽取り次ぎの聲聞くや否、藤三が妻走り入つて夫の側。

ト向うより女房おくる、やつしの拵らへにて走り出て、直ぐに舞臺へ來り、藤三と顏見合せ

藤三　オ、嬶か、先刻から待つて居た、よう來てくれた

てくれた。

くろ　オヽ〳〵、こちの人か、嬉しや〳〵。どこも怪我はなかつたかえ。

藤三　イヤ〳〵、よう來てくれたな……サア〳〵〳〵、こちの嬶が來たに依つて、モウこれからは百人力ぢやぞ。イヤ〳〵千人力ぢやぞ。でもマアよう來てくれたなア。

くろ　お前もマア、無事で喜ばしやんす顏見て、こんな嬉しい事はないわいなア。

ト兩人よろしくあつて

〽喜び合ふぞ道理なり、おくるは御前見廻して。

ハイ〳〵、お殿樣へ申し上げまする。この人は藤三と申して、こちの主でござります、これは定めし人違ひ、どうぞ助けてお返しなされて下さりませ。

〽詫びる女房こなたなる佐々木が妻は胸に釘さし、俯向いて居たりける、御大將はあざ笑ひ。

時政　ホヽウ、左こそあらん〳〵。いかに運つきればとて富田如きが手にかゝるべき高綱ではよもあるまじ。去年合戰眞最中、佐々木が一子に小四郎が、彼の似せ首を見て父にもてなし、愁歎して切腹したる健氣の計略、ハヽア流石は女、今また土民を見て我が夫かとは、ハヽア……コリヤ篝火、その計略ではモウ行くまい。又ぞろこの時政を欺かんと今のしだら。エヽ死太き女が企み事、誠にわれは鐵面皮。

〽飽くまでの嘲弄に篝火は、無念涙にくれ居しが、やうやうに顏をあげ。

篝火　エヽ口惜しや時政どの、折角夫に大切な謀を受けながら、此やうに生捕られ、恥かしめを見る無念さ、あの者を夫と云ひ立て、不便ながら命を取らせ、こなたに油斷をさせうと思うたに、證據の出るは運の盡き、和田三浦佐々木の三人も、こなた一人を打ち取らんと、身を粉に碎き付け狙へども、天の助くる不思議の大將、如何なる軍法計略も、天運には叶はぬか。チエヽ口惜しい。

〽思へば無念と大將を見やる目にさへ浮き涙、保ち兼ねてぞ見えにけり、女房おくるは差し出でゝ。

くろ　ほんにマア、去年からその笹餅さまとやら、高い綱ぬきどのとやら、その人にかゝつてきつい災難ばかり、ハイ、主をどうぞお返しなされて。

〽問はず語りの詞のはし、時政公眉をよせ。

時政　ムウ。すりや何と申す、去年もその汝が夫怪しき事ありつるか。サ、近く寄つて委細を語れ……ソレ、藤三

が縛しめ赦されよ。

新弼　ハツ……ソレ暫時、縄目を。

軍兵　ハツ。

〽鶴の一聲忽ちに野鳥の水呑み百姓、縄目助かり御前に向ひ。

ト此うち中通りの軍兵、銘々藤三が縄を解くことあつて

藤三　ヤア、縄解いて下さつた、有り難い〳〵。嘆、こんな嬉しい事はないわいの。

くる　ほんにさうでござんす。わたしやどうなる事と思ふたが、縄目も赦りて、こんな目出たい事はない。

藤三　コレ、殿様やお役人様へお禮申せ〳〵。

くる　ハイ〳〵、二人の者の身に取りましては。

兩人　何程か有り難うござりまする。

〽悦び合ふぞ道理なり。

時政　ヤイ匹夫よ、今其方が人違ひにて、怪し事とては如何なる事ぞ、サア、包まずこれにて申せ、どうぢや〳〵。

〽尋ねにハツと進み出で。

藤三　サア、そのお尋ねなさる譯と申しまするは、去年の事、オヽ、ソレ〳〵、大雪の降つた時、畑から戻り道、大勢の侍ひが思ひがけなう私しを乗り物へ捻ぢ込んで、何所へ行くとも知らばこそ、屋敷の内へ入るや否、旦那らしいわろがツッと出て、わしが顔を眺め、ムゥよく似た、ハテよく似たとサア、無性矢鱈に譽めそやし、それから毎日々々お振舞ひ、米の飯に鯛や鱧、喰ふ程に〳〵、これは〳〵ゑろい御馳走、まだその上、サア鐵砲を打て習へ、イヤ馬に乗れの弓引けのと、みんなわしが知りもせぬ事ばかり。其やうな事は怖うて〳〵出來ぬと云うたれば、侍ひ衆がくわつと睨みくさつて、ヤア此奴顔はよく似たれど役に立たぬ大馬鹿者めと、また乗り物へ突つ込んで、街道筋の辻堂へ打ち明けて去に居つた、どうでもアリヤ天狗殿の所爲か、但しは村中で話のある、れきまに撮まれたのか、イヤモウ、よう若衆になりませなんだ、ハイ。

くる　モシ、どなたもあの通りでござります。主は生得云ひ下手で後や先、どなたもよいやうにお聞きなされて下さりませ。

時政　オヽ、委細は殘らず聞き居けた。汝もその佐々木が影武者に取り寄せたに疑ひなし。

藤三　ハイ〳〵、御詮議が濟みましたら、どうぞ私しはお

返しなされて下さりませ。
ト藤三、立ちかゝろ。彌五郎、きつとなつて
彌五　ヤイ〳〵匹夫め、待ち居らう。
藤三　ヘイ。
ト蹲まろ。彌五郎、時政にこなし。
彌五　イヤナニ我が君、佐々木に似たる此奴、この儘歸しても苦しうござりますまいか。
時政　その面體が似たるゆゑ、この上にも猶紛らはし。ソレ者ども、向後佐々木と紛れぬやう、土民めが面體に、しつかりと入れ墨いたせ。
〽藤三夫婦は聞いて恟り。
くろ　アノこちの人の顏へ印をおつけなさるゝとな。そりやあんまりお胴慾ぢや〳〵。モシ、お役人樣、お詫びなされて下さりませ。
〽妻の願ひに土肥の彌五郎。
彌五　ヤア、ならぬ〳〵、慮外なる下郎め等、高綱に紛ると、われが命はすたりもの、それが却つてわれがためだワ。
新左　コリヤ、命代りの入れ墨は我が君のお情、有り難き仕合せと、二人ともに三拜し居らう。

藤三　モシお殿樣、そりや御卑怯でござります、今も今とて譯を云へ、云うたら放してやると、わしを欺して聞いた上、却つてこの身を入れ墨とは、そりやあんまり酷うござるわいなう〳〵。
くろ　サア〳〵、尤もでござんす〳〵。モシナア、主の云はしやんす通り、どうぞお二人樣の取りなしにて、入れ墨ばかりは。
兩人　お赦しなされて下さりませ。
ト藤三、おくろ、詫びろ事よろしくあつて、彌五郎、キツとして
彌五　ヤア、又してもびろ〳〵と構ひ事、君の御意が反古にならうか。
藤く　そんならどうでも。
彌五　知れた事だワ。
トきつと云ひ放す、兩人泣き落す。
藤く　ホ、ホイ。
ト新左衞門は若い衆の軍兵にこなし。
新左　ソレ、篝火は獄屋へ引き立てい。
軍兵　ハツ、きり〳〵立たう。
〽ハツと答へて繩取に引立てられて篝火は、企みし甲斐

も泣きしほれ、如何なる憂きや重るらん、心一つに物案じ、獄屋の方へ歩み行く。

ト若い衆の軍兵、篝火を引つ立て、上手へ入る。

新左　ソレ、藤三めに入れ墨の用意いたせ。

軍兵　ハア。

〽いざ入墨の刑罪と、數多のあらしこ藤三を圍み、用意の懷劍三つ目針、立ちかくれば飛び退きて。

ト軍兵銘々入れ墨の道具、硯箱など出し、藤三を取り巻く。おくろはあせる仕組よろしく

藤三　ア、コレ／＼、マア／＼靜かになされて下さりませ／＼。腹の蟲にも得心させます。

ト軍兵を宥め、おくろが側へ寄らんとして

コレ嚊ア、死ぬるよりはましであろ。入れ墨と云ふものは定めて痛いものであらう。わしが側について居てくれ、そして皮切はしつかりと押さへてくれ。

くろ　ハイ／＼、そりや呑み込んで居るなれども、生れもつかぬ片輪になると、思へば／＼愛しいわいなア／＼。

軍兵　エ、女め、トットと退き居らう／＼。

くろ　ア、モシイナア、手荒うせずと勞はつて下さりませ。

軍兵　エ、、動き居るな／＼。

〽銘々寄つて兩手も頭も引つ掴み、動くな／＼と云ふうちに、額をすつぱり一刀。

ト軍兵、藤三に入れ墨をする事よろしくあつて

藤三　アイタ、、、。

〽聲に女房が側からハア／＼、侍ひは淺慮會釋も釘の先、痛さも肝にこたへ兼ね、仕あげの藍墨べつたりと、額に印の我が入墨、妻が思ひは淺からぬ。

ト藤三、軍兵に突き放され

アイタ、、、ア、嚊、痛いワ／＼。

くろ　コレ／＼、こちの人、氣をしつかりと持たしやんせコレ、藤三どの。

藤三　オ、、嚊か／＼。水一つくれい／＼。

〽幸ひ淺間の萬金丹。

トこれにておくろ、巾着より萬金丹を出し、下手にある手桶の水を柄杓にて汲み取り、これを飲ます事、介抱する事あつて

くろ　モシイナア、氣が付いたかいなア。どうやら付いたさうな。

ト介抱に從ひ、藤三はだん／＼心づき、藤三は入れ墨

の顔に變る。

藤三　オヽ、ヤレ〳〵痛かつた〳〵、今だに後がびり〳〵する……したが嬶よ、よう似合つたか。ちよつと顔を見てたも。

くろ　お前もマア、よい氣な事ばかり、腹の立つ〳〵。

〽痛さを忘れし出かし顔、元服したる心地なり、新左衞門は御前に向ひ。

新左　ハツ、仰せの如く、藤三が面體に入れ墨いたしましてござりまする。

時政　オヽ、過分〳〵……それは格別、先達て申せし娘時姫の儀は如何いたしした。

新左　ハツ、この度の大軍も十に七つ味方の勝なれども、爰に一つの心がゝりは、時姫君お心をかけられし三浦之助が母の閑居、絹川村にまします由、敵地に御座あるその時は、お命の程危し〳〵。お歸りあるやうに、コレ、彌五郎どのにも思慮あるべし。

彌五　オヽ、サ、我れ〳〵お迎ひに參つた上、お聞き入れなき時は、すご〳〵戻らば役目の恥辱、この儀はコレ幾重にも、女儀の業にて然るべし。

新彌　この上御賢慮の程仰ぎ奉る。

〽主從三人眉に皺、評議取り〳〵なる折柄、かたへに扣へし百姓藤三、始終を聞いてそろ〳〵と、御前間近く蹲まり。

ト始終を聞いて、藤三はこの時進み出で

藤三　ヘイ〳〵、お殿樣へ申し上げます、只今の御相談なされましたお話し、ちよつとあれにて聞いて居りましたが、それに付いて私しが思ひ付きがござります。

〽と云ふを打ち消す土肥の彌五郎。

彌五　何を痴事。わい等如きが分際で、御評議の席、御前間近く無禮千萬、すさり居らう。

トきつとこなし。

〽と睨め付くれば、暫しと大將聲をかけ。

時政　ヤレ待て彌五郎、匹夫たりともその志しを奪ふべからず。何か只今の評議につき、汝が存ずる仔細あるとや。ホヽウ、しほらしゝ。何事なるぞ。サア、間近く寄つて申して見やれ。

〽仰せに藤三は手をつかへ。

トこなしあつて

藤三　ヘイ〳〵〳〵、左樣ならお殿樣、御免なされて下さりませ。

ト前へ出る、合ひ方になる。

只今あれに居りまして、ふと思ひつきました。

トこなしあつて

マア申して見ませうかい。兎角お前様方は、第一お智惠が多いで、御料簡が腹の內で斯う〳〵ぐんじゆします。高が今のお姬様が絹川村のその貧家に腰据ゑてござるのぢや。婆一人居る內へ、お前方が仰山に、鎗や長刀でござるゆゑ、何の彼のとむづかしいに依つて、この私しをおやりなさると向うにも氣が付かず、所を何の苦もなうお姬様を、引つかたげて戾りまする。どうぞこのお使におやりなされて下さりませ。

トよろしくあつて、合ひ方は消す。

〽思ひ切つたる願ひの筋、土肥古郡も詞なく、大將につこと笑ひを含み。

時政　ホヽウ、出かした〳〵、姬一人取り返すに、名ある侍ひを用ゆるは、鷄を裂くに牛の刀とやら。歸り來らば手打ちにする時姬、首尾よう汝連れ歸れ。殊に時政が使なれば、今改めて苗字をくれん……なか〳〵思案のある奴、まさかの時には一方の役にも立つべき、ムウ役に立つ。ムウ只今より安達藤三郎と名乘り、雜兵組の頭と取り立て得さすぞ……ソレ、物具取らせい。

新左　ハツ……我が君よりの御賜物、有り難く頂戴いたせ……ソレ。

〽ハツと近習が取り出す物具。

ト近習奧より廣蓋へ具足一式、小手脛當、陣笠、載せ、一つの廣蓋には厚綿水波み半纏、帶、一本差など乘せて出し、軍兵に渡す。軍兵これを藤三が前へ直し置く

藤三　コレ〳〵嬶、悅べ〳〵、御大將樣が御褒美ぢやとて物の具衣服を下さつた。悅んでござれ〳〵。

くろ　サイナア、これと申すもお前の日頃から律義ゆゑ、正直の頭に神佛のお蔭でござんせう。

藤三　まだ〳〵頭分にお取り立て下さるといやい……コレコレ軍兵衆、爰に居るはわしが嬶ぢや。心安うして下され、そして洗濯物でもあるなら、さしてやつて下され…………コレ〳〵嬶、手傳うて着せてくれ〳〵。

くろ　サ、手傳ひは手傳ふけれど、わたしは百姓の女房ぢやに依つて、むづかしい物の具ぢやの、著くるしいこの丹前の着せやうを、こちや知らぬわいの。

藤三　こりやアおれが惡かつた。そんならコレ、お前方も今日から仲間ぢや。手傳うて着せて下され〳〵。

軍兵　オヽ〳〵、合點ぢや〳〵。
藤三　サア、嗅も見習ふため、手傳うてくれ〳〵。
くる　アイ〳〵。
〽思ひがけなき士民が手柄、鑷のこけ込みすべたのひん、面目身にぞ餘りける、伺候の侍ひさし心得着せる具足をとも〴〵に、知らぬながら〳〵嬉しげに、妻も手傳ふ端武者の扮裝。
ト此うち軍兵六人、捨ぜりふにて手傳ひ、藤三に具足を着せる。女房も共に手傳ふこと。藤三、身拵らへよろしくあつて
軍兵　ハツ、今日より我れ〳〵が組頭、安達藤三郎どの、お役目御苦勞に存じまする。
藤三　オヽ、皆の者大儀々々……サア〳〵〳〵侍ひぢや侍ひぢや。モウ怖いことも何にもない。コレ〳〵嗅ア、譽めてくれ〳〵。
くる　サイナア、今までの藤三どのとは事變り、男前と云ひ、なか〳〵見上げたものぢやわいなア。ヨウ〳〵、こちの人〳〵。
藤三　煽て居るな〳〵、殿様の御前ぢやわい。
藤く　ホヽハヽヽヽ。

ト捨ぜりふあつて、藤三もこなし。
藤三　併しながら殿様へ、あなたの前ぢやが、このマアお姫様は、餘つ程なしり深ぢやわい。こちらへお歸りなされても、お手打ちとあれば所詮命のないお方なりや、なんと物は相談ぢやが、首尾ようそのお姫様を連れまして戻つたら……アノ〳〵ヘヽヘヽヽ、ソレ、女ぼんに下されませ。
ト恥かしさうにこなし。
〽ほつかり云へば女房おくる。
トおくるはキツとして、藤三が側へ寄り添ひ。
くる　コレ、お前はなア〳〵。一體そりや何を云はしやんすのぢや。アタ滅相な埒もない、爰な惡性男め。
ト云ひかけて、あたりを見廻し
ホヽハヽヽ。モシ、殿様も今云ふたこと、必ずお腹を立てゝ下さりますな。
ト皆々へ會釋して、また藤三に向ひ
にんにマア、氣が違やせぬかいの。上様のお姫様、女房にせうとは勿體ない。やう〳〵今助つたこの命、又ひよんな事し出して、お前の身の上に悪るからうぞえ。あんまり呆れて物が云へぬわいなア。

藤三　エヽ、構ひ居るな〳〵。おりやなア、モウ今日からキツとした〳〵、武士のものゝふぢやぞ。今からわれがやうな在所くさい、アノ日向臭い、そしてアノ青臭い悋氣女房は否ぢやわい。エヽ、そつちへ行け〳〵。

　トきつと叱りつけ、また時政にこなしあつて

どうぞモシ、今願ひましたお姫樣をな。

〽願へば時政打ち頷き。

時政　手打ちにすべき不義の娘、いかにも聞き入れ汝にくれるも則ち成敗、連れ歸りなば其方が心任せ。又この懷劍は疑覺と名づけし祕藏の一振、姫これを見知りあれば、時政が使の印に持參いたせ。

　ト小姓に持たせし守り刀を差し圖して、藤三に渡す、取り上げて

〽持參いたせとたび給へば、藤三は心にしたり顏。

藤三　イヤモシ、お氣遣ひなされまするな。首尾よう仕負せ歸りなば。

時政　その時こそは姫は汝に遣す程に、猶豫いたさず三浦が閑居へ。

藤三　しかと心得奉公始めに。

時政　納得の上は安堵いたした。

藤三　どりやお暇申しませう。

〽行かんとするを、女房おくるは縋り留め。

　ト藤三、守り刀持ち、こなしあつて、行かんとするを、女房立ち塞がり

くる　コレ、爰な氣違ひ男、アノ眞實に姫君樣を、女房にする心ぢやの。

藤三　オヽ、する〳〵〳〵するわい、女房にしたら何とする。

くる　何とするとは胴慾ぢやわいなう〳〵。ほんに人よりは愚鈍なゆゑ、子を育てるやうにして辛抱した女房を持てゝも、世間へ立つかいなア〳〵。

　トきつとなつて、おくる、藤三を引き留めるを

藤三　オヽ、立つ、立つとも〳〵。お姫さんの事思うたらゑら立ちに立つてある。

くる　エヽモウ悔しい〳〵、腹の立つ〳〵。

　トおくるはやらじ、藤三は振り切らんと爭ふことあつて

藤三　コリヤ、どうし居るぞい〳〵。其やうに引ツ張り廻ると、具足着て居るに依つて縛けるわいやい……アヽコレ皆の衆、引き摺り放して下され。

皆々　オヽ、合點だ〳〵……サア〳〵、爰放した〳〵。
藤三　退いた〳〵、退き居らぬか。
〽退いた〳〵と突き放せば、悋氣のほむら逆立てゝ、また駈け寄るを制する軍兵、藤三は妻に目もかけず。
藤三　ヤア〳〵者ども、お姫を送つて戻るうち、茶漬の菜に味いもの、澤山喰はせてくれよかし。
トのりにて、よろしくあるべし。
皆々　畏まつてござりまする。
時政　時刻移さず早う立て。
藤三　ハツ。
〽ハツとばかりに一人して、呑み込む歎きは計略の道は戀路か妻鳥を、見捨てゝ輕き足取りも、行儀正しく拍子取り、勇み進んで。
ト此うち藤三、身拵らへして、寢覺丸を持ち文句に合はして、よろしく軍兵はおくろを制して居ろ。二重に時政、こなしあつて
時政　はや行け。
藤三　ハツ。
〽隱れ家さして急ぎ行く。
ト三重へチヤン〳〵をかぶせ、この仕組、藤三は向うへ入ろ、よろしく

ひやうし幕

大詰

絹川村閑居の場

役名――三浦之助義村。同母、長門。阿波の局。讃岐の局。在所娘、おらち。藤三女房、おくる。北條息女、時姫。百姓、藤三郎 實ハ佐々木四郎左衞門高綱。

本舞臺、三間の間、常足二重、正面鼠壁、上手へ寄せて襖を建てし押入れ、眞中に三尺の暖簾口、上手一間の障子屋體、いつもの所に門口、下手藪疊、この前に松の大樹、栗丸太にて組し井筒、此うちに勝手元の道具、竈、流し、膳棚、廻りよろしく取りつけ、すべて、絹川村、三浦之助佗住居の體。爰に二重の上手に三浦母長門、病ひ鉢卷、夜着に凭れ居る見得。おらちその下に在所娘アの拵へ、茶を呑んで居ろ。藤三女房おくろ、世話女房にて小風呂敷に包み重箱を側に置き居る。この脇に焜爐に藥鍋をかけ盆の

上に重箱と茶碗など、とり散らしある體。麥つき唄にて幕明く。

らち　ヤレ／＼、御馳走のはつたい茶、たんと呼ばれましたわいの……マア／＼今日は婆さんも、この中にない氣のかるさ、目出度うござります。今云ふ通りこのおくる女郎は、わたしを知る邊に賴りへござつた一人住み、これから何事に依らず遠慮なう賴まつしやれ。ハテ、それが相長屋の相互ひと云ふものぢや。

くる　ほんに、おらちさんの仰つしやる通り御病人の御不自由なに、不調法ながらお手傳ひ申しませう。久しいお煩ひかして、きつうお窶れなされました。さぞ／＼御難儀でお出でなされませう。

ト持つて來りし重箱へこなしあつて

これはおかしな品ながら、ほんの宿茶の印しばかりお目にかけまする……なんなとお口に合うた物おあがりなされて、早う御本腹なされませいなア。

長門　ほんにマア御深切に忝ない。わしが息子は主持ち奉公の身はまゝならず、便り音づれは絶えたれど病氣と聞いて殊勝らしい、この間から來て居る嫁のお時、孝行にしてくれますれば、モウ何不自由も致しませぬが、長い長いお世話になつた御近所の衆、なんぼ御馳走申しても飽きがない。おらちさんは酒好き、一つ上げるとて嫁が買ひに行きました。マア／＼、緩りと遊んでいて下さりませいの。

らち　なんぢやえ、わしに酒を振舞ふとえ。テモマアわつけもない事云うてぢやなア。ハ、、、。したがマア酒とあれば御病氣の直り口、こんな目出たい折りからぢや、口祝うて歸りませうかえ。併しマアこの中でお氣の毒ぢやなア。

長門　なんのいなう、わしが病ひは持病の癪と、何や彼やが積つてのこの病ひ、モウどうで本腹はいたしませぬ。それゆゑ、お暇乞ひやら、お禮やら。

らち　ア、、婆さん、なんぢやぞいの、このマア目出たいのに、そんな事云ふ者があるものかいの、まだマア、腰、膝の拔ける年ではなし、追つつけ達者に本腹の出立酒……イヤ出立とは病人には悪縁の悪い事、ハ、、、、イヤモシ、必ず氣にかけて下さるなえ。ほんにモウお前は日頃から結構なお人ゆゑ、この世から佛顏がするわいの。目出度い／＼。時に酒が來たらはかゆきに冷がよからう。

くる　もしいナ、冷では毒でござんすぞえ。

ちち　アヽ、冷が惡けりやア燒いて貰はう。マア酒の來る間、奧でごろりとやつてこまそ。

ト立ち上がる、おくるもこなしあつて

くる　ほんにわたしも仕かけた用事、また出直して後ち程お見舞ひ申しませう。左やうならお袋さん。

長門　これは好う見舞うてござつた。

ちち　そんならおくるさん、お歸りかえ。

くる　ハイ、大きにお前、お世話でござりました

ちち　お前も目出度い、南無阿彌陀。こちも目出度い南無阿彌陀。

〽べり〳〵喋りの氣の毒さ。

くる　ホヽヽ、ほんに可笑しい、おらちさんではあるわいの。

〽笑ひ笑うて女同志、奧と口とへ出て行く。

ト此うち、おらちは奧へ入る、おくる門口へ出て隣へ入る。

〽夏野の千草踏み分けて武家の裲襠堆高き、二人の女﨟戸口にさし寄り。

トこの文句にて、向うより阿波の局、讃岐の局、片外し、裲襠衣裳にて出て來る。後より若い衆の絹羽織、袴、股立の侍ひ二人つき添ひ出て直ぐに門口へ來て、阿波の局、侍ひに、門口へ案内せよとこなし。侍ひ心得こなしあつて、門口へ來り

侍ひ　誰ぞお頼み申す、三浦之助さま御母公のお宅はこれでござりますかな。

〽訪づる聲に起き直り。

長門　如何にも私しが三浦が母、先づ〳〵これへ。

阿讃　左やうならば、お許し下されませ。

〽しづ〳〵と打ち通る。

ト此うち、局、兩人内へ入り、母にこなしあつて

長門　シテ、何方より、何用あつてお出でなされしぞ。

讃岐　われ〳〵どもは鎌倉の奧を勤める阿波の局、讃岐の局と申す者。

阿波　こなたに北條家の御息女時姫さまがお渡り遊ばすよし。

讃岐　姫君お迎ひの爲いでましてござりますれば、姫の御座所へ。

局兩　御案内下されませう。

〽とありければ、騷ぎもやらず打ちほゝ笑み。

ト母思ひ入れあつて

長門　ムウ、さては鎌倉から、時姫の迎ひにお出でか。オヽ、はる〴〵の所御苦勞さま……したが、イザお渡し申さうと申したけれど、時姫は三浦之助が女房、妾が嫁、暇の状を遣さぬその先は、滅多に鎌倉へ歸しませぬが、また例へお逢ひなされたとて、姫は歸りは致しますまい、折角お出でなされたのにお茶でも呑んでお歸りなされ。
〽横にころりと取りあへず、二人の局は顔見合せ。
讃岐　サア、たとへあなたが如何やうに仰つしやつても、鎌倉よりの上意なれば是非ともに。
阿波　お供申して立ち歸る……先づお姫さまには何方にお渡り遊ばすぞ。
長門　アノ、嫁女は今客があるゆゑ、酒買ひに行きましたわいの。
讃岐　テモマア、興がる御有樣。
阿波　そんなら今にお歸りならん、ドレ表の方を。
ト門口へ出て、向うを見て
ほんに、アレ〳〵向うから、お歸りなさるが姫君ざま。
讃岐　ドレ〳〵……ほんに、あなたは姫君ぢや……ソレ、二人の者はお迎ひに。
侍二　ハッ、畏まつてござりまする。

〽ハッと答へて駈け行く侍ひ、二人の局は門口の土に平れ伏ししい〳〵と敬ひ請じ奉る。
ト侍ひは向うへ入る、局二人は門口に土に平れ伏して出迎ふ事よろしく、向うにて、ハイホウの聲、これをきつかけに床に被せて鳴り物下り端になり。
〽錦閨の花の時姫も時に連れ添ふ夫ゆゑ、前垂れ襷かけ徳利角な豆腐に丸盆のそぐはぬ家來が長柄の日傘天鵞絨覆ひの薙刀持ち、近習小姓四方を守護しあたりを拂つて見えにけり。
ト向うより以前の侍ひ二人先に立ち、後より時姫丸盆に豆腐を載せ、酒の徳利を持ち出る。後より若い衆の侍ひ、長柄の傘をさしかけ、その後より上下侍ひ、菖蒲皮、股立侍ひ、二人、仲間何れも行列にて花道へ留まる。門口に控へし局、兩人こなしあつて
讃岐　ハッ、姫君さまへ申し上げます。御父時政公よりお使ひとして、われ〳〵兩人。
阿波　參上仕つてござりまする。
〽と述べければ。
時姫　オヽ、さう云ふは讃岐の局、阿波の局、無事にてあつたなア……たび〳〵父上よりお召しあれど、姫御前は

夫の家を家とせよと、つね／＼の仰せを守る自らに、今更歸れとは、父上のお詞とも覺えず、殊に姑御のおわづらひ、御介抱の暇なければ再度歸る心はないわいの。その通り申し上げてたも。大儀々々。

〽とばかり愛想なき庵へこそは入りにけり……仰せのうちより。

ト時姫こなしあつて內へ入る、この時上手家體の內にて、老母咳入るこなしあつて、家體の內にて

長門　嫁女々々。

ト呼ぶ。時姫こなしあつて

時姫　ハイ／＼／＼、又お咳でござりまするか。テモマアおとましいこの御病氣……ほんにお藥が出來て居りまする。上げませうかいなア。

〽詞もいつか下司なれは、埃すぶれの藥鍋、心の水晶清水燒き。

ト藥鍋、盆に茶碗を載せ持つて立ち上がり

風があたらばお身の毒、障子を立てゝ置きませう。

ト上手の家體へ入り障子を閉める。

〽眞實あつき宮仕へ、局も詮方顏見合せ。

讃岐　なか／＼一應では御得心はござりますまい。

阿波　たとへ、お歸りないとても、われ／＼はこれに止まり、姫君のお側の御用を勤めずばなりますまい。

讃岐　如何にも左やうでござりまする。併しながら召し連れ參りし供の者、これにあつては、なんとやら。

ト思ひ入れあつて門口へ來り供廻りに向ひ

皆の者には御前に叶はぬ。庄家方に扣へてよかろう。

皆々　ハツ、畏まつてござりまする。

〽と下知に隨ひ下部ども、庄家を指して立つて行く。

ト供廻り殘らず下手へ入る。

〽折りしも姫は一間を立ち出で。

ト上手より、時姫出で

時姫　局おぢや。

讃阿　ハア。

ト兩人、時姫の前へ來たり手を仕へ

何御用でござりまする。

時姫　イヤなう二人の者、これなる內に居るならば、館の內とは事變り詞遣ひも違ふぞや。時姫ぢやの、お姫さまのと云ふまいぞ。お時さんどうなされい、斯うなされいと、輕う云ふのがこの家の格式、よう覺へて居やいなう。

讃岐　ハア……モシイなア、阿波さま、今から姫君さまの

お名を、お時さんと申せとの御上意でござりまするぞ。

阿波 なんと仰つしやる。只今よりお時さんと仰つしやれとの御上意でござりますか。

時姫 それ〳〵その御上意が、モウ悪い。不調法な事ではある。

〽不調法なと云ひ敎ゆる、姫もまだらの染め分けつゝじ暖簾押しあげ、おらちが奧から大欠伸。

ト奧より以前のおらち出て來り

らち テモ、マア、淵相待たす事……コレ嫁御、この酒はいつ呑ます事ぢやぞいの。

時姫 ほんにマア、私しとした事が、お客をもうけて置きながら、ドレ、九獻あたゝめてお盃あげませう。

ト立ちかゝる。

うち ア、コレ〳〵〳〵、イヤモウ燒く間は待つても居られまい。マア石で一つ行かうわいの。石をかさんせ〳〵。

〽と二つ名のある、てんば嚊、藥茶碗できゆつと呑み。

トおらち、こなしあつて側にあり合ふ茶碗、徳利を引き寄せ手酌にて呑む事。局、兩人これを見て顏見合せこなし、姫も思ひ入れ

〽口から出しだい。

時姫 コレ、二人の者、あなたのお詞使ひ、よく聞いて置きやいの。

讃岐 ほんに、下々のお詞は、また格別なものでござりまするなア。

阿波 左やうでござりまする。アノこのお家ではお盃を石と申しまするでござりまするか。

時姫 ほんに盃を石と云ふは、自らも初めて聞きましたわいの。

らち ア、コレ〳〵、こなさん達は又してもみづからみづからと云ふけれど、みづからや、梅干で酒が呑めるかいの。そしてマア腹がきつう後へ寄つた。モウ夕飯時分ぢや。なんと、しやりはあるかえ。

時姫 しやりとは、なんの事でござりまするえ。

らち エヽ、しやりとは〳〵辛氣な嫁御ぢやなア。コレ、御膳があるかと云ふ事ぢやわいの。

時姫 ア、アノ、打ちまきの事でござりますかいなア。

らち なんぢや、糯はわしはきらひ、五文どりはないかいの。

時姫 ごもんどり、ソリヤ、どんな鳥でござりますえ。

ト解らぬこなし。

ちち　オホヽヽ、コリヤ、一向解らぬ出入りぢや……ムウ、幸ひ爰に先刻の宿茶が。

ト幕明けにおくろが持つて來たる重箱を取り出し皆々へ持ち行きすゝめる。皆々喰べぬと云ふこなし。

ア、、皆の衆はおいやかえ。そんならわしが喰べませう。

ト本物の餅を喰ふ事あつて

サア〱、お時さん、これから飯もお汁も、ちやつとちやつと仕掛けんけりやならんぞえ。

時姫　アイ〱。

〽アイ〱〱と立ち給ふ側に局が會釋して。

讃岐　勿體ない、あなたさまに左やうな事を。

阿波　御膳番の儀は不調法なれども、私しどもに仰せつけられ下されませうならば

讃阿　有り難う存じまする。

時姫　イヤ〱大事のお客、其方衆に云ひつけては、母樣への疎略になる。わしが直々するわいの。

〽わしが直きにと膳棚のおむし擂り鉢木枯しの風にもあてぬ育ちにて繪にさへ見ざる賤の業。

ト時姫こなしあつて、膳棚より擂り鉢、擂粉木など取り出だし擂らうとする、不器用なるこなし。おちちこの體を見かね

ちち　おとましや〱。擂粉木の持ちやうも知らず。ほんにマア、よう殿御を抱いて寐やしやるぞ。ソレそこな女子衆も後から煽ぐ手間で、ソレ緣を持つてやらんせ。擂鉢が逃げ歩くわいの。ドレわしが、擂つてやりませう。

ト此うち皆々立ちかゝり、よろしくこなしあつて、トヾおちち片肌脱ぎになる。

〽おれが擂らうと、片肌脱ぎ、一人ぐわら〱口やかましさ、隣り姑逆はず、桶よ、柄杓よ、さま〲の名も聞き初め、天人のおり井の清水立ち寄つて、汲むとも馴れぬ水仕の手業、返りかねたる釣瓶繩、戀路に思ひ參らせ候の筆より外に持たぬ手に、どうかしぐやら、しらげる米、心ばかりに果しなき。

ト此うち、おちちは味噌を擂る事阿波の局は擂鉢を押へ居る、讃岐の局は釜の下を焚く事、おちち、それぞれへ指圖して、させる、何れも不器用なるこなし。時姫は米炊桶へ米を入れ、門の井筒へ行き米を磨がんと水を汲む事、不器用なるこなし。おちち見て立ち出でて

らち　ヤレ、情けない、それで飯になるものかいの。そんな事では貧乏世帯は合點が行かぬ。サア／＼そんな事ぢや行かぬ／＼。マア水の汲みやうから教へてやりませう……ソレお時さん、よう見ておかんせ。

ト釣瓶の繩を取つて

コレ／＼、車釣瓶とは違ふぞえ、繩釣瓶と云うて斯うくるくると掻き廻して、ソレ斯う汲むのぢや。ソレ／＼斯うお手々をやつて、くる／＼と廻して流すのぢや。

ト米を磨ぐこなし、本水にてよろしく

これを、かしきと云ふわいの。嫁御合點か、やつしつし、しゝやつしつし。

ト米を磨ぎかけ内へこなしあつて

ソレ／＼／＼、茶釜の下をさし燻べたり、しゝやつしつし。

ト米を磨へ、内へこなし。

ソレ／＼／＼豆腐も疾から切つてあり、やつしつし／＼／＼しゝやつしつし／＼／＼。アヽ、扨ても／＼扨つても世話な嫁御寮、これから仕かけの傳授の段、素人のうちは眞中へ、柄杓を一寸斯う立てゝ。

ト釜へ仕かけるこなしあつて

と見たる所が水加減……これより飯の炊きやうは、初めちよろ／＼中じはつく、ぢや／＼時に火を引いて赤子泣くとも蓋とるな、則ちこれが極意なり……ヤレ／＼、モウこちの内へ呼ばれて來て、ほつかりと草臥れた。サ、息つぎに一ぱい仕りませう。

トよろしくあつて、件の德利を取り茶碗へ注ぎ見て

オヽ、コリヤどうぢや、小半かして、モウ皆になつた、モウ少しはずまんせ。ア、これもお前方では埒があくまい。おれが行かずばなるまいわいの。コリヤマア、お客ぢやなうて飛脚ぢやわいの。

〽德利片手に片襷、呟き／＼出て行く。

トおらち、こなしあつて件の德利を持ち走り入る。

〽後は主從水入らず竈の局飯炊姫、脊は燻りとも燃えかねる雜木に辛氣わくせきと。

ト局、兩人姫へ飯拵へする事。一間内にて、老母咳入る聲する。

時姫　オヽ、また母さまにはお咳でござりまするか。ドレお脊中なと撫つて上げませう。

〽片時忘れぬ孝行の心は感じ入りながら。

ト時姫藥鍋、藥茶碗持ち一間の内へこなしあつて入る、

ト後に局雨人は殘り

讃岐　阿波さま、なんと思し召します。あれ程までに思ひ込んでの姫君さま、得心づくではお歸りあるまい。お心の迷ひなる三浦の母を刺し殺し、有無を云はせず、お手を取り、お供せうではあるまいか。

阿波　成る程左やう、裏口より老母が寢所へ忍び入り、たつた一打ち。

讃岐　それが近道、サアござれ。

〽庭傳ひ、小褄りゝしく忍び行く、折りしもかしこの木蔭より。

ト局雨人は帶引き締め、懷劍の目釘をしめし行かんとする。この以前より、藤三雜兵出立好みの拵へにて木蔭に窺ひ居て、この時

藤三　お局待つた。

〽聲は立派にむさ男、雜兵出立のやくざ鎧、安物作りの一腰かたげ、うつかり立つたはお堂の前の、賣れ殘り見る如くなり。

トこの文句にて、藤三袋入りの懷劍を持ち、門口にこなし。局雨人見て

讃岐　ヤア、下司野郎の分際で推參な。

阿波　待つたと留めた

雨人　其方が名は。

藤三　オヽ、忝なくも安達藤三と云うて、則ち當座の出來合侍ひ。北條さまより御上使ぢや。

トこれにて、局雨人心得ぬこなし。

讃岐　ナニ、御上使とは事おかしい。其方のやうなる下郎に。

雨人　何ゆゑあつて。

藤三　サア、そこが御上使ぢや、上使の證據は則ちこれちや。

〽柄に括りし袋物、拔けば輝く印しの劍。

ト持ち來りし袋物の短刀を拔き見せる。雨人見て

讃岐　ヤヽ、まことにこれぞ、時政公の寢覺と名づけしお守刀。

阿波　さては割符に遣はされしか。

雨人　ハツ、ハア。

〽はツと計りに恐れ入つて、押し下れば、くわん〳〵と打ち頷き。

ト雨人押し下り平伏する。藤三思ひ入れあつて

藤三　ホ、ウ、ちつと左もあらん……上使の趣き餘の儀に

あらず時姫君を女房にせい……イヤこれはマア後での事ぢや。なんぢやあらうとお姫君を取り返しに來たのぢや、智謀、計略、種々さま〴〵あれども、こなさん方が爰に居ては氣が張つて仕事が出來ぬ、二人ながら、ソレちやつと〳〵と去なんせ〳〵との御上意ぢや。

讃岐　イヤ〳〵〳〵、なんぼう御上意でもお主のお側は動かれぬ。

阿波　われ〳〵どもゝ、とも〴〵に。

兩人　御加勢いたすでござりませう。

藤三　イヤ〳〵、女童の力を頼む、藤三でごんせぬワ、構はずと去んだ〳〵。

讃岐　たつて行けとの事なれば詮もなし。然らばわれ〳〵兩人は庄家方にて押へ申さん。

阿波　必ずともに仕損じ召さるな。

藤三　ア、、氣遣ひせまい、仕損なうたら、ソレ、二つとない鼻、備いでやるわい、花は三吉野人は武士、局後に逢はう。

〽と高慢顏、ぬかつた形も主人の威光、心元なき上使の役目・二つに別れ入相過ぎ。

ト双方こなし、時の鐘になり、兩人は橋がゝり藤三は思ひ入れあつて、下手の藪蔭へ別れ入る。

〽されば風雅の歌人も戀とや聞かん蟲の音も澤の蛙の聲聲は修羅の巷の戰ひと、身に引き締むる兜の緒、若宮口の戰場より一文字にとつて返す、心は更に遲れねど、もし落人と人や三浦が孝行の念力通す母の軒。

トこの文句のうち、ぢやん〳〵バタ〳〵になり、向うより三浦之助、鎧陣立の拵へ、弓を杖にして軍に疲れし體にて、中通りの軍兵四人拔刀にて戰ひながら走り出て、花道にて立廻りよろしくあつて、トゞ軍兵を追ひ込み、門口を見て、花道にて、ホッとこなし。

〽嬉しや爰ぞと氣の張り弓、初めてがつくり門口にかつぱと轉ぶ物音は胸に應ゆる二世の緣、心時姫走り出でゝ

ト此うち門口へ來り門口を明けかけ、ホッとこなしあつて、がつくりとして倒れる。この物音にて奥より、時姫走り出て見て悔りこなし、三浦之助の側へかけ寄り

時姫　ヤア、三浦さま。

〽駈け寄つて抱き起さんにも大男の子。

モシ、義村さまいなう。

〽云へど答へもあら悲しや、詮方泣く聞もあり合す幸ひ

氣つけの獨參湯、注ぎかけたる藥水の一滴五臟に沁み渡り、むつくと起きて。

ト時姫三浦之助をいろ〳〵介抱して心つかぬゆゑ、いろ〳〵氣を揉むこなし、ふと思ひ入れあつて、內へ入りあり合ふ藥を茶碗に入れ持ち來て、三浦之助に呑ます事、これにて心つきしこなし。

モシ、時姫でござんす、お心がつきましたかいなア。

ト三浦思ひ入れあつて

三浦　母人は何處にお渡り遊ばすぞ。

時姫　オヽ、お氣がつきましたか、お懷うござりますわいなア、

〽鎧にひつしと縋りつき。

ト三浦の助、時姫を見て

三浦　オヽ、思ひも寄らぬ時姫どの、爰へはどうして。

〽と云ふ間も惜しや母人に對面せんと行くを引き留め。

ト立ち上り行かんとする。時姫とめて

時姫　モシ、時姫どのとは聞えませぬ。なんぼおきらひなされても私しはお前の女房ぢや。夫の代りに母さまの介抱に來たが、なに不思議。

三浦　ムウ、スリヤ、この程よりつき添ひ居るか。シテ母人の御病氣は。

時姫　今、スヤ〳〵と御寢なつて。

三浦　シテ、お食はどうぢや。

時姫　サア、そのお食事を差し上げても、いやぢや〳〵と仰つしやつて、今朝はやう〳〵粥の湯を少しばかり。

三浦　ムウ、スリヤ、聞きしに違はず、それでは御本復は覺束ない。

時姫　なれどもお氣の慥かなは獨參湯とやらの力、藥の印しは目のあたり、今あなたがお氣のついたもそのお藥。

三浦　ムウ、さては母に與ふる藥力にて、精神涼しくなつたるも、思はず知らず親の慈悲、ハヽア、勿體なし〳〵……お休みならば。

〽お寢顏なりと、拜まんと母も我が身もこれぞこの、一世の別れと、思ふにぞ、流石勇氣も恩愛の肉身わけしばら〳〵と先き立つ淚、案內にて、物音響かば驚き給はん。

時姫　靜かに〳〵。

〽心靜めて病所の口、立ち寄れば母の聲。

ト時姫先に、三浦之助一間の障子屋體へ行かんとして

この時上手の屋體の內にて

長門　嫁女々々。

時姫　嬉しやお目が覺めましたか。三浦さまのお歸りでござりまする。

三浦　義村參上仕る。

〽と明ける障子を、はたとさし。

ト兩人こなしあつて、つまの障子を明けやうとする。

内よりはつたり閉めて

長門　ヤレ、この障子明けまい〱。そも三浦が歸りしとは坂本の城へ歸りしか、よも爰へ來る三浦ではあるまい。必ず粗相な事云ふまいぞ。嫁女、よう聞きや。夫平六兵衞どのは、先君の御家人、後家の身となり幼少の三浦を育て暮らすうち、宇治さまより達つての御所望、賴家公の御近習となし、今より二代の忠臣とのお詞、有り難さに坂本の城中へ御奉公に參らす時、妾もともにとありつれども、イヤ〱伜三浦は人に勝れて孝行深き者なれば母が側につき添はゞ、まさかの時に親に引かされ未練の心つく時は却つて我が子が弓矢の名折れと、この儘故郷へ引き殘り、別るゝ時も、くれ〲と、必ず〱親ありと思ふなよ、母が事は忘れても、お主に忠義怠るな、煩ふとも、死ぬるとも、知らせもせねば、便りもすなと、云ひ聞かした教訓、よもや忘れうやうがない。それにうかうかと戻つて來る三浦ではない。ソリヤ人違ひ、モシ又來たが定なれば、京、鎌倉兩家、分目の大事の軍、戰場に向ひながら、さす敵に遲れを見せる、うろたへた根性ならば子ではない、親でない。母は病に臥しながら朝夕に人の取り沙汰を餘の名は聞かず我が子は如何に、三浦は手柄しやつたかと神佛に祈誓をかけ、おのれやれ、早う死んで未來の夫に、我が子の自慢せんものと今際の樂しみ、心の嬉しさ、その未練な伜が有樣、なんと夫に詫されう、最早この世で顏合す子は持たぬぞ。この障子の内は母が城廓、そのあはてた魂で、薄紙一重のこの城が破らるゝ、なら破つて見よ。

ト障子をぴつしやり立ち切る。

〽百筋千筋の理を籠めて、引き籠つたる障子の内、泣く音より外いらへなし、母の諫言肝に徹し。

三浦　その御教訓忘れねばこそ故郷を出て今日まで一度便りもいたさねども、お命も危ふしとの噂を聞くに胸せまり今生御無事なお顏を、たつた一目拜みたさ、眼眩んで侍ひの道を忘れし不孝の段。

〽眞平御免下さるべし〽イデ戰場へかけ向ひ花ばなしき高名して。

追ッつけ凱陣仕らん。その時目出度く御對面。最早お暇仕る。時姫さらば。

〽と立ち出でる、姫は慌て抱き留め。

時姫　コレなう、折角顔見た甲斐もなう、モウ別るゝとは曲がない。親に背いて焦れた殿御、夫婦の堅めないうちはどうやらつんと心が濟まぬ。

〽短い夏の一夜さに。

忠義の缺ける事もあるまい。

〽これ程までにつき慕ふわたしが心思ひ遣つてくれもせで心強やと緋縅しに恨むらさきの色深き。

ト時姫、三浦之助に寄り添ひよろしく、こなしあつて

三浦　オヽ、切なる心は察したれども、出陣は延ばされず夫婦となるは凱陣の後、暫しの間は相待たれよ。

時姫　それぢやと云うて、これがマア。

三浦　ハテ、聞き譯なし、放されよ。

〽振り切り〳〵かけ出すを又抱き留めて。

時姫　イヤ〳〵御凱陣とは、そりや僞り、あなたは今宵討ち死にお出で遊ばすのでござりませうがな。

〽と云ふに悄り。

三浦　コリヤ。

〽云ふ聲高しと制すれど止まらぬ涙聲。

時姫　イヤ〳〵。

〽これが泣かずに居られうか、討ち死の門出には、忍びの緒を切ると云ふ、殊更兜に名香の薫るは兼ねてのお物語り思ひ切つた最後のお覺悟。わたしも、お前に連添ふからは、なんの未練に留めはせぬ〳〵。

何故あからさまには打ち明けて、この世の緣は薄くとも未來で夫婦になつてやらうと一言云うては下さんせぬ。矢つ張り敵の娘ぢやと思うてかいな、疑うての事かいなア。ソリヤ聞えませぬ。

〽父上の事とは打ち忘れ、日本國に親と云ふは奥にござる母さまより外にはないと思うて居るに。

あんまり氣強い三浦さま。

〽あなたを先だて後にのめ〳〵生きて居る。

時姫ぢやと。

〽思うてかいの、ソリヤ聞えませぬ、胴慾と身を悶はし、積り積りし憂き辛さ、鎧の膝に夕立の涙くみ出す如くなり。

三浦　ホヽ、天晴れの推量感じ入る。さりながらこの上如何ほど親切を盡くすとも、三浦が疑ひ晴れぬゆゑ。

時姫　アノ、まだわたしに疑ひが。

三浦　オヽ、晴れぬ仔細を云ひ聞かせん。がそれも益なし、モウさらば。

時姫　イヤなう、長う留めはせぬ。モウ母さまには今日、明日のお命、なんぼ潔よう仰つしやつても討ち死と聞き給はゞ、お嘆きが思ひやらるゝ。今夜一夜は伽遊ばし同じ事ならその後で。

〽後で死んで下さりませと、云ふも泣く〳〵義村も父母に受けたる身體髪膚死に目に逢はで別るゝかと、行きつ戻りつ、とつおいつ。

ト時姫愁ひのこなしにて留める。三浦之助も花道へ行き兩人よろしく留まる事あつて。

〽又もや咳の聲すれば、これこそ母の聞き納めと、思へばよはる後ろ髪。

三浦　せめて、暫しは他所ながら。

〽萬分一の恩報じお藥なりともあたゝめんと、心の内に繰る珠數の涙の忍びおのづから短夜すでに更け渡る。

ト時姫留めて、三浦が鎧を脱がせる事あるべし、三浦は二重へ上り、藥を煎じる事あるべし、トヾ時姫は太刀を持ち奥へ入る、三浦之助は藥を煎じ上げ、茶碗へ移し、丸盆へ乘せ、片手に兜をかゝへ、片手に丸盆を持ち正面の暖簾口へ入る、後知らせにてこの道具ぶん廻す事。

本舞臺、遁し藪疊、向う田畑の書割、好き所に松の立樹、同じ吊り枝、上手に繩暖簾かけし裏口あり、この仕組よろしく、ごんにて道具納まる。

〽丑滿つぐる夜嵐の闇を窺ひ立ち戻る、二人の局、銘々一腰脇挾み、見やる片への薄原、井筒の側にかぎ繩引つかけ下より傳ひかけ上るは。

ト以前の局兩人窺ひながら、下手藪蔭より出て來る、井筒より富田の六郎かぎ繩を引つかけ傳ひ上り、きつとこなし。

讃阿　六郎どの。

六郎　コリヤ。

ト押さへあたりへこなし。床の合ひ方になり

聲高し〳〵。姫を奪ひ返す事、藤三めに仰せつけられし所心元なく、横目の某、時政公のお指圖、かねて覺へし忍びの術、小松道より半町ばかり、コレこの井筒まで切りぬかせ、忍び入つたる手段の計略、三浦が爰に來たりし

は鰯網にて鯨の大功。お身達は宿端れの、出口々々に番をつけ、姫の安否を相待たれよ。

讃岐　心得ました。そんなら富田の六郎どの。

六郎　秘かに〳〵。

〽合點々々と互ひに囁き牒し合ふ、後ろに立ち聞く隣りのおくる。

ト局兩人と六郎立ち別れんとする。この時下の藪蔭より以前のおくろ一本差して窺ひ出る。局兩人はこれに心づいて。

局二　ヤ、それに居るは何者ぢや。

〽咎めるうちにも透かさぬ身構へ。

くろ　ア、聊爾なされな、お味方の者でござりまする。

讃岐　ナニ、味方の者とは、侍ひ衆の女中か。

阿波　但しはお末か。

兩人　名はなんと。

くろ　アイヤ、わたしは今日のお役目蒙りし安達藤三が女房、夫に力を添へん爲め、後より爰へ忍びの女、勝手覺へし裏口四方、御案内申しませう。

六郎　ホ、オ、出かした〳〵最究竟。コレ〳〵お局達は、爰を拙者に任せ置き、そこ許達には……コレ。

ト兩人へ囁く。

局二　スリヤ、我れ〳〵は。

六郎　計らひ召され。

局二　心得ました。

〽牒し合して局達、左右へこそは別れ行く。

ト局兩人ヒッ〳〵と下手へ入る。おくろ、こなしあつて

くろ　然らば、富田の六郎さま。

六郎　コリヤア。

くろ　イザ、御案内いたしませう。

〽案内に連れて富田の六郎裏口指して忍び入る。

トおくろ、六郎きつと見得、よろしく、風の音ごんにて元の道具へ戻る。

本舞臺元の道具に戻る。爰に時姫以前の袋入りの寢覺丸を持ち思案の體、床の送りにて道具納まる。

〽更け渡るはや園城寺の鐘の音も比良の峰より吹き立てられ縦より細き燈火の暗き思ひの晴れやらぬ父が安否に胸せまり思案に詰まる時姫が。

時姫　ア、思ひ廻せば廻す程、果敢い者があらうかいな

ア。三浦さまをお慕ひ申しこの閑居に居るうちにも母君さまのお煩ひ、屆かぬ身にも御介抱、心盡くせど捗らずどうしたものであろうかいなア……それに引き替へ御父上には、この寐覺丸を證據として計らへよとのその仰せ、背くもどうやら不孝の罪、情と恩の二道は、どうしたらよからうぞいなア。

〽かくと白齒を染めかねる、思ひに迷ふ時も時姫に見入つた藤三郎、尻付小聲の細目して。

藤三　これはしたりお姫さん、なんとその守刀、慥かな證據でござりませうがな。それを印しに北條樣からお迎ひに來た藤三郎、サアござりませ。

〽と手を取れば振り放し。

時姫　義村が妻の時姫、たとへ父上でも敵味方、敵の家へなんの歸らう。迎ひの人もあるべき名も知らぬ新參者、返事に及ばぬ、歸れ〳〵。

藤三　エヽ、モシ、ソリヤ悪ひ思ひつきぢやぞえ、鎌倉方の御評定には坂本の城は追つつけ落ちる、お前の大切に思はつしやれます三浦どのは、今日明日のうちに首がころりぢや。モウなんぼ可愛がらしやつても首のない男に心中立てるは後の月の富の札を買ふやうなものぢや。そんな危ない者より男に持つて何不足ない藤三郎、時姫を取り返し戻つたらば、その褒美に汝が女房に遣はす間、心のまゝに抱いて寐て樂しむべしの御上意、約束して來たからは、殿御と云ふはこの藤三。

〽お前への心中に顏に入れ黒子して來たわいの。

イヤ、また美しいものでもあり、嫌でも應でも引つかたげて退く。サアお出で。

〽つき纏ふ、姫はその手を振り拂ひ。

ト藤三、時姫を引つ立てにかゝる。姫こなしあつて、その手を拂ひ

時姫　エヽ、寄るな〳〵推參者、主人に對して慮外の科、時姫が手討ちにするぞ。

藤三　エヽ。

ト恟り飛び退き

ハヽア、さてはお前はアノ首のない男が好きぢやな。マア、如何に下の方が肝心ぢやてゝ、胴ばかりを抱いて寐やうとは、胴慾な御心底、御免〳〵。

〽と云はせも立てず隱す刃に、わつとばかり、頭かゝへて逃げて行く。時姫せき來る涙ながら父の印しの寶劍を打ち守り打ち守り。

ト藤三、井戸の内へ入る。

時姫　エヽ、聞えませぬは父上さま、この刀を賜はりしは三浦さまと縁切る印しに、母を殺して歸れとあるお心か、刃の色に顯はれて。

〽胸を切り裂く御賜物。

下司下郎の妻となし世上へ恥を見せしめとはあまりに慘いお仕置とてもつながる縁ぢやもの、

〽あすを限りの夫の命疑はれても添はれいでも思ひ極めた夫は一人。

あの世の縁を三浦さま。

〽必ずやいのとばかりにて、既に自害と三浦之助、しつかと押へ。

ト時姫自害せんとする。この時三浦之助出てその手を留めて

三浦　アイヤ、早まるまい、只今の一言にて、日頃の疑ひ晴れたるぞ。

時姫　スリヤ、わたしへの疑ひは。

三浦　親とても、夫ゆゑ見かへぬな、ホヽオ神妙々々。コレ時姫、今死ぬる命を長らへ、三浦が最期を見屆けた上、夫の敵を討つ氣はないか。

時姫　討つとは誰を。

三浦　オヽ、聞くまでもなし、鎌倉の大將北條時政。

時姫　エヽ。

ト愕りこなし、笛の入つたる合ひ方になる。

三浦　サア、驚きは理り、去年來佐々木高綱、時節を考へつけ狙へど、なか〳〵討つ事能はず、武運に强き北條どの、佐々木が力に叶はねば、この討手は日本に御身ならで外になし。迎ひの來るは究竟の時姫招きに應じて立ち歸り、父につき油斷を見て只一刀、直ぐにその場で我が咽喉へ差し貫いて自害せば、これ全く親を討つにあらず、頼みと云ふはこれ一つ。親につくか。

時姫　サア、それは。

三浦　夫につくか。

時姫　サア。

三浦　サア〳〵〳〵。

三浦　落ちつく道はたんだ一つ。返答はなんと〳〵。

〽思案は如何にとせりかけられ、どちらが重い輕いとも恩と戀との義理詰めに詞は涙もろともに。

時姫　成る程討つて見せませう。

三浦　スリヤ、北條時政を。

時姫 北條時政、討つて差し上げませう。
ト大きく云ふゆゑ押へて
三浦 コレ。
〽父さま許して下さりませ、はつと計りに伏しまろぶ。
ホヽオ、出かされたく。それでこそ三浦之助義村が五百生まで變らぬ妻、こなたが得心なしたる上は坂本に込み入り軍勢幾萬騎の悅びならん。この謀成就なす時は坂本の家は萬代不易、味方の悅び、アラ嬉しや悅ばしやなア。
〽天へもあがる勇みの顏色、思ひがけなき木蔭より窺ふおくろつゝと出で。
ト兩人こなし、この時上手の藪屋の內より、おくろ出て
くろ ヤア、聞く人なしと思ふは不覺、最前よりの一大事殘らず聞いた。時姫どの覺悟召され。
〽と云ひ捨て行くを、すかさず三浦之助、小腕取つて引きしけば。
トおくろ思ひ入れあつて行かんとする。三浦之助心得おくろを取つて引き据ゑ、おくろは引き据ゑられし儘上手へこなし。
ア、コレ、六郎さま、爰構はずと企みの次第を、北條さまへ御注進々々。
〽心得こなたに富田の六郎飛んで出で。
ト以前の六郎、上手の藪屋より出て、キッとして
六郎 オヽ、聞いたく企みの段々、この趣き片時も早く鎌倉へ、オヽ、さうだ。
〽と井筒の側へ寄るぞと見えし下より突き出す鎗先に虛空を掴んで息絕えたり、三浦之助聲をかけ。
ト六郎こなしあつて、下手の井筒へ立ち寄る中よりツイと鎗を突き出す、六郎これに貫かれ、はつと苦しみ倒れる。三浦キッと、こなしあつて
三浦 兼ねて申し合せし通り計略外れず、今日只今調うたり。佐々木。
ト云ひかけて、あたりへ氣を配り、井戶の中へこなし。
佐々木四郎左衞門高綱どの。
〽イザ、こなたへと請ずれば、井戶よりぬつと藤三郎、始めに變る優美の眼中、おくろもしさつて式臺に、千萬人に勝れたる威風備り見えにけり、眞中にどつかと座し。
トこの文句に誂への鳴り物被せて、井筒の中より藤三郎、高綱にて好みの拵へにて出て、上手に座し床几にかゝる。

高綱　時姫の不粹尤も。あれに居るおくるが夫、藤三と云ひしは面體我れに見違ふばかり似たるを幸ひ價をくれて命を買ひ取り、去年石山の陣中にて、北條家を騙かりし佐々木が似せ首こそ彼の藤三郎。僅の恩に不憫の最期。女が歎き思ひやる、龍は時を得て、天地にわたかまり、時を失へば、宮守、蚯蚓と身を潜む。我が君の爲に軍慮をめぐらし肺肝を碎くと云へども賴家公の武運の拙なさ、なす事する事一つもならず。この度の合戰は坂本の城滅亡の時、天より亡す主人の運命、エ、無念の鬱憤止む事なく、最早計略の術盡き果てたる詮の詰まり、百計の中のたつた一計、あれなるおくるに得と申し含め死したる藤三が名をかつて、初心の士民に拵へすまし、指にも足らぬ端武者どもにやす／＼と生け捕られ、時政の前に引き出されしは、地獄の上の一足飛び。いまだ天道捨て給はざる印しにや、さしも明察の北條どの、匹夫下郎に相違あらじと、コレこの面に入墨を。

〽さゝれし時のその嬉しさ。

この印しある時は、白晝に往來するとも、佐々木と咎める。

〽者もなし。我が命だにあるならば、時節を待つて再度京都の旗下に黥へさんと心の笑み、折ふし姫を迎ひの使者云ひつけられしはこれ幸ひ、百萬の大軍より討ちとり難き一人を討つ謀は姫にありと、秘そかに三浦へ内通し牒し合せし計略外れず姫の心底極る上は大願成就時來れり。

〽ハ、ア、嬉しや悦ばしと勇める面色威あつて猛く實に名にしおふ坂本の惣大將と類ひなき、おくるも末座に顔を上げ。

くる　佐々木さまの御計略首尾よく計り負ふせしとは、夫の功もこれで立つ、この世にあつて益なきわたし、さうぢや。

〽用意の懐劍のんどへ突き立つる。

時姫　ヤ、なんでこなたは死にやつたぞいなア。

〽おくるは苦るしき顔を上げ。

くる　わたしが夫は水呑百姓ひさ／＼のすぎはひさへ長の病氣の貧苦のうち不相應な御恩のお貢ぎ。

〽金銀に命は賣らねど。

夫も元は侍ひの端くれ、生れついて臆病で弓引く事も叶はぬ非力、我が身を悔むこの年頃、誰あらう佐々木さまに面ざし似たが仕合せで、討ち死の數に入れば、モウ一

生の本望と、にこ〳〵笑うて行かれた顔、今見るやうに思はれて。

〽あなたのお顔を見るにつけ思ひ出されてお懐しうござります。

死んで未來で冥土の夫へ云ふが土産、早おさらば。

〽云ひさし平れ伏す斷末魔、敢なく息に絕えにけり、時姫は思案を定め。

卜おくるは自害して落ち入る。皆々愁ひこなし。

時姫　何れを見ても義理ゆゑに死なねばならぬ定りか。開く御運が定ならば討ち死思ひ止まつてたべ、三浦さま。

〽と口說き歎けば三浦之助。

三浦　恐か〳〵。生はかたく死は安し、生き殘つて大事を討る軍師佐々木どの器量なくては思ひも寄らず、三浦如きのいつかな及ぶべきか。一旦思ひ極めし討ち死、再び變ぜぬ姿を見よ。

〽とあくる鎧の引き合せ、肌着は染める紅に肩を限どる數ケ所の矢疵、姫は悲しさやる方なく。

卜三浦胸下血に染み手負ひの體、時姫こなしあつて

時姫　討ち死の氣はつきながら、弓矢の家に生れし身が、これ程の手負ひ給ふと知らぬ女の淺間しさ。

卜三浦へ縋り歎く。

〽と縋るを拂ひ。

三浦　イヤなう佐々木どの、若宮口の合戰必死の戰場、切り死と極めし所に貴殿より火急の早打ち、この謀成就を見屆けずして死するは不忠、一つには母に今一度、忠孝二つに命を延べ血潮を隱す着替への鎧。

〽故鄕へ歸る心の鎧とは知らずして敵方に。

後ろを見せしと嘲られん事、末代までの武門の疵、エ、思へば無念口惜しや、この上の願ひにはこれより又も若宮口の森に向ひ一身五體ずた〳〵になる迄切つて切り死なす三浦、先途を見ず相果るも武士道の意地、貞平御免下さるべし。

〽と思ひ込んだる、はら〳〵淚。

高綱　ホ、オ、尤も至極、高綱も心底推察仕る、惜しむらくは今少しこの謀早かりせば、あつたら勇士を闇々くと討死はさせまいもの、去りながら犬死とばし思はれな、時政の眞實面體見覺えしは御邊一人、三浦が首を討ち取つて實檢に入るならば愈々我れに心を許し近寄る手段の一つとならん、御邊の首を敵の大將討ち取るは最期の大功忠義の第一、我れは元より敵に入り、心は佐々木



綱高木々佐の翫芝村中

表はこの儘藤三郎、三浦が首は安達藤三が討ち取つた。

三浦　ハ、ア、忝なし、悦ばしや、最期の本望この上なし、冥土で再會。

高綱　某事も冥土で。

兩人　再會々々。

〽互ひに、につこと顏見合せ笑ふぞ武士の涙なる涙の中に時姫は思案を定め。

時姫　オヽ、それよ親を捨て命を捨て、主に隨ふは弓取りの道、夫に隨ふは女の操、不孝の罰の當らば當れ、夫ゆゑには、いく奈落の責を受くるとも厭ふまじ。父の陣所に立ち歸り仕負ふせてお目にかけやう。一念通るか通らぬか。女の切つ先試みに。

〽と緣の鉢石心の目當、突き出す鎗を障子ごし、しつかと取つて。

ト時姫あり合ふ鎗を取つて緣先の岩組手水鉢を突きかける、上手の家體より母この鎗先をしつかと捉へて

長門　オヽ、念力見えた。先ツこの通り仕負うせよ。

〽と脇つぼ、しつかと貫けり。

ヤ、母さま勿體ない、何ゆゑに御生害でござりまする。

〽こは何ゆゑと三浦が驚き、時姫もあはて、立つ居つ血留めよ、氣つけと立ち騷ぐ、母は苦痛を押しこらへ。

ト皆々驚き立ち騷ぐ。母、苦しきをこらへる思ひ入れあつて

長門　ア、コレ、何驚く事があらうぞいなう。定業きまつた死病ひ、人參の精力で死に兼るこの母が疊の上の病死せうより、我が子とともに討ち死と思へばこの切つ先は名醫の針。コレ嫁女、こなたに功が立てたせたさ、三浦が母を仕留めたれば、產みの母へ孝は立つ、又この母への返禮はこの通り、功を立てゝ下されや。天晴れ手の內出かした嫁女、オヽ出かしやつた、三浦之助　またとあるまい忠臣を、子に持つて死ぬる果報、この儘むざ／＼戰場に屍を土に捨てさすとは、三浦之助。

〽手を取つて見交す顏に義村も。

三浦　三歲、五歲のその昔、お膝に抱かれし乳房の恵みに人となり、恩を報ずる間もなく、お側を離れて幾年月、お懷しさは如何ばかり。

〽膝に必死と抱きつき大聲あげて男泣き。

時姫　敵の娘と思し召し、お憎しみを引き替へて、重ね重ねのお慈悲心、御恩を如何で忘るべき、せめて半年添ひもせで、思へば短かい親子の緣。

長門　オ、コレ、長い別れぢやない、最期の所は變るとも我が子も嫁も明日は一緒に死出の露、蓮のうてなで、三三九度、酌人はコレこの母、嫁入りの輿を未來で待つて居るわいの。

三浦　追ッつけ後より。

三時　參りまする。

〽三人顔を見合せて、一度にはつと叫び泣く、これぞこの世の名殘りなり、佐々木も悲歎に暮れ居しが、四方をきつと打ち眺め。

ト皆々愁ひのこなしよろしくあつてゴン、鷄笛啼く、これに高綱心づき、こなしあつて

高綱　既に四更も過ぎたれば東の陽氣はこれ鷄明、南北西に人氣立つは……ムウ東國の軍勢坂本の城、間近く寄すると覺えたり。歎きを止めて出陣の用意あれ。

〽と云ひ渡し、庭の岩石しつかと踏まへ古木の松ケ枝、鼯鼠の木傳ふ如くかけ上がり。

ト高綱こなしあつて、門口の井筒を足掛に松の登り木へ登り四方へきつとこなし、これにて向う正面へ北條の提灯、簱さし物、澤山森の茂みの間へ見える事、これを高綱、キッと見て

〽四方をきつと打ち見やり。

高綱　ハ、ア、寄せたりな〳〵……東は唐崎伊達の一黨、奥州勢。

〽勢田、唐崎まで滿ち〳〵たり。

北は丹波路、龜山海道。

〽西は京都淀八幡。

皆人ならぬ所もなし。

〽云ふより早く、ひらりと飛び下り。

日本一度に寄せるとも、恐るゝ敵は只一人、勝負の一擧は明日にあり……ヤア〳〵三浦、たとへ心は早るとも、深手に弱り働き得じ。加勢を乞はんは、如何に〳〵。

三浦　こは、佐々木とも覺へぬ一言、必死と定むる三浦之助。斯程の手疵になに屈託。

ト思ひ入れ。

高綱　オ、〳〵、萬夫不當の大丈夫。早討ち立たん。

〽早打ち立たんと、高綱が勵ます勇聲。

トよろしくあつて、三浦之助弱り控なるを高綱弓を取りきつと打ち据ゑる。三浦之助心つき、キッと見得。

〽急き立つ若武者、申しわが夫暫らく〳〵なうと時姫がとどむる鎧、振り切る袖、これなう今が御臨終と泣聲後

へ振り返る。
ト三浦よろしく花道へかゝる。
〽縁の切れ目は蘭麝の薫り。
高綱　無常の聲や。
〽鬨の聲。
ト三浦花道へかゝりよろしくあつて、一寸落ち入る。
この文句にて、ちやん／＼烈しく打ち込む。向うにて
大勢　エヽ、オヽ。
トこの聲を聞きつけ弓を抱いこみ、キッと見得。
高綱　いそふれ。
三浦　ハッ。
ト皆々キッと見得、一聲かけりになり、三浦は向うへ
入る、よろしき見得。
〽後に見捨てゝ出でゝ行く。

ひやうし幕

鎌倉三代記（終り）

鬼一法眼三略巻

解説

享保十六年九月、竹本座の上演。作者は文耕堂。今日まで絶えず上演されて、有名な人形淨瑠璃の一つである。

大序は清盛が熊野詣での船中へ、義朝信頼旗揚の注進が來たが清盛は驚かない。續いて義朝敗亡の知らせがあるところ。つゞいて坂上文藤次の内で、熊野辨眞の北の方が播磨大掾廣盛に切られたが、疵口から赤子が生れる。これが後の辨慶だといふ譯。第二段目は辨慶の乳母飛鳥の住所で、盜賊に入つた鬼次郎がお京との邂逅。次が書寫山で、鬼若丸が飛鳥から身の素性を聞き、一旦は怒つて廣盛の一子岩千代を切らんとしたが、飛鳥の死から思ひ直して出家となり、辨慶と改める筋。爰は昔は折々出したところであるが、今は殆んど出ない。

三段目の口は六波羅の清盛の面前で、皆鶴姫が散々に湛海を打ち懲らす所。次が菊畑である。院本では一場で濟んでしまふやうに出來てゐるが、歌舞伎では奥庭の一場を殖し、爰を鬼一の見せ場としてある。七代目市川團十郎は、能樂の「鞍馬天狗」から思ひついて、この奥庭の場を全然能がゝりに改め、新歌舞伎十八番の一「虎の巻」と名けたが、この行き方は九代目團十郎が一度襲踏しただけで、今は傳はつてゐない。四段目は大藏卿の件である。曲舞の件は明治になつてからつけたもので、普通は七代目團十郎の踊つた長唄の「猿舞」を使ふ。本書のもそれであるが、時には「末廣狩」を使ふ事もある。院本にはこの件はない。五段目は五條の橋で、牛若辨慶の邂逅から、旗揚の準備に奥州へ急ぐところで終つてゐる。五條の橋も昔は時折出た事はあつたが、今は殆んど出ない。義太夫の「橋辨慶」は、これを訂正したものである。

本集には最もよく上演される、菊畑と大藏卿の二段目だけを收めて置いた。菊畑の方は維新少し前、大藏卿の方は明治初年の臺本らしい。

鬼一法眼三略卷

序幕

菊畑の場
奥庭の場

役名――吉岡鬼一法眼。下部智惠内 實ハ御厩鬼三太。笠原湛海。下部虎藏 實ハ源牛若丸。下部、陸助。同、三平。吉岡娘、皆鶴姫。

本舞臺、一面の菊の花壇、折廻し上の方出入口まで奥深に飾り付け、上寄りに枝折り門。花道中程に枝折り木戸。舞臺所々に菊の植込み、後ろ一面に網代塀。この道具すべて綺麗に飾り付け、眞中に竹床几を直し、幕の内より智惠内、繻子奴の拵らへにて床几に腰を掛け、傍に竹箒を置き草履にて腰を掛け、髭を拔いて居る。この見得、琴唄にて幕明く。

〽今出川に名にし負ふ、吉岡鬼一法眼が一構へ、非番の下部はき掃除、打水玉をおく露に、擬へて蟲やすだくらん、玄關前の掃除役、陸助三平のさばり出で。

ト調べになり、下手より陸助三平仲間の形にて出て來り

陸助　どうだ智惠内、奥の掃除はしまつたか。

三平　コレ、髭ばかり拔いてをつて、肝心の掃除は所まだら、がいに油を賣る奴ではあるわい。

陸助　追付け湛海樣がお出でなされて、この體を御覽じたら、さぞお叱りなさるゝは定の事。

三平　さうだ〳〵、お慈悲深い湛海樣に叱られぬやう、奥の掃除をし直せ〳〵。

智惠　ハ、ア、玄關の掃除役はわいらが役、湛海樣でもたんこぶ樣でも、叱らるゝはうぬらが不調法といふものだ。奥庭の掃除はおら次第、旦那といふは鬼一法眼樣より外にはない。よい加減な馬鹿だわえ。

陸助　イヤさういふうぬが馬鹿だわえ、湛海樣はお旦那の一の弟子。

三平　殊に家督を取る婿殿は無し、さしづめ皆鶴樣と祝言して、こゝの跡式をお取りなさるゝとの噂だわえ。

陸助　それ故にこそ一家も同然、イヤモウお情深い湛海樣、

うぬも追從の一つも云ひ習ひ、お金でも貰ふのが當世といふものだ。

三平　オヽ、さうだ、うぬも今日からは

兩人　思案せい〳〵。

智惠　ハヽア、やりをつたワ。あの湛海樣をばお旦那の跡取りとはコリヤをかしい。臍が西國すべい。イヤモウ物にたとへて云はうなら、提灯に釣鐘といはうか、イヤ〳〵コリヤまたどうぞしたら釣合ふ事もあらうが、鬼の跡目をたんこぶの笠原が取らうとは、間違つた話だ。ハヽヽヽ。

陸助　ヤイ〳〵うぬ、をかしな事を長笑ひするからは、さては兵法軍術拔け切つてゐる湛海樣を蹴つぶすからは、大方うぬも兵法の心掛けがあるな。

智惠　イヤないわえ。俺は知らねえが、餘り釣合はぬ故にそれがをかしいわえ。ハヽヽヽ。

三平　イヤうぬ、さう吐かすからは心掛けがあらう。又ないと云つてみろ、軍術指南のお家に奉公しながら、劍術の心掛けがなくば、そりや扶持盜人といふもの、ナウ陸助。

陸助　オヽ、さうだ〳〵、モシ心掛けがなくば、おいらが敎へて

兩人　くれるわえ。

智惠　コリヤ何をするのだ。

三平　イヤサ、兵法軍術を、敎へて

兩人　やるのだ。

〽むしやぶりかゝるを突き廻し、しめに來る腕ねぢ上げて。

トちよつと立廻り、兩人の腕をねぢあげる。

陸助　アイタヽヽヽ、コリヤ息がはづむわえ。

三平　ちつとゆるめてくれ、アイタヽヽヽ。

智惠　ハヽヽヽ、どうだ敎へぬかい。軍法指南のお家に奉公しながら、心掛けのないは扶持盜人だとよ。サア敎へぬか、どうだ、ハヽヽヽ。

ト兩人を投げる。兩人起上つて

兩人　所を。

〽陸助三平、むしやぶりつくを振り拂ひ、てんがうすなと手先のあしらひ、とゞむる隙の中庭より、腰元共が走り出で。

ト後ろの枝折門の内より腰元二人出て來り

腰一　コレ〳〵智惠内殿、お姫樣のお歸りの遲いをお待兼

ね遊ばして、氣がつきた故花壇を御覧なさるゝと仰せあつて

腰二　お居間の庭から殿様が、唯今これへお出でなさるゝ程に、花壇の傍へ床几を直し、お煙草盆に此の褥を、いつものやうに敷いておきや。

智惠　ナニ、旦那様がこれへござるとな。

腰一　二人の衆は、お次へ立つて休息しませうぞ。

陸三　ネイ〳〵。

〽云ひちらしてぞ駈け入れば。

ト引返して入る。仲間兩人捨ぜりふにて下手へ入る。

智惠　口程にもない奴等ではあるわい。ハヽヽヽ。イヤそれはさうと、よい時分に掃除をしまうた事だわえ。時に今にもお旦那様がお出でなされて床几へおかけなさるが、ア、おらが一寸。

ト腰をかけようとして

イヤ〳〵罰があたらう。オヽよい事がある。

ト懐中より紙を出し褥の上へ敷きその上へ腰をかけ

ア、よい鹽梅だ。不斷この上へ座つて冷えぬやうにしてござつても、起る病は起るぢやなア。それを思へばいつそおらがのやうに寒晒しの方がましかえ。ハヽヽヽ。

ドレ、床几を直して。イヤ〳〵、これでは遠すぎる。爰では餘り近すぎる。

トあちこちへ床几を直して見て、トゞ上の方へ横に置き見て

ムウ、これでよし〳〵。

〽見やる内、駒下駄の音聞ゆれば。

南無三、お旦那のお出でぢやさうな。

〽と逃げ出づるを、切戸の内より女中の聲々。

腰二　コレ〳〵智惠内殿、何時御用があらうも知れぬ。それに居さつしやれや。

智惠　ネイ。

ト下の方柴垣の蔭へ隱れる。

〽小蔭に隱れ畏まる、吉岡鬼一法眼は病苦を忘るゝ氣晴しと、女小姓に介抱せられ、花壇の菊の品々は主殿司と御垣守、二つ一つの大内山、天が下には隱れなき花の笑顔に打着せて、名はけおされぬ京小袖、たとへば花の物狂ひ、羅生門に住む鬼なりとも紐解きそむる大般若、御法の菊を見る時は、心やはらぐ敷島や、あれば彭祖が七百歳姿を變へぬ若やかも、この徳なりと菊の酒、我も齡を延さんとしばしは眺め佇めり。

ト鬼一、羽織衣裳にて誂への駒下駄、杖を突き、腰元大勢付き添ひて枝折り門より出で、舞臺の菊をあちこちと眺むる事あつて、床几に腰を掛け

鬼一　ホヽオ咲いたワ〳〵、この花開いて後更に花なしと思へば、とり分け色香も身にぞしむ。コレこの菊は打水に露を含みて濡鷺や、可程やさしき花の名を誰が石割と。

〽名づけゝん、心勇みの駒下駄に石踏み分けて花畠、見廻し〳〵機嫌よく、床几に腰うちかけ。

ヤイ女ども、花壇の掃除は智惠内めか。

皆々　ハイ、左様にござりまする。

鬼一　ソレ、智惠内を呼べ〳〵。

惠一　ハツ、智惠内殿、御前様がお召し遊ばす。

皆々　智惠内殿々々々々。

智惠　ネイ〳〵。

〽ハツと答へて立出づる。

ハツ、智惠内め、これに居りまする。

鬼一　コリヤ智惠内、見れば花壇に塵一本も置かず、日の前の掃除は丁寧なれども、松楓白膠木などのあたりは落葉も掃かず捨置きしは、心あつてか、但し又目通りでないといふ不奉公か、惣別奉公に陰日向があつては後暗い。以來きつとたしなみ、大切に奉公せよ。

〽とありければ。

智惠　これは殿様の御意とも覺えませぬ。拙者めも熊野の奥山家にて人となり、不肖には育ちましたれども、御奉公に陰日向は仕らぬ。惣じて塵埃と申すものは一つ二つ落ち散れば、その塵を穢して見苦しくは候へども、又塵塚に山の如く積る時は、多くして見苦しからずとやら、それ故に花壇の塵はとりましたれども、松楓白膠木などの落葉はその儘に御覽なさるゝが御一興かと、わざと箒は入れませぬやうにござりまする。

〽申し上ぐれば流石の鬼一。

鬼一　フムコリヤ尤も、花壇は花壇の位によつて掃除をなし、落葉の庭は落葉を愛して落葉を掃かずとは、名將は士卒を愛して賢愚得失をよくわきまへ、その器量に應じて隨ふといふ軍法の奧儀。その理に同じ、ナニ智惠内、近う寄れ、可程まで小分別のある奴を、なぜ

〽智惠ないとは名付けしぞ。

殊更熊野育とな。

智惠　ネイ。

鬼一　熊野育ちとあればなつかしい。我も熊野の山家には鬼次郎鬼三太といふ二人の弟があるわい。

智恵　さては殿樣のお產れは、熊野でござりまするかな。

鬼一　イヤ〳〵、弟めも我も產れは都なれども、熊野にて育ちしといふわけは、我が親もかくいふ鬼一も、元は源氏譜代の侍ひなれども、六條の判官爲義左馬頭義朝御親子の仲よからず、弓矢の道に背き給へば、源氏の滅亡遠かるまじと見極め、末の奉公させんものと、三歲五歲の小兒を母に預け戒を殘し、熊野の山深く忍ばせおく。その小兒が今いふ鬼次郎鬼三太、又某を近く召され汝はともかくも長らへて、源氏の成行く末を見屆け、大將の器に備り給ふ人あらば傳來の虎の卷を傳へよと、その身は御親子の御身持を憤り、病の床にうち臥せしが。アア淚がこぼれる。アヽ、一服呑んで見ようかえ。

　ト腰元烟管烟草盆を差し出し、よろしく呑む事。

〽雲を吹き散る忘れ草、烟に憂を晴しける、われらその鬼三太淸澄と、云はんとせしが心を靜め手をつかへ。

智恵　お家に奉公致しながら初めて承る、御兄弟の御別れ、さこそ便なくおぼすらん。したが只今にてもあれ、かの鬼次郎鬼三太殿、それと名乘つて來給はゞ、殿樣には如何遊ばされまする。恐れながら承りたう存じまする。

〽とうら問へば。

鬼一　それは兄弟の心にあるべし。なま中父が遺言など源氏へ心を傾け、平家に敵たふ心ならば、ひつ縛つて淸盛公へさし上げる。何故といへ。鬼一が今の主君といふは淸盛公より外にはない、平家に忠義の我なれば、弟なりとも容赦はならず、こりや云はずとも知れた事、アアモウ〳〵云ふまい語るまい。汝もモウ根問ひ葉問ひせずとも、こゝへ來て花を見よ。

〽と花に餘念はなかりける、こゝに源氏左馬頭義朝の八男牛若丸、御母常盤の懷をはなれ、鞍馬山東光坊の御許に忍びて人となり給ひ、十六年の春もすぎ、蔦の錦は着つれども、いつ會稽にひるがへさん、袂もせばき下司奉公、心は天下をとりひしぐ、鬼一を主と田面の雁、寳にかけし文ならで、切戸の口につくばへば。

　ト花道より虎藏の牛若丸、好みのなり一本差し、狀箱を持ち出て來る。

虎藏　虎藏只今歸りましてござりまする。

腰二　虎藏殿が歸られましてござりまする。

鬼一　なに虎藏が歸りしとな、シテ娘は未だ歸らずや、その方一人歸りしとは氣遣ひ、何用ぢや、サ、近う寄れ、云へ、聞かん。

ヘと氣をせけば。

虎藏　さん候、姫君樣、清盛公の御前をお立ちなされ、私しを召され、これよりすぐに重盛公の御館へ行かねばならず、父上のさぞお待兼ね、その方先に歸り清盛公の仰せには、鬼一が病氣にかゝはらず、虎の卷を明日中に差し上げよと、もつての外の御樣子にて、鬼次郎鬼三太と申すお尋ね者、これは殿に御縁のあるお方故、湛海を追付け遣はされ、嚴しく御詮議ある筈、この旨直々に申上げよとの御仰せでござりまする。

ヘ聞きもあへず。

鬼一　ナニ、鬼次郎鬼三太の御詮議とな。

ヘはつと驚く面色にて、吐胸ついてぞ見えにける、智惠内も我が身の上とびつくりせしが。

智惠　コリヤ／＼虎藏、その鬼次郎鬼三太といふは殿樣の御兄弟、何故の御詮議。ア、聞えた、今都に金賣吉次吉内と云ふ者あり、もしやそれが名を間違へて鬼次郎鬼三太と申し誤り、その詮議であらう。さうか／＼。

ヘ念を入るれば。

鬼一　ア、イヤ／＼、虎藏が誤りにあらず、思ひあたる事こそあれ、かの兄弟の者、兼ねて源氏へ心をよすると聞きたりしが、必定その詮議ならん、それは知らぬ事なれば知らぬで濟まうが、濟まされぬは虎藏め。ヤイ智惠内、虎藏めを是でぶて。

智惠　エ、。

鬼一　イヤサ、ぶつて／＼ぶち据ゑい。

智惠　アイヤ虎藏めを何故に。

鬼一　何故とはこれ程の不奉公に心がつかぬか、惣じて富みたるも貧しきも、奉公する身はそれ／＼に勤むる役あつて、その一色にうとからねば不調法とは叱られまい。まづ虎藏めが今日の役目、娘が始めての出仕草履つかむが役ならずや。このお使は先拂の衆か押への衆に仰付けらるべし、重盛公へ御參あらば猶もつて御草履仕らんと、サなぜ云はぬ。六波羅の玄關前、御一門の御所の案内とつくと見覺え、すはといはゞまさかの時、晴の草履はつかまれまいがや。虎藏めが今日の役目捨て歸りしは不忠ではあるまいか。なりや打てといふが誤りか。

智惠　イヤ重々御尤もにはござりますれど、その氣のつか

ぬは若年者にござりますれば、何卒御勘辨遊ばされ下さりませう。コリヤ虎藏、それへ出てちやつと御詫申せ。イヤ、この儀は虎藏になり代りお詫仕りませう程に、幾重にも御料簡遊ばされ下さりませうなれば、有難う存じまする。

鬼一　イヤ〱詫はきかぬ、誤りでなくば早くぶて。

智恵　ハツ。

〽ハツと杖は取りながら打ち兼ねて立ちかぬる。

鬼一　サア打たぬか。

智恵　ネイ。

鬼一　なぜ打たぬ。

智恵　イヤサ。

鬼一　おのれも主の言葉を背くか。

智恵　イヤまつたくまつて。

鬼一　さやうでなくば早くぶて。

智恵　サア。

鬼一　サア。

智恵　サア。

鬼一　サア早くぶて。

智恵　ハツ。

〽立ちつ居つ、とかく得打たず身をもがく。

鬼一　エヽ、その杖これへおこせ。

智恵　ネイ。

ト杖をそつと出す。

鬼一　智恵内、それへ出い。

ト杖を取つて

虎藏めが不忠の百倍、おのれをぶつてのめらせん。

〽杖振り上げ給ふその處へ、皆鶴姫は立ち歸り。

ト花道より皆鶴姫出て來りこの體を見て

皆鶴　マア〱待つて下さりませ。

〽これはとすがりとめ給へば。

ト鬼一にすがる

鬼一　ヤア、放せ〱。

〽あせり給ふを抱きとめ。

皆鶴　虎藏を先へ戻せし不調法の起りは、私しから起りし事、お叱りなさる程身も世もあられず、あの虎藏もあやまつて居りまする程に、どうぞ御堪忍なされて下さりませ。

鬼一　イヤ〱、われが存じた事ではない。放せ〱。

皆鶴　イエ〱是非とも御堪忍を。

鬼一　イヤ料簡ならぬ、そこのけ〳〵。
皆鶴　そこをどうぞ。
〽詫びる所へ取次の腰元が走り出で。
ト花道より腰元一人出て來り
腰元　ハッ、申上げます。
鬼一　何事ぢや。
腰元　ハッ、笠原湛海樣清盛公の御用につき、御直談なされたき事ござりまするとて御越しでござりまする、これへ御通し申しませうや、如何計らひませう。
鬼一　清盛公の御用とあらば、これへと申せ。
腰元　かしこまりました。
〽玄關さして走り行く。
ト引返して入る。
〽案内につれて笠原湛海、袴のひだも荒くれ武士、つかつかと入り來り。
ト床の鉦になり、湛海出て來り直ぐに舞臺へ來て
湛海　これは〳〵先生には、御病氣と承はったが思ったよりはよささうで、まづは重疊々々、見ますれば庭へ下りて何事でござるな。
鬼一　されば〳〵、家來め等が不屆き故、折檻の致しくれうと思うて。
湛海　それ御覽なされ、先生は御病氣皆鶴殿は女儀の事、しつかとした跡取りがない故、家來までが野方途を働きまする、弟子は子も同然とやら、兼ねて申すはこゝの事、なぜ一々首を並べさつしやれぬ。イヤそれは内證事、今日某參りしは清盛公の御内意、ひそかに御意得たく存じまする。
鬼一　師弟の儀は内證、御用とあれば上使も同然、こゝは端近、奧にて委細承はらん。女共、案内申せ。
女皆　かしこまりました。
〽二足三足歩みしが。
鬼一　ヤイ、おのれ等は都の中を奉公構ひ、暇をくれるぞ。
皆鶴　エヽ、そんなら二人を。
鬼一　ハテその方は構はずと、サア、兩人ながら出てうせう。
湛海　左樣々々、野方途を致したなら、とつとゝ追ひやつておしまひなされ。
〽主命重き駒下駄は飛石づたひ。
じたい又、あの小わつぱめが、なま白い顏をして野方途

千萬、いつそ某がぶッ放しませうか。

鬼一　ハテさて、暇つかはしたれば、構ふ儀はござらぬて。

湛海　ぢやと申して。

鬼一　ハテ、こなたの家來ではござらぬてや。

湛海　でも。

鬼一　ハテお世話やかれな。

湛海　ムウ。

鬼一　サ、娘も來い。

ト湛海皆鶴思ひ入あつて行きかける。

〽奥に入りにける。

ト鬼一皆鶴を連れ、後に湛海腰元附き添ひ、枝折り門へ入る。

〽後見送つて牛若丸。

虎藏　ヤイ鬼三太、汝も我もかく身をやつし、あらぬ名をつけ、この家へ入り込みしは何の爲、六韜三略の卷を傳へ受け亡父の敵平家を滅し、再び源氏の世にひるがへさんと、思ひ込みしより外はなし。なりや今鬼一が我を打てたゝけとぬかせし時、なぜ我を打ち据えざりしぞ。たとへ打ちたゝかるゝとも、こゝに足を留めてこそ、虎の卷をも手に入れる期もあるべけれ。此の家を追出されて、いつの世にかは本懷を達すべきぞ。

〽無念至極と拳を握り、心いらつて見え給へば、鬼三太大きに恐れ入り。

智惠　ハヽア御尤もなる御恨、最前その心附かぬにはあらねども、勿體なや譜代相恩の御主君を、打ち奉るは、これ天を打つも同じ事、なにとて杖があてられませうぞ。得打ちたゝかぬ不調法の段、眞平御免下さりませう。

〽地にひれ伏して詫びければ。

虎藏　これも尤も。

智惠　君も尤も、ともかくに、

虎藏　主も家來も斯程まで、

智惠　源氏の運の拙なきを。

虎藏　思ひ廻せば廻す程。

智惠　我が君。

虎藏　鬼三太。

兩人　口惜しい。

〽主從目と目を見合せて、しばし歎かせ給ひしが。

智惠　成程御道理でござりまする。然らば今日清盛が館の仔細、明日中に虎の卷を差し上げよ、まつた鬼次郎鬼三

太の詮議に湛海をやらんとの事、アレ／＼奥に湛海が窃談、定めて我々が身の上ならん、うか／＼泣いて居る所ではござりませぬ。我も分別、君にも御思案遊ばしませ。

虎蔵　ヤア、この期に及び思案とは手ぬるし／＼、虎の巻を納めたる寶藏の案内我よく知つたり、忍び入つて奪取らん。

〽汝は八方に眼をくばり、もしもとがむる者あらば、一一に切り伏せよ。

鬼一とて容赦すな。

〽心得たるかとのたまへば。

智恵　ヤレ／＼、鬼一を討つ事御免あれ。

虎蔵　ヤア、御免とはおくれたか。

智恵　いツかなおくれは致さねども、鬼一はわれらが兄なれば、この儀ばかりは御容赦を。

〽と云はせもはてず。

虎蔵　ヤア義によつては親兄の、首を取るのも勇者の習ひ、それ知らぬそちでなし、さては鬼一と心を合はせ、この牛若を。

〽追出さん手段よな。

智恵　こは勿體なき御仰せ、名乗り合せし兄ならば、討つに心も隠すまじ、この鬼三太を弟と知らぬ兄を討つ事は、兄弟の道にあらず。

〽恐れながら鬼一は君に振りむけ、われら寶藏へ忍び入り、虎の巻を奪ひ取つて奉らん。

虎蔵　フム。

智恵　フム。

両人　ウフハヽヽヽ。

〽實に尤もと頷き囁き身を固め、心を定むるその中に、いつの間にやら後に立つて細々と、聞いて驚く皆鶴姫。

トこの以前より皆鶴姫出かゝり居て

皆鶴　二人の衆、まだこゝに居やつたかいなう。

〽とありければ、二人は大いに敗亡し、言葉しどろに胸さわぐ。

ト琴入りの合ひ方になり

コレ虎蔵。

虎蔵　ネイ。

皆鶴　コレ智恵内。

智恵　ネイ。

皆鶴　アノ、そなたは、いよ／＼爰を出やるかや。



岩井粂三郎の虎蔵

智惠　イヤモウ出たい事はござりませねど、お旦那の御機嫌を損ねました虎藏め、私しも共々お暇の出た事なれば、出たうなうても出にやなりませぬが、どうぞあなたの御執成しで、ナウ虎藏、このお家に奉公して足さへとめたなら、ソレ虎の巻の。イヤサ虎藏、あの望みも叶ふ程に、皆鶴様の御執成しで、お詫なされて下さりませうならば、ナ、ソレちやつと、お詫申せ〳〵。

虎藏　成る程、お詫なされて下さりませうならば

兩人　有難う存じまする。

皆鶴　そりや何より易い事ぢやが、アノわしに詫言さしてたもるかや。

智惠　ネイ、どうぞ私しめも、おなされて下さりませうならば。

皆鶴　イヽヤイなう、そなたはどうなとしやいなう。コレ虎藏、いよ〳〵詫言さしてたもるのか。但しはいやか。

智惠　コレ虎藏、ソレお詫をしてやらうと仰しやる程に、さすともいやとも御返事を申上げたがよい。コレ虎藏。

虎藏　ハイ、左様なら、お詫なされて下さりませ。

智惠　ソレ、なされてくれいと申しまする程に、どうぞさうしておやり下されませ。

皆鶴　サア、そんなら詫言する程に、ナ、ソレ今の。

智惠　ソレ今の、とは。

皆鶴　ソレ。

智惠　ソレ。

皆鶴　それいなう。

智惠　それいなうとは、なんの事でござりまする。

皆鶴　ソレ、頼んでおいた事を。

智惠　頼んでおいた事。今のでござりまするか。

皆鶴　おいなう。

智惠　そりやようござりまする。只今お目通りで御返事を云はしてお目にかけませう。コリヤ虎藏、コリヤ虎藏。

虎藏　エ、何ぢやぞい。

智惠　エヽこれはしたり虎藏、そちや何と心得てゐる。今皆鶴様がおつしやるには、お旦那へ詫言をしてやらうとおつしやる程に、この家に居さへすればかの虎の巻、イヤサ虎藏、そちもこの智惠内も一緒に居る程に、さうさへなつたらツイ手に入るまい物でもないによつて、サア早うウンと云へ〳〵。

虎藏　エヽ、そこ所ぢやないわいの。

皆鶴　コレ、智惠内々々々。

智恵　御用でござりまするか。
皆鶴　どうぢや、よいかや。
智恵　ハテさて忙しない、只今云ひかゝつて居る所でござりまする。
皆鶴　エ、、なんの阿房らしい、そんならどうでもわしの詫言はいやぢやなう。
智恵　イヤ〱めつさうな、さやうでは。
皆鶴　イヤ〱いやぢや、いやさうな、いやぢやといふ顔付きぢや。
智恵　イエ〱、いやさうな顔付きぢやござりませぬ、随分承知な顔付きでござりまする。
皆鶴　そんなら、なぜ物を云やらぬぞいなう。
智恵　イヤ〱云うて居りまする。コリヤ虎蔵、それでは聞えぬ。もそつと大きな聲をして物を云へ。
皆鶴　但しは女子に惚れられるは嫌ひかや。
智恵　イヤ、私しめは大好きでござりまする。
皆鶴　エ、、そなたぢやないわいなう。
智恵　ネイ。
皆鶴　イヤ〱、嫌ひぢや〱。
智恵　イヤ、喜んで居りまする。

皆鶴　イヤ〱、いやな證據は。ソレ。
ト菊の一枝を取つて
こりや何ぢやえ。
ト差し出す。
虎蔵　そりや菊の花でござりまする。
皆鶴　サア、この花の色變る秋の菊をば一年といふ、歌の下の句。
智恵　ソレ〱、下の句〱。
皆鶴　そなたぢやないわいなう。
虎蔵　再び匂ふ花とこそ見れ。
皆鶴　サア、その花の心はどういふ心ぢや、判断してたもいなう。
智恵　ハテナア。
皆鶴　サア、色變るとは今父様の不機嫌、暇をやるから出て行けとおつしやつても、この皆鶴が命にかけて詫言して、再び匂ふ花とこそ見れ、サアこの歌の心をくみ分けて、嬉しい返事を菊の一枝、コレ虎蔵、なぜにそなたはそのやうに。
〽姫御前の好くなりふりに、生れつかぬがよいわいなう。

人目憚る胸の中、疑がやるなら今こゝで、コレ。
〽見てたもと、もつれ寄り添ふ蔦かづら、おぼこ育ちの戀路には、菊のませ垣しめからむ、涙ぞ戀の誠なる。
トよろしく皆鶴姫虎藏にこなしある。
虎藏　ア、モウシ、あなたはお主様私しめは家來、數ならぬ身をそれ程に。
皆鶴　數ならぬとはお僞り、誠は源の牛若様、智惠内といふは叔父の鬼三太様。
智惠　ア、コレ。
〽ちやつと押へて動かせず。
スリヤ最前からの様子をば。
皆鶴　殘らず聞きましたわいなア。
智惠　叔父姪始めての對面に不便とは思へども、君の大事にやかへられぬ。今この場にて我が手にかける、覺悟極めてそこへ出よ。
皆鶴　サア、私を手にかけるのは厭ひませぬが牛若様、未來で添うて下さりませ。
智惠　オ、出かした、戀慕ひし君の爲捨つる命は惜しかるまじ。未來の契りを樂しみに相待てよ、南無阿彌陀佛。
〽取つてひき寄せさし殺さんとせし所へ、湛海すかさず飛んで出で
ト湛海、後より出て、
湛海　ヤア湛海が思ひ者、むざ〱うぬらに殺さゝうか。牛若鬼三太と己れと名乘る業さらし、この通り清盛公へ注進する、覺悟ひろけ。
〽皆鶴ひつ立て駈け出すを、やり過して牛若君、後より拔打ちにばらりずんと切り給へば、二つになつて倒れ伏す。
ト湛海皆鶴姫を引つ立て行きかゝる。虎藏拔打ちに湛海を切り倒す。
虎藏　ヤア〱鬼三太。
トのりになり
皆鶴姫を殺害するに及ばず、牛若直々に鬼一に逢うて仔細を語り、虎の卷を渡さばよし、否と云はゞ百年目。
〽たとへ鬼一兵衛の秘密を盡すとも、我又鞍馬の山上にて、僧正坊に習ひ授かりし奥儀をもつて、討取るは案の中。
シテ又鬼一が夜の居間は。
皆鶴　この庭續きの奥の方、家内の者まで通路をさけし離ら立つ杉の林の中が、夜半過ぐる迄の御座所。



岩井粂三郎の牛若

虎蔵　スリャその所に。鬼三太は後より密かに。
智恵　心得ました。
虎蔵　皆鶴、案内。
皆鶴　アイ。
〽と互に身繕ひ、奥庭さして。
ト送りになり虎蔵先に皆鶴姫智恵内奥へ入る。誂への鳴物にて前の道具を引いて取る。浅黄幕切つて落す。
本舞臺、三間の間、一面に折り廻してある黒幕。所所に杉の立ち木同じく吊り枝。眞中に九尺中足の二重。四隅松の丸物の柱、後ろ凄き張付け。左右は杉の林、内に緞子の幕を三方に張り、右の鳴物にてよき所まで押し出す、この道具よろしく納まる。
トかけりになり、下手より虎蔵の牛若丸出て來り
〽こゝに王城の鎮護たる天臺止觀の高山あり、岸につらなる老杉の森々として物凄き梢に霧の立ち迷ふ日の目洩らさぬ深山の、有様寫せし庭の物好き、吉岡鬼一法眼が心を盡せし樹木の植込み、皆鶴姫が手引きにて、牛若丸は忍び入り。
牛若　ヤア、鬼一法眼は何處にある、源の牛若丸對面對面。
〽對面ざらうと呼はつたり。
詞〽月は鞍馬の僧正ケ谷にみちみち、岸を動かし嵐凩瀧の音、天狗倒しはおびたゞし。
ト太鼓地になり、これへ風の音を冠せ、緞帳を切つて落す。内に鬼一白髪鬘、兜巾、篠懸け、水干、大口をはき、團扇を持ち貝桶にかゝり居る。牛若これを見てきつと思ひ入る。
牛若　こは思ひもうけぬ師の御坊、何故來臨し給ふぞ。
〽頭を地上につけ給ふ。
ト平伏する。鬼一こなしあつて
鬼一　善哉々々沙那王殿、姿形は荒天狗を師匠と敬ひ尊みて、かの一大事を相傳へ、平家を討たん思し立ち。
詞〽やさしの心やさしやな、抑武略の譽れの道。源平藤橘四家の孫、奢る平家を討滅し會稽を雪ぎ給ふ御身を守るべし。これ迄なりや僧正坊。
〽鬢釣髭もかなぐり捨つれば、誠は鬼一法眼なり、人々ぎよつと肝を消し、これも天狗の障碍かと、あきれはてたるばかりなり。
トこの以前上の方へ皆鶴姫、下の方へ智恵内の鬼三太

窺ひ出でこの體を見てゐる。鬼一鬘鈎髭を取り見せる。皆々恟りして上下へ住ふ。

〽鬼一住居を改めて。

鬼一　君に軍術兵法の太刀筋、傳へ敎へし僧正坊、誠の姿見給へや。

〽いますが如き神靈の、心凝つたる印は目前眞寫の筆力、墨色の一軸さつと押し開き、敬ひ申すぞ尊けれ。

ト風の音はげしく祝詞になり

この一軸の不可思議神變、まつた君の未生以前、吉岡鬼一が家の預かり、密に語らん御聞きあれ。

〽と座をしめて。

ト小鼓の合ひ方になり

御先祖八幡義家公後三年の功あつて、鎭守府將軍にならせ給ひ、奧州をしろしめされし時御供に加はりし天野某、故あつて大江匡房卿より義家に傳へられし六韜三略の兵書、我が先祖預かり奉り源氏代々兵法の師範たるべしとの御諚、家の面目、本吉長岡の二郡を賜はり下の文字を取つて吉岡と姓を改め、鬼一が家に傳へし虎の卷とは六韜三略の一卷、その奧儀は傳はれどもその實の至る事能はず、如何はせんと心を碎きこの神靈へ祈誓を立て、あらゆる天行を起し切磋琢磨の功なつて、その實に至る事、天なる哉この時に當つて、源家一度に衰微の變を生ず、ハヽア是非もなや。

〽されば平治の戰ひに、左馬頭義朝公淸盛に打ち負け給ひ、野間の內海で御腹のめされ、御公達もちり〴〵に、或ひは討たれ或ひは流され、これぞ源氏の大將軍と面を出だす人もなく。

それにひきかへ平家は日本半國を領し、高位高官におしなり勅命を頭に戴き、一門の師範せよと我を招く。多病なり參るまじといなめば違勅の罪、心ならずも平家へ隨へば、案に違はず虎の卷を傳へよと、淸盛が權威をもつて日毎の所望。

〽とかくすりぬけ期を延ばし。

源氏方の公達に器量ある人もがなと、心を碎く折しもあれ、年頃念誦し奉る御影の僧正坊が枕邊に立たせ給ひ、汝多年心を苦しむるその術を傳へんは、義朝が八男御曹子牛若なりと微妙の御聲、膽に銘じて夢中に寫し奉る僧正坊の御影像。

〽折も幸ひ、君は鞍馬の奧深く、東光坊の御許にて。

成長し給ひ、毘沙門堂のほとりにて、立ち木を相手に兵

法修業と聞く嬉しさ。我も登山し秘密を殘らず傳へ申さんと思ひしが、一門の師範と仰がれ、平家の祿を食む鬼一が、源氏へ大事を傳へんは。
〽二心とや笑はれん、八萬四千の軍神、天地の照覽恐ろしく。
何卒鬼一といふ名を包み傳へんものと、肺肝をくだき娘にも宿願ありと僞り、毎夜々々鞍馬山に分け入つて、勿體なくもこの神靈のお姿をうつし、月は木の間、かゞりの炎に形をあやしめ、その頃は君にも稚兒髷のいとけなさ。
〽御眼をくらます鞍馬山、大天狗僧正坊と名乘りかけ名乘りかけ、僅かの練磨備はる早業、木太刀の音ヤアハツと兵術を授け敎へしを、眞實の天狗と思ひ給ひしか。君天下をしろしめての記祿にも、牛若に兵術を傳へしは。
〽僧正坊といふ天狗に習ひ給ひしと。
末世末代鬼一といふ名を、深く。
〽つゝみ下さるべし。
かくいふ話はあなかしこ。
〽人にもあらず大事ぞと、始めてあかす物語、誠の武士の本意なり。
牛若　ハヽア有り難し忝なし、禮に對する詞なし鬼一殿。
〽大地に額をすり付け給へば。
鬼一　ヤア紛らはしい、鬼一は平家、源氏の禮を受くべきか。虎藏を牛若とはよく知つたれど、智惠内を鬼三太とは知らざりし。最前それと見極めて打て叩けと叱りしは、眞實を知らん爲、都の中の奉公構ひ、暇を與れんと云ひし心、思ひ知つたか。
鬼三　ハヽア、我も兄とは存じながら、その心を疑うて、餘所になしたるこの年月、無禮の段は眞平御免下さるべし。
鬼一　ア、それとても主君の御爲なり、母諸共別れし時はいまだ三歳、面ざしも見違へたり、母の御事も傳へ聞く。
〽深山の奥に育てども、心の花香失せずして。
よく成長してくれたなア。
鬼三　父上の御遺言を守り給ひ、日蔭の主君を餘所ながら守りたて給ひし眞心は、流石は都の花の兄、深山育ちの鬼三太が、なに及び申すべき。
鬼一　ア、イヤ〳〵、兄には生れまさりし鬼三太、二君に

仕へし鬼一を、手本に不忠な心持つなよ。

鬼三　仰せまでも候はず、この身を粉骨碎身なし、君に附き添ひ奉り、眞先かけて源氏の再興、アヽ、さはさりながら世の義理に、

鬼一　兄は平家の幕下にて。

鬼三　任せぬ仲の敵味方。

鬼一　弓矢とる身は。

〽兄者人。

〽過ぎゆき給ふ父母に、面ざし似たる、弟鬼三太、よう顔見せてくれいやい。

〽兄弟手に手を取りかはし、流石骨肉同胞の血筋の涙はら〳〵〳〵、小山嵐に樹々の實の落ちて碎くる如くなり。

ト知らせに付き月を後ろへ出す。これと共に向う黒幕を切つて落す。正面鬼一のいつもの奥座敷、花壇遠見の打抜きになる。

〽皆鶴姫は折よしと。

皆鶴　それ程のお心なら、とても事に、虎の卷を牛若様へ。

鬼一　ヤア大切なる虎の卷、源氏の公達に譲るべきか。コリヤヤイ娘、これはおのれに譲るぞよ。若いやつの事なれば、心をかける方もある筈、これを土産に思ふ方へ嫁入り。とサア俺は教へぬ、エヽ、勝手にせい。

〽と手に渡せば、嬉しさ親の前をも恥ぢず、兼ねて心をつなぎおく、牛若君に奉り合點かやいのと目で知らす、

牛若　この年月僧正坊となつて劍術を教へ、今また息女に虎の卷を與へ給ふ。牛若めとりて夫婦となり奥儀を授かる上からは、平家を滅し世を源にかへす事、我が方寸の中にあり。

〽この身を百千に碎くともこの大恩、いつの世にかは報ずべきと、涙と共にのたまへば、鬼一はたと膝を打ち。

鬼一　かの黄石公が沓を取つて兵法の大事を傳へて高祖に仕へ、漢家四百年の基を開きし例し、それは張良。

〽これは牛若、草履取りとなり給ひしも、虎の卷を手に入れん爲。サア二人の者、娘も共に君の御供なし、早く落ちよ。

〽云ふより早く差添へひん抜き、太腹にがばとつき立つる、血潮の穢れ神靈は、杉の梢に飛び去つたり、人々驚き。

ト鬼一小刀を抜いて腹へ突き立てる。薄ドロ〳〵になり、大懸物おのれと巻上り下の杉の枝へかゝる。皆々鬼一に縋り。

三人　こは何故の御生害。

鬼一　愚か〳〵、平家の旗下たるこの鬼一、源氏方の介抱受くべきか。寄るな〳〵、娘もほえるな。只いつまでも牛若君に兵法を讓りしは。

〽天狗々々といふてたべ。

ア、世に便りなき天狗の娘が不便がつてやらつしやれ。平家の禄を喰ひ込んだるこの腹も、切つてかへせば五臟六腑は恩も殘らず、魂いは元の源氏方。

〽魂は冥土へ赴くとも。

魄は殘つて魔道に入り。

〽かりに天狗となつたる鬼一、再び誠の天狗となり。絕所難所の戰にも、滄波蒼波の浮雲に、飛行自在を受け傳へ、よろしく御身を守るべし。娘も共に落ちよ〳〵。

皆々　落ちよと仰せ遊ばしても、父上の御最期を、見捨てどうマア去なれませう。

〽非歎の涙にくれけるが、かくては果てじと鬼三太は兄の心を察しやり。

鬼三　歎くは道理さりながら、君の御手に三略の、得難き兵書を授かり給へば。

〽たとへ項羽が力を頼み、鐵壁城にこもればとて、君の軍慮に及ぶべき、やがて源氏の白旗をかしこの山手こなたの峯、風に任せて翻し。

奢る平家を西海へおッ下し。

〽逆まく浪におしよせ〳〵おッ下し、陸に上れば備へを立て、君の寄手に隨ひて手柄を顯し熊野に生立つ力をもち。

眞先がけの盛りを見せん。

牛若　出かす〳〵、榮華に驕る平家の輩。

〽詩歌管絃は得たるとも、虎の巻の力をかつて、風に吹き散る木の葉武士、一門殘らず皆殺し。

會稽の時來るも、皆これ師の坊のお蔭なり。

〽自然と備はる智仁勇、その源の義經とは、この御方の事たるべし。

鬼一　ハ、、勇まし〳〵、現世の對面これまで〳〵。影身に添うて弓矢の力守るべし。

牛若　やがてぞ開く源氏の社稷。

鬼三　牛若君の御代となさん。

皆鶴　さはさりながら父上様。
鬼一　エヽ未練な事を。
皆々　おさらば。
鬼一　さらば。
〽と夕日影、鞍馬の梢に失せにけり。
ト白鞘を抜き持ち倒るゝ。皆鶴姫ハヽアと泣き落す。鬼三太松の木の懸物を取り守護する。牛若合掌する。
〽あやしおそろし。
ト大ドロ〳〵カケリにてよろしく。
ひやうし幕

二幕目

檜垣茶屋の場

役名――一條大蔵長成卿。吉岡鬼次郎。茶屋亭主、與市。鬼次郎女房、お京。勘解由妻、鳴瀬。

本舞臺、向う一面に筋塀。上手に破風附きの白木門、前へ敷石を引き、下手に葭簀張りの茶屋、床几二脚、塀の内より紅葉の立ち木、同じく釣り枝。こゝに仕丁の四人、床几へ腰をかけてゐる。與市釜の下を焚きつけてゐる。しらべにて幕あく。

〽千早振る、神のひこさの昔より傳へそめにし歌舞の道、よきといふ字を能とよぶ、この日の本のもてあそび、絶えぬ例しも長月の、菊の壽うちはやす花の色香の院の御所、築地はるかにもれ聞ゆる太鼓の音色横笛の、ひゞきはひいや檜垣の茶店、與市が茶屋ぞ賑はしき。
ト與市は銘々に茶を汲み出す事あつて。
與市　サア、お茶を一つお上りなされませ、今日は皆さん、御苦勞でござります。
仕一　イヤモウくろうの十郎のと、俺も方々奉公をしたが俺の主人の大藏様のやうに、今日は能、明日は紅葉を見に行く。あつちこつちへ行くので、我々は足も棒になりまする。
仕二　その隙にはお庭の掃除、落葉をかけの、ヤレどこへ行けこゝへ行けと、その度々の供で實にこつぱいサ。
仕三　それに又この頃は、淸盛様から下さつたといふ常磐御前の色香に迷ひ、いつもうつそりだが、猶々うつそりの上塗りだ。
仕四　これ〳〵、そんな事は云はねえものだ、そんな事が勘解由様の耳へ入つたら、お目玉だぞよ。

トこれを與市聞いて

與市　そン〳〵、それぢやこの頃は常盤様とやらを、奥様になされたのでござりまするか。

仕一　したが清盛公がくれたとか何とかで、今日は御祝言の祝ひの能さ。

與市　この事は町中の噂で聞いて居りましたが、大蔵様も女のない国から来はしまいし、清盛公のお餘りを貰うたやうな物でございますなア。

仕二　お餘りもお餘りも、義朝の内儀を彌平兵衛宗清が助けて、清盛公へ妾にあげたとの事。

仕三　それを貰つたのだから、猶々大蔵様はうつそりだうつそりだといふが、俺の女房も今頃は誰ぞ引上げて、妾にでもしやアしねえか。

仕四　手前の女房を誰が妾にするものか。

仕三　なにねえ事があるものか。妾ばやりの世の中だからどんな太夫が引上げめえものでもねえ。

與市　引上げるといへば私しの隣りのおかめといふのも、妾とやらに行かしやつて今では大そうなものでござりまする。なんでも今時は女子でなければ夜があけませぬ。私しも少し手料がよければ男妾に出ようかと思ひまする。

仕一　與市、男妾は流行おくれだ。それよりはい、娘を貰つて藝者にでもするがいゝ。

與市　イエ〳〵、男妾に出たいものでござります。

仕二　お前、そんなに男妾に出たいのかえ。

與市　ハテ、藝者どんでもおさつの芋でも。

トちよつと踊る。四人突き倒し

四人　何を云ふのだ。

ト顔見合つて

ハヽヽヽ。

仕一　又こんな事を云つてゐて、どんな御用が出ようも知れねえ。少しも早くお臺所へ行かうぢやねえか。

仕二　その事どてらで、二分と百だ。

仕三　そんなら與市さん。

與市　皆の衆。

四人　サア行きませう。

ト矢張り調べにて門の内へ入る。與市あとを片附けてゐる。

〽聞き者も心からせましとばかり世を忍ぶ、吉岡鬼次郎、女房は、源氏の廃の埋れ木に心を盡す忠義の花、菊のお



七代目市川團十郎の鬼一

能の折柄に、心がけたる夫婦づれ。

ト花道より吉岡鬼次郎黑の着附け、淺黄手巾脚絆、大小菅笠を持ち、お京、上張り草履をはき菅笠を持ち出て來り。

お京　モシ鬼次郎さん、今お前の云はしやんした檜垣とやらは、まだ餘程ござんすか。

鬼次　イヤ／＼、只今あれにて承はれば向ふの筋塀の屋敷と聞く、見れば茶屋もある樣子、あれへ參つて尋ね見ん。

お京　そんならその御殿に大藏卿も。

鬼次　コレ、今日お能とあるからは、お出でなされたに相違はあるまい、何はともあれ向うの茶店へ、サア來やれ。

トこれにて與市へ來り、鬼次郎あたりを見廻し思ひ入れあつて

鬼次　チト物が尋ねたい、檜垣茶屋と申すはいづれでござるな。

與市　ヘイ、檜垣茶屋は手前の店でござります。

鬼次　左樣でござるか。成る程聞き及びし檜垣茶屋、お京これが檜垣茶屋とあれば、サ、これへかけやれ。

お京　そんならモウこれが檜垣とやらでございましたか。嬉しや／＼、まだ餘程あるかと思うたがこれと聞いたで、草臥れが出たやうでございます。

鬼次　御亭主、この床几を暫時借用申す。

與市　御緩りと御休息なされませ。これが即ち檜垣茶屋、又私しめが名をすぐに與市が茶屋とも申します。常に店は出さねどもお能さへあれば私しの承はり、住居の白河より水を汲んで運ぶ故、檜垣と御名をつけられし、由緒ある茶の入れ花、まづ一服めし上りませ。

〽と差し出だす。

ト思ひ入れあつて煙草盆を出し、茶を出して拵へる。

鬼次　いかさま花の都とて、何から何まで華奢風流、手前ははるか遠國者、この度初めてまかり上り何事も不案内、京地の話を聞くが國元への家土産、まづこの所のお能といふは、一年に二度とやら聞き及びしが左樣かな。

與市　さればでござります。春は櫻のお能、秋は菊のお能とて兩御所の御叡覽、我々風情が詞にかけ申しまするも勿體ない事ながら、只今ではおいたはしや王樣を鳥羽の里へ押しこめて、平家の大將清盛樣が我儘の榮耀榮華、菊の能に限らずイヤ紅葉の能で候ふの、イヤ松茸の能で候ふのと種々の名をつけて、月の中には五度七度、檜垣の

茶屋もホッと秋風、店を出さねば何故出さぬ、せんじ茶を背くかと、煮え返るには困りきります。

〽商賣柄のちやは〳〵口。

鬼次　いかさま平家の繁昌は國元までも隱れなし、それにつけても常磐御前といふ女性、一條大藏卿とやらへ送られしと承はるが、下々の雜說か、但しは誠の事かな。

與市　イヤモウ誠も誠、なんぼ氣強い淸盛樣でも小松樣の御意見にはほと〳〵鉢卷、我が子の手前の口ふさぎに一條大藏長成といふお公卿へ進上の塩梅、この十日ばかり以前に御祝言も相すみ、しかも今日のお能がその大藏樣、常磐樣御夫婦のおもてなしの御馳走、所で又この大藏樣といふ人が京一番の見事人、つけようにも藥のない。いかに平家の權威ぢやとて十年餘りも淸盛樣が箸にかけた上り臈を、應と云うて座らるゝ。これが即ちうまい正銘エヽ今朝ならば見せましよもの、能見物にわせられたその勿體やら、衣紋付きなら人體なら天晴れた公卿なれど、十日蛭子の笹につける五百目包みで見かけばかり、この大藏殿に智慧のないと狐が誂へた茶碗に、いとぞこのないのは、この廣い日本に隱れがござりませぬ。まづあらかじめ、こんな物でござりまする。

〽聞いてお京もうち笑ひ。

お京　その常磐御前とやらも御一緒にお出でとな。音に聞いたる御器量、どんなお顔やら拜みたいものでござりまする。

〽しらぬ顔にてうら問へば。

與市　イエ〳〵、常磐御前は俄かの御病氣でお出でなされず、その御名代に、ア、何とやら云ふお人、オ、それそれ、大藏卿の御家老八劍勘解由左衞門の御內儀、鳴瀨殿といふ發明な女中が、かのぬるま殿の介添へにわせられました。

ト數へて茶碗を見て

イヤこれはしたり、ぬるま殿の話にかゝつて、あつたら茶までぬるまどのに致しました。汲み直してあげませう。

鬼次　イヤ〳〵最早茶はほしうござらぬ、少とこの方に話す事もござれば暫しの間、遠慮致してくれまいか。

與市　成る程そりやうまい時分から、鱸の針、よう釣り申す釣られ申す。私しは水を一杯汲んで參りませう。後でしつぼり。

兩人　エ。

與市　店を頼みまする。
　ト手桶を提げて下手へ入る。
ヽ呑みこみ顔に走り行く、後見送つて鬼次郎は、お京に
向ひ小聲になり。
　ト鬼次郎お京あたりを見て思ひ入れあつて
鬼次　そちも只今聞いたであらうが大藏卿の隱參、亭主の
噂に落付いたり、お能もおッつけ果てぬらん。その歸る
さに心をつけ隨分首尾よう目見得をすまし、直ぐに館へ
入り込むが肝要なるぞ。云ふまではなけれども館が雜
鬼次郎に、由縁ある者と知られぬこれ第一、二つには常
磐御前の御身持ちに心をつけ、源氏を忘れぬ志しと見
るならば、折を見合せ仔細を語り、主從の名乘りせよ、
その上の便り次第、某が迎ひに參り館をそつと連れ出し
參らん。後の工夫は我が胸にあり、首尾の善惡一寸一
筆、知らせの便りを待つてゐるぞよ。
お京　そりや氣遣ひなされまするな。常磐御前の樣子を窺
ひ、便りを致しまする。
鬼次　萬事ぬかりのなきやうに。
お京　そりや心得て居りまする。
　ト下手にて

ヽ瀧つ水、萬歳の道に歸りなん。
　ト下手にて太鼓調べ。兩人きつと思ひ入れ。
鬼次　ヤア、あの物音は最早お能も果てたり、下
參を待ち受け萬事首尾よう。
お京　お目見得のその時に、お館が居ては何かの邪魔、ど
こぞこゝらへ。
鬼次　幸ひこれなる茶屋の内、葭簀の蔭に身をひそめ、館
の樣子を。
お京　氣遣ひせずと、少しも早く。
鬼次　そちもぬかるな。
お京　合點でござんす。
ヽ小蔭へ忍び待ち居たり。
　ト兩人よろしく思ひ入れあつて、お京は上張りを取り、
兩人茶店の内へ入る。
ヽ地下の見物押し合ひへし合ひ、袴の町人醫者禪門、樂
屋の人數は一群に靡き申す有樣、同氣同性相もとめ、己
が道々へと立ち歸る。
ヽしばらく後より、さも靜々と立ち出で給ふ一條大藏長
成と、名に負ふ勿體物々しく、八劍勘解由が女房にかし
づかれたるうづ高さ、その身の位は備はれども、心はう

つそり空蟬や、狩人柄によらざりし、生れつきこそ是非なけれ。

ト音樂に冠せ、一條大藏長成卿烏帽子裝束、笏を持ち沓をはき公卿のこしらへ、後より鳴瀨、裲襠衣裳草履にて扇を持ち出て來り、後より仕丁朱の長柄傘をさしかけ、沓の臺を持ち出る。この內鬼次郞お京に囁く事よろしくあつて

〽鬼次郞はそれを見るよりも、お京に衣紋をつくらせ、その身はかしこに立ち忍べば、かねて手筈をきはめおく、勘解由が女房立ちどまり。

ト鳴瀨お京はちよつと思ひ入れあつて立ちどまり

鳴瀨　ムウ。それなるに、お京殿か。上にも御機嫌よい折柄。サ、これへ／＼。

〽と招き寄せ。

殿樣へ申し上げまする。これなるにお京と申しまして女藝者の狂言師、先だつて夫勘解由召し抱へます約束は致せども、表向きより御奉公と申すは禁裏表の聞えもあれば、今日の歸るさ直ぐにお供に召し連れられ然るべう存じまする、夫の指圖承はり待たせおいたる途中のお目見得、御詞を下されなば有り難う存じまする。

大藏　〽とりつくろへば大藏卿。

内々聞いた女藝者はそな者か。はてな、イヤ鳴瀨、あれが狂言を勸めるか。アノ今日も御所で見たやうな、八幡太郞冠者をやるぢやまで。

鳴瀨　さやうでござります。

大藏　さうして、そちが誕生日はどこぢや。

お京　ハイ。

大藏　誕生日はどこぢや。

鳴瀨　オ、それ／＼、あのやうに御意遊ばすは、そなたの生れ故鄕をお尋ね遊ばすのぢや。サア早う申し上げたがよい。

お京　ハイ、私しの故鄕は熊野の鄕でござります。

大藏　なんぢや熊野子ぢや。

お京　熊野鄕でござります。

大藏　熊野子とあれば定めし毛深からう。

ト思ひ入れあつて

どれ顏を見よう。オヽ顏もよいワ。今から麿が抱へたぞよ。

お京　これは／＼有り難い、不調法な女藝者、勘解由樣鳴瀨樣のお見出しにあづかり、御奉公に參るやうとのお詞、

辭退申さず只今のお目見得、ほんに冥加にかなひし仕合せ、この上ながら幾久しうお目かけられて下さりませ。

大藏　何ぢや、目をかけてくれ。ハテかはつた事を願ふな、屋敷へ歸つたら下々へ云ひ付けちぎを取りよせ目にかけてくれう。むつちりと肥えてゐる程に十二三貫はたしかにあらう。マア年格恰が氣に入つた。廿四五は女房の油のある最中と何とやらの書物にあつたが、なんと鳴瀨、女房の油といふ物を、この大藏はつい見ぬが、どのやうな油ぢや。さぞよいかざであらうな。

鳴瀨　これは又殿樣のあやない事を御意遊ばす。たにお京女郎、あのやうな事仰せある愚かしい生れ付き、夫故そもじをお側に置いて狂言をお目にかける私しが心は、樣大名の栗田口のとすべて上々のお心の足らはぬ事を作つたもの、それを御覽に入れたらばおのづと心にお恥ぢなされ、物のわきまへもある道理、よそながらの御意見になるまいものでもないものと、夫勸解由にも云ひ開かせ自らが思ひ付き。憚りながらお前樣にも隨分狂言を御覽なされ、お心をおつけ遊ばせ。なんぼお位樣でものつそりではすみませぬ世の中、早う御合點遊ばしませ。

〽虫にさはらぬ諫めの挨拶。

大藏　オウ、のつとりには狂言を見るが療治か、はてよい物が藥ぢやな。そなお京とやら、何ぞ一曲所望々々。

〽と茶屋が床几に座し給へば、途中ながらも主命は、いやとも云はれず立ち上がり。

鳴瀨　お京殿、御前樣の御意、少しも早う。

お京　ハツ。

ト下座へとり

〽なまめくや、今を昔の男舞、かへすや袖の折りもよく、さす手ひく手の拍子さへ花の都の冬なれや、雲もおさまり風もなし、松も緑の常磐山、君を守りの神國に、要らぬ御代は久方の月の桂の男山。

トよろしく舞になりて、大藏卿面白きこなしにて床几のはしに掛け、色々をかしみあつて見惚れ、ト床几より落ちる。鳴瀨皆々介抱する。鬼次郎は心を付けるこなし。これにてお京よろしく舞納め

大藏　ヤア〳〵面白い〳〵、一段と氣に入つた。扶持をくわつとくれう。喜べ〳〵。

〽はやお心も狂言に。

太郎冠者のお京あるかやい。

お京　ハツ、御前に候ふ。

大藏　次郎冠者の鳴瀬、あるかやい。
鳴瀬　ハツ、御前に候ふ。
大藏　ム、ハ、、、、、コリヤ二人とも、出かしをつたなア。
兩人　ハツ。
〽と答へる地狂言、大藏卿にかしづきて、館を。
ト大藏卿先に皆々よろしく花道へ行く。鬼次郎茶店より出て顔見合せ、笠にて顔を隠す。大藏卿檜扇にて顔を隠すを木の頭。
〽さして急ぎ行く。
ト三重にてよろしく。
ひやうし幕
ト幕引き付け、鳴物にて悠々と大藏卿先に鳴瀬入る。お京も花道へ入る、留めの木にてシヤギリ。

大詰

大藏卿館の場
同　奥殿の場

役名——一條大藏長成卿。八劍勘解由。播摩大掾廣盛。吉岡鬼次郎。常磐御前。鬼次郎女房、お京。勘解由女房、鳴瀬。腰元、松ヶ枝。同、若菜。同、呉竹。同、葉末。

本舞臺、三間の間、常足の通し二重、上下書割の杉戸。向う正面金襖、後に引き抜きうしろ雛段になる事。上下塗骨障子。上下菊燈臺、上下とも緞帳を張り、すべて大藏卿書院の體。こゝに腰元松ヶ枝、若菜、呉竹、葉末の四人居並び琴唄にて幕あく。

松枝　なんとマア皆さん、いかにお好きとは云ふものゝ、いつ〳〵とても狂言の事ばかり、熱のお強い事ではないかいなア。
若菜　さればいなア、この間お抱へ遊ばした女醫者のお京殿を相手に、明けでも暮れても狂言辯。
呉竹　鳴瀬様も相手におなり遊ばし、御前様へのお慰み。
葉末　然しなんぼう御傳授なされても日頃の御氣質、たとへて見ようなら籠へ水汲むやうなものぢやわいなア。
皆々　そりや又何でいなア。
葉末　サア、汲む間に下へぬけるわいなア。
皆々　ほんにさうぢやわいなア。
松枝　聞かしやんせ、この間も御前様が私しをお召しなさ

れ、コリヤ松ヶ枝、鷹を見ると皆の者が阿房阿房と云ひ居るが、一體阿房とは何の事ぢやとお尋ねなされた故、返答に困つたわいなア。

皆々　さうして何と云はしやんしたえ。

松枝　私しも當夏阿房ともいはれず、それは御前様かやうでござりまする、その阿房と申しまするは、さる上々の御女中様が、貴方様にお惚れ遊ばしたのを、ツイ慥かに貴方のあの字と惚れたのほの字と、それをよせてあほうと申しましたものでござりませうと申しあげ、やう／＼逃げて來たわいなあ。

皆々　コリヤよかつたわいなア、ホヽヽヽ。

ト この時揚げ幕にて

呼び　八郎勘解由出仕。

松枝　御家老の毛虫様がお越しなされた。それお迎ひ。

ト 序の舞にて、勘解由衣裳上下大小にて出て來る。

若菜　御家老勘解由様、只今御出仕にござりまするか。

皆々　まづ／＼これへお通りなされませ。

勘解　シテ御主人大藏卿には、御居間でござるか。

吳竹　イエ／＼、相も變らずお能場にて。

勘解　又狂言か。

葉末　左樣でござりまする。

勘解　今參らば狂言の相手は知れた事。コリヤ困つたものぢや。

松枝　貴方樣も先程よりお待ち兼ね。

皆々　早う御前へお越し遊ばしませ。

勘解　オ、然らば參らう。われ達は部屋へ行き、暫く休息致せ。

皆々　かしこまりました。

勘解　ドリヤ、御前へまからうか。

ト 皆々上手へ入る。

へ行く秋を、蝶や我、我や蝶かと夢の世を、悟り極めし人ならで、うつら／＼と世の中を夢に暮して現なき、一條大藏卿の館には今宵も始まる狂言盡し、舞臺は常に御居間先廊下をすぐに橋懸り、書院を樂屋鏡の間、かゝやく錦の上幕に蜀燈臺も照りそひて、奥にはどつとほむる聲、狂言果てゝ幕上げさせ、ずつと樂屋へ入間川、大名烏帽子に細濃の、姿なまめくお京が役。

ト 合ひ方になり、上手より鳴瀬着付け、狩衣金烏帽子、中啓を持ち、後よりお京大名烏帽子付け太刀、狩衣を羽織り出て來り、あたりを見て下手に仕ひ

お京　これは鳴瀬樣、これにおいで遊ばしましたか。
鳴瀬　オヽ、どなたかと思うたらお京殿、今日は御苦勞でござりまする。
お京　そのお詞で痛み入りまする。いかに狂言なればとて誰あらうぞ、八劍勘解由樣の奧方鳴瀬樣とも云はるゝお方を、私し風情が太郎冠者に使ふと思へば、どうやら氣の毒、これがほんの逆事とりも直さぬ入間川、御許されて下さりませ。
鳴瀬　これは改まつた御挨拶、わしのやうな拙ない者が相手になりて間に合はすも、こなたの皆お蔭、お師匠樣にさう云はるゝがやつぱり入間詞、稽古もさせて下されもなされずば、狂言も覺えもせず、御前で勤めも致さねば御褒美にもあづからいで、おほめもござりませぬ。
お京　イエナア申し、さう仰しやつても下されねば、返つて迷惑に存じませぬ。
兩人　ホヽヽヽ。
〽狂言ぜりふに會釋して、互ひに笑ふ折柄に。
ト兩人辭儀なして顏見合せ笑ふ。花道揚げ幕にて
呼び　播摩の大掾廣盛公御出で。
鳴瀬　なに廣盛公御入りとあれば、この由を御前樣へ申し上げて下さりませ。
お京　さやうなれば鳴瀬樣。私しは夫勘解由へ取次ませう。
鳴瀬　お京殿、少しも御前へ早く〳〵。
お京　かしこまりました。
〽鳴瀬お京も四番目の祝儀を急ぐ二千石、揚げ幕切らして奧へ行く、後へ入り來る播摩の大掾。
ト舞になり花道より播摩の大掾廣盛、立烏帽子、素袍大紋にて中啓を持ち出て來り
廣盛　播摩の大掾廣盛參つたと、誰ぞ案內めされ。
〽八劍勘解由刀ひつさげ出で迎ひ。
勘解由　これは〳〵廣盛公、よくこそ御入來、まづ〳〵これへ。
廣盛　然らば、ゆるしめされ。
〽會釋ながらにうち通る、廣盛あたりを見廻して。
廣盛　コリヤ勘解由には、異なる事を致して居るな。
勘解由　御覽下され、馬鹿殿が例の狂言、それ故只今太郎冠者を勤めてゐる所でござる。
廣盛　又しても〳〵大藏が例の阿呆、いやはや困つた者の。
ト思ひ入れあつて

勘解由近う。

〽うち招き。

トあたりへ氣を付け思ひ入れあつて

兼ねて申し談ずる如く只呑み込めぬは常磐が心底、いかに淸盛公の御意なればとて日本一の大たわけと、異名を取つた大藏を夫に持つとは、どうでも深い計略あつての事であらう、義朝が忰を招き、源氏の敵平家を討たん企みやも知れず、不審がましき事はなきか。

湛保　仰せまでも候はず、常磐が身の上萬事に心を付くれども、さして變りし品もなく、然しこゝに一つ不審と申すは夜々の揚弓、昔は物事さわがしとて、夜半すぎより弓三昧、これをきつと推量申すに、主人大藏の白痴を嫌ひ枕を交すまいその爲に、夜をふかして楊弓かと、拙者は存ずる。

廣盛　イヤ〳〵左樣な事はあるまじ。いかさまそれには仔細あらん、心を配り氣をつけて何によらず注進めされ。

湛保　その儀は拙者承知仕る。必ずお案じめさるゝな。

廣盛　まづそれまでは。

兩人　穩密々々。

〽互ひの心しめし合ふ詞の中に奥の間は、早くも納まる二千石、二人の女にかしづかれ、大藏卿立ち出で給ひ。

廣盛　これは〳〵大藏樣には、御機嫌のよい體を拜し恐悦至極に存ずる。

大藏　ヤア、廣盛々々、ようお出で、この間はふつゝり絶え六波羅へも參らぬが、變つた事もおりないか。

廣盛　今日御殿に於て其許のお噂、ちと六波羅へもお越しなされい。

大藏　折節には參りたけれど小松殿がむづかしい顔附き、難波瀬尾が顔見ると、めいようその儘痺が切れる。いつちまだ見掛けと違ひ附合ひのよいは能登殿、某さへ見るとめでたい人、旨い仁と嬉しがつて機嫌がよいな。この間も淸盛の御前で稻荷山から取つて來た、大きな松茸を出しをつたれば、コリヤ大きな松茸ぢやと皆が褒めをつた。イヤ〳〵この松茸より俺の方が餘程大きいと云うたれば、流石の淸盛もぐつとまゐつた。それで俺は裏門よりそつと歸つたぢや。

廣盛　それは仲々御手柄々々々、この廣い日本に淸盛公に詞を返す者もなきに、その淸盛の頭を押へるは御貴殿ならでは外になし。イヤ、おでかしなされた〳〵。

大藏　褒めても何にもやりやせんぞよ。

廣盛　何を馬鹿な。
　ト思ひ入れあつて
それはさうと大藏卿には、この程より狂言をお好み稽古の由、一段のお慰みであらうな。拙者もいつぞや所望申し、見物致さうと存じをつた。
大藏　もそつと早うお出であらば、この二人の者が今二千石をやりをつたに。
廣盛　それは殘念千萬な。
大藏　殘念とあらば今一遍、やつて見せうか。
廣盛　イヤそれには及ばぬ。
大藏　こゝで惡くばそなたの屋敷へ行て見せうか。
廣盛　これは又迷惑な。
　ト迷惑の思ひ入れにて云ふ。勘解由こなしあつて
勘解　イヤナニ廣盛公、左樣に仰せなされずと、これ只今のナ、劍の舞、ナ、劍の舞を見物めさるがよくござらう。
　ト勘解由舞に事よせ切つてしまへといふ仕方をする。廣盛呑み込み
廣盛　成る程劍の舞、よくござる、その劍の舞を拜見仕らう。
大藏　劍の舞ぢやないぞえ。今樣の靱猿、今の後は何とやら。それ〳〵、猿が參つて、こなたの御知行。
　ト思ひ入れにて、うしろの襖を引きぬく。こゝに長唄囃子連中居並び居てすぐにかゝる。
〽ま猿目出度き能仕る踊りの手元及びなき、水の月取る猿澤の池のさゞ波悠々たり、指す手引く手の末廣や、月にたとへし止觀の窓、こなたのお庭を見上ぐれば片割れ月は宵のほど、可愛々々とさこえたましておいて、戀の葉越しの月見ればしばし戾りて又さゆる、明日は上手物船が上手物、重たげもなくおよる君よの、船の中には何とおよるぞ、苫を敷寢の楫枕、晩の泊りは御油赤坂に、吉田通ればなア二階から招く、しかも鹿の子の振袖が、奴島田に丈長や、稀な目元にころりとせ仇ものめ、とめてとまらぬ戀の道馬場先のきやれ、色めく飾りの伊達道具、替模樣の派手奴これかまはぬの始めなり、まりの庭にも猿の神樂の猿の馬櫪神、猿と獅子とは文珠の侍宿時しも開く多紀丹、花の富貴の色見えて、榮ふる御代とぞ舞ひをさむ。
　ト振りよろしく、この中勘解由、太刀を出して切らうとするな、大藏見る故搖へ振りに紛らせ、廣盛も抜

きかけ切らうとする事よろしく、この中廣盛上手を向きあくびをする故大藏高杯の菓子を廣盛の口へ入れて、又振りにかゝる。トゞ切りかねてよろしく納まる。廣盛は上手をむき、あくびをしてゐてくさめをする。

廣盛　面白い事でござつた。ちと手前居敷へもお越したされい。

大藏　行かうとも〳〵、近くに狂言をして見せう。俺が行たとて何も構ふ事はないぞえ、昆布に山椒、茶ばかり茶ばかり。

廣盛　最前より餘程の間。拙者は最早お暇仕らう。

大藏　もういぬか、ドレ麿が送つてやらう。

ト立ち出るを勘解由とめて、この内大藏鼻を指にてほじりゐる。

勘解　その御見送りは、拙者めが仕りまする。

大藏　そんなら麿が代りにそちが行くの、

解勘　ハヽア。

大藏　か。

解勘　ハア。

大藏　カヽヽヽ。

解勘　ハヽヽヽ。

廣盛　長成公、後日面會仕りませう。

勘解　サア、お越しなされい。

ト花道へ思ひ入れあつて行くを

大藏　廣盛々々。

廣盛　何ぞ御用でござるか。

大藏　お前の丸じがこぼれてゐる。

廣盛　左樣でござるか。

ト舞臺へ來て

大藏　それ、丸じぢや。

廣盛　それは勿體ない。

ト手へ取り口へ入れて思ひ入れあつて

エヽ、いま〳〵しい。

ト花道へ行く、勘解由早く行けと云ふ

お暇申さう。

ト唄になり花道へ入る。後を見て

大藏　オヽ、廣盛はもういなれたか。丸じと云うて余が鼻糞を呑みをつた。俺から見ると餘程阿房ぢやな。アハヽヽハヽ。

トこの時九ツの時計鳴る。

あのやうな氣の短かいわろはない。このやうな面白い事を見ずにいなれた。鳴瀨、もう何時ぢや。

鳴瀨　最早九ッでござりませう。

お京　最早お寢間へ御入りあつて、然るべう存じまする。

大藏　そんならいつも常磐が楊弓をやらるゝ時分、身共は寢間へぐつと入らう。果報は寢て待て、旨い物は宵に食へ。云ひたい事は明日云へ。

ㄟ立つにも居るにも狂言に、魂ひ奪はれ大藏卿、脊引き連れて奥へ行く。

トよろしく跡り、三人奥へ入る。送りにてこの道具ぶん廻す。

本舞臺、一面建仁寺垣、上下大和葺きの屋根附き網代門、所々に紅葉の立ち木、日覆より同じく釣り枝、風の音にて道具納まる。

トごんを打ち上げ、淺黃幕を切つて落す。

ㄟ行く空の、やゝ更け渡る鐘の聲、人も子の刻はやすぎて次第に上る月代も、足元遲き廿滿頃晴間も見えぬ綿空に、館の外面を窺ひ足、腰にぼつこむ黑鞘の色も名に負ふ吉岡鬼次郎。

ト本釣り鐘、風の音にて鬼次郎大小頰冠りをして出て來り、あたりを見て枝折り戶を開けようとする。開かぬ思ひ入れ。

ㄟ礫は忍びの案内者と、拾ひ集めて一握り。ㄟ打込む小石ばら／＼、寢られぬ儘にお京が耳へ戀しと入つたる知らせの小石、庭の飛石さし足に。

トこの内鬼次郎石を拾ひ礫を打つ。お京雪洞を持ち庭下駄にて出て來り、鬼次郎思ひ入れあつて小聲にて

鬼次　そこへ來たりしはお京ではないか。

お京　さう云はしやんすは鬼次郎殿か。

鬼次　いかにも鬼次郎、サ、こゝを早く開けてくりやれ。

お京　アイ／＼。

鬼次　常磐御前の心底、一向大藏に身を任せ源氏の事は思ひも出さずと知らせの文、いよ／＼それに相違はないか。

お京　さればいなア、この中より立ち居そぶりに心をつけるに、いつかな微塵悲しさうな氣色もなく、髮形つくらうて大藏卿に猫なで聲、何が又大藏卿は音に聞えたぬるま殿、涎たらして甘やかし、それ故にあの如く夜すがらの楊弓、源氏の事思ひ出す色もなければ、このお京は鬼

次郎が女房と名乘らうにも折もなし、うかつに名乘るは却つて鞍馬にござる若君の、御爲にも如何ぞと、思ひし故に細々書きし知らせの文、大概それとよめたでござりませう。

鬼次　オヽ出かしたり女房。云ひ甲斐なきは常磐御前、さういふお心とは露知らず結構人と名に高き、大藏卿の館に入り込み給ふ天晴れ發明、源氏の味方を狩り集め運の開くる常磐御前とたもしう思ひしに、見下げはてたる徒ら女。その性根を知るからは、そちをうか〳〵この屋敷へ長居さゝうか。これより直ぐにつれ歸らん。

お京　サヽそのお腹立ちは御道理なれど、これには何ぞ樣子があらうも知れず、事の實否を正した上、いよ〳〵不義に極まらば、御諫言なと申し上げ、何卒源氏の再興を。

鬼次　たとへ御諫言申すとも性根の腐れた常磐御前、主でない、家來と思へば穢れしこの屋敷、長居は無益、女房來やれ。

お京　お前が常々云はしやんした、短慮功をなさずとは、この事でござりませうぞえ、心を落ち付け思案かへ、常磐御前に御目にかゝり、とつくりお諫め申して下さんせ。

鬼次　其方が詞は尤もなれど、うかつに諫言致されぬ。モシお聞きなく平家へこの事聞えなば事の破れ、憎さも憎き常磐御前、寢間へ參つて樣子を見屆け、誠不義に極まらば、討ち果すが義朝公へ家臣が忠義。

お京　スリヤ常磐樣をそれまでに。

鬼次　御家の大事にや變へられぬわえ。

お京　そんならどうでも。

鬼次　性根の腐つた上からは、存分にして立ち歸るが義朝公へ御追善、常磐御前が寢所へ案内しやれ。

お京　アイ、合點でござんす。

ト うぢ〳〵行きかける。

鬼次　コレ、ひそかに〳〵。

〽しめし合はして兩人は、寢所をさしてしのび行く。

ト兩人思ひ入れあつてお京先に鬼次郎上手の門の内へ入る。この道具ぶん廻す。

本舞臺、四間通し塗緣欄間、一面に御簾をおろしあり。高欄附きの塗手摺、高二重緣附き。塗段、上手一間障子屋體、下手紅葉の立ち木、所々に菊の下草、紅葉の釣り枝、奥座敷の體よろしく道具納まる。

〽常磐御前のおはします一間の内は燈火も、誰かと照す的の星、影はこなたに腰障子、うつるくり矢の君しらず、忍びよつたる鬼次郎夫婦、片づを呑んで窺ひ居る。

ト鬼次郎お京下手より出て身構へして二重へ上り御簾を巻上げる。向う一面金襖、瓦燈口。常磐御前は十二一重にて揚弓箱弓を持ち揚弓をしてゐる。上手太鼓を置き、この太鼓仕かけにて清盛の繪姿しこみある矢をつけてある。この脇に銀雪洞附きの燭臺照らしある。

〽常磐御前は一心不亂、脇目もふらず固める手前、いとゆら〳〵と引きつめて狙ひ程よく放せる矢は、かつしと響きて錐穴に、はぶくらこめて止まれば。

ト常磐よろしく矢を放し弦にて的を通す。これを常磐嬉しきこなしあつて

常磐　嬉しや通り矢、忝なや。

〽としたり顔なる御氣色、鬼次郎さしも怺へかね、つゝとよつて弓ひつたくり。

ト鬼次郎常磐の弓を取り

鬼次　ヤア見下げ果てた恥知らず、吉岡鬼次郎幸胤、よも見忘れはあるまい。お京といふも即ち女房、夫婦の者が心を砕く、その甲斐もなき人非人。

〽と怒れる聲に顔振り上げ。

常磐　オヽ珍らしや鬼次郎、揚弓に心をうつしゐて、いつの間にやら見えたやら、其方の參りしを知らざりしぞ。

〽云はせもはてず怺へぬお京。

お京　モシおつしやるな常磐様、そんなあまッこい減らず口、聞いてゐる主ではないぞえ。エヽ、ほんにお前様はなア。

トよろしく思ひ入れ。本調子の合ひ方になる。

この揚弓をなさるゝ手間で、なぜに誠の弓を張り、心の尖り矢引きつめて、源氏の恨みを晴らさうと思ふ心はなぜつかぬ。大事の〳〵義朝様のお情を忘れ、二度三度の嫁入りなさるゝお心ではその筈ながら、天道様は怖うはないか。恐ろしいとは思はぬか、人の報いは遠からぬ七間半の揚弓より、當りは近い天の罰、神や佛に憎まれても、お前は何ともないかいなア。

〽涙交りに云ひ並べる心の直矢ぞ誠なる、常磐御前は打ち頷き。

常磐　尤もなる恨み事、惡うは聞かぬさりながら、世の中の人の心の竹ならば、割りてや君に見せましと云ひけんも外ならず、主を大事と思ひつめし、誠の道は道ながら

家来は家来の程々にて深きに至らぬ小笹の茂り、主人は主人の心にて、千尋の竹の大節は、外から知れぬ理りなり。

鬼次　ムウ面白い心の竹、この鬼次郎が今こゝで、ぶつてぶつてぶちくだき、ゆがんだ竹を、火吹竹にしてくれう。

〽たゝみかけて打つ腕、腹立つ息をつぎ弓の弭もくだけ飛散つたり、常磐御前は起上り髪かきなでゝ襟繕ひ。

　ト文句の通りよろしくあつて

常磐　オヽ出かした頼もしゝ。時世につるゝ人心、裏の裏なる恐ろしさ、木にも萱にも心おかれ、深き疑ひ許してたべ。我れを憎しと思ふより、なぐり情もあら弓に、たたき伏せたる主思ひ、誠があらはれ。

〽嬉しいぞや。

今までつゝむ常磐が胸、語り明す恥かしさ。

〽一通り聞いてたべ、取分きて悲しきは、二度三度の嫁入りと、[illegible]御前が[illegible]御前にさげしまるゝ面目なさ。武士の身の上に臆病者よ腰ぬけよと、指さゝるゝにもよも劣らじ、辛きは忘れぬ昔語り、義朝公に別れしより忘れがたみの三人の若、兄は六ツ中は四ツ、弟は未だ乳呑兒の、泣く音を忍ぶ伏見の里。

〽雪の下折れ消えやらで、清盛に追立てられ、大和の宇田まで逃げ退きしを。

遂には探し出だされて、うとましや清盛が。

〽我れにむたいの戀慕の闇、我れは子故のやみ〳〵と、口說き落され女の道を、捨てゝ拾ひし子供の命。

ア、歎くまじとは思へども、夫の敵の清盛に枕並ぶる私語、虎狼の叫ぶより耳にこたへてものすごく、鐘の響も悪魚毒蛇の鱗に寝伏しする心、君傾城の勤めさへ厭なと思ふ男には握るとやら、それに劣りし我が身の因果、これも我が子の命助かりし代りぞと心で心取り直し、辛きながらも、添ひ寝の床、泣きたい涙笑うて見せる胸の苦しさやるせなさ、いかなる地獄の責なりともこの辛さには勝るまじと、思ひ暮せし年月も隠しつゝむ心の底、それさへせつなかりつるに、今といふ今夫婦の楽に心のありたけ打ちあけて、今まで胸にこたへたる自らが心の内、どのやうにあらうぞいなう。

〽くるしいわいのと憂さ辛さ、語るにもなほ涙なり、鬼次郎も哀れに服し、しほるゝ心をとり直し。

鬼次　御物語りはさる事ながら、清盛の手を遁れ、この館にましますは時節の至ると申すもの、それになんぞやうか

うかと明かし暮して遊興業。朱に交はれば赤しとやら、長袖の家に馴れ武家の育ちを忘れ給ふ、あさましい御所存やなア。

〽あさましさよと恨むにぞ。

常磐　女でこそあれ義朝公の、御胤をも産み落したる自ら、平家に恨みの一念は心に籠めしこの楊弓、慰み事にこそよせて誠は平家を調伏の弓矢ぞよ。弭を白き絹に巻きしは源氏の白旗押し立てゝ、本はずうらはず鳩頭、正八幡を頭に戴き。

〽敵に向ふ心ばせ。

弓矢の尺は二尺八寸、二十八宿の星と敬ひ、九曜をかたどる九寸の矢尺、矢竹心を張りつめて一矢は今若、乙矢は乙若、牛若の名によせて丑の常磐が時詣で、三つの鐵輪はあらねども、念力通つて我が願ひ。

〽思ひの儘に金貝の矢數は一百五十一、女に二挺の弓を引かせしは、名は清盛の淸からで、身體を汚せる泥書の、百四十九の骨々も碎けよ折れよと怒りの炎、赤き朱書の九十一、九十くげんを見せしめ給へと、狙ひの矢先は錐穴に丁と射つけし。

調伏の證據を見せん。

〽的の釣り糸かなぐり捨て、堋のくろかは取り給へば、生けるが如き清盛の姿を畫きし胸板に、矢疵は通りし女の一念、健氣にも亦勇まし。

ト太皷の黒皮を取る、これに清盛の繪姿へ矢當りゐる。

兩人びつくりして平伏して

鬼次　そのお心とは知らずして

お京　出るまゝの惡口雜言。

鬼次　それのみならず勿體なくも、打擲せしは某が一生の不覺、この上は御足下にかけられ踏みにじつて給はるが、この上のお主の御慈悲、御高免下さりませう。

〽お主の御慈悲と詫び入るにぞ。

ト手をつき詫びる故常磐思ひ入れあつて

常磐　誤つて改むるに憚る事なし。忠義を思ふ諫めの杖、折れたるこの弓は正八幡の御手を出だし、我れの心を勵まし給ふと思へば猶更有り難し。とは云ひながらあさましや、敵にもせよ仇にもせよ、後の夫の名はのがれず、夫は天に例へし物、敬ひまつる心もなく女のざいに恐ろしき、人を呪ひの楊弓は積るこの身の未來の罰、我が身は覺悟の上ながら子供の身にや報はんかと、思ひ案ずる苦しさを、推量してたもいなう。

〽かきくどき〳〵詞も涙の忍び泣き、鬼次郎夫婦も御道理と涙のまき矢ばらばらと、的に亂るゝばかりなり、藪きの詞のもれけるにや、ねらひ窺ふ八劔勘解由、つかづかと走り出で件の繪姿ひん抱へ。

ト この内下手に勘解由居て以前の繪姿を手早く取り

勘解 ヤア、聞いた〳〵、常磐御前が計略にて、清盛公を調伏の下心、この通り注進する、待つておれ。

〽云ひ捨てゝ駈け出だす、こなたの一間さらりと開け、どつこいやらぬと立ちふさがり、かせに鳴瀬が甲斐々々しく。

ト 件の繪姿を持ち駈け出すを上手より鳴瀬出てゝ勘解由をとめ。

鳴瀬 コレ〳〵勘解由殿、うろたへてか、常磐様が科人なら、大藏様も同じ科、善にもせよ惡にもせよ主人の難儀を訴ふとは、武士の道はどこで立ちますえ。

〽云はせもはてず。

勘解 ヤア默れ、アノ大藏がなんの主人。かねて清盛と心を合はせ常磐はじめ大藏もろとも搦め取り、この一條の家は勘解由が治むる。妨げ致さば女房とて、免しはせぬぞ。

〽つきのけ〳〵駈け出だすを、どつこいさうはと立ちふさがる、鬼次郎つッ立ち。

鬼次 ヤア、吉岡鬼次郎これになくばイザ知らず、行かるるものなら行つて見よ。

〽大手をひろげつッ立つたり。

勘解 何を小癪な。

〽互ひに刀拔き合はせ、火花を散らして上段下段。

ト 兩人きつと見得、これより大小の鳴物になりよろしく立廻りあつて、勘解由たぢ〳〵と後の御簾によりそふ。

〽後の方の障子越し、勘解由が脇しつかと取り、ぐつとつらぬく氷の刃、うんとのつけにそりかへる。

ト これにて御簾の中より長刀出て勘解由をつらぬく、鬼次郎これはと愕り。皆々思ひ入れ勘解由たぢ〳〵と倒るゝ。

皆々 これは。

〽常磐主從顔見合せ、暫し詞もなかりけり、一間の内に聲あつて。

大藏 ヤレ方々驚くな、一條大藏長成が、不忠の家來を誅伐なるワ。

〽簾をさつと巻き上ぐれば、さも優々と大藏卿、日頃にかはる御よそほひ、血潮したゝる長刀かいこみ、すつくと立つたる有様は、勇しくも亦たくましし、長成かされて鬼次郎にうちむかひ。

ト御簾を巻き上げる。内に大藏卿織物の鎧下、大口にて長刀を持ち高床几にかゝり居る。これを見て皆々思ひ入れあつて

事辨へぬ長成が、勘解由を討つて捨たるかと、鳴瀬が驚き二つには、我が心底を語り聞かさん。

〽うけたまはれと座し給ひ。

ト笛入りの合ひ方になり

元來某は源氏の果葉、仔細あつて長袖に交はり、一條大藏長成と呼ばれ、人なみ〳〵の身なれども、文武の道を表に出ださず、若年よりの作り阿房。

〽うつけとなりて世を暮らせば、源氏にも愛せられず又平家にも憎まれず、世に諂はぬ我が儘暮し。

それを知らざる八劔勘解由、主人を白痴と見限りて賤盛と心を合せ非道の企み、憎くい奴とは思へどもこれしきにァ、せわと、知らぬ顏に捨ておきしが見遁しならぬ今夜の仕儀。二十年來長成が作りこんだる拵らへ馬鹿、あらはしたるは源氏の爲、鬼次郎夫婦我が詞をよく守り、牛若とやらに傳へてたべ。

〽人間の盛衰は、只天運のなす所。

六條判官爲義は、己が智謀にからまされ。

〽秋の木の葉と散りて行く、又もや嫡子左馬之頭、待賢門の夜戰に源氏の勇士もみなちり〳〵、清盛に追ひかけられ東國さしておちこちに、遂にその身も尾張の國長田が館で落命し。

親と云ひ子といひ、智惠自慢武勇自慢に、あつたらその身を惜しむにも甲斐ぞなき。この人々とは事替り、でかされたるは常盤御前、唐土を尋ぬるに操を立てゝ名を殘す、女は類い多けれども、夫の爲子の爲に、不義者の名をとつて、女の道を背きしは即ち背かぬ貞女の鑑、異國の人も傳へ聞かば、などかこれを賞せざらん。かゝる稀代な女房を宿の妻とは身が果報、阿房に繪のつく長成が、命にかけて預つたり、心安かれ鬼次郎夫婦、なほ牛若に心を合せ再び源氏の恥を雪げ。何事も大藏は知らぬ顏なり、白旗の、榮を見せよ方々。

〽殘る方なき御詞、世にたのもしく有り難し、手負ひの勘解由起き上り。

勘解　はかる〳〵と思ひの外、かへつて馬鹿にはかられしか。死んでも褒美の金がほしい。

〽己が名前の八劔に身をはたすこそあさましき、祠の内に勘解由が妻、夫の差添へ引き抜いて咽喉にがばとつき立てゝ、苦しき息をほつとつき。

ト勘解由口惜しきこなし。鳴瀬思ひ入れあつて差添へを引き抜き、咽喉へ突き立て苦しき思ひ入れあつて

鳴瀬　あさましや勿體なや、心愚かな御主人と年月あなどり暮せしさへ、大方の罪なるに悪事に組せし我が夫、お手討ちにあひたるは、まだも冥加にかなひし最期、御手にかゝり死したればこそ、一大事の御物語り。

〽聞いて嬉しきこの鳴瀬。

心はそれに組せねど、この御大事を聞く上は、一日でも長らへては外へやもれんと人々の、御疑ひの悲しさと。

〽一つは二世と契りたる、夫の後追ふ死出の旅。

冥途にて巡り逢ひ、意見を加へ、善心にひるがへさせ。

〽せめて草葉の蔭よりも、御恩を報ずる御奉公。

それ故にこの自害、只何事もお許されて下さりませ。

〽と云ふがこの世の名殘りにて、夫の死骸を枕にて眠るが如く息絶えたり。

ト鳴瀬こなしあつて落ち入る。

大藏　强慾非道の勘解由にひきかへ、鳴瀬が最期、いさましいさまし。鬼次郎近う。

鬼次　ハツ。

ト大藏卿、袂より袋入りの太刀と短冊とを出して

大藏　これこそは源氏の重寶友切丸、蛭ケ小島におはする頼朝へ送り物、まつたこの短冊は、鞍馬に身を忍ばれし牛若へ傳へてくりやれ。

鬼次　ハ、ア、有り難きこの賜物。子の日さす野邊に小松のなかりせば、千代の榮をいかに問はまし。これなる古歌を送り物とは。

大藏　今平家に威を振ふ淸盛のなき後に、小松の内府重盛情をもつて人をなづけ、中々もつて容易に滅ぶ平家にあらず。それも小松の枯れし後時節を待つて旗擧げせよ。源氏の爲には平家は怨敵、汝が爲にも主君の仇。

鬼次　やがて本望。

大藏　コレ。ナ。

鬼次　ハツ。

大藏　コレ。

〽かの唐土の會稽山、旗擧げありし呉のたとへ、世に傳

はりしもかくやらん。
鬼次　重々あつき御仰せ、これより鞍馬へたち越え旗擧げなさん、御心安かれ大藏卿。
〽さも勇ましく云ひのぶる。
大藏　天晴々々、鼠とても元の阿房にたちもどり、鼻の下の長成と笑はゞ笑へ云はば云へ、命長成氣も長成、たゞ樂しみは狂言舞。
〽曉の明星が西へちらり東へちらり、ちらり〳〵とする時は。
ト本釣り鐘を打つ。鬼次郎思ひ入れ。
ありやモウ夜明け、夜明けぬ内に早う去ね。
〽去なうとも戻ろとも何ともそなたの御はからひと、言うては小腰に抱きついて。
常磐　名殘が惜しや。
ト鬼次郎夫婦の思ひ入れにて云ふ。お京つか〳〵と出て
お京　モシ。
トかけよるを大藏さゝへて
〽きりゝんない、きりゝん〳〵限りないと、小舞に事よせ暇の御諚。

トよろしくあつて
常磐　ハヽ、有り難きその御詞。
鬼次　何とお禮を申さうやら、
お京　有り難う
三人　存じまする。
ト三人辭儀をする。
大藏　禮には先ばぬ、とつとゝ去なしやませ。
鬼次　はやおさらば。
〽さらば〳〵と立ち上れば、手負ひの勘解由むしやぶりつき。
ト勘解由、起き上り鬼次郎が持つたる袋入りへ思ひ入れ。鬼次郎これを突きやる。大藏、勘解由を引き廻して。
大藏　ヤレ待て兩人、はなおけせん。
〽水もたまらず打ち落し。
ト勘解由の首を打ち落し、刀の先へ突き通して
平相國清盛が首を、まツこの通りつらぬけよ。
鬼次　ハツ。
ト思ひ入れ。大藏兩人を見送りながら
大藏　ムヽ、ハヽヽヽヽ。

〽勇み勇んで。

ト三重カケリにて、よろしく。

ひやうし幕

鬼一法眼三略卷（終り）

三浦大助紅梅靮

解説

享保十五年二月、竹本座の初演。作者は長谷川千四。

頼朝の旗揚を中心にした五段物で、大序は七騎落の件から、烏帽子折り大三郎に對面の件。次は百六つの三浦大助が祝ひに一門參會の席で頼朝旗揚の事を聞き、直に一同味方を一決するところ、その頃大坂に非常に長命な男があつて、官から祝ひを貰つたので、この淨瑠璃はそれを當込んだものださうである。第二段は文藏が俣野與市討死の物語りをするところ。金貸九郎兵衞實は八丁礫の喜平次が、源家の爲に七百兩を調へて死ぬ、殘り三百兩を俣野文藏が調達する事になる。

第三段が本卷へ收錄した「石切梶原」で、日本の戲曲では敵役と相場がきまつてゐる梶原を、立役にした作意。また義太夫の三段目は、大抵金襖の御殿か、それでなくとも家の中ときまつてゐるのに、これだけは戸外なのが記錄破りとして評判になつてゐる。第四段は一門でありながら敵となつた畠山重忠が、三浦の衣笠城を討つ事になる。大助の身替りに六郎太夫が切腹するといふ件である。また玉藻の前の精が玉房御前の姿をかり、狂氣となるのを、三浦之助義明が靜めるといふ歌舞伎めいた筋もある。爰でも梶原が、ひどく物の解つた、情ある武士になつてゐる。第五段は梶原と重忠が頼朝の味方となり、大場と股野を討取り、再び平家追討の軍を起すところで終りになつてゐる。

歌舞伎に入つたのは、三段目だけで、それも文化になつて、いろ〳〵珍らしい院本を探し廻つた結果なので、初めは二代目嵐吉三郎、後には三代目中村歌右衞門も演じた。大抵は本文の鎌倉星合寺でやるが、時には鶴ケ岡八幡でやる場合もあり、七代目團十郎なぞは、手水鉢の代りに狗犬を切つた事もあつたさうである。江戸では一向歡迎されず、五世宗十郎や三世吉三郎がやつた位なもので、明治になつてからは先代左團次が二三度演じたが、今は却つてこの役を得意の俳優が多い。

三浦大助紅梅靮

序幕　　六郎太夫内の場

役名——青貝師六郎太夫。同娘、梢、番場忠太。御臺、葉末御前。眞田文藏。

造り物、平舞臺、淺黄幕、松の釣枝、本釣鐘、合ひ方にて、幕明く。

ト侍ひ、忠太、大小にて、家來二人、向うより出て

忠太　コリヤ〳〵、家來共、源氏の落武者、徘徊いたすにつき、見附け次第、捕り押へなば、褒美はどつしり遣はす程に、必ずぬかるな。

家來　心得ました。

忠太　サア〳〵參れ。

家來　ハア、。

ト上手に入る。向うより、眞田文藏、奥方葉末、好みの拵らへにて出て

文藏　御臺さま、サ、、お越しなされませ。

葉末　コレ、文藏、落武者ゆゑ、今は薄の穗にもおちる身の上、そなたの心遣ひ、推量をしてゐるぞや。

文藏　なにも、お氣遣ひなされまするな、とんとお心安ういたさせまする。

忠太　ヤレ、來いやい。

ト上手より、忠太、家來を連れて出て來たり、

ヤア〳〵、うぬは正しく眞田文藏、奥方もろ共、搦め捕る。覺悟いたせ。

文藏　ヤア、小ざかしきうぬ等、ならば手柄に捕つて見よ。

忠太　者共、ソレ。

家來　ハア、。

ト色々、立廻りあつて、上手へ皆々入る。淺黄幕を、切つて落す。返し。

造り物、二重、上手障子屋體、下手世話塀、眞中に暖簾をかけ、いつもの所、門口、二重下手に、青貝細工、色々置きある。すべて、六郎太夫住家、醒が

が非の唄にて、道具納まる。

ト忠太、家來附き添ひ、下手より出で

忠太　誰ぞあるか、頼まうぞよ〳〵。

ト奥より娘、こづゑ出て

こづ　ハイ〳〵、これはお客さまでござりますか。

忠太　オヽ、身共は、青貝細工を求めに參つた。

こづ　マア〳〵お入りなさりませ。

忠太　オヽ、免るしやれ〳〵。

家來　コリヤ〳〵娘、茶を持て、莨盆を持て。

こづ　ハイ、畏まりました。

〽愛想に汲み出す澁茶より、濡れかゝりし花香なり。

忠太　イヤ、さて、あでやか〳〵。

こづ　お望みは、どのやうな品でござりまする。

忠太　イヤ、望みの品は青貝より、その元の貝が望みぢやわい。

こづ　なにをじやら〳〵おつしやりまするぞいなア。

ト奥より、六郎太夫出て來たり

六郎　娘、なにごとぢや。

こづ　オヽ、お前はとゝさん。

忠太　惡い所へ。

六郎　ようお出でなさりました。

忠太　イヤ身共、青貝を求めには參つたなれど、ちと心もせけば、又々、出直すといたさう。奴、早く參れ早く參れ。

ト兩人、下手に入る。

こづ　それはさうと、とゝさま、わたしが許嫁の夫、文造どの、便りのないのはどうした事でござんすえ。

六郎　今にも便りがあらうほどに、なにも心配せぬがよいぞや。それはさうと、今の仕事を仕舞ひませう。

〽納戸の内に入りにけり。後にこづゑはしよんぼりと、物思ひなる獨り言。

こづ　アヽ、思ひ廻せばおちきないわたしが身の上、かゝさんに、死に別れしより、文藏さまには家出なされて、長の年月、とゝさまと、たゞ二人、今日は汚無事な顔見る事かと。

〽毎日頼む神佛、願ひの綱も切り放し。

こづ　もしも、この儘逢はれぬなら、なんとせうぞいなア。

〽娘心の後や先、案じ煩ふ折柄に。

ト向うより文藏、葉末出て

文藏　モシ、奥さま、向うの家が、拙者の由縁の者の住家、道々も申す通り、必ず共に悟られぬやう。
菜末　合點ぢやわいなう。
文藏　サア〳〵ござりませ。
　ト門口へ來たり
文藏　頼まうぞや〳〵。
こづ　どうやら覺えのある聲は。
〽なに心なく戸を押し明け、見合はす互ひの顏と顏。
こづ　ヤア、お前は文藏どの。
文藏　こづゑどの、久しや〳〵。然し女中を同道いたせしが、通つても苦しうないか。
こづ　ハテ、お前の女房の內ぢやもの、連れ立つてお入りなされませ。
文藏　然らば免るしやれ……久し振りの對面に、そなたも無事で悅ぶぞや。親父さまにも御息災か。
こづ　アイ、とゝさまも御達者でござりまする。お前も變らぬお顏を見て嬉しいなれど、見れば連れのお女中さま、どうやら樣子がありさうで、わたしやお前の心の中が案じられるわいなア。
〽娘心のどこやらに、赤らむ顏を見て取る文藏。

文藏　成る程、その詞は尤も。家出いたして長の年月、親父さまの御介抱、禮は詞に盡し難し。然し便りもいたさねば、その方の心に變りがあらう。
こづ　いづ方に長う別れてをりましても、わたしやお前の女房との言ひ約束は、忘れはせぬわいなア。
文藏　ムウ、先づは安堵、それにつき急にその方へ頼みがあるが、なんと聞いてはくれまいか。
こづ　この身に叶ふ事なれば。
文藏　先づは滿足。斯うぢやわい……なにをか包まん、ここに連れ立ち來たりしは、馴染を重ねし傾城なるが、廓を連れ出し世を忍ぶ身の上、誠文藏が妻とあらば、身受けの金の三百兩、なにとぞそなたが身を賣つて、金を調へてくれまいか。この傾城を身受けいたさば、その上その身もとんと受け戻し、盡未來夫婦の緣、さなくばこれきりこの場を立ち退き、殊よつたら相果てん。サア、夫を助けうと殺さうと、そなたの心只一つ、返事はどうぢや。
〽思ひがけなき難題に、なんと返事も差し俯向き、途方涙にくれゐたる。やう〳〵に顏を上げ
こづ　最前からのお話しを聞くにつけても、わたしが悲し

さ、その女中ゆゑに入る金を、調へねばこれまで焦れし夫婦の縁も、これ限りと、あつて調へるあだてはなし、とゝさまに話しもならず、この身が勤めにいた時は、お年寄らしやんしたとゝさんに、誰か起き臥しの介抱せうぞ。孝を立てれば夫へ義理立たず、わたしや死にたい〱わいなア。

〽親と夫にからまれて、娘心の後や先、涙より外の詞もなかりけり。

文蔵　いつまで云ふてもわからぬ事、人目に立つては身の大事。サア〱どうぢや。こづゑさらば。

こづ　アヽ、申し待つて下さりませ。お前の詞を聞きわけて、勤めに参りまするその代りに、矢張りお前の女房と云ふて下さりませいなア。

〽ワツとばかりに泣きゐる娘、文蔵も不憫さを胸に納めて打ち頷き

文蔵　オヽ、出かす〱、それでこそ文蔵が誠の妻、たとへこれなる傾城を受け出すとも、そなたは誠のわが女房、サア〱早う用意々々。

こづ　アイ〱。

〽泣く〱こづゑは立ち上がる所へ奥より父の聲。

六郎　娘々。

〽と莨盆さげて納戸を立ち出る、文蔵は頭を下げ

イヤなに、娘を勤奉公にやるに及ばぬ。その三百両調へてやりませう。

こづ　お前はとゝさん。

文蔵　舅どの、スリヤ最前からの樣子をば。

六郎　残らず納戸で聞きました。その以前、武士奉公を望み、家出せられて長の年月、先づは堅固で目出度い目出度い。

文蔵　舅どのへは音づれもせず、不孝の段は眞平御免下さりませう。

六郎　その挨拶は後での事、傾城狂ひに要る三百両、娘に勤め奉公させ、金調へんとは偽りであらう。

文蔵　なんとおつしやる。

六郎　傾城と姿形は似せたれど、主人の爲の軍用金、連れ立つ女は主人の奥方、なんと違ひはあるまいがな。

文蔵　ハアヽ、遖れの御眼力、この上はなにをか包まん。石橋山の戰より後をくらまし、身を忍ぶも、再び源氏の白旗を。

六郎　ハテ、壁に耳ある世の譬へ、隱密々々。その金子、

わしが調へてやりませう。
文藏　スリヤ、お聞き屆けを。
葉末　有り難うござります。
六郎　娘、奥の刀箱を取つておぢや。
こづ　ハイ〳〵。
〽アイと、いそ〳〵奥へ入る。
葉末　親父どののお心遣ひ忘れはおかぬ。忝なうござるぞや。
〽こづゑは箱を持ち出て、父の前にさし置けば。
六郎　よい〳〵、そんならこれを持つて、行て來るぞや。
こづ　そんならとゝさん、わたしも一緒に。
六郎　羽織を取つておぢや。
こづ　アイ〳〵。
六郎　そんなら、留守を頼みましたぞや。
文藏　心得ました。
こづ　そんならとゝさん。
六郎　娘、おぢや。
〽星合寺へぞ、急ぎ行く。
ト三重にてよろしく

幕

大詰　星合寺の場

役名――大場三郎景親。股野五郎景久。眞土八郎。濱名治郎。井上早太。土肥庄司。畑八郎。相澤三郎。八木下六郎。下田十郎。伊東藤内。熱海九郎。青貝師、六郎太夫。同娘、梢。梶原平三景時。

造り物、後ろ淺黄幕、上手出語り臺、三味線入りの鳴り物にて幕開く。
ト下手より仕出し二人出て
仕一　なんと太郎兵衛、今日はえらい天氣ではないかい。
仕二　このお天氣で、星合寺が賑やかな事ぢやわい。
仕一　その星合寺へ今日は、梶原さまや、大場さまがお越との事、なんと拜みに行かうぢやないか。
仕二　オヽ、よからう〳〵。
仕一　サア、行かう〳〵。
ト上手へ入る。
〽果てしなき、東路の何處はあれど名に照らす、星合寺の小松原、老木も千代の立ち添ふて、花を咲かせる御佛

の響ひは四方に名も高き、弦掛の觀音とて、弓矢取る身は殊更に、歩みを運ぶ靈地なり。

ト淺黄幕を切り落す。

造り物、平舞臺、三間の間、深見に大門を見せ、上下筋塀、よき所に、青目の大手水鉢、上手に櫻の大樹、下手に矢切竹、櫻の吊り枝、すべて、星合寺、馬場先の體、諸大名、射場にかゝり、稽古の體にて、床几にかゝり大弓を持ち居る、道具止まる。

治郎 イヤ〳〵、眞土どの、大島どのには、中々の上達でござるわい。

早太 この上は、身共が代つて參りませう。

八郎 いかさま、先刻から餘程の稽古。

九郎 濱名どのは、われ〳〵より遙かに上弟子。

登内 よろしく御傳授下さりませう。

六郎 イザ、射術にかゝりませう。

十郎 ア、これは〳〵、兩方へ滿月に引き矧り合せるが一手でござる。

庄司 拙者が代つてまゐりませう。斯う引き絞つてこれが秘傳でござる。

三郎 これは〳〵、御深切なるお詞でござる。

八郎 イヤ、又若年の方々は、稽古召さるがよくござる。

九郎 われ〳〵は、この度の合戰に、手柄もいたした者でござる。

八郎 部家住みの若者とは、一口には申されまい。

早太 先程よりの雜言、こゝにてわれ〳〵に射勝て見るか。

九郎 面白い、勝負いたさう。

早太 見事その方が

八郎 但し、閉口して誤るか。

皆々 サア〳〵〳〵、なにを小癪な。

ト双方、詰め寄る。

庄司 先づ〳〵お待ちなされい。稽古は武術の吟味、あながち人に射勝たんと、思ふばかりではござらぬ。工夫の心すはりなば、自然と的中いたすもの、功を積むが修業でござれば、遺恨がましき事、なきやういたされよ。

〽血氣にはやるこの場の爭ひ、取り治めるその所へ、當國の住人大場の三郎景親、同じく舍弟、股野五郎景久、石橋山の合戰に打ち勝ち、勇みに勇み、馬場先に差しかゝる。

ト景親、景久家來二人連れ、向うより出る。

太郎　これは〳〵大場どの、股野どの、御兄弟連れにて御參詣でござるか。
庄司　先づ〳〵これへ。
景親　いづれも早き御出仕。
皆々　先づ〳〵。
〽靜々と打ち通る。
景久　いづれもには、觀音の利生を頼んで高名せんと、この射架にて射術の稽古でござるかな。
九郎　佛の利生はともかくも、蛭が小島の頼朝が軍を起す今の時節、それゆゑ、武藝を勵みまする。
景親　いかさま、よきお心がけ。流人づれの頼朝が、この大場に向ふなどとは、富士の山をせゝる土鼠、生擒にして日南責めにいたしてくれぬが殘念至極。
五郎　今にも殘黨合戰に及びなば。
八郎　股野どのが、眞田を討ち取りし如く
皆々　高名いたしたうござりまする。
九郎　さりながら、その合戰は夜軍にて、眞黑闇の掴み合ひ。
早太　上が股野か、下が股野か。
十郎　御運がよさの勝ち軍。

庄司　眞田を討ち取りし手柄ゆゑ、六波羅どのの御感に預かり、比類なき高名と、世上の取り沙汰。
景親　首取つた弟の手柄、各々にもちと、あやかり召され。
庄司　成る程、誰れもあやかりたう存ずる。アレ〳〵向うへ來る鎗印に短册形を打ちたるは。
景久　未熟なる平三景時、挨拶するも面倒なれど、最早これへまゐる樣子。
景親　ア、是非がない、連れ立つて參らずばなるまいわい。
〽呟く內に並木の葉蔭越しにきらめく鎗印は、金唐革の短册形、和歌に心はやさしくて勇氣は鬼もとりひしぐ、梶原平三景時、心も深き大願のそれと見るより大場兄弟。
ト梶原好みの上下、小姓二人、家來大勢、茶辨當、鎗色々持ち出る。
景親　これは〳〵梶原どの、御參詣でござるか。拙者存じたらば、御同道仕らうもの。
平三　ホヽウ、大場どの、股野どの、打ち揃ふて御信心でござるか。いづれもには射術の勵み、イヤ御神妙でござる。
庄司　梶原どのも御參詣でござるか。

皆々 先づ〳〵これへ。
平三 然らば御免。
〽と打ち通り、威儀を正して大場に向ひ。
誠にこの度、石橋山に勝利を得しも、弓矢を守る弦掛の觀世音の利生は、正に現はれたり。猶、この上にも佛の力、願するに若くはござらぬ。
景久 イヤ、ナニ梶原どの、觀音の力を頼んで軍に勝利とは、武士の詞に甘い〳〵。兄を始め、股野五郎、遂に普門品一巻讀んだ事はなけれども、鬼神と呼ばれし眞田の與市を捕つて押へ、搔首にいたしたは、わが強力、頼朝が尻に帆かけて落ち行きしは、兄大場が軍術のなす所。觀音の利生にて勝つまじき軍をも、勝つたやうに云はつしやるは外聞が悪い。ちとおたしなみなされい。
〽おのが心の高慢に禮儀忘るゝ武骨さよ。
平三 ハヽヽヽ異な事がお耳に障りしな。佛神の力を頼めば、武士の外聞一分のすたると云ふこと、弓矢八幡この梶原は只今まで、存ぜなんだ。これを思へば、古への坂上の田村丸、鈴鹿の鬼神を從へらしが、嘸、外聞を失はれ後悔に思はされたであらう。ムヽハヽヽヽ。
〽大場兄弟迷惑顔、梶原もさながらに、おかしさ餘る詞の綱。
ア、イカサマ大場どの、股野どの、こゝにござる人々の、武功に依つてこの度の合戰に、打ち勝たればこそ、かゝる長閑かな景色に逢ひ、盛りの花も詠めると申すものでござりまする。
景親 イカサマその通り、落ち失せたる源氏の族は、花見る事はさて置いて。
景久 大方、どこぞの山奥で、餓え死がないたすでござらう。ムヽハヽヽヽ。
平三 なには格別、持ち合はせた、さゝへ重箱、これにて一献召し上がられよ。ソレ者共。
家來 ハアヽ。
ト毛氈を敷き、重箱さゝへを置く。各々捨てぜりふにて居り、
平三 せめて、梶原が亭主ぶり、拙き一首もお笑ひ草。
〽短册取り出し、さら〳〵と書き調へし即座の詠み歌。
景親 時をこそ盛る櫻の花かづら、心にかゝる春の諸人……コリヤ面白き心ぢや、なアいづれも。
〽世の中の嘗へにもれぬ身の上や、寶は時の差し合はせ、惜しまぬも又娘ゆゑ、老が一途の思ひ川、深き心は直燒

刀。刀を箱に二人連れ、それと見るより手をつかへ。
ト向うより六郎太夫、刀箱を持ち、こづゑ附いて出て
六郎　憚りながら大場の殿さまへ申し上げまする。私しめは、かたびらの辻に住居いたしまする青貝師六郎太夫と申す者、かねて御所望下されし所持の刀、急に金子入用に附き、差し上げ度うござりまするが、今日、これへ御參詣と聞きまして、まゐりました。刀を求めて下されませうなれば、有り難う存じまする。
〽思ひ入りてぞ頼みけり。大場は遙かに打ち見やり。
景親　ムウ、六郎太夫とはその方か。その方所持の刀は、某が兼ての望み。幸ひとこれにござる梶原どのは、本阿彌增りの目利者、氣に入りたれば、望み通り金子は得させん。
六郎　エヽ、有り難いお詞。ソレ、娘、ちやつと持つて行きや行きや。
〽悦ぶ親の詞の下、アイと起居もしとやかに、おめる色なき刀箱、大場が前に差し置けば。
景親　コリヤ〳〵女、あれにござるお方へ持參いたせ……イヤ、なに梶原どの、御苦勞ながら、お目利、頼み入る。
〽いふに娘は悧發者。

こづ　これは〳〵冥加に餘る御詞、私し風情の刀のお目利、誰あらう、梶原さまが遊ばして下さるとは、申しとゝさん、悦びなさんせ、有り難い仕合せぢやわいなア。
〽會釋もおぼこ、憎氣なき、平三景時につこと笑ひ。
平三　ナニ、六郎太夫とやらんが所持の刀、申さば彼れが家の重寶、梶原如きが定らぬ目にかけて、とやかく申すも不遠慮千萬、この儀は平に御免下されい。
景親　これは〳〵御辭退は、却て迷惑。こなたがお目利下さらば、彼等が願ひも叶ふと云ひ、手前の心も晴るゝ道理。
景久　兄者人が望みの刀、拙者共々お頼み申す。
平三　御兩所共、さやうに御意なさるゝを、達つて辭退申すも氣の毒、然らば仕らう。
〽と傍へなる手水鉢に差しかゝれば、六郎太夫袂を控へ。
六郎　ア、申し、私し風情の所持の刀、お目利き下さるさへ恐れ多きに、お手水には及ばぬ事。
平三　アイヤ左にあらず、たとへ所持は誰れにもせよ、名作の刀と聞けば武士の尊む所。文は鏡、武は劍。二つにとどむる日本の神寶、おろそかにはなり難し。
〽禮儀亂さぬ清めの手水、心の濁り曇りなき劍の袋、押し戴き、拔き放せば、曇りなき夜半の月の影、漲る瀧を

照らせるかと怪むばかり劍の燒刃切先打物、打ちはとき鏥、差裏差表一點曇らぬ名作物。

平三　見事。

〽梶原も思はず知らず打ち守る。

逸れ稀代の刀身。不肖なれども、かほどの名作、手に觸れしは今が初めて。買ひ求められて大場どの、家の重寶にいたされよ。

〽詞の刃切れも流石の目利き。大場もホッと機嫌顏。

景親　御自分がさほど迄に御賞美あらば慥かな名作、某も大慶々々。コリヤ、やい親仁、刀は某買ひ求めくれる。して價はいか程。

六郎　へイ／＼、差し當る金子高は……三百兩仰せつけられ下さりませうなれば、有り難う存じまする。

景親　ムウ、よい／＼家來共、あの者に金子を取らせよ。

家來　ハア、。

〽ハツと答へて近習共、小判の包取り出せば、傍より差し出る股野五郎。

景久　これサ兄者人、よしこの刀の出來鹽梅、十握の劍に勝るとも、切れ味が悪い時は、かつを掻きも同然。

九郎　いかさま、股野どのの云はるゝ通り、試さぬうちは重寶とは云はれますまい。

八郎　さやう／＼、一應も再應も、吟味召さるがよくござる。

〽遠慮もなく云ひほぐせば、梶原もむつとせしが心の料簡開かぬ顏、六郎太夫氣の毒の身に係つてぞ刃物の言譯。

六郎　ア、申し股野さま、切れ味の善惡は見分けにもあるべき事、この刀は二つ胴を仕切つては、豆腐を斬るよりいと易しと、申し傳へし重寶でござりまする。

景久　默り老惚れ、三百兩の金が欲しさに、買ひかぶりさせやうとは、のぶとい奴め。

〽呵り附けて言破れば、取りつく島も投首の、二人の心察しやり。

平三　イヤ、大場どの、股野どの、この梶原が切角目利きいたしたその刀、切れ味が訝しとて、お求めなきも本意なき事。一つには、又某が一分も異なものなれば、引き出し者を、試し者、二つ胴が切れぬ時は、是非もなし、この儀いかゞでござらうなう。

〽云ふに大場も打ち點頭き。

景親　成る程、尤も。誰かある。獄屋へ參つて、死罪極まる科人を引き立て參れ。

家來　ハア丶。
〽早う〳〵と言ひつける。大場が家來、畏まつたと走り行く。こなたの道より、息せきと飛脚と見ゆる旅侍ひ、大場が前に手をつかへ。
ト早助、大小四天にて狀箱をかたげ出て
早助　ハツ、大場の三郎景親さま、これにお越しなされまするか。拙者は伊東入道が家來、谷山早助と申す者、先刻お屋敷へ參りし所、これへと承はり、直ぐさま參上仕つてござりまする。イザ、御披見下さりませう。
〽差し出す狀箱受け取つて
景久　オヽ、大儀〳〵。
景親　兄者人、伊東どのより火急の用事とは、なんぞ、氣遣ひな事ではござらぬか。
トこの内景親狀を開き見て
景久　ムウ、この文體では、頼朝は、三浦の大助をかたらひ、衣笠山の城に楯籠りしとな。ハテナア。
景親　先達つて土肥の杉山より行衞知れざる頼朝。
九郎　主從七騎にて、眞鶴ケ崎より落ち失せしとの風聞。
八郎　元來、伊東入道は、人も知つたる遺恨ある中
早太　かゝる飛札を送られし上からは。

治郎　頼朝が素首取つて手柄せん。
十郎　武名を顯はすは、今この時。
治郎　イデ、歸宅して用意せん。
皆々　いづれもござれ。
〽勢ひ込んで駈け出すを
庄司　ヤレ、待たれよ、いづれも方、血氣にはやるは匹夫の勇、陣觸もなきに、なに事でござるぞ。
皆々　それぢやと申して。
庄司　先づ〳〵お控へなされませ。
〽引き留めるその所へ、牢屋の役人、繩附一人、引き立て大場が前に手をつかへ
役人　ハア丶、牢屋の内に死罪に極る科人は、この者一人、今一人はいかゞ仕りませう。
景親　六郎太夫、今汝が聞く通りなれば、今日はこの刀を持つて歸れ。
〽云はれてハツと當惑の色目見て取る娘こづゑ
こづ　サア、とゝさん、立たさんせ、よしない事を云ふ手間で、わたしを今の所へなア……今の所へ奉公に行きますれば、望みの金はツイ調ふ。談合して下さんせいなア。
〽勇むも親の氣を休める、孝行見えて憐れなり。六郎太

夫は最前より、差し俯向ひてゐたりしが。

六郎　オヽ、それよ、ハタヘ失念いたしてをりました。伊東さまへこの刀をお目にかけし時、二つ胴が見事に斬れたと極めの證文、下されましてござりまする。今日、宿元へ置き忘れてまゐりました。娘を取りに遣はしまして、御覽の上、お求めなされて下さりませ。

平三　スリヤ、二つ胴極めの伊東が添狀とか、片時も早く取り寄せい／＼。

六郎　ヘイ／＼、コリヤ娘よ、そちは大儀ながら、內へいんで、證文を取つて來てたもや。

こづ　アイ／＼。

六郎　內へいんでくれるなら、佛壇の引き出しに入れてある程に。

こづ　アイ／＼。

ト娘の手を取り、顏を見てこなしあつて

六郎　大事にかけて、取つておぢや。

こづ　アイ／＼。

〽アイと返事もいそ／＼と、わが家をさして

ト花道にて躓く。

六郎　オヽ、危ないぞよ。

こづ　とゝさん、行つて來るぞえ。

六郎　オヽ、なんぼ、遲うなつても大事ないぞよ。

こづ　アイ／＼

〽急ぎ行く、娘の後を見送り／＼。

六郎　コリヤ娘、次手に佛壇へ、お燈明を上げて、とつくりと拜んでたもや……コリヤ娘、怪我すまいぞや。ア、もう行たか。

〽廉打ち拂ひ六郎太夫、大場が前に手をつかへ。

二つ胴の今一人は、この親父めを、お試めしなされて下されませ。

〽前後も揃はぬ詞の願ひ

景親　ヤイ、老耄れ、血迷ふてなにを申す。われを試めせば、命がないぞよ。

景久　命がなうても、三百兩の金が欲しいとは、ハテサテ無分別な親仁めだ。

〽嘲笑へば六郎太夫。

六郎　サア、御尤もなるそのお詞。大切なる人の命も、義によつて、捨つる時は塵芥同然、七十九歲の春秋も、死を待つばかりの老の身の上、義理に迫つて娘が難儀、なんと見捨てゝ居られませう。貢代なす刀は親の慈悲、三

百兩と値打も極り。
〽娘がための折紙と思へば命も惜しからぬ。
この上のお情けには、娘が歸らぬそのうちに、お試しなされて下さりませ。伊東さまの極めと云ひしは、娘が爰になりましては、見殺しにいたすまいと存ずるゆゑの嘘僞り。恐れながら梶原さまへ、この金子をお預け申し、娘が後で參りましたら、お渡しなされて下さりませ。サア、大場さま、老の願ひをお聞き屆け下さりまして、命を召されて下さりませ。
〽事を分け、理をせめて、餘義なく頼むぞ不憫なれ。大場は一途に刀の欲しさ、物の哀れも顧ず
景親　成る程、聞き屆けた。氣遣ひいたすな。下素の小さい心から、三百兩を大切に思ひ、念を入れる親父めだ。コリヤ、大場は大名、一つ胴に斬つたならば、三百兩は愚か、五百兩又千金でも、娘が爲には惡しうはいたさぬ。こゝは所もあづちの前、屑く成佛いたせ。家來用意。
家來　ハア、。
六郎　スリヤ、お聞き屆け下されて。
〽お聞き屆け、忝なしと、二人へ一禮にこ／＼顏、先へ進んで的場の內、射垜にかけたる矢切りの竹、この世の名殘りと結びつけ、自らしつらふ最期の場所、眞中にどつかと座し。
六郎　サア、お役人さま、イザ繩おかけなされて下さりませ。
役人　捕つた。
〽爰を合圖にあらしこども、高手小手にくゝり上げ、竹垣に引き入るれば。
景親　この上は、その科人、こゝへ／＼。
家來　きり／＼歩め。下におれい。
六郎　科人どの、御苦勞さまでござりまする。不思議の緣で六郎太夫と冥途の道連れ。
〽挨拶すればワッと泣き
呑助　ア、、ほんに思へばおれが身の敵といふは小半酒、一盃呑むと忽ちに、心狂ふが癖になり、主殺しの酒の科、菰冠りまで、なり下がり、牢にも大方三年酒、最前から、あすこで樣子を利酒と、最早、冥途の迎ひ酒、思へば淚がこぼれ梅。助かりさうも霰酒、切られぬ先から伊丹酒、重ねて置いて名作の、試し者とは、あんまりむごい二つ胴慾な。
〽切られぬ先から魂は、宙に迷ふて見へにけり。

景親　コリヤ弟、そちが手の内にて、切れ味、見せう。
　ト刀を渡す。
平三　アイヤ、股野どの、頼みしものゆゑ、目利きいたせし業に、一言の禮儀もなく、御邊が彼れを試さんとは、近頃以て踏みつけ業。
〽面色筋を荒立てば、
景久　ア、、これサ〳〵。只今そこ許へお渡し申さうと思ふた所、さりとては氣の短かい。サア〳〵、お心任せに遊ばせ遊ばせ。
　ト刀を差し出す。
〽御苦勞ながらと差し出す。
平三　コリヤ、かうなくては叶はぬ筈、然らば受け取り申さう。
〽刀もぎとる平三景時、しづ〳〵と立ち寄つて。
平三　イヤ、なんと六郎太夫、老の身の命を輕んじ、娘を惠む神妙さ、感ずるに餘りあり。この世は子ゆゑの闇たれども、未來は月光と諸共、劔の德は顯はるべし。必ず心の曇りを晴らせよ。
〽情けの詞に頭を下げ。
六郎　ハア、、身に取りまして有り難い、この世の門出に誰れあらう、坂東一の武門の勇者、梶原どののお手にかかる、適れな果報者、浮世に望みはなけれども、今にも娘が參つたなら、嘸や歎いて正體はあるまいと、思ひ廻せばたゞそれが。
〽それが〳〵とばかりにて、涙を隱す笑ひの內、目元にほろりと一雫、わつと泣き入るいぢらしさ、顏を背けて梶原も、袂に露の綾なせり。娘のこづゑに極めの證文、有り所、知れねば不審顏、なに心なくツカ〳〵と、戻りかゝりしこの場の仕儀
こづ　ヤ、、とゝさんを誰れがくゝつた。なんの科でござんすぞいなア。
〽情けなや悲しやと、垣に縋つて泣きわめく、六郎太夫は顏振り上げ
六郎　オ、、その驚きは尤もながら、モウ〳〵泣きやんな、まだこの上に、どのやうな事があらうとも、愕りせまいぞや。仔細は後で合點が行かう。申し梶原さま、娘が歎きを不憫ぢやと思し召して下さるより、情けにどうぞ、すつぱりと
〽遊ばせやと云ふうちに、それぞと悟る娘が悲しさ。
こづ　さては、お前は身を捨てゝ、試し者にならんすかい

なア……いかに刀が賣り度いとて、そりやあんまりな胴慾な。わたしが心の悲しさ、つらさ。思ひやつて下さりませ。親を殺してその價が、どうマア持つていなるゝものか。とゝさまの代り、わたしをお試めしなされて下さりませ。

〽これいのふ、お慈悲に聞き入れて、あの繩解いて下されと、泣き叫ぶこそ道理なり。六郎太夫は聲荒らげ

六郎　エヽ、くど〳〵と叶はぬ繰言、七十過ぎたこの親仁三百兩にはよい賣り物、構ひ立てして結句不孝、夫へ義理はどこで立つ、未練者め

〽叱つて見ても聞き入れず。

こづ　イエ〳〵、現在、親の死するを見捨て、夫へ義理を立てやうとは思ひませぬ。こんな事と知つたなら、お前に隱して傾城奉公に行かうもの。氣がつかなんだが、わたしや口惜しい。

〽父を恨み、わが身を悔み。

ありもせぬ證文を取つて來いと、隙入れさせ、その間に死んで仕舞ふとは、そりやとゝさん聞えませぬ。申し梶原さま、どうぞお赦しなされて下さりませ。

〽拜んで廻はるいぢらしさ。

このやうに頼んでも、並んでござる内、執り成して下さるお方はないかいなア。申し、お頼み申しまするわいなア。

〽願へば父もあぐみ果て。

六郎　エヽ、情ない、どなたぞ、あの娘を制して下さりませ。

〽いふに情もあらし子共立ちかゝりて押退れど放さじものと、取りつく竹垣。

景久　エヽ、七面倒な。イザ梶原どの、御苦勞ながら

〽差し圖に、下部は立ちかゝり、手早く重ね二人の軀、六郎太夫觀念の眼を閉ぢ、大場兄弟目も放さず、並居る家來も冷汗の玉もとび散る刀の光り、振り上がる手も、掛け聲も鋭き劔の拜み打ち

ト見事に二つ胴を切ると、六郎太夫の縛り繩切れ、胴人形上下へ引き分ける。

〽娘は還て駈け寄つて

こづ　エヽ、とゝさん、お前は斬れてはないぞえ。

六郎　エヽ、おれは今、斬られて死んだのぢや。

こづ　イエ〳〵お前は斬れてはない。とつくりと見やしやんせいなア。

六郎　でも、斬られて死んだのに、ヨウ〳〵、コリヤどうぢや。

〽夢ではないかと悦ぶ親子、三拜するぞ道理なり。目利き違ひの金味に、この場の味を梶原も、にがり切つてぞゐたりしが、股野の五郎も嘲笑ひ。

景久　さてこそ〳〵、三百兩をすでの事、かたり取らるゝ所、こつちへ渡せ。

〽三百兩を引ツつかみ

兄者人、この上は方丈へ參りませう。

景親　イカサマ、役にも立たぬ事にかゝり、憎き老耄れ、アノこゝな大盜人めが

〽立蹴にどうと蹴り倒す。六郎太夫は口惜涙。

六郎　エヽ、情ない、二つの胴が斬れぬとて、お求めなくば是非もなし、この年迄人樣の物、なに一つ盜みし覺えはない、それに盜人と云はれて土足に迄かけられたが口惜しい。無念ぢやわいせい

〽身を揉みあせり泣き居たる。

景久　二つ胴が斬れねば、なまくら物、盜人と云ふたが誤りか。

六郎　サア、それは。

景久　但し、これでも名作か。

六郎　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

景久　すさりおらう。いづれも先程より御退屈、方丈にて返書を認めん。

皆々　さやういたさん。

景久　然らば兄者人。

皆々　股野どの。

景親　いづれも

皆々　先づ〳〵。

〽當り眼に、梶原へ挨拶もなく、入りにけり。後見送つて、六郎太夫。

六郎　この上は、生きてゐる程恥の恥。オヽ、さうぢや。

こづ　コレとゝさん、只今思はず拾うた命、お前はなんで死なしやんす。但しは氣が違ふたかいなア。

六郎　心のせくまゝ樣子は云はねど、この六郎太夫は幼少より、この身に添へしこの刀、隱れの名作物と人ももてなし、自慢もしたが恥かしい、又婿どのに受け合ひし三百兩の金、どの顔さげて合はされう。命を捨てるがせめての言譯。娘、さらば。

こづ　マア〳〵、待つて下さんせ。

六郎　イヤ〳〵放せ〳〵

　ト平三、刀を取り

平三　斯程の名作を切腹に穢さんとは恐れあり、二つ胴は愚か、目に見えぬ鬼神をも、斬り從へん稀代の打物。汝が命助けしは、和國の重寶これに勝るもののあらんや。この劍の鈍きにあらず、この梶原が覺えの手の內、いましめの繩目をかけて斬りほどきし手練も金味、劍の切れ味、疑ひ晴らして安堵なし、この刀、われに得させよ、價は望みに任せ遣はさん。

〽語るにハッと二人が悸り。

六郎　娘、おれが命の助かりしは、あなたの手の內、劍の稀代、まだその上に、刀を求めてやらうとは、夢ではないか。

こづ　とゝさん。

六郎　娘。

〽夢ではないかと悦ぶ親子、三拜するこそ道理なれ。

平三　この劍の造りやう、態と大場に云はざりしが、差裏に、あり〳〵と、八幡の文字現はれしは、源氏の讓り、奥床し、心おきなく明かされよ。

こづ　お情け受けしあなたさま、今更なにを隱しませう。わが夫は。

六郎　コリヤ〳〵、なにをどこへ名乘り立。源氏の由緣と云ふのお目利き、さりながら、平家方の梶原さまに夫の素性名乘り立てして、不覺を取るか、たわけ者めが、サアかやうに申すをお憎しみありて、お手討ちなれば、お勝手次第。

〽木を斬つて云ひ放てば。

平三　イヤ、大丈夫なるその心底を見る上は、某が心底を申し聞かさん。

〽と居直りて。

この度、土肥の杉山にて落ち給ふ兵衞佐どの、伏木の蔭に隱れ給ひしが、某が目に遮ぎり、やよや敵御參なれと駈け廻り、何の苦もなく、かい摑み膝元に引き敷いて、首をかゝんとせし所、こゝに不思議や、身もすくばりて自由ならず。

〽こは心得ずと、引き起し、お姿を見奉れば、自然と備はる武將の位。智仁勇の三德兼ねて、聞きしに勝るその骨柄、梶原如き侍ひが、討ち奉るは。

〽ハ、ア。
勿體なし。
〽恐ろしゝ。
思ひ廻せば、わが先祖は、由緒ある源氏の家臣、當時平家に組すとも、先祖の古主へ返り忠、御運の開く時節を待たんと御命を助け奉まつり、大場を欺くこの梶原、形は平家の武士なれども、魂は佐どののお膝元の守護の武士、わが身體を擲つて、忠勤を盡すべし、それゆゑにこそ世に疎まれ。
〽佞人讒者と指ざゝれ。
死後の惡名うくるとも、いつかな賦はぬわが心、御邊が胸を見すゑしゆゑ
〽一大事を明かすぞと、心底殘さず物語る。兩人は猶嬉しく
六郎　名作と云ふ證據もなきに、押しつけたりと云はれんも、口惜しく、又御身の言ひ譯とても
平三　オヽ、その名作の證據を見せう。ハテ、なにをがな。
ト四邊を見廻し
幸ひ。

〽いざと二人が手を取りて、日影に向はせ。
ト兩人の影、手水鉢に映る。
いかに、兩人、あれを見よ、親子の姿あり〳〵と、映りし影は二つ胴、今に手にかけて試し者、死する者は影なし。幸ひ、秘藏のこの劍の斬れ味、これを見よ。
〽二人を映す影法師丁と打つたる手水鉢、厚さ尺餘の靑目の石、ずつぱと切れて親と子の影が別るゝ二つ胴。
こづ　アレ、申しとゝさん。
平三　劍も劍。
六郎　切手も切手。
平三　オヽ。
六郎　オヽ。
〽さてこそ、源氏一統の御代に秀でし、梶原平三、鎌倉どのの政務の沙汰。
平三　萬の下知をなすなれば、
〽げに〳〵と云ひ放せど、誠は武士の鏡とも、世に輝きしおのこなり。六郎太夫、大きに悦び。
六郎　これで、今こそ、誠の劍を差し上ぐるは身の大慶。
平三　娘を連れて、屋敷へ參れ。價の金子、取らしくれうぞよ。



九代目團十郎が若い時の梶原

兩人　ありがたうござりまする。

平三　早く行け。

〽親子諸共、立ち上がる。劍も名家に逢ひに逢ひ、鍛へに鍛ふ梶原が、弓矢の譽れ矢筈の紋、今にその名を殘しけり。

ト三人よろしく

幕

三浦大助紅梅靮（終り）

田村麿鈴鹿合戰

解說

寛保元年九月、豐竹座の初演。作者淺田一鳥。

伊勢の禁斷の海へ網を入れた漁師が、遂に捕へられて海中へ沈めにかけられた。七月十六日の事で、その日には漁師の亡靈が阿漕ヶ浦に現はれて網を曳く。その日は漁師も漁に出ず、その靈を祀つて阿古木塚と云つた。といふ傳說がある。これを取込んで謠曲に「あこぎ」があり、また古淨瑠璃に「あこぎの平次」がある。それらの材料を坂上田村麿の世界へ掛込んだのが、この淨瑠璃である。

五段物で、その大略を云へば、逆賊藤原の千方が、高圓山に隱れ、幻術を習得して百八十餘歲の長壽を保ち、火鬼水鬼といふ手下を使つて神器を奪ひ、氷上の王子や藤原小黑丸を味方につけ、忠臣坂上田村麿を亡ぼして、天下を覆へさうと企てるが、田村麿は謀計を以て神器を奪ひ返す。田村麿の舊臣桂平次淸房が、阿漕ヶ浦の海底から十握の劍を得て、これを主人へ奉る。千方が盜んだ時、海底へ落した寶なのである。しまひに田村麿は勅命を奉じて、鈴鹿山に兇賊を討ち亡ぼし、天下を平定するに終る。

歌舞伎に入つたのは、その中心たる四段目の、網打と平次内の場だけである。江戶では文政二年十月の中村座に、芝翫の次郞藏、三津五郞の平次で上演したのが初めで、その後數度舞臺に上つた。爰へ收めたのは安政三年八月、中村座で出した時の臺本で、その時の役割は左の通りであつた。

平次(片岡我童)次郞藏(關三十郞)彥作(中村鶴藏)お春(市川團之助)母(嵐小六)兵庫(市川團三郞)

田村麿鈴鹿合戰

序幕

阿漕ヶ浦の場

役名――阿漕の平次。奥村兵庫。俗醫、林庵。平河原の次郎藏。

本舞臺、三間の間、正面、二間の番所、上下竹矢來、上手、勢州阿漕が浦殺生禁斷と書きある傍示杭、下手に、突棒、刺股を飾り、日覆より、松の吊枝、すべて、阿漕ヶ浦番所のかゝり、浪の音、拾鐘にて、幕明く。

ト彌惣太、磯八、幕の内より、ぶッ裂き、馬乘り袴、大小にて扣へ居る、若衆の百姓四人、跪き居る。

彌惣　ヤイ〳〵、百姓ども先達ても嚴しく申付置たる殺生禁斷、何ゆゑ殿の仰せを背き番を怠り以ての外の御立腹。

磯八　まだその上に番小屋をしつらひ、屹度張番いたせよと申付置たるに、彼の小屋には我々が替る〳〵見廻る度に、犬ころ一疋居たる事がない。何故そのやうに怠慢いたすぞ。

彌惣　サア、今日は用捨はならぬ。コレこの度新に番屋を建て我々が勤番いたせば汝が力は借らぬ。これ迄怠つた罰として一人前に一分宛科料を出せ。さもない時は掟の如くこの浦へ簀卷にして打込むぞよ。

磯八　サア、百姓ども、返答は。

兩人　どゞどうだ。

百一　イヤモウ、段々謝り入りました。併し只今仰しやりました科料計りは御免なされて下さりませ。

彌惣　ナニ、科料を赦してくれ。篦坊づらめ。それを取うために、口を酸くして、イヤすくなる程申付ても、夜番を怠る不屆奴。

磯八　ならぬと申せば網を入れしと科は同罪。

百一　それではあんまりお情ない。

彌惣　嫌やと申すか。

皆々　サア、それは。

磯八　但しは出すか。

皆々　サア。

兩人　サア

皆々　サア〳〵〳〵。

兩人　エヽ面倒な。

ト兩人、百姓を搦めにかゝる。皆々うろたへ、花道へ逃げにかゝる。この時、向うより、奥村兵庫、ぶッ裂き、野袴、大小、家來引連れ出て來る、皆々見て扣へる。

兵庫　コリヤ〳〵、百姓ども、何ゆゑに狼狽いたすぞ。

百一　只今あれなるお二人が簀卷をすると。

皆々　仰しやるゆゑ。

兵庫　ナニ、簀卷にする。ムウ、何は兎もあれ、身が後に付き參れ。

皆々　へイ〳〵、畏まりました。

ト百姓皆々後に付き、本舞臺へ來る。

彌惣　これは〳〵、どなたかと存じたら奥村さま。

磯八　濱邊のお見廻り。

兩人　御苦勞に存じまする。

兵庫　中々苦勞には存じ申さぬ。コリヤ銘々の職分でござれば殿への奉公。それは差置き只今これへ參りし所、百姓どもの訴を承れば、何か簀卷に致すとの儀、百姓どもが禁斷の場所へ網でも入れたと申す事でござるかな。

彌惣　イヤ、網を入れたと申すではござらねど、先達て申付置きましたる、番の儀を怠りますゆゑ。

磯八　その上、肝心の夜中には一人もこの邊には居りませぬゆゑ、我々がその罪を糺す所、貴殿のお出で丁度幸ひ。

兵庫　ムウすりや、百姓どもが番に怠りしゆゑ、簀卷に致して、沈めにかけうと仰しやるのか。

兩人　左樣でござる。以後の見せしめでござりまする。

百一　イヤ、奥村さまへ申し上ます。その簀卷の事も科料さへ出しますれば赦してやると仰しやるけれど。

百二　それでは村中が難澁いたしまするゆゑ。

百三　御免なされてと申しましたら。

皆々　簀卷にすると仰しやつてゞござりまする。

ト彌惣太、磯八、睨め付けるを百姓見て。

皆々　ソリヤ、眼をむいた〳〵。

ト皆々逃げにかゝる、奥村、皆々を留めて。

兵庫　コリヤ、待て〳〵。

皆々　へイ。

ト皆々下手へ住ふ。

兵庫　御兩所は百姓どもより科料を取り、左もなき時は簀卷になさるとか。コリヤ結構なるお裁きでござる。

彌惣　ソリヤ見ろ、百姓ども、與村どのさへ好い裁きだと仰しやるワ。

磯八　何んと、斯うより外に裁き方はござるまいが。

兵庫　左樣でござる、貴殿達の御勝手は好からうが、百姓どもが。

兩人　ヤ。

兵庫　迷惑を致しまする。手前が存じまするには、科料を赦して、この度より改めて一ヶ村に五人とか十人とか、毎夜々々代り〳〵に番を定め、十ヶ村なれば五十人、百人の番人も出來、百姓どもは申すに及ばず、漁どる者、各々稼業がござれば、殿の上意なりとて無下に申付るも仁愛のなき仕方。

彌惣　サ、、さう手緩くなさるゝゆゑ、これ迄の如く百姓どもが、好い事に致して右の仕合せ。

磯八　コリヤ矢ッ張り簀卷がよくござる。

兵庫　イヤ御兩所、篤と拙者が申す事をお聞きなされ。簀卷にいたして好いものなら貴殿方から眞つ先へ。

兩人　とは又なぜ〳〵。

兵庫　さればサ、この阿漕が浦は太神宮の御領分、生贄調進の場所、盜網を致す曲者年々に黨をなし、生贄調進の妨げゝ相なり、それゆゑ殿より御兩所へ仰付られ屹度張番いたせとの事。然るにその番を百姓どもにのみ權威を以て申付け、御自分達は守る事なく、さるがゆゑに夜な夜な網を入れるもの今に止まず、この度拙者横目として又々仰を蒙りしは、貴殿方の落度なきやう、その上この如く番屋まで建置かるゝは何んのため、百姓どもの罪を糺さば、先づ貴殿方より糺さねば相ならぬ。

彌惣　コリヤ、兵庫どのゝお詞とも覺へぬ。この浦の海邊をば中々一人や二人で目が屆かうか。それゆゑ百姓どもに課役を申付け張番さすを、何んで我々が落度でござる。

磯八　まだその上に政治嚴しくなき時は下の亂れ、仰を受けた我々が、役儀大事と存ずるゆゑ、只今の如く申しまするを。

兩人　不行屆きと仰しやるは。

兵庫　ハア、、不行屆きも不行屆きも近年にない不行屆き。

兩人　ソリヤ又どうして。

兵庫　民を虐げ賄賂を以て事を濟し、科料を取らばその儘に打過ん。拒まば簀卷に事寄せて脅かし、その利を得んとの企み、守り人のひまなき時は自づと政治も立つ道理、

民百姓は下の下人、それに何んぞや我儘非道、罪の疑はしきは輕く行ふ、殊に神領、さまで科人を好むにあらず邪非道の裁きいたさば神慮に叶はぬのみならず、殿の御名まで汚すの不忠、今兵庫が申す事、達て拒まばこの通り申し上げうか。

兩人　サア、それは。

兵庫　非を改むか。

兩人　サア、それは。

兵庫　申し上げうか。

兩人　サア。

兵庫　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

兵庫　よもや違變はござるまい。

兩人　ムウ、その通り。

ト兩人、よろしく扣へる。

兵庫　ナニ、百姓ども、只今も申す通り、これ迄の儀は赦しくれる間、村々より五人三人、代る〳〵に夜番を致せ。

皆々　有り難うござります。

奥村　身どもはこれより濱邊を見廻り歸宅いたさん。彌惣太磯八、同道召され。

兩人　役目でござれば參りませう。

百一　お代官のお蔭で科料は遁れた。

百二　モウ少しお出が遅いと、つめたい錢を取られる所を。

皆々　助かりました。

兩人　ムウ、思へば〳〵惡い所へ。

兵庫　好う參つた。サ、案内いたせ。

ト時の太鼓になり、この人數皆々、上手へ入る。知らせに付き、淺黄幕、振り落す。

本舞臺、上下より、板松を引出す、よろしく道具納まる。

ト床の淨瑠璃になり、寺鐘鳴る。

〽吹送る磯打風も靜過て、雨氣を含む暗がりを、提灯さげて二人連、何か話しの後や先き。

ト林庵、俗醫の拵らへ、平次、木綿やつし、袋付にて、小田原提灯に平の字を付けたるを提げ、浪の音、合ひ方にて、向うより、出て來り、花道に留まり

林庵　平次どの〳〵、こなたは浮々した人ぢや、提灯持が後へ下ると云ふ事があるものか。先が根つから見えぬわいの。

平次　イヤ、私しは先へ參れど、お前が行き拔けなさるで後になります。

ト入れ替り、本舞臺へ來る、又先へ行きかけて心付き。

林庵　ヤ、成る程、俺れが足の早いのぢや、自體この林庵は、何かに付け手ばしこいゆゑ、足迄が早い、知りやる通り手がよいから寺子を取ります。學があるから物讀も教へます、その外茶の湯でも、盤上でも、打囃舞謠遊藝一般仕殘した事はない。療治は恐らく日本一、村中が信仰して下に置くは惜しい事、なになりと乘れと云へど乘物は扨置き、辻駕籠でも只は乘られぬ。身の廻りもこれでは濟ぬと、コレ見さつしやれ、あんまり上手で引摺り引張られるので、このやうに破れました。

〽自慢たら〳〵云ふを幸ひ。

平次　イヤ申し林庵さま、永くお頼み申す母の病氣、この中は食も進まず、何とやら氣遣はしく、夫婦の者が夜の目も合ず案じまする。家ではお尋ね申惡いが、どうか本服いたしませうか、但し心元なら思召すか、御遠慮なしに仰しやつて下さりませ。

〽問へばほく〳〵打頷き。

林庵　假初ならぬ三年餘りの病氣、俺れもホッと愛想が盡きた。殊にこの頃食がいかねば十が九ツあつちのもの、中々藥では行きませぬ、只看病が肝心でござるての。

平次　ヘイ、左樣なら藥では屆きませぬかな。ムウ。

ト合ひ方になり。

林庵　何サ、ないと云ふ事もないが、少とむつかしい藥だからの。

平次　ナニ、藥がございますか。ソリヤむつかしい藥でもございませうが、どうぞその藥をお聞かせなされて下さりませ。

林庵　聞かせた所が無駄な事ぢやに依つて、マア〳〵それより病人は、看病の仕樣で好くも惡くもなる物ぢやに依つて、精出して看病さつしやれ。

平次　ヤ、モシ林庵さま、可笑しい申し樣でござりますれど、假令どのやうなむづかしい藥でも、私しも大事の母でござりまする。どうなりとして本服いたさせとう存じまする程に、どうぞ妙藥をお聞かせなされて下さりませ。

林庵　これは又惡い料簡、何時迄云ふてもならぬ話、よさつしやれ〳〵。

平次　でもござりませうが、コレお慈悲、お情でござりま

す、どうぞ仰しやつて下さりませ。
〽口說き歎けば林庵も。
林庵　ア、これ〳〵、平次どの、それ程迄に思ふ事ゆゑ云ふて聞かせる程に、コレ、あたりに氣を付けさつしやれ。
ト平次、あたりを見廻し、兩人、眞中へ屈み、こなしあつて
決して人に云ふ事はならぬ、又高聲に話してもならぬ位な事ぢや。その藥と云ふは斯うでござる。
ト又合ひ方。
あの病氣には、戴帽魚と云ふ物を用ゆれば立所に平癒する。その魚は俗に云ふやがらと云ふ物、コリヤ典籍便覽と云ふ書物に明白。シタガ氣の毒なはこの魚ぢやて。外にはない物、先づ集る所はこの禁斷の場所には必ず集るとの事、平次どの、樣子と云ふは、この事でござるわいのふ。
〽云へば平次も當惑の、途方に暮れて居たりける、林庵は氣の毒顏。
ハア、、コリヤひよんな事云つて罪を作らすやうなもの、サア〳〵これから家へは程近い、お袋が待つてであろ、いなしやれ〳〵。

平次　イヤ、とてもの事にお宿迄お送り申しませう。
林庵　宿元は夜食時分、義理にも一膳參れと云はねばならぬ。
平次　何んでござる、私しが何んでそのやうな事を致しませう。左樣なら一寸其處迄お送り申しませう。
林庵　今云ふ通り、まさか門口で突戻されるものでなし、茶の一杯も損が行くわな。
ト云ひながら平次の提灯を見て
ア、平次どのや、その代り、その提灯を貸して下されや。
平次　オ、氣が付きませなんだ。サ、提灯をお持ちなされませ。
ト渡す。
林庵　然し平次どのや、其方提灯がなくては困らうが。
平次　ナニ、私しは宜しうござります。
林庵　左樣ならお別れ申しまする。
〽喋べる口程廻はらざる懷ろ醫者の匙加減道を早めて歸り行く、平次は後を打眺め、暫し佇み居たりしが熟々思ひ廻す程、癒りがたき母の難病、良藥海にありと云へど慾いに網を入れ、見付られなば何んとせんと、案じに胸を痛めしが、あたりを見れば人音せず。

平次　卜この文句のうち、平次、よろしくこなしあつて

今醫者の話しには、戴帽魚とやら云ふ魚を捕り、母の病ひに與へなば、忽ち本腹なすとの事、その魚は禁斷の場所に限るとの事。

〽闇をたよりに思案を定め。

卜空を見上げ、こなしあつて、かすめて雨車。

今宵は分けて眞の闇、浪どう／＼と打上ぐれば、今宵ならで彼の魚を捕り得ん事も難かるべし、二十四孝の王祥が氷に伏して魚を得しも、コレ孝心の德誠の道、海中に飛入つても、藥魚をとらいで置くべきか。

〽思ひ込んだる海の面、やわか捕り得で置くべきかと、心を定め我家の方、尻引つからげ立歸る。

卜平次、こなしあつて、橋がゝりへ入る、板松を引て取り、淺黄幕、切つて落す。

本舞臺、一面の浪打際、奥深く浪の遠見、三の手摺、子役、遠見にて船に乘り、網を打つ事あり、日覆よりも松の吊り枝、上手、蘆、よろしく道具納まる。

卜彌惣太、磯八、以前の形、百姓大勢、割竹、拍子木を持ち、上手より、出て來る、始終浪の音よろしく、薄く雪の音を被むせる。

彌惣　ナニ百姓ども、どうやら疾風が來さうになつた程に油斷いたすな。

百一　イヤモウ、科料さへ取られねば、滅多に油斷は致しませぬ。

磯八　口の減らぬ奴らぢや、働き次第で科料を申付るぞ。

百二　何んと云はさつても、奥村さまがござれば、ナウ皆の衆。

皆々　ソレ／＼、科料の事はあんのけ／＼。

百一　取らうと云へばそつちが險呑。

彌惣　エヽ、べり／＼と喧ましい。

兩人　無駄言云はずと斯う參れ。

卜叱り付け、皆々下手へ入る。浪の音、雨車、雪の音、床の淨瑠璃。

〽既に更け行く小夜風に連れて降出す雨の足、篠を亂せる折からに、斯くともいざや白浪に、阿漕の平次が艪をあやどり雨を凌ぎの簑と笠、身を忍ぶ摺濡れしぼれ、思ひも深き海面を、こがれ寄すこそ是非なけれ、網を右手に引かけて我が孝心の感應あつて、彼の魚を得せしめ給へと一網さつと入れければ、引くに手應へこれこそと、

手繰り上れば怪しの光〽網さばきして取出せば、光輝く名劍は、これぞ正しく神寶と押し戴き〳〵、この勢ひに藥魚を得んと又も一網入れんとす、木影に忍ふ合圖の拍子木、ソリヤ盗人網打よと、上を下へと。

ト遠見の子役、上手より三の手へ船で乘り出す、網を打つ事よろしく引上げる、時の船緣りに水氣を立てる。ドロ〳〵になり、船へ網を引き上げる、錦の袋に入れたる劍を取り、押し戴き、又入れる事よろしくあり、この子役、二度目の網に拍子木を打つ、これに驚き上手へ入る、ト知らせに付き。

本舞臺、一面の蘆原になり、遠見はその儘殘る、眞中、上手、蘆原切破り、人の出入り、よろしく道具納まる。

ト眞中の蘆の中より、平次、大童、大坂手覆、手拭にて鉢卷して、寶劍を簑に包み、笠と共に抱へて、よろしくこなしあつて

〽蘆間押分けあたりを窺ひ、顯はれ出たる阿漕の平次、寶劍を押し戴き、腰にぼつこみ忍び行く。

ト窺ひ〳〵出る。眞中の蘆の中より、十手股立ちにて後を付け出る。

〽後へぬつと磯八、彌惣太、捕つたと腰に組付くを平次は一生懸命と諸手をかけ、沈んで跳ねるを車投、續いてかゝる彌惣太を首筋摑んで犬ころ投、腕絡みに捻伏せる、さうはさゝぬと磯八が、打つてかゝるを身を捻り、はづみを打つてづんでんどう、岩に打たれて死んでけり、隙を窺ひ我武者の彌惣太、武者振付くを振解き脾腹を丁と眞の當、うんと計りに倒れ伏す。

〽疾くより窺ふ次郎藏が。

トこの時、上手の蘆の中より、次郎藏、大縞の褞袍、腹がけにて出る、立ち廻りよろしくあつて、ト下手へ行きかゝるをその笠を取る、これにて、平次、花道へ行く、次郎藏、彌惣太を投る。これにて、平次、へたる、次郎藏、花道を見込み

次郎　泥棒め。

トこれにて、平次、礫を打ち、よろしく花道へ入る。

〽後を晦まし。

ト三重になり、よろしく

幕

大詰　　平次內の場

役名―阿濟の平次。同女房、お春。同母。庄屋、彥作。與村兵庫。平河原の次郎藏。

本舞臺、三間の間、中足の二重、正面、赤壁、暖簾口、上手、一間の障子屋體、下の方、例の所、門口、爰に、お春、世話女房の拵らへにて、焜爐へ藥鍋をかけ、反古團扇にて、藥を煎じて居る見得、テンツツ、浪の音にて、幕明く。

〽古鄕は都爰は又、天照里と云ひながら鄙の住居に春姫は名をばお春と改めて、住むも貧しき風情なり。

トお春、藥を茶碗に注ぎ盆へのせて、障子屋體の側へ行き

はる　申しお袋樣、今日はお醫者樣のお加減のお藥、上り惡くからうとも、わたしらを不愍と思召して、お上りなされて下さりませ。おひんなれ、お手取りませう。

〽勞はる詞に母親は、苦しきふりを押隱し。

ト此うち、お春、障子を明ける、爰に、母、病ひ鉢卷にて、蒲團の上に座し、有り合せの箱に凭れて居る。

母　オ、嫁女、誰も居ぬか。そして平次や孫の友石は見へぬが、何處へぞ行きましたか。

はる　ハイ、連合は昨夜お醫者樣を送り、それから夜通しの小揚に雇はれたとて今朝明方に戻られ、奧に休んで居られます。友石も今晝寢、どつこへも行きは致しませぬマアお藥をお上りなされませ。

〽差出せば押戴き〳〵。

母　ア、冥加なや忝なや、誰あらう田村將軍の御息女春姫さまともあらうお方に、煎じさして用ひる藥は耆婆扁鵲の配劑で。

〽呑むより尊いこの良藥。

如何なる業病でも、本腹せいで何んとせう、有り難うござるわいなう。

〽老の叶はぬ手を合せ、泣音も弱る有りさまを見れば、胸までせきのぼせ、涙を袖に押包み。

はる　これはしたり、お母樣とした事が、あられもない事仰しやりまする。櫻も花のその時は、歌に詠まれ詩に作られ、衣打物となつては庭に捨てられ下家の住居。ハテ昔は昔、今は阿濟の平次が女房お前の嫁、それをそのや

うに仰しやるは、結句心に隔てのあると云ふもの。
〽開へぬ仰や恨めしや、主筋放れ水仕から嫁になつたる嫁氣質、冠は沓に履れねど沓は冠と戴かん。

母　オヽ、さうあらうと思ふて態とこれ迄嫁あしらひ、時代に述るゝと云ひながら、餘りと云へば勿體ない。

はる　アレ又わつけもない事計り、そのやうに仰しやると世間の聞え夫への思惑、わたしは爰に居られませぬが、但し家出せいと仰しやるのでござりまするか。
〽云はれて母は俄に笑顔。

母　ホヽヽヽ。オヽさうぢや〱、謝まつた。矢ッ張り嫁ぢや。娘ぢやわいなう。
〽機嫌取る氣の姑に、云ふて悔しき捨詞是非も涙の折からに表へ人音。

はる　オヽ誰やら人音、お風が當つては又、病氣に障りませう。
〽障子ひつしやり引立れば。
ト思ひ入れあつて、障子を締る。テンツヽになり、庄屋彦作、出て來り、直ぐに舞臺へ來り

彦作　平次は宿に居らるゝかな。
〽によつと入れば。

はる　これは〱お庄家の彦作さま、何んと思うてお出なされました。マアお茶、お茶をお上りなされませ。
ト茶、煙草盆を出す。彦作、こなしあつて

彦作　ハテ、何時來ても〱惚れぼれする好い嬶ア樂ぢやの。扨お内儀、平次どのに一寸逢うて尋ねたい事があるが、宿にならば呼んで下され。

はる　ハイ〱、奥に休んで居られますが。
〽何んの氣もなく勝手口。
コレ平次どの、起きなさんせ、庄家様が逢ひたいと云ふてお出なされました、早う〱。
〽と呼出す聲は平次が胸板に打抜く釘の先折れて、云ひ包めんと伸び欠伸。
ト此うち、平次、好みの形にて、出てこなし。

平次　コリヤお庄家どの、好うお出なされました。イヤモウ寐れば寐らるゝもの、一昨日から寐續けで、まだ目が覺めぬ。
〽まだ目が覺めぬと紛らかす。

彦作　ハテ、途方もない長寐ぢやの。そんなら貴様は知るまいが、今朝から村は大騒動ぢや。

平次　エヽそりや何んでござります。

彦作　さればいの、こんたも知らるゝ通り、この阿漕が浦は太神宮の御領贄調進の獵場にて、昔より殺生禁斷の所。雜魚一疋取つても簀卷にして沈めにかける。それにマア大膽な、この間から夜な／＼網を打つ者があつて、昨夜ちやんと引つ捕らへ。
平次　何んと仰しやる。それなら網を打つた奴を捕らまへさつしやつたか。
彦作　オイナウ。
平次　イヤ、それは好い氣味ぢやの。
彦作　所が好い氣味でないぞや。捕らまへたと思つたら取逃がした。
平次　ハテナ。
彦作　サア、その科人がこの村へ逃込んだとて、それはそれは嚴しい御詮議。出口々々へ番を付け、鎌よ鉈よと村中は上を下、よもや妾らにそのやうな大それた事なされはせまいぢやが、モシさうなら有りやうに云うたが好い。この彦作も男ぢや程に外へは云はぬ、直ぐに御前へ訴へる。妾らが常の懇ぢや。
〽話しの後先詰らねど、詰るは主の胸の內、女房は何んの氣も付かず。
はる　コレ庄家樣、イヤ彦作どの、出放題にソリヤ何事、主に限つてそのやうな盜んで網打つ人ぢやござんせぬ、疑はしくばなん／＼の誓文、假令この子を奈落の底へ。
　ト子役へ思ひ入れ。
平次　ア、コリヤ／＼、女房ソリヤ何を云ふ。コリヤ誓言立てるも事に依る。コレ庄家どの、只今のやうに仰しやると、この平次がどうか網打つたやうで聞捨ならぬ。コリヤ女房、脇差を持つて來い。
　トきつと云ふ、これにて、お春、奧より、脇差を持ち來る。平次、思ひ入れあつて
サア庄家どの、今一度云ふて見さつしやれ。但し又證據でもあつての事か。返答次第で庄家どのとは云はせぬぞよ。
〽覺へある身は空鞘の反くわして極め付ければ。
彦作　ア、これ／＼、扨も／＼こなたは短氣な人ぢや、何も證據はなけれども、懇だけに云つて見たのぢや。コリヤ、腹立つまいぞ／＼。
〽わな／＼慄へば平次も落付き。
平次　さう仰しやれば手前が慮外、お許し下されい。してお上の評議はどうでござるな。

彦作　さればサ、あなたはお慈悲な事、殺生禁斷の場所へ網入れた者は、これ迄從類を絶やせども、我れと名乘つて出たならば、妻子親類にお構ひないとの仰せ、もし又詮議に合ふて顯はると從類は遁れぬ。サ其所を思ふて萬一覺えがあらば貴殿獨りで埓明く積り。コリヤ皆爲めを思ふてぢや。コリヤ腹立つまいぞや〳〵。扨嫌やな事はその網を打つた場所に笠と簑とが落てあつたげな。コレ腹立つまいぞや、その笠の裏に平の字に次の字と向ひ合せに書いてあるげな、所で村中詮議しても次平と云ふ名は一人もない。コレ腹立つまいぞや、それゆゑモシ平次ではあるまいかと一寸尋ねに來たのぢや、覺えなければ先づ目出度い。祝ひ事に晩に來ますぞや。お内儀大きにお喧ましう。坊よ、大きうなつたのう。

〽追從輕薄腹草履雪駄片しと引つかけて足早にこそ逃げ歸る、平次は後を打眺め、思案途方に暮れ居たる、妻はよもやと思へども心ならねば側へ差寄り。

トよろしく、向うへ入る。

はる　コレ平次どの、禁斷の場所へ網打つたは、夜な〳〵と云ふので案じもないが、昨夜こなさんの戻りやう、さんばら髮に色蒼ざめ、喧嘩でもした樣子。その上着て行かしやんした簑笠は、何處へ置いて戻らしやんした。それがわたしや氣遣ひでござんすわいなア。

〽問はれて詮方聲を潛め。

平次　サア、全くこの平次、夜な〳〵網打つた覺えはないが、不圖した事で昨夜初めて網を入れ、見付けられたが絶體絶命。

はる　エヽ、ソリヤ又お前何んの爲め。慰みにか慾にか。

平次　コリヤ。

〽粗忽に問ひし妻の顏、打眺め淚を浮め。

鱗を漁つて慰むとは榮耀の上の戲れ事、次第に重る母の難病、今一度御本腹をと祈れども、身貧なれば大醫を賴む力はなく、一僕連れぬ懷醫者、昨夜送つて行た道で戴帽魚と云ふ物を捕つて與へなば病氣本服あらん、左もなくばこの度が旅立との物語。その戴帽魚は俗にやがらと云ふ魚にて、禁斷の場所へは寄集るとの敎へ、隱し目付のあるとも知らず、彼の魚を得んと思ひ、一網入れしに思ひの外。

〽その魚は上らずして、冷々たる名劍の網にかゝつて上りし不思議。

これぞ正しく十握の寶劍、海中に沈みしと聞きしが、自

我が手に入つたるは。
ヿ運に叶ふ瑞相と、悦び勇み又一網入れんとせしを。番の者に見付けられ、押取巻くを命限りに働き、まんまと遁れ歸りしが、惡事千里事顯れ、我は罪に沈むとも、御身はこれより都に歸り、御父田村將軍へ寶劍を奉り、勘當御免蒙つて、母の養育賴入る。
ヿ不思議の緣でこれ迄は、夫よ妻よと主從の道を忘れて妹脊の語らひ。
思へば思ひ廻す程。
ヿ蘆生が夢の樂みも覺めて悔しき身の上と、男泣きにぞ泣き居たる、聞くに悲しさやる方も、涙に暮れて女房は誓し詞もなかりしが、稍あつて涙を拂ひ。
はる　コレ平次どの、假令寶が手に入りし迚、御大病の母御と云ひ、眼の前に罪に行はるゝ、夫を見捨て、どう古鄉へ。
ヿいなれらぞ。
烏を鷺と爭ふて、四人一緒にこの家を立退き、影を隱す氣はないか。コレ。
ヿこの友石が可愛くば。
生延びて下さんせいなア。

ヿ口說き歎けば友石も。
友右　父樣、こなたの行く所へ、わしも一緒に行きたいわいなう。
ヿ縋ればはら〳〵涙を流し。
平次　可愛やなア。何んの頑是もなう慰みにも行くやうに一緒に連れて行てくれろと云ふ、その顏がモウ見納めぢや。ア、、親を思ひ子を思ひ、云ひ遁れんとはすれどもな、我名を記した竹笠をもぎ取られたが確かな證據。吟味に合つて顯はるれば、從類を絕やすとある。この方より名乘つて出て縲にかゝれば、そち達にお構ひなく母人も御安泰、必ず〳〵我れ罪に合うた事お耳に入れるな。モシお尋ねあらば關東へ雇はれて行たとなりと遠い長門の國へ荷持に行たとたりと云ふてたも、ア、暇取つては爲めにならぬ。詮議に來ぬうちこつちから、名乘つて出て縲にかゝらん。コリヤ女房我れ亡き後は母人や、悴が事を賴むぞや。
ヿ賴むと云ふも泣聲に悄々として出て行く。
　ト此とき、上手、障子屋體の内にて
母　ヤレ待て平次、用事あり。
ヿと聲をかけて母親は、一間の內より杖に縋つてよろぼ

ひ出れば夫婦は驚き。

ト母親、出て、こなしあつて

平次　ハア、五日以來御絶食のお足元、お危なうござりまする。

〽勞り寄る平次が脊骨、突たる杖にて、はつし／＼と打ち叩けば、お春は中に分入つて。

ト平次を打つ、お春、よろしく留めて。

はる　アヽモシ母樣、あなたの御病氣癒さうとて、心を碎く夫に、何んの仕置で打擲遊ばす。何角の事をお聞かせ申したら可愛や俺れゆゑ苦勞すると、身もよもあられぬお歎きを。

〽見るが悲しうござりますと泣き萎るれば母親は病苦にくるしく息を張り。

母　ヤイそこな不孝者、恩知らずの狼狽へ者めが。

〽呵り付けられて平次はひれ伏し。

平次　ハツ、全く麁相には致さねども、渡世に絡まれ御介抱もそこ／＼。自から不孝となればその段は幾重にも。

母　イヤ、料簡ならぬ、その譯聞け。

ト合ひ方になり

昔居士に、不義する母の道の苦勞を助けんと、橋をかけて渡せしに、その母扨は顯はれたりと子供の手前に恥らひ、自害して死んだとある。六十に餘るこの母が病苦を助けんと、殺生禁斷の場所へ網打つたは孝行に似て大不孝、科人よ囚人よと捕らはれ、簀卷にして沈めにかゝるをこの母が見て居やうか。コリヤヤイ、とても命を捨るなら父平内兵衞どのゝ敵を尋ね探し、刺違へて死んでこそ、孝行とも武士とも。

〽後に殘るも尾鰭あり。

僅か鱗一疋に命を捨てるが手柄かや、いとほしさうにアノ嫁御、そちゆゑこれ迄幾世の艱難、未來も一緒と思ひ侘びて。

〽その身の末もよからうが、是非叶はずば諸共に、死ねとて何故に勸めぬぞ。

おのれ計りが罪に合ひ、母や妻子に憂き目を見する不孝者、胴慾者、恨めしや腹立たしやなう。

〽老の齡を嚙みしめ／＼身を揉はして歎くにぞ、お春も道理にせき上げて、共に泣き入る計りなり、斯かる歎きの胸中へ、庄家を案内に打連れて平河原の次郎藏が。

ト甚句模樣の唄になり、向うより、庄屋先きに、後より次郎藏、褞袍形にて、出て來り、花道にて

次郎　コレ〳〵、庄家どの、平次の内は未だでござんすか。
彦作　ツイ、あすこでござりまする。
次郎　ト門口へ來り。
〽門口からのさばり聲。
次郎　・阿濃の平次どんと云ふは爰でごんすか。宿にならー寸逢ひませうか。
〽聞馴れぬゑす聲に、疵持つ足で平次はびく〳〵。
平次　成る程、平次は宿に居りますが、何誰か用ならお入りなされませ。
次郎　イヤ、大事ない者でごんす〳〵。
ト平次、思ひ入れあつて、母を上手障子屋體へ入れる。次郎藏は庄屋へ囁き、下手の柴垣へ忍ばせる。
〽庄家を表へ忍ばせて、ずつと通り顏打眺め。
ムウ成る程〳〵、昨夜遠目に見た平次どの、この面お見知りはあるまいが、おりやア平河原の次郎藏と云ふて、少と男も立てる者。扨今日來たは別の事でもごんせぬ。昨夜こんたが禁斷の場所へ、ぼつと云はした網の中、かかつた物を貰ひに來ました。雜魚ぢやごんせぬ……これ程な光る物ぢや。コレ悔りせまいぞ。直ぐにその時云はうと思うたれど、代官づらが居る前、見たらてつきり上り物、其處を思ふて見て見ぬ振りした。金にしたらば仲間へ入らう。サア、四の五のなしに。くだんせ〳〵。
〽くだんせ〳〵とは伊勢路に流行る詞かや、平次はこいつしれ者と思へど態と馴々しく。
平次　扨その許が平河原の次郎藏とな。お名前兼て承はつたがお目にかゝるは今日が初めて。シテ何やら貰ひたいと仰しやれども、この方とんと合點が參らぬ。母の病氣で一寸も家を出ず、網打つた事なければ、元より拾ふた覺えもなし、定めてそれは。
次郎　イヤ、人違ひぢやごんせぬ、この次郎藏が黑い眼で見て置いた。隱さずと出しやいの〳〵。
平次　イヤ、ソリヤ御無體、覺えないに何んの出さうぞ。
次郎　ハテ、まだ恍けなえ。てめの上つたその臺詞、あらがはずと早く出せ。
平次　サア、どう云はしつても覺へのない事、外をお尋ねなされませ。
次郎　ムウ、すりやどうあつても知らぬでゑすか。そんなら一寸家探ししやうか。
〽行くを引留め、有合ふ脇差腰にぼつ込み。

トちよつと留めて

平次　ヤア、詞甘きに付上り、家探しとは慮外千萬、一寸でも踏込んだら、おと骨切つて切下げるぞ。

次郎　見事われが。

平次　おんでもない事。

次郎　サア。

平次　サア。

兩人　サア〱〱。何を小癪な。

〽柄に手をかけつゝ立ちたり。

次郎　へ、、、コリヤ面白い。次郎藏が骨には性根があるわえ。

〽なぐつて見るかとだんびらもの、鯉口くつろげ詰寄つて拔かば切らんと睨み合ふ、お春は危さ堪へかね、二人が中へ割つて入り、隔の垣と身をなせば、邪魔な女と引退ける。

ト兩人、拔き合せて立廻る。この中へお春入り、留める、子役、うろ〱して

友石　母樣怖いわいなア。

〽縋る子を、抱きてさ迷ふその内に、兩方難なく拔合せ。

次郎　綱にかゝつた劍を渡せ。

平次　それをおのれがどうして知つた。

〽互ひの切先上段下段、打てばひき、薙ぐれば拂ひ、鎬を削り鬪みしが、平次の手練の太刀風に、さしもの次郎藏切り立てられ、叶はぬ囮りに友石を、腕取つて下にひつしき。

次郎　望の劍渡せばよし、左なくばこの餓鬼を突殺すぞ。

〽胸元に押當る、ならこれ待てと女房が、狼狽へ騒げば流石の平次も人質に進みかね。

平次　ヤレ早まるまい次郎藏、たつた一言云ふ事あり。

〽と刃物納めて。

成る程、夜前不思議に網にとゞまつて、我が手に入りしかど、平人の所持なすべき劍ならず。仔細あつて我々は筋目正しき浪人者、この場を料簡するならば、後日の返禮金を積まん、何んと聞分けておくりやれ。

〽云はせも立てず。

次郎　ヤア置け〱、武士の果でもわりや科人、追付け縄目の恥に合ひ晝役になる體して、後日の返禮何所からする。ごくにも立たぬ講たゝかずと劍を渡すか。

平次　サア、それは。

次郎　こいつを殺さうか。

平次　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
次郎　ドヾどうだ。
〽とせりかゝる。
平次　イヤのう、其所が料簡、この場に及んで僞りかざる平次ならず、貴殿を男と見て頼みたき事がある。何んと頼まれてはくれまいか。
次郎　ホウ、コリヤ面白い、男と見て頼めば後へは引かぬ、こつちの望も叶へるか。
平次　ホヽウ滿足々々、先づその體より赦されよ。
〽漸々に手を放させ、次郎藏上座へ直し。
ト合ひ方。
某元は田村將軍の家臣、仔細あつて親を討たれ、その敵の面體も在所も知らず、尋ね出さんと思へども、一人の母が九死一生、見捨ても行かれず、無念の月日を送る所に、禁斷の場所にやがらと云ふ魚、これを捕つて與へなば立所に本服と云ふを力に網を入れ、魚は得ずして劍を得たり、これ幸ひのやうなれど、罪科極まる我が身の上、沈めにかゝるを見るならば、母は忽ち生害せん、貴殿何卒老母妻子を引連れ都へ登り、寶劍を主君田村將軍へ差上げ給はらば、その元も天子へ忠節、我れこれを持つて立退くは安けれども、足弱三人、殊に母は病中。
〽子の罪親にかゝらん悲しさ、父の敵も得討ず自業自得と諦めて、罪に沈む無念さを。
推量してたべ次郎藏どの。
〽不憫と思ふ氣があらばこれ〳〵、頼まれて給べ情ぞと、聲も涙にかき濁す、次郎藏は默然と、始終を聞いて居たりしが。
次郎　ムウ、斯く手詰になつたれば、その物語り僞りもあるまい、して田村將軍のお內にて貴殿の名は。
平次　桂平內兵衞照房が悴、同名平次淸房と申す者。
〽聞くよりかけ込む庄家の彥作。
彥作　オヽ聞いた〳〵好い事聞いた。コレ次郎藏、田村の家來桂平次なら小黑丸さまからお尋ね者、殊に寶劍持つたれば、注進して褒美は分け取り、油斷すな平河原。
〽云ひ捨てかけ出す、次郎藏透さず飛びかゝり、そつ首ごろりと打放せば、これはと驚くその內に、死骸を蹴飛し平次に向ひ。
次郎　知らぬ事とて思ひがけない。扨は桂平內兵衞さまの御子息樣でござりましたか。左樣とも存ぜず慮外の段。

眞平々々。

〽眞平御免とへり下り。

私し儀は中川宇内と申して、親御平内兵衛さまのお側仕へ、幼少の時雨度迄の仕損じ、命も召さるべきの所御赦免あつて和泉笠縫の神職大副へ友久方へ養子に遣はされ、厚恩を受けし某、心惡叢ゆゑ養父の勘當受け、夫婦諸共爰へ立退きしが、四年以前に女房ふさのは都にて相果て神祇の大副は三種の神寶を奪ひ取られ、難儀に及ぶ所、神鏡神璽は恙なく帝都に納まり、寶劍は海底に沈みし由、則ちこの阿漕が浦は上波は靜かなれども、底の青海矢を射る如く、海中に沈みし物打寄せぬと云ふ事なし。その上この闇夜に入つて、海面に光さす事見付けしゆゑ、扨は劍の有所と思ひ、何卒取得て養父が難儀を救はんと、夜な／＼網を入れしは某、詮議烈しければ科を外へ讓らんため、古主の若殿とも存ぜず、合圖の拍子木を打つて知らせしは、罪と罪を重ねる業人、勿體なや冥加なや。

〽立つたり居たり身を藻搔き、胸に燒金八寸釘、打つてかへたる後悔涙。

平次　ムウ、扨は聞及ぶ中川宇内とは汝よな。この平次をば見知らねば、慮外も不忠も恨もなし。この上は愈々穏む。母妻子を介抱して、寶を持つて、早く、都へ立退く用意用意。

〽せけばせく程お春は涙。

はる　なう宇内、主從の緣朽せず、廻り合ひしはせめての手賴と云ひながら、兎にも角にも夫の身の上、遁がるる道はない事か。淺ましや悲しやなア。

〽縋り付きて歎くにぞ、覺悟極めし平次も氣臆れ、又むせかへれば宇内も倶に、目を摺こする計りなり。斯かる折から所の代官奥村兵庫、手の者數多案内を引連れ出で來り。

ト時の太鼓にて、家來に笠を持たせ、兵庫、出て來り、好き所にて

兵庫　禁斷の場所へ網打ちたるこの家の主、のがれぬ上意ぢや、繩かゝれ。

捕手　動くな。

〽捕つた／＼と込入れば、女房ハッと仰天すれど、平次は騷がず涙を隱し。

平次　その罪は豫て覺悟。サア繩かけられよ。

〽進み出れば宇内は手を突き頭を下げ。

次郎　網打ちたる科人は、この家の主にあらず、この平河原

の次郎藏が後世のための盜み網、顯はれしは運の盡き、サア寄つて繩かけられよ。

平次　ア、これはしたり、志は嬉しいが、天命如何でのがれん……サア、この平次に繩かけられよ。

次郎　イヤ、この次郎藏に。

平次　イヤ、この平次に。

次郎　イザ寄つて。

兩人　繩かけられよ。

ト兩人、爭ふ。

〽代官兵庫、眉をひそめ。

兵庫　ヤア、おのれが科を人に塗つても、身を遁れんとするは人情の習ひなるに、互ひに名乘つて出て死を爭ふは義理ある中、扨は其方達は主從ぢやな…イヤサ驚く事はない、それはこつちに吟味はせぬ、科人の詮議は一筋、網打つたは平次に極る、仔細はその場に殘りし竹笠、これを見よ、平の字と次の字を明白に記しあるからは遁れぬ證據。不愍には思へども是非がない。サア平次、繩かゝれ。

次郎　アイヤ〳〵、先づお待ち下さりませ。この竹笠があるゆゑに、愈々科人はこの次郎藏。

兵庫　こいつ血迷うたな、平次と記した竹笠を、おのれが科の證據とは。

次郎　さればサ、拙者が名は平河原の次郎藏、平河原の平と云ふ字と、次郎藏の次の字と頭字を記し置いたる竹笠、それを平次とお疑なされしは無理ならねど、拙者が笠に相違御座らぬ。

〽危き難を身に受くる、不思議に文字の合つたるも、これ孝行の印かや、代官それと悟れども、忠心を感じてや。

兵庫　ソレ、次郎藏に繩かけよ。

皆々　ハア、。

〽あへなや宇内は三寸繩、なう愛しやとお春はかけ寄り平次も共に繩付の、宇内が姿を見る不愍さ、一間に母がせくるしく。

ト次郎藏に繩をかける、平次、お春、愁ひの思ひ入れ、此とき、母、上手の障子を明け

母　忠と孝との二道と、云はぬは云ふに優りし大恩。

平次　我れゆゑ消えし水の泡。

次郎　鮫や鯨の餌食ぞと。

はる　思ひやる瀬も涙の雨。

平次　身に振りかゝるを。

次郎　身に受けて。
母　脱いで貸したる。
はる　箙印し。
兵庫　平とひらとの讀違ひ。
母　聲に讀む字を。
はる　讀に讀み。
次郎　冥途へ急ぐ。
皆々　一文字。
〽思ひは深きいろは假名、四十八字はみだのくわん、讀邊を差して引かれ行く。
トよろしく段切れにて、
幕

田村麿鈴鹿合戰（終り）

倭假名在原系圖

解説

寶暦二年十二月、豐竹座の初演。作者は淺田一鳥。

「行平磯馴松」を書きかへたもので、惟喬惟仁兩親王御位爭ひの後日譚を中心に、在原行平と松風村雨の情事を取合せた趣向で、同じ材料を扱つた「松風村雨束帶鑑」や「戀伊勢物語」等よりも内容はグッと劣るが、稀代に四段目の「蘭平物狂」だけは、歌舞伎に傳はつて今に殘つてゐる。それといふのが、この場の趣向が、江戸の顔見世狂言によく似てゐるし、物狂ひといふので舞踊味横溢し、後段に大立廻りがあり、しかも親子の情をちよつと見せ、院本特有の裏の裏をゆく筋が昔の見物に受けた爲であらう。本場の京坂よりも却つて江戸で歡迎されたもので、その初めは寶暦十年の秋、中村座で中村助五郎の蘭平、二代目瀬川菊之丞の松風、中村七三郎の行平で、大當りを得てからである。

近代では、中村家の藝といふ事にきまつてゐて、三代目四代目の歌右衛門は、いづれも得意の藝としてゐた。二人とも舞踊に堪能で、柄も嵌り、立廻りも上手だつたからである。特に四代目は物狂ひの段へ「狂亂雀百迄」といふ常磐津を使つて、江戸向の舞踊味を横溢させた程であつた。その後は先代芝翫が得意藝とし、矢張り狂亂には常磐津を入れて踊つてゐた。芝翫以後は、段四郎が當り藝となり、更に勘彌も演じた事があるが、近頃は一向出ない。筋が餘りに大味だからであらう。

右のやうに舞踊味の勝つた内容なので、時に狂亂の件だけを、純舞踊にした事もある。「月雪花鈍輩拵額」「色成梔夕榮」等で、いつも芝翫が蘭平で踊つてゐた。

倭假名在原系圖

在原行平館の場

役名――奴、關平 實ハ孔雀三郎成平。同一子、繁藏。壬生の與茂作 實ハ跡目音人。同女房、おりく。伴義澄奥方、水無瀬御前。在原行平。

造り物、二重舞臺、向う金襖、欄間、竹の節、半御簾、上手、御簾、正面に長刀掛けある。上手、屋體前に松の大實木、これに、人釣り上がる連尺の仕掛けあり。下手、落ち間、網代塀、柴垣、いつもの所、切り戸、幕の内より繻子奴、三人、掃除してゐる。白囃子にて幕明く。

氏平　時に時平、一服、吸はうでは、あるまいか。

ト三人、掃除仕舞ひ

時平　さうすべい〳〵。なんと、逸平も呑まないか。

逸平　おらも、一服くゆらすべい。

ト時平、そこらを見廻し

時平　オヽ、あるぞ〳〵、こゝにお莨盆がある。これでそつと、吸ひつけべい。

ト吸ひつけて來て

サア〳〵、のまないか〳〵。

逸平　時に、おらが旦那、行平さま、先達て、播州須磨へ左遷の御身、今度、御歸洛あつて綾小路の館では御病氣お引き籠りなされて、今に御參內の沙汰もないとは、どういふ事であらうな。

時平　されば、なんだか、お旦那さまのお預かりの太刀とやら、寶劍とやらが紛失したとサ。どうでも、それを持つてゐないでは、參內がならないと思はるゝて。

氏平　なにを云ふやら、その寶物のこともないでは、ないさうなけれど、この度、御病氣の元はと云へば、なにがお屋敷で、美しい女中ばかりに取りまかれ、榮耀榮華の御身を須磨へござつて、海士の女か、汐汲み女、はかない所へござつて、いかな女好きのお旦那も、呆氣に入つてござつた所を、松風と云ふ汐汲み女、上方にもない程の器量よしだとか。その女めが旦那行平さまへ戀慕、夜

蛭も引つついてゐて、いとしほがつてゐたとやい。
二人　エヽ、味い話だてなア。
氏平　ところが、今度御歸洛あつた所が、その松風どののの事ばかり云ふて、うつら〳〵との御病氣だとの事サ。
時平　ハアン、聞えた。そこで今日、朋輩の闌平めが、奥さまの御意だとかで、松風どののとやらを、呼びに行くと、ぬかしたけれど、おらは、又お菓子を取りに行くのだとばかり思つて居たわい。
氏平　とかく、世の中は色ぢやてなア。
逸平　イヤ、その内も御旦那行平さま、弟御、業平さま御兄弟とも、色事には大好物ぢやてなア。
時平　イヤ、御旦那達ばかりではない。
逸平　誰れが又、嫌ふ者がある者か。
三人　ハヽヽヽヽ。
〽笑ひ催す折柄に、行平卿の御臺、水無瀬御前、腰元伴ひ、立ち出で給ひ。
水無　ナウ下部ども、とかく、災ひは下からと云ふ事もあれば、根もない事を云ふまいぞ。殿の御病氣も、この程は御不快、掃除しまはゞ部屋へ參つて、休みや〳〵。
三人　ハイ〳〵。

〽打ち連れ、部屋に入りにけり。
ト三人入る。
〽折から庭の小門より、囚人引かせ立ち出る、草履取りの繁藏、緣先に畏まり。
ト義澄をいましめ、下役に引かせ、繁藏、綺麗なる繻子奴にて付き添ひ出て
繁藏　ハツ、御前、これにござりまするか。この者は、大きなる科人、我が君御病氣に依つて、御名代の御詮議、憚りながら女儀と侮り、とかく有體には申さねば、拷問にかけべきや。御伺ひ申し上げまする。
水無　イヤ〳〵、繁藏、自らが詮議とて、これが輕しむる心があらば、一向に口を閉ぢん。この程の吟味に、あらまし樣子は白狀せしが、未だ詮議は殘つてある。コリヤコリヤ、その者、今聞く通り、少しにても僞り隱さば、手荒者の問狀にかける。その苦しみをせうより、サア、白狀いたさぬか。
ト義澄顏を上げ
義澄　この間申し上げ候ふより、包み隱す仔細なし。それとも疑はしく思し召さば、いかなる責苦にも、かけらるべし。これより外、申す詞はござらぬぞ。

〽流石に素性顯はして、詞鋭に言ひ放せば。

水無　ホヽウ、潔よき返答、その詞に違ひもあるまい。さりながら、夫の言ひ附け、今少し尋問の仔細あれば、後程、とくと詮議せん。それまでは繁藏、奥庭へ引かせて、キッと番を申しつけい。

繁藏　畏まつてござりまする。ソレ、引き立てい。

家來　立たう〳〵。

〽仰せにハッと繁藏は、繩取りに引き立てさせ、後に續いて入りにけり。時しも奴の蘭平が、須磨より松風伴ふて。

蘭平　ハッ、御前、これにござりまするか。仰せつけられましたる松風どの、只今同道仕つてごわりまする。

水無　オヽ、蘭平、大儀、その松風どのを、これへ〳〵。

蘭平　ハッ……イザ松風どの、兄弟ともにこれへ〳〵。

ト在郷唄にておりく、衣裳抱へ帶、後より與茂作、地木綿、やつし脚絆、藁苞を背負ひ出て來たり

與茂　オヽ、あそこに蘭平どのが居らるゝ。サア、往きや行きや。

ト居直り。

時に奴どの、大事ないかや。

蘭平　大事ない〳〵。即ち奥さまがこゝにござる。御目見得さして落ち附かさう。サア、二人共おぢや〳〵。

ト二人を連れて出て

ハイ、これが、かの兩人の者でござりまする。

水無　その方が壬生の與茂作とやらぢやの。又こちらは、松風によう似たおりくとやら。樣子は定めて、聞いてたもつたであらうが、早速見えて嬉しい〳〵。なに事も、君のお心に入るやう、おりくとやら、賴みまするぞや。

りく　これはマア、御氣の毒な御詞、在所育ちの私しが、いかに似たとて御馴染みの松風さまとは、不都合な事ばつかり、コリヤ、もうよしにしませうわいなア。

與茂　これはしたり。内でも云ふて聞かした通り。ハテあなたから、なにおつしやらうとも、只アイ〳〵さやうさやうと問ひに合はしたがよい。モシ須磨の御話などお尋ねあらば、日頃見た名所記の通りを、尤もらしう云ふたがよい。ナア申し、奴さん。

蘭平　オヽ、さうだ〳〵、そこらが氣轉才覺だ。ちよこちよここの篋をつん出して紛らかし、君のことが忘られないと泣くのが肝心。必ず忘れさつしやるな。

水無　我が君樣、松風が參りましてござります。る

〽奥へかくと通じさせ。寢所の様子いかゞぞとと伺ひ給ふ一間には。

行平　なに、須磨より松風が來たりしとな。それへ行て對面せう。

〽寢所の障子明けさせて、行平心は病の床、夢の覺めたる御心地、褥とろ〳〵脇息にかゝらせ給ひ。

ト腰元、上手へ入り、前の御簾を卷き上げる。このせりふにて眞中へ出て褥に直り

ヤレ、松風か、懷かしや。サア近う〳〵。

〽さては、誠の松風と、見まがひ給ふと思へども、どうやら心恥かしく、たゞ。

りく　アイ。

〽あいとばかりにて、そゞろ震ふてゐたりけり。折り柄、奥庭騒がしく、出る家來が、かつつくばい。

家來　ハツ、申し上げまする。引きすゑ置きし最前の科人、いましめの繩を切り、裏道から逃げ失せましてござりまする。

水無　なに、科人は逃げ失せしとな。エヽ、折り悪しう、金剛太郎は左大臣が一味の者と聞き出し、密かに搦め捕らんため、西國へ赴く。ハア、誰れを追手に。

行平　ホヽウ、幸ひ蘭平が悴繁蔵に。繁蔵〳〵。

〽ハツとばかりに繁蔵は、白洲にこそは手をつかへ。

繁蔵　ハツ、御用でござりまするか。

行平　ホヽウ、そちを呼び出したは外でもない。未だ若年と雖も、兼ねて武藝を心懸くる其方、最前の曲者、繩を引つ切り、逃げ失せしとある。急ぎ追ひかけ、討ち留めよ。

繁蔵　ハツ、畏まつてござりまする。

ト行かうとする。蘭平、留め、

蘭平　アイヤ〳〵、悴待て。恐れながら、わが君へ、申し上げまする。いましめを切つて逃ぐる程の曲者、なかなか繁蔵などの小腕にては、叶ひますまい。この儀は拙者めに仰せつけられませい。

行平　ヤア、愚かや蘭平、汝、勇氣強情の者と見えながら、刃物を見れば、忽ち亂心となる難病、それゆゑにこそ、賤しき仲間奉公、せめて悴を武士になさんと武藝を勵ます由、さすれば、汝は、あぶな者、是非この役は繁蔵に。

蘭平　アヽ、そこが氣狂ひ、水をこぼさずとやら、この儀は是非拙者めに。

繁蔵　イヤ、父さま、主人のお指圖受けながら、こなたを

やつては、わしが臆病者になりまする。氣遣ひさしやんな。たつた今、首引き提げて戻ります。

蘭平　ハテ、片意地な。又父が云ふ事、聞かぬのか。

繁藏　イヤ、さうではなけれど。

蘭平　そんなら、マア待て。

行平　蘭平、控へい。

蘭平　でも、この儀は。

行平　主の詞を背くか。

蘭平　全くもつて。

行平　さやうでなくば控へて居らう。繁藏急げ。

繁藏　ハツ。

〽いひつゝ、凛々しく身を堅め、後を慕ふてかけり行く。

ト蘭平、後見送り、心遣ひのこなし。行平、與茂作を見て

行平　最前から問はうと思ふてゐたが、それなる男は何者ぢや。

與茂　私しめは、松風が兄めでござりまする。イヤ、もうずんと遠慮のない者でござりまする。

行平　イヤ、兄なれば窮屈々々。松風に打ち解けて、話もなるまい。勝手へ立つて休息いたせ。

水無　御前、後程、御機嫌を伺ひませう。

ト腰元連れ奥へ入る。

〽靜々立つて入り給へば、與茂作も手持ちなく、頭かき〳〵立ち上がり、勝手へ行くふり、二足、三足、なに思ひけん、振り返り、小蔭にそつと身を忍ぶ、後は遠慮も差し合ひも。

ト與茂作は、下手の柴垣へ隠れる。蘭平、矢張り向うばかり見てゐる。

行平　サア、松風、こゝへ〳〵。さて、何から云はうやら、先づ都へ歸るとそのまゝ、迎ひにやらうと思ふたが、何かと事繁きに取り紛れ、遲ふなつたは料簡しや。其方も、さぞかし、待ち兼ねて居やつたであらう。

りく　さやう〳〵。

行平　但し、忘れてゞも居やつたか。

りく　さやう〳〵。

行平　これはさて、返事のしやう……エヽ、其方をこゝへ呼びよするからは、あの形見はもう入らぬ物、戻さうと思ふて持つて來たを、手に取りもせなんだゆゑ、それで、さやう〳〵か。ハヽヽヽ。女といふ者は、別してもない

事を。コリヤ、蘭平、その筐をこれへ持て。ハテさて、何をうつかり。その裝束を早く持てと云ふのに。

〽押し返してのたまへど、蘭平は耳へも入らず、一途にわが子の氣遣ひ、脇目もふらず寄りつかねば、行平、御氣色變らせ給ひ。

行平　ヤア、言語同斷、憎い下郎め、討つて捨てん。

〽枕元の刀、追つ取つて、すらりと拔いて振り上げ給へば、あつと叫んで倒れ伏す、氣も絶へいるよと見へければ、おりくは傍へ立ち寄つて。

りく　ア、これ、蘭平どのいなう。

〽呼び生け介抱する内に、むつと起きて。

蘭平　ハアン、おりやこゝへ、なにしに來たの。オヽ、さうぢや〳〵、アレ〳〵〳〵、こゝへ、なにしに來たの。オオさうぢや〳〵、アレ〳〵〳〵、嫁入りぢや〳〵、ハ、ヽヽ、ヽ、一世一度の祝言に、この形ではござれまい。幸ひ、こゝによい裲襠、綿帽子も有り難い。

〽これを着ますと云ふまゝに、しどろもどろに引き纏ひ。

ト最前の衣裳、烏帽子を着て、しやんと立つて

蘭平　アレ〳〵、あそこに、君が待つてぢや。イザ行かう。

〽言ひ捨てゝ、かけ出すを、おりくは向うに立ち塞がり。

りく　オヽ、きやうとい。何を見附けてきよろ〳〵と、どこに人がゐるぞいなア。

蘭平　エヽ、それそこに。

りく　ムウ、あれかえ。あれは松ぢやわいの。

蘭平　なんぢや。松ぢや。ドレ〳〵、ほんに松ぢやゝい。そこなさる松め、わしが殿御と花見に行くがおかしいか。

〽笑ふ人こそ、法界悋氣、羨しうてなるまいぞ、主さん、ごんせと先に立ち、小褄からげてしやな〳〵しやな〳〵すなりの歩み振り。

蘭平　なんと見事な事であらうがな。エヽ、美しう咲いた咲いた。

〽咲いた櫻になぜ駒つなぐ、ヨイナ、駒がいさめば、ヤレ花が散るわいな〳〵。

蘭平　アレ〳〵駒さへ勇むぢやないか。それにお前はなぜ浮かぬぞ。

〽おりくが顔を打ち眺め。

ア、聞えた。そんなら今の唄が氣に入らぬの。そんな

ら拍子でやつてくりよ。

〽浮かせよ／＼、辛氣な顏を浮かせ。浮かせたる物にとつては鵜川の鵜舟に魚が浮いてうんのいだ、龍田川には紅葉が浮けば、吉野川には、櫻を浮かせ、桂川には筏を浮かす。又も浮かすは凹鈍腰にかつ附け鯰川へ飛び込んで、ぬるり／＼／＼ぬるり／＼、ぬつくり／＼浮いて來た誰れも浮かれた。かしこいやつさ。コリヤ／＼コリヤやつサ……おつゝ待つたり／＼。大事の殿御に引き別れ、とてちん所ぢやござんすまい。

〽あら戀しや、去るにても、又いつの世に逢ふべいぞ。

りく　なんぢやとは、なんの事ぢやぞいなう。ほんに形に似合はぬ奴ぢやまで。

〽奴々、なにするべい。お草履摑んで尻振るべい。

蘭平　イヤ、これはさてな。

〽はればさてな供先き片寄せ、すつ／＼と姿詞あやもなく、狂ひ亂れて伏しまろび、正體もなく見えにける。行平始終御覽あり。

行平　なんと松風、見やつたか、生れ附いたる難病とは云ひながら、思へば不憫な者ぢやなア。

〽抜き身を納め給ふと等しく、蘭平むつくと起き上がり、きよろ／＼見廻し。

蘭平　コリヤ、なんぢや、勿體ない。お旦那の裝束、なんとして着てゐる事だ知らぬ。

〽いひつゝ烏帽子脱ぐ間にも、どうやら夢を見た心地。

ハヽア、さては例の持病が起つたか。モシ、松風さま。

ト小手招きして、おりくを連れて來て

モシ、松風さま、何も慮外はござりませぬか。

りく　慮外の段々、抜身を恐れて、正氣を亂し、君の前とも憚からず、たわ事の有り條。

蘭平　ハヽア、南無三、情ない病。あなたは旦那の御氣に入り。そこへよろしう御詫びなされて下さりませ。

りく　アイ／＼。

蘭平　段々の不調法、御免なされて下さりませ。

〽面目砂につゝまぶれ、消えも入りたき。

行平　ホヽウ、生得病の業なれば、許す／＼。勝手へ立つて休息いたせ。

蘭平　スリヤ、御免下され、部屋へ行つて休めとな。ハヽハツ。

〽と立ちかゝる、歸り遲しとわが子も氣遣ひ、後を慕ふて急ぎ行く。

行平　サア、松風、こゝへおぢや、誠に須磨では隠の夫婦同然、心安いを樂しみにして汐まで汲みに行たではないか。それに暫く遠ざかつたとて、さう逆心にはせぬものぢや。

りく　そのお詞が裏はら、久し振りぢやに依つて、なんのかのと、暇取つて御傍へも召されず、今となつて其やうにお調べ遊ばすか。結句逆心がましう存じまする。

行平　オヽ、それ〳〵、その調べで思ひ出した。配所の内うたゝ寐枕の伽のひま、雨夜のつれ〴〵をも面白う慰めてたもつた事、今こゝで所望ぢや。サア、彈きや〳〵。

りく　アヽ、譯もないお望み、不調法な私しが爪音、お慰みには成らいで、結句お氣の障りにならうもの。

行平　イヤ〳〵、それが氣の藥だぞ、琴を持て。

ト内より

腰元　ハアヽ。

ト琴を持ち出で、よき所へ直して入る。

行平　サア〳〵一曲、所望ぢや〳〵。

〽否ともいはれず、どうなりとも、御心任せと押し直り、音色優しき爪音に。

トりく、琴にかゝる。

〽くつらはに結ぶ妹背の縁の糸、憎しや二つに引き別けて、巻けどほどけど撚り糸の結ぼれ解けぬ片思ひ。

ト彈く内、行平脇息にもたれ、眠ろこなし。

〽琴の音色に聞き入つて、肘枕に餘念なく、まどろみ給ふを、とくと見すまし、にようと出たる與茂作が、ソレ、よい首尾ぢや、コウ〳〵と仕形で斬れと知らすれば、合點々々と打ち頷き、用意の懷劍、拔き放し、寄らんとすれば行平の御身の動きにはつと驚き、琴にかゝつて左あらぬ體、ソレ〳〵そこをと教ゆれば、音を止めては危しと片手には琴、片手に刀、逆手に取つて心を砕く。その所へ、首、引き提げて立ち歸る、蘭平親子が差し覗き、ためらひ居るとも知らばこそ、與茂作は氣をあせり、そろり〳〵と、差し足、伺ひ寄つて、後ろより斬りつくを、引つはづし、もんどり摑んでとうと捻ち伏せ。

行平　誰れぞ居らぬか、參れ。

蘭平　ハアヽヽ。

〽はつと答へて蘭平は、親子御前にかつつくばい。

件無職、科人を追つかけ、首討つて立ち歸りましてござりまする。

行平　出かしたく〳〵。コリヤ〳〵蘭平、この與茂作とやら、

今わがまどろみしを斬りかゝらんとせし此奴。仔細ぞあらん、糺明させい、ソレ縛うて。

繁蔵　ハア。

行平　我が推量に違はぬ繁蔵。褒美として、先祖の執權、忠臣の名字、近藤の二字をくれ、武士となし召し遣はん。

蘭平　悴、御禮申せ。

繁蔵　エ、、有り難う存じまする。

〽手柄始めの身の面目。

行平　手柄の様子、奥にも知らせい。繁蔵、その方は休息いたせ。

繁蔵　ハア、。

ト向うへ入る。

蘭平　君に敵たふ曲者め。何者に頼まれた。真直に白状いたせ。

與茂　イヤ、全く行平卿には、聊爾はいたさぬ。アノ春風が琴をとゞめしは、氣隨者、お傍で何るも無作法ゆゑ、おどしの刀を御覧じての御疑ひは、近頃迷惑に存じまする。

蘭平　ヤア、めかすまい、うぬ。なか〲並大體では有りやうに白状はせまい。アノ松風も胡散者、イデ兩人共。

トおりくにかつらうとするな

行平　ヤレ、待て。所存は兼ねて知る。われに刃向ふ仔細はあるまじ。其奴をキッと、詮議いたせ。

蘭平　畏まつてござりまする。

行平　松風は今一曲、サ、蘭平早う。

蘭平　ハツ。エ、これ、痛い目をせぬ内、有りやうにぬかさいでなア。

與茂　いかやうに責められても、白状する事は、曾て〲。

蘭平　死太い奴なう。

ト蘭平は立ちかゝる。おりく、ア、それと云ふ心にて立たうとする。行平と顔見合はせ、ちやつと座り、素知らぬ顔。

行平　サア、詮議いたせ。

蘭平　ハツ、云はう。

〽哀れ催す聲のあせ、わが契りはこの世から、離れ〲の憂き思ひ、覺えしあらくれの呵責にかゝる苦しみは、氣も魂も絶えなんに、憂き目を助け給へかし。

サア、どうぢや。まだまき出さぬか。吐かさにや、斯うして。

〽竹振り上げ〳〵責め折檻、見るに堪へかね、爪音も、しどろもどろに見えければ、與茂作は、手足をもがき、五體を揉み、苦しむ息に。

與茂　アヽ、苦しや、暫くゆるめてたべ。

行平　さてこそ、白狀。責めをゆるめい。

蘭平　サア、責めはゆるめた。白狀いたせ。

與茂　本望を遂するまでと包み隠せしが、苦痛に堪え兼ね白狀いたす。元、某事は、敵討ち。わが親與太夫と云ふもの、いかなる遺恨にてか、四年以前、大宮通りに於て、行平卿の御手にかゝり、相果て、無念の月日を送る所、この度の歸洛、僞はつて入り込みし甲斐もなく、かくなり果てるは運のつき、立ち寄つて命を取られよ。

〽思ひ切つたるその風情、行平始終を聞こし召され。

行平　ハテ、心得ぬ。われ、人をあやめし覺えなければ、定めてそれは人違ひならん。

與茂　ヤア、そりや御卑怯にござる。今、眼前に、某が、首刎ねられる場所に至つて、僞りを申さんや。アヽ、誠に高きも賤しきも、命惜しまぬ者はなく、上一人の掟より、下萬人これに渡ると、エヽ、口惜しき有りさまぢやよなア。

〽あくまで、さみする雜言に、行平暫く御思案あり。

行平　わが身に覺えはあらねども、卑怯の名を取らん事、本意ならず、ソレ蘭平、かれが繩をとき、件の一腰渡してよからう。

〽仰せに委せ、いましめ解けば、與茂作は恟りしながら、女房と目と目を見合はし、悦ぶ事、限りなし、行平重ねて。

今、命を助け得さすからは、こゝにて尋常に勝負してとらせんが、よく聞けよ。先祖より代々傳はる在原家、上の守護、おろそかならず、然るに、さいつ頃より、さすらひの身の上には、御兄弟の御爭ひ、その虛に乘つて宗岡が秋定を害し、大切なる神寶を奪ふ。まつた寶劍の、有り所とても定かならず、それゆゑにこそ、參内だにもいたさざるが、汝が情、晴さし得させんとて命を捨つるはおろかなり。寶の有り家知れざる内は、上の爲に大切の行平、それまではわが名代に、蘭平と勝負させん。

蘭平　アヽ、イヤ〳〵わが君、私しめは例の難病、何も役には立ちませぬ。この名代は。

行平　イヤ、コリヤ〳〵、その又役に立たぬ者が、氣遣ひないと云ふたでないか。

蘭平　成る程、委細承知仕つてござりまする。

行平　コリヤ〳〵、與茂作、今蘭平と勝負を決し、この場を切り抜け、後日に來たれ。行平が勝負をして取らすべし。また、蘭平は、主に仇なす與茂作、隨分働き、討ち留めよ。松風は久し振り、奥庭の紅葉を眺め、一獻汲まん。來やれ。

〽打ち連れて、帳臺深く入り給ふ。

蘭平　エヽ、ひよんな役目を受け取つた。假染めながら、命づく。わりや見事、勝負するかよ。

與茂　エヽ、おれが事よりわが事、刃物を見ると氣狂ひになるぢやないか。不憫ながら、ぶちはなして立ち退き、後日に行平に出逢ひ、勝負をするわい。

蘭平　ハヽヽヽ、其やうに心安う行く、奴さまぢやねへわい。

與茂　オヽ、さう云へば面白い、勝負せいよ。

蘭平　サア。

與茂　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

〽双方一度に尻からげ。

蘭平　まだぢやぞ〳〵。聲をかけない内、拔いたら、うぬが負けだぞ。

〽身繕ふ間も、與茂作が、只一討ちと氣をいらち、刀の柄をしつかと取つて。

與茂　たんと、拔けるか。拔けまい。これからが、こつちのものぢや。

〽筋斗りトうたせとりひしがんと差し込む手先を鍔で、ぐわつちり、續いて來る身をかいくゞり、腕首掴む、與茂作惱り。

蘭平　わりや、この刃物が禁物ぢやないか。氣が狂はぬか。コリヤ、どうぢや。

〽云へども、ぐつとも返答せず、拔身の燒刃、切先、先物打ちはゞき、ためつ、すがめつ、ぐつと見て。

蘭平　コリヤ〳〵。紛れもない天國の銘作。ムウ、これを所持する其方は。

與茂　ムウ、名、苗字聞いて、なんとする。

蘭平　イカサマ、迂濶に名乘らぬも尤も。この蘭平が帶する刀、これを見よ。

〽すらりと拔いて差し出だせば、訝かしながら、双方とつくと見合せて。

與茂　コリヤこれ、同作の天國、さては兼ねて聞き及ぶ、

父、伴の實澄の讓りの二品。

蘭平　ホヽ、幼き時より東國、西國、遙かに隔て住みしゆゑ、互ひに顏を知らねども

與茂　こなたは、兄者人、義雄どのであつたるか。

蘭平　そちが、弟の義澄なるか。

與茂　親の讓り

蘭平　われ〳〵が守りとなつて

與茂　遠國、波濤隔てゝも

蘭平　互ひに通ずる肉身の

與茂　思はず出逢ふ

蘭平　兄弟の名乘り合ひ

與茂　こなたも健固で

蘭平　そちも無事で

與茂　ハテ、不思議の對面

蘭平　なす

二人　ことぢやなア

〽絕えて久しき兄弟の、名乘り合ひしも血筋の緣、不思議不思議とばかりにて、悦び合ふこそ道理なり。蘭平、猶も聲を潜め。

蘭平　先達て、實兄弟爭ひの折節、實父紀の三位どのに對面なし、養父寶澄どのの高恩の事共、一々に聞く。その節、大納言宗岡を討つて、神符は小袖が手に入りたり。實父、養父とも、恨みあるは、小野篁、在原行平、先づこの家へ姿を變へ、入り込みしも、折を得て、行平を害し、預かりの寶劍を奪ひ取り、年來の遺恨を散ぜん手段。

與茂　ハア、お出かしなされた。某とても、女房が在原に似たを幸ひ、近寄つて、行平を籠絡、討たんとせし所、見顯はされて出放題、敵討ちと云ふたも、皆僞り。

蘭平　ホ、ウ、かく兄弟心を合はす上からは、この場を品よく取り繕ひ、追つて本意を遂げんは必定。先づその方は女房を連れ、立ち退け〳〵。

與茂　アイヤ〳〵、某夫婦、立ち退かば、その元さまの。

蘭平　イヤ、苦しうない、難病ゆゑに、取り逃がしたといや、事がすむ。一時も早く行け〳〵。

與茂　然らば、萬事追つて密談。

蘭平　何かは重ねて

與茂　北嵯峨にて待ち合はさん。

蘭平　弟。

與茂　兄者人。

蘭平　急げ。
與茂　ハッ。
〽云ひ捨て、奥と勝手に、別れてこそは、入りにける。
　ト非戸より黒裝束の忍び出て、こなし。
忍び　首尾よく入つた在原の館、行平が寢所は慥かにあの一間、さうぢや。
　ト鐶口しめして、奥へ行がうとする。奥より水無瀨出て
水無　曲者、いづくへ行く。
忍び　イヤ、手前は盜人、金藏へ行て金子奪はうと思ふて
　ト行かうとする。
水無　待て、盜賊でない。夫の居間をねらふ曲者、有りやうに云はぬ内は、一寸も動かさぬぞ。
忍び　オヽ、さう云ふからは、云ふて聞かさう。去る人に頼まれ、行平を討つて捨てれば、立身出世、そこ退け。
水無　有りやうに名乘れ。
忍び　エヽ、面倒な。
　ト行かうとするを、引き戻し、長押の長刀を取つて、よろしく立ち廻りあつて、水無瀨、危くなると、一間より、矢一本來て、忍びの胸板に立ち、ウンと死する。
水無　これは。
行平　ホヽウ、その曲者を討ち留めしは行平、騒がれな、水無瀨御前。
　ト管絃になり、行平、裝束改め、奥より出る。
水無　その御姿は。
行平　不審は尤も、某須磨より歸洛、參内もせず、引き籠り居れども、每日の君命もだし難く、寶劍持參し、參内せん。隨身仕丁の用意、申し附きやれ。
水無　その寶劍は、先達て、篁卿より御手に入れども、今一色の神寶なくては。
行平　ホヽウ、その神寶も、計らず、不思議に我が手に入つた。蘭平參れ、蘭平〳〵。
　ト內より
蘭平　ハヽ、ハヽ。
　ト走り出て
御用でござりまするか。
行平　コリヤ〳〵蘭平、余の儀でない、其方が盜み取つたる神寶、これへ出せ。
蘭平　エヽ、出せとは何を。

行平　コリヤ〳〵、最早爭ふところではない。隱す程、罪深し、早く出せ。

蘭平　知らない〳〵。但し、この奴めが、奪ひ取つたと云ふ、なんぞ證據がござるかな。

ト内より

與茂　オヽ、證據こゝにある。それへ參つて、云ふて聞かさん。

〽立ち出づる與茂作夫婦、ありし姿に引きかへて、錦繡ひの袴、肩衣、綺羅を磨きし大小の、さも勇ましき骨柄と、いとゞ氣ある裲襠の衣紋正しき出で立ちに、蘭平悔り。

蘭平　ヤア〳〵與茂作がその姿、コリヤどうぢや。

與茂　某を壬生の百姓與茂作と云ひしは、假の名、また弟義澄と云つたは、猶以て大きな僞り。誠は小野の篁が家臣、隊日の音人と云ふ者、最前、追かけ首討ちたるが、その方が肉身の弟義澄なるわい。先達て騷動の砌り、主人の仰せを受け、密かに汝が行衞を尋ぬると雖も、重器に災ひあらん事を思ふて、今日の只今まで延引なす。

行平　汝、先達て下郞となりて、わが館へ入り込みしより、合點行かじと心をつける折柄、篁卿より音人を以ての内通。

與茂　其方、見知らぬを幸ひ、壬生の百姓となりて、相果てし松風どのの事を、戀わび給ふ體にもてなし。

水無　自らとても、わが君に樣子聞けども、知らぬ顏にて其方を以てのその扱ひ。

りく　似てもつかぬ私しをば、松風さまに似たと云ふて、呼びよせ、わが君に仇ある體に見せ、自然と名乘りし天國の一腰。

與茂　その證據も音人が、義澄を詮議させ、兄弟互ひに面を知らず、天國の大小を目印と委細の内狀に因て手段を廻らし、かく顯はしたる孔雀三郞。

行平　サア、神寳を渡し。

與茂　潔ぎよく降參いたせ。

皆々　サア〳〵〳〵。なんと。

〽さしも不敵の蘭平も、はつとばかりに返答なく、五臟六腑をこみ上げ〳〵身を震はしゐたりしが、やゝあつて氣色を正し。

蘭平　われ宗岡を害し、神寳を奪ひ、まつた行平を恨むる事、非道にあらぬ一通り。語つて聞かさん。



鬪平物狂の舞臺面

へ語つて聞けんと、どつかと座し。

元來我が父、伴實澄、この在原も、先祖は同じ血筋と云ひながら、應天門の燒火は實澄の科なりと、行平篁が讒言にて、お咎めの身となり、大和の柿の元に身を退き、その折柄、われは良雄丸と呼び、この鬱憤を散ぜん爲、殿中へ近寄る內、日外の騷動の時、紀の三位名虎公に出會ひなし、わが實父は名虎公と知りし上、その實父、この世を去りしも、篁、行平ゆゑと聞き、實父、養父の二敵、うぬらを討つたその上では、神寶を元手に仕官の望み、その大切の神寶を、たやすくうぬらに渡さうや。骸に息の通ふ內は成らぬ事だ。

與茂　ヤア、たま〳〵この期に及んで未練の詞、寶を賴みに、なんのたわ事、この音人か取つて見せう。

蘭平　オヽ、ならば手柄に取つて見よ。

與茂　イデ、音人が。

行平　手を下すまでには、及ばぬ。エイ。

ト松の木へ、手裏劍を打つと、のろし上がる。どんちやんになると、下手より、捕手大勢ばら〳〵と出て、蘭平を取り卷き

捕大　動くな。

へ追つかけまくりし腕限り、薙立て〳〵。

ト三重にて蘭平、捕手皆々を相手に下手に入る。

與茂　只今の蘭平の樣子にては、本心に立ち歸るべき所存は見えず。

行平　然し、仁を以て懷くる時は、情に刃向ふ者あらじ。

與茂　猶、この上は、右の一人を以て事を計らひませう。

ト云ふ內、家來一人走り出て

家來　ハツ、申し上げます。蘭平、手痛く働き、捕手の者共の手に合ひませぬ。

與茂　オヽ、追々加勢を遣ふ心、一度に組んで捕れ。サ急げ〳〵。

家來　ハツ。

ト走り入る。

與茂　君には先づ、御入りあられませう。

ト上手の御簾へ行平、御臺、入る。

女房、來い。

ト向うへついと入る。返し

造り物、奧庭、楓山の體、眞中に見事なる、欄間の橋の下より向う打ち拔き、紅葉の吊り枝數多、並び

に樹木、澤山あり、隨分見事に、この橋の眞中に、蘭平、大薙にて拔身を構へ立つてゐる。兩方より突棒、刺叉を持つて大勢、取り圍みゐる見得にて道具納まる。

ト始終ドンチヤン鼓しく、大タテ、さま〴〵あつて、皆々追ひ込む。段々とあり、この間に、繁藏ヤアイ〳〵と呼び、よろしくあつて、皆々を切り伏せ、トヾ向うへ走り行かうとする。上下より、行平、音人、御臺、おりく皆々出て

行平　ヤア〳〵、孔雀三郎、行平が手を下すに、後ろを見するか。

蘭平　ヤア、なんと。

トばた〳〵と本舞臺へ戻り

どいつ、こいつの用捨はない。ならば手柄に討つて見よ。

與茂　イヤ、行平卿、御手を下さるゝに及ばぬ。屈强の組手一人呼び出して、召し捕らせん。ヤア〳〵申し附け置いたる組子の者、早參れ。

ト戸屋の內にて

繁藏　ハア、。

〽出で來たるは、わが子の繁藏、濃き紅の鉢卷に、よつ糸組んだる花襷、さも凛々しげに、立ち向へば。

蘭平　ヤ、わりや繁藏か。

繁藏　最前、わが君、近藤の二字を賜はつて、お傍近く召さるゝ所、主君に敵對義雄なれば、搦め捕れとの主命なれば、親子とて用捨はならぬ。どちらが討つとも討たるゝとも、勝負は時の運次第、サア立ち合はつしやれ。

〽潔ぎよう、口では云へど心には、悲しみ餘る目に淚、止め兼ねたる風情なり。

與茂　ヤア、卑怯なり、義雄、廣言にも似ぬ、猶豫の體、なぜ彼れを斬り伏せぬ。サア斬れ〳〵。

〽わざと勵ます手段の詞、聞くより無念と立ち寄つて、既に討たんと振り上げしが、思ひ直してどつかと座し。

蘭平　百萬騎の强敵をも、斬り拉がんとは思へども、悴の愛にはなんとして〳〵、サア、立ち寄つて繩かけよ。

行平　ソレ、繁藏、繩かけよ。

ト立ち兼ねる。

何を猶豫、早く繩うて。

繁藏　ハツ。

〽ハツといらへて立ち寄りしが、いかに主命なればとて、子として親に繩かくるは勿體なや、冥加なやと、思へば

持ち捕繩は、百斤の丸がせを、提ぐるより猶重かりし、不孝の罪恐しや、忠を立つれば孝立ゝず、とやせん角や、覺悟の親よりも忠孝二つに責めらるゝ、稚心のいぢらしく。

蘭平　ヤア、未練な奴の。この親に繩かけねば、御恩を受けし主命に背くかと、は云ふものゝ道理々々、汝が忠義、立てさせくれん。繩に勝りし手柄の種、先達て宗岡をぶつばなし、奪ひ取りし神寶、イザ、御主人へ差し上げよ。

ト差し出す。繁藏取つて、直ぐに行平の前へ持つて行き

繁藏　ハッ。

ト差し出す。行平、取り上げて押し戴き。

行平　オヽ、かく神寶別狀なく歸らせ給ふも、皆繁藏が忠義、今日より伴の家を引き起し、家名相續して取らせん。

蘭平　スリヤ、伴の家を御再興なされて下されんとな。エヽ、忝ない。猶もお賴み申すは音人どの、伜が身の上、お心添へられて下されい。最早この世に用なき僕、いづれもさらば。

與茂　ヤレ、待たれい、切腹とは麁忽々々、一子出家の功德には、九族天に產るといへば、實父、養父の爲なれば、道心堅固に召されてよからう。

蘭平　成る程、仰せに從ひ、出家となり、父の菩提、大和の國、柿の木に引き籠り、紀の僧正と改名して、佛道修業を遂げん。

行平　かく寶物揃ふ上は、わが君の御代、萬歲。

與茂　目出度い〳〵。

〽さらば〳〵と立別れ、大和路さして。

ト双方よろしく　　拍子幕

倭假名在原系圖（終り）

蝶花形名歌島臺（てふはながためいかのしまだい）

解　説

寛政五年七月、豐竹座上演。作者は若竹笛躬。

十一段物で、大序は大内山に、眞柴大内和睦の取結び、第二段は宮島で、大友三郎の奸計に和睦が再び破れる。第三段は煮賣り屋の娘の段。第四段は鐵砲鍛冶の井上新左衛門實は小坂部和三郎が久吉方を火縄で暗殺する件。第五段は眞柴方と戰つて大内の敗走。第六段は兒島元兵衛が久吉の家臣となる件。第七段は和三郎に勸められて眞弓が父の晉近を味方に附けんと出かける所。第八段が爰へ收録した一幕。全篇中の中心になつてゐる。第九段は大内義弘が正淸を討らんとして却つて討られる件。次に「道行山路の轡虫」で義弘の道行、男一人の道行は義太夫には珍らしい。第十段は山間に身をやつした柴田の後家小谷の方を久吉と義弘が見出し、これが緣で兩家の和睦調ひ、小田春姫は義弘へ輿入れする。爰が蝶花形の名題を示すところ。第十一段は兩家が大友三郎を亡ぼす件で終りである。

全體としては誠に愚作で、取り所もないものだが、流石に八段目だけは舞臺を二つに割つた技巧や、親子の恩愛を無理にも織り込んであるので名高く、義太夫としても聞えてゐる。歌舞伎には餘り上演されず、京坂に二三度出たきりで、東都では明治八年正月の中村座に初めて舞臺に上つたのである。爰へ出したのは、その時の臺本で、役割は左の通り。

晉近、又藏(中村芝翫)出雲(中村時藏)加藤(市川團升)主水(中村鶴助)最澄(中村相藏)葉末(岩井半四郎)眞弓(中村壽三郎)松太郎(中村芝三郎)笹市(中村金彌)

小坂部晉近といふのは、長曾我部元親を當込んだ役である。

蝶花形名歌島臺

小坂部元親館の場

役名――加藤清正。同妻、葉末。同一子、笹市。出雲左衛門宗貞。同妻、眞弓。同一子、松太郎。山の過主水。木村又蔵。大友三郎景澄。小坂部兵部元親。

本舞臺、金張、彩色繪の通し欄間、正面より三方折り廻し、平舞臺銀張りの彩色繪の襖、上下出入り、舞臺、花道とも薄縁敷き、小坂部館奥殿の模様見事飾りつけ、爰に腰元、若草、初音、篠、紅梅の四人、祝儀物の島臺、折り詰の足つき、干鯛箱など並べあつて、茶道の珍才と腰元紅梅の兩人紅葉の枝にて劍術立合ひの模様、これを三人の腰元見物して居る體。幕の内よりバタ／＼のつけ。白囃子にて賑やかに幕明く。

篠　珍才さん、負けまいぞ／＼。

初音　紅梅さん遠慮なしに。

三人　ソレ／＼、打ち込んで／＼。

ト兩人立廻り居て。

珍才　所を斯う受け留めて

紅梅　そこをわたしが一寸斯うして。

珍才　オット、危なし……どつこいしよ。

ト危うく受け留めて始終白囃子になり、戯れの心の立廻りよろしく、トゞ紅梅に珍才負けて

アヽ、參つた／＼。

トこれより琴唄の合ひ方。

紅梅　口程でもない、珍才さま。

三人　これに懲りたが好いわいなア。

珍才　イヤモウ、懲り／＼珍才坊……併し男同士の立合なら、なか／＼引けを取りはせぬが、相手が女だけ。

四人　それでお前負けたのかえ。

珍才　イヤ、負けたのではない……疊の緣に躓いて……思はぬ負けを……オイ致したり。

ト河東節を語る心。

四人　ホヽヽヽヽ。
若草　これと云ふも大殿樣が、常々から武家へ奉公する者は。
雛　まさかの時の心がけに、太刀の一手や、薙刀は嗜めねばならぬと云うて。
初音　月六才には御城下の、道場から通ひ稽古の先生に。
紅梅　御指南受けるお蔭ゆゑ、珍才さまの自慢話しが聞いて居られず今の仕儀、必ず恨んで下さんすなえ。
珍才　何恨むものか、兎角勝負は時の運。イヤ、勝負と云へばこの九州隨一の大々名、大内千島之助義弘どのには、當時勢ひ堂々たる豐臣家と、去年からの大合戰、過し日の戰ひには、大内家の一の軍師仁木武者之助どのゝ謀計で豐臣方を地雷火を以て、皆殺しにする積りの所、俄雨が車轄を濕し、地雷火の手筈が違つたから、愈々大内家が躍起となつて、羽柴、大内が軍の最中、御當家の殿樣は危い軍にかゝり合はず、本持返りの御祝儀で、御親類方や城下の町人、アノ通りの贈り物で。

ト件の島臺品々へこなしあつて。

穩かにしてお出でなさるとは目出度い事でござるなう。
若草　それと云ふのも御當家の姫御前方が、豐臣家のお身内や大内家の歷々方へ、御緣組を遊ばした。
雛　その御緣邊の續き合でどちらへ味方遊ばしても私に云ふ恨みつこ。
初音　片身恨みの御斟酌で軍騷ぎはなけれども。
紅梅　仕儀に依つては何時、なん時どう云ふ變がないとも云はれず。
若草　それゆゑにわたし等が。
四人　日々變らぬ武藝の稽古。
珍才　イヤモウ、皆樣のお心がけ恐れ感心いたしました。

ト向うバタ〳〵になり、若侍ひ一人出て。

侍　ハツ、申し上げます。
珍才　御奏者の御用は。
四人　何事でござりまする。
侍　隣國の御城主大友三郎景澄さま、當城へお出での趣き、御玄關までの先觸れにござりまする。

ト云ひ捨て、向うへ引き返して入る。

雛　大友三郎さまがお出でとは。
珍才　今も話した戰爭の相談事ではあるまいか、軍の事は恐るわえ。

ト頭を掻く。

初音　なんにもせよ、お先觸れの樣子をば。
紅梅　御家老樣まで。
皆々　お知らせ申すでござりませう。
珍才　サア、お越しなされ。
ト調べになり、腰元皆々、珍才も置き並べし進物の品品を携へて奥へ入る。揚げ幕にて
呼び　大友景澄さまお入り。
へ斯くと知らせに老將の胸の器も廣書院、案内とともに入り來る、大友三郎景澄。
ト中の舞になり、向うより大友三郎、好みの鬘衣裳上下大小にて、ツカ／＼出て來る。後より疏上下の侍ひ、袱紗にて、三郎の刀を持ちつき添ひ出て來る。上手より以前の奥女中、若草、雛、先へ、後より紅梅は茶臺へ銀張茶碗の蓋したるを持ち、初音は煙草盆を携へ、これとともに茶道、珍才立ち出て、前に出て手を仕へ。
珍才　景澄さまには存じ寄らざる今日の御出で、先刻俄かのお先觸れがありし所、侍分たる近仕の面々、奥殿に居合さず。
初音　それゆゑ私しどもが。

皆々　お出迎ひ。
ト皆々思ひ入れ。景澄こなしあつて
景澄　この九州にそれ／＼の名家の諸侯多けれども、この小坂部は格別に高祿取りの歷々も、いぶせく思ふ家柄でありながら、たまさか來りし某へ、女童や茶道づれが出迎ひとは近頃失敬。侍ひたる者は如何致した。
珍才　侍ひたる方々は、表廓の評定の間へ。
五人　皆詰めきりでござりまする。
ト景澄につこり思ひ入れして
景澄　ハ、ア、それで樣子が相解つた……イヤ流石は小坂部どのゝ家風は格別、感心々々……然らば、それへ罷り通るぞ。
皆々　まづ、お越しあられませう。
ト右の鳴り物にて、舞臺へ來て、この時付き添ひし若い衆の侍ひより、景澄刀を受け取り提げて舞臺へ通る、紅梅茶を出し、初音煙草盆を据ゑ、よろしく皆々扣へる。
景澄　何は格別、某が參りし事主たる兵部元親どのへ申し入れ早く面談いたしたい、取次を頼むぞ。
珍才　それは先刻御家老樣まで申し置きたれば。

紅初　お出での樣子ぞ。
濱因　お知らせ申すでござりませう。
ト正面の襖内にて
主水　アイヤ、知らせに及ばぬ、當家の家老山邊主水、只今それへ參るであらう。
ヽ襖押し明け、山邊主水、行儀正しく出迎ふ。
ト奧より主水、上下衣裳刀を提げ出て、下手へ住ふ。景澄こなしあつて。
景澄　これは〳〵主水どの、國政の事しげく、存外の御無沙汰。
主水　拙者とても主用に暇なく、御面會も一別以來。
景澄　寒暖不順の時候ながら堅勝にて恐悅に存じまする。
主水　其許樣にも御壯健にて重疊に存じまする。
ヽ互ひに挨拶事終り。
ト主水思ひ入れあつて、腰元、茶道へこなしあつて。
コリヤ、其方どもは暫らく次へ。
五人　畏まりました。
ト調べになり、茶道、腰元、皆々下手の襖へ入る。
ヽ人遠ざけて座を進み。
ト主水こなしあつて。

主水　今隣國大内家を責め討たんと、羽柴秀吉大軍を催し合戰最中、お殿下の御使者が、何用あつて御入來なさるや。
ヽと不審顏。
景澄　成る程、不審は尤もも。某今日參りしは、兵部どのに對面の上、ちと密談ござれば、何卒案内を賴み存ずる。
主水　何ぞ御用かは存ぜねども、委細を拙者承はつた上、御前へ申し上げるでござらう。
景澄　イカサマ、その用と申すは貴殿も存ずらん、某始め列國の諸大名、秀吉の麾下に隨ふも時の權威、武勇自慢の大内さへ責めつける勢なれど、兵部どのゝ武名に恐れてや、手出しもせざるは、天晴れ家柄、殊に長壽の賀を祝す拙者が寸志を顯さん爲め、品々持參仕つてござる。
ト橋がゝりへこなしあつて
進上の品、早く〳〵。
ヽ早く〳〵の詞のうち家來が運ぶ白臺に、卷絹、黃金、美酒、佳肴、お盃の臺取り、琥珀の硯、珊瑚の杖突、熨斗包、廣間せましと並ぶれば。
ト右の文句のうち橋がゝりより、上下の侍ひ、白木の臺へ包みし卷絹、黃金の箱、柳樽、尾頭つきし鯛、その外文句の品々、五人程にて、銘々に持ち出てよろし

く置き並べ、その儘、人々は橋がゝりへ入る。主水これを見遣り、思ひ入れして。

主水　ムウ、羽柴秀吉、冠者義弘、二虎戰はしめ、一虎亡び、一虎勞るゝ、虚を討たんと、賄賂を以て我が君を釣り寄せんなぞとは、ヤア、愚か〳〵。

〽と取り合ぬ詞に、三郎膝摺り寄せ。

ト三郎こなしあつて。

景澄　弓矢を取つては西國に、人も手を置く小坂部どの、纔か當城の主となし置くは殘念至極。拙者に力を添へられなば、羽柴、大内も討ち亡し、六十餘萬騎を手中に握らば九州一圓、四國を添へ進上申す。我れに力を添へるやう、貴殿の執成しにて、兵部どのゝ承引あるやう頼み存ずる。

〽と當てもなき、雲を便りの空頼み、聞きも敢へず打ち笑ひ。

主水　ハヽヽヽ、甲に似せて、穴を掘る蟹侍ひとは御貴殿の事。我が君、鋒先にて切り取つたる一國一城、恩に着るべき者なければ、世を我が儘の樂隱居、なりや國郡をお望みあらんや、馬鹿な事を。

景澄　スリヤ、斯程に申しても。

主水　エヽ、叶はぬ事だ、とつとゝ持つて歸られよ。

〽と云ひ放せば、短慮の三郎ぐつと詰めかけ。

ト三郎、キッとなつて。

景澄　ヤア、大事を口外させしのみならず、慮外の一言、胸を定めて返答せよ。

〽切刃廻せど見遣りもせず、よそに吹きたす煙草のけむり。

ト主水悠然と煙草をくゆらし、思ひ入れ。

〽騷がぬ丈夫に氣を呑まれ、怖氣立てども負けぬ顏。

斯程云うても相手にならぬは、エヽ、扨ては某が武勇に恐れし者ならんか。斯やうな者を相手に致すは、おとなげなし、是非に及ばぬ、身どもはこの儘立ち歸るぞ……戻るぞよ、留めて見ぬか。

〽留めて見ぬかと足早に。

ト花道へ行きかけて、ちよつととまり。

家來ども。

ト橋がゝりより。

皆々　ハアヽ。

景澄　ソレ、その品を……持つて參れ。

ト家來もじ〳〵するゆゑ。

エヽ、埒の明かぬ、きり〳〵致せ。
ト家來皆々件の品々をもとの如く携へ
〽つら眞赤に枝珊瑚珠、琥珀のちり炭つきほなし、しよげになつてぞ歸りける。
ト景澄手持ち不沙汰の思ひ入れよろしく、家來を叱り散らし件の品々を取り持たせ、揚げ幕へ入る。
〽後に主水は眉を皺め。
主水　鹿を指して馬と云ひし、馬鹿の上行く三郎景澄、數代續きし大友家も斷絶なさん……ハテ扨て笑止。
〽笑止やと仁なる悔み菊の間の襖押し明け、清正が妻の葉末、立ち出でゝ、樣子ありげに座につけば、主水頷き詞を正し。
トこの文句のうち、葉末、眞紅の紐にて結びし箱を持ち出て來て、上手に住ふ。主水こなしあつて。
これは〳〵葉末さまには好うこそお出で遊ばしました。今日は定めて我が君の賀を祝しにお出でならんが、この程兩家の合戰より出海、加藤の御兩所は只今にては敵と敵、さぞお心苦しく思さんと拙者も推量仕る。さりながら武士の常、珍らしからず、して御子息笹市さまにも御賢勝にて大慶至極に存じまする。

〽尋ねに葉末は主水に向ひ。
葉末　これ主水、この葉末が今日參りしは、父上が賀の祝ひを幸ひに、我が夫の御主君秀吉さまへ、何卒お味方あるやうと、これ迄お勸め申せども、お聞き入れない父上さま。御勘當遊ばした弟の和三郎、今では羽柴の御譜代同前、聟も娘も子も孫も一家一門晴れがましう同じ味方にあるならば、此やうな目出度い、嬉しい事はない。昔堅氣を取り置いてお味方なされ、弟が勘當赦すと、父上が今日は是非々々仰つしやるやう、其方もとも〳〵力を添へ、執成してたもいなう。
〽頼むこなたに立ち聞く眞弓、襖押し明け、ツヽと出て。
眞弓　モシ、姉さん、そりや身勝手でござんすぞえ。わたしが來たのも同じ願ひ、大内家の兩家臣、武者之助か、出海かと、云はるゝ勇士も羽柴の家臣、清正に緣ありと、義弘さまのお疑ひ、軍のおとも叶はぬ口惜しさ……父上さへお味方ならば、夫の明りも立つ道理。コレ主水、父上が得心するやう、頼む〳〵頼むわいなう。
〽云ふも涙に曇り聲、主水はなんと返答の、詞なければ、なほ摺り寄り。
默つて居やるは姉さまにつく心ぢやの。もし父上のお聞

き屆けない時は……コレこの箱の封を切れよと、夫の云ひつけ。

ト持ち來りし箱へ思ひ入れ。葉末もこなしあつて。

葉末　ソリヤ姉も同じ事、御返事の品に依りこの箱を父上に見せて心を定めよと、わが夫のお指圖ぢやわいの。

〽同じく側に差し置けば。

ト葉末よろしく思ひ入れ。主水こなしあつて。

主水　ムウ、スリヤ、羽柴、大内兩家よりこれ迄再三お招きあれど御承引なき我が君にお目にかけよと、送りしその箱、心を籠めし物ならん……如何にも御姉妹のお望み通り、命に替へてもお執なし致すでござらう。

葉末　スリヤ、姉妹が心を酌んで。

眞弓　其方がきつと、父上を。

主水　如何にもよきに計らいませうが、人を禁ぜしお居間の内。

葉末　そこをわが身の計らひで。

眞弓　お目にかゝつて是非とも。

兩人　味方に。

主水　手引き致すでござりませう。

葉末　そんなら主水。

主水　御兩人さま。

兩人　賴むぞよ。

〽詞番うて三人は、奥殿さして入りにける。

トこの道具よろしくぶん廻す。

本舞臺、正面二間、中足、本緣つき、本木地磨き柱緣とも誂らへの如く、緣先沓脱ぎの石、その外好みの通り、欄間砂壁、軒先、屋根裏を見せ、屋體へ杉骨の障子立て切り、但し緣側三方折り廻し上下、誂らへの枝折戸、かきがれの誂らへ、杉戸綟子ばり好みに任すべし、この外廻り、上下椽の木網代、畫心に折り廻し、この邊柴垣、庭内の植込み生花をあしらひ、この間より上下とも出入りあり、日覆より好みの吊り枝、すべて小坂部元親隱居の模様よろしく障子の内、上手床の間、掛け花活、これにならんで袋棚、これへ書筥、軸箱置き並べ、爰に調べかけし本道具の鼓あり、好き所に菓子、これへ風呂釜、茶道具一式飾りある事、この棚につゞき風雅なる襖立てきり、別に後に用ゆる本道具、二枚折り屏風片寄せあり、右屋體へ障子立てきりし體、中程

より鳴り物、ノリ早き稽古唄にて道具納まる。

ト爰に以前の茶道珍才、以前の腰元、紅梅を引きとらへ戯れ居るを、腰元初音引きのけ、爭ひながら。

紅梅　又しても、珍才さん。

初音　惡洒落れは。

兩人　もう、止めたがよいわいなア。

珍才　ハテ、惡洒落れではない、好い洒落を一寸爰で。

ト紅梅へ抱きつかんとする。

紅梅　アレ、又しても其やうな。

初音　みだらな事をなさんすと、お重役へ。

兩人　告げるぞえ。

珍才　お重役の喧しやは、今日は殘らずお表へ詰めきり、そこへ先刻もお客人の大友さま。

紅梅　お歸りあると、間もなう。

初音　御姉妹の葉末さまと、眞弓さまのお出でなれど。

紅梅　何やら譯のある事で、御休息の間は別々。

珍才　なれどもお茶やお菓子の用意はして置かねばならぬゆゑ。

紅梅　そりやお前が構はいでも、露さんと、若草さんが。

初音　銘々受けこみ、おもてなしの用意も。

兩人　疾にしてござんすわいなア。

珍才　その手筈が濟んであれば、お前方二人は、マア爰で少し遊んで居てもよいではないか。思へば／＼最前は。

ト紅梅の袖を捕へ

よく酷い目に合せたな。

紅梅　それも時のはずみぢやと、お前先刻云はしやんしたではないかいなう。

珍才　サア／＼、劍術で負けたから、今度は柔術、やわらの手で、ヤイ／＼と勝を取らねばならぬ。

ト紅梅を追ひ廻す。

紅梅　エヽモウ、仇執拗い。

初音　それよりお前、殿樣がいつもお茶を召しあがる刻限ゆゑ、お圍ひの仕度をば、早うなさんせいなア。

珍才　イヤ、その圍ひの仕度は釜もかけたり、灰もしたり……サアこれからは二人のうち、一人は捉へて組打ちの稽古ぢや／＼。

兩人　エヽ、又しても、よしなさんせ。

珍才　逃がさぬ／＼。

ト追ひ廻す、早めし鳴り物になり、兩人珍才を突きこかし、庭の砂を打ちつける、これにて珍才目に砂が入り

りしこゝろ。

ア、痛い〳〵。轉ばし居つたな、その上目の中へ砂が入つて目が見えぬは……ア、砂が目に入つたぞ、砂目えて酒呑まそ。

兩人　手の鳴る方へ。

珍才　砂目えて酒呑ましよ。

ト鳴り物になり、兩人逃げ廻る、これを珍才追ひ廻しよろしく上の方網代の中へ入る。

ト時の鐘、風の音、トこれより出語り。

〽春とは云へど物寂し、萌る草間の蟲ならで、臺子の釜の音澄し、數寄屋待合前裁の、露路と勝手を忍び足、隔て合つたる姉妹が心も先へ飛び石傳ひ。

トこの文句へ掠めて風の音、鶯笛、上の方より以前の葉末、下の方より同じく眞弓、庭下駄にて忍び〳〵出て來り双方行き合ひ、こなしあつて。

〽それと眞弓が。

眞弓　姉さんか。

葉末　オヽ、妹聟へ何しに。エヽ、聞えた、わしを出し拔き父上を、大内方へ味方につけうと思ひやるのか。

眞弓　さう云はしやんすお前こそ、先へ廻つて秀吉方へ勸める心でござんせう。

葉末　そりや云はいでも知れた事、わしが只管父上へお勸め申して羽柴家へお味方させて見せうわいのう。

眞弓　イヤ〳〵、なんぼ姉さんの高下でも、羽柴方の勢ひでも滅多にさうはさせぬぞえ。

葉末　エヽ、つべこべと口答へ、そこ退きやらぬか。

〽突き退けて行くも姉甲斐、隔てる眞弓〽邪魔しやんなと振り解く、風に屏風の柳腰、帶際とつて引き戻す腕もかよわき糸芒、亂す黑髮兩方が摑み合つたる姉妹喧嘩。

トこれへ鳴り物あしらひ、兩人よろしく行くを遣らじと、角め立ち立廻りよろしくあつて、この時、御簾の内にて。

元親　ヤア、姦しい、靜まり居らう。

トこれにて、御簾を卷き上げる。

〽閑を樂しむ元親が、臺子にかゝり獨服の濃茶の手前他念なく。

ト爰に小坂部元親好みの拵へ、臺子の前に茶器式の通り置き並べ、天目にて獨服のこなし、よろしくあつて。

出海、加藤が妻と云はるゝ身を以て、はしたなき振舞ひ。

さりながら、主家を思うの貞節、さのみ叱られぬ。仲直りは幸ひ〳〵、姉妹中も濃茶の盃。ナ、爰へ〳〵。

〽爰へ〳〵と機嫌好き父の詞に、葉末はさし寄り。

ト元親よろしくこなし、兩人二重へ上り思ひ入れあつて。

葉末　今四海一統に秀吉さまへ隨ふ時節、理も非に枉げてもお味方を。

眞弓　イエ〳〵姉さんまんがちを……申し父上、義弘さまへお味方と、ツイ云うて下さんせ。

元親　ハテ、是非返答が聞きたくば、双方ともに擇りならぬ。この上は其方たちが、持參の品々を改め見よ。

〽取り出し渡す以前の箱。

ト片へに置きありし件の文箱を兩人に渡す。

〽心濟まねど銘々が、あたふた明けて取り出す、樣子は何か白布に。

ト葉末が開く箱の内より白布出る、これを開き見て。

葉末　ムウ、今日の細布胸合はずと、古歌の下の句……筆蹟は夫、淸正どの。

眞弓　わたしが方は、コレこの扇。

ト眞弓が箱の内より出し扇を見て、元親へさし出す、元親取つて開き。

元親　ドレ〳〵……秋來月を見て歸思多し、白籠を開いて白鷴を放つ……ムウ、こりやこれ故郷を思ふ詩の心。

ト扇を眞弓に渡し、兩人へこなしあつて。

娘ども、とくと、工夫を仕れ。

葉眞　アイ。

〽あいとは云へど姉妹が、夫の心白布と、かけし扇の判じ物、解けぬ色目を見てとる元親。

ト元親、こなしあつて。

元親　羽柴が招きに隨はざる、功も罪も心々、今日の細布胸合はずと、一家の緣もこの如く。

ト布へこなしあつて。

斷ち切る布は離緣の印。

葉末　そんならわたしは、淸正どのに。

元親　オヽ、其方ばかりでない妹も、故郷を慕ふ詩を扇面に書き送りし左衞門……親骨、小骨ばら〳〵に、因みを切つたる扇の去り狀。

眞弓　スリヤ、アノ。ハア、。

ト此うち扇を取り要を切りしを見遣りて投げ出す。扇の骨ばら〳〵となる。

〽ハアはつと計りに詞なく、目には涙の玉手箱、明て口惜しき思ひなり。
〽時しも次より近習の武士。
トばた〳〵になり向う揚げ幕より、袴、股立の侍ひ走り出て。
侍ひ　羽柴家より使者として、加藤清正さま、大内家より使者として、出海左衞門宗貞どの、只今これへ。
トその儘引き返して入る。
〽知らすれば、萎れし葉末も露持つ心地。
ト葉末よろしくこなしあつて。
葉末　オヽ、好い所へ夫の使者、子までなしたる夫婦合、合點もさせず、去られた樣子を。
眞弓　オヽ、さうでござんす、わたしとても同じ事、お使者であらうがこの恨み、頼むは姉さん。
葉末　おいなう。
〽呑み込んだと初めの縺れどこへやら、解け合うては引き〆める帶も親身の姉妹思ひ。
ト兩人よろしく、元親思ひ入れあつて。
元親　ヤレ、緣切れたれば他人向、無禮の挨拶仕るな。
ト思ひ入れあつて。

我れも禮服に改めて、兩家の使者へ面談せん。
〽云ひつゝ立つて奧深く。
ト元親こなしあつて、襖の内へ入る。
〽入る間に程も長廊下。
ト此うち、葉末、眞弓、兩人よろしく、こなしつ向う東西の揚げ幕にて。
呼び　お使者のお入り。
トこれに、葉末、眞弓もそれ〴〵にこなしあつて出迎ふ思ひ入れ。後の文句より中の舞のあしらひ。
〽加藤虎之助清正と親の名をかる笹市が年さへ幼稚の腕白盛り〽年も相生ふ松太郎、父左衞門とこれも又、名は芳ばしき栴檀の萠、由々しく打ち通れば。
ト右の文句にて、東の揚げ幕より、清正の悴笹市、西の揚げ幕より、出海悴松太郎、何れも好みの若衆鬘、衣裳長上下見事なる着つけにて、大小しづ〳〵と出で來り舞臺へかゝる。
眞弓　ヤア、左衞門どのゝお使者と云ふは、松太郎か。好うおぢやつたなう。
葉末　笹市も父樣の御名代ぢやの。長上下の着こなし振り、好う似合うた事かいなう。サア〳〵こちへ。

〽と打ち通る。
さうしてお使者の。
葉眞　御口上は。
笹市　イエ〳〵、父樣と緣が切れた、お前は他所の伯母樣ぢや。
松太　オヽ、笹市どのゝ云はしやる通り、コレ他所の伯母樣、祖父樣へのお取次お賴み申し上げまする。
〽云ひ合さねど兩方が悧發に困る母親も、なんと答へも口籠る。
ト葉末、眞弓もよろしく思ひ入れ。
〽一間に斯くと洩れ聞く兵部、老の氣丈の長袴、左右に小太刀携へて、作法亂さず歩み出て。
ト元親、襖の内より長袴、羽織にて誂らへの小太刀を携へ、こなしあつて出て來り。
元親　久しく對面せざるうちに、ハテおとなしく生ひ立ちしな、娘が緣に引かれざる、小坂部が性根を知り、緣を切りて孫どもを、使者に差し越す發明々々……が、モシこの祖父が承引せずば、その儘では歸られまい。とくと思案を定めよや。
ト子役へ思ひ入れあつて云ふ。

〽詞も待たず、松太郎。
松太　この役目仕負ふせねば、生きて屋敷へ戻るなと、父樣のお詞、コレ御覽下されませ。
〽云ひつゝ手早に上下上着、脫げば白無垢麻上下。
ト松太郎衣裳上下着つけを脫ぐ。白無垢水裃の姿になる。
〽母は見るより。
眞弓　オヽ、さうならてはならぬ筈、大人も及ばぬ健氣さを、眞似がなるなら、どなたでも、して見やしやんせ。
〽と聞けがしの詞も耳に當り觸り。
ト葉末こなしあつて。
葉末　コレ、妹、親の口から子を譽るは聞きにくい。それ程の事仕兼ねるやうな、笹市ではないわいの。
笹市　アイ、祖父樣が味方について下されずば、死ぬる覺悟は極めて居ります。
葉末　オヽ、さうであらう〳〵。早う用意を。
〽早う用意と、袴の紐を解くやら、ほどくやら、上着脫がせば同じくも、下は無紋の死出立。
ト葉末、笹市へ立ちかゝり、袴の紐を解き手早く衣裳脫がせると、松太郎も同じ拵らへになる。

〽見るより、はッと、思ひながら。

オ、、でかしやつたなう、眞實極めた其方の覺悟、誰も口では立派に云へども、まさかになると、臆病風が出やすいものぢや。

〽始めの嵐吹き戻されて。

眞弓　コレ、姉さん、臆病風とは誰が事、義に依つて命を惜しむ松太郎ぢやござんせぬ。

葉末　ソリヤ、こちの子も同じ事。父上のお返事次第、立派な覺悟、見物しや。

眞弓　イヤ、松太郎が覺悟を見せう。

葉末　見事其方が。

眞弓　お前が。

〽我が子贔負にとりのぼし、詞しどろに爭へば。

ト兩人角目立つこなし、元親思ひ入れあつて。

元親　ヤア、無益の論談、左程離緣が悲しくば、切つたる緣を繼ぎ合す工夫はさま〴〵。去りながらわれ達はこの座に叶はぬ。

葉末　ソリヤ、何ゆゑに。

眞弓　この座には。

元親　ヤア、なんであらうと、爰には置かれぬ。

兩人　それぢやと云うて。

元親　エ、、諄々申すな、早く立て。

〽うじ〳〵と立ち兼るを、

父が詞を用ひぬか。

〽老の苛立ち是非なくも出る心の枝折り門、親子の中も隔つる切り戸。

トこれにて、葉末、眞弓の兩人是非なく上下の枝折り門の外へ出る、兩人の子役も祖父の怒りゆゑ外へ出ようと、仕方する事、これを見返りそれ〴〵に愁ひのこなしよろしく、松太郎、笹市、母々を外へ出す。母兩人出兼ねて又内へ思ひ入れ。元親コリヤとこなし、子役これにて、双方かきがね掛けるこなし。

〽かきがねかけて、こなたを見やり。

松太　申し、祖父さま、秀吉方へお味方あれば、わしや侍ひが立ちませぬ。

笹市　オ、、武士が立たうが立つまいが、祖父様はこつちの味方。

松太　イヤ、さうはなるまい。

笹市　して見せう。

ト兩人、キッと詰め合ふ。元親見て。

元親　オヽ、でかす〳〵。天晴れ勇者の倅ども。併し、大内につかば笹市が恥辱とならん……とあつて羽柴に從はゞ松太郎が身の上、何れを捨て、何れを取らん……彼の獅子の子を試すに等しく、この場に於て、兩人が眞劍の勝負を試み……勝つた方へ祖父が味方、心覺えのこの二腰、これを持つて、立ち合へ兩人。

笹松　心得ました。

　ト元親子役兩人へ刀を渡す。

〽渡せば取つて、銘々が、腰に流石は武士の小太刀の目釘喰ひしめし、股立とつて身拵へ。

　ト松太郎、笹市件の刀を腰に差し、目釘しめし、股立ち身拵へするこなし、文句のうちにあるべし。

〽戸の隙間より差し覗く、母と母とは在られぬ思ひ。

　ト眞弓、葉末よろしく思ひ入れあつて。

葉末　年端も行かぬ二人の子供。

眞弓　命に係る眞劍の、勝負さすとは、あんまりな。

〽慘いわいなと掻き口說く、親の思ひぞやる瀨なき。

　トこの文句にて双方よろしく、トヾ枝折の外へハア、と泣き伏す。

〽耳にもかけず元親は、床に直せし鼓を取り上げ。

　ト元親、悠々と床にある鼓を取り、思ひ入れあつて。

元親　我れ壯年の頃、武將足利義晴公、數度の勳功御賞美あり、猶も武名を鳴らせよと、谺と號しこの鼓を下し賜り、年賀毎に打つが吉例、今。

〽六十の賀を祝す……謠終らぬ其うちに。

用意がよくば……とく〳〵勝負を。

　ト子役兩人へ思ひ入れ。

松笹　ハツ。

〽用意がよくばと打ち鳴らす、鼓の調べ白刃の刃。

　ト元親鼓へ音を入れる、兩人へ思ひ入れ。笹市、松太郎、前へ出て。

笹市　イザ。

松太　イザ。

兩人　イザ〳〵〳〵。

〽拔き放して立ち向ふ、樂のかけ聲、鼓の矢聲。

　ト兩人このかゝりにて、白刃拔き合せて立ち合ひになる。

〽有り難や治まる御代の慣ひとて。

　ト後の謠、下座へとるか、太夫座へとるか好みの如く、尤も下座に鼓のツケあしらひあるべし。

〽山河草木穏に、五日の風や十日の雨が下照る日の光り。

〽劍の光り打ち合ふ刃音〽見る目ひやいさ危なさに、こらへ兼るかけ入るを。

ト此うち、松太郎、笹市立ち合ふ動きよろしく、枝折外の眞弓、葉末いろ〳〵案じる思ひ入れ。此うち好き程に、加藤清正、出海左衞門、好みの忍び拵らへにて、葉末の方へ清正、眞弓の方へ出海と、何れもぶッ裂き野袴、大小にて植込みの間より窺ひ出て、内の様子を聞きとりしこなし。女形はじめこれに心づかず。

〽何時の間にかは物蔭に忍び姿の宗貞加藤、制し留めれば詮方も。

ト葉末、眞弓、戸の隙よりいろ〳〵透かし見るこなし堪り兼ねて枝折の内へ入らうとする、加藤、出海の兩人、これをヂッと制す。

〽泣けど應へも白砂を一足さらず切り結ぶ、武士の育ちの直燒刃。

ト太夫座の双方よろしく、元親これへ鼓あしらふ。下座にもツケ鼓よろしく、子役好みの如く立廻つて。

〽つけ入る刀受けはづし、弓手肩先松太郎、斬り込まれてたぢ〳〵〳〵。

ト此うち双方の母こらへ兼れ入らんとするを、清正、宗貞制すこなし。兩人これにヂッとなる、眞弓ハア、と堪り兼れいろ〳〵身をあせる。これを出海制す。元親これを見遣り双方へ目を配り、愁ひの思ひ入れあつて鼓を打つ。

〽さも潔き山の井の水。

〽母は見るより悲しさの心あせれど詮方涙、手疵も屈せぬ松太郎、尖き刃先笹市が、高股四五寸切りつければ。

ト立廻りよろしく、松太郎蹌踉くを踏みしめ〳〵笹市の股へ切り込む、笹市たぢ〳〵となる。葉末覗き見て思ひ入れ。

葉末 アレ、笹市が切られたわいの。ソレ〳〵〳〵、油斷しやんな。

〽ア、危い、必ず負けてたもんなと、焦燥りながらも親親が言葉の助太刀、互角の手練、切りつ切られつ、逆る血汐染めなす若竹も花野を爭ふ修羅の庭〽勝負は何れと氣を配る、父と父とは千萬無量、母は外面に血の涙

ト枝折のうちこの試合兩人が、だん〳〵疲れし體に、宗貞、清正もヂッと愁ひをこらへる思ひ入れ。葉末、眞

弓もよろしく泣き沈るゝ。元親始終愁ひをこらへ〱

鼓の調べよろしく諫め納まる。

〽深手に弱る松太郎、氣がさの笹市捲り立て。止め刺さんと立ち寄るを。

ト松太郎倒れる、笹市これを立ちかゝりて止め刺さんとする。元親キッとして。

元親　ヤレ、待て、勝負見屆けたぞ……娘どもは手負ひを助け抱け。早く〱

〽早く〱に母と母、我が身をしづに東西の、かきがね外れ押し明ける、疾くや遲しと駈け入つて我が子〱に縋りつき。

ト葉末、眞弓兩人身を打ちつける、はずみに掛金外れ扉開く、兩人轉び入り子役兩人を勞ることなしよろしく。

葉末　オヽ、嬉しや笹市、其方は淺疵。

〽神や佛のお蔭ぞと姉は悦ぶ妹は、手負ひに、ひしと抱きつき。

眞弓　コリヤ、松太郎はこの深疵……ハアヽ。

ト泣き伏し。

〽助け抱きかけ、泣き叫ぶ。

ト眞弓よろしく思ひ入れ。

元親　ヤア、武士の家に育ちながら未練至極、笹市勝負に切り勝つ上は、兵部元親、今日より秀吉公へ味方なるぞ。

ト思ひ入れ。

〽聞くにいそ〱姉葉末。

葉末　お馬の前の高名にも勝つた手柄、出かしやつたなう。

〽譽めそやす、よその悦び子心に、聞くも無念さ松太郎。

松太　エヽ、わしや負けたのか、口惜しい。

〽今一勝負と刀を杖、立ちあがれども、よろ〱〱、見る目に母は堪えかねて。

ト松太郎立たんとして、立ちかね苦しむ。眞弓これを見て。

眞弓　オヽ、道理ぢや〱、道理ぢやわいなう……武士の意地とは云ひながら、孫は子よりも可愛いと。

〽世の諺もあるものを、見殺しにする片意地は。

慘いつれない、父上樣。

〽恨みの數箭、數へ立て云ふも眞弓が子に迷ふ悔にいとど苦しさの引き入る息を張りつめて。

ト眞弓よろしく口說き歎く。これを聞き、こなしにて。



明治八年正月中村座上演番附

松太　ヤア・母さま・祖父樣に恨みはない。

〽負けたはわしが未熟から大事の役目を仕損じた憎いやつぢやと、父樣に。

叱られうかと、それが悲しい。

〽もし尋ねてなら、雜市に負けはせぬ。

怪我にツイ切られたと、云うて詫して下されや。

〽今はの際も名を惜しむ、稚な心ぞ可憐き。

　ト松太郎よろしく思ひ入れ。元親これを聞きチッと思ひ入れあつて。

〽こたへ〱し祖父兵部、以前の刀拔くより早く、腹へかばと突き立てれば。

　ト元親、手早く刀を拔き、腹へ突き立てる。

葉末　コリヤ、何ゆゑに父上には。

眞弓　どうした譯で。

兩人　この御最期。

〽なう何ゆゑの御最期と、右と左に姉妹取りつき歎けば氣丈の手負ひ、眞弓が顏をうち眺め涙をうかめ。

　ト元親、思ひ入れあつて。

元親　オヽ、恨みは尤も、去りながら、何をか包まん、松太郎へ最前渡せし一腰はな、刃引きも同じ鈍刀物……去るに依つて雜市が手疵は薄手。

　トこれにて、眞弓、葉末、それ〲に思ひ入れ。

斯く計らひし一通り、本意ならねど云ひ聞かさん。

　ト下座の竹笛入り合ひ方になり。

姉の葉末は先立ちし我が兄、元風が忘れ形見、某とは生さぬ仲、同じ血の緒と云ひながら、義理ある孫の雜市が命を助け、肉親の松太郎を殺せしは。

〽さす敵、加藤清正に。

緣を引いたる親左衞門、返り忠もあらんかと、主人義弘の疑念を晴らすは、骨肉の一子を殺す義者の潔白、この上なしと思ひ寄せしも。

〽義理と云ふ二字が劍となつたるかや、月にも花にも替へぬ孫、いづれ劣らぬ不憫さも。

生みの娘が生の緣、わけて可愛い松太郎、コリヤ。

〽むだ死とばし思ふなよ。

年こそ寄つたれ無双の勇者、小坂部兵部元親を其方が刀で、この如く小腕に仕とめ潔く、討ち死せし手柄者、出かし居つたと祖親が、譽めこそすれ叱りはせまい。

〽心殘さず臨終をと、義理の孫子と恩愛に捨てる命の有り難さ。

ト元親、それ〳〵へ思ひ入れあつて、愁ひよろしく。
〽姉はもとより妹が。
眞弓　さうとは知らず父上を。
〽恨んだが勿體ない。
コレ、松太郎聞きやつたか、其方が死ぬるは父御の爲め、負けたのぢやない、勝ちやといなう。
ト葉末も、ともに松太郎へ思ひ入れ。
松太　アヽ、嬉しうござる、そんならお前も緣切らず、もとの通りに父さまと、仲好う添うて下されや……母さまどこに。
眞弓　オヽ、爰に母は居るわいなう。
松太　母さまどこに。
眞弓　コレ、其方は、モウ目が見へぬかいなう。
松太　アイ、侍ひの子が未練なと、笑はれうか知らねども死ぬる今はに父様や、お前の顔がたつた一目……それが。
〽それがと云ふ後は、舌も縺るゝ斷末魔。
ト松太郎だん〳〵血死期のこなしよろしく、元親も思ひ入れあつて。
元親　ホヽ、苦しかろ、切なから。その苦痛よりこの祖父が切つつ、はつつの度々を謠、鼓で紛らしても。
〽骨肉を裂く苦しみは、一百三十六地獄の、呵責を一度に受くるとも、よもこの上のあるべきか。
可愛の孫よ、不憫やなア。
〽とり亂し、歎けば姉はせきあげ〳〵。
ト此うち、元親、愁ひの思ひ入れ、葉末もこなしあつて。
葉末　孫子の爲めにお命を捨て、恵みの父の恩、船車にも積らりよか。そればかりか愛し子を、義理の刃に殺すのが悲しくなうて、なんとせう。
〽堪らへてたも、コレ妹、手を合したる詫涙。
眞弓　アノ、姉さんの勿體ない、斯うなり行くも先の世の約束事と諦めても、こんな勇々しい子を殺す、その日も替へず父上まで同じ刃の憂別れ。
〽神も佛もない事かと手を取り交し姉妹が、返らぬ繰言宗貞も加藤が手前恥らいて、爰にとだにも得も云はぬ胸の苦しさ目に餘る、涙見ぜじと喰ひしばる〽心を察し淸正も保ちかねたるとも涙。
ト此うち、眞弓、葉末兩人いろ〳〵愁ひあつて手を取り交し泣く。これにて双方に忍び居る、出海、加藤の兩人もそれ〳〵に、チツと蟄して愁ひを包む心、この

時、左衞門堪りかね愁ひあつて、加藤の手前恥らふこなし、四人思ひ〳〵の心意氣、愁ひの模樣よろしく、文句前につゞき。

〽親は泣き寄り、眞實の涙々にくれ近き鐘や哀れを添へぬらん。

ト本釣鐘、四人よろしく泣き落す。

〽左衞門悲歎の涙を拂ひ。

ト左衞門こなしあつて。

出海 一子を殺し二心なき、我が誠忠を顯すも、悴が孝心に身の情、命を賜はる返禮は再び結ぶ半身。

ト思ひ入れ。淸正もこれを聞き。

淸正 ホヽヽ、淸正とても左の如し、大内義弘征伐に、小坂部が討ち死と記錄に殘さば、松太郎、身の追福、この上なし。

〽聞くより、につこと打ち笑みて。

ト此うち、元親、出海、加藤が忍び窺ふ事を察したる心意氣あつて、この文句にて。

元親 ハヽ、仁あり、義あり、味方は名のみ、相果る兵部が末期の置き土產、雜市に與へし太刀こそ我が重代、北辰の二字を彫し、武運守護ある七星丸、萬夫不當の淸正に劍の威德加はりて、和漢に美名を殘されよ。

ト此うち、柴垣の蔭へ退き扣へ居たりし雜市件の刀を持ち出て。

雜市 祖父樣のお形見、イザ父上。

ト思ひ入れ。

淸正 ハア、慥かに受納仕る。

ト元親へ思ひ入れ、劍を戴き。

〽受けとれば、につこと笑み、兵部は劍引廻し苦痛とともに息はげませ。

ト元親この文句にて、腹へ突き立てし刃を、グツと引き廻し、苦痛の思ひ入れよろしくあつて。

元親 この上頼みは、末子和三郎に小坂部九郎元親と、我が若年の名を嗣がせ、鴻恩ある秀吉公の御子孫の時に至り、すは御大事と見るならば。

〽粉骨盡くし忠義を立てなば、草葉の蔭より悅ぶと。

傳へておくれりやれ。

〽雜賀殿と突き込む刀引廻せば。

葉雜 スリヤ、モウこれが。

眞弓 お別れか。

ト眞弓よろしく、葉末、元親へさし寄り介抱する事。

元親　エヽ、未練者めが……孫よ〳〵。
松太　祖父樣。
元親　オヽ、さらば。
〽咽喉笛かき切り武士の最期ぞ潔よし、ハッと計りに姉妹が、その甲斐さらに松太郎、敢なく息は絶へにけり、折から聞ゆる陣太鼓。
ト兵部、松太郎よろしく落ち入る。葉末、眞弓泣き落とす、出海、加藤こなしあつて。
出海　ヤヽ、舅が最期の時も時。
清正　俄かに響く、貝鉦、太鼓。
出海　何は兎もあれ、二人の死骸を。
〽夫が祠に姉妹は涙ながらに亡き骸を、取り片づけるその折から又も聞こゆる貝鉦太鼓。
ト葉末、眞弓、死骸を抱へ奥へ入る、ト遠寄せになり。
〽樣子は如何にと、打ち見やる、かしこの山の夕映に、ともに閃く旗差し物。
ト遠寄せの鳴り物、床のメリヤス。ト向う正面煽り返し、爰へ岩山本城の切り出し、誂らへの五三の桐旗、千生り瓢の馬印、諸家紋の馬印の體、山の蔭よりつかふ事。

出海　扨ては本城山口を、遠巻なしたる羽柴の軍勢。
清正　はや押し寄せる手配りは不意を討たんず。
兩人　計略なるか。
〽すは一大事と左衞門宗貞、劣らぬ清正双方とも忍び裝束脫ぎ捨つれば肌には小具足身を堅め、勢ひ込んだる軍場の出立。
トこれにて、出海左衞門上手に廻り、清正下手双方衣裳引きぬくと、小具足甲冑美々しき拵へになり、キッと見得あつて。
〽こなたに窺ふ大友景澄。
ト別々に出し、大友三郎凛々しき拵へ、相中の軍卒拔き刀持ちし山中四人引き連れ出て。
景澄　ソレ、
四人　觀念。
ト加藤、出海へ二人ヅヽ切つてかゝるを身を交して、見得より投げ退け。
清正　扨てこそ汝は大友景澄。
出海　何ゆゑ爰へ。
兩人　うせしよなア。
〽云ふに景澄、莞爾と笑み。

景澄　へ、ム、へ、ム、ハ、、、。
〽いしくも詰り問ふものかな。
兼ねて味方へ招かんと、追從たつぱい送りし音物。
〽ちやつちや、むちやくにぼつかへし、大内や羽柴へも
七むづかしい理窟を捏ね、元親自滅するからは、二人が
素つ首、好い手土産。
者ども拔かるな。
皆々　心得た。
ト　これへ鳴り物あしらひ。
〽命知らずの英武者ども、かゝるを刎退け踏み蹂り〽白
刃をたぐつて頭轉倒、後はばら〳〵逃げうせたり。
ト四人かゝるを、加藤、出海の兩人よろしくあしらひ、
爰へ景澄切つてかゝるを、出海左衞門これを當てる、
後二人は逃げて入る。
〽折しも向うに聲高く。
トどんちやん向うばた〳〵になり、木村又藏、鎧下着
込み、武者立つけ、一刀の長きを差し、陣笠にて面を
隱し、ばた〳〵と出て。
又藏　御注進々々々。
ト　顏に翳せし笠をとる。清正見て。

清正　ヤア、其方は木村又藏。
出海　スリヤ、清正が家來とな。
ト此うち又藏、舞臺へ來る、此うち以前出でし軍卒の
拵へ好みの相中一人拔き刀に窺ふ。
清正　軍の勝敗、なんと〳〵。
又藏　ハア。
〽ハツと云うまゝ組つく葉武者いらつて、はりのけ大音
聲。
大内が本城は。
〽或はだゝぼく羊腸たる尖りし巖石九十九折。
要害堅固の絶所なれば。
ト此うち右の相中かゝるを、あしらいながら、よろし
く物語り。
〽責めあぐんだる數日の對陣〽そこで智略の御大將彼の
西島の山猫沙門徒、兵衞が傳習の山路の拔け道後藤が案
内〽また海手よりは青海の、波に漂く船後光〽本願御坊
の足利度覺、西國下向と觸れながせば、兼ねて歸依なす
敵地の軍勢、お有り難やに氣を奪はれ、軍はそこ退け、
ぐにや〳〵〳〵閃く六字の旗方便、〽武器を隱せし兵船
に押し立て〳〵押し渡る。

ト この文句面白き節づけあつて、又藏物語りの振りよろしく。

〽味方は必勝、破竹の勢ひ。

急ぎ御出馬あられませう。

〽大汗拭ひて物語る。

ト又藏よろしく汗を拭ひ、振りよく物語り納める、これを聞くうち、出海、加藤それ〴〵にこなしあつて。

出海　やおれ清正、體かに聞け、秀吉孫呉が術をなすとも。

〽味方は臥龍が備へを立て、只一戰追ひ散らさん。

早く歸つて猿冠者が、首を堅固に用心せよ。

清正　しや、案外なる非禮の過言、山口如きの破れ城、清正先陣承らば、一摑みに、ひしいでくれん。吹面がはくな、出海左衞門。

〽互ひの廣言、双方が詰め寄り詰め寄る勇者々々。

ト兩人詰め寄つて、キッと見得、又藏これを隔てゝ。

又藏　その爭ひは戰場にて。

〽はや出陣と、促す又藏。

ト又藏よろしくこなし。

軍兵　覺悟。

トかゝるを出海、加藤よろしく立廻つて、どんちやん烈しく、この時、大友三郎拔き刀にて左衞門へ切りかけるを突き廻し刀を取つて、一かせ切る、三郎アッと立身に苦しむ、又郎黨二人は清正へ切りかける。清正身を交し、二人が襟髮提へる、兩人アッと、苦しみ咥へ目にて立身に苦しむ、また一人は又藏へかゝる、これを突き廻し、又藏拔き打ちに切る、此うちに右の文句ありて。

出海　首途の血祭り。

清又　幸先よし。

ト出海は景清を切りかへし、清正はくわへ目の兩人を投げのける。又藏刀を拭ひ、出海、加藤双方見合つて。

出海　加藤清正。

清正　出海宗貞。

又藏　まづ。

ト手を差し出し、禮儀のこなし。

〽戰場差してぞ。

ト眞弓は松太郎の身體を抱へ、出海へこなし、出海顔そむけろ。清正、又藏、葉末、齋市居並び、よろしく。

〽出て行く。

ト段切り、後キザミにつき、どんちやんよろしく。

ひやうし幕

蝶花形名歌島臺（終り）

日本戯曲全集・第二十六卷
續義太夫狂言時代物集・第廿九回配本

編集者検印

昭和六年七月六日印刷
昭和六年七月十日發行（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　木呂子斗鬼次
製本者　高崎幸三郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋　五一・六四一　三七・八一
振替東京一六一七八

整版所　新倉東文堂

神田區松下町七番地　（明治印刷株式會社・印刷）

